

# 東京大学構内遺跡調査研究年報 5

2003・2004・2005 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学構内遺跡調査研究年報 5

二〇〇三・二〇〇四・二〇〇五年度

東京大学埋蔵文化財調査室

# 東京大学構内遺跡調査研究年報 5

2003・2004・2005 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

## 例 言

1. 本年報は2003年4月1日から2005年3月31日までに、東京大学埋蔵文化財調査室が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告、および本調査室における研究成果をまとめたものである。
2. 該期に実施した発掘調査の略報は第1部に掲載した。ただし工学系総合研究棟立杭地点に関しては編集作業上、次号の掲載とした。
3. 遺構の略号は独立行政法人奈良文化財研究所の方式を基に、各調査地点ごとに通し番号を1から付した。
4. 本文の執筆者名は文末に明記した。ただし第4部に関しては、各章の冒頭に執筆者名を明記している。
5. 写真は附属CD-ROMに収録した。本文中特に断りのない限り、写真\*という記述はCD-ROMに納められている写真の番号を表している。写真は調査地点毎のフォルダに納められている。
6. 各キャンパスにおける調査一覧および遺跡地図は香取裕一が作成した。
7. 本年報の作成は室員がこれにあたり、追川吉生が編集を担当した。

東京大学構内遺跡調査研究年報 5  
2003・2004・2005 年度

目 次

例 言  
目 次

第 1 部 東京大学構内遺跡発掘調査略報 .....	7
東京大学構内遺跡調査一覧 .....	9
1. 国際学術交流棟地点略報 .....	17
2. 地震研究所総合研究棟地点調査略報 .....	31
3. 薬学部系総合研究棟地点（2004 年度）1 次調査 .....	43
4. 薬学部系総合研究棟地点（2004 年度）2 次調査 .....	50
5. 駒場コミュニケーションプラザ建設予定地点発掘調査略報 .....	66
第 2 部 東京大学構内遺跡発掘調査報告 .....	79
1. 理学系研究科附属植物園研究温室地点発掘調査報告 .....	81
2. 理学系研究科・理学部 1 号館前地点発掘調査報告 .....	213
第 3 部 東京大学埋蔵文化財調査室要項 .....	235
1. 2003～2005 年度室員活動内容 .....	237
2. 資料の活用 .....	244
3. 東京大学本郷構内武田先端知ビル地点検出の方形周溝墓の保存 .....	246
4. 医学部附属病院病棟地点出土木製品保存処理完了報告書 .....	252
第 4 部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 5 .....	255
ごみの廃棄単位および過程復元への貝類遺体分析からの試み .....	257
加賀藩江戸上屋敷御殿空間の食生活 .....	276
遺構一括出土遺体からみた江戸時代の鳥類の利用形態 .....	296

# 第 1 部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

東京大学構内遺跡調査一覧

1. 国際学术交流棟地点略報
2. 地震研究所総合研究棟地点調査略報
3. 薬学部系総合研究棟地点（2004 年度）1 次調査
4. 薬学部系総合研究棟地点（2004 年度）2 次調査
5. 駒場コミュニケーションプラザ建設予定地点発掘調査略報

# 東京大学構内遺跡調査一覧

表 1 本郷地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)*1	調査種別	日付	面積(m <sup>2</sup> )	担当者	遺構・遺物の年代
本郷	1	1984	山上会館(U)	事前	1984.4.1～85.6.30	1,500	西田泰民・谷豊信・小川静夫	『東京大学本郷構内の遺跡4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	2	1984	法学部4号館・文学部3号館(文)(法)	事前	1984.4.1～85.3.31	2,500	大塚達郎	『東京大学本郷構内の遺跡2 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
本郷	3	1985	御殿下記念館(G)	事前	1985.7.29～87.6.30	6,000	寺島・小川静夫・倉林真砂斗	『東京大学本郷構内の遺跡4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	4	1984	医学部附属病院(病中)(エネセン)(給水)(共同溝)	事前	1984.10.1～87.3.31	7,700	藤本強 小川望	『東京大学本郷構内の遺跡3 医学部附属病院地点』
本郷	5	1984	理学部7号館(理D)	事前	1985.2.1～10.8	750	羽生淳子	『東京大学本郷構内の遺跡1 理学部7号館』
本郷	6	1986	バス通り上水(上水)	立会	1986.5.12～7.20		寺島	江戸
本郷	7	1987	タンデム(タンデム)	試掘	1988.2.15～17	28	成瀬・武藤	古墳、江戸
本郷	8	1987	弥生門脇変電施設	立会	1987.12.15～16		武藤	江戸
本郷	9	1985	農学部家畜病院(VMC)	試掘	1985.8.1～26	87	西田泰民	年報1
本郷	9	1989	農学部家畜病院(VMC)	事前	1990.1.31～3.14	1,040	武藤	年報1
本郷	10	1990	医学部附属病院外来診療棟(HG)	事前	1990.6.27～91.2.21	5,500	成瀬・堀内・武藤	旧石器、江戸
本郷	11	1991	農学部ガラス室	試掘	1991.8.12・8.13	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	12	1992	農学部図書館	試掘	1992.10.21	4	武藤	江戸
本郷	12	1992	農学部図書館(FAL)	事前	1993.3.9～3.25	408	武藤	江戸
本郷	13	1991	農学部校舎(7号館)Ⅰ期(FA792)	試掘	1991.1.6～7	8.25	武藤	江戸
本郷	13	1992	農学部校舎(7号館)Ⅰ期(FA792)	事前	1992.10.6～11.16	1,170	武藤	江戸
本郷	14	1992	工学部校舎(14号館)(工14)	事前	1992.11.26～93.2.23	1,785	成瀬・堀内	江戸
本郷	15	1988	薬学部新館(YS)	試掘	1988.8.3～5		寺島	江戸
本郷	15	1992	薬学部新館(YS)	事前	1992.10.21～12.18	1,300	堀内・寺島	江戸
本郷	16	1993	農学部校舎(7号館)Ⅱ期	試掘	1993.4.27	15	武藤	江戸
本郷	16	1993	農学部校舎(7号館)Ⅱ期(FA793)	事前	1993.11.3～26	1,000	武藤	江戸
本郷	17	1993	工学部校舎(1号館)	試掘	1993.5.25	16	武藤	江戸
本郷	17	1993	工学部校舎(1号館)(FE1)	事前	1993.12.6～94.2.10	616	武藤	江戸
本郷	18	1993	総合研究棟	試掘	1993.4.28	15	武藤	江戸
本郷	18	1993	総合研究棟(SK)	事前	1993.11.18～12.28	1,007	堀内	江戸
本郷	19	1993	医学部附属病院看護婦宿舎(HN)	事前	1993.8.4～94.1.17	746	成瀬	縄文、古墳、江戸
本郷	20	1993	総合研究資料館(TUM)	事前	1994.2.14～4.8	600	堀内	江戸
本郷	21	1993	医学部附属病院MRI-CT棟(MRI)	事前	1994.1.18～3.12	400	成瀬	古墳、江戸
本郷	22	1994	本郷福利施設	試掘	1994.4.15	3	武藤	江戸
本郷	22	1994	本郷福利施設(HF)	事前	1994.8.17～10.17	593	武藤	江戸
本郷	23	1994	医学部附属病院病棟Ⅰ期(HWⅠ)	事前	1994.4.21～11.16	2,716	成瀬・原	旧石器、縄文、古墳、中世、江戸
本郷	23	1994	医学部附属病院病棟Ⅱ期(HWⅡ)	事前	1995.1.31～96.5.31	3,380	成瀬・原・大成	縄文、古墳、中世、江戸
本郷	24	1994	医学部教育研究棟1次(医研1)	試掘	1994.5.18～19	16.6	武藤・鯨島	江戸
本郷	24	1994	医学部教育研究棟	事前	1994.11.17～1995.4.28	1,188	堀内・鯨島	江戸
本郷	24	1996	医学部教育研究棟2次(医研2)	事前	1997.3.10～4.25	416	堀内・大成	縄文、江戸
本郷	24	1998	医学部教育研究棟3次(医研3)	事前	1998.11.～12.25	180	堀内・大成	江戸
本郷	24	2002	医学部教育研究棟4次(医研4)	事前	2002.9.3～12.25	631	堀内・大成	江戸
本郷	25	1994	医学部附属病院看護婦宿舎ゴミ置き場(HND)	事前	1995.1.30～3.3	45	原	縄文、古墳、江戸
本郷	26	1994	法文十字路外灯	立会	1994.9.5		成瀬・鯨島	江戸
本郷	27	1994	理学部1号館	立会	1994.10.3～18		寺島	
本郷	28	1995	薬学部資料館(FPS)	事前	1995.7.24～9.2	540	武藤	旧石器、縄文、江戸

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)*1	調査種別	日付	面積(m <sup>2</sup> )	担当者	遺構・遺物の年代
本郷	29	1995	大型計算機センター電気機械室設備(ACC)	事前	1995.7.18～31	78	鮫島	江戸、近代
本郷	30	1995	工学部全径間風洞実験室支障ケーブル移設その他(AFC)	事前	1995.8.28～9.22	63	鮫島	縄文、弥生、江戸
本郷	31	1995	ATMネットワーク施設整備	立会	1995.11.20～24		武藤・堀内・鮫島・原	江戸
本郷	32	1994	医学部附属病院看護婦宿舎電気ケーブル埋設	立会	1995.3.2		原	遺構・遺物なし
本郷	33	1995	地震研究所テレメタリング観測施設	試掘	1995.10.18	6	武藤	遺構・遺物なし
本郷	33	1996	地震研テレメタリング地震観測施設(EQL)	事前	1996.4.15～5.2	360	武藤	江戸
本郷	34		グラウンド	立会			寺島	
本郷	35	1993	経済学部前路面陥没	立会	1993.9.28		成瀬	江戸
本郷	35	1994	経済学部前路面陥没	立会	1994.5.14		成瀬	
本郷	36	1993	農学部ガス管理設	立会	1993.10.15		成瀬	江戸
本郷	37	1994	屋外環境整備等工事龍岡門～附属病院	立会	1994.10.13		成瀬・原	江戸
本郷	38	1994	医学部附属病院内エアタンク設置	立会	1994.12.18		成瀬	
本郷	39	1994	史料編纂所前埋設	立会	1995.3.10		成瀬	江戸
本郷	40	1996	工学部全径間風洞実験室(AFL)	事前	1996.1.22～3.7	252	鮫島	縄文、弥生、明治
本郷	41	1996	ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(ベンチャー)	事前	1996.4.15～6.20	626	堀内	旧石器、江戸
本郷	42	1996	医学部附属病院基幹整備に伴う樹木移植	立会	1996.4		成瀬	江戸
本郷	43	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK1)	事前	1996.5.12～5.18	20	成瀬	江戸
本郷	44	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK2)	事前	1996.5.20～6.28	102	成瀬	江戸
本郷	45	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK3)	事前	1996.5.20～6.28	179	大成	江戸
本郷	46	1994	龍岡門門衛所移築	立会	1994.8.24		成瀬	
本郷	47	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK4)	事前	1996.5.20～6.28	3	原	江戸
本郷	48	1996	医学部附属病院看護婦宿舎Ⅱ期(HNⅡ)	事前	1996.11.5～1997.1.31	525	原・大成	縄文、古墳、江戸
本郷	49	1997	外灯整備工事1	立会	1997.4.13～30		原	江戸
本郷	50	1997	外灯整備工事2	立会	1997.4.13～30		原	江戸
本郷	51	1997	外灯整備工事3	立会	1997.4.13～30		原	
本郷	52	1997	農学部(21世紀館)木質ホール	試掘	1997.7.14～18	50	大成	江戸
本郷	53	1998	工学部強風シミュレーション風洞実験室	試掘	1998.12.22～23	30	原	江戸
本郷	53	1998	工学部強風シミュレーション風洞実験室(AFⅣ)	事前	1999.1.7～25	300	原	江戸、近代
本郷	54	1998	総合研究棟(文・経・教・社研)	試掘	1999.1.6～8	28	堀内・追川	江戸
本郷	54	1999	総合研究棟(文・経・教・社研)(ES99)	事前	1999.5.24～11.2	1,000	堀内・追川	江戸
本郷	55	1999	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅰ期(2中Ⅰ)	試掘	1999.7.14	3	成瀬	江戸
本郷	55	1999	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅰ期(2中Ⅰ)	事前	1999.10.12～2000.2.25	1,270	成瀬・原・追川	江戸
本郷	55	2000	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅱ期(2中Ⅱ)	試掘	2000.10.2～16	6	成瀬	江戸、古代
本郷	55	2001	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅱ期(2中Ⅱ)	事前	2001.7.23～2002.12.19	2,747	成瀬・追川	江戸、中世、古代、縄文
本郷	56	1999	文系4研究所等暫定建物	試掘	1999.12.16～17	16	成瀬	江戸
本郷	57	1999	環境安全センター	立会	2000.1.17		成瀬	遺構・遺物なし
本郷	58	1999	医学部附属病院受変電設備棟(Ⅱ期)(YM)	試掘	2000.2.3～4	30	原	江戸
本郷	58	1999	医学部附属病院受変電設備棟(Ⅱ期)(YM)	事前	2000.2.5～3.31	300	原	近代、江戸
本郷	59	2000	共同溝(KK)	事前	2000.7.3～7.12 10.11～10.14 2001.2.21～2.28		原	江戸
本郷	60	2000	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK6)	事前	2000.9.21～11.14	200	成瀬・追川	江戸
本郷	61	2001	武田先端知ビル	事前	2001.6.4～8.7		原	明治、江戸、弥生
本郷	62	2001	農学部総合研究棟	試掘	2001.3.27		原	江戸
本郷	62	2001	農学部総合研究棟	事前	2001.9.21～10.19	1,800	原	江戸
本郷	63	2002	薬学部暫定建物	立会	2002.2.5～6		成瀬	遺構・遺物なし
本郷	64	2002	情報学環暫定建物	立会	2002.2.7		成瀬	江戸
本郷	65	2002	法学部総合研究棟	試掘	2002.3.18～20	136	大成	江戸
本郷	65	2002	法学部総合研究棟(法03)	事前	2003.2.17～4.18	946	成瀬・大成	江戸
本郷	66	2002	薬学部総合研究棟	試掘		63	原	江戸
本郷	66	2002	薬学部総合研究棟	事前			原	
本郷	66	2004	薬学部総合研究棟2期	事前			原	
本郷	67	2002	地震研究所総合研究棟	試掘	2002.5.9～17	32	堀内	縄文、古墳、弥生、江戸、近代

東京大学構内遺跡調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)*1	調査種別	日付	面積(m <sup>2</sup> )	担当者	遺構・遺物の年代
本郷	68	2002	インキュベーション施設	試掘	2002.6.17～19	38	堀内	江戸
本郷	68	2002	インキュベーション施設(INC)	事前	2003.3.6～6.7	1,051	堀内・追川	江戸・縄文
本郷	69	2002	地震研仮設建物	立会			堀内	遺構・遺物なし
本郷	70	2003	工学系総合研究棟	立会	2003.2.28		堀内	なし
本郷	71	2004	地震研究所総合研究棟	事前	2004.8.30～2005.2.28		追川・大成	江戸
本郷	72	2004	理学部1号館前	事前	2004.11.29～12.3	32	堀内	江戸・縄文
本郷	73	2004	医学部付属病院総合研究棟・疾患生命工学センター	試掘	2004.11.29～12.1	24	成瀬	江戸・古墳
本郷	74	2005	医学部付属病院立体駐車場	試掘	2005.07.12～14	40	堀内	江戸・古墳
本郷	75	2005	工学系総合研究棟立坑	事前	2005.9.13・14	17	原	江戸
本郷	76	2005	ベンチャープラザ(VP06)	試掘	2005.12.5・6		追川	江戸
本郷	77	2005	農学部弥生講堂アネックス	立会	2006.1.12	5.3	大成	江戸
本郷	78	2005	情報学環・福武ホール	試掘	2006.2.13～15	152	大成・成瀬	江戸

表2 駒場Ⅰ地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積(m <sup>2</sup> )	担当者	遺構・遺物の年代
駒場Ⅰ	1	1992	教養学部保健センター	試掘	1992.3.19	28	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	3	1993	数理科学研究棟	試掘	1993.5.8～15	350	堀内	縄文
駒場Ⅰ	2	1993	教養学部情報教育棟(FGE)	事前	1993.8.10～10.20	940	武藤	縄文
駒場Ⅰ	4	1994	数理科学研究棟擁壁工事	立会	1995.1.20～27		武藤	近代
駒場Ⅰ	5	1994	数理科学研究棟関連連電マンホール増設・管路新設工事	立会	1995.1.24～4.12		武藤	縄文、平安
駒場Ⅰ	8	1995	数理科学研究棟ガス埋設工事	立会	1995.5.17～18		武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	8	1995	数理科学研究所水道埋設工事	立会	1995.6.27～28		武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	6	1995	教養学部伝統文化活動施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	7	1995	教養学部学生用浴室・シャワー施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	9	1996	数理科学研究科Ⅱ期棟(数理)	事前	1996.12.12～97.2.6	1,160	堀内	年報2
駒場Ⅰ	10	1997	教養学部キャンパス・プラザ	試掘	1997.4.24	41	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	11	1999	教養学部総合研究棟	試掘	1999.7.26～8.3	130	原	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	12	1999	教養学部図書館	試掘	1999.7.26～8.3	200	原	埋没谷
駒場Ⅰ	12	2000	教養学部図書館	事前	2000.7.27～8.30	1,778	大成、追川	旧石器、近代
駒場Ⅰ	13	2001	教養学部総合研究棟	試掘	2001.10.24～25	60	堀内	遺物・遺構なし
駒場Ⅰ	14	2002	教養学部総合研究棟	試掘	2002.3.25～26	53.4	大成	遺物・遺構なし
駒場Ⅰ	15	2002	教養学部コミュニケーションプラザ	試掘	2002.11.5～15	563	成瀬	縄文遺構・遺物
駒場Ⅰ	16	2002	国際交流会館(ファカルティハウス)	試掘	2003.2.10～2.14	144	追川	縄文 遺構・遺物
駒場Ⅰ	16	2003	国際交流会館(ファカルティハウス)	事前	2003.5.16～7.9	620	原	旧石器・縄文・近代
駒場Ⅰ	15	2002	教養学部コミュニケーションプラザ和館	試掘	2004.12.6～7	80	成瀬	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	15	2005	教養学部コミュニケーションプラザ	事前			成瀬	
駒場Ⅰ	17	2005	教養学部5号館他改修工事	立会	2005.08.10・17・19	300	大成	遺構・遺物なし

表3 駒場Ⅱ地区調査一覧

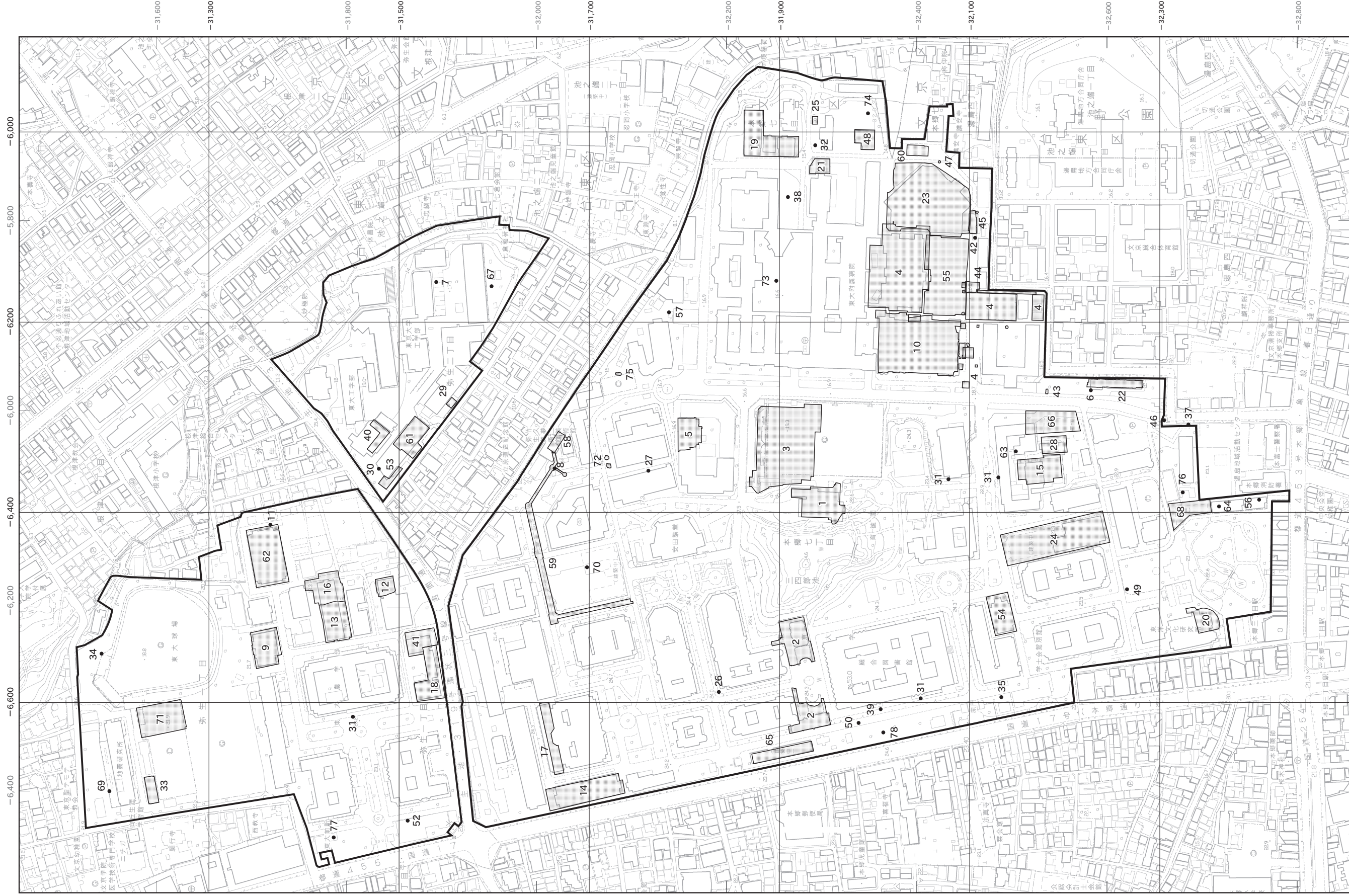
地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積(m <sup>2</sup> )	担当者	遺構・遺物の年代
駒場Ⅱ	1	1996	生産技術研究所校舎	試掘	1996.5.14	25	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	2	1996	先端科学技術研究センター校舎4号館	試掘	1996.5.15～17	92	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	3	1996	生産技術研究所校舎	試掘	1996.10.24～25	20	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	4	1998	設備センター	試掘	1998.4.27	13	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	5	1998	国際・産学共同研究センター	試掘	1998.8.5	90	原	縄文
駒場Ⅱ	6	1998	生産技術研究所事務図書棟暫定施設	試掘	1998.12.13～15	50	大成	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	7	2002	駒場オープンラボラトリー	試掘	2002.12.5	55	成瀬	縄文土器(阿玉台)
駒場Ⅱ	8	2003	総合研究実験棟	試掘	2003.8.6	34	追川	遺構・遺物なし



表4 その他の地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積(m <sup>2</sup> )	担当者	遺構・遺物の年代
三浦市		1988	理学部附属臨海実験所新研究棟[新井城]	試掘	1988.7.4～8.2	80	寺島	年報1
文京区		1991	理学部附属植物園研究温室Ⅰ期[原町遺跡](BG)	試掘	1991.7.24～25	5	武藤	縄文
文京区		1991	追分学寮	試掘	1991.8.23～24		成瀬	江戸
豊島区		1991	豊島学寮	試掘	1991.8.26～30	29	武藤	遺構・遺物なし
三鷹市		1991	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]	試掘	1991.9.15～30	350	堀内	旧石器
三鷹市		1991	井の頭学寮	試掘	1991.9.30～10.15	20	堀内	遺構・遺物なし
港区		1991	白金学寮	試掘	1991.11.25～26	10	武藤	江戸
文京区		1992	理学部附属植物園研究温室Ⅱ期[原町遺跡](KO)	事前	1992.5.25～6.6	200	成瀬	縄文、江戸、近代
三鷹市		1992	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅰ期(三广1)	事前	1992.6.29～9.19	2,100	堀内・成瀬	縄文、江戸
港区		1992	医科学研究所看護婦宿舎	試掘	1992.7.1	8	武藤	遺構・遺物なし
三浦市		1992	理学部附属臨海実験所新研究棟[新井城](MMBS)	事前	1992.7.20～9.25	1,700	武藤・寺島	中世
三浦市		1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連電機・水道管路新設工事	立会	1993.4.20～23		武藤	中世
三浦市		1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連海水循環水路新築工事	立会	1993.5.7～8		武藤	中世
三鷹市		1993	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅱ期(三广2)	事前	1993.5.28～11.8	3,280	堀内	旧石器、縄文
三鷹市		1994	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅲ期(三广3)	事前	1994.5.13～8.17	1,950	堀内・鮫島	旧石器、縄文、江戸
千葉市		1994	検見川運動場体育セミナーハウス[玄藩所遺跡](GMB)	確認	1994.7.11～18	930	堀内・鮫島	縄文、平安
千葉市		1994	検見川運動場体育セミナーハウス[玄藩所遺跡](GMB)	事前	1994.7.19～8.21	496	武藤	旧石器、縄文、平安
港区		1994	医科学研究所MRI-CT棟装置棟	試掘	1995.3.9	8	武藤	遺構・遺物なし
港区		1995	医科学研究所ヒトゲノム解析センター棟	試掘	1995.7.11	8	武藤	遺構・遺物なし
柏市		1996	柏キャンパス校舎	試掘	1996.10.28～29	125	武藤	遺構・遺物なし
港区		2000	医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟	事前	2000.10.27～2001.3.9	4,280	堀内・大成	旧石器・縄文、江戸
文京区		2000	理学部附属植物園・旧医学部本館便所増築	事前	2000.11.27～12.4	70	成瀬・追川	江戸
文京区		2002	農学部生命科学研究所科樹木実験圃場・根圏観察室	試掘	2002.9.2	21	成瀬	江戸
文京区		2002	農学部生命科学研究所科樹木実験圃場・根圏観察室	事前	2002.9.24～10.7	91	成瀬	江戸・縄文

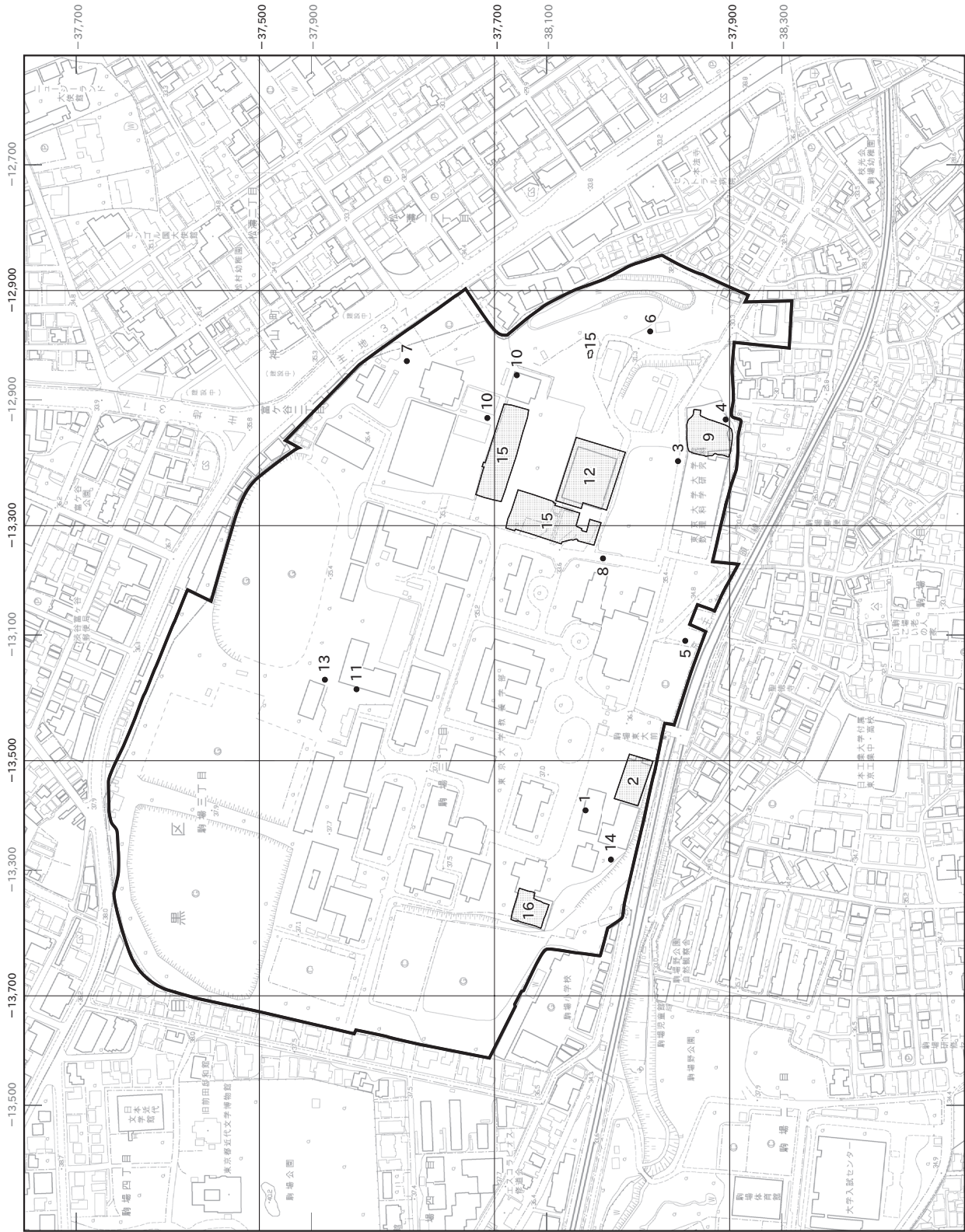
\*1 工事名称を記載。報告書が出た時点で、報告書名に改称。



黒は日本測地系2000 灰色は旧日本測地系

本郷配置図

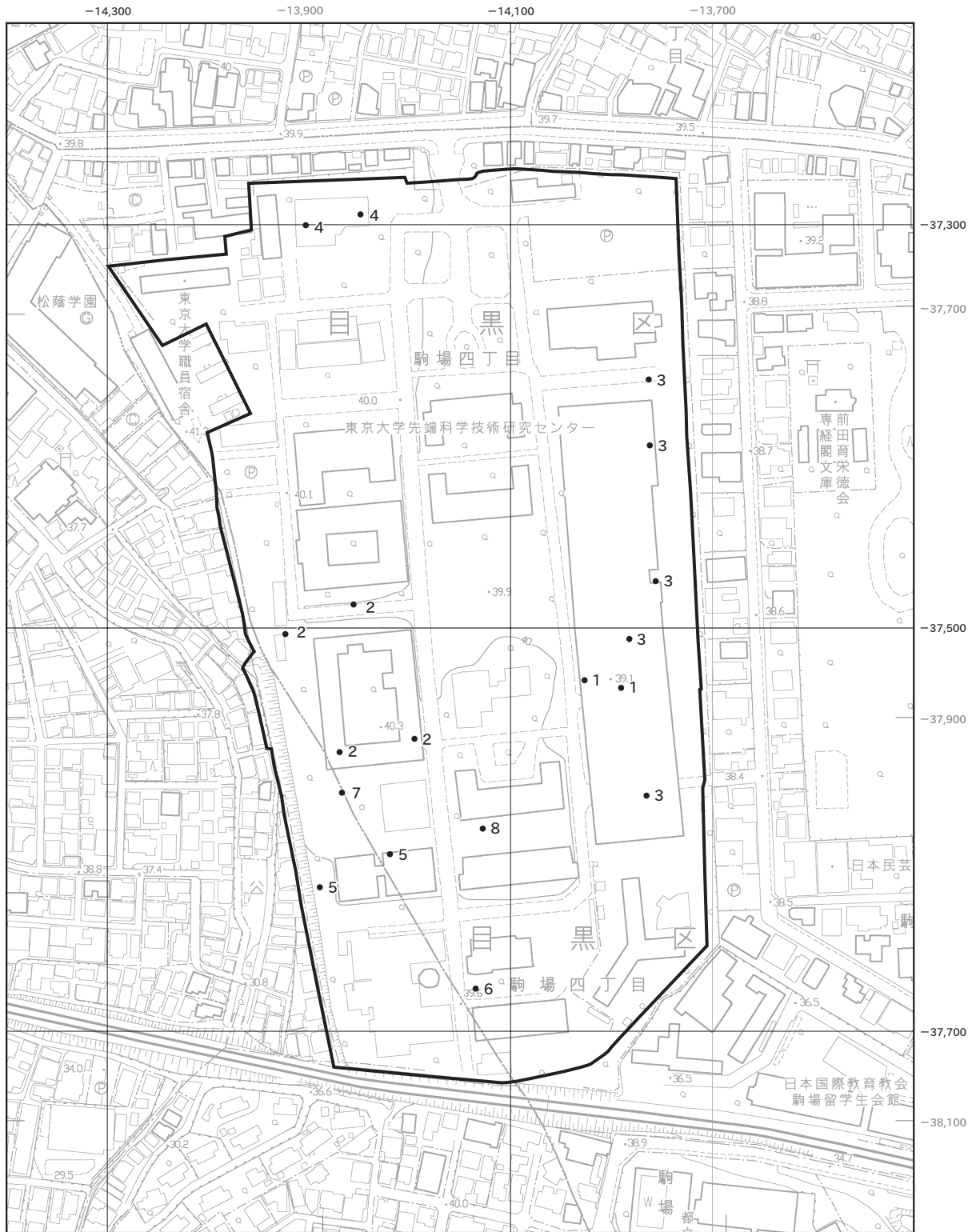
東京大学構内遺跡調査一覧



黒は日本測地系2000 灰色は旧日本測地系

駒場キャンパス

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報



黒は日本測地系2000 灰色は旧日本測地系

駒場リサーチキャンパス

# 1. 国際学術交流棟地点略報

## はじめに

本文は『東京大学駒場 I キャンパス国際学術交流棟建築に伴う埋蔵文化財事前調査中間報告書（東京大学施設部建築課提出文書）東京大学駒場 I キャンパス構内の遺跡 国際学術交流棟地点（仮称）』、原祐一、川口武彦、伊比博和、松崎浩之、春原陽子 2004「東京大学駒場構内遺跡 国際学術交流棟地点（東京都目黒区）」石器文化研究会 第 10 回石器文化交流会とうきょう委員会『第 10 回石器文化交流会発表要旨』の原稿を再掲載、加筆、修正したものである。本文の内容は今後の検討によって、修正する場合がある。

試掘調査は追川吉生が担当し、事前調査を原祐一が担当した。調査面積は 620m<sup>2</sup>、調査期間は 2003 年 5 月 16 日から同年 7 月 9 日である。遺跡略号は「K GK」である。整理作業は原、伊比博和氏が担当した。石器の実測、分析は川口武彦氏にお願いした。

## I. 自然科学分析

本調査では、自然科学との共同研究を行った。関東ローム層の分析、SK142 遺構の地磁気測定を會田信行氏にお願いした。AMS 炭素 14 年代測定を松崎浩之と春原陽子氏、原、伊比が、樹種同定を株式会社パレオ・ラボが担当し、分析を進めている。分析結果は、本報告、調査室年報に掲載予定で、各氏の研究分野での研究発表等にご活用いただく。なお、AMS 炭素 14 年代測定の成果は、東京大学 MALT 平成 15 年度下半期、16 年度上半期共同利用研究採択課題 研究代表者 原祐一、共同研究者 松崎浩之、春原陽子、中野忠一郎「東京大学構内出土資料の年代測定」（課題番号 18B58）の成果の一部を含む。

## II. 調査の公開と出土資料、研究成果の活用

発掘調査は文化財保護法の理念から、近隣住民、学内に対してオープンとした。調査速報を 15 号まで発行、掲示した。2003 年 6 月 24 日には、今村啓爾教授（埋蔵文化財調査室室長）の授業で活用いただき、70 名以上の学生参加があった。2003 年 6 月 30 日には職員、学生等を対象に発掘調査の説明会を開催し、100 名以上の参加があった。また、石器出土区域で、関東ローム層の剥ぎ取り資料を採集し、樹脂による表面処理等を行った。現在、駒場ファカルティーハウスに、剥ぎ取り資料を加工した、関東ローム層の標本と、研究成果のパネルが館内に設置され、一般に公開されている。また、学内広報にも調査・研究成果を掲載した<sup>(註1・2)</sup>。さらに今後、石器のレプリカ製作と展示が計

(註 1 東京大学埋蔵文化財調査室 2004「国際学術交流棟地点遺跡の研究結果」『学内広報 2004.6.9 No.1292』東京大学広報委員会 PP.4-5

(註 2 埋蔵文化財調査室 2004「東京大学駒場 I キャンパスで発見された後期旧石器時代前半の遺跡－国際学術交流棟建設予定地の遺跡調査－」『学内広報 2004.1.14 NO.1,292.』東京大学広報委員会 PP.13-14

画されている<sup>(註3)</sup>。以上から今回の事前調査は学内外の理解を得ることができた。

### III. 地理的環境

東京大学駒場構内遺跡は、武蔵野台地の東端、目黒川と神田川に挟まれた淀橋台上にある。駒場構内遺跡ではこれまで、旧石器時代<sup>(註4)</sup>、縄文時代草創期から明治時代の遺跡が確認されている。調査地点は、目黒川の支流で大学のグラウンド付近に源泉をもつ小河川と<sup>(註5)</sup>、大学構内東端の池より南に開析された谷に挟まれた舌状台地に立地している<sup>(註6)</sup>。現地表面の標高は約36m、遺跡を確認した標高は約34m<sup>2</sup>で、近代以降の削平と盛土を確認した。

### IV. 調査結果

#### 1. 旧石器時代の調査

現地表面の標高は約36m、標高約34mで、近代以降の削平と盛土を確認した。近代の花壇もしくは畑、縄文時代の土坑を検出した。旧石器遺跡の有無を確認するため、13箇所のトレンチを設定し、掘削した結果、調査区南西部のⅨ層から台形様石器が出土した。Ⅲ層、Ⅳ層調査終了後、調査区全面をⅨ層まで掘削し、石器が出土した調査区西南部を重点的に調査した。それ以外の部分では、2m四方のトレンチ25箇所を設定し、遺構、遺物の確認を行った。石器出土区域の掘削土は、篩にかけ破片の有無を確認した。このほかビデオによる記録を行った。

#### 2. 石器の出土状況 (第3図)

石器は総計36点出土しており、出土層位および内容構成から上下2つの石器群に分離される。ここでは下層石器群と上層石器群とする。なお、下層石器群については、Ⅹ層上部～Ⅸ層下部にかけて遺物が出土しており、垂直分布に基づいて明確に線引きすることは困難である。Ⅸ層から出土した石器とⅩ層から出土した石器の相互に接合関係がみられるため、ここでは同一石器群として扱う。上層石器群はⅢ層の下部から石器が単独で2点出土している。下層石器群は調査区の南西部、台形様石器が出土した周辺の傾斜面より、石器集中部が確認された。垂直分布的にはⅨ層下部からⅩ層上部にかけて石器集中幅が認められ、後期旧石器時代前半期の石器群である。調査区南西隅に集中するという出土状況から調査区外にも石器群の存在が考えられるため、保存に関して考慮する必要がある。

#### 3. 石器の概要

下層石器群は立川ローム第Ⅹ層上部～Ⅸ層下部にかけて出土しており、チャート製および緑色凝灰岩製の石器34点から構成されている(第1～2表、第4図1～4)。剥片、折断剥片、打面再生剥片、両極剥片、碎片、石核など割裂物が主体であり、二次加工のある石器としては台形様石器(第4図-1)、削器(第4図-2)が各1点ずつ出土している。上層石器群は、立川ローム第Ⅲ層下部から出土しており、黒曜石製の剥片と両極剥片から構成されている(第1～2表)。

(註3 東京大学教養学部2004「駒場ファカルティハウス(国際学術交流棟)の完成」『教養学部報2004.6.2第475号』P.4

(註4 この時代の名称については、報告者間で使用する名称が異なっている。ここでは「旧石器時代」に統一する。

(註5 武藤康弘1997「7教養学部情報教育棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報11996年度』東京大学埋蔵文化財調査室P.26

(註6 堀内秀樹1998「Ⅱ遺跡の位地と環境、Ⅲ基本層序、Ⅳ先土器時代」『東京大学駒場構内遺跡大学院数理学研究科Ⅱ期棟地点発掘調査報告書』『東京大学構内遺跡調査研究年報2』PP.147-157

#### 4. SK142 遺構（第2図）

SK142 遺構は平面形が不定形を呈し、長軸 0.98m、短軸 0.78m、深さ 0.28m を測る（IX層除去後の遺構規模）。遺構内と遺構周辺から石器は出土していない。IX層上面の遺構確認時にIX層よりやや暗い暗褐色土の堆積が約 1m の範囲で確認された。この段階では遺物が出土しなかったため、遺構と認識できなかった。IX層掘削時、暗褐色土の下層から、炭化物、焼土？と考えられる土粒を含む暗褐色土を確認したことから、これ以降、IX層の遺構と認識し調査を行った。層位は3層に分かれ、2・3層から炭化材、焼土？が出土した。この遺構から約 10m 南側の石器出土区域では、炭化物が出土しており、遺構の上層、下層から炭化物が混入した可能性も考えられることから、遺構周辺と遺構下層で炭化物の確認を行った。遺構の周り4箇所とSK142遺構底部1箇所にトレンチを設定し掘削を行った。5箇所のトレンチとIX層の遺構上層から炭化物は出土しなかった。以上から、調査時の所見として、SK142遺構から出土した炭化材は上層、下層から混入したものではないと判断した。SK142遺構の覆土は、10cm四方のブロック状に切り取り、アルミフویلに包んだ後、サンプル番号、天地明記し、チャックつきポリ袋に入れ保管した。

このような遺構は、内容物等から「炉址」と報告されるが、現在のところ本調査で「焼土？」としたものが、「焼土」である科学的な根拠が無く、遺構が人為的である根拠を見出せない。SK142遺構では、地磁気測定試料の分析結果、保存した土壌の分析等から遺構の性格を検討したい。

	チャート	緑色凝灰岩	黒曜石	総計
上層石器群（Ⅲ層下部）	—	—	2	2
下層石器群（Ⅹ層上部～Ⅸ層下部）	33	1	—	34

第1表 層位別石材組成

	台形様石器	削器	剥片	折断剥片	両極剥片	打面再生剥片	碎片	石核	総計
上層石器群（Ⅲ層下部）	—	—	1	—	1	—	—	—	2
下層石器群（Ⅹ層上部～Ⅸ層下部）	1	1	13	10	3	1	4	—	34

第2表 層位別器種組成

### IV. 炭化材の採集方法と年代測定結果

#### 1. 炭化材の採集方法

炭化材は、Ⅲ～Ⅵ、Ⅸ・Ⅹ層、SK142遺構で出土した。分析試料の採集は、協同研究者の春原、松崎と行った。コンタミネーションを防ぐため、以下の工程で試料を取り上げ保存した。調査時に後世の掘削や木の根、蟻の巣穴などの有無に留意し、雨水による土砂、炭化材の流れ込みを防ぐため、出土範囲にビニールシートを張るなどの養生を行った。炭化材の採集工程は以下である。

#### 炭化材採集工程

出土層位の確認→光波測量→出土状況の写真撮影→炭化物が崩れないようにローム土と一緒に切り取る→炭化物には直接触れないようにし、ローム土、炭化物が崩れないようにアルミフویلに包んだ後、チャックつきポリ袋に入れる→カビが生えないように冷蔵庫で保存

## 2. 炭化材の処理と年代測定結果

### 炭化材の処理

試料の前処理、測定は、松崎・春原の指導のもと、原、伊比が参加して行った。以下にX層から出土した炭化材の測定結果、暦年を示す（暦年較正は松崎による）。現在、III層、IV層、IX層、SK142遺構から出土した炭化材の処理、測定を進めており、今後データを公表する予定である。

### 年代測定結果

サンプル名：K1571、出土層位：X層、ラボNo.：MTC-03710

RadioCarbonAge (C14年代)：0,800+200yrBP

H. Kitagawa and J. van der Plicht、1998, Science, 279, 1187-1190.

"Atmospheric Radiocarbon Calibration to 45,000 yr B.P.: Late Glacial Fluctuations and Cosmogenic Isotope Production" による暦年較正年代は、32,000～34,000cal yr B.P. と推定された。

## まとめ

本調査により、出土した石器群のうち下層石器群はチャートを主体とした剥片剥離に関わる資料の一部が遺棄された場であることが明らかとなった。武蔵野台地に立地する他の遺跡では、X層中から検出された石器群に局部磨製石斧や礫器などの大形礫石器の他に、基部調整のナイフ形石器、石錐などの剥片石器が含まれている例もあり、遺跡機能差として捉える見解もある<sup>(註7・8・9)</sup>。本地点の場合、建造物の範囲に限定された部分的な調査である上に、調査区外にも石器集中部や遺構の展開が予測されるため、局部磨製石斧や礫器、基部調整のナイフ形石器、石錐などの石器が組成していないことを直ちに遺跡機能差へと結びつけることはできない。そうした見解の当否を検討するためにも本地点の周辺において今後、調査のメスが入る機会があれば、積極的にローム層内の調査を実施し、遺跡の成り立ちを明らかにしていく姿勢が望まれよう。

下層石器群の周辺から確認されたSK142遺構については、その産状が人為的要因によるものか非人為的要因によるものか、現時点においては明確でないが、第3表に挙げたSK142遺構と同時期と推定される炉跡状遺構と同様の遺構である可能性も考えられる。炉跡状遺構も含め、当該期の年代測定例はまだ数えるほどしかなく、SK142遺構やX層から出土した炭化材の測定結果は、石器群の帰属年代を考える貴重な測定例となり得る。

現在、考古学会では遺物・遺跡の年代決定について考古学者と、自然科学研究者との間で議論が行われている。両者は異なる学問分野で決着には時間が必要であるが、今後の考古学にとって有意義な議論であると考えられる。しかし、議論も必要であるが、考古学資料に伴う年代測定試料のデータ蓄積、検討を行っていくことが、考古学にとって最重要課題であると考えられる。

今回の調査を通じて自然科学分野との共同研究を行い、AMS14C年代測定では、相互に遺跡調査、

(註7 諏訪問順 2003「南関東地方における立川ローム層基底部の石器群」『日本旧石器学会第1回シンポジウム予稿集 後期旧石器時代のはじまりを探る』日本旧石器学会

(註8 中村真里 2003『多摩蘭坂遺跡IV』国分寺市遺跡調査会

(註9 吉田格・上村昌男・中村真里 2003「多摩蘭坂遺跡第8地点」『第9回石器文化研究交流会発表要旨』



試料処理、分析に参加した。炭化材の状態によっては、測定ができない場合があり、試料状態を把握し、処理と分析の方法を理解することが必要であると痛感した。また、遺跡の公開、展示の過程で、調査研究成果の還元が必要であることを再認識した。 (原 祐一)

## 謝 辞

次の方々に機関に御教示、御協力を賜った(敬称略)。

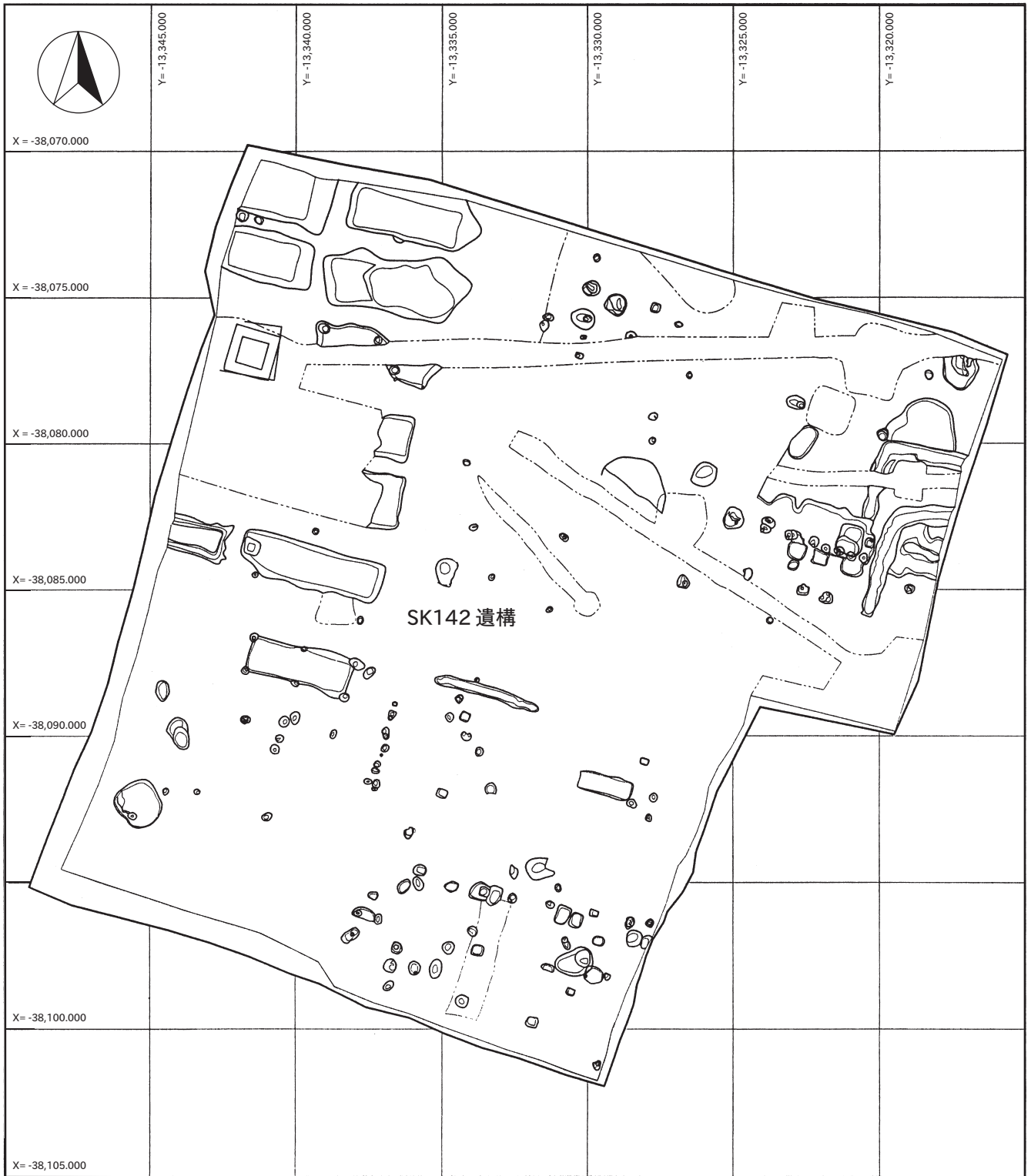
石川 功、伊藤 健、大森隆志、小田静雄、加納哲哉、亀田直美、窪田恵一、小林紘一、  
中村 大、西井幸雄、堀江武史、上高津貝塚ふるさと歴史の広場、目黒区教育委員会

## 参考文献

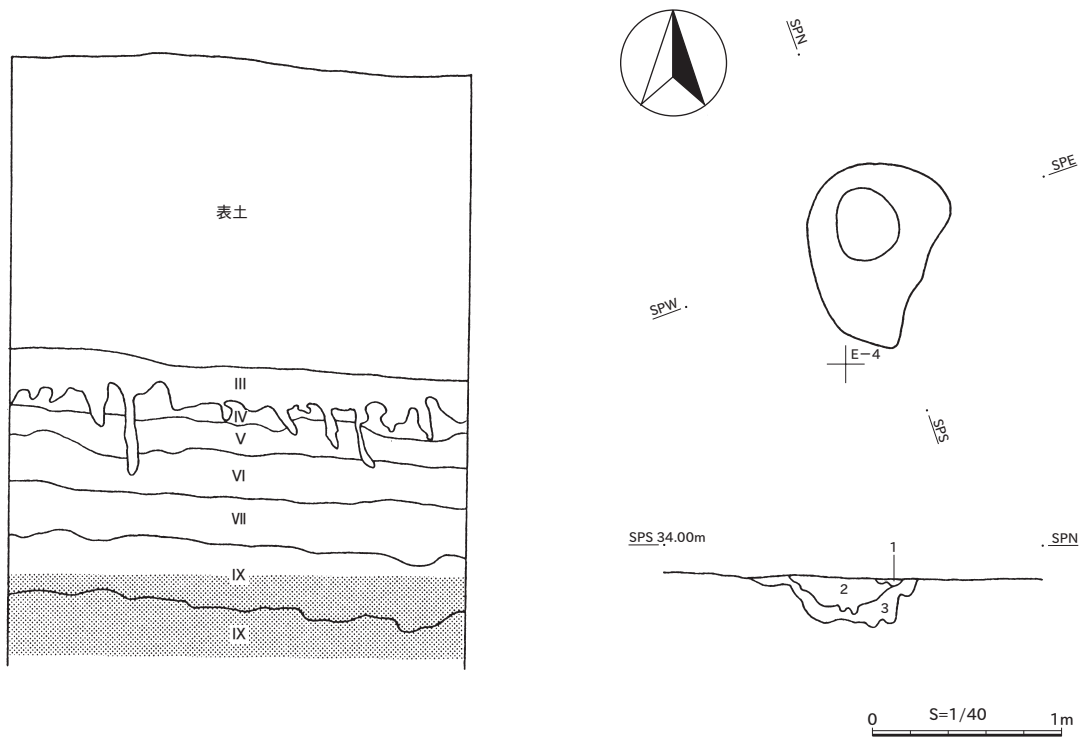
- 西井幸雄、千葉 寛、川口 潤 1991 「武蔵野台地・大宮台地の様相」石器文化研究会『石器文化研究 3 シンポジウム AT 降灰以前の石器文化—関東地方における変遷と列島内対比—』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1998 『東京大学駒場構内遺跡 大学院数理学研究科Ⅱ期棟地点発掘調査報告書』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡調査研究年報 2 1997 年度』PP.139-247
- 小林 紘一 2000 「年代測定法の新展開」東京大学原子力研究総合センター、同総合研究博物館、同埋蔵文化財調査室『第 2 回考古科学シンポジウム』PP.33-40
- 小田 静夫 2001 「新しい日本旧石器時代研究の構築に向けて」東京大学原子力研究総合センター、同総合研究博物館同埋蔵文化財調査室『第 3 回考古科学シンポジウム』PP.41-56
- 朝日新聞(夕刊) 2003.6.16 「揺れる年代 AMS ショック上」
- 小田 静夫 2003 『日本の旧石器文化』同成社
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2003 『東京大学駒場 I キャンパス国際学術交流棟建築に伴う埋蔵文化財事前調査中間報告書(東京大学施設部建築課提出文書) 東京大学駒場 I キャンパス構内の遺跡 国際学術交流棟地点(仮称)』
- 原祐一、川口武彦、伊比博和、松崎浩之、春原陽子 2004 「東京大学駒場構内遺跡 国際学術交流棟地点(東京都目黒区)」石器文化研究会 第 10 回石器文化交流会とうきょう委員会 PP.1-6

## 註 釈

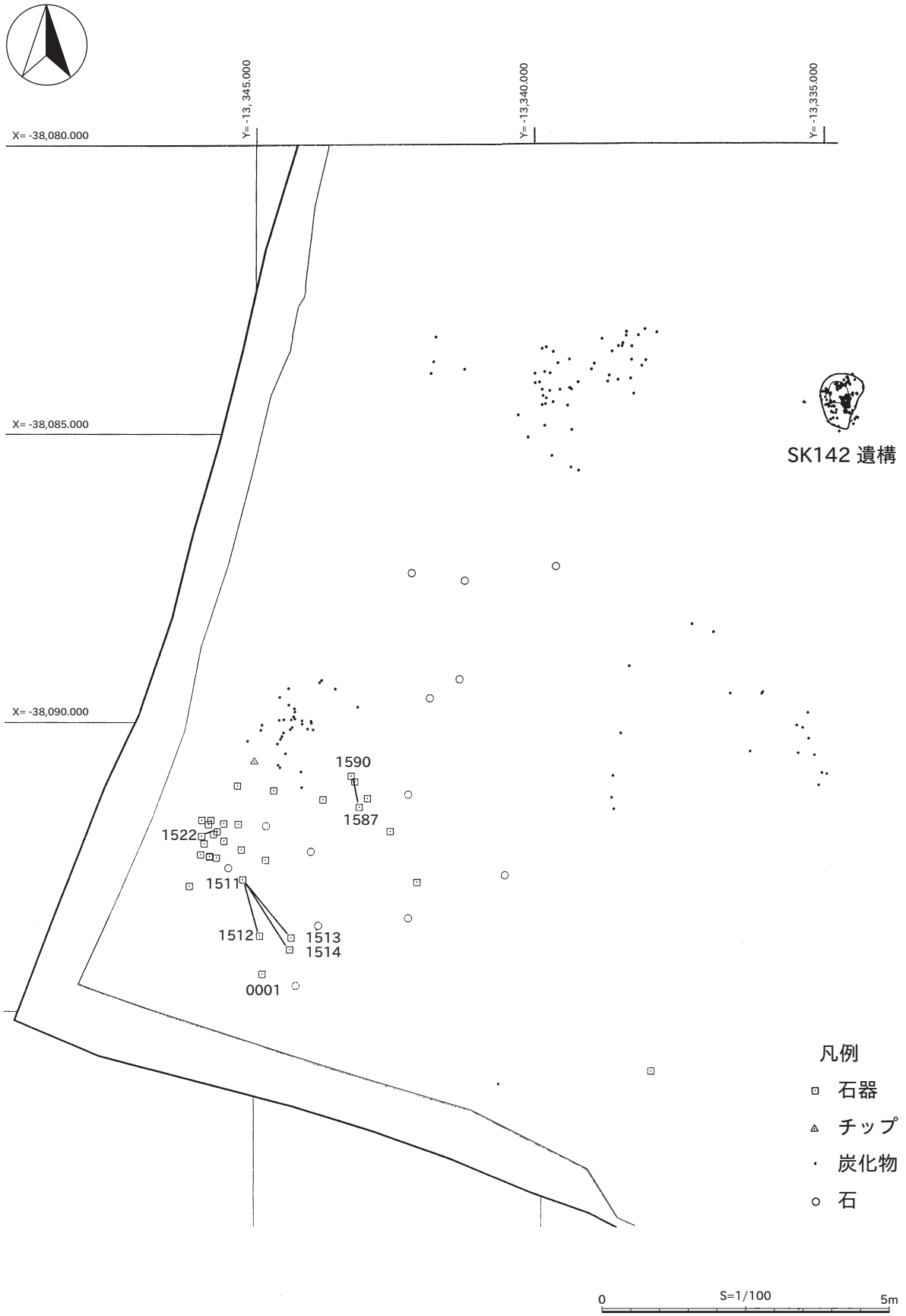
石器文化研究会・横浜市歴史博物館・第 9 回石器文化研究交流会・かながわ実行委員会



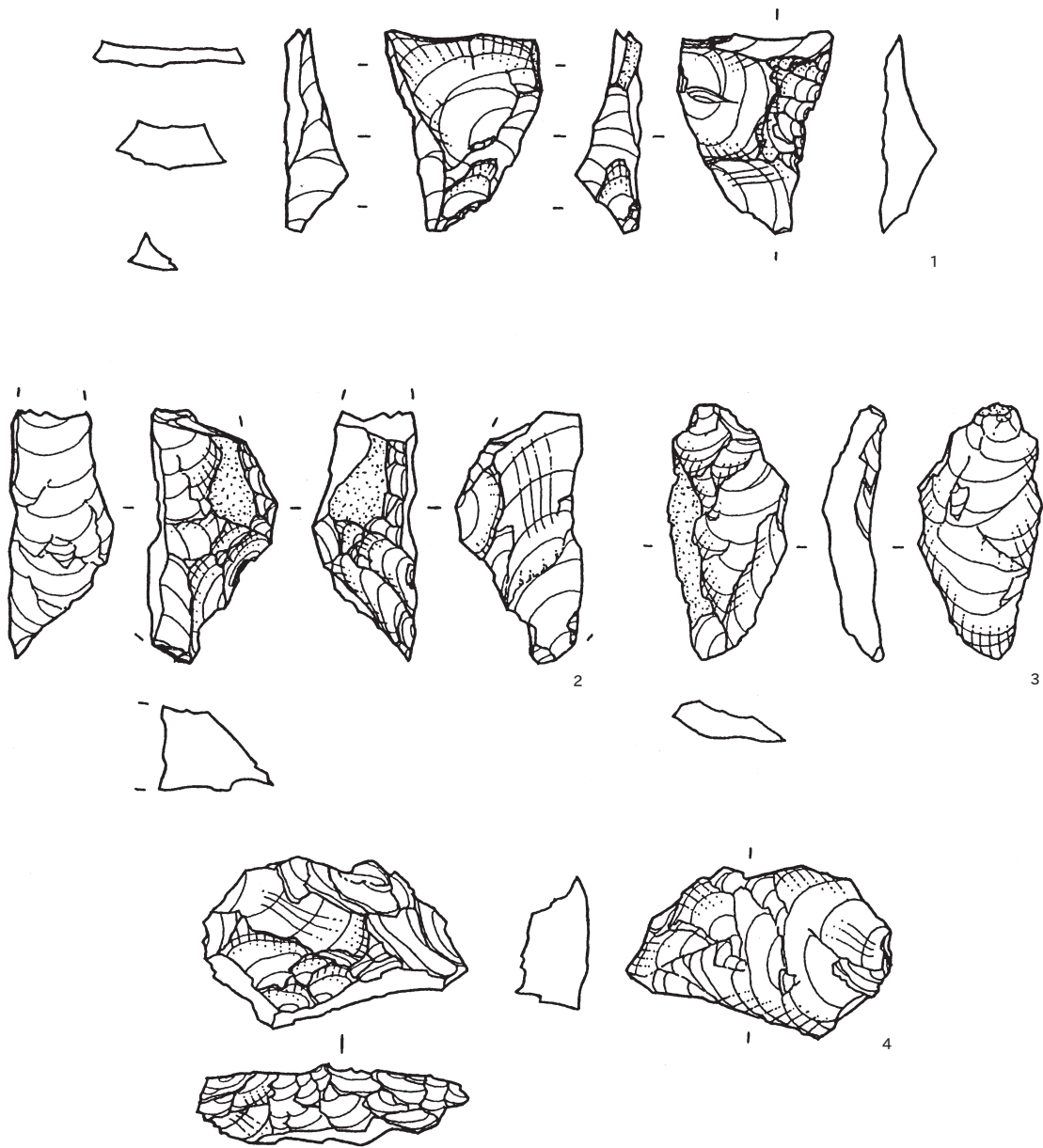
第1図 全体図



第 2 図

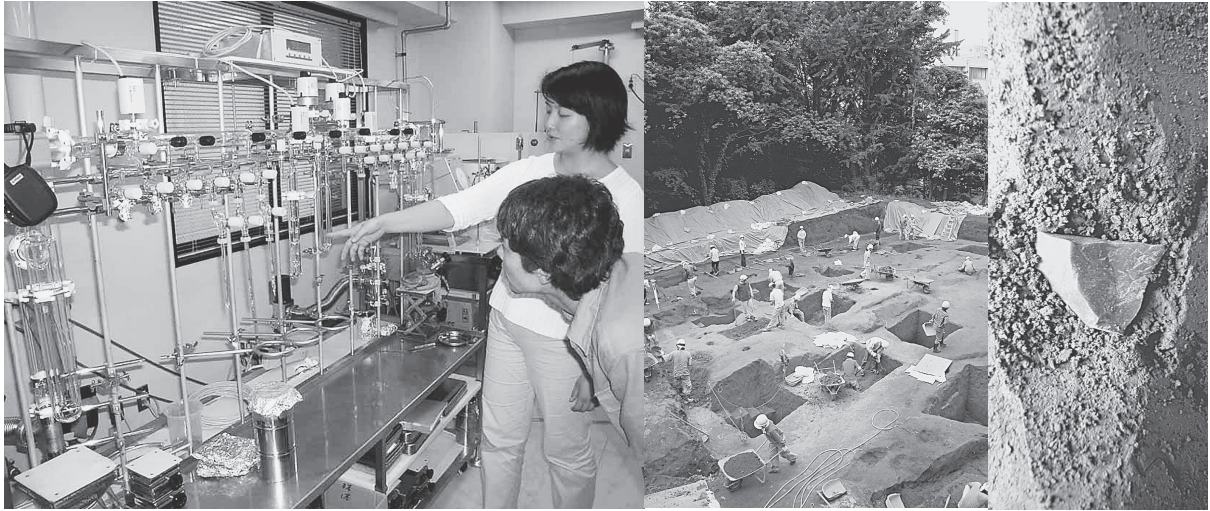


第3図 IX・X層 遺物分布図



第4図 出土石器 (S=1/1)

配布パンフレット 一部編集



## 国際学術交流棟の遺跡調査

— 後期旧石器時代の学際的研究 —

本遺跡では、自然科学との学際研究を進めており、東京大学原子力研究総合センタータンデム加速器研究部門(MALT)の加速器を用いた炭化材のAMS(Accelerator Mass Spectrometry: 加速器質量分析法)炭素14年代測定・旧石器時代の鍵層となる始良丹沢火山灰包含層の分析・地磁気測定・炭化材の樹種同定を行った。石器が出土したⅨ・Ⅹ層は、始良丹沢火山灰包含層(Ⅵ層24,000~25,000年前とされる)の下層であった。Ⅹ層から出土した炭化材のAMS炭素14年代測定の結果、Radio Carbon Age(C14年代)は、 $30,800 \pm 200\text{yr B.P.}$ で、H.Kitagawa and J.van der Plicht,1998,Science,279,1187-1190."Atmospheric Radiocarbon Calibration to 45,000yr B.P.:Late Glacial Fluctuations and Cosmogenic Isotope Production"による暦年較正年代は、32,000~34,000cal yr V.P.と推定された。

日本の旧石器時代研究では、石器と出土した炭化材のAMS炭素14年代測定を行い、暦年較正代を提示した例は少ない。今回の調査は、日本の旧石器時代を国際的に評価するための、調査・研究のモデ

ルになることが期待される

(東京大学埋蔵文化財調査室)

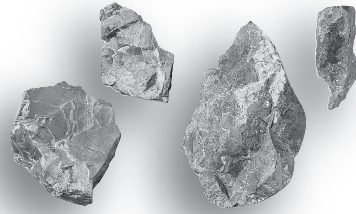
東京大学埋蔵文化財調査室は2003年5月16日から7月9日まで、駒場Ⅰキャンパス国際学術交流棟地点の遺跡調査を行った。調査の結果、関東ローム層のⅨ層・Ⅹ層、後期旧石器時代前半とされる層位から石器が出土した。台形様石器1点と石器を加工する際に生じる剥片、碎片、石核、32点、その他、炭化材が出土した。剥片、碎片、石核には接合する資料があることから、この場所で石器が作られていたことは明らかで、石器製作を検討するための貴重な資料が得られた。



東京大学教養部駒場キャンパスⅠ

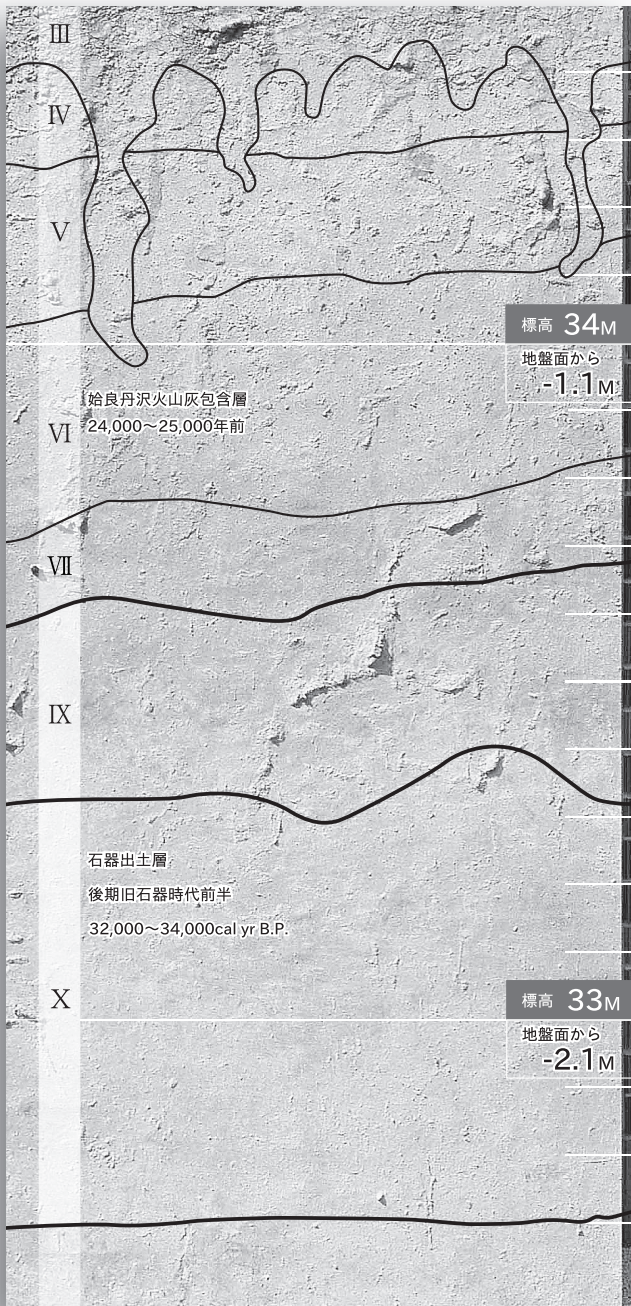


台形様石器 IX層出土

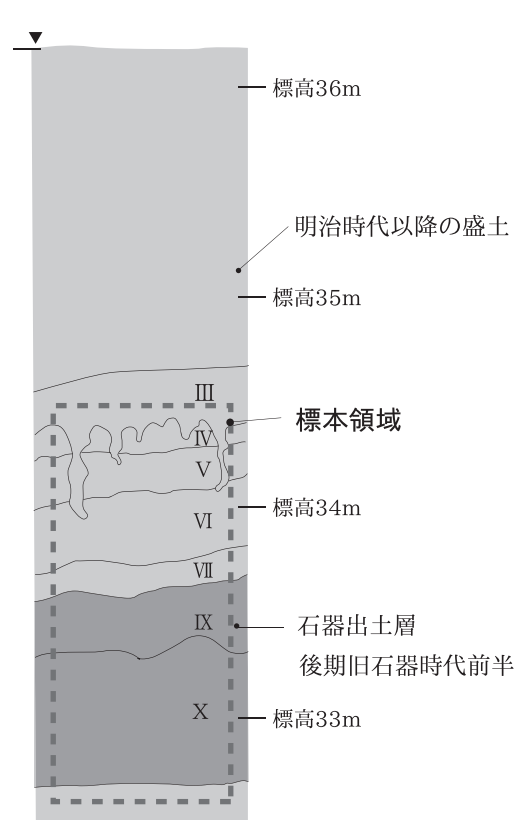


接合資料 X層出土

ファカルティハウス展示 地層標本



地表



協力

東京大学原子力研究総合センター  
タンデム加速器研究部門 (MALT)

参考文献

- AMS 炭素 14 年代測定の結果は、東京大学 MALT 平成 15 年度下半期、16 年度上半期共同利用研究採択課題 研究代表者 原祐一、松崎浩之、春原陽子、中野忠一郎「東京大学構内出土資料の年代測定」(課題番号 18B58)の結果の一部を含む。
- 原祐一、伊比博和 2003「東京大学 I キャンパス構内の遺跡 国際学術交流棟 (仮称) の成果と仮題」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学駒場 I キャンパス国際学術交流棟建築に伴う埋蔵文化財事前調査中間報告書 (東京大学施設部建築課提出文書) 東京大学駒場 I キャンパス構内の遺跡 国際学術交流棟地点』

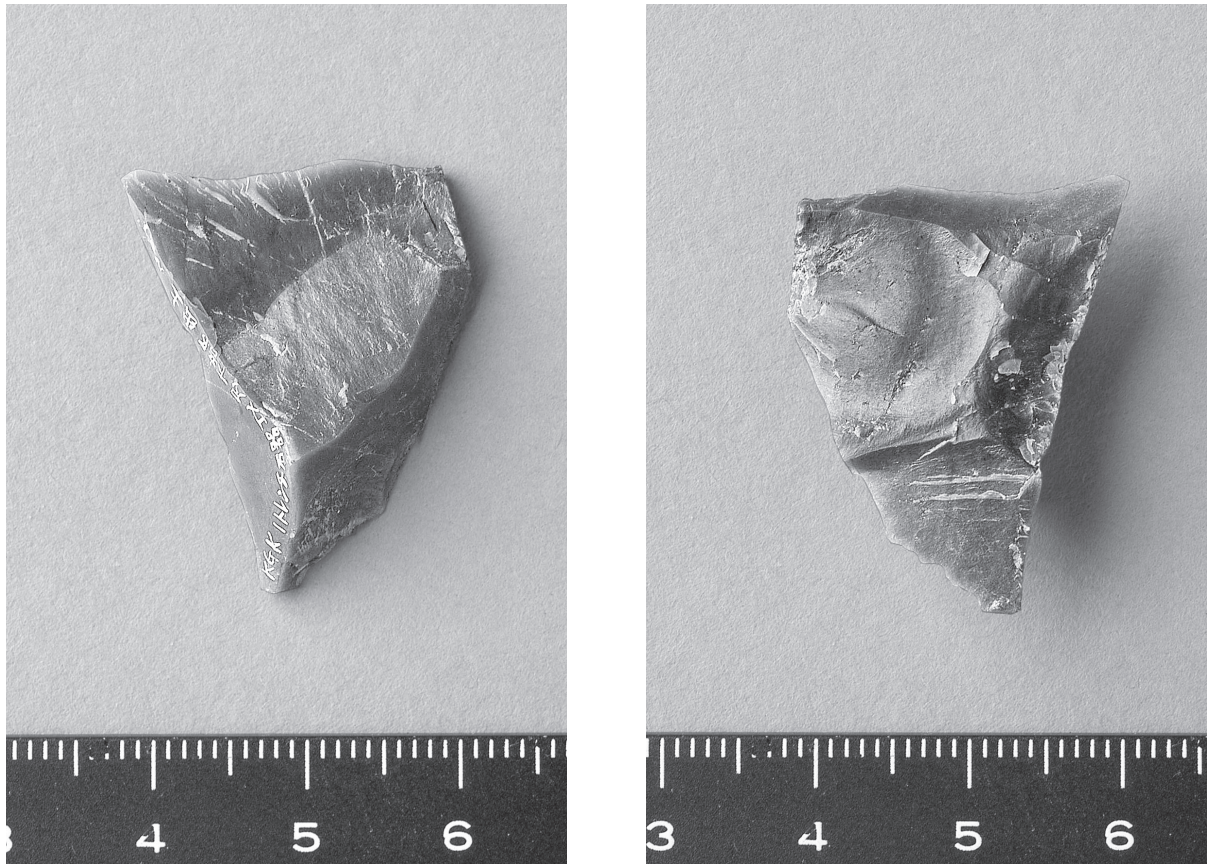


写真1 IX層出土台形様石器 ドット NO.0001

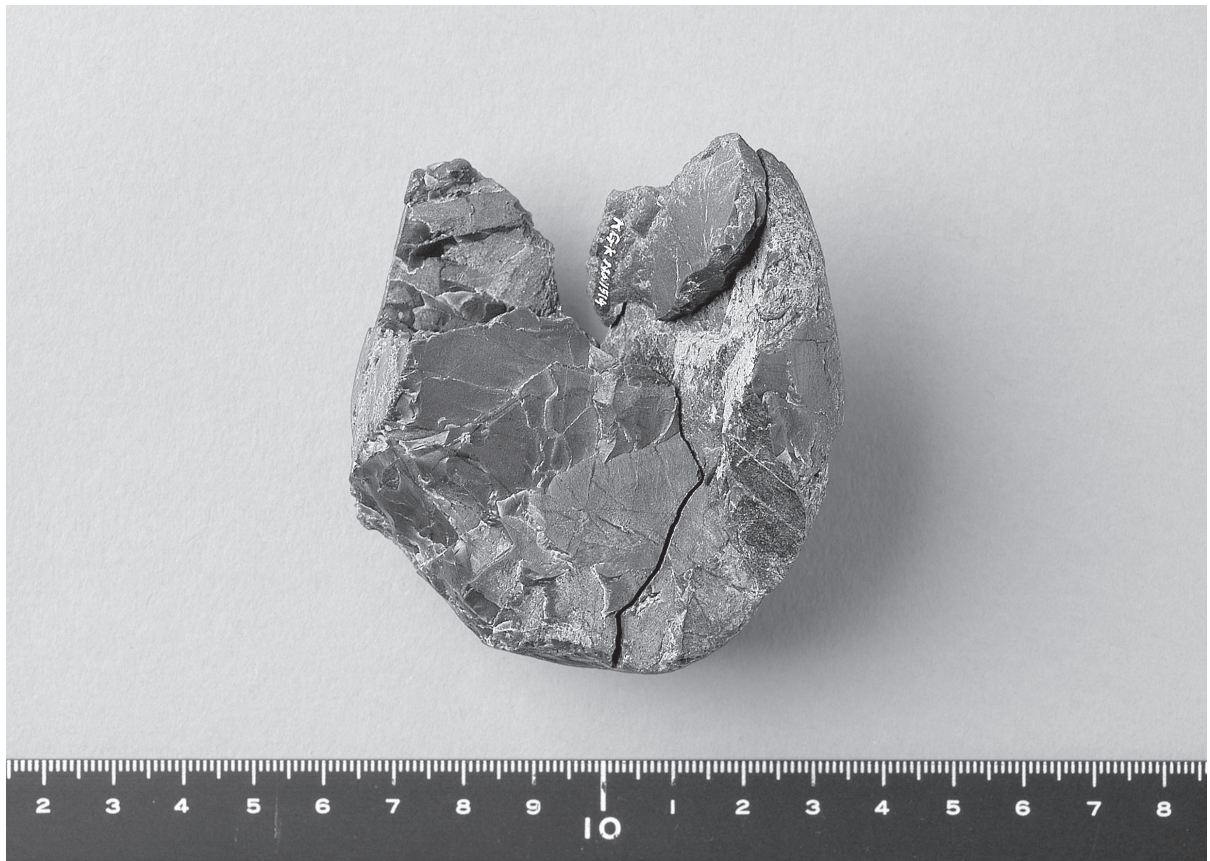


写真2 接合資料 ドット NO.1511～1514





写真3 IX層、X層遺物出土状況

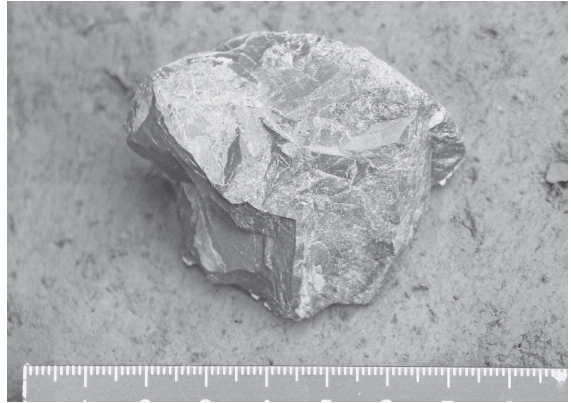


写真4 X層石器出土状況 ドット NO.1511

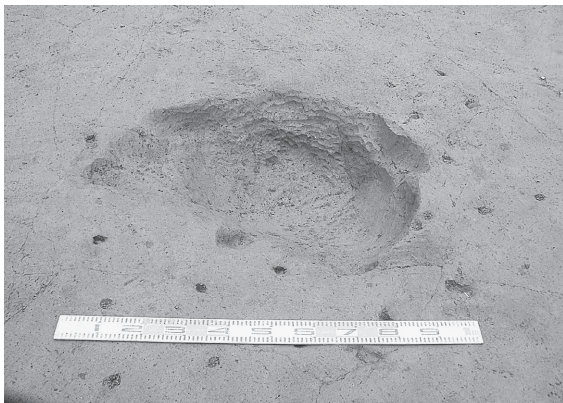


写真5 SK142 遺構 (IX層)

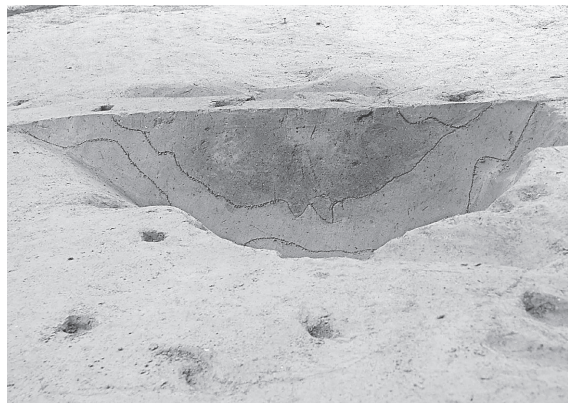


写真6 SK142 遺構断面



写真7 III層出土石器



写真8 SK66 遺構焼土検出状況



写真9 関東口一ム層断面



写真10 全景写真 近代以降、縄文時代



写真11 関東ローム層サンプリング



写真12 SK142遺構 地磁気試料サンプリング



写真13 SK142遺構 地磁気試料サンプリング

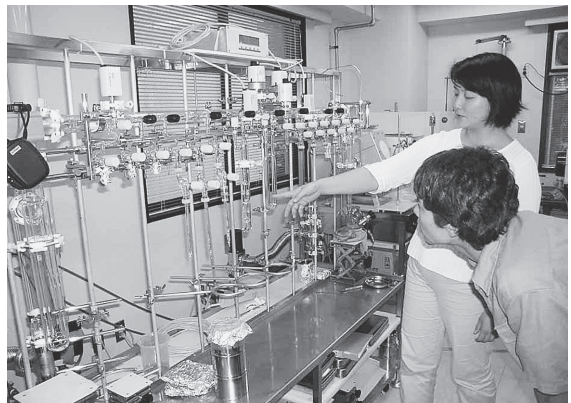


写真14 東大タンデム加速器カーボン処理ライン

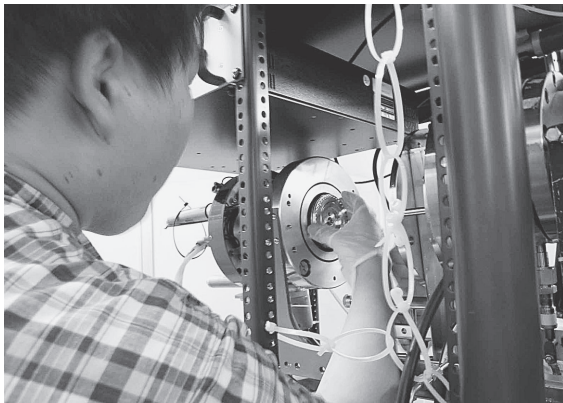


写真15 AMS C14測定



写真16 関東ローム層剥ぎ取り資料作成作業



写真17 発掘調査の公開



写真18 出土遺物の展示

## 2. 地震研究所総合研究棟地点調査略報

所在地 東京都文京区弥生 1-1  
調査期間 平成 16 年 8 月 30 日～平成 17 年 2 月 28 日  
調査面積 1474.21m<sup>2</sup>  
調査担当 追川吉生 大成可乃

### 1. 調査の経緯

東京大学本郷構内は、江戸時代には加賀藩をはじめとした大名屋敷や旗本屋敷、御先手組屋敷、講安寺などが存在した。また付近一帯は、上部旧石器時代以降の複合遺跡である本郷台遺跡群として知られている。本学では 1984 年以降、構内施設の建設に伴う発掘調査を実施しており、その件数は既に 60 地点を越えている。

地震研究所ではキャンパス北側の、現在テニスコートとグラウンドとして利用している場所に、総合研究棟を PFI 事業の一環として建設する計画を立案した（図 1）。建設予定地は水戸藩中屋敷および安志藩下屋敷にあたる。通常の学内での施設建設に伴う発掘調査では、調査室が実施した試掘に基づいて調査計画を策定し、本調査を実施している。今回は諸般の事情によって試掘調査を経ぬまま、調査室を除いた本事業関連当事者間によって本調査の計画が策定され、調査室が調査を実施する運びとなった。しかしながら表土掘削の段階で、配管除去等の作業を通して遺跡の拡がりや生活面の重なりを確認することができたため、最終的には調査室が必要と判断する期間・人員を確保して本調査を実施した。

発掘調査は 2004 年 8 月 30 日から 2005 年 2 月 28 日まで、調査面積は 1474.21m<sup>2</sup> である。

### 2. 確認された生活面

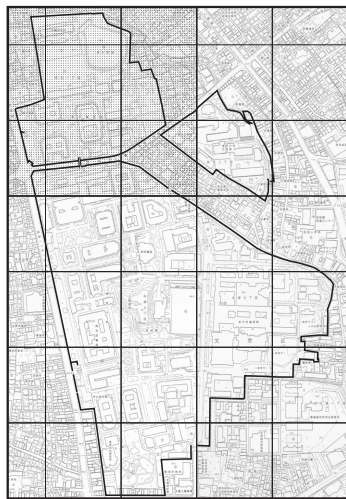
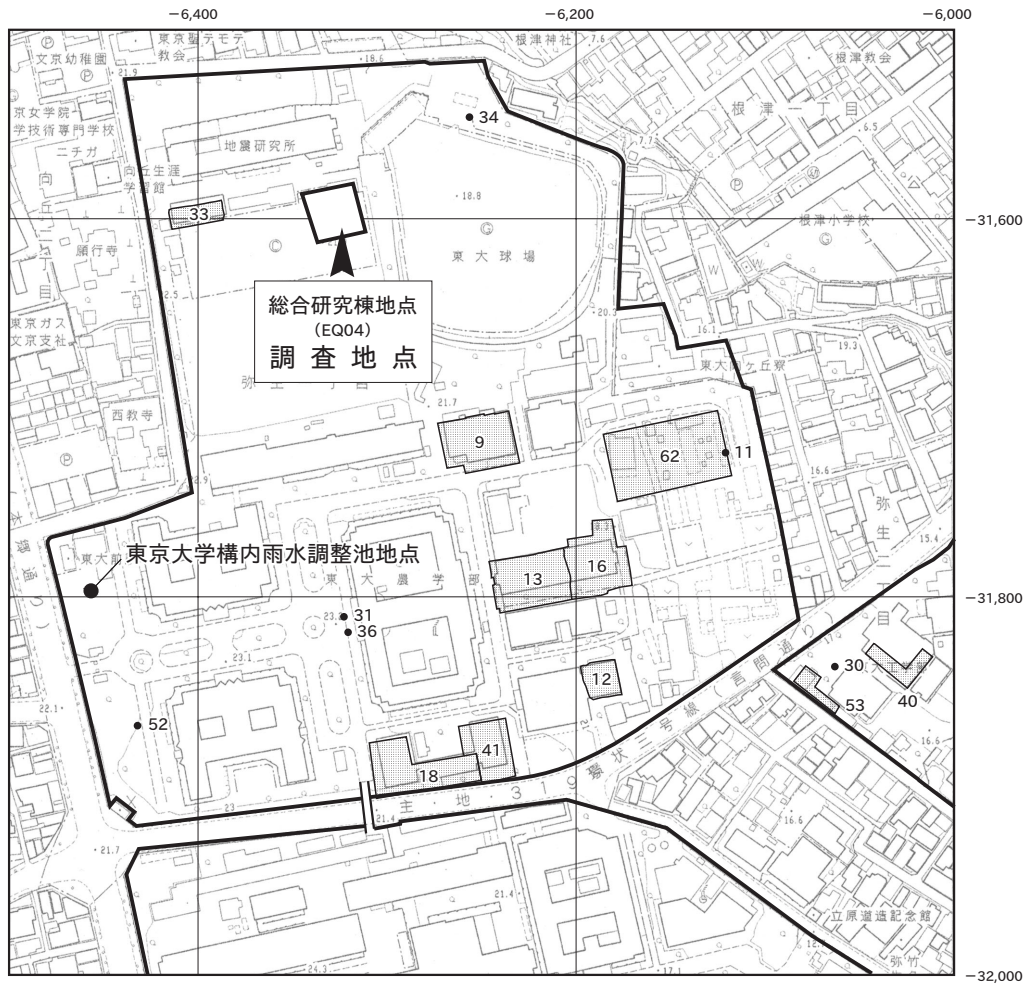
調査地点は明治時代以降、旧制第一高等学校用地として利用されていた。当該期の施設図を瞥見すると、付近は寮にあたるようである。その後、駒場に所在していた農科大学とキャンパスを交換して以降、本学農学部を主体に利用された。



写真 1 埋没谷検出状況（調査区南東隅から撮影）

調査では江戸時代に 5 面の生活面を確認した。しかし、調査区は北西から南東にかけての傾斜地に位置しており、特に調査区南側には埋没谷が存在していたため、一様な堆積状況ではない（写真 1・図 2）。今後調査地内各区で把握した生活面のそれぞれを、対照・

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報



- 9 農学部家畜病院
- 11 農学部ガラス室
- 12 農学部図書館
- 13 農学部校舎（7号館）（1期）
- 16 農学部校舎（7号館）（2期）
- 18 農学部総合研究棟（SK）
- 30 工学部全径間風洞実験室新営支障ケーブル移設
- 31 ATMネットワーク施設整備
- 33 地震研究所テレメタリング観測施設
- 34 グランド
- 36 農学部ガス管理設
- 40 工学部全径間風洞実験室
- 41 ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー
- 52 農学部（21世紀館）木質ホール
- 62 農学部総合研究棟（NS01）

図1 調査地点の位置



図2 ローム面検出状況

比定していくことが課題である。本概報では便宜上新しい時期から1面、2面、3面、4面と呼称し、ローム面で確認し得た、江戸時代ではもっとも古い段階をローム面とする。また人力掘削中に盛土内より少なからぬ土器片や石器が出土したが、江戸時代以前の明確な生活の痕跡を認めることはできなかった。旧石器時代についても同様で、数カ所のグリッドを対象に立川ローム第二黒色帯まで掘削したが、遺物の出土には至らなかった(図2内のグリッドが掘削したグリッドを表す)。

以下に各面での調査成果の概要を報告する。



写真2 SX60

### 3. 調査成果

#### 3-1.1 面の調査

1面は明治時代以降の影響が著しく、土坑とピットが数基検出されたのみである。

### 3-2.2 面の調査

#### SX060

2面にはほぼ調査区全面にわたって焼土が認められた。SX60は深さ10cmの不定形の瓦溜まりである。そのすぐ南側や西側には炭化材の集中も見られた(写真2)。

#### SU095

入り口部分は150cm四方、深さ270cmを測る地下室(写真3)。本体は北に30cm、東と南に100cm程度のハング部分を有し、それぞれ高さ80cm。写真4は天井部を落とした状態であるが、西側に明かり取りのためと考えられる小穴が設けられていた。遺物は陶磁器片が数点出土しているにすぎず、時期を確定するまでには至っていない。

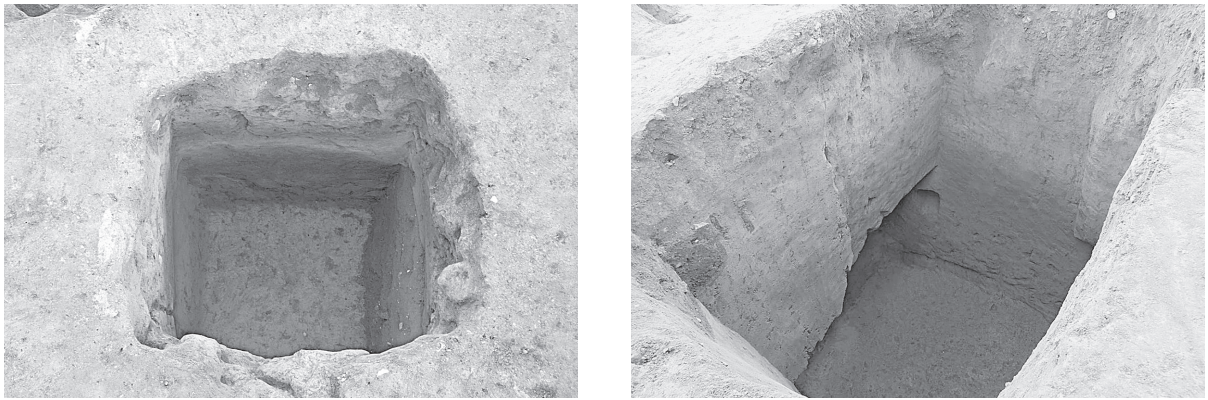


写真3・4 SU095

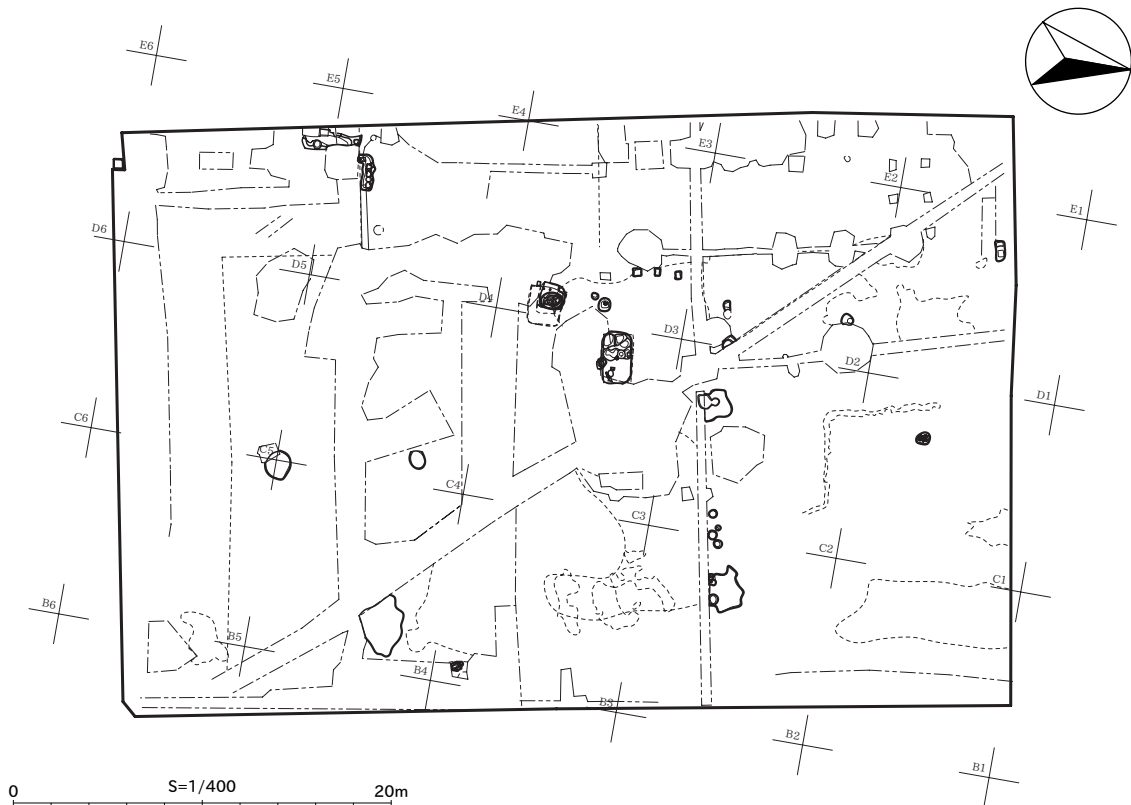


図3 2面の遺構分布状況

### 3-3.3 面の調査

#### SD002・SD100・SD200

調査区の東側で、調査区を南北方向に縦断する石組みの溝である。使われている石は写真5のような間知石で、部分的に2段積みされていることを確認している。溝の底部には石は存在しない。掘り方は全体としては明瞭ではないが、その掘り込みが開始されている面と、土層断面の観察とから、この石組みの溝は3面の遺構であると判断した。また掘り方内には桐木の痕跡が認められている。溝の覆土には焼土が多く含まれていた。遺物は17世紀末から18世紀初頭にかけてのものが中心で、年代を判断する指標となろう。

溝は調査区やや北寄りから、一つはそのまま直進し、もう一つは北西側へと分岐する(SD100)。更にSD100はその方向を北へと曲げて(SD200)、最終的には調査区外へと延びている。SD100と



写真5 SD002・100・200 全景

SD200は楕円形の石によって構成されている。使用された石材の違いが何に起因しているかについては、現時点では明らかでなく、今後の分析課題としたい。SD002は概して北から南へと傾斜しており、この傾向はSD100・SD200とSD002との関係においても看取される。現時点では、これらの溝は(若干の時期差はあるものの、生活面として把握する場合)ほぼ同時期であると考えられる。

#### 礎石建物1

SD002の西側に隣接して、直径50-60cmの楕円形の石を礎石とした建物跡が検出された(写真6)。礎石は南北方向に100cm、東西方向に180cmの間隔で、軸をやや西に傾けた状態で並んでいる。周囲には夥しい焼土があり、この建物が焼失した際に崩落した壁土であったことを伺わせる。また写真7のような炭化した格子状の部材も一部出土している。ところで、礎石列の南側には焼けた瓦が

集中する部分がある。あたかも火災によってこの建物が南側へ倒壊したかのような出土状況を呈している。しかし検出した礎石を基礎に持つ建物に、瓦が葺かれていたかは即断を避けたい。なおこの瓦溜まり中からは、三階菱が刻印された瓦も出土した(写真8)。この家紋は安志藩小笠原家のものであり、調査地の土地利用の変遷を知る上で大きな手がかりとなる。



写真6 礎石建物1



写真7 炭化部材検出状況



写真8 小笠原家の家紋が施された瓦

#### SR028・072・074・075

調査区を東西方向に走る道路と側溝。写真9のSR028東側で90度南に折れている。このSR028に南北方向に走る道であるSR072・074・075が交差する。

#### 礎石建物2

SR072の東側に、長径30-40cmの礎石列が南北に並ぶ(写真10)。その列の90cm西側には、それよりもやや小振りな礎石が同様に南北に並ぶ。礎石列の間隔は180cmである。道に面した礎石建物の基礎だろう。礎石に大小が認められることから、前者は建物本体の、後者は縁側の基礎であったかもしれない。道と礎石列との間には、焼土と瓦片が多く含まれている、幅15-20cm程度の溝がある。小振りの礎石を縁側の礎石と考えるならば、これは雨落ち溝になろう。

同様の建物は、この東側、SR074を挟んだ場所からも検出された。更にSD002に隣接する礎石建物1もある。こうした検出状況からは、道に画されるように長屋が数棟立ち並ぶ該期の景観を想定できる。





写真9 SR208 (写真左が北となる)



写真10 礎石建物2

### SU157

長軸 200cm、短軸 300cm、深さ 200cm の直方体を呈する地下室 (写真11)。カワラケが床面付近に集中して出土している (写真12)。他に漆碗 (塗膜のみ) が1点出土した。この地下室には確認面から 40cm 程度下の部分から、南北方向に間知石が据えられた状態で出土した。その周囲には粘土が貼られており、地下室埋没過程にみられる中央部の凹の平準化を試みているようにも見受けられた。詳細は不明である。



写真11・12 SU157とカワラケ集中部

### SU180

西側の地下室本体は平面が200cm四方、深さ180cm。その東側に、平面形状は東辺を壊されているため不詳だが、深さは150cmとやや浅い地下室が設けられている。地下室本体へのアプローチ部分と考えられる(写真13)。

### SU425

南北370cm、東西340cmの地下室で、西側に更にもう一つ部屋を有する。西側の部屋への入り口部分には礎石が2つ据えられていた。地山とは別に天井が設けられていたかもしれない。この地下室では陶磁器・土器が大量に出土したほか、多量の実物残滓も出土している(写真14)。

### SE035

掘り方の直径200cm、本体の直径90cmの井戸。全体で10m程度掘り下げ、井戸枠を確認したが、湧水点までには至らなかった(写真15)。漆器碗(破片)ほかの出土がある。



写真13 SU180



写真14 SU425



写真15 SE035

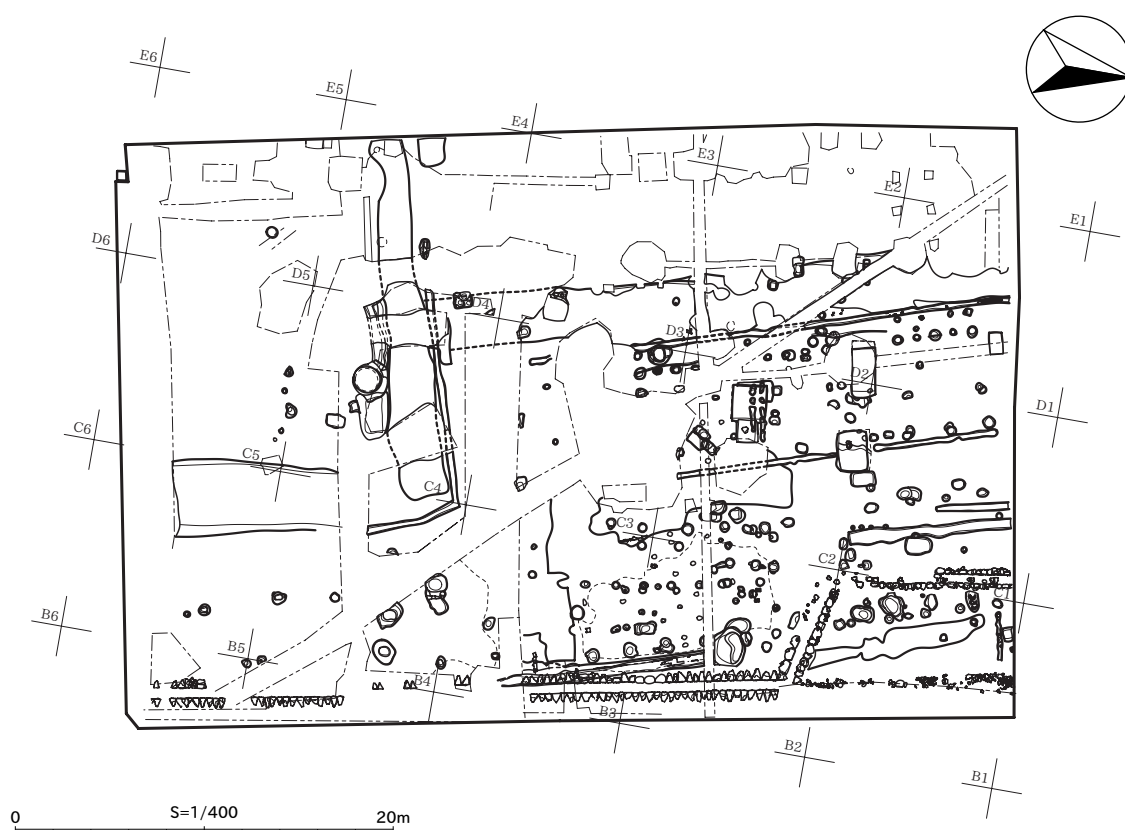


図4 3面の遺構分布状況

### 3-4.4 面の調査

#### 堀跡

調査区の北東側で検出されたピット列。ピットはそれぞれ直径 50–60cm、深さ 80–100cm で、南北方向に 150cm 間隔で並ぶ（写真 16）。しかしその東西方向のどちらにも、このピット列と対になるような列は検出されなかったので、建物の柱穴と考えるよりは、堀の基礎と考えられる。南北に並ぶピット列には 1 基おきに、西側に同サイズのピットが切り合っただけで検出された。これは堀の控えであったと思われる。

#### SU209

調査区の南側には、東西方向に並ぶ地下室が 6 基検出されている。その一つである SU209 では、写真 17 のようにカワラケが 13 枚重なった状態で出土した。重ねたまま捨てたのだろうか。カワラケの廃棄時の様相を考える上で興味深い事例である。

### 3-5. ローム面の調査

#### 建物

直径 50-60cm のピットが写真のように、南北方向に約 360cm、東西方向に約 180cm の間隔で並んでいる（写真 18）。全体の規模は詳らかではないが、建物の基礎であると思われる。礎石を全く伴わないことから、掘立柱による建物であることが想定される。

このピット列の西側には南北方向に延びる溝がある。この溝よりも西には南北方向に地下室が並んでいる。建物基礎のピット列が検出された溝の東側とは様相が些か異なっている。

SU212・SU665

いずれも出入り口の形状は150cm四方の正方形で、SU212(写真19左)は北・西・南にそれぞれ100cm程度のハング部を持つ、深さ160cmのフラスコ状の地下室。一方SU665(写真19右)は北・東・南にそれぞれ100cm程度のハング部を持つ、深さ150cmのフラスコ状の地下室(写真はいずれの地下室も天井部分を掘削している)。SU212では陶磁器・土器の他に、貝や魚骨などの多量の食物残渣が出土しており、分析が待たれる。SU665では陶磁器、瓦片が数点出土するに過ぎない。



写真16 掘跡検出状況



写真17 SU209 カワラケ検出状況



写真18 建物の柱穴

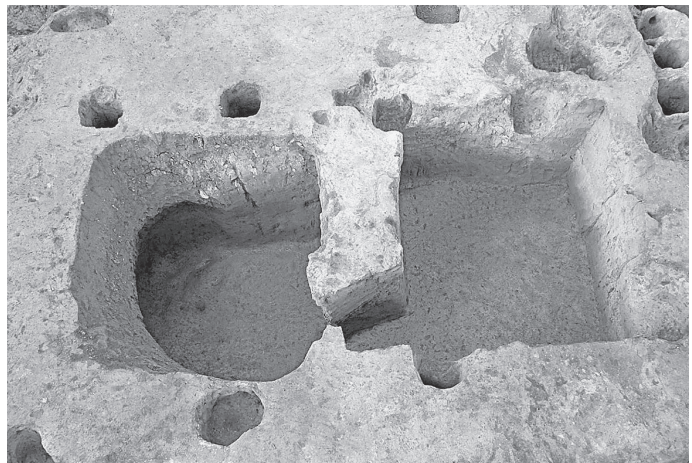


写真19 SU212(左)・SU665(右)

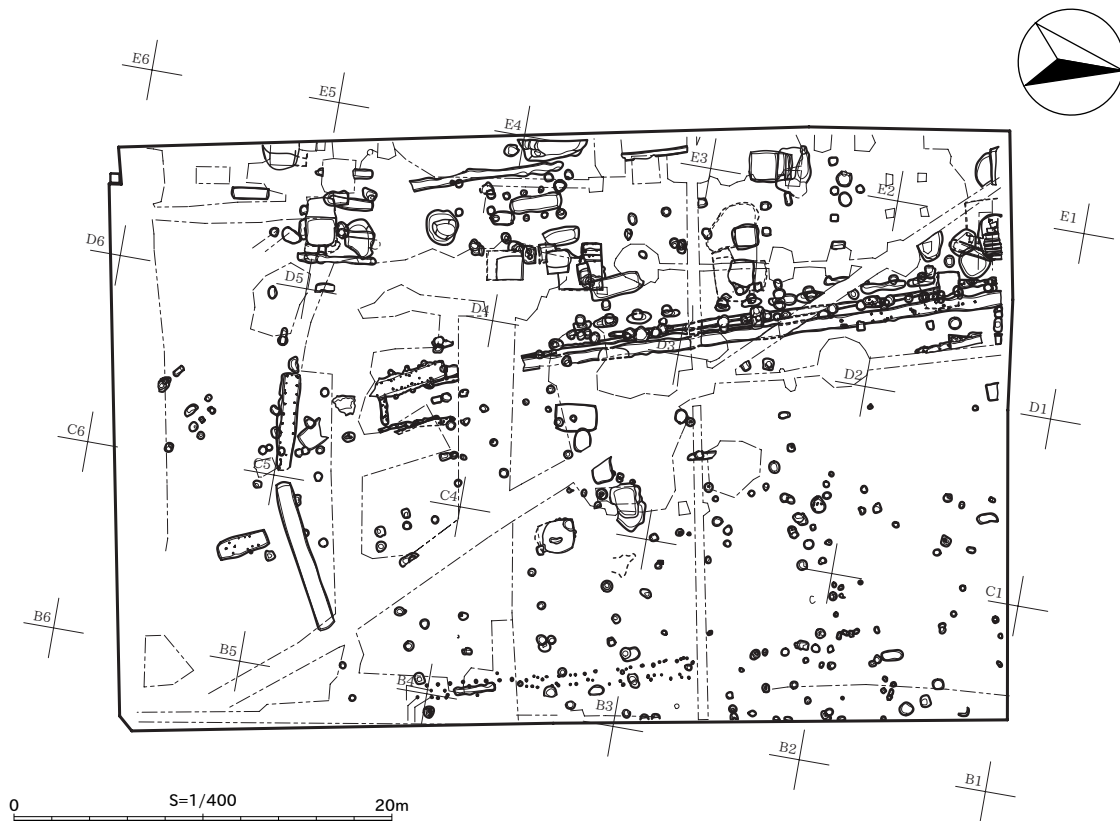


図5 ローム面遺構分布状況

#### 4. 調査の課題

従来、本調査区の位置する農学部周辺（本郷構内ではあるが、これを弥生キャンパスと呼ぶ）は、埋蔵文化財調査がほとんど実施されてこなかった部分にあたる。その少ない事例の一つである地震研究所テレメンタリング地震観測施設地点は、本調査区の西側わずか20mしか離れていないにもかかわらず、遺跡のあり方は大変異なっている。すなわち、テレメンタリング地震観測施設地点（図1-33）が現地表面から100cm程度でローム層となり、生活面もこのローム層に認められるに過ぎないのに対し、本調査区ではローム層が検出される深さは現地表面から180cmを測り、その間に5枚の生活面が認められるのである。ローム層までの深さが異なる点は、本調査区が南側の埋没谷に向かって傾斜していることに起因しよう。しかし生活面の多寡は何によるものだろうか。傾斜地では盛土による造成が繰り返されるのに対して、平坦地では地均しがなされるのみだったからであろうか。

3面の礎石建物1で検出された小笠原家の家紋の付いた瓦は、少なくとも3面段階での調査区の土地利用者が小笠原家安志藩であることを明らかにした意味で貴重な遺物である。安志藩、水戸藩にかかわらず当該地点に当てはまる屋敷の絵図資料は公表されていないが、江戸切り絵図を参照すれば、門の位置が敷地の西側にあることがわかる。であるとするならば、テレメンタリング地震観測施設地点は門と施設本体との中間に当たり、土地利用の度合いとしてはそれほど著しくなかったことも予想される。

今はまだ本調査区周辺の歴史的様相を復原するまでには至っていないが、それを明らかにすることが、今後の整理作業で我々に科せられた課題の一つである。とはいえ再三繰り返すようだが、我々の弥生キャンパスでの調査は未だ端緒に付いたばかりである。3面の石組みの溝SD002他の構造を鑑みるにつけ、1万石の大名屋敷の下屋敷といったものに対する認識を新たにするばかりである。拝領

した上屋敷が狭小な藩の場合、中屋敷・下屋敷に御殿空間の機能の一部を振り返ることもあり得ると  
いうのは、本学資料編纂所・宮崎勝美氏のご教示である。本稿では土地利用者と記したのは、拝領者  
と実際に利用していた者との関係についても、まだ検討の余地を有しているからである。

今回の調査によって本郷キャンパスの調査に、水戸藩・安志藩の藩邸が所在した弥生キャンパスに  
関する調査も本格的に加わった。上記の課題を見据えながら、今後の整理作業を実施していく所存で  
ある。  
(追川吉生)

#### 参考文献

東京大学埋蔵文化財調査室 2004 「東京大学本郷構内の遺跡 地震研究所テレメンタリング地震観測施設地点」『東  
京大学構内遺跡調査研究年報』4

## 3. 薬学部系総合研究棟地点（2004年度）1次調査

### はじめに

本文は『東京大学施設部建築課提出文書東京大学薬学部系総合研究棟地点（2004年度）1次調査埋蔵文化財調査中間報告書1』の内容を加筆、修正したものである。本文の内容は、02年調査、薬学部図書館、経済学部等の周辺遺跡との照らし合わせと、絵図・古文書等と遺構の検討によって、修正する場合がある。最終的に年報、小論等を経て本報告を刊行する。

発掘調査は東京大学が予定する東京大学薬学部系総合研究棟建設に伴うものである。2002年度の調査（以下02年調査）では、加賀藩邸に関連する、御殿、工事に伴う道路、江戸時代前期の建物跡、落穴等を確認した。今回の調査では、これらに関連する遺跡の存在が予想された。2004年度1次調査は、薬学部系研究棟解体工事に伴う搬入路を確保するための調査であったため、調査深度はバス通りの高さまで行った。調査地点の東側で土手状の遺構が確認されたため、土手部分についてはトレンチ調査を行い規模の確認を行った。

発掘調査の指導は原祐一、堀内秀樹が行った。調査面積は90m<sup>2</sup>、調査期間は、2004年7月26日から2004年8月4日である。整理作業は、発掘調査と並行して行った。遺跡略号は「YG04 I」である。

### I. 調査の方針、遺構数・遺物量

#### 1. 調査の方針

調査対象は、東京大学史の観点から、明治時代も対象とした。また、江戸時代から明治時代の遺構遺物も、技術史、産業考古学の観点から出土遺物として取り扱う。

#### 2. 現場内の安全管理

発掘現場内の掘削深度など安全に関する点については、清水建設、加藤建設と協議し調査を進めた。やむを得ない場合を除いて土木工事の安全基準に従った。今回の調査では無事故で調査を終了することが出来た。

#### 3. 調査の公開と調査成果の揭示

調査は、一般に対してオープンとした。2003年度調査の成果、発掘調査速報を揭示し調査の理解に勤めた。

#### 4. 遺構数・遺物量

調査の結果、道、土手、ごみ穴1基、下水溝1基、溝1基、杭穴2基を検出した。遺物量は遺物収納箱1箱であった。

### II. 廃棄物の確認

2003年度調査では調査区内から、試薬瓶など実験に伴う廃棄物が大量に出土したため、調査を中断し廃棄物の除去を行った。廃棄物の除去によって調査を一時中断せざるを得なかったため、今回は、迅速な対応が行なえるよう環境安全研究センター、施設部、薬学部と事前に打合せを行なった上で調

査を開始した。調査区の大部分が前回調査地点に重なっており試薬瓶などの除去が終了していたため、調査時これらは発見されなかった。

### III. 調査の結果

調査の結果、4枚の生活面、5遺構を検出した。各面は東に傾斜していた。A面を除く各面には砂利を用いた舗装が施されていた。

#### 1. A 面

調査地点の北側で確認された。江戸時代最終面である。上面は焼土で覆われていた。SD01遺構は、底部に木製の枠が残ることから、排水溝と考えられる。遺構内覆土は焼土が主体であった。AMS14C年代測定試料(炭化材)を硬化面上層、遺構内覆土から採集した。

#### 2. B 面

遺構未検出。

#### 3. C 面

D面の東側と南側の段差をローム土で埋め、平坦にした後、SD03遺構を掘削し、厚み3cmの板材をコの字形に組んだ木樋を埋設し道が作られていた。排水を地下に浸透形の下水溝と考えられる。板材の固定に用いた鉄釘の長さは、排水溝の縦幅と同じ長さの釘が三寸間隔で打たれていた。

#### 4. D 面

土手を確認した。東側が一段低くなっており上段とした段の標高差は2mである。上段は道で砂利を用いた舗装が施されていた。土手の下で地山を確認した。地山を確認した範囲では上面に砂利を用いた舗装、突き固めた痕跡は確認できなかった。SB04・SB05内から杭跡を確認した。

### IV. 薬学部系総合研究棟地点(2004年度)1次調査の成果と課題

今回、暦年代の指標となる「宝永火山灰(1707年)」は確認できなかった<sup>(註1)</sup>。そのため、各面の年代を明確にすることができなかった。現在のところ2003年度調査との対応関係は、A面が「江戸時代最終面(宝永4年以降の生活面)」、B面が「元禄期」に火災を受けた生活面に該当すると考えている。今後、2次調査の結果と前回の調査結果を再検討して生活面の年代を明確にしていきたい。2003年度調査では、現地表面から約7mで谷跡、江戸時代を通して行われた造成を確認した。江戸時代、旧地形をどのように改変し藩邸内の空間を確保していたかについても2次調査の課題としたい。

---

(註1) 藤井敏嗣、宮地直道、吉本充宏、安田敦、金子隆之 2003「旧加賀藩屋敷における宝永火山灰の発見とその火山学的意義」考古科学シンポジウム世話人会、國學院大學考古学研究室『第4回考古科学シンポジウム』PP.77-82



参考文献

- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002 『東京大学薬学部系総合研究棟地点(2002年度)発掘調査中間報告書1』  
(東京大学施設部提出文書)
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002 『東京大学薬学部系総合研究棟地点(2002年度)発掘調査中間報告書2』  
(東京大学施設部提出文書)
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2003 『東京大学薬学部系総合研究棟地点(2002年度)発掘調査中間報告書3』  
(東京大学施設部提出文書)
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2003 『東京大学薬学部系総合研究棟地点(2002年度)発掘調査中間報告書4』  
(東京大学施設部提出文書)
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2003 『東京大学薬学部系総合研究棟地点(2002年度)発掘調査中間報告書5』  
(東京大学施設部提出文書)
- 原 祐一 2003 「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部総合研究棟(2002年度)富士山宝永火山灰の出土状況」  
考古科学シンポジウム世話人会、國學院大學考古学研究室『第4回考古科学シンポジウム』  
PP.67-71
- 藤井敏嗣、吉本充宏、安田 敦、金子隆之 2002 「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部系総合研究棟地点(2002  
年度)発掘の火山灰の同定」『中間報告2』
- 宮地 直道 2002 「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部系総合研究棟地点(2002年度)で発見された宝永ス  
コリアの層序と粒度特性」『中間報告2』、
- 松崎浩之、原 祐一 2003 「東大宝永火山灰層前後のC-14年代測定」考古科学シンポジウム世話人会、  
國學院大學考古学研究室『第4回考古科学シンポジウム』PP.73-75

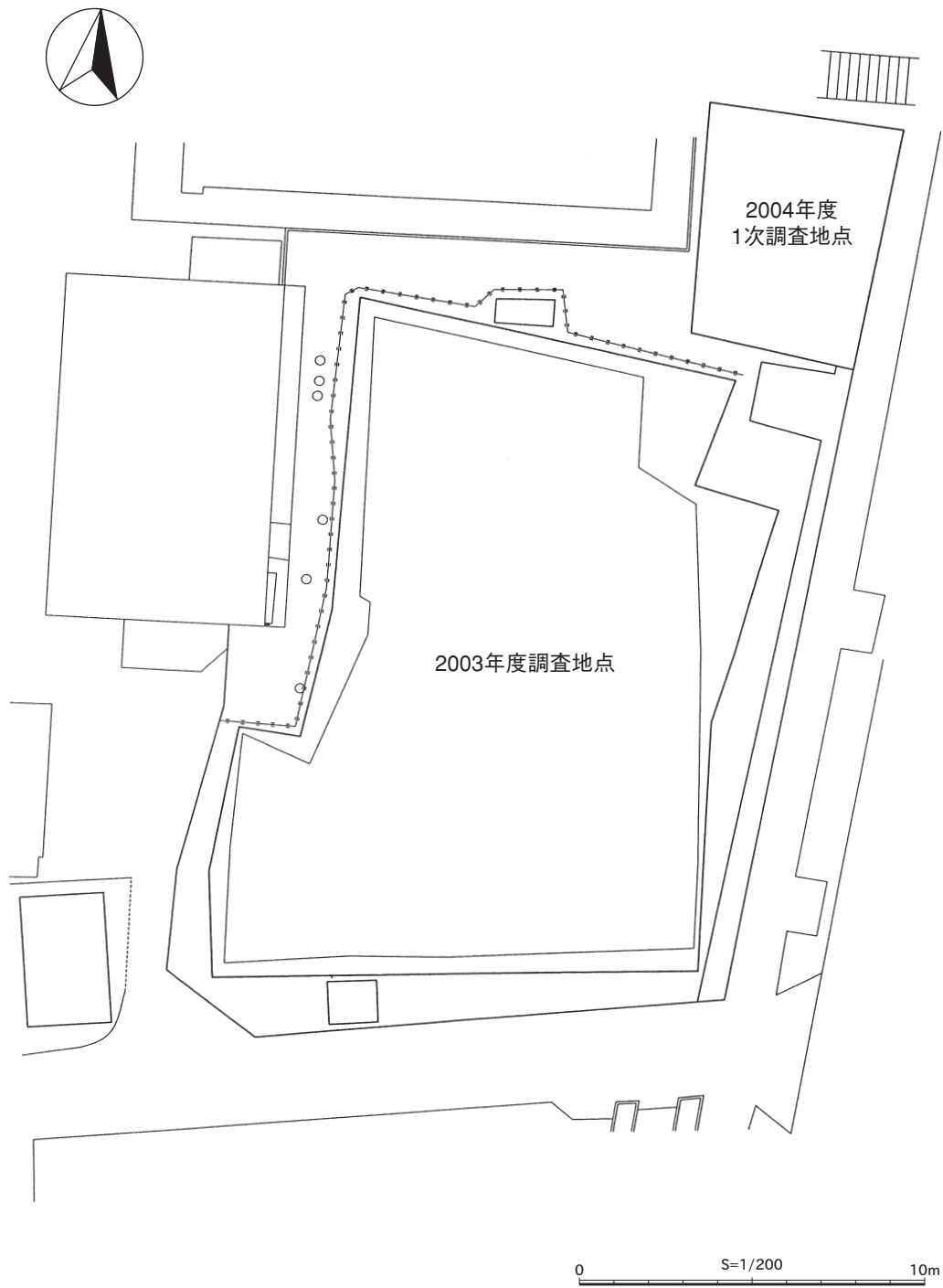


図1 2003年度調査地点、2004年度1次調査地点

3. 薬学部系総合研究棟地点（2004年度）1次調査

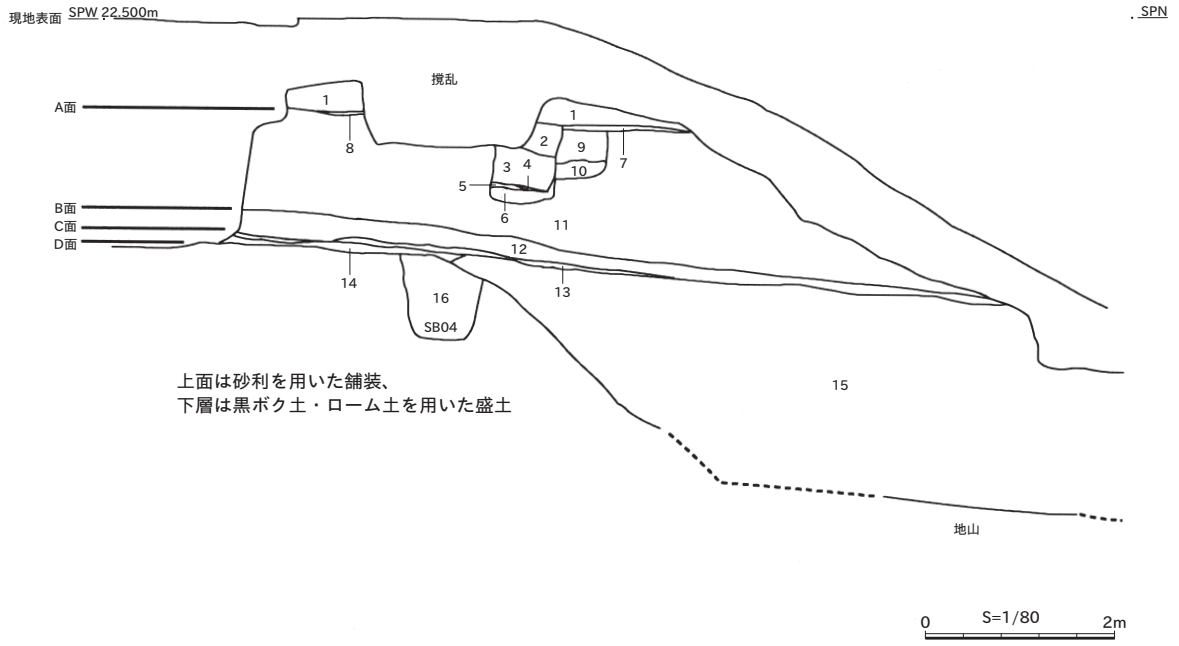


図2 基本層所（北壁遺跡断面、東西 SEC）

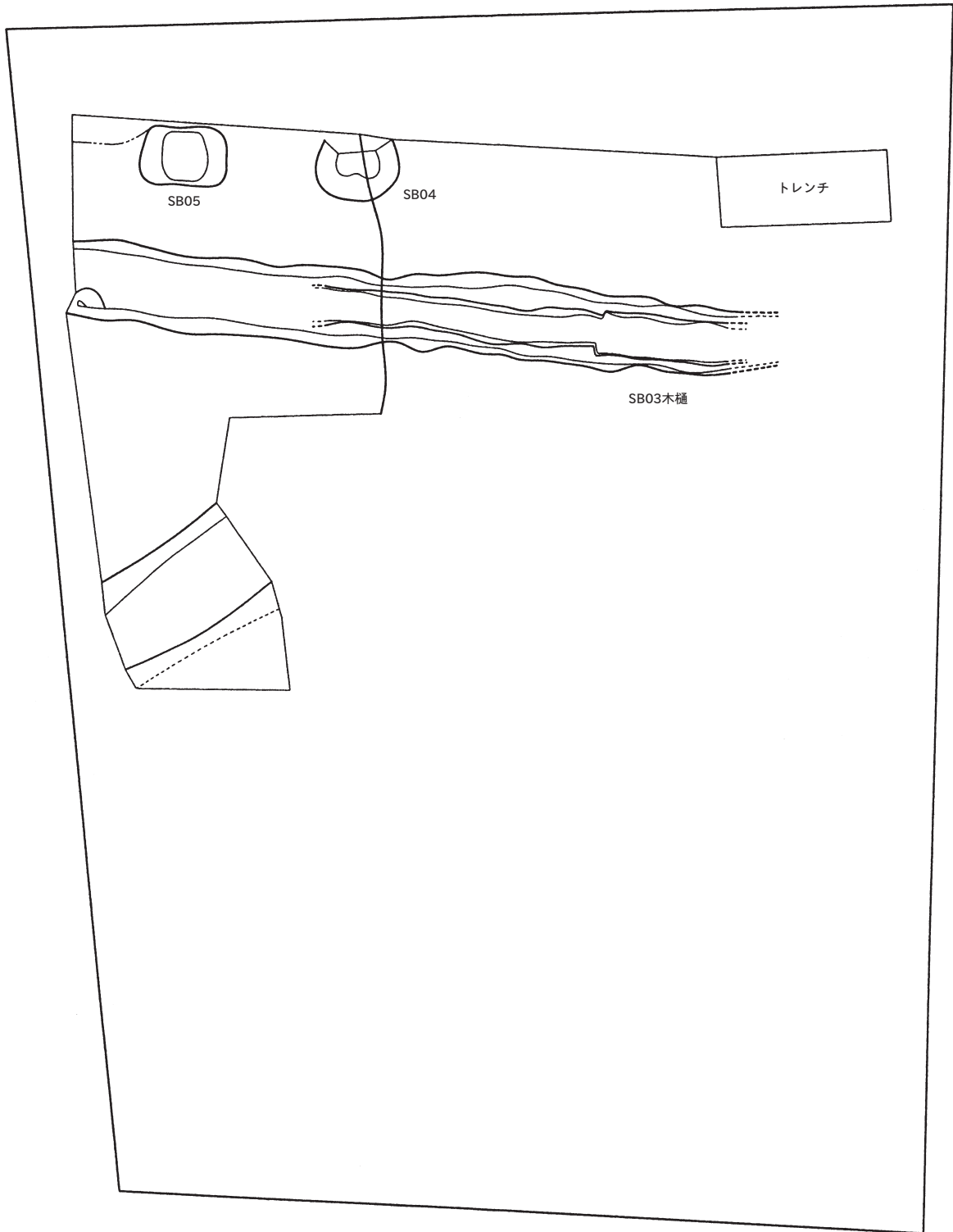


図3 D面遺構分布図

3. 薬学部系総合研究棟地点（2004年度）1次調査



写真1 基本層序



写真2 B面



写真3 C面



写真4 D面



写真5 SD03遺構



写真6 土手状遺構



写真7 遺跡遠景

## 4. 東京大学薬学部系総合研究棟地点(2004年度)2次調査

### はじめに

本文は『東京大学施設部建築課提出文書東京大学薬学部系総合研究棟地点(2004年度)2次調査埋蔵文化財調査中間報告書1』の内容を加筆、修正したものである。本文の内容は、02年調査、薬学部図書館、経済学部等の周辺遺跡との照らし合わせと、絵図・古文書等と遺構の検討によって、修正する場合がある。最終的に年報、小論等を経て本報告を刊行する。

発掘調査は東京大学が予定する東京大学薬学部系総合研究棟建設に伴うものである。2002年度の調査(以下02年調査)では、加賀藩邸に関連する、御殿、工事に伴う道路、江戸時代前期の建物跡、落穴等を確認した。今回の調査では、これらに関連する遺跡の存在が予想された。2004年度1次調査は、薬学部系研究棟解体工事に伴う搬入路を確保するための調査であったため、調査深度は、現地表面までであった。2次調査の対象は、1次調査で調査できなかった西側部分の現地表面以下と、新たに増築される薬学部系総合研究棟建設予定地部分である。

発掘調査の指導は原祐一、堀内秀樹が行った。調査面積は、450m<sup>2</sup>、調査期間は、2004年11月17日から2005年2月4日である。整理作業は、発掘調査と並行して行った。遺跡略号は「YG04 II」である。

出土した遺物の自然化学分析の成果は、東京大学原子力総合研究センターMALT平成16年度下半期共同利用採択課題「東京大学構内出土資料の年代測定」研究代表者 原祐一、共同研究者 松崎浩之、中野忠一郎、ガラスのPIXE法による材質分析は、平成16年度下半期共同利用採択課題「遺跡出土のガラス製品の材質分析」研究代表者 原祐一、共同研究者 小泉好延、中野忠一郎、松崎浩之の成果による。土壌の分析、樹種同定は株式会社パレオ・ラボに委託した。

### 1. 調査の方針、公開、遺構数・遺物量

#### 1. 調査の方針

調査対象は、東京大学史の観点から、明治時代も対象とした。また、江戸時代から明治時代の遺構遺物も、技術史、産業考古学の観点から出土遺物として取り扱う。

遺跡の記録は、記録保存の観点から全遺構が対象であるが、本報告を考慮して掲載遺構を重点的に調査、記録した。それ以外の遺構については必要最低限の記録に止めた。

#### 2. 現場内の安全管理

発掘現場内の掘削深度など安全に関する点については、清水建設、加藤建設と協議し調査を進めた。やむを得ない場合を除いて土木工事の安全基準に従った。今回の調査では無事故で調査を終了することが出来た。

#### 3. 調査の一般公開

発掘調査は、文化財保護法の理念に基づき内外に対してオープンとした。2003年度調査の成果、発掘調査速報を掲示し東京大学構内の埋蔵文化財の理解に勤めた。

#### 4. 遺構数・遺物量

調査の結果、縄文時代と推定される落とし穴、石器、加賀藩邸に関する生活面とこれらに伴う施設を検出した。暦年代を示す宝永火山灰は確認することができなかった。旧石器時代の遺跡は5ヶ所トレンチを設定し確認を行ったが、遺物の出土はなかった。主な遺構は江戸時代の道、石垣、土手、地下室1基、井戸1基、石垣1基、柵1基、溝で、この他小穴や小規模な土坑を検出した。

縄文時代落とし穴	1 遺構
江戸時代 地下室・石垣・溝・柱穴・小穴等	252 遺構
遺物 (陶磁器類・金属製品・縄文土器・石器・AMS14C年代測定試料等)	収納箱 10 箱

第1表 出土遺構数・遺物量一覧（I・II調査）

## II. 考古学と環境安全

### 1. 土管内汚染土壌の処理

02年調査では調査区内から重金属を含む汚染土壌が確認された。汚染土壌の処理は、東京都、文京区の指導の下、東京大学環境安全研究センターとこれにあたった。その結果、周辺に汚染を広げることなく、発掘調査を安全に終了することが出来た。2004年度調査では、事前に土壌調査を行い、サンプル採集地点の安全が確認された。調査を開始するにあたって、万が一汚染土壌が確認された場合、迅速な対応が行なえるよう施設部、環境安全研究センターと事前に打合せを行なった。また、調査従事者に対し汚染土壌汚染が確認された場合の対応について説明を行った。

2002年度調査時、今回の調査に該当する部分の汚染土壌はすべて除去されていたため、1次調査では汚染の可能性のある土壌等は発見されなかったが、2次調査では汚染土壌が入った土管と試薬瓶が出土した。これらが発見された位置と深度は想定外であったため、一部区域で調査を中断し、文京区の指導の下、東京大学環境安全研究センターと処理にあたった。発掘調査の工程を変更せざるをえなかったが、汚染土壌の拡散は無く、発掘調査を安全に進めることができた。

### 2. 整理作業員の安全確保

アセトンなど有機溶剤は遺物の接合作業に使用されるが、アセトン使用の弊害として(1)頭痛、(2)けん怠感(3)めまい、(4)貧血、(5)肝機能障害が知られる。しかし、遺跡調整理作業の現場において、その際に、防毒マスクを使用せず、換気が不十分な環境下で作業が行われているのを実見したことがあり、遺跡調査の現場では、有機溶剤使用時に作業従事者の十分な安全確保が行われているとはいえない。本調査では、作業時の安全を確保のためアセトンを使用する際、火気厳禁とした。作業従事者には防毒マスクとゴム手袋の着用を義務付け、室内の換気を十分行った。

### 3. 遺物の取り扱い

これまで東京大学本郷構内で出土した江戸時代の金属鏡は、銅と砒素等の合金、いわゆる「砒素青銅」であることが、科学分析の結果から明らかになっている。江戸時代の出土遺物の中には、金属鏡のように、現代では購入や使用に規制がある材料を用いているものがあることから、金属製品の取り扱いについては、特に注意した。

### Ⅲ. 薬学部総合研究棟地点(2004年度)1次2次調査の成果と課題

#### 1. 自然化学分析

自然化学分析は、A面焼土、E面で出土した焼土に含まれる炭化材、灯明皿の口縁部に付着した煤のAMS14C年代測定、キセル、渡来銭(真鍮貨幣)のPIXE分析、関東ローム層の鉍物分析を予定している。

AMS14C年代測定の成果は、東京大学原子力総合研究センターMALT平成16年度下半期共同利用採択課題「東京大学構内出土資料の年代測定」研究代表者 原祐一、共同研究者 松崎浩之、中野忠一郎の成果による。ガラスのPIXE法による材質分析は、同平成16年度下半期共同利用採択課題「遺跡出土のガラス製品の材質分析」研究代表者 原祐一、共同研究者 小泉好延、中野忠一郎、松崎浩之の成果による。

#### 2. 確認した生活面と遺構、遺物

確認された生活面は、A面・B面・C面・D面・E-1~5・F面以下である。A面では地下室、礎石、B~D面では砂利を用いて舗装した道路面、建物区域E~F面では、直行する南北の道と東西の道を検出した。E面以下では盛土、削平とそれに伴う施設の造成が繰り返し行われており、現在区域間の対応関係を検討中である。

##### ・A面(SD02、SD12、SD09、SU10他)第1図

A面の遺構軸は、02年調査で確認された、宝永火山灰降灰以降の「本郷通りの軸」である。A面は平坦に整地されていた。A面上層と排水溝SD02遺構の覆土から、火災に伴う瓦礫、焼土が出土した。瓦礫内には瀬戸美濃系陶器の貧乏徳利が含まれ、瀬戸美濃系磁器は出土していない。焼土層の年代は、明治元年(1868年)と考えられるが今後、検討を行いたい。

##### 地下室SU10遺構

SU10遺構は、ローム土の盛土を掘削して構築されている。四方を板材で囲い、杭で固定し盛土の崩落を防いでいる。地下室の床には板材が敷かれていたと考えられる。出土遺物には瀬戸美濃系陶器の貧乏徳利が含まれ、瀬戸美濃系磁器は出土していない。02年調査で検出した地下室と同じ構造であった。

第2図は02年調査の地下室群とSU10遺構、現存する加賀藩の石垣と東御門跡の位置関係を示した図である。現存する加賀藩の石垣と東御門跡を測量し、調査地点を重ね合わせ、「加賀藩本郷邸図」(1840-1845年頃)との位置関係を検討すると、調査地点は「長局」に位置する。遺構の暦年代が明確でないため絵図との比較は単純にできないが、地下室は、絵図上での建物が存在しない区域に分布していた。

##### ・B・C・D面(SD03、SB04、SB05他)第3図

B~D面の遺構軸は、宝永火山降灰前の「春日通りの軸」の軸である。平坦に整地されたA面と異なり、砂利とローム土を硬く突き固めた路面は病院方向に傾斜していた。02年調査で確認された建築資材の運搬のために造成された道路と関連する生活面と考えられる。

##### 排水溝SD03遺構

SD03遺構は、調査区東の土手(E面)をローム土で埋めて、平坦にした後、溝を掘削し木樋を埋設していた。板材は腐食して失われていたが、板材の痕跡が空洞として残っていた。下面に板材の痕跡は認められず、厚さ一寸(約3cm)の板材を「Π」形に組み埋設していたと考えられる。排水は地下に浸透させていたと考えられる。板材の固定には約10cmの釘が大量に用いられており、「Π」形



の木樋を埋設することを考慮し、堅牢に組まれていたと考えられる。

第4図は、元禄16年（1703）の火災によって消失した建物跡（02年度調査）である。第5図は、第6図の下層で検出したSD162遺構とSD03遺構位置関係を示したものである。SB162遺構はSD03遺構と同じ遺構軸で、木樋の構造と埋設方法が同じであった。以上から、D面は元禄16年（1703）以前の生活面と考えられる。

#### ・E面（SB16、SD17、SB18、SK25、SB45、SK51、SE147他）第6図

E面の遺構軸は、宝永火山降灰前の「春日通りの軸」である。直行する南北の道と東西の道を検出した。道は砂利、砂、粘土を含んだ土で硬く突き固めており、数面が確認された。東西の道の北側は柵（SD17遺構）で区画され、東西の道の南側は、石垣SB45遺構で区画されていた。南北の道の東側はローム層を削平した土手があり、道との高低差は北側で約2mであった。土手の土留めから1640年代に製造された肥前系磁器が出土した。土手の南側で、植栽痕SK51遺構を検出した。

柵SD17遺構内には、三寸四方の柱が一間間隔で埋められていた。柵の北側の盛土はローム土を主体とし、道のように硬くつき固められた生活面ではない。また、遺構の分布は薄い。SB16遺構、SB18遺構、SK25遺構はSD17遺構と直行する軸で、SB18遺構では、SD17遺構と同じ柱穴を検出した。

石垣SB45遺構の南側は道より一段低く、高低差は約0.5mであった。下段は黒ボク土を主体とする盛土によって造成された生活面で、井戸、柱穴列、土坑などを検出した。これらの遺構は、02年調査の「江戸時代最下生活面」建物跡を検出した生活面の盛土と同様の土質で、検出した遺構は建物跡に関連すると考えられる。SB45遺構の南側を「建物区域」とした。第7図に建物跡と道の位置関係を示した。SB45遺構の下層では、杭列、溝などが検出しており、区画の施設は作り替えが行われたと考えられる。

#### ・最下層

最下層はローム面の遺構である。土坑、小穴などを検出した。遺物はほとんど出土していない。遺構は、主にE層の土手の下段と建物区域に分布する。道の部分では未確認である。E面区画と遺構分布が関連することから、ほとんどの遺構が江戸期に構築されたと考えられる。

#### 縄文時代の落とし穴

SK16遺構は縄文時代の落とし穴と考えられる。断面形状はY字を呈し、規模は長さ2m、深さ1mを測る。年代を検討することができる遺物は出土していない。02年調査でも、同様の断面の遺構を検出した。

#### まとめ

2003年度調査との対応関係は、A面が「宝永4年（1707年）以降の生活面」、D面が「元禄期」に火災を受けた生活面下層に該当すると考えられる。今後、02年調査、薬学部図書館、経済学部等の周辺遺跡との照らし合わせを行う。絵図・古文書等と遺跡との検討を行ったうえで、AMS14C年代測定の結果等、生活面の暦年代を明確にし、年報、小論等を経て加賀藩邸の具体的な構造、土木工事の規模を検討していきたい。

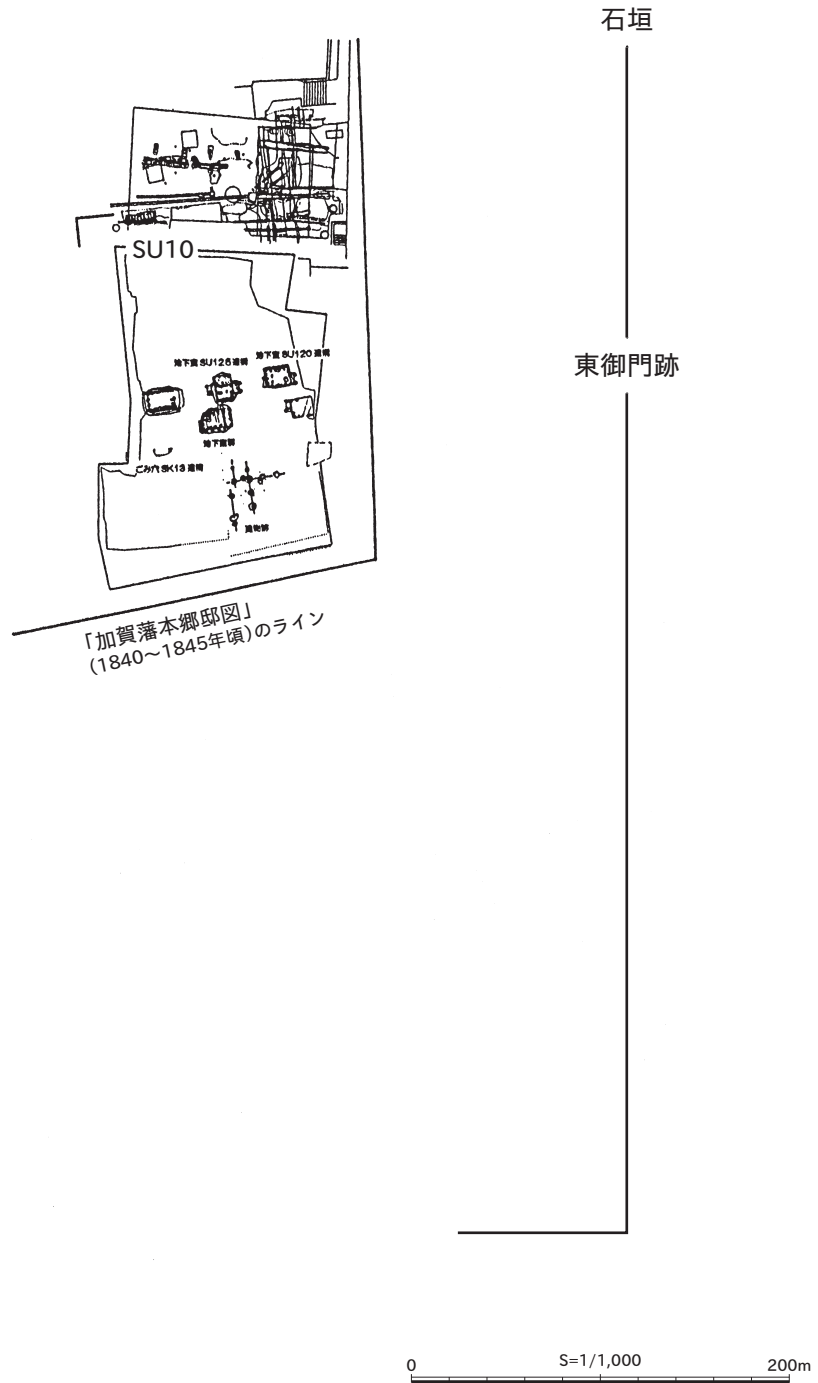
遺物については、金属製品、磁器の上絵付のPIXE分析を行う予定である。分析結果と文書の検討から、海外の技術と江戸時代の国内の製造技術の関連を解明するためのデータとなることが期待される。

参考文献

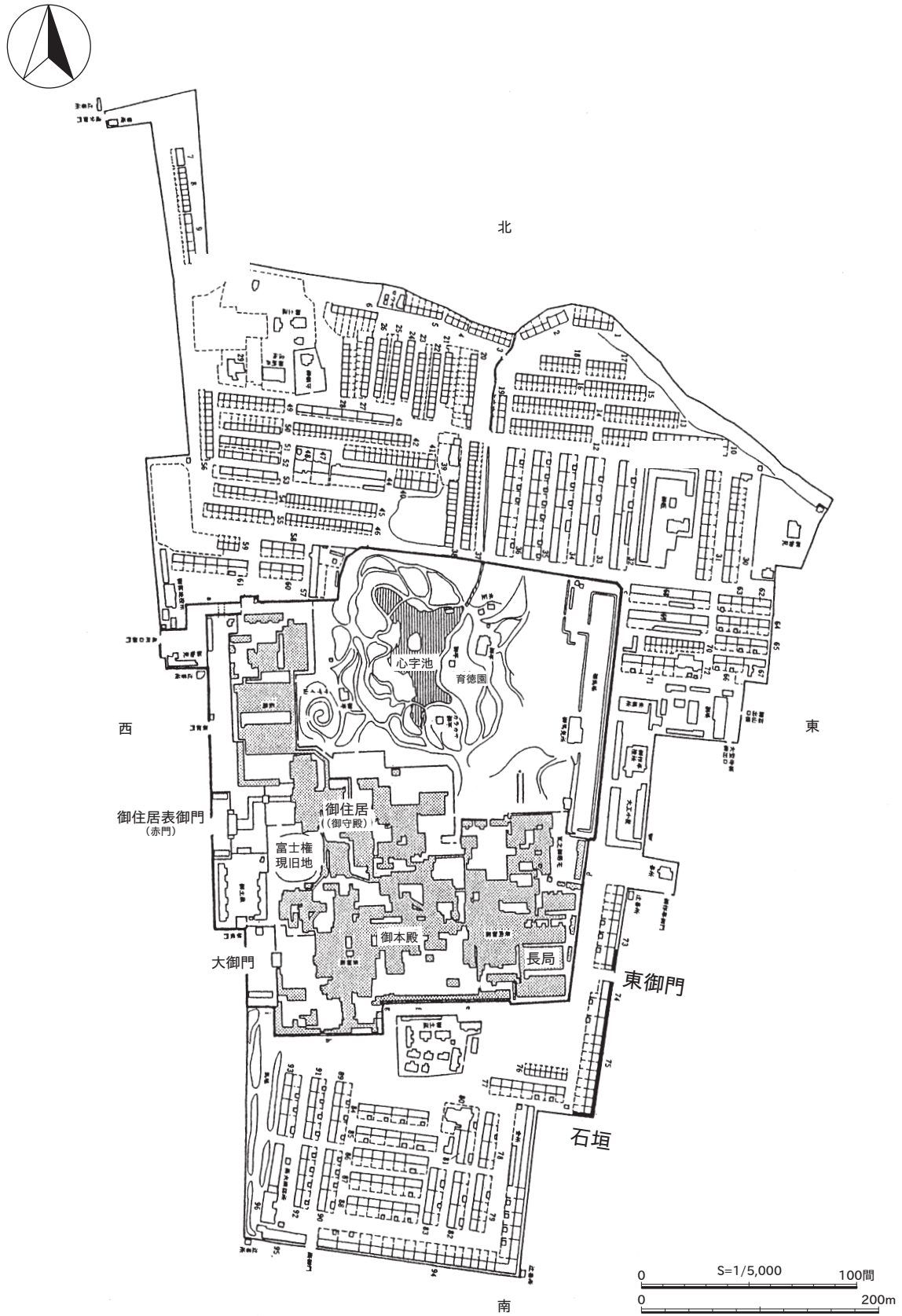
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002 『東京大学薬学部系総合研究棟地点(2002年度)発掘調査中間報告書1』  
(東京大学施設部提出文書)
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002 『東京大学薬学部系総合研究棟地点(2002年度)発掘調査中間報告書2』  
(東京大学施設部提出文書)
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2003 『東京大学薬学部系総合研究棟地点(2002年度)発掘調査中間報告書3』  
(東京大学施設部提出文書)
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2003 『東京大学薬学部系総合研究棟地点(2002年度)発掘調査中間報告書4』  
(東京大学施設部提出文書)
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2003 『東京大学薬学部系総合研究棟地点(2002年度)発掘調査中間報告書5』  
(東京大学施設部提出文書)
- 原 祐一 2003 「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部総合研究棟(2002年度) 富士山宝永火山灰の出土  
状況」考古科学シンポジウム世話人会、國學院大學考古学研究室『第4回考古科学シンポジウム』  
PP.67-71
- 藤井敏嗣、吉本充宏、安田敦、金子隆之 2002 「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部系総合研究棟地点(2002  
年度) 発掘の火山灰の同定」『中間報告2』
- 宮地 直道 2002 「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部系総合研究棟地点(2002年度)で発見された宝永ス  
コリアの層序と粒度特性」『中間報告2』
- 藤井敏嗣、宮地直道、吉本充宏、安田敦、金子隆之 2003 「旧加賀藩屋敷における宝永火山灰の発見とそ  
の火山学的意義」考古科学シンポジウム世話人会、國學院大學考古学研究室『第4回考古科学シンポジウム』  
PP.77-82
- 松崎浩之、原祐一 2003 「東大宝永火山灰層前後のC-14年代測定」考古科学シンポジウム世話人会、國  
學院大學考古学研究室『第4回考古科学シンポジウム』PP.73-75



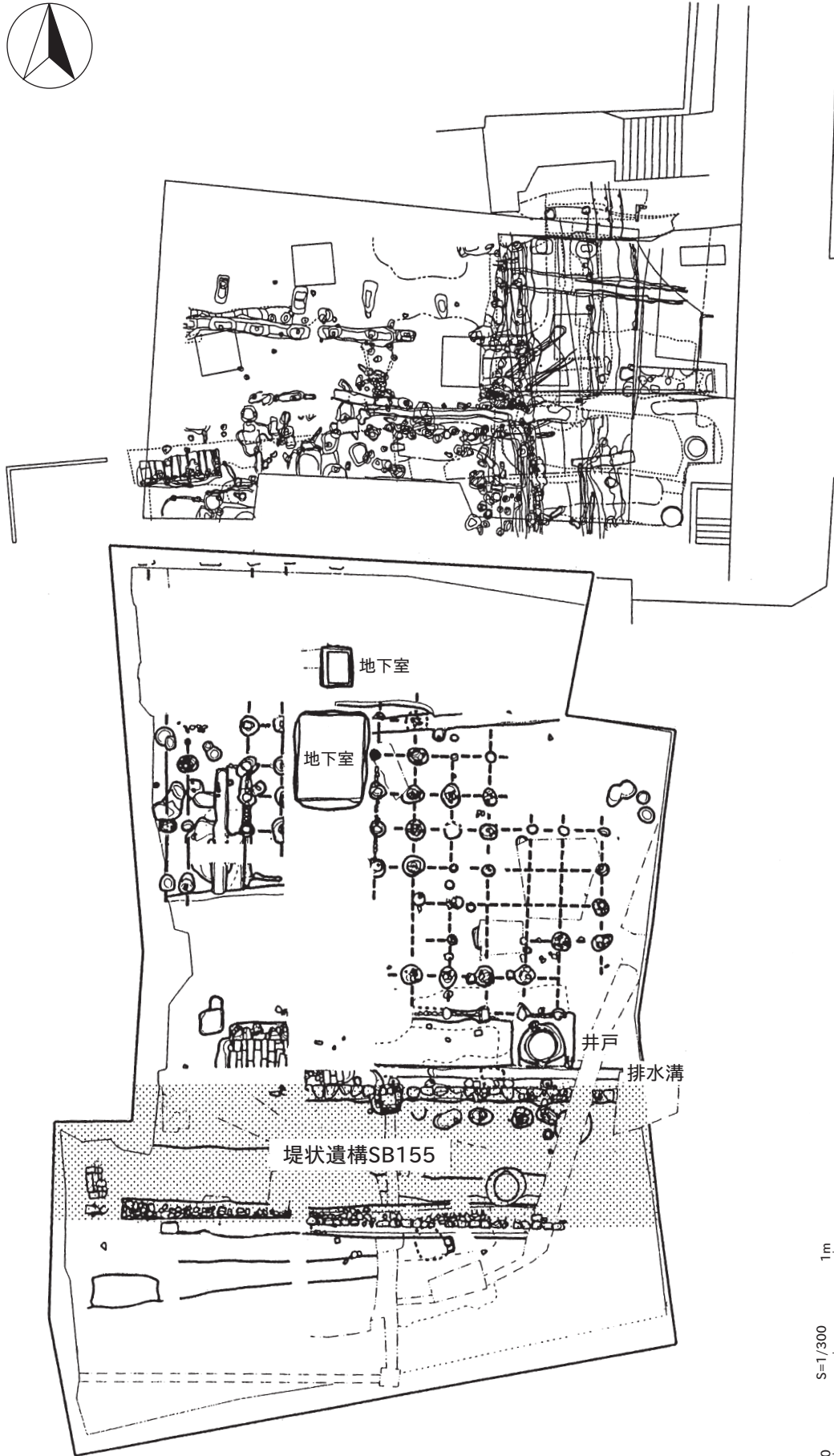
第1図 A面、C面、D面の遺構



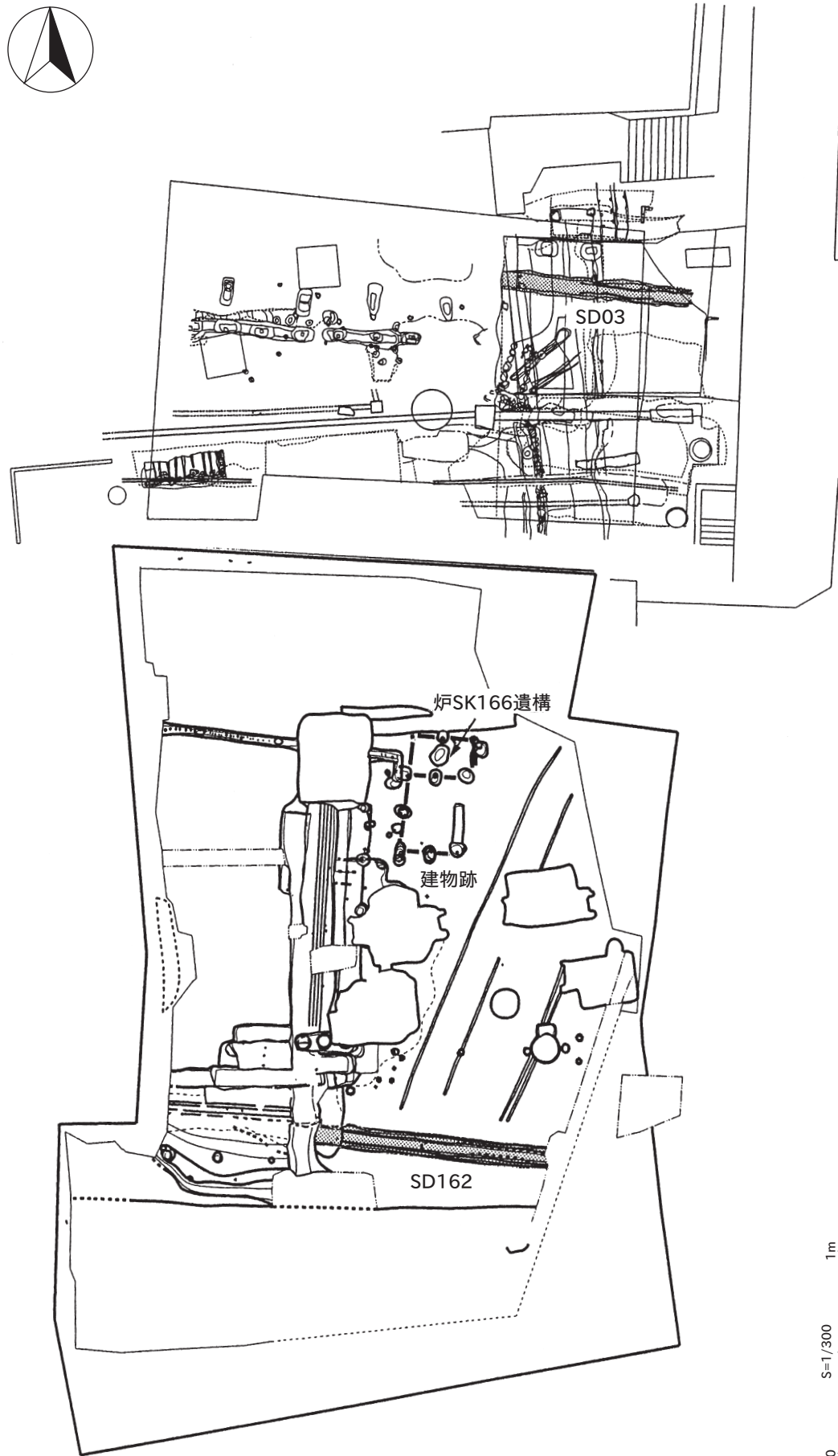
第2図 遺跡と現存する加賀藩の地境、東御門跡の位置関係  
02年度中間報告書4掲載図より作成 石垣、東御門跡は現在の測量による



第3図「加賀藩本郷邸図」(1840~1845年頃)長局・東御門の位置関係  
 「東京大学構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点」掲載図、  
 西秋良宏編 2000『東京大学コレクションX加賀殿再訪』掲載図より作成



第4図 元禄16年(1703)の火災により消失した建物跡  
02年度中間報告書5掲載図により作成

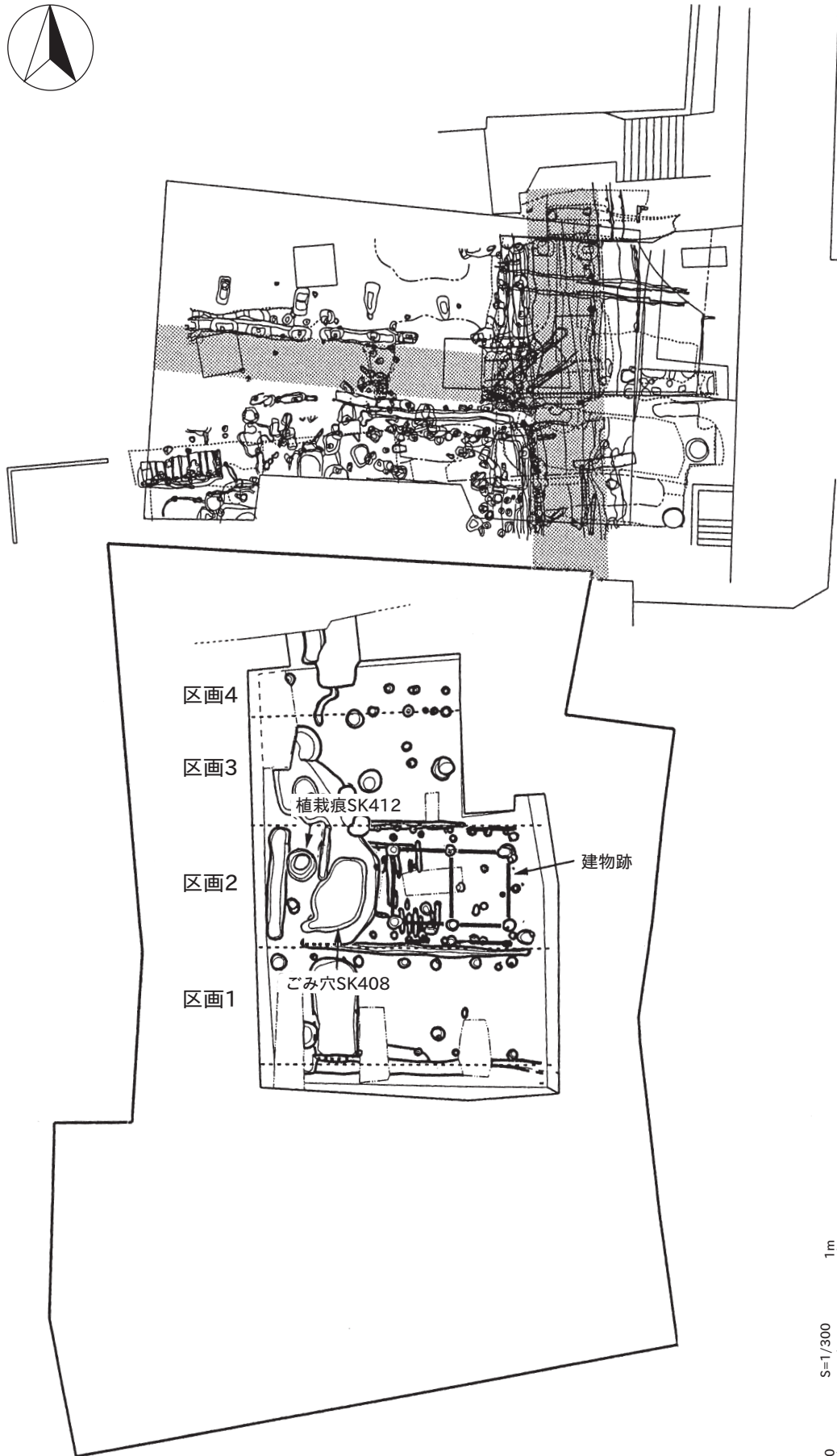


第5図 SD03遺構（C・D面）、SB162遺構の位置関係  
調査室年報4掲載図より作成



第6図 E面(1600年代と推定)の区画復元





第7図 E面の区画と2002年度調査建物跡の位置関係  
調査室年報4掲載図より作成



写真1 出土石器 NO.2



写真2 SK15 遺構 (落とし穴)



写真3 基本層序



写真4 関東ローム層のサンプリング



写真5 A区北壁東西セクション



写真6 A面



写真7 SU10 遺構 (地下室)



写真8 C面



写真 9 D 面



写真 10 A 区西壁南北セクション



写真 11 SB45 遺構 (石垣)



写真 12 道・土手・柵 (SD17 遺構)



写真 13 SD17 遺構

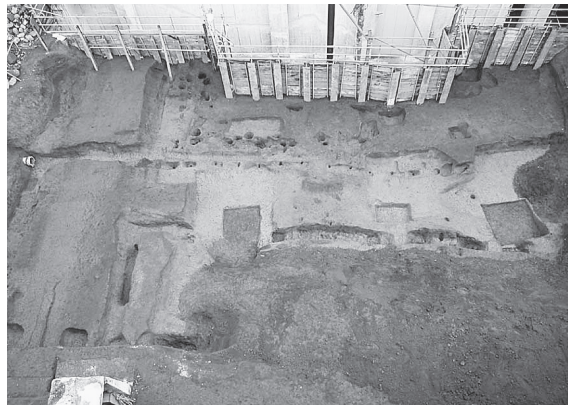


写真 14 E 面



写真 15 建物区域柱穴列



写真 16 最終面



写真17 02年度調査建物跡

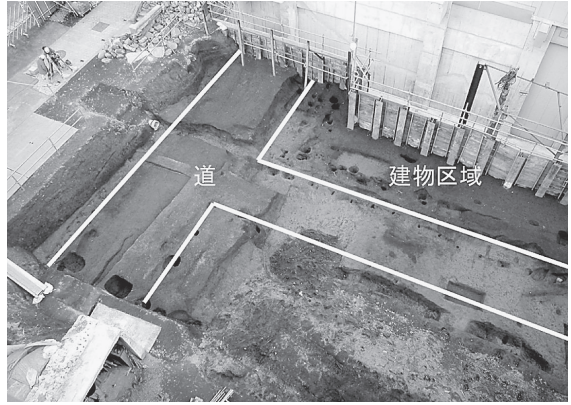


写真18 建物区域と道の位置関係



写真19 発掘調査作業風景



写真20 遺物洗浄作業



写真21 遺物注記作業



写真22 遺物撮影作業



写真23 写真整理作業

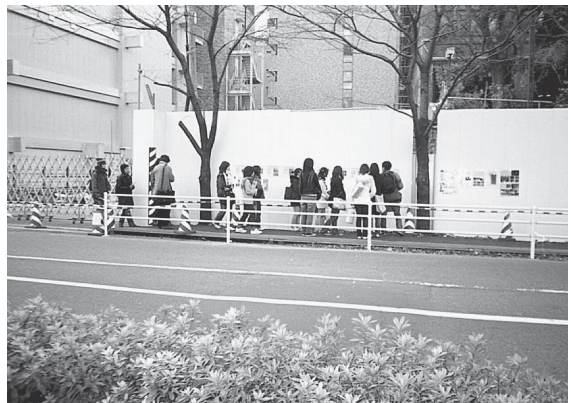


写真24 調査速報の掲示



写真 25 A 面上層焼土出土 (収納箱 3)



写真 26 SU10 出土磁器 (収納箱 3)



写真 27 E 面土手土留出土 (収納箱 1)



写真 28 E-1 層出土 (収納箱 1)

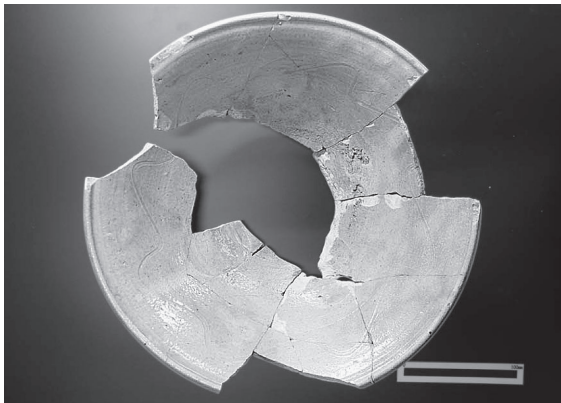


写真 29 E-1 層出土陶器 (収納箱 1)

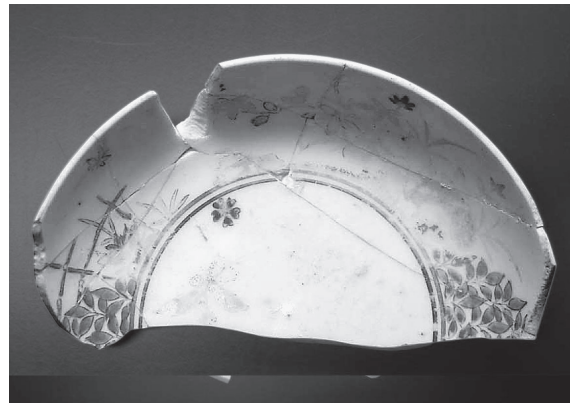


写真 30 SB16 遺構出土磁器 (収納箱 3)

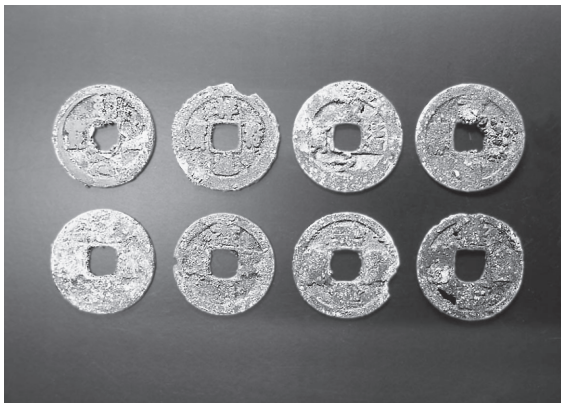


写真 31 SK123 遺構出土真鍮貨幣 (収納箱 3)

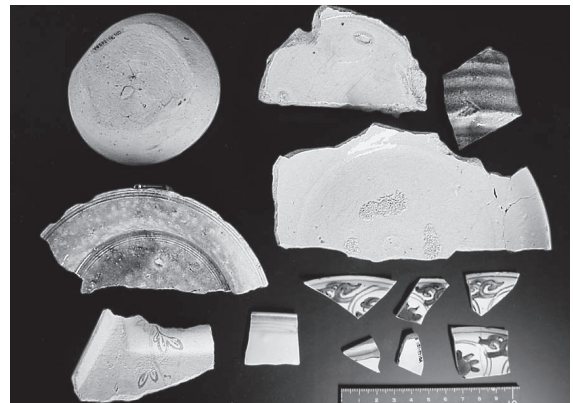


写真 32 02 年度調査建物跡 SE450 出土遺物

## 5. 駒場コミュニケーションプラザ建設予定地点発掘調査略報

調査期間：平成17年4月22日（金）～7月21日（木）

調査面積：4,327 m<sup>2</sup>

### 1. 調査にいたる経緯

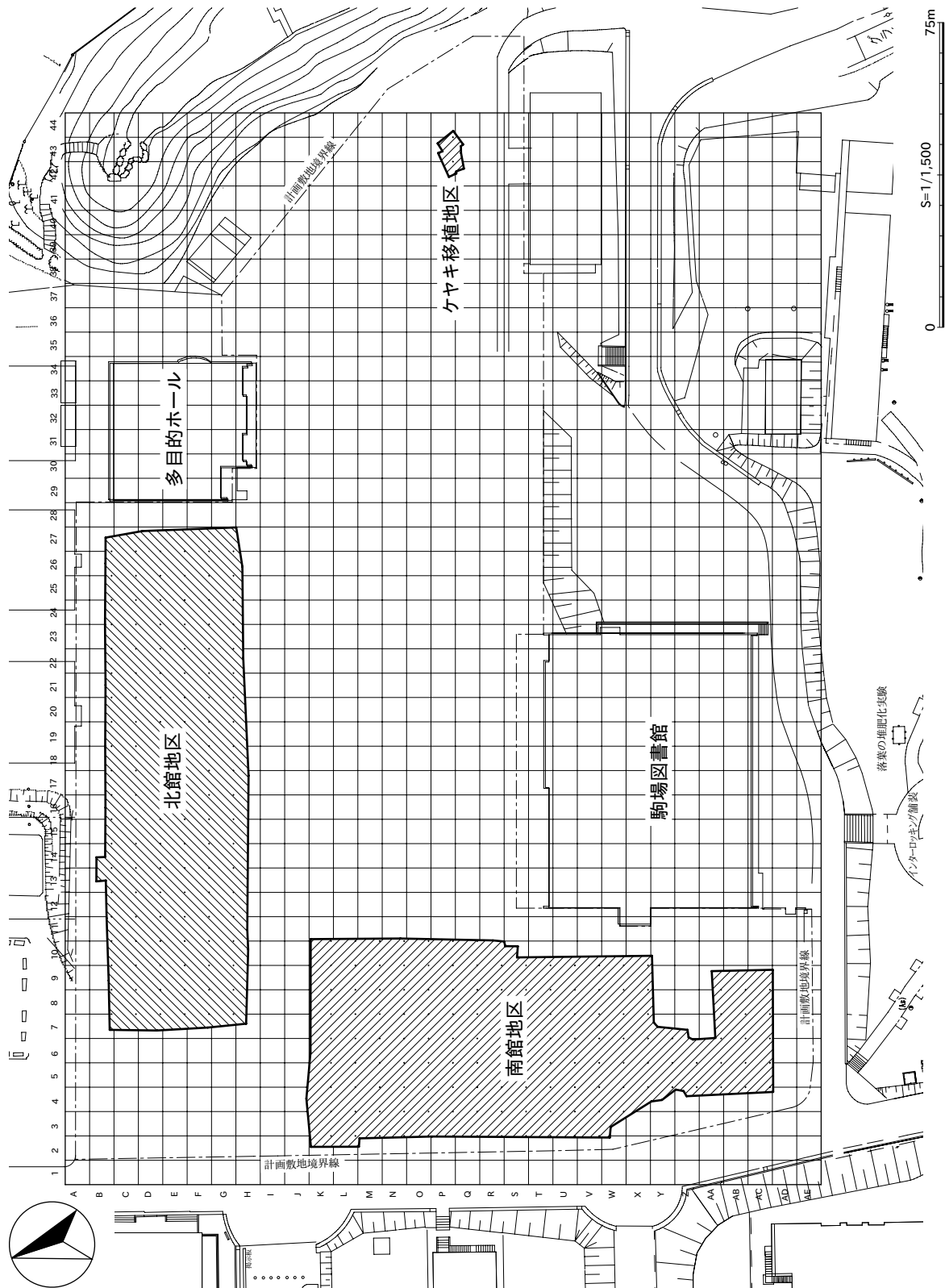
教養学部では、目黒区駒場3-8-1、駒場Iキャンパス内駒場寮跡地に「駒場コミュニケーションプラザ」の建設を計画しており、平成17年度よりPFI事業として、実施されることとなった（第1図）。

本地点は、周知の遺跡としては認定されていなかったが、南側に隣接する駒場図書館地点（東京大学埋蔵文化財調査室2004）では、旧石器時代の遺物集中地点が（立川ロームIV層）、さらにその南に谷を挟んだ数理学研究科II期棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室1999）では、平安時代の火葬墓、縄文時代早期末葉の遺構（炉穴、住居址）、旧石器時代の遺物集中地点（立川ロームIV層）などが検出されており、隣接する本地点でも遺跡が存在が予想された。そこで埋蔵文化財調査室では、事業計画との関連から平成15・16年の2回に分けて遺跡確認調査を行った結果、北館、南館、和館の3建設予定地区のうち、北館、南館建設予定地区において、縄文時代の遺構、遺物が確認されたため、目黒区教育委員会、本学施設部との協議の結果、当該地を対象に事前調査を行うこととなった。

また、前述した試掘調査では、旧石器時代に対して周辺遺跡の状況より立川ロームVI層までを対象としていたが、昨年度に実施された駒場ファカルティーセンター建設地点での事前調査において立川ロームIX～X層中の遺物集中が確認されたため（原ほか2004）、本調査と並行に立川ロームX層までの確認調査も実施した。

### 2. 調査の方法

調査は、現状の土地区画とほぼ平行になるようにグリッドラインを設定し、北西を基準として東西方向に算用数字を南北方向にアルファベットを4m間隔で付し、グリッドの北西角をグリッド名とした。また旧石器時代の試掘に関しては、基本的に8m間隔で2×2mのテストピットを設定したが、III層からの堆積が認められる箇所に関しては安全上に理由から、東西4m、南北2mのテストピットを設定しVI層上部まで調査を行い、それ以下は西側2×2mを調査対象としてX層上部まで試掘を行った。



第1図 調査地点の位置

### 3. 調査地点の現況と旧地形

#### (1) 調査地点の現況

本地点は駒場寮解体により現況は更地になっている。調査区東側には通称「一二郎池」と呼ばれる湧水池から南方に開く谷が、また南側には図書館地点の調査で明らかにされた東へ開く浸食谷が存在し、本地点はこの2つの谷に囲まれた舌状台地の奥部にあたると推定される。現況では駒場寮建設のために行われた造成事業によって、北館地区東端と隣接する多目的ホールを境に1m近い段差が生じていることから、元来東へ下る緩斜面であったことをうかがい知ることができる。本調査区内には駒場寮基礎の解体による攪乱が大きく入っていることが試掘調査によっても明らかにされている。今回の表土掘削によって、北館地区ではDライン以南全体が北寮基礎によって攪乱を受けており、その範囲では基本的に立川ロームV層以上は存在しない。南館地区ではOライン、6ライン、Tラインで囲まれた区域が、中寮基礎によって立川ロームVI層以上が削平されている。さらにXライン、6ライン、ACラインで囲まれた区域が、南寮基礎によって攪乱を受けているが、この部分は図書館から続く谷のほぼ中央部にあたり、浸食により立川ロームは堆積していない。また中寮と南寮間も攪乱を受け、立川ローム層は全て削平されている。以上、大規模な攪乱の影響を受けている状況の中で、旧石器時代の遺物および、縄文時代の遺物、遺構が検出された。

#### (2) 基本層序

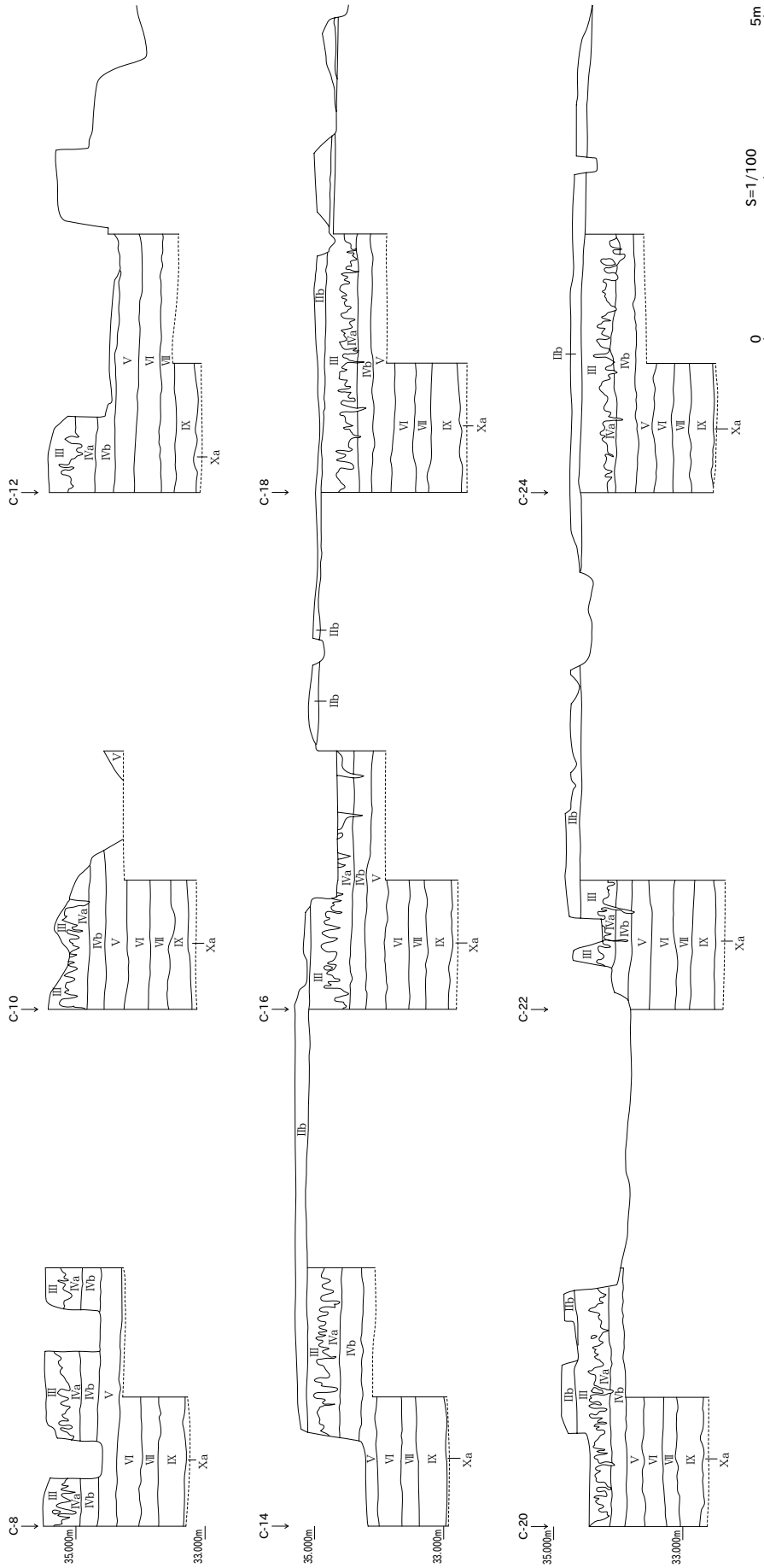
北館地区では、旧駒場寮北寮基礎による攪乱を受けていないDライン以北において、淡色黒ボク土に比定される沖積層が確認された(Ⅱb層)。ただし、14ライン以西では、近代以降の削平のため残存していない。Ⅱb層下には明瞭な漸移層はなく、Ⅱb層から漸移的に立川ロームⅢ層へ移行している。立川ローム層は東に向けて緩やかに傾斜していることが認められた(第2図)。

一方、南館地区は、北館地区から続く舌状台地の南緩斜面上にあたる。ローム層上での等高線は、5ライン付近から沢筋が北西方向へ湾曲していることを示している。本地区は緩斜面上に位置していることから、農学部(農科大学)期の耕作土と推定される黒色土(Ⅰc層)の遺存状態も良好で、その下層には部分的ではあるが、富士山の新时期テフラと推定される黒色スコリアを多量に含有する黒褐色土も認められた(Ⅱa層)。Wライン付近以南から、埋没谷の形成が認められ、沢の中心域のTライン付近では、最大約140cmの沖積層が堆積していた。この堆積土はⅡb層下にあたり、埋没谷の形成が縄文時代早期にはほぼ完了していたことが確認された。また、Wライン付近の南北断面観察から、谷の浸食により立川ローム第1黒色帯から第2黒色帯までが削平されていることが確認され、削平面の直上には部分的に立川ロームⅣ層が認められるものの、クラック帯を挟みソフトローム層が堆積している。このソフトロームもY～ABラインを通る沢の中心部には堆積していない(第3図)。

この様相から、本地点周辺は、立川ロームⅦ層段階までは緩斜面を擁する微高地を形成していたが、寒期に伴う海面低下を要因とした沢筋の浸食によって、ローム層が削平されていった。そして以降、再び谷部分の埋没が進行し、縄文時代前期段階までには、わずかに沢の面影を残す状況まで埋没したものと推定される。

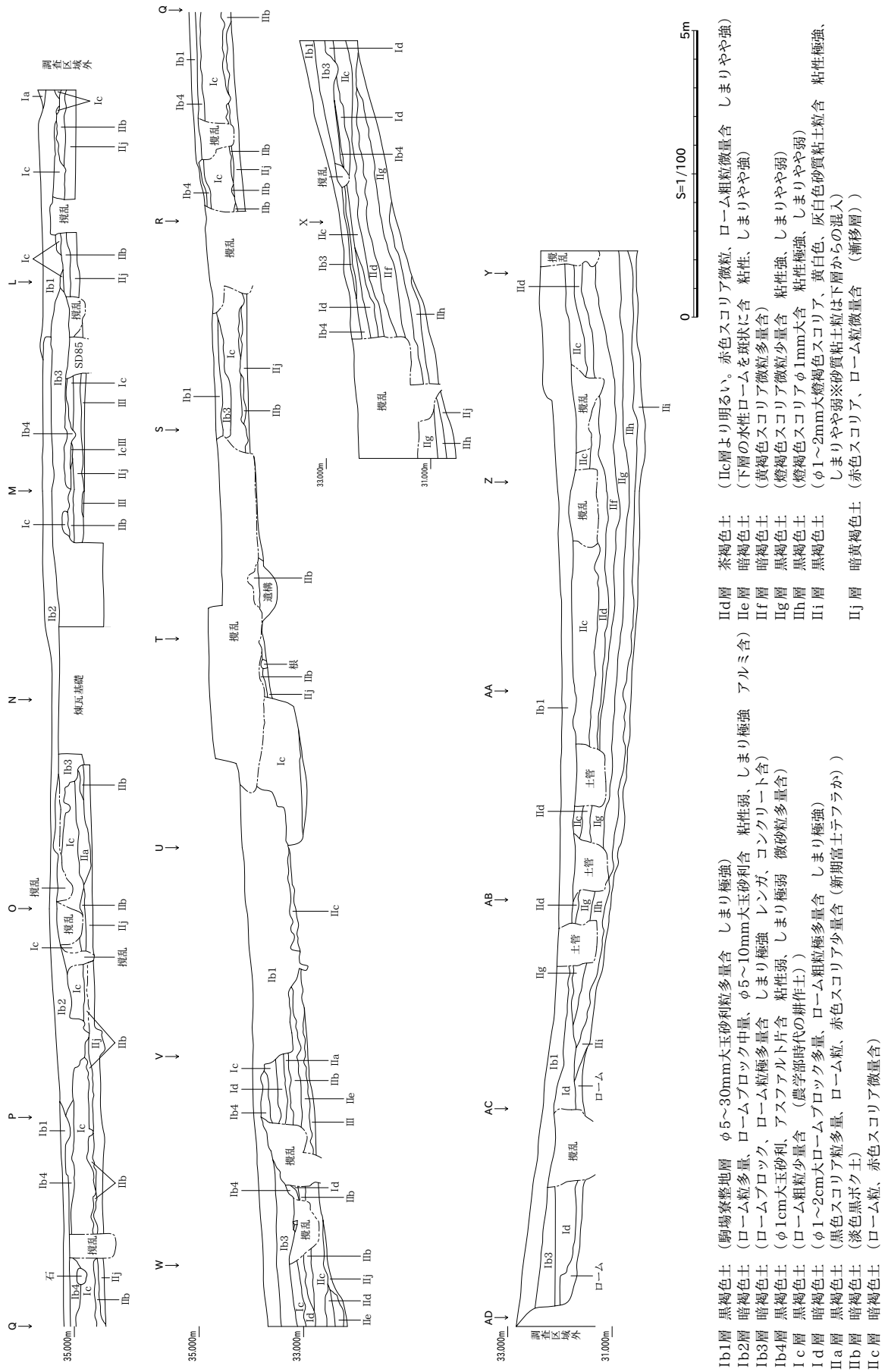
本地点は、前述したように、攪乱や浸食谷の影響で、立川ローム層が削平されている部分が多く、旧地形の様相を立川ローム上位面で押さえることが難しく、そのため全区域に存在する立川ロームX





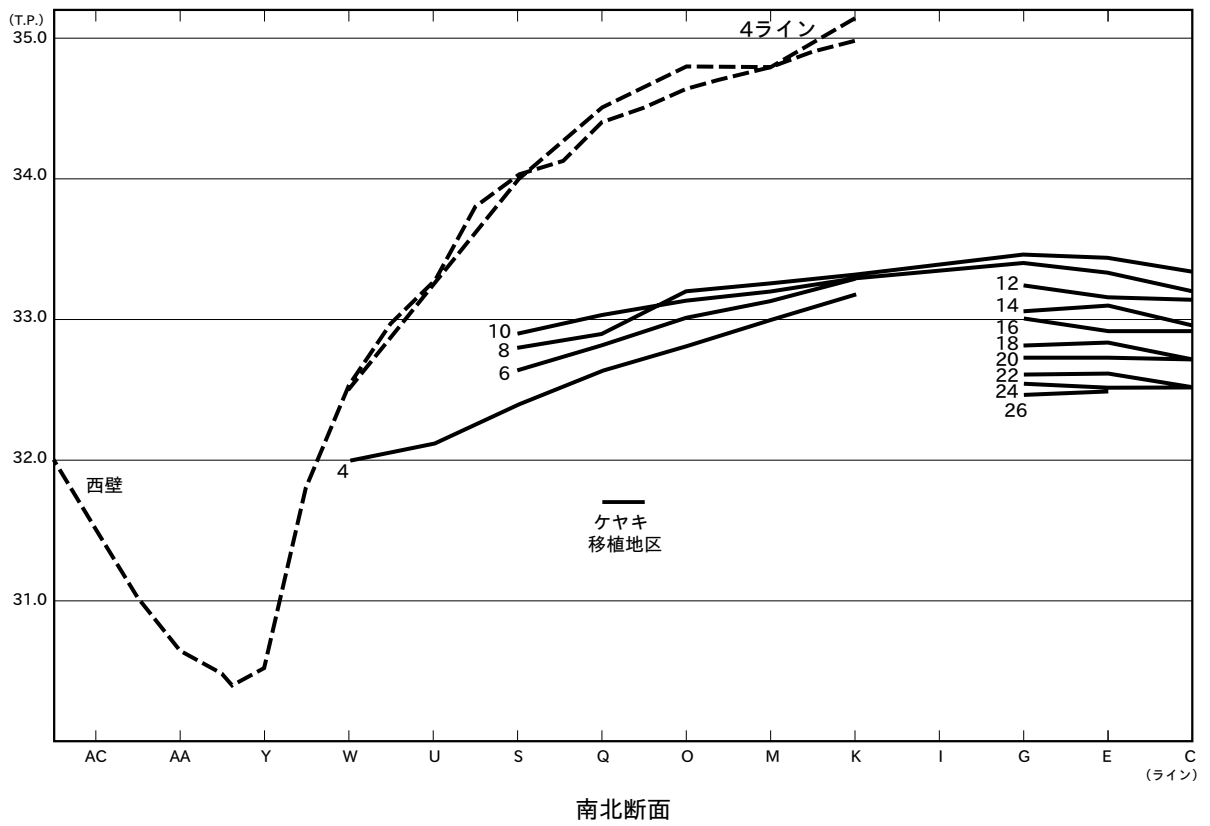
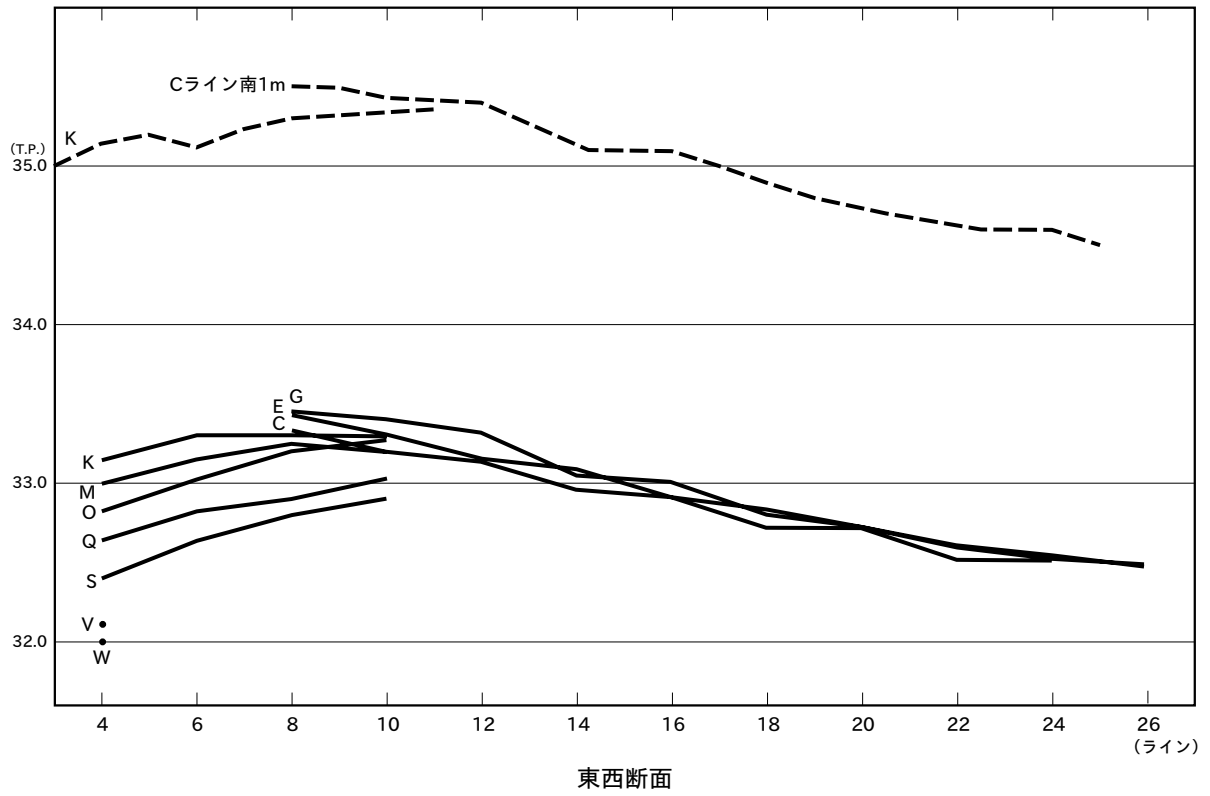
- IIb層 暗褐色土
- III層 暗黄褐色ローム層 (φ10~20mm大の褐~暗黄褐色塊を斑状に含有)
- IVa層 暗黄褐色ローム層 (ソフトローム φ1mm大黒色、赤色スコリア微量含粘性、しまりやや強)
- IVb層 暗黄褐色ローム層 (φ1mm大赤色スコリア多量、粘性やや強、しまり極強)
- V層 黄褐色ローム層 (φ1~3mm大黒色スコリア多量、φ1mm大赤色スコリア中量含粘性やや強、しまり極強)
- VI層 褐色ローム層 (第1黒色帯 φ1mm大黒色スコリア極多量、φ1mm大赤色スコリア多量、φ1mm大灰褐色スコリア微量含粘性強、縮まり極強)
- VII層 明褐色ローム層 (AT層 φ0.5~1mm大黒色スコリア極多量、φ1mm大赤色スコリア中量、φ1~2mm大橙色パミス中量、φ1mm大灰褐色スコリア少量含粘性強、しまり極強)
- VIII層 暗黄褐色ローム層 (第2黒色帯上部 明褐色ロームが斑状に混入、φ1mm大黒色スコリア多量、φ1mm大赤色スコリア少量、φ1mm大灰白色スコリア微量含粘性強、しまり極強)
- IX層 暗褐色ローム層 (第2黒色帯下部 φ1mm大赤色スコリア、黄色スコリア少量、φ1mm大赤色スコリア微量含粘性、しまり極強)
- Xa層 黄褐色ローム層 (φ1mm大黒色スコリア、φ1mm大赤色スコリア少量、φ1mm大赤色パミス微量含粘性、しまり極強)

第2図 北区Cライン南1m東西セクション



第3図 南区西壁セクション

- |      |       |  |
|------|-------|--|
| Ib1層 | 黒褐色土  | (駒場寮整地層 φ5~30mm大玉砂利粒多量含 しまり極強)                       |
| Ib2層 | 暗褐色土  | (ローム粒多量、ロームブロック中量、φ5~10mm大玉砂利含 粘性弱、しまり極強)            |
| Ib3層 | 暗褐色土  | (ロームブロック、ローム粒極多量含 しまり極強 レンガ、コンクリート含)                 |
| Ib4層 | 黒褐色土  | (φ1cm大玉砂利、アスファルト片含 粘性弱、しまり極弱 微砂粒多量含)                 |
| Ic層  | 黒褐色土  | (ローム粗粒少量含 (農学部時代の耕作土))                               |
| Id層  | 暗褐色土  | (φ1~2cm大ロームブロック多量、ローム粗粒極多量含 しまり極強)                   |
| Ia層  | 黒褐色土  | (黒色スコリア粒多量、ローム粒、赤色スコリア少量含 (新期富士テフラカ))                |
| Iib層 | 暗褐色土  | (淡色黒ボク土)   |
| IIc層 | 暗褐色土  | (ローム粒、赤色スコリア微量含)                                     |
| IIe層 | 茶褐色土  | (IIc層より明るい。赤色スコリア微粒、ローム粗粒微量含 しまりやや強)                 |
| IIe層 | 暗褐色土  | (下層の水溶性ロームを球状に含 粘性、しまりやや強)                           |
| IIf層 | 暗褐色土  | (黄褐色スコリア微粒多量含)                                       |
| Ilg層 | 黒褐色土  | (焼褐色スコリア微粒少量含 粘性強、しまりやや弱)                            |
| Iih層 | 黒褐色土  | (焼褐色スコリアφ1mm大含 粘性極強、しまりやや弱)                          |
| Iii層 | 黒褐色土  | (φ1~2mm大焼褐色スコリア、灰白色砂質粘土粒含 粘性極強、しまりやや弱※砂質粘土粒は下層からの混入) |
| Iij層 | 暗黄褐色土 | (赤色スコリア、ローム粒微量含 (漸移層))                               |



第4図 立川ローム層堆積状況 断面模式図 (破線はⅢ層上面、実線Ⅹ層上面)

層を対象に、旧地形のあり方を概観したい（第4図）。

本地点は東西方向に伸びる舌状台地上にあることから、北館地区においては、基本的に東へ向かう緩やかな緩斜面を形成しており、その斜度はソフトローム層上面とほぼ同様である。南館地区では、逆に西に向かう傾斜が認められる。これは、図書館地点から続く浸食谷が北西～北方向に向きを変えたため、その沢筋に向かう斜面の現れと位置付けられる。また、南北方向に関しては、南館地区では、前述した立川ローム層上面での様相と同様に、南向きの傾斜が認められるが、その斜度は台地縁辺に向かい大きく異なっており、その差からローム層を浸食して谷が形成された様子をうかがい知ることができる。北館地区では、調査区南端から北に向けて緩やかに傾斜しており、南館地区の状況も併せると、G～Hライン付近に尾根の中心が存在するものと推定される。

## 4. 検出された遺構と遺物

### (1) 北館地区

#### 遺構（第5図）

本地区は前述したとおり、Dライン南側が旧駒場寮北寮基礎によって大きく削平されていることから、遺構の調査はC～Dライン間のみが対象となった。遺構確認面は14ライン以東ではⅡb層が遺存していたため、その上下の2面、14ライン以西ではソフトローム上面1面であった。検出された遺構は近代、縄文時代に帰属する。

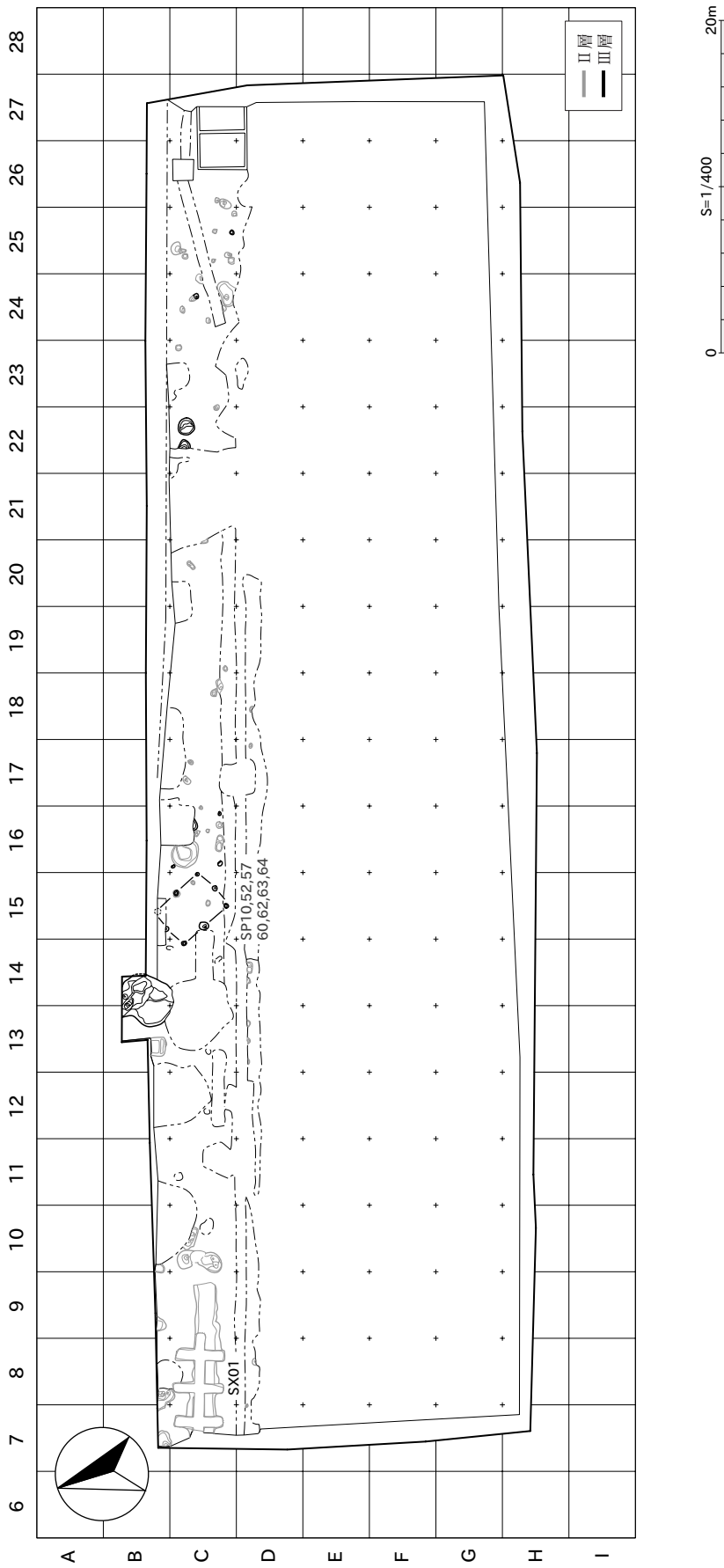
近代の遺構SX01は、東西に伸びる長方形土坑に直交する3箇所長方形土坑を等間隔で組み合わせた形態である。坑底直上付近から釘、木材片が出土し、何らかの基礎遺構であると推定された。同形態の遺構が農学部総合研究棟地点から検出されているが（東京大学埋蔵文化財調査室1997）、同地点は近代に第一高等学校の運動場の一角にあたり、それに関連する施設であると推定されている。残念ながら本遺構の構築年代を示す情報はなく、駒場寮との関係も不明である。その他の近代遺構は不整形遺構、ピットが散在する程度で本地区の土地利用を復元できる遺構はない。逆に言えばこの散漫とした様相が北寮裏手の土地利用を表出しているとも言えるだろう。

ソフトローム上面からは、縄文時代と推定されるピット、倒木痕などの遺構が十数基検出された。ピットはC15～16グリッドに集中し、そのうちSP10、SP52、SP57、SP60、SP62、SP63、SP64の7基が長方形に分布しており、同一遺構の可能性が高い。

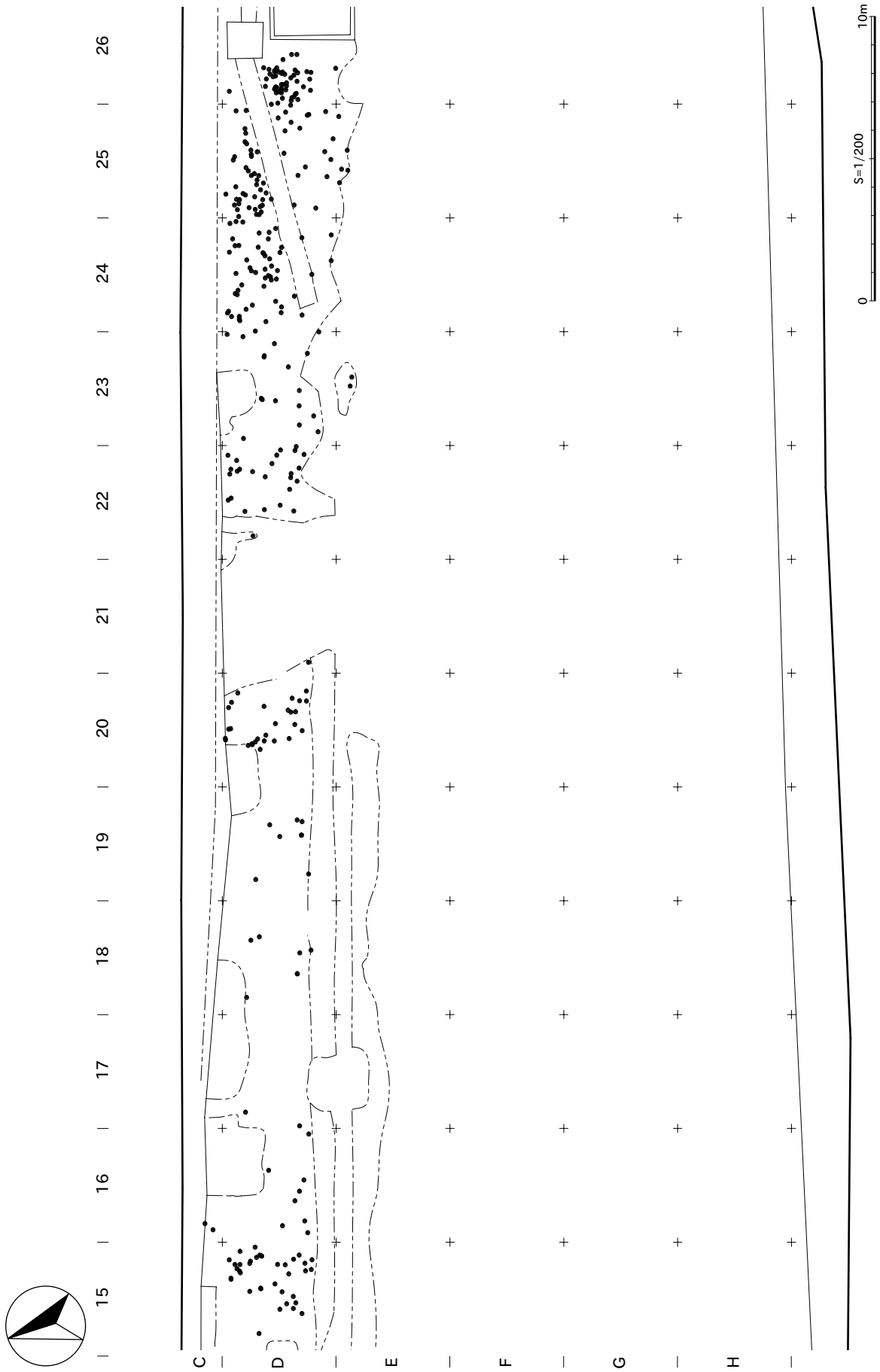
#### 遺物（第6、7図）

縄文時代の遺物の大半は包含層からの出土で、土器、石器、礫約300点が検出された。その分布はC15～16、C20、C23～26グリッドに集中している。このうちC15グリッド出土遺物は前述したピット列の南半部に位置している。また、同一母岩と考えられるチャートのフレイクが十数点検出されているが、SP62覆土中からも2点検出された。包含層出土遺物は、撚糸文系土器を中心に条痕文系土器と早期の土器が大半を占めている。

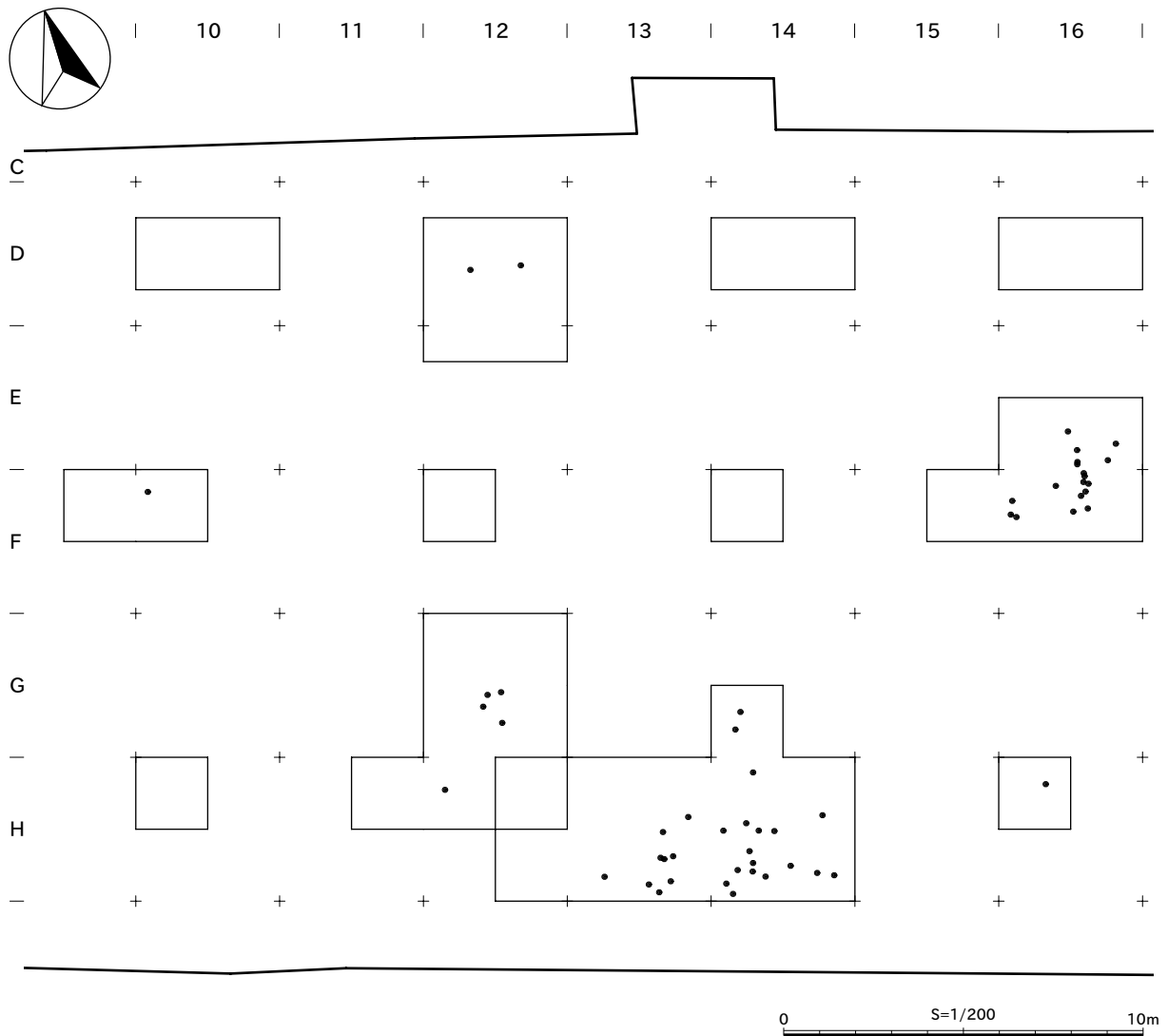
旧石器時代の遺物は立川ロームV～X層にかけてフレイクを中心に約60点検出された。その分布はV層がF12、VI層がC12、E16、F12、VII層がD12、E12、G13、G14、IX層がE10、E16、X層がE16グリッドと、各出土層位ともE～Gライン、すなわち北斜面への傾斜変換点内側部分の尾根上に位置している。また、特にD～E16グリッド、G13～14グリッドの2箇所に集中し、前者



第5図 北館地区遺構分布図



第6図 北区縄文時代遺物分布図



第7図 北区旧石器時代遺物分布図

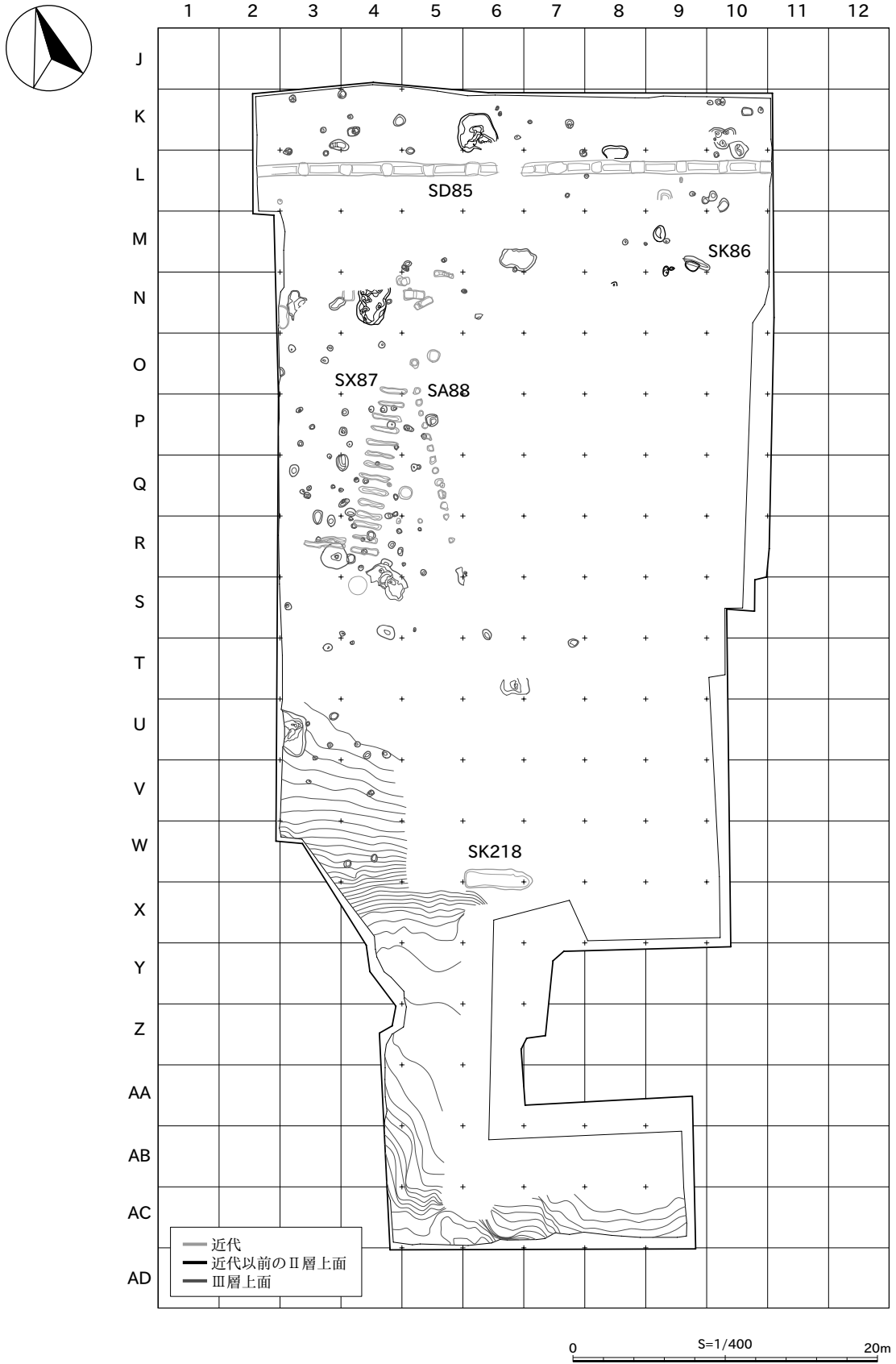
ではVI～VII層にかけて、後者ではVII～IX層にかけて分布している。

## (2) 南館地区

### 遺構 (第8図)

本地区も旧駒場寮中療、南寮基礎による削平に加え、おそらく斜面の平準化を目的とした掘削によって両建物間も立川ローム層が削平されている。そのため、沖積層の残存範囲はNライン以北と、Nライン以南の6ライン以西である。残存範囲内では埋没谷に続く緩斜面上に位置することから沖積層の残存状態は比較的良好である。遺構検出面はIIb層上面とソフトローム上面の2面である。

IIb層上面から検出された遺構は、近代に帰属する遺構である。SX87とSA88はいずれも農学部(農科大学)期の耕作土と推定される黒褐色土を覆土とする遺構である。SX87はその形態と配列から畑の畝と考えられる。SA88はSX87とはハの字状に伸びる遺構で、地境としての堀跡の可能性も考えられる。SD85は部分的ではあるが、覆土下方に空洞および材が確認されたことから、木樋を配した上水遺構と推定される。遺構確認面はIIb層上面で、かつ駒場寮整地層にバックされていることから農学部(農科大学)期の施設と推定される。遺構確認面からの深さは、調査区西端で310cm、



第8図 南区遺構分布図



東端で270cmを測るが、その差は自然堆積層の標高差が反映したもので、溝底はほぼ水平である(T.P.32.3m)。駒場Iキャンパス周辺には、世田谷区北沢5丁目(京王線笹塚駅南付近)より玉川上水から分水した三田用水が、東北沢～「三角橋」三叉路を經由してキャンパスの北側を東西に通る通称「コスモストリート」に沿って東進し、「東大裏」三叉路から「山手通り」を南下している。本遺構は三田用水から農学部(農科大学)へ引き込まれた用水路と推定され、周辺部の現況標高より「コスモストリート」方面から取水され、「山手通り」へ流れていたと推定される。

SK218は、不整長方形を呈する廃棄遺構である。遺構確認面は周辺部の削平により立川ローム下位である。周辺には昭和40～50年代と推定される駒場寮に伴う廃棄遺構が密集し、本遺構の覆土最上層からも該期の遺物が検出されているが、覆土中位から坑底にかけては昭和10年代と推定される遺物が出土していることから、本来は終戦前後を下限とする時期の施設と推定される。

ソフトローム層上面からは、ピット、土坑、倒木痕などが検出され、縄文時代に帰属する遺構と推定されるが、いずれの遺構からも共伴遺物はなく、年代を特定することはできない。SK86は長楕円形を呈する土坑で、その断面形態からいわゆる「Tピット」と称される陥穴と判断される。

#### 遺物

遺物は、Mライン以北のⅡb層中より縄文時代の土器片、礫合わせて6点が出土したのみである。

### (3) ケヤキ移植地区

南館地区内にあるケヤキを移植するため、移植先であるP43グリッド周辺の調査を行った。当初予定していた区域から、使用中の埋設管が検出されたため、その西側を拡張した。埋設管の下に、形態から陥穴と推定される遺構が検出されたが、上記の理由で確認に止めた。西側の拡張区からは遺構、遺物とも検出されなかった。

## 5. 成果と課題

過去の調査成果より、駒場Iキャンパスの埋蔵文化財包蔵地は、井の頭線沿いの台地上、すなわちキャンパス東縁部の「一二郎池」を中心とする南へ開く谷とキャンパス南側を東流する目黒川の支流に囲まれた舌状台地の傾斜変換点付近に集中し、キャンパス中寄りから北側では確認されていない。本地点は数理学研究科Ⅱ期棟地点が位置する井の頭線北側の舌状台地から池方向へ開く小支谷を挟んだ北側にあたる。図書館地点は本台地南斜面上に位置している。

縄文時代早期の遺物は台頂部から北斜面への傾斜変換点付近で検出された。その分布状況より、調査区域の北側へ広がっていることが予想される。検出された遺物は、撚糸文系～条痕文系土器を中心としており、南に位置する数理学研究科Ⅱ期棟地点の様相とほぼ一致し、本台地において該期における活動の痕跡が追認された。

旧石器時代の遺物は台頂部から南緩斜面にかけて検出された。前項でも述べたように、遺物の出土層位はⅥ～Ⅸ層を主体としている。最も集中して検出されたG13～14グリッドではⅦ層下部からⅨ層にかけて集中域が認められた。全体的に谷の浸食が始まるⅥ層以前の層位に集中しており、人間行動と環境との関連が注目される。また、駒場Iキャンパスにおいて立川ロームⅥ層以下からの出土は駒場ファカルティーハウス以来2例目にあたり、今後同キャンパスの調査においては該期の調査も視野に入れて行う必要がある。(成瀬晃司)

参考文献

- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 「農学部総合研究棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 「東京大学駒場構内遺跡大学院数理学研究科II期棟地点発掘調査報告書」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 「教養学部図書館新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 原祐一・川口武彦・伊比博和・松崎浩之・春原陽子 2004 「東京大学駒場構内遺跡国際学術交流棟地点（東京都目黒区）」『第10回石器文化研究交流会 - 発表要旨 -』石器文化研究会

## 第 2 部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

1. 理学系研究科附属植物園研究温室地点発掘調査報告
2. 理学系研究科・理学部 1 号館前地点発掘調査報告

東京大学白山構内の遺跡

理学系研究科附属植物園  
研究温室地点発掘調査報告

2006

東京大学埋蔵文化財調査室

## 例 言

1. 本報告は、東京大学大学院理学系研究科附属植物園研究温室新営（第2期）に伴う埋蔵文化財発掘報告である。
2. 本地点の略称は「K0」とする。
3. 調査地点は東京都文京区白山3丁目7番1号、東京大学大学院理学系研究科附属植物園（通称、小石川植物園）内に所在し、調査面積は200m<sup>2</sup>であった。
4. 本地点は文京区 No.81「小石川御薬園跡」、および文京区 No.21「小石川植物園内貝塚・原町遺跡」内に位置している。
5. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、調査は、成瀬晃司が担当した。
6. 調査期間は1993年5月25日から6月6日である。
7. 本報告の編集は成瀬が行った。
8. 新美倫子氏（名古屋大学）にはSK45、SK57出土の動物遺体の分析を渋谷葉子氏（学習院大学）には文献史料の分析を依頼し、玉稿をいただいた。記して感謝したい。
9. 執筆分担は以下の通りである。  
第I章・第II章・第III章 第1節 成瀬晃司  
第III章 第2節 成瀬、追川吉生  
第IV章 第1節 成瀬、第2節 追川、第3節 新美倫子、第4節 渋谷葉子
9. 遺構写真は成瀬が、遺物写真は青山正昭が撮影した（CD-ROM 所収）。
10. 遺物の実測、浄書は飯田浩子、今井雅子、坂野貞子が行い、香取祐一、北島くりかによってデジタル化した。
11. 発掘調査に伴う図面、写真、出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）、東京大学工学系研究科附属柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡414）内にて保管、運用している。
12. 発掘調査および報告書作成にあたり下記の諸氏、機関より御協力・御教示を賜った。記して敬意を表する。  
（敬称略）

池田悦夫 今村啓爾 大塚達朗 小川 望 梶原 勝 加藤元信 古泉 弘 小林 克  
下園文雄 杉森哲也 谷口 榮 橋口定志 宮崎勝美 武藤康弘 両角まり

（株）三浦工業 施設部 理学系研究科附属植物園 人文社会系研究科・文学部考古学研究室

### 発掘調査・整理作業参加者

安芸毬子 飯田浩子 今井雅子 香取祐一 北島くりか 坂野貞子 （株）三浦工業

## 凡 例

1. 遺構の実測図は原則として1/40で掲載している。
2. 遺物の実測図は1/3で掲載し、器形外に掲載した刻印の拓本は全て1/1である。
3. 実測図に付けられる記号は以下のことを表している。
  - ・▲は高台、見込みなどの軸際を表しており、磁器と軸際の描写が不可能な陶器に用いている。
  - ・\—/は、口唇部の口錆を表している。
  - ・\↔/は、人為的な磨耗痕、敲打痕、播鉢の体部播り目範囲を表している。
  - ・中心線上下端の破線は、推定口径および底径を表している。
  - ・本文中で記載した陶磁器・土器分類は『東京大学構内遺跡調査研究年報2 別冊東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』に、遺構一括資料の段階設定は、堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1に基づいている。
4. 遺構番号は1から通し番号を付した。また冠詞に付けた略号は以下の通りである。  
SA：塀跡 SD：溝 SE：井戸 SK：土坑 SP：小穴 SU：地下室 SX：性格不明遺構
5. グリッドは計画建物の基準軸を元に、調査区北西隅を基準点とし(A1)、東へアルファベット、南へ整数(アラビア数字)を5m間隔で付した。よって、グリッド名は5m四方桁の北西コーナーを交点とする英数字をあてている。
6. 遺構断面図に記載された標高は、東京湾平均海面(T.P.)を基準とし、基標番号「小(12)」白山五丁目9宮本末義宅前(T.P.:16.8524m)から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお「小(12)」の値は、平成4年7月東京都土木技術研究所刊行の『水準基標測量成果表』に基づいている。

東京大学白山構内の遺跡  
理学系研究科附属植物園研究温室地点発掘調査報告

目 次

例 言  
凡 例  
目 次

第 I 章 調査の経過と概要	87
第 1 節 調査に至る経過	87
第 2 節 調査の方法と経過	87
第 II 章 遺跡の位置と環境	89
第 1 節 白山構内遺跡の歴史的環境	89
第 2 節 周辺の遺跡	90
第 III 章 江戸時代の遺構と遺物	95
第 1 節 検出された遺構	95
第 2 節 出土した遺物	107
第 IV 章 研究温室地点の成果と課題	139
第 1 節 考古資料からみた研究温室地点の土地利用状況 (成瀬 晃司)	141
第 2 節 17 世紀のかわらけ一括廃棄遺構の様相 — 理学系研究科附属植物園研究温室地点のかわらけ一括廃棄遺構の分析を中心に — (追川 吉生)	153
第 3 節 研究温室地点の動物遺体 (新美 倫子)	163
第 4 節 「小石川植物園」の土地利用に関する歴史的変遷 (渋谷 葉子)	172

引用・参考文献  
報告書抄録

## 第 I 章 調査の経過と概要

### 第 1 節 調査に至る経緯

東京大学理学部附属植物園では、かねてから第 1 温室、第 2 温室と仮設のファイロンハウスの老朽化に伴い、全面的に改築して研究温室を建設する計画が持ち上がっていた。そして平成 3 年度に第 1 期分の研究温室の新営が計画された。しかし、白山構内は文京区 No.21 小石川植物園内貝塚・原町遺跡として縄文時代の貝塚や江戸時代の武家屋敷の存在が（東京都教育委員会 1985）、同 No.81 小石川御薬園跡として江戸時代の白山御殿跡および小石川御薬園跡として知られており、事前に遺跡の範囲を確認し、研究温室建設予定地（第 1 期）の発掘調査の必要があるかどうかを明らかにする必要があった。そこで理学部附属植物園から試掘調査の依頼を受けた埋蔵文化財調査室では同年 7 月、第 1 期建設地点の試掘調査を実施した。その結果、現在はほぼ平坦な地形を呈しているが、旧地形は東南方向に開く開析谷の斜面上に位置しており、現在の地形は近代以降の盛土造成に寄るところが大きく、計画基礎の深度が江戸期の遺構面にも達しないことが判明した。この結果を踏まえて文京区教育委員会と協議した結果、温室基礎による遺構面への影響がないとの行政判断から、現状保存とし本調査には至らなかった。

平成 5 年、再び理学部附属植物園から第 2 期分建設地内の試掘調査の依頼があり、それを受けて 5 月に試掘調査を実施した。その結果、第 1 期建設地点の西側に位置する本地点では、最も浅い箇所、現表土より約 50cm 下でソフトローム層に達することが確認された。ソフトローム上面からは江戸期に帰属すると推定される多数の遺構と遺物が検出されたため、文京区教育委員会、施設部、附属植物園で協議をした結果、本調査を実施する運びとなった。

### 第 2 節 調査の方法と経過

#### (1) 調査の方法

調査は、研究温室建設地点(第 2 期)範囲を対象とした。新営建物の軸がほぼ北東方向にあることより、調査の便宜性から建物建設範囲を基準として 5×5m グリッドを設定した。

グリッドは調査区の北隅を基準とし (A1)、そこから南東方向へアルファベットを、南西方向へ整数 (アラビア数字) を降順で付した。よってグリッド名は 5m 四方枳の左上コーナーを交点とする英数字を当てている。

#### (2) 調査の経過

本調査は建設予定地約 200m<sup>2</sup> を対象に 1993 年 5 月 25 日より 6 月 5 日にかけて行われた。本地点は試掘調査の結果、ソフトローム上には自然堆積層および江戸時代の整地層ともに認められなかったことより、重機によってソフトローム上面まで掘削し、人力による遺構確認作業に入った。残念ながら遺構確認面は近代以降の整地事業によって、ソフトローム面に達したが、調査前の現況が更地で



あったこと、植物園構内において拠点施設から離れていたことにも助けられ、建物基礎などによる攪乱はほとんどなく、遺構は比較的良好な状態で遺存していた。

表土掘削、遺構確認作業の終了後、基本的に北側から遺構調査を行った。検出された遺構数は100基を数え、内訳は地下室1基、土坑22基、井戸2基、小穴64基、溝3基、塀跡1基、性格不明遺構7基である。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

### 第1節 白山構内遺跡の歴史的環境

東京大学理学部附属植物園（通称小石川植物園）を含む白山構内は、東京都文京区白山 3-7-1 に位置する。当地は本郷台地が指ヶ谷の崖で浸食されて分かれた白山台地の台地西側上にあり、標高は約 23～24m である。

白山構内は縄文時代中期から晩期にかけての「小石川植物園内貝塚」として知られている（東京都教育委員会 1985）。その歴史は古く明治 12 年頃に遡る。昭和 25 年には和島誠一の指導のもと東洋大学による発掘調査が実施され、縄文時代中期の竪穴住居跡が 2 基検出された。本貝塚は園内温室を中心に 5 ヶ所にて確認されており、その分布状況から馬蹄形状をなしていたとも推定されている（Ⅱ-1 図）。

江戸時代には、承応元（1652）年に当時館林藩主だった松平徳松（後の徳川綱吉）が当地を下屋敷として拝領し、御殿が造営された。その後生母桂昌院の居住などの要因もあり、屋敷が拡大された。延宝 8（1680）年に松平綱吉は 5 代将軍に就任し、徳川綱吉となる。これに伴い桂昌院と世子徳松も江戸城に移り、小石川下屋敷はいわゆる明屋敷となった。その後、天和 2（1682）年頃には南側の御殿空間は幕府御殿として転用、北側の詰人空間は館林家臣団の小屋敷として営まれた。本地点は小石川御殿内に含まれる（Ⅱ-2 図）。天和 3（1683）年徳松死去により、館林藩は事実上の廃藩となり、小屋敷は幕臣の屋敷地へと転換された。

正徳 4（1714）年小石川御殿廃止によって、本地点は幕臣の屋敷地となり、北側に西村三郎次郎屋敷、道を挟んだ南側は奥田九八郎屋敷に該当するものと考えられる。享保 6（1721）年小石川薬園新設に伴い、本地点の北側は幕臣の屋敷地、道を挟んで南側は薬園奉行岡田利左衛門が拝領した役屋敷に含まれることになる。その後、北側屋敷地の所有者に多少の出入りはあるが、土地利用には大きな変化は認められなかった（Ⅱ-3 図）。

明治元年、北側の屋敷地は小石川原町となり、明治 14 年測量の 2 万分 1 フランス式彩色地図「東京府牛込区及近傍市街村落」では桑畑と表記されている。南側の小石川薬園は東京府の管轄になり大病院附属御薬園となる。その後明治 2 年に大学校の管轄となり、医学校薬園と称したが、明治 4 年には大学東校薬園と呼ばれた。明治 6 年には太政官博覧会事務局に属するなどの変遷を経て、明治 8 年文部省所管教育博物館附属・小石川植物園となる。明治 10 年に東京大学の創立によって大学附置施設となった。明治 19 年の帝國大学令公布とともに、帝國大学植物園と改称された（Ⅱ-4 図）。これ以後現在まで植物園の正式名称として小石川の地名が付くことはなかった。その後、東京大学所属国有財産不動産（土地）沿革誌によると、明治 36 年に本地点北側を含む小石川原町の一部は、用地交換によって囲い込まれ、現在に至っている。

また、昭和 10 年駒場にあった農学部の本郷移転に関連して、当園北西端の一部が、同学部遺伝学実験用および林業実験苗圃用として農学部に移管された（Ⅱ-5 図）。

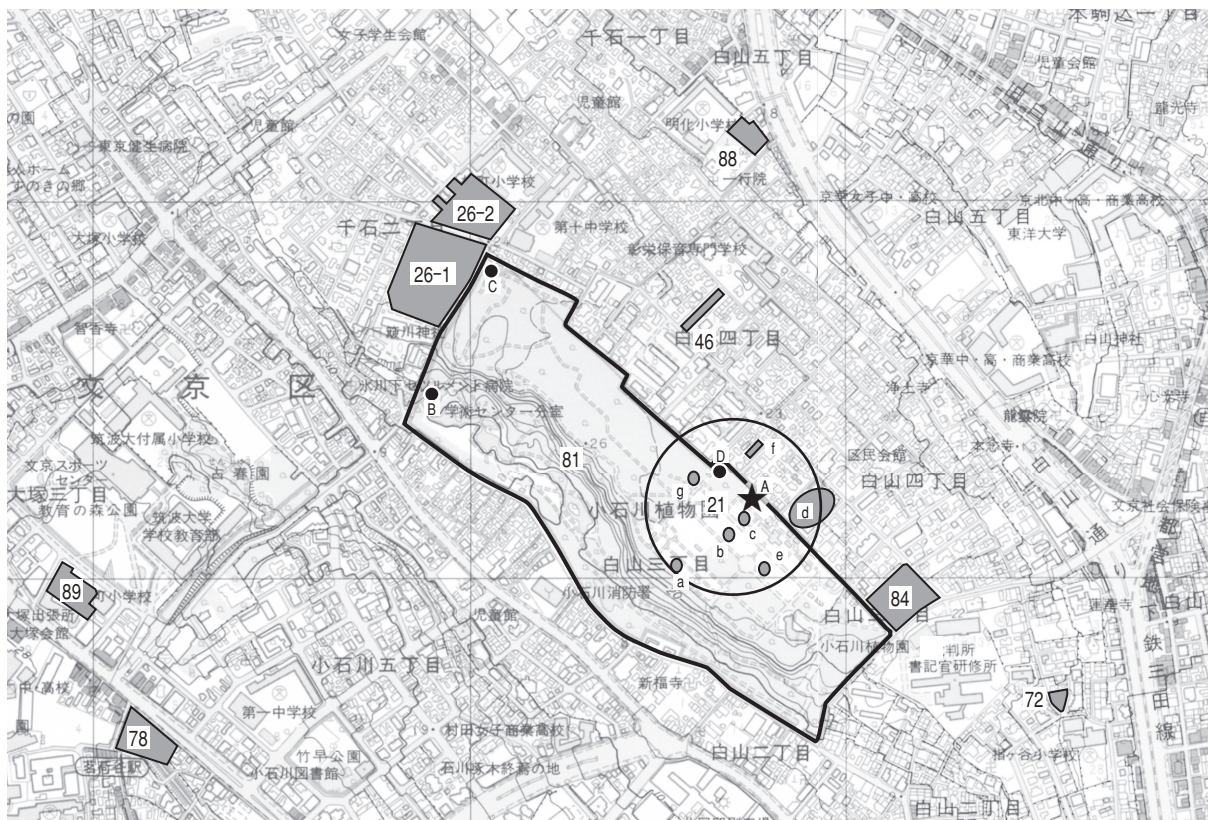
一方、縄文時代に関しては、本調査でも耕作土、江戸時代の遺構覆土より縄文時代中期から晩期の遺物がコンテナ 2 箱ほど検出されたが、残念ながら縄文時代の包含層、遺構に伴うものは皆無であっ

た。しかし、その遺物量の多さよりある程度の規模を有する集落の存在は大いに予想されるところである。

## 第2節 周辺の遺跡

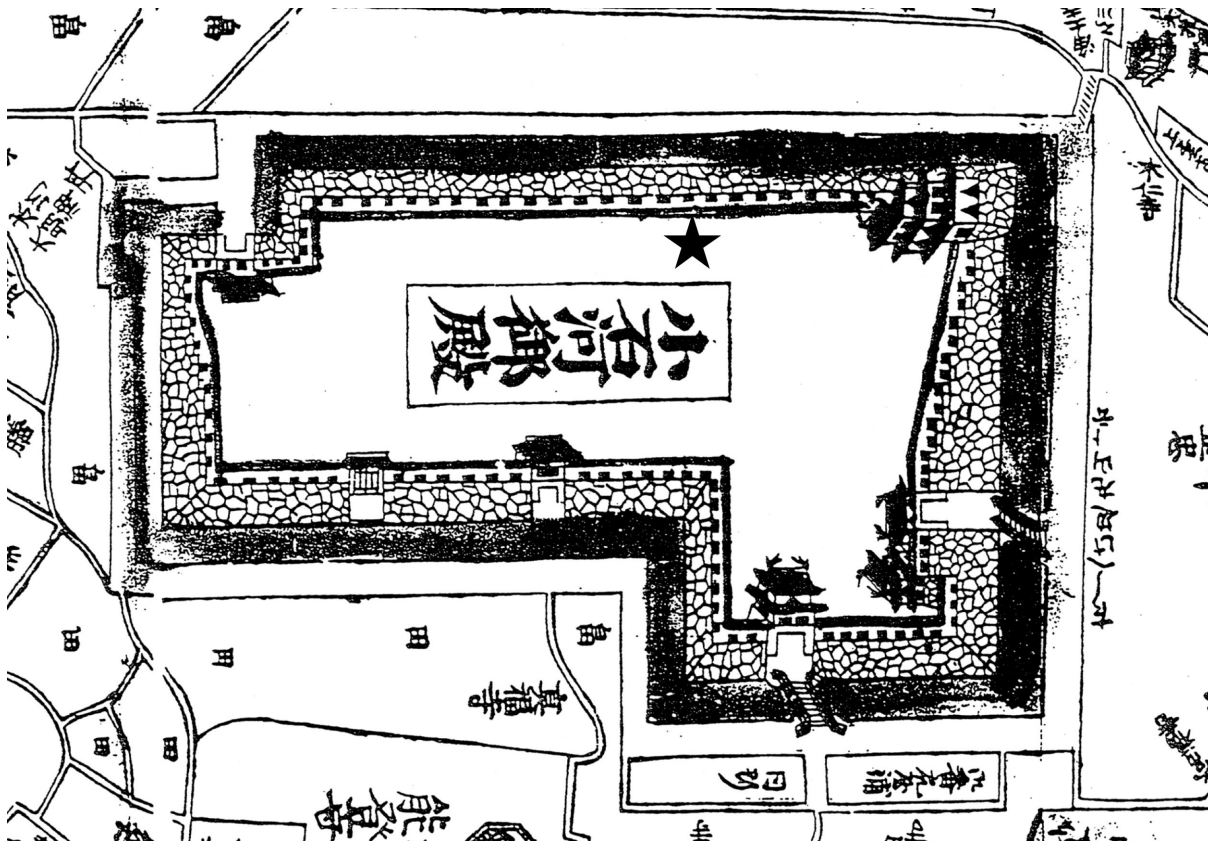
本地点の周辺域では、文京区教育委員会を主体として多数の調査が実施されている。そのうち本地点と関連する白山御殿跡、旗本・御家人屋敷関連の遺跡を中心に概観したい(Ⅱ-1図)。

白山御殿跡関連の遺構が検出された遺跡としては「白山御殿跡(84)」(文京区遺跡調査会 2003a)、「原町遺跡第Ⅰ地点(21-f)」(文京区遺跡調査会 1995)がある。「白山御殿跡」では、屋敷地周囲に掘り巡らされたと考えられる堀状遺構が検出されている。検出された第1号溝は、断面逆台形を呈し、規模は確認面で幅約16m、溝底で幅5.5～6.5m、確認面からの深さ2.4～3.2m、壁面の仰角は約35°を測る。壁面は平滑に素掘りした後約10cmの厚さで土を塗り付け、仕上げられている。本遺構は調査区内で直角に折れ、白山御殿の南東角に対比される。「原町遺跡第Ⅰ地点」では調査区北端から溝の南側壁面が検出されたのみで詳細は不明であるが、壁面の仰角は約35°を測り、壁面上に土を塗りつけた様相が窺える点で「白山御殿跡」例と同様の構造をとっており、また「白山御殿跡」第1号溝の延長上に位置することから同一遺構と判断される。本遺構はまた「白山構内の遺跡・総合研究博物館小石川別館地点(Ⅱ-1図B、Ⅱ-5図2)」においても検出されている(東京大学埋蔵文化財調査室 2004)。検出されたSD1は調査範囲の制限から西壁が検出されたに過ぎないが、壁面の仰



Ⅱ-1 図 周辺の遺跡

- 21：小石川植物園内貝塚・原町(英数小文字は、調査地点および貝類等散布地点) 26-1：林町第1地点  
 26-2：林町第2地点 46：白山四丁目 72：指ヶ谷町 78：三軒町 81：小石川御薬園跡 84：白山御殿跡  
 88：一行院跡 88：一行院跡 89：大塚窪町  
 ※英数大文字は、白山構内での事前調査地点



II-2 図 「宝永江戸図鑑 (宝永 2 (1705) 年)」 にみる調査地点 (★が調査地点比定位置)



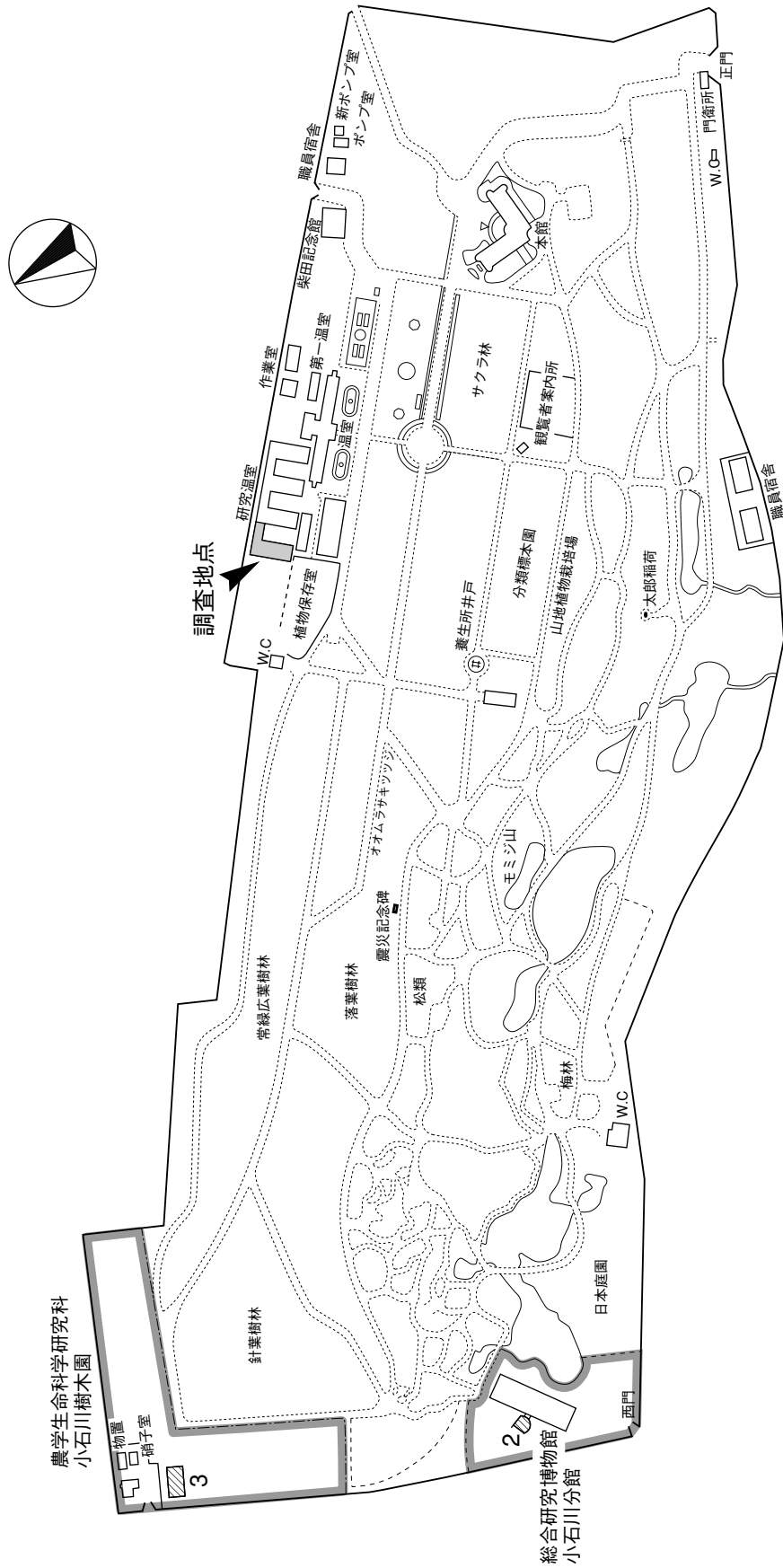
II-3 図 「分間江戸大絵図 完 (安政 6 (1859) 年)」 にみる調査地点 (★が調査地点比定位置)



II-4 図 「東京実測全図 (明治 28 (1895) 年)」 にみる調査地点 (★が調査地点比定位置)

角は約  $37^\circ$  を測り、壁面直上に土を塗りつけている構造上の類似性より、同一遺構と推定される。SD1 は隣接する網干坂とほぼ平行に延びていることから、屋敷地の西端はほぼ現在まで踏襲されていることが窺える。ただし、SD1 の主軸延長上で坂上に位置する「農学生命科学研究科小石川樹木園根圏観察室地点 (II-1 図 C、II-5 図 3)」(東京大学埋蔵文化財調査室 2004) や、網干坂を挟んで西側で調査が行われた「林町遺跡」では確認されていないことから、宝永 2 (1705) 年の『宝永江戸図鑑』(II-2 図) など屋敷地拡大後の御殿を表した絵図に共通して認められる北西部のクランクは網干坂の傾斜変換点 (林町遺跡第 1 地点の南端付近) にあたることを推測される。

白山御殿の堀に関して、『改正甘露叢』元禄 11 年 5 月 16 日条には「十六日、小石川御殿御堀・土居・角櫓・多門等御普請出来御褒美 (後略)」とあり、『宝永江戸図鑑』の表記と合わせて、堀の内側に土塁 (石垣) を設けその上には白壁の塀が巡り、多門、角櫓などが配置されていた様子が窺える。検出された溝状遺構はいずれも御殿側から埋め戻され、覆土にはロームブロックや粘土ブロックが多量に含まれていることから、溝の掘削土で土塁を構築し、再びその土を利用して埋め戻されたものと推定される。



II-5 調査地点の位置

2：総合研究博物館小石川分館地点 3：農学生命科学研究科小石川樹木園観覧室地点

堀以外で白山御殿に帰属する遺構は少なく、管見の限りでは「原町遺跡第1地点」12号遺構のみである。本遺構は、不整形円形を呈する土坑であるが、覆土中より18世紀初頭を下限とする陶磁器類と共伴して多数のかわらけが検出されている（実測点数で20点）。詳細は不詳だが、本地点のSK45、SK57同様、綱吉の御成など式正の宴に関わる資料と推定される。

白山御殿周辺、さらには後の小石川御薬園周辺に立地する旗本・御家人屋敷の調査では、「白山四丁目遺跡（46）」（白山四丁目遺跡調査会1981）の調査に端を発した「地下坑」が、本地点を始め「農学生命科学研究科小石川樹木園根圏観察室地点（C）」「林町遺跡第1地点（26-1）」、「林町遺跡第2地点（26-2）」（文京区遺跡調査会2000a）、「原町遺跡第1地点（21-f）」、「原町遺跡第2地点（21-D）」（文京区遺跡調査会1996）、「指ヶ谷町遺跡（72）」（文京区遺跡調査会2000b）、「一行院跡（88）」（文京区遺跡調査会2003b）、「大塚窪町（89）」（加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部2005）、「三軒町（78）」（近日刊行予定）など、白山・千石・大塚地域を中心に多数検出されている。また、調査事例ではないが、本構内においても電柱埋設工事などで検出されたことが職員からの聞き取りで確認されている。本遺構の機能に関して、遠藤・加藤は民俗例との形態的比較検討から、サツマイモの貯蔵施設を想定している。そして本遺構の分布がほぼ小石川地域に限定されること、さらに出土地点と切絵図との対比にて旗本・御家人屋敷に集中する分布属性から、江戸周縁部としての空間的特性と中・下級武士階層の経済状況との関連より、農民への土地の貸与、もしくは武士の内職を背景とした地域特定生産活動の存在として位置付けている（遠藤・加藤2004）。

## 第三章 江戸時代の遺構と遺物

### 第1節 検出された遺構

今回の調査では江戸時代の遺構 100 基が検出された。内訳は地下室 1 基、土坑 22 基、井戸 2 基、小穴 64 基、溝 3 基、堀跡 1 基、性格不明遺構 7 基である（Ⅲ-1 図）。特に地下室（SU14）は白山地域を中心に分布する地下坑道である。また土坑には寛文年間頃の廃棄と推定されるかわらけ廃棄土坑が 2 基検出されており（SK45、SK57）、綱吉の御成との関係が窺われる資料である。以下、各遺構の詳細を記述する。

#### SK1（Ⅲ-2 図）

A1 グリッドに位置する土坑である。重複する SK33 より新しく、SK42 よりも古い。平面形は方形を呈し、規模は長辺 294cm、短辺 263cm、確認面からの深さは最大 94cm を測る。坑底はほぼ平坦に整形されている。壁は下方ではほぼ垂直に立ち上がるが、上方では逆ハの字状に拡がりを見せる。覆土は坑底より凸レンズ状の堆積を呈しているが、最上層の 1 層が上半部を占めていることから、比較的短時間で埋め戻されたものと推測される。

遺物は 18 世紀前半の陶磁器、土器類がコンテナ 1 箱出土しているが、1 層の西壁寄りからかわらけ、ほうろく片が集中して出土した。

#### SK33（Ⅲ-2 図）

A1 グリッドに位置する土坑である。SK1 と重複し、それより古い。平面形は方形を呈し、規模は 1 辺約 110cm、確認面からの深さ 82cm を測る。坑底は凹凸が著しい。壁は直線状に緩やかに開きながら立ち上がるが、全面に根穴と推定される小穴が多数認められる。第 1 層には焼土が多量に含まれ、火災後の廃棄行為を推定することができるが、第 1 層に関し、2 層とのつながりが自然堆積としては不自然なこと、出土遺物が 19 世紀前～中葉と SK1 より新しいことから、第 1 層部分が入れ子状に構築された別遺構と考えられる。

遺物は前述したように、第 1 層から 19 世紀前～中葉の陶磁器、土器類がコンテナ 1 箱出土している。

#### SK42（Ⅲ-2 図）

A2 グリッドに位置する円形土坑である。SK1、SP52 により古く、SP44 より新しい。平面形は直径約 100cm を測る円形を呈する。断面形は洗面器形を呈し、確認面からの深さは 32cm を測る。覆土は褐色土を基調し、凸レンズ状に堆積している。

遺物は 19 世紀前～中葉の陶磁器・土器類が十数点出土している。

#### SX13（Ⅲ-2 図）

B2 グリッドに位置する遺構である。SU14 より新しい。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸 146cm、短軸は残存長 96cm を測る。坑底は凹凸が著しく、壁は湾曲して立ち上がる。確認面からの深さは 15cm と比較的浅い。覆土はローム粒を含む暗褐色土の単一層である。平面形態と坑底の状態から、植栽痕の可能性も考えられる。

遺物は、19 世紀前半の陶磁器、土器類が十数点出土しており、一部が SU14 と遺構間接合をするが、SU14 出土遺物の主体が 18 世紀末に位置付けられることから、重複による調査時の混入と考えられる。



## SU14 (Ⅲ-2 図)

B2 グリッドに位置する遺構である。重複する SX13 より古く、SP15、SX16 より新しい。確認面での平面形は長軸 140cm、短軸 75cm を測る楕円形を呈するが、確認面下約 70cm にてテラスを有する。テラス底面は確認面同様に楕円形を呈し、南壁側のテラス部分は約 10cm オーバーハングしている。それ以下は長辺 80cm、短辺 50cm の長方形に変化し、壁面は丁寧に整形されほぼ垂直に立ち上がっている。平面形の変化に伴い、長辺の両壁面には小坑が穿たれるようになる。この小坑は下底部で幅約 30cm を測る蒲鉾形を呈している。ほぼ 45cm 間隔で配置され、向かい合う 2 辺の小坑はほぼ同レベルである。その形状と配置から足掛け坑と推定される。覆土は砂利を含む暗褐色土の単一層で短期間に埋め戻された様相を呈している。

本遺構は、その形態より白山一帯に分布する「地下坑」と考えられる。白山構内においては本地点の他に、農学部樹木実験圃場根圏観察室地点より 2 基確認されている（東京大学埋蔵文化財調査室 2004）。いずれも現在は白山構内に位置するが、江戸期においては小石川薬園（養生所）外の旗本・御家人屋敷内に帰属する点で共通する。確認面より約 250cm 掘り下げたが、いまだ坑底に達する気配はなく、安全上に理由からこの先の調査を断念した。

遺物は 18 世紀後葉の陶磁器・土器類がコンテナ 1 箱分出土している。

## SX24 (Ⅲ-3 図)

A2 グリッドに位置する遺構である。SK25、SP41 と重複しいずれの遺構よりも新しい。平面形は不整形を呈し、規模は長軸 247cm、短軸 124cm、確認面からの深さ 27cm を測る。坑底は凹凸が著しく、壁は湾曲して立ち上がる。遺物の出土はなく、本遺構の性格、時期は不明である。

## SK25 (Ⅲ-3 図)

A2 グリッドに位置する土坑である。SX24 と重複し、それより古い。平面形は長方形を呈し、規模は長辺 190cm、短辺 120cm、確認面からの深さ 28cm を測る。坑底、壁面ともに根穴と推定される小穴が多数存在するが、比較的丁寧に整形されている。覆土は 2 層から成り、基本的に南側からの流入によって埋め戻されている。3 層とした上層は人工遺物、自然遺物を多量に含む暗灰褐色土で、含有物、色調より、少なくとも埋没過程においては廃棄遺構として利用されていたと推定される。

遺物は 19 世紀前～中葉の陶磁器、土器類がコンテナ 3 箱分出土している。

## SP41 (Ⅲ-3 図)

A2 グリッドに位置する遺構である。SX24、SK25 と重複し、いずれの遺構よりも古い。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 65cm、短軸 50cm、確認面からの深さ 81cm を測る。本遺構の周囲には南東方向にむけてピット群が分布している。本遺構と比較して全体的に小規模なピット群であるが、関連性が推測される。

遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

## SK26 (Ⅲ-3 図)

B2 グリッドに位置する土坑である。重複する SK27 より新しい。東側は調査区域外に達するため全体像を確認することはできなかったが、平面形は方形ないし長方形を呈すると推定される。規模は長辺 140cm、短辺 55cm (調査区内)、確認面からの深さ 64cm を測る。坑底、壁面ともに凹凸が著しい。覆土はほぼ水平に堆積しているが、出土遺物の多くは 4 層から 3 層下部にかけて出土している。

遺物は 18 世紀前半の陶磁器、土器類が数点出土しているにすぎない。

## SK27 (Ⅲ-3 図)

B2 グリッドに位置する土坑である。重複する SK26 より古い。東側は調査区域外に達するため全

体像を確認することはできなかったが、平面形は方形ないし長方形を呈すると推定される。規模は残存値で長辺 194cm、短辺 88cm、確認面からの深さ 140cm を測る。坑底はほぼ平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。全体的に比較的丁寧に整形されている。また南壁には坑底上約 40cm に左右 2ヶ所、約 100cm に 1ヶ所小穴が穿たれている。上部の小穴は下部の 2基の小穴のほぼ中央に位置している。各々の断面形態が直角三角形を呈することから昇降用の足掛け穴と推定される。覆土は 5層に分かれ、最下層より多量の遺物が検出された。そのなかに焼成前に「天下一」銘を削り取られた焼塩壺が含まれていたことから本遺構の廃絶年代は 1680 年代前半と推定される（成瀬・堀内・両角 1994）。またその直上の 4層は厚さ約 50cm を測り、ロームブロックを多量に含んでいることから、遺構廃絶直後に一括廃棄が行われ、比較的短期間で埋め戻されたものと考えられる。本遺構の性格は、足掛け穴の存在から地下室と推定される。

遺物は 17 世紀後葉の陶磁器、土器がコンテナ 2 箱分出土している。

#### SK32 (Ⅲ-4 図)

A3 グリッドに位置する土坑である。SK37、SK45 と重複し、いずれよりも新しい。平面形は長方形を呈し、規模は長辺 145cm、短辺 67cm、確認面からの深さ 26cm を測る。覆土はローム粒、砂粒を含む暗褐色土の単一層である。性格は不明である。

遺物は 19 世紀前半の陶磁器、土器類が数十点出土している。

#### SK37 (Ⅲ-4 図)

A3 グリッドに位置する遺構である。重複する SK45 より新しく、SK32 より古い。平面形は鉤形を呈し、規模は長辺 344cm、短辺 195cm、確認面からの深さ 47cm を測る。坑底、壁面ともに緩やかな凹凸が存在する。覆土は基本的に東からの流入によって堆積している。

遺物は 18 世紀前葉の陶磁器、土器類、瓦が数十点出土している。

#### SK45 (Ⅲ-4 図)

A2～A3 グリッドにかけて位置する遺構である。SK32、SK37 と重複し、いずれの遺構よりも古い。また西側は調査区域外に達するため全容は不明である。検出範囲からの平面形は方形もしくは長方形を呈すると推測され、確認規模は長辺 410cm、短辺 155cm（調査区内）、確認面からの深さ 36cm を測る。坑底、壁面ともに凹凸が著しく、根穴と推測される小穴が多数存在する。覆土は 3層から成り、2層からは大量のかわらけ、動物遺体が検出され、遺構廃絶後に催された式正の宴の一括廃棄行為と推定される。またそれらとともに被熱した陶磁器が数点出土している。覆土には焼土が含まれていないことより、火災後に覆土の移動など何らかの理由によって本遺構に廃棄されたことが考えられる。

遺物は 17 世紀中葉の陶磁器、かわらけを主体とした土器がコンテナ 7 箱分をはじめ、動物遺体が多量に出土した。

#### SK39 (Ⅲ-5 図)

B3 グリッドに位置する土坑である。SK40 と重複し、それより新しい。平面形は長辺 240cm、短辺 200cm、確認面からの深さ 90cm を測る。坑底は中央部を除き凹凸が著しい。また坑底、壁面ともに根穴と推定される小穴が多数存在する。覆土は 3層からなるが、特に第 2層から第 1層にかけて砂利を多量に混入している。砂利を多量に混入する覆土の様相は、重複する SK40 や、近接する SK26、SK37 など C ライン付近に構築された遺構において共通する。ただし、それが遺構の性格に起因するものなのか、客土の共通性なのかは不明である。

遺物は出土していない。

**SK40 (Ⅲ-5 図)**

B3 グリッドに位置する土坑である。SK39 と重複し、それより古い。平面形は長方形を呈すると考えられるが、東部が調査区域外に及んでいるため詳細は不明である。規模は長辺が確認範囲内で 235cm、短辺 140cm、確認面からの深さ 57cm を測る。坑底は SK39 同様に中央部を除き凹凸が著しく、坑底、壁面ともに根穴と推定される小穴が多数存在する。特に坑底では凹凸部に偏在している。

遺物は 19 世紀前半の陶磁器、土器が数十点出土している。

**SK57 (Ⅲ-5 図)**

A4、A5 グリッドに位置する遺構である。西部は調査区域外に達するため詳細は不明であるが、不整長方形を呈していると考えられる。規模は長辺 328cm、短辺は確認範囲内で 175cm、確認面からの深さ 80cm を測る。坑底は凹凸が著しく、壁は逆ハの字状に立ち上がっている。坑底、壁面ともに根穴と推定される小穴が多数存在する。覆土は 6 層からなるが、中位に位置する第 3 層からは式正の宴後の廃棄と考えられるかわらけ、動物遺体が多量に検出された。遺構埋没過程において廃棄遺構に利用されたことを物語っている。出土遺物の年代観と陶磁器に認められる被熱痕から、SK45 と同時期に廃棄された可能性が高い。

遺物は 17 世紀中葉の陶磁器、かわらけを主体とした土器がコンテナ 11 箱をはじめ、動物遺体が多量に出土した。

**SD67 (Ⅲ-6 図)**

A4、B4 グリッドにかけて東西に延びる溝状遺構である。両端ともに調査区域外に達しており、全長は不明である。溝幅 100～120cm、確認面からの深さ 40cm を測る。断面形は逆台形を呈し、溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土を基調とし、流路として使用された痕跡は認められなかった。検出された遺構の主軸方位がほぼグリッド軸と平行ないし直交しているの対し、本遺構はグリッド軸と約 8° の開きを有しており、時期差の反映と推定される。

遺物は 17 世紀中葉の陶磁器、土器が十数点出土した。

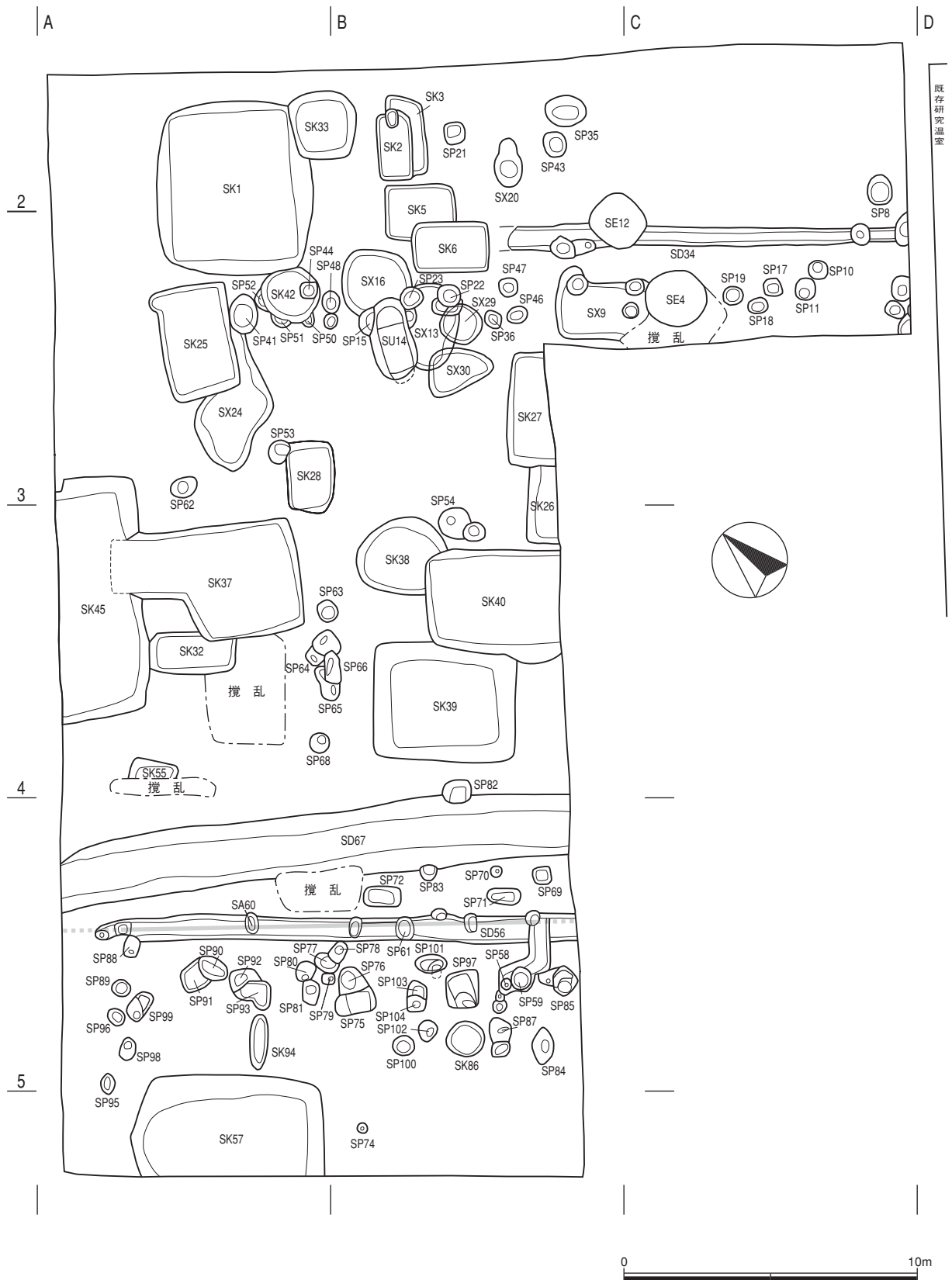
第三章 江戸時代の遺構と遺物

遺構番号	グリッド	遺構図版	遺物図版	年代	火災	備考
SK1	A1,A2	Ⅲ-2	Ⅲ-7	18c 前		
SK2	B1	Ⅲ-1		18c		SK2、SK3 一括で遺物の取り上げ
SK3	B1	Ⅲ-1		18c		
SE4	C2	Ⅲ-1		19 前	△	SX9 と遺構間接合
SK5	B1,B2	Ⅲ-1		19 前		
SK6	B2	Ⅲ-1		19c		
SP8	C1	Ⅲ-1		?		
SX9	B2,C2	Ⅲ-1		19c		
SP10	C2	Ⅲ-1				
SP11	C2	Ⅲ-1		?		柱痕有り
SE12	B1,B2,C1,C2	Ⅲ-1		?		
SX13	B2	Ⅲ-2	Ⅲ-7,8	19c 前		SU14 と遺構間接合
SU14	B2	Ⅲ-2	Ⅲ-8,9	18c 後		SX13 と遺構間接合
SP15	B2	Ⅲ-1		?		
SX16	B2	Ⅲ-1		?		
SP17	C2	Ⅲ-1		?		
SP18	C2	Ⅲ-1				
SP19	C2	Ⅲ-1				
SX20	B1	Ⅲ-1			○	
SP21	B1	Ⅲ-1				
SP22	B2	Ⅲ-2				
SP23	B2	Ⅲ-1				
SX24	A2	Ⅲ-3				
SK25	A2	Ⅲ-3	Ⅲ-10 ~ 12	19c 前~中		
SK26	B2,B3	Ⅲ-3		18c 前		
SK27	B2	Ⅲ-3	Ⅲ-12 ~ 14	17c 後		「天下一」 擦り消し焼塩壺
SK28	A2,A3,B2	Ⅲ-1		19c		
SX29	B2	Ⅲ-1		18c 前		坑底に多数の根痕、植栽痕か
SX30	B2	Ⅲ-1		18c		坑底に多数の根痕、植栽痕か
SK32	A3	Ⅲ-4		19c 前		
SK33	A1,B1	Ⅲ-2	Ⅲ-14,15	19c 前~中	○	
SD34	B2,C2	Ⅲ-1				
SP35	B1	Ⅲ-1		?		
SP36	B2	Ⅲ-1				
SK37	A3	Ⅲ-4		18c 前		
SK38	B3	Ⅲ-1		19c 前		
SK39	B3	Ⅲ-5				
SK40	B3	Ⅲ-5	Ⅲ-15	19c 前		
SP41	A2	Ⅲ-3				
SK42	A2	Ⅲ-2	Ⅲ-16	19c 前~中		
SP43	B1	Ⅲ-1		?		
SP44	A2	Ⅲ-2				
SK45	A2,A3	Ⅲ-4	Ⅲ-16 ~ 19	Ⅲ a	△	
SP46	B2	Ⅲ-1		?		
SP47	B2	Ⅲ-1				
SP48	A2,B2	Ⅲ-1				
SP50	A2	Ⅲ-1				
SP51	A2	Ⅲ-1				
SP52	A2	Ⅲ-2				
SP53	A2	Ⅲ-1				

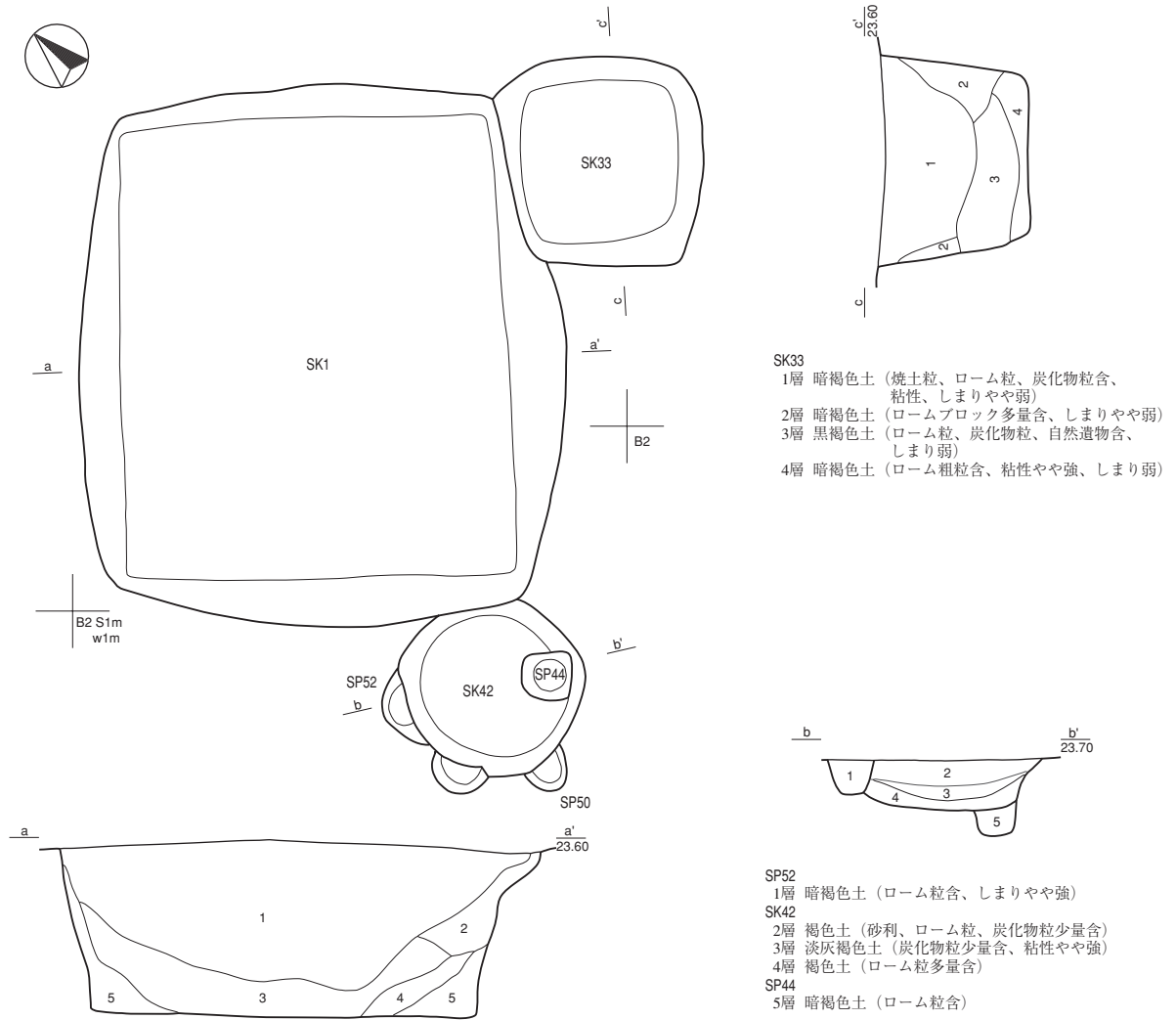
Ⅲ-1 表 検出遺構一覧表 (1)

遺構番号	グリッド	遺構図版	遺物図版	年代	火災	備考
SP54	B3	Ⅲ-1				
SK55	A3	Ⅲ-1				
SD56	A4,B4	Ⅲ-1		19c 前		
SK57	A4,A5	Ⅲ-5	Ⅲ-19～23	Ⅲa	△	
SP58	B4	Ⅲ-1				
SP59	B4	Ⅲ-1		?		
SA60	A4,B4	Ⅲ-1		19c		ピット列
SP61	B4	Ⅲ-1				φ 15cm の柱痕有り
SP62	A2	Ⅲ-1				
SP63	A3,B3	Ⅲ-1		?		
SP64	A3	Ⅲ-1		?		
SP65	A3,B3	Ⅲ-1				
SP66	A3,B3	Ⅲ-1				
SD67	A4,B3,B4	Ⅲ-6	Ⅲ-23	17c 中		
SP68	A3	Ⅲ-1		?		
SP69	B4	Ⅲ-1				
SP70	B4	Ⅲ-1				
SP71	B4	Ⅲ-1				坑底が非常に締まっている。
SP72	B4	Ⅲ-1				
SP74	B5	Ⅲ-1				
SP75	B4	Ⅲ-1			○	
SP76	B4	Ⅲ-1				
SP77	A4,B4	Ⅲ-1		?		
SP78	B4	Ⅲ-1		?		
SP79	A4,B4	Ⅲ-1		?		
SP80	A4	Ⅲ-1				
SP81	A4	Ⅲ-1				φ 20cm の柱痕有り
SP82	B3,B4	Ⅲ-6				
SP83	B4	Ⅲ-6				
SP84	B4	Ⅲ-1				
SP85	B4	Ⅲ-1		?		
SK86	B4	Ⅲ-1				
SP87	B4	Ⅲ-1				
SP88	A4	Ⅲ-1				
SP89	A4	Ⅲ-1				
SP90	A4	Ⅲ-1				
SP91	A4	Ⅲ-1				
SP92	A4	Ⅲ-1		?		
SP93	A4	Ⅲ-1				
SK94	A4	Ⅲ-1		?		
SP95	A4,A5	Ⅲ-1				
SP96	A4	Ⅲ-1		?		
SP97	B4	Ⅲ-1		18c ?		
SP98	A4	Ⅲ-1				
SP99	A4	Ⅲ-1				
SP100	B4	Ⅲ-1				
SP101	B4	Ⅲ-1				
SP102	B4	Ⅲ-1		?		
SP103	B4	Ⅲ-1				
SP104	B4	Ⅲ-1				

Ⅲ-1 表 検出遺構一覧表 (2)



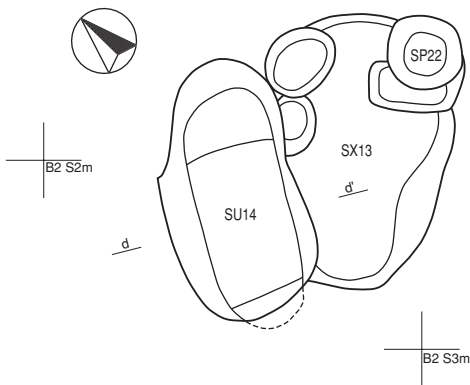
Ⅲ-1 図 小石川植物園構内遺跡 研究温室地点遺構配置図



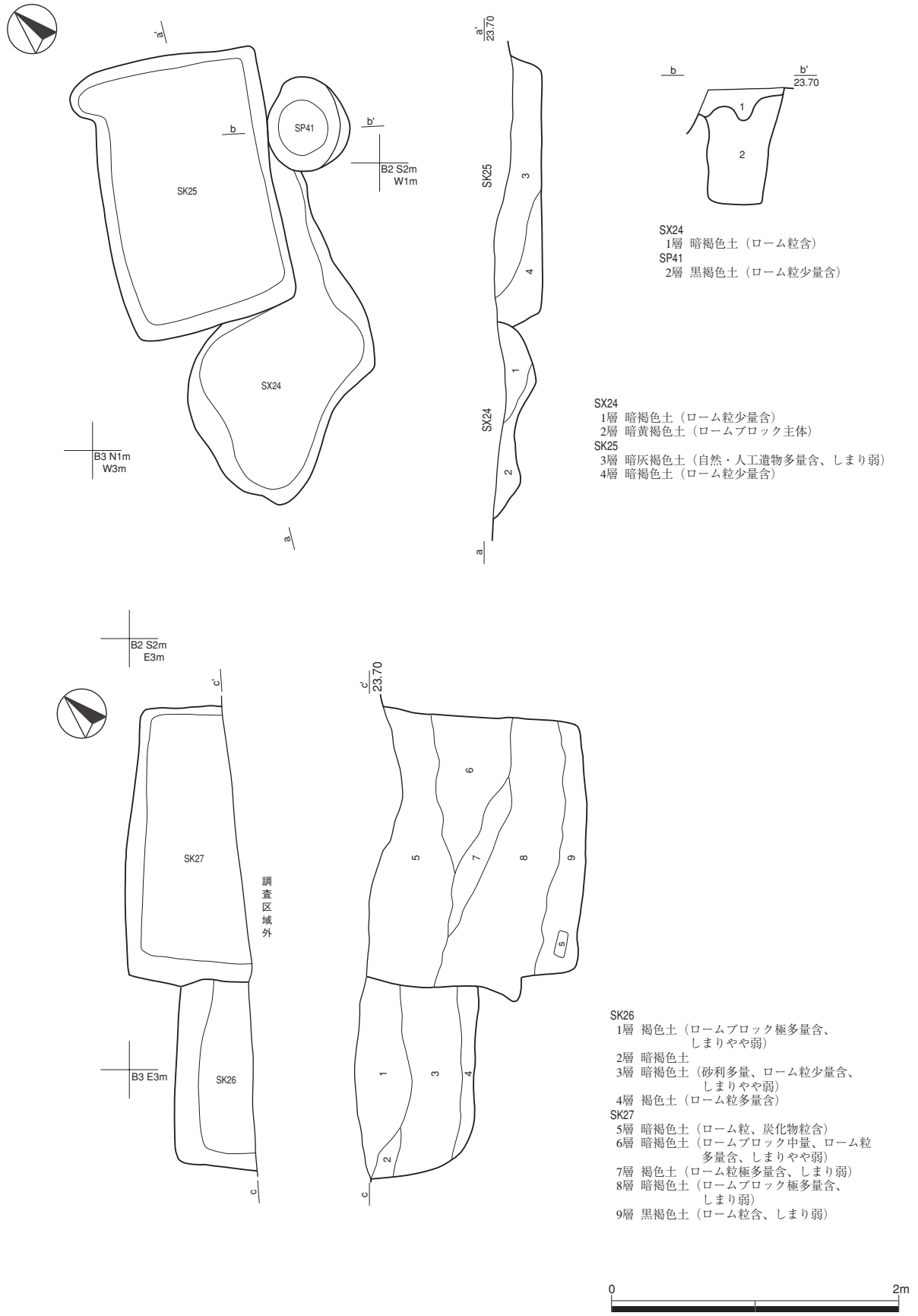
- SK1**
- 1層 暗褐色土 (砂利含、ローム粒微量含)
  - 2層 暗褐色土 (ローム粒多量含、しまりやや弱)
  - 3層 暗褐色土 (ローム粒含、粘性やや強、しまりやや弱)
  - 4層 ロームブロック
  - 5層 褐色土 (ローム粒極多量含、粘性やや強、しまり弱)

- SK33**
- 1層 暗褐色土 (焼土粒、ローム粒、炭化物粒含、粘性、しまりやや弱)
  - 2層 暗褐色土 (ロームブロック多量含、しまりやや弱)
  - 3層 黒褐色土 (ローム粒、炭化物粒、自然遺物含、しまり弱)
  - 4層 暗褐色土 (ローム粗粒含、粘性やや強、しまり弱)

- SP52**
- 1層 暗褐色土 (ローム粒含、しまりやや強)
- SK42**
- 2層 褐色土 (砂利、ローム粒、炭化物粒少量含)
  - 3層 淡灰褐色土 (炭化物粒少量含、粘性やや強)
  - 4層 褐色土 (ローム粒多量含)
- SP44**
- 5層 暗褐色土 (ローム粒含)

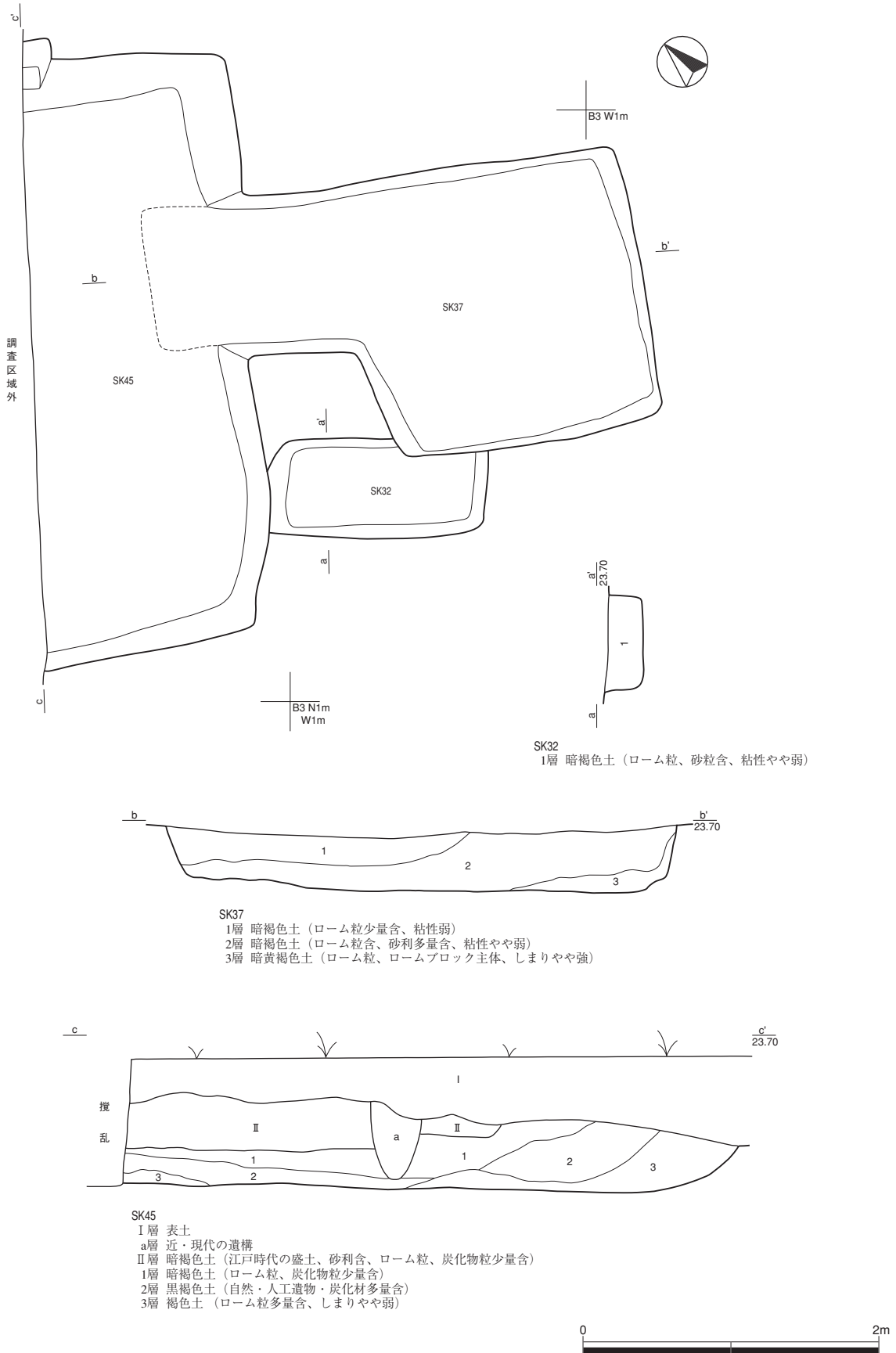


Ⅲ-2 図 SK1、SX13、SU14、SP22、SK33、SK42、SP44、SP52



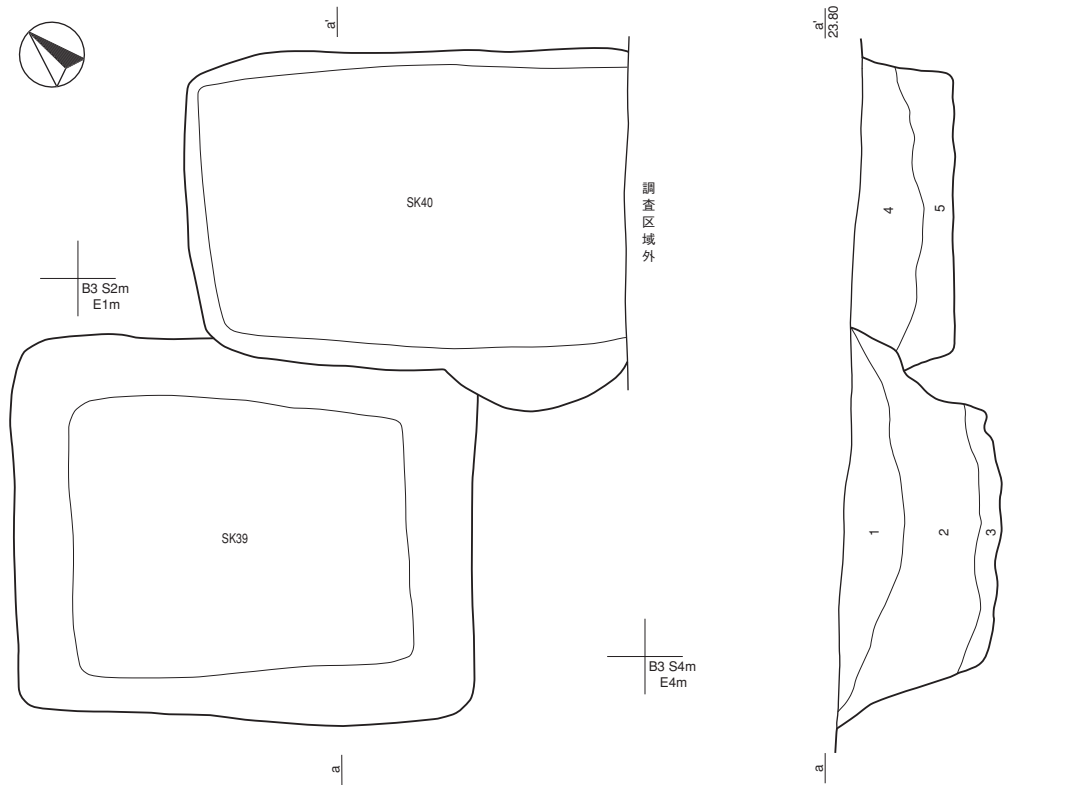
III-3 図 SX24、SK25、SK26、SK27、SP41



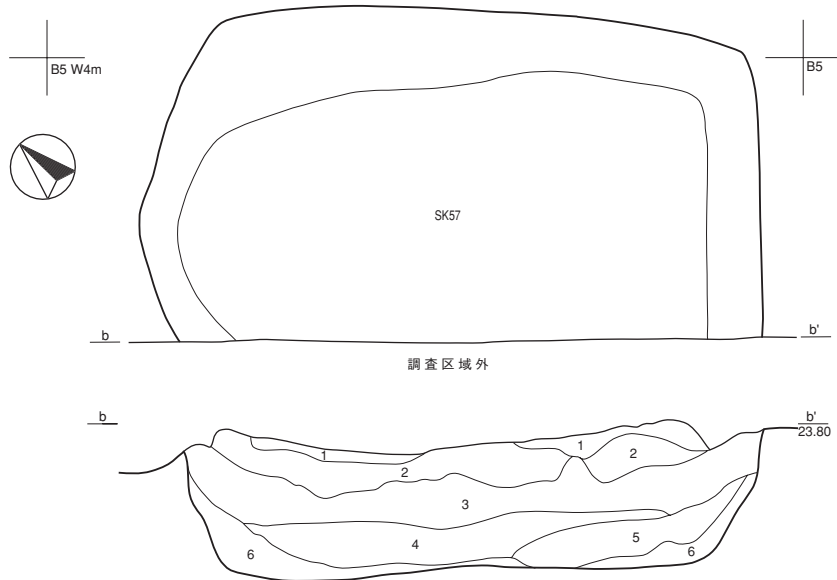


Ⅲ-4 図 SK32、SK37、SK45

第三章 江戸時代の遺構と遺物



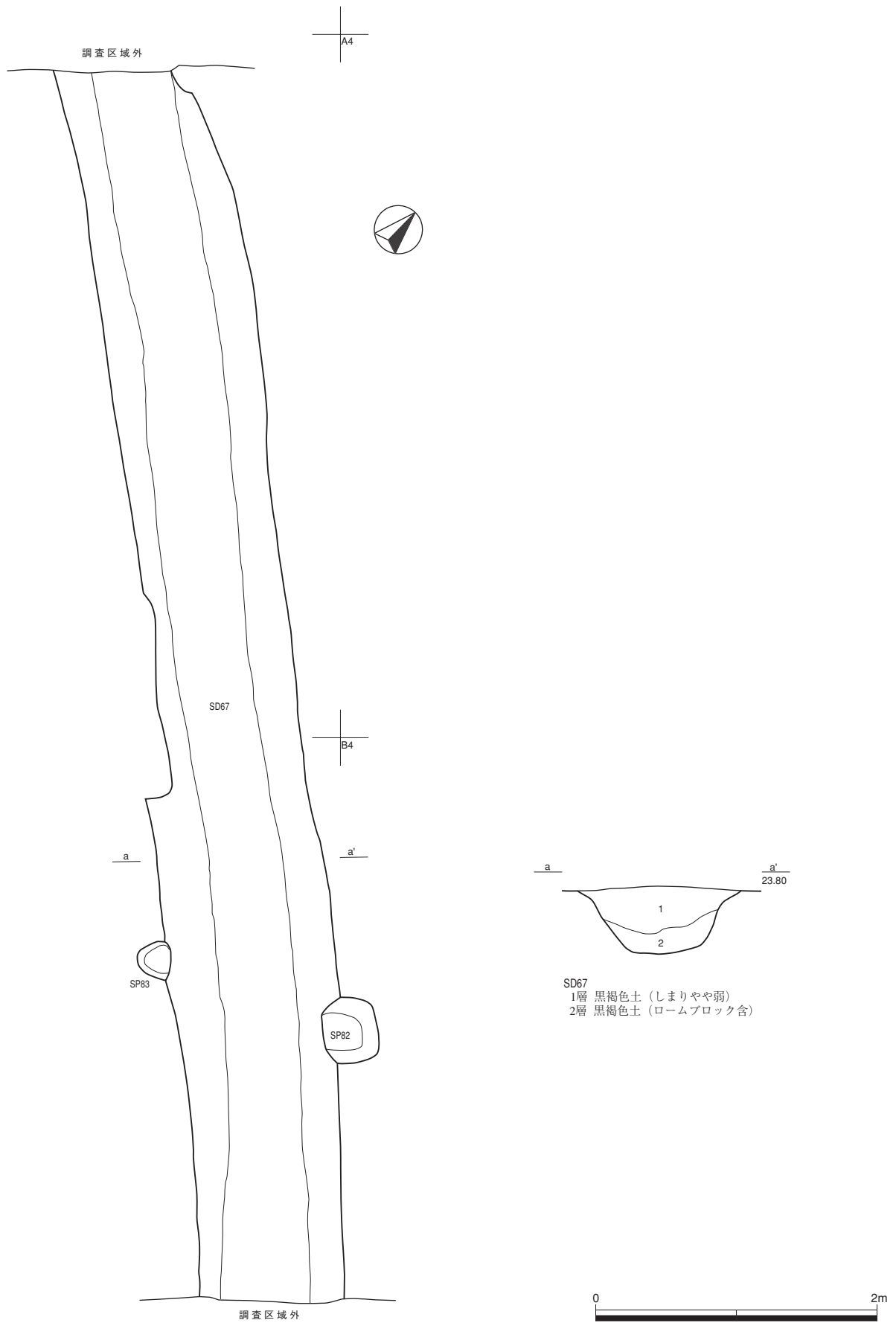
- SK39  
 1層 暗褐色土 (砂質土、粘性弱、しまりやや強)  
 2層 黒褐色土 (砂利多量含、しまりやや弱)  
 3層 暗黄褐色土 (ロームブロック主体、粘性やや強、しまりやや弱)  
 SK40  
 5層 暗黄褐色土 (ロームブロック主体)  
 6層 黒褐色土 (砂利多量含、粘性・しまりやや弱)



- SK57  
 1層 褐色土  
 2層 暗褐色土 (ローム粒・炭化物少量含)  
 3層 暗褐色土 (自然・人工遺物・炭化物多量含)  
 4層 褐色土 (ローム粒・礫含、粘性粘性やや弱)  
 5層 暗褐色土 (炭化物・礫含、粘性なし)  
 6層 明褐色土 (ローム粒多量、自然・人工遺物・炭化物少量含、粘性なし)



III-5 図 SK39、SK40、SK57



Ⅲ-6 図 SD67、SP82、SP83

## 第2節 出土した遺物

本地点の調査からはコンテナにして約70箱の遺物が出土している。出土遺物の帰属年代は大きく白山御殿段階と小石川御薬園・武家地段階に大別でき、前者にはSK27、SK45、SK57が、後者にはSU14やSX13、SK25、SK33が含まれる。特にSK45、SK57はかわらけを主体とした人工遺物とともに多量の動物遺体も出土しており、綱吉の御成との関連を窺わせる資料として注目される。以下に各遺構出土遺物の詳細を記述する。

### SK1 (Ⅲ-7 図)

1は京・信楽の半球形碗でTD-1-bである。推定口径は約9cmと小振りであるが、高台脇から体部にかけてのプロポーシオンは丸味を帯びて湾曲している。高台は丁寧に削り出され、外側はほぼ垂直に、内側はやや外傾して立ち上がる。畳付けの面取りは認められない。口縁部から体部上半にかけて草花文を描いた上絵付けの痕跡が認められるが、上絵の具は全て剥離しており、色調は不明である。2は備前の甕でTE-15である。胴張りの甕で最大径は体上半部にある。体部は最大径を測る部分より頸部にかけて螺旋状の沈線が密に施されている。口縁部は逆L字状に張り出しており、口唇部内側には耐火砂の熔着が認められる。胎土には白色砂粒が多く含まれ、体下半部と底部では成形時のケズリによって砂粒が大きく動いた痕跡が認められる。体部には自然釉による変色部分があり、内体部には火襷が認められる。底部には扇内に「大」の刻印が施されている。3～6は左回転のロクロ成形によるかわらけでDZ-2-bである。いずれも折り返し成形の特徴を有している。7は磨きかわらけでDZ-2-dである。底部から口縁にかけて丁寧なミガキが施されているが、内面のミガキはほとんど認められず、3～6例と同様、内底部から内体部への移行部に折り返しによる稜を残す。器形的にも体部の立ち上がりが強く、かつ内底部から内体部かけてもケズリは認められず内体部の立ち上がりにも稜を残すことで、本類の基準資料とは異なった様相を示す。8は軟質瓦質による変形鉢でDZ-5である。板作りによって成形されており、平面形は木瓜状を呈している。底部はほぼ平坦でかたどられており、貼り付けによる体部はやや外傾して立ち上がる。接合部分はナデによって丁寧に調整が施され、やや凹んだ状態になっている。口縁部はやや外反し、口唇部は幅約1cmのほぼ平坦な面を有している。体上半部から口唇にかけて貼り付けられたパーツの痕跡が1ヶ所認められるが、全体的な数、機能ともに不明である。器面全面に鉛釉が施されているが、特に口唇部から体部にかけて器面に合わせて白泥を施しその上に緑釉を流し掛けすることにより文様を施している。本資料はSK33と接合する。破片数は本遺構出土資料の点数が上回るが、鉛釉の施釉などからSK33に帰属する資料の可能性が高い。9はほうろくでDZ-47-aである。口縁部が約1/3遺存しているのみで、内耳の有無は不明である。外面は口縁下の湾曲部分から器面に縮れ痕が認められる。また体部にはススの痕跡も認められる。

### SX13 (Ⅲ-7、8 図)

1～7は磁器碗である。1は肥前の染付丸碗でJB-1-eである。体部は高台脇で内湾し、比較的直線的に開きながら立ち上がる。釉は、畳付けに合わせて施釉されているが、釉際の処理はやや粗い。文様は3単位の花唐草を体部一面に描き、口縁内側には四方襷の帯文を巡らせ、見込みには二重圏線内に手書き五弁花を高台内には二重角枠内に渦福を描いている。2、3は肥前の染付端反碗でJB-1-nである。2は初現期の肥前端反碗と比較すると、口縁の外反も弱く、口径に対して器高が低い。また底部の厚さも厚いことから、19世紀中葉の量産品と推定される。文様は外面に花文を巡らし、口縁

部内側には帯文を巡らし、見込みにはワンポイントを施している。3は2と比較して口径対器高比がほぼ同一で器形的には類似しているが、底部厚が薄く、釉際の処理も丁寧に施されている。文様は挿絵と文章によって「赤壁賦」を染付している。口縁内側には帯文を巡らし、見込みには「永楽年製」が描かれている。また高台内には二重角枠内に異形字が描かれている。4～6は瀬戸・美濃の広東碗でJC-1-cである。4は口径9.3cmとやや小振りの製品である。文様は上絵付けによる花文様で、黒絵の具で輪郭、縁取りし、花を黄、赤、葉を緑で塗りつぶしている。5、6は染付の広東碗である。5の胎土はやや灰色を帯びていることから、器面は灰褐色を呈している。体部には草鳥文が、口縁内側には二重圏線を巡らし、見込みには一重圏線内に帆船が描かれている。6は体部に鋸歯状文が巡り、口縁内側には一重圏線を巡らし、見込みには一重圏線内に花文が描かれている。7は瀬戸・美濃の染付端反碗でJC-1-dである。外面には毛彫りで素描を施した風景にダミで濃淡をつけ描いている。口縁内側には染付線による帯文様が、見込みには一重圏線内に「寿」字が書かれている。高台釉際は施釉後の調整は施されていない。8は瀬戸・美濃の染付皿でJC-2-aである。高台は蛇ノ目凹形高台を呈する。胎土は灰褐色を呈し、鉄分による微細黒斑が認められる。見込み文様は同心円上3単位に区画され、見込み中央と側面は草花文が描かれ、見込み周辺部は無文帯を形成している。裏文様には幾何学文様を散らしている。9は肥前の染付蓋物でJB-13-bに属する。器形は円筒形を呈し、底部は無釉でベタ底になっている。体部には染付によって銀杏文が巡る。10は瀬戸・美濃の餌入れでTC-30である。底部以外に灰釉が施されている。底部はベタ底であるが、底部は全てケズリによって調整されている。特に外側は体下部に向けて比較的丁寧に調整されている。11は京・信楽の油受け皿でTD-40-bである。口縁から見込み全域にかけて透明釉が施されている。底部無釉部分には見込みの油受け部とほぼ同規模の環状痕が認められ、重ね焼き焼成によって生産されていたと判断される。12は土瓶でTZ-34-cである。胎土は白色・黒色微砂粒を多量に含む褐色を呈する。注口部、底部は残存していない。釣り手掛けは一段角を有する山形を呈している。釉は底部と口縁内側を除き、施されている。口唇部は非常に平滑で滑らかな状態を呈しており、おそらく焼成後に磨かれたものと推測される。文様は白泥を施した上に緑釉と鉄絵によって人物が描かれている。13はひょうそくでDZ-44-cである。体部約1/2を欠損している。芯押さえには灯心痕が認められる。14は円盤状石製品である。表面はドーム状に研磨されているが、背面はほぼ平坦に研磨されている。色調は淡緑色を呈し、全体的にマール状の模様が含まれている。性格は不明。

#### SU14 (Ⅲ-8、9 図)

1は肥前の染付小広東碗でJB-1-iである。高台は畳付けに向かって薄くなり、断面形は三角形状を呈する。体部には異形字文様が巡らされており、口縁内側には二重圏線を施し、見込み中央には一重圏線内に異形字が描かれている。2は肥前の染付広東碗の蓋でJB-00-bである。外面には線書きによって3単位の花唐草文が巡らされ、内面は中央部に線書きによってコウモリが、側縁には3単位の唐草文が描かれている。3は肥前の染付蓋物の身でJB-13-aである。高台は低く、畳付け外側がケズリによって面取りされている。体部は腰が張った器形を呈している。蓋受け部は口唇から内体部上部まで無釉であるが、内面の釉際は掛け流し状態で蛇行している。素地は灰白色を呈し黒斑を含む。文様は体部に幾何学文を描いた6単位の丸文が配されている。4は肥前の染付筒形蓋物の身でJB-13-bである。高台はやや幅広で断面形はU字形を呈する。体部はほぼ直立するが、口縁部でやや外反している。蓋受け部の口唇部外側から口縁部内側までを無釉帯とし、施釉後に丁寧に拭き取られている。文様は染付線で仕切られた4単位の方形区画内に梅樹文と椿文が交互に描かれている。5は瀬戸・美濃の腰鍔碗でTC-1-uである。口径対器高比は5:3である。体部中央には4～5条の沈

線が螺旋状に施されている。釉は沈線上端から高台内まで鉄釉が、沈線上端から内面にかけて灰釉が施されている。畳付けは施釉後に釉を削り取っているが、一部、垂下した釉薬によって耐火砂が熔着している。6は京・信楽の小杉碗でTD-1-dである。高台は外側が直立、内側が外傾しており、畳付け外側は面取りが施されている。体部は緩やかに内湾しながら逆ハの字状に立ち上がる。文様は根引き松が銕絵染付で描かれているが、葉の部分は簡略化され、葉先に3ヶ所染付のアクセントが施されているにすぎない。7は瀬戸・美濃の灰釉二耳壺でTC-15である。底部は無釉で、高台脇から口唇外側にかけて灰釉が施されている。また内面も極薄く灰釉が施されている。肩部には粘土紐による把手が2ヶ所貼り付けられている。8、9は瀬戸・美濃の五合徳利でTC-10-dである。8は胴下半部約1/2が遺存しているにすぎない。釉は暗緑色の灰釉が施されている。「…まらや」の文字と、屋号と推定される「H」字状の記号が釘書きされている。9は胴下半部を一部欠損しているもののほぼ完形である。高台内のケズリは約1mmと浅い。体部は胴中央部に最大径を持つ太鼓状を呈しているが、ほぼ直線的に立ち上がっていると言っても過言ではない。肩部の張りは強く、頸部から口縁にかけてほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は折り返しによる縁帯をわずかに有し、口唇に向けて内傾する。肩部には幅約1mmの微細沈線が4～5条螺旋状に施され、胴部には幅約5mmの浅い沈線が4～5条巡らされている。釉は褐色を呈する灰釉を底部から口縁部内側にかけて施した後、底部の釉を拭き取っている。内面は無釉である。また、胴部には「八に口」を表した屋号が釘書きされている。10は瀬戸・美濃の灰釉火鉢でTC-31である。胴下半部約1/2が遺存しているにすぎない。高台高は約6mmを測る。体部は高台から直接ほぼ垂直に立ち上がっている。また高台には幅約4cmを測るアーチ状の挟りがあり、その配置から全体では4ヶ所存在したものと推定される。底部には深さ約1cm、直径約3mmを測る未貫通の孔が2ヶ所存在する。その配置から全体でも2ヶ所と推測される。この孔は未貫通であることと、その規模から火鉢を木製外枠に固定するための装置と考えられる。釉は体外面に緑褐色の灰釉が施されており、底部、内面は無釉である。胴部には横位の沈線による区画内に雲形文、花文、渦巻き文がスタンプによって陰刻されている。底部には内外両面からの敲打による直径約25mmの穿孔が認められることから、最終的に植木鉢として利用されたことがわかる。また、底部、内底面、内側面に墨書が認められる。内底面から内側面にかけての墨書は鳥、唐草？などが描かれているが、その配置から一連の意匠と考えられる。一方、底部の墨書は「…日」「…元年」「於本郷求之百七拾口」と書かれており、本製品の所有者が本郷の瀬戸物屋などにて、おそらく170文で購入した記録と受け止められ、陶磁器の購入価格を知ることのできる資料である。11はかわらけでDZ-2である。底部と体部の境には明確な稜を有している。器面全体にススが付着し、表面は黒褐色を呈しているが、特に口縁付近では顕著である。12は塩壺でDZ-51-abである。板作り成形による塩壺で底部は外側から貼付しているが、押し込んで表面を簡単に伸ばした程度の調整のみで、内底部も団子状のままである。口唇部は平坦であるが、口唇内側がわずかに隆起している。底部にはスタレ状の圧痕が認められる。胎土は燈褐色を呈し、金雲母、石英微粒を含む。

#### SK25 (Ⅲ-10～12 図)

1は肥前の染付筒形碗でJB-1-1である。胎土はやや鉄分を含有する灰白色を呈している。文様は高台脇に折れ松葉が2単位描かれ、体部には花文を散らしている。口縁内側には二重圏線が、内底部には一重圏線内にコンニャク印判による五弁花が施されている。2は瀬戸・美濃の染付丸碗でJC-1-aである。高台はU字形を呈するが、内側のケズリが深く、底部は比較的薄い作りになっている。体部には格子文をあしらった丸文と四菱状の幾何学文が3単位配されている。口縁内側には連鎖文状の帯文が描かれ、見込みには一重圏線内に花文が地呉須により染付されている。3は瀬戸・美濃の

染付端反碗で JC-1-d である。高台断面は U 字形を呈し、やや外傾する。体部は丸味を帯びて立ち上がり口縁で緩やかに外反する。体部中央には染付線による連鎖文が巡り、その上下に細かい線書きによる地紋が描かれている。口縁内側には交差する半円形を繋いだ帯文が描かれ、見込みには一重圏線内に「寿」字が描かれている。4、5 は肥前の染付湯呑碗で JB-1-o である。4 の胎土は灰白色を呈する。体部文様は蝶、扇子、花文が描かれているが、花文の葉の表現には 18 世紀末からよく用いられるダミ線のみによる表現手法によって描かれている。内面にはわずかではあるが黄褐色の付着物が認められる。また、高台は細かい剥離によって畳付が全て失われている。その状況から人為的による欠損（二次加工）と推定されるが理由は不明である。5 は 4 と比較して高台径が大きく、底部も薄く作られている。文様は高台に櫛歯状の帯文が描かれ、体部には蝶、折り枝桃、口縁内側には雷文状の帯文が描かれている。桃の実、葉、蝶の羽根は濃淡のグラデーションを用いたダミで埋められており、整形、文様ともに丁寧な作りといえよう。6 は瀬戸・美濃の染付湯呑碗で JC-1-e である。高台径は 4 とほぼ同等であるが、器高は 4、5 に対し低い。体部文様は毛彫りと呉須を併用して動物？が描かれている。内面全体と外面の一部に茶褐色の物質が付着している。その色調から鉄分に由来する物質と推定される。7、8 は肥前の染付皿である。7 は JB-2-g に分類され、高台断面は丸味を帯びた三角形を呈し、高台際では幅 7mm を測る。底部も 7~9mm と厚く、全体的に粗雑な作りとなっている。文様は見込み中央にコンニャク印判による五弁花を配し、側面には 2 単位の花文様が描かれている。裏文様は一本線による唐草が、高台内には省略化された渦福が描かれている。8 は JB-2-e に分類され、高台断面は U 字状を呈し、やや内傾している。体部は高台脇からほぼ水平方向に張り出し、大きく内湾して口縁に至る。高台径は口径の 65% と大きいがハリ支えは用いられていない。見込みにはやや明るい藍色の呉須によって龍が描かれており、裏文様は一本線によって唐草文が描かれている。9 は瀬戸・美濃の染付皿で JC-2-a である。高台は蛇ノ目凹形高台で 52×47mm を測る楕円形の窯道具の痕跡が認められる。蛇ノ目無釉部の釉際の処理は甘く、窯道具が一部熔着している。見込み文様は中央に丸文を配し、無文帯をはさんで側面には唐草状の文様が描かれている。裏文様は一本線による唐草が染付されている。10 は瀬戸・美濃の青磁型皿で JC-2-e である。高台も含め型打成形によって作られているため、畳付には縮れが認められる。見込みには陽刻による花唐草文が施されている。青磁釉は深緑色に発色し、平均 1mm 程度の厚さで掛けられている。11 は瀬戸・美濃の染付皿で JC-2-b である。高台高は 9mm と高く、木盃状の器形を呈している。見込みには花蝶文が、側面には花唐草文が、裏文様には一本線による唐草文が描かれている。呉須の色調は明るい藍色に発色している。12 は肥前の染付小坏で JB-6-a である。高台幅は 3mm と広く、畳付両端には面取りが施されている。体部は高台脇で腰が張り、やや外傾しながら立ち上がっている。文様は 1ヶ所窓絵を配し、船に乗る人物を描き、窓絵の外側には赤壁賦が書かれている。13~16 は瀬戸・美濃の小坏である。13 は JC-6-d に分類される。高台高は 5mm と高い丸碗形の小坏である。高台の櫛歯文様と高台内の銘が染付によって描かれている。見込みには「大入帳」「柀」「的に当たった矢」が笹の枝に下げられている。柀と的の輪郭が太く強調されていることから「アタリマス」を表しているものと考えられる。笹の右上には「駒込」の地名が、左下には二段角の菱形内に「吉」が描かれている。これらから駒込にある菱形に吉の屋号を持つ店のノベルティグッズと推定される。「アタリマス」が業種を表現しているのか、キャッチコピーかは不明である。見込み文様はいわゆる「錦書」とよばれる鉛ガラスと呉須を混合した絵の具を用い消費地において上絵付けされたものである（朝倉・柏川編 1992）。14~16 は JC-6-a に分類される。14 の体部には花と蝶が交互に染付され、2 単位の文様を構成している。15 は体部全面に鳳凰が描かれているが、頭部、両翼などが微細な線書きで表現されている。

16 は体部に牛と人物が描かれている。高台には染付線の区画内に櫛歯状の帯文が施されている。高台内には「清玩」の銘が書かれている。呉須は鮮やかな藍色に発色している。17、18 は肥前の染付蓋物である。17 は丸碗形の蓋物の身で JB-13-a に分類される。高台断面は U 字形を基本とするが、高台外側はかなり内傾している。体部は腰が張っており、口縁部に向けてやや外傾して立ち上がる。口唇外側から口縁内側にかけて蓋受けのために釉が丁寧に削り取られている。文様は 3 単位の花唐草文が描かれているが、花、蔓部分ともに縁取りの輪郭の外側にダミを掛けた白抜きの表現方法をとっている。18 は JB-13-c に分類される段重の上段ないし中段である。底部の撓みは焼成時の変形である。底部脇には体部受けの一段を削り取っているが、その部分は全体的にアルミナの付着が認められる。一方、口唇部では認められない。文様は幾何学文様の地文上に 6 単位の雪輪文を配しているが、焼成不良により呉須が流れ、全体的に滲んだ状態を呈している。19 は備前の皿で TE-2 である。型打成形によって菊花をかたどった型皿である。整形後、全体的に鉄泥を掛けている。20 は産地不明の焼締め陶器鉢で TZ-5 である。底部は丁寧に磨かれ、緩やかな上げ底になっているが、糸切り痕の痕跡が一部残っている。胴部は底部脇から屈曲して立ち上がり、太鼓状の膨らみを有し最大径は胴部ほぼ中央にある。頸部から口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁は幅 1cm の縁帯を形成し、口唇中央がやや凹んだ Y 字状口縁をなす。胴部中央には指頭圧痕と推定される凹みが 2ヶ所つけられている。器面は自然釉によって暗茶褐色～黒褐色に発色している。胎土は緻密で、微砂粒を微量含有し、暗茶褐色～暗赤茶褐色を呈する。21 は瀬戸・美濃の徳利で TC-10-g である。底部は回転糸切り後にケズリによる調整が施されているが、中央部分に糸切り痕を残している。体部は中央やや下に最大径を有し、2ヶ所の凹みが付けられている。また凹み周囲には窯詰め時の熔着痕が認められる。肩部は強く屈曲し頸部に移行しているが、頸部には環状の熔着痕が認められ、筒状の窯道具を被せ、重ね積みされていたことが推定される。体部の熔着痕を合わせ、本製品が大量生産されていたことを物語っている。釉は柿釉が底部を除き施されているが、掛けむらが多くみられる。22 は TZ-34 に分類される土瓶の底部片である。底部は暗赤褐色に変色し、体下半部にはススの付着が顕著に認められる。底部脇には長方形角枠の刻印が認められるが、内容は不明である。内面には灰釉が施されているが、鉄釉が斑状に認められることから、外面には鉄釉が掛けられていたと推定される。23 は萬古の急須で TI-16 である。厚さ 2mm の板材を素材とした型打成形によって作られている。体上半にはつまみ出しによる隆帯によって亀甲模様が施されている。口縁部から蓋受けは体部を折り返して作出されている。把手は板材を丸め上部で貼り合わせている。また先端部は両角を内側に折り倒して三角形にし、その先端部分に粘土紐を環状に貼り付けている。残存はしていないが、この部分に遊環が装着されていたと推定される。注口部と体部の接合部には外側から 9ヶ所の濾し穴が穿たれている。24、25 は産地不明の急須で TZ-16 である。24b は 24a に伴う蓋で TZ-00-s に分類される。白色微粒を含む緻密な胎土で、色調は暗褐色を呈し、硬く焼き締められている。体部にはロクロ成形による稜線が顕著に認められるが、これは注口部、把手ともに認められ、意匠として意識されたものと推定される。体上半部と蓋の表面には降灰によると推定される黄白色の斑点が顕著に認められる。濾し穴は 3ヶ穿たれている。25 は把手を欠損している。底部はドーム状の上げ底になっており、同心円状の調整痕を残す。体部は丸味を持って立ち上がり、最大径は体部下半にある。頸部はくの字状に屈曲し口縁部へ移行する。頸部および肩部に沈線が巡っている。体部は無釉であるが非常に丁寧に磨かれている。体部には白、赤、黒絵の具によって人物文様が描かれている。26 は TD-61 で、灰釉端反碗のミニチュアである。高台断面は長方形を呈するが、暈付外側がわずかに面取りされている。体部は丸味を帯びて立ち上がり、体上半部から口縁部にかけてはやや内傾する。続く口縁部は強く外反し、玉縁状を呈



している。釉は黄白色を呈し、底部以外に掛けられている。27は軟質瓦質の植木鉢でDZ-21-bである。胎土は白色微粒をわずかに含む比較的緻密な素地を使用し、全体的な色調は暗灰褐色を呈するが、体上半部から口唇部に掛けては黒く変色している。底部には左回転の糸切り痕を残す。体部はハの字状に立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は平坦に作出されている。体内外部ともにロク口痕を顕著に残している。底部ほぼ中央には外底部側からの刺突によって孔が穿たれている。28は土師質の火鉢でDZ-31である。胎土は白色微粒をわずかに含む比較的緻密な素地を使用し、色調は燈褐色を呈している。底部は平底で脚は認められない。体部はほぼ垂直に立ち上がり、円筒形を呈している。口縁内側がやや肥厚しており、その部分には全面に敲打痕が認められる。口唇部から内体部上半にかけて赤彩が施されているが、特に口唇に近い部分で丁寧に厚く塗られている。29、30はほうろくでDZ-47-aである。ともに口縁部破片である。29は推定口径23cmを測る。体部から口唇部にかけてと内底部には、ススおよびタール状の付着物が顕著に認められる。30は推定口径32.6cmを測る。29同様に体部から口唇部に掛けてと内底部には、ススおよびタール状の付着物が認められる。31は姉様人形でDZ-60-dである。頭部を一部欠損している。正面、背面2枚の型を合わせて製作されており、中は中空になっている。白、緑を使用して彩色され、底部を除く全面に鉛釉が施されている。32～34はDZ-55である。32は泥面子で上面には型押しによって、放射状文様が描かれている。本製品は全ての面において、著しい摩耗痕が認められるが、使用痕、再加工痕のいずれかであるかは不明である。胎土は基本的に燈褐色を呈しているが、全体的にマーブル状の縞模様が入っている。33、34は芥子面で、33は笛を吹く人物が、34は魚が型どられている。いずれも胎土の色調は燈褐色である。35は軒棧瓦である。瓦当文様は、花状の中心飾り、唐草下上二反転、子葉から構成される均整唐草文が、一条の隆帯によって形成されている。いわゆる「江戸式」である(加藤1988)。

#### SK27 (Ⅲ-12～14 図)

1～3は肥前の染付碗でJB-1-dである。1はU字形高台の高いタイプであるが、高台外側は内傾し、断面三角形高台の面影を残している。器厚は全体的に薄く、丁寧に整形されている。高台内に一重圏線、高台際に二重圏線を巡らせている。文様は花文様が描かれている。胎土は白色で、器面全体に微細な貫入が入っている。2は高台内に一重圏線、高台には二重圏線を巡らせている。高台脇には染付線を一周させ、その上に柳文を描いている。見込みには焼成時における降灰痕がわずかに認められる。また、見込みには同心円状の擦痕が認められる。3は淡黄白色の胎土で、全体的に微細な貫入が入っている。文様は橋と植物が描かれているが、高台脇に染付線を配さず、地面を表したダミ線が高台部まで及んでいる。このような描写方法は本類に多くみられる。4、5は肥前の染付皿である。4はJB-2-cである。高台径は口径の約3/5と広く、高台内には1ヶ所のハリ支え痕が認められる。高台内のケズリは浅く、底部の器厚は体部と比較して厚く作出されている。逆に体部は全体的に厚さ2mm未満と非常に薄い作りである。文様は高台内に二重圏線が描かれ、外側面は薄瑠璃で埋められている。見込みには異形字を描いた短冊と花文様が描かれている。胎土は白色を呈し、やや青みを帯びた透明釉が掛けられている。5はJB-2-eである。高台はU字形を呈し、畳付には一部砂が付着している。体部は丸味を帯びて立ち上がり、器高は3.7cmを測る。見込みは墨弾きで輪郭を表現した雲形状の地面に花文を描いている。裏文様は如意頭唐草文が巡っているが、蔓は一本線で描かれ、如意頭部分は雨滴形に簡略化され、ダミも施されていない。6は肥前の染付端反小坏でJB-6-bである。高台断面は緩やかな三角形を呈し、体部は丸味を帯びて立ち上がり口縁部で緩やかに外反する。底部から体部を通し、全体的に薄作りで整形されている。高台内には「宣徳年製」銘が書かれている。体部には網干文が描かれている。7は肥前の京焼風陶器碗でTB-1-bである。胎土は淡褐色を呈し、釉

には全体的に微細な貫入が入っている。底部は無釉である。高台は内側が外傾、外側が直立し、断面形は逆台形を呈する。また高台内のケズリは浅く、底部の器厚は厚い。体部は高台脇から丸味を帯びて立ち上がり、体中位から口縁にかけてはほぼ直立している。体部には呉須によって文様が描かれている。一部分しか残存していないが、おそらく楼閣山水文であろう。底部には「清水」の刻印が施されている。8～12はかわらけである。8はDZ-2-aで、右回転のロクロ成形によるかわらけである。胎土には茶褐色微粒を含有し、色調は燈褐色を呈している。底部脇には明瞭な稜線があり、それを境に体部へ移行する。見込みには渦巻き状の整形痕が認められる。見込みには丸に放射状の文様が墨書され、文字も併記されているが、判読不明である。底部には花卉状の文様が、外側面には一重圏線が墨書されている。9～12はDZ-2-bで、左回転のロクロ成形によるかわらけである。9は底部と体部との境に明瞭な稜を有し、体部はほぼ直線的に立ち上がる。見込みは丁寧に整形されほぼ平坦である。見込み中央には直径約6mmの孔が主に底部側からの打撃によって穿たれている。10は茶褐色粒、白色微粒を含む褐色土を胎土とし、見込みから口縁部にかけて波打って立ち上がっている。11は茶褐色粒、雲母を含む胎土を有す。底部にはムシロ状の圧痕が残っている。底部脇にはいわゆる折り返し技法の痕跡が認められる。外側面の一部にはススの付着が認められるが、口唇部には1ヶ所程度とほとんど見受けられない。12は底部と体部の境に明瞭な稜を有し、ほぼ直線的に立ち上がる。底部から外側面にかけて火襖状の黒色変色域が認められる。13～16は塩壺である。13～15はDZ-51-dである。13は輪積み成形によって作られた製品で、2ヶ所の輪積み痕が認められる。胎土には白色粒子を含み、色調は燈褐色を呈す。体部は円筒形を呈し、口縁直下に緩やかにくびれが認められる。また体部には縦方向の稜が10条存在し、体部の断面形は不整10角形を呈している。口縁部内側は横方向のナデによって整形されているが、内底部から内体部上半にかけては無調整で、布目圧痕と縦方向の稜が存在する。その様相から布を被せた六角形の棒状工具を芯棒に利用したことが窺われる。体下半部には一重角枠内に「天下一御壺塩師堺見など伊織」銘が刻印されている。14は輪積み成形によって作られ、内体部には2ヶ所の輪積み痕が認められる。胎土は白色微粒を含む燈褐色で、胴部はやや膨らみを有し、口縁直下に緩やかにくびれが認められる。口縁部内側はナデによって調整されているが、内底部から内体部上半にかけて六角形と推定される棒状工具痕と布目圧痕が残存する。体上半部は一重角枠内に「天下一御壺塩師堺見など伊織」銘が刻印されているが、「天下一」部分が焼成前に削り取られていることが観察される。15は輪積み成形によって作られた製品で、内体部には2ヶ所の輪積み痕を残す。胎土には白色粒子を含み、色調は燈褐色～暗黄褐色を呈している。胴部はほぼ円筒形を呈し、口縁直下には緩やかにくびれが認められる。口縁は横方向のナデによって整形されているが、内底部から内体部上半にかけては無調整で、六角形と推定される棒状工具痕と布目圧痕が存在する。体上半部には一重角枠内に「天下一御壺塩師堺見など伊織」の銘が刻印されているが、「天下一」部分のみ焼成前に削り取られている。16は板作りの塩壺でDZ-51-hである。底部は内側から充填されている。体部はハの字状に立ち上がるものの、下半部ではわずかに外反気味に立ち上がり、体中位から緩やかに内湾する。蓋受けはほぼ直角に屈曲し、約5mm幅の平坦部を作出している。口縁外側は内傾し、口縁断面は三角形を呈する。内体部には相対する2条の縫い目痕が縦方向に伸び、底部際で横方向に一周する縫い目痕と接続する。体上半部には二重角枠内に「泉州麻生」銘の刻印が施されている。17は塩壺の蓋でDZ-00-aである。手づくねによりドーム状に成形されている。胎土には白色粒子を含み、色調は褐色を呈する。18は釜形土製品でDZ-5-cである。左回転のロクロ成形である。罌はやや下方気味に張り出している。口縁はわずかに内傾して立ち上がり、数条の沈線が巡っている。19は軟質瓦質の火鉢でDZ-31-bである。輪積み成形で三足の脚を有する。底部にはす

だれ状の圧痕が認められる。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部でやや外反する。また内体部上半が内傾することによって口縁部は肥厚し、口唇部は幅 2cm の平縁を成す。口唇部は非常に丁寧に磨かれているが、口唇部内側は使用時における敲打痕が顕著に認められる。20 は土師質の香炉・火入れで DZ-9 である。平面形は八角形を呈し、底部には 4ヶ所の脚が貼付されていたと推定される。体内部は円筒状に成形されている。体部は細沈線によって格子文様が全面に描かれ、直径 1mm の刺突を充填した格子と墨で塗りつぶされた格子によって市松文様を形成している。また口唇部には細沈線によって山形区画が各コーナーに配され、交互に刺突と条線が充填されている。胎土には茶褐色粒を含み、色調は褐色を呈する。21 は軟質瓦質の瓦燈の台部で DZ-45 である。底部にはすだれ状の圧痕が残る。体部は筒状を呈するが、やや外傾して立ち上がる。蓋受け部はクランク状に成形され、幅約 8mm の平坦部から屈曲し、やや内傾して先端部に移行する。また蓋受けの端部は光量調節用の舌部へと移行する。舌部は 8.4cm と高い。内底部には高坏状のかわらけ設置施設が貼り付けられており、その上端部は蓋受け部上端よりもやや高くなっている。22 は恵比寿で DZ-60-c である。頭部が欠損している。胎土は土師質で白色微粒を少量含み、色調は燈褐色を呈する。体部は表裏別々の型によって成形され、それを貼り合わせている。内部は中空で、底部には直径 3mm の孔が穿たれている。わずかに表面にキラが認められる。23 は砥石である。石材は灰白色を呈する砂岩質で、気泡を多く含んでいる。使用面は研磨によって著しく内湾し、使用頻度の高さを物語っている。

### SK33 (Ⅲ-14、15 図)

本遺構出土遺物は遺構各節でも述べたように第 1 層に集中して出土しており、覆土の堆積状況の不連続性から SK33 埋没後に同一場所に構築された別遺構の可能性が高い。よって本来ならば別番号を付与すべきであるが、調査時に覆土一括資料として取り上げ、第 1 層出土遺物と第 2 層以下出土遺物の特定が不可能であること、幸い SK33 出土遺物に重複する SK1 出土遺物の年代観 (18 世紀前半) より、古く位置付けられる遺物が皆無に近いことから、本遺構出土遺物として扱った。

1 は肥前の染付広東碗で JB-1-m である。胎土は灰白色を呈する。釉は暈付以外全面に施されているが、暈付の釉際処理は甘く、また高台内や口縁部などに釉飛びが認められる。見込みには 3ヶ所の目跡があり、三足付きハマによる重ね積みによって窯詰めされていたことがわかる。外面文様は捻子花状の 4 単位区画内に花文様など 2 種類の文様が交互に描かれている。口縁内側には二重圏線が巡り、見込みには一重圏線内に簡略された「寿」字が書かれている。2、3 は瀬戸・美濃の染付端反碗で JC-1-d である。いずれも口径に対する器高比が 2:1 と低い製品である。2 は花文をあしらった捻子花状の帯文によって 3 単位に区画され、単位内には「福」「禄」「寿」字が書かれている。見込みには二重圏線内に「※」文? が描かれている。3 は捻子花状の太線によって 3 単位に区画され、各々花文を描いている。見込みには二重圏線内に「※」文? が描かれている。4~6 は肥前の染付皿である。4、5 は輪花皿で JB-2-q である。口縁は型打成形によって 8 単位の輪花を形成している。4 は見込みに岩花文を描き、側面には線書きによる二枚貝と波頭文? を 4 単位に描き、その周りをダミで埋めている。ダミは口唇部まで及んでいる。裏文様は千鳥? を散らしている。5 は見込みに楼閣山水文を描き、口唇部には口銹が施されている。裏文様は無文である。6 は蛇ノ目凹形高台染付皿で JB-2-i である。口縁部は型打成形により 8 単位の輪花を形成している。高台は蛇ノ目凹形高台で無釉部には砂が付着している。釉は高台内蛇ノ目無釉部以外に施釉されているが、暈付部分に釉飛びが、外側面には釉むらがみられる。見込みには楼閣山水文が描かれ、口唇部には口銹が施されている。体部には焼き継ぎによる補修痕が認められ、高台内蛇ノ目無釉部には焼き継ぎ屋の屋号と推定される朱書きによる記号が認められる。7 は瀬戸・美濃の太白皿で JC-2-h である。胎土は白色粒子を含む比

較的緻密な素地で、同期の二合半徳利のそれと類似する。底部は無釉である。口縁部は折り返され、玉縁状を呈している。高台高は2～3mmと低く、高台内には直径3cmの環状熔着痕が認められる。熔着部には素地（口唇部）の一部と灰釉が熔着していることから、灰釉瓶形製品上に重ね積みされていたと推定される。見込みには呉須によって花文が描かれている。8は瀬戸・美濃の灰釉餌入れでTC-30である。円筒形の体部に粘土紐による環状把手が付けられている。底部は無釉で回転糸切り痕を残す。9は瀬戸・美濃の灰釉一升徳利でTC-10-eである。体部上半を約1/2欠損している。胎土は白色粒子を含む比較的緻密な素地で、色調は灰褐色を呈する。釉は暗緑褐色を呈し、底部は拭き取られている。底部にはほぼ高台内側のサイズに相当する直径8cmの環状熔着痕があり、口唇部も熔着によって釉が剥離しており、重ね積みによる窯詰め方法によって焼成されていたことが窺われる。体部には列点によって「舎」が釘書きされている。10は焼き締め陶器の瓶でTZ-10である。頸部から口縁部にかけて欠損している。含有物のほとんどない緻密な胎土で、色調は茶褐色を呈す。底部はやや上げ底状で右方向の回転糸切り痕を残す。体部は底部脇で屈曲し、やや内傾しながら直線的に立ち上がる。肩部で屈曲して頸部に移行する。体中位と頸部には螺旋状の集合沈線を施している。全体的に自然釉により光沢を有しているが、特に肩部から頸部に掛けては斑状に黄灰褐色に発色している。11はいわゆる青土瓶でTZ-34-aである。胎土はきめ細かく、黄白色を呈している。口唇部外側から体下半部と内頸部に青緑釉が施されている。注口部と体部の接合部分には4ヶ所の濾し穴が穿たれている。底部には使用時の被熱痕とススの付着が観察される。12は硬質瓦質の丸火鉢でDZ-31-dである。胎土には茶褐色粒子を含み、焼成不良のためか内側は燈褐色を呈している。底部には円錐台形状の三脚が付けられている。体部全面にカンナ目が施され、沈線を挟んだ口縁は内側がやや玉縁状に膨らみ、口唇部から沈線にかけて非常に丁寧に磨かれ、光沢を発している。13は泥面子でDZ-55である。胎土は茶褐色を呈す。表面には梅鉢文が施され、少量ではあるが全面にキラが付着している。14は砥石片である。各面とも研磨は顕著であるが、丸鑿で削ったような幅5mmの研磨痕が多数認められる。

SK40 (Ⅲ-15 図)

1、2は軒丸瓦である。圏線内に左周りの連珠三巴文が陽刻されている。内面にはわずかながら布目痕が認められる。3、4は軒平瓦である。胎土には雲母を含み、瓦当文様は、隆帯による縁取りで、花状の中心飾り、唐草下上二反転、子葉から構成される唐草文によって形成されている。いわゆる「江戸式」である。4は瓦当部表裏面ともに研磨による数条の凹帯があり、砥石として再利用されたものと推定される。

SK42 (Ⅲ-16 図)

1は瀬戸・美濃の染付端反碗でJC-1-dである。SK33の3(Ⅲ-14 図)と法量、意匠ともに共通する。

SK45 (Ⅲ-16～19 図)

本遺構からは多量のかわらけ、動物遺体が同一層から出土していることから、式正の宴後の一括廃棄を窺わせる資料として位置付けられる。また、共伴する陶磁器のなかには火災による被熱痕が認められる製品がある。覆土には焼土が含まれていなかったことから、火災後の再整理など二次廃棄による可能性が高い。

1～3は肥前の染付碗でJB-1-cである。1は外面に草花文が、見込みには二重圏線内に草花文が描かれている。口縁部内側には一重圏線が巡る。高台内には「大明年製」銘が書かれている。暈付以外全面に透明釉が掛けられているが、内外面ともに斑点状の釉飛びがみられる。2は高台が非常にシャープな三角形に整形されている。外面文様は3単位の窓枠内に草花文が、見込みには二重圏線内に草

花文が描かれている。また口縁部内側には二重圏線を巡らせている。見込みには降灰による列点状の痕跡が認められる。3はやや青味を帯びた釉調で、畳付には部分的に砂が付着している。外面文様は雪輪、竹葉、芝垣を散らし、見込みには梅花が描かれている。高台内には「宣明年製」が書かれている。4、5は肥前の色絵碗でJB-1-cである。4はやや灰色を帯びた釉調で全体に貫入が入っている。高台脇にはカンナ痕が認められる。外面文様は赤、黄、緑、黒絵の具によって推定3単位の梅花と竹葉が描かれている。5は非常にシャープな三角形に整形された高台から、体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部でやや外反する。高台高は7mmと法量に対して高く成形されており、器厚は高台脇から口縁まで2mmと薄く、全体的に丁寧に整形されている。外面文様は上絵の具の剥落が著しいが、赤、緑絵の具によって藤文様が描かれている。文様には輪郭線が用いられていない。内面は型打成形によって3単位の花文が陽刻されている。6は肥前の灰釉碗でTB-1である。胎土は比較的硬質で暗灰褐色を呈する。釉は畳付以外全面に施釉され、色調は淡灰緑褐色である。高台は逆台形状に成形され、畳付は粗い面取りが施されている。高台内には「の」字状のケズリ痕があり、左回転でケズリ整形が行われていたことが読み取れる。体部はほぼ直線的に開き、体下半部までケズリが認められる。7は瀬戸・美濃の天目碗でTC-1-aである。高台は逆台形状を呈し、畳付両端は丸く整形されている。高台内のケズリは2mmと浅い。体部は高台脇から屈曲してほぼ直線的に立ち上がり、口縁部下位で「く」字状に屈曲し、口縁部はやや外反する。最大径は口縁部下位の屈曲部にある。釉は黒色を呈する鉄釉が底部以外に施されているが、被熱によって全面が鮫肌状に変質している。内側面には茶褐色を呈する錆状の付着物が認められるが、釉上に認められることから、被熱後に再利用されたものと推定される。8は肥前の小坏でTB-6である。白色微粒を含む比較的硬質な胎土で、色調は茶褐色を呈する。体上半から内面にかけて暗茶褐色の鉄釉が施されているが、釉際は大きく波打っている。高台内および体下半部は左回転のケズリによって整形されているが、ロクロ成形時の回転軸とずれていたため畳付幅が偏重している。9、10は丹波の播鉢でTK-29である。9は約4/5を欠損している。白色粒子を多量に含む硬質な胎土で、断面の色調は暗灰褐色を呈する。体部はほぼ直線的に開き、下半部には指頭圧痕が認められる。口縁は外側に張り出し、断面形は三角形を呈する。見込みには口縁部下25mmに浅い沈線が巡り、それを境に6条の播り目が上から下へ左回りで施されている。側面の播り目を施した後、見込みに+に○の播り目を施している。見込み脇には三角形の陶片熔着痕が、底部際には剥離痕が認められ、重ね焼きされていたことがわかる。10は体部約1/6を欠損している。胎土は白色粒子を多量に含み、色調は淡褐色を呈する。体部はやや外反気味に立ち上がり、体下半部には指頭圧痕が認められる。口縁部は二条の沈線が施された縁帯を形成し、下端部が強く張り出している。また幅5cmの注口部が設けられている。見込みには口唇部下1cmに幅約1cmの浅広の沈線が巡り、その直下より1単位6条の播り目が上から下へ左回りで施されている。見込みには同一工具によって放射状に○の播り目を施している。重ね積みによる陶片熔着痕は見込み脇、底部際に各々5ヶ所認められる。11、12は輪積み成形で二重角枠内に「天下一堺見など藤左衛門」銘を有す塩壺でDZ-51-cである。11は2ヶ所の輪積み痕が観察される。胎土には雲母、白色微粒を微量含有し、色調は燈褐色を呈する。体部はやや膨らみを有す円筒形を呈し、最大径は体中位にある。口縁はやや外反し口縁内側までナデ調整が施されている。内体部には右方向に捻れた布目圧痕が観察される。12は2ヶ所の輪積み痕が観察される。胎土には白色、灰色微粒を少量含有し、色調は燈褐色を呈する。体部は円筒形を呈し、口縁は外反する。内底部から口縁部内側下端までやや右方向に捻れた布目圧痕が観察される。13、14は輪積み成形塩壺の蓋でドーム形を呈すDZ-00-aである。胎土は白色、黒色微粒を含み、色調は燈褐色を呈する。

15～43 はかわらけである。15 は右回転のロクロによって成形されている DZ-2-a に分類される。16 は DZ-2-a に分類される。外面にわずかにスス状の付着物が認められる。17 は DZ-2-a に分類され、離し糸切り痕が認められる。18、19 は DZ-2-a に分類される。20 は DZ-2-a に分類される。口唇部の 1 ヶ所に灯心痕がある。21 は DZ-2-a に分類される。22 は DZ-2-a に分類される。口唇部全体に灯心痕が認められる。23 は DZ-2-a に分類される。底部中央に穿孔が認められる。穿孔方向は内面から外面に向かっている。24 は DZ-2-a に分類される。体部に 2 ヶ所、底部中央に 1 ヶ所、孔が穿たれている。穿孔方向は体部 2 ヶ所が内面から外面に、底部中央の穿孔が外面から内面に向かっている。25 は DZ-2-a に分類され、離し糸切り痕が認められる。26 は DZ-2-a に分類される。底部に離し糸切り痕が明瞭に残っている。27 は DZ-2-a に分類され、離し糸切り痕が認められる。口唇部にスス状の付着物がある。28 は DZ-2-a に分類され、離し糸切り痕が認められる。29 は DZ-2-a に分類され、離し糸切り痕が認められる。内外面にタール状の付着物がある。30、31 は DZ-2-a に分類され、ともに離し糸切り痕を残す。32 は DZ-2-a に分類される。底部には離し糸切り痕と、その上に格子状の圧痕が認められる。口唇部全体にタール状の灯心痕が密にあり、ススの付着も認められる。33、34 は DZ-2-a に分類され、離し糸切り痕が認められる。口唇部全体にタール状の灯心痕が密にある。35 は左回転のロクロによって成形される DZ-2-b に分類される。36 は DZ-2-b に分類される。遺存している口唇部には四ヶ所の灯心痕が認められる。37 は DZ-2-b に分類される。38 は DZ-2-b に分類される。口唇部全体にタール状の灯心痕が密にある。39 は DZ-2-b に分類される。遺存している口唇部にはタール状の灯心痕が密にある。40 は DZ-2-b に分類される。41 は DZ-2-b に分類され、口唇部に灯心痕が密に認められる。42 は DZ-2-b に分類される。43 は DZ-2-b に分類される。立ち上がり部分の屈曲が明確で、段を形成している。遺存している口唇部には二ヶ所、灯心痕がある。そのうちの一つはやや広い範囲にわたり、タール状の付着物も認められる。44 は丸瓦である。外面は縦方向のヘラケズリによって整形されている。内面未整形部分には布目痕とほぼ数 cm 間隔で斜方向の沈線が観察される。

#### SK57 (Ⅲ-19～23 図)

本遺構からは SK45 と同様が多量のかかわらけ、動物遺体が同一層から出土している。さらに覆土には焼土は含まれないが、相伴する陶磁器のなかには火災による被熱痕が認められる製品がある点でも類似し、その年代観も共通する。以上の類似性より同一時期の廃棄の可能性は極めて高い。

1～10 は肥前染付碗で JB-1-c である。1 は体部約 2/5 を欠損している。文様は外面全体に一重網目文を描き、3 単位の草花文を組み合わせている。見込み側面にも一重網目文を描き、見込みは二重圏線の区画内に桔梗文を描いている。高台内には「太明年製」銘が書かれている。釉調は灰白色を呈し、全面に細かい貫入が入っている。見込みには降灰と推定される灰褐色の斑点が観察される。2 は完形である。若干青味がかった灰白色を呈し、内外面ともに斑点状の釉飛びが認められる。外面には大小 2 単位の草花文が描かれ、内面には二重圏線内に草花文が描かれている。高台内には「宣明」銘が書かれている。3 はほぼ完形である。釉調はやや青みを帯びた白色を呈し、内外面ともに斑点状の釉飛びがわずかに認められる。外面文様は五三の桐と芝垣を組み合わせた文様が 2 単位で構成され、見込みには宝寿文が描かれている。高台内には一重圏線内に「太明年製」銘が書かれている。見込みには降灰と推定される灰褐色の斑点が観察される。4 は小形の碗で体部約 1/2 を欠損している。外面文様には草花文が描かれている。著しく被熱し、釉は全面的に変質している。5 は外面に 2 単位の梅花文を描き、高台内には「製」銘が書かれている。器面には列点状の釉飛びと黒褐色の斑点が観察される。6 は約 1/2 を欠損している。胎土は白色を呈し、やや青味を帯びた透明釉を施している。

暈付には砂が付着している。見込みには同心円状の整形痕が中心部から内側面中位まで観察される。文様は外面にシダ類と思われる葉などが描かれている。高台内には「製」字銘が書かれている。7は体部約2/3を欠損している。外面文様には3単位の花文を描き、見込みには二重圏線内に花文が描かれている。高台内には一重圏線内に「青」字名が書かれている。8は体部約1/2を欠損している。列点状の釉飛びがわずかに認められるが、特に高台内に顕著である。見込みには降灰と推定される斑点が認められる。外面文様は下がり藤状の丸文を散らし、見込みには楓状の葉が描かれている。高台内には「宣明年製」銘が書かれている。9は完形で焼成時の歪みによって楕円形に変形している。釉は高台に描かれた二重圏線下端まで施されているが、釉際は未処理のため波打っており、染付線上に掛かっていない部分が認められる。文様は外面に3単位の下がり藤が描かれ、見込みには梅花文が描かれている。高台内には「宣明年製」銘が書かれている。10は体部約2/3を欠損している。高台は断面三角形を呈するが、高台際の器厚は6mmと肉厚に成形されている。文様は残存部においては外面無文で、内側面に草花文が描かれている。高台内には「宣明年製」銘が書かれている。11、12は肥前色絵碗でJB-1-cである。11は約1/2を欠損している。全体的に被熱しているが、特に外面で顕著である。高台は暈付が丸味を帯びた断面三角形を呈しており、体部は高台脇から腰が張って立ち上がる。文様は高台脇に赤絵の具によって亀甲文を描いた帯文様を描き、剥落して詳細は不明であるが、体部には赤、黄絵の具などによって魚、波頭、月などが描かれている。12は体下半部約1/3が残存しているのみである。全体的に被熱し、釉は光沢を失っている。高台は断面三角形を呈し、暈付には砂が付着している。体部は高台脇でやや張り出し、丸味を帯びて立ち上がっている。文様は上絵の具の剥落によって詳細は不明であるが、金彩、青、黒絵の具?によって、松?が輪郭線を用いない表現方法にて描かれている。13は中国青花小坏でJA1-6である。高台は暈付幅が約5mmと広い蛇ノ目状を呈し、暈付外側は面取りされている。体部は腰が張って立ち上がる。高台脇から腰部にかけて顕著なカンナ痕が認められる。外面文様は草花文を施し、内面には二重圏線内に草花文が描かれている。全面的に被熱によって変質している。14～17は、肥前の小坏である。そのうち14～16は白磁小坏でJB-6-bである。14は完形で、全体的に被熱している。高台断面は三角形を呈し、体部は高台脇から丸味を帯びて立ち上がり、口縁で外反する。内部には褐色を呈する付着物が認められる。15は体部約2/3を欠損している。表面は白色で光沢を発している。器形は14と類似するが、一回り小振りである。内面には14と同様に褐色を呈する付着物が認められる。16は体部約1/2を欠損している。施釉後の釉際は施されておらず、暈付には砂が付着している。高台内に「角福」銘が書かれている。内面には黄白色を呈する固形物が付着している。17は染付小坏でJB-6-bである。体部約1/3を欠損している。全体的に被熱し釉が変質している。釉は暈付際まで施釉され、釉際の調整処理が行われているが、暈付に達せずに波打っている部分も認められる。外面文様は草花文が描かれ、高台内には二重圏線内に「宣徳年製」銘が書かれている。18はJB-00-gで、肥前の青磁壺の蓋である。外面には青緑色を呈する青磁釉が掛けられ、内面は無釉である。表面中央部には捻子花状の集合沈線を描いた円錐形の摘みが付けられている。19は肥前の染付蓋物の蓋で、JB-00-fである。器形は山笠形を呈し、中央部に球形の摘みが付けられている。釉は外面と蓋受け内に施されている。文様は外面に楼閣山水文が描かれている。20はJA1-9で中国産と考えられる八角形三彩香炉片である。著しく被熱している。体部は型打成形によって作出され、平面形は八角形を呈する。体部は外反して立ち上がり、体中位で強く内湾し頸部へ移行する。頸部は屈曲してほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は再び屈曲し鏝状に張り出し、屈曲部は面取りされている。体下半部には脚の剥落痕が認められ、元来三脚が貼り付けられていたと推定される。釉は体部に黄釉が、頸部から口縁部内側にかけてと底

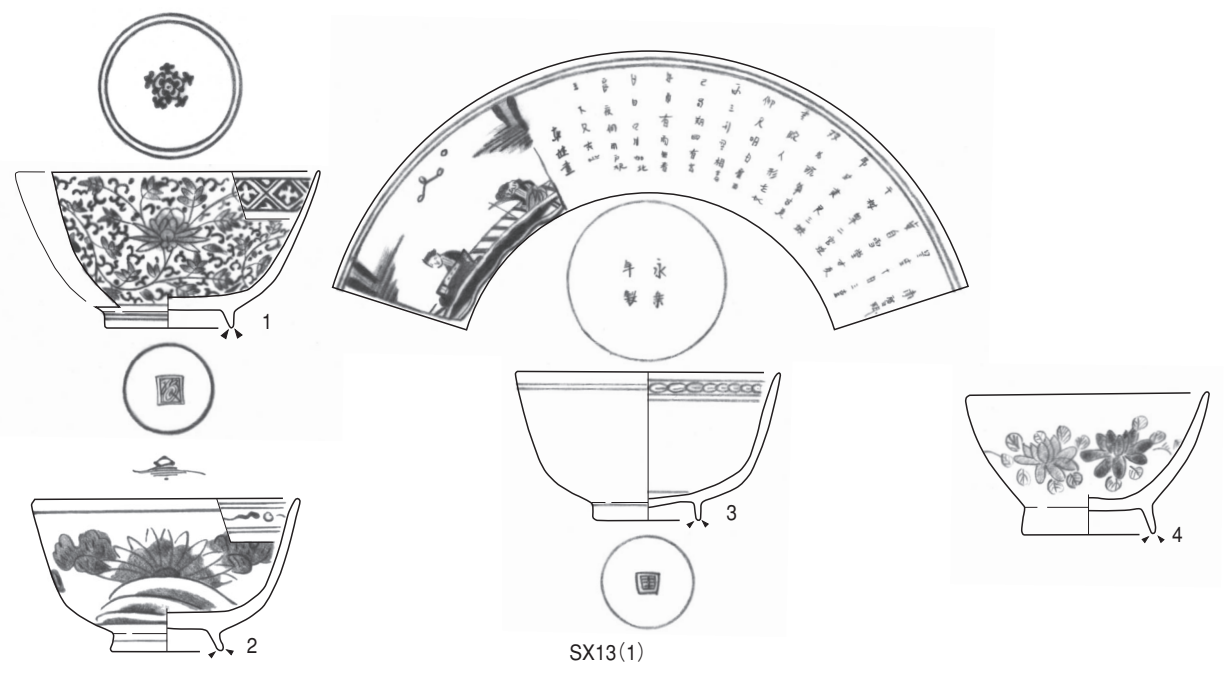
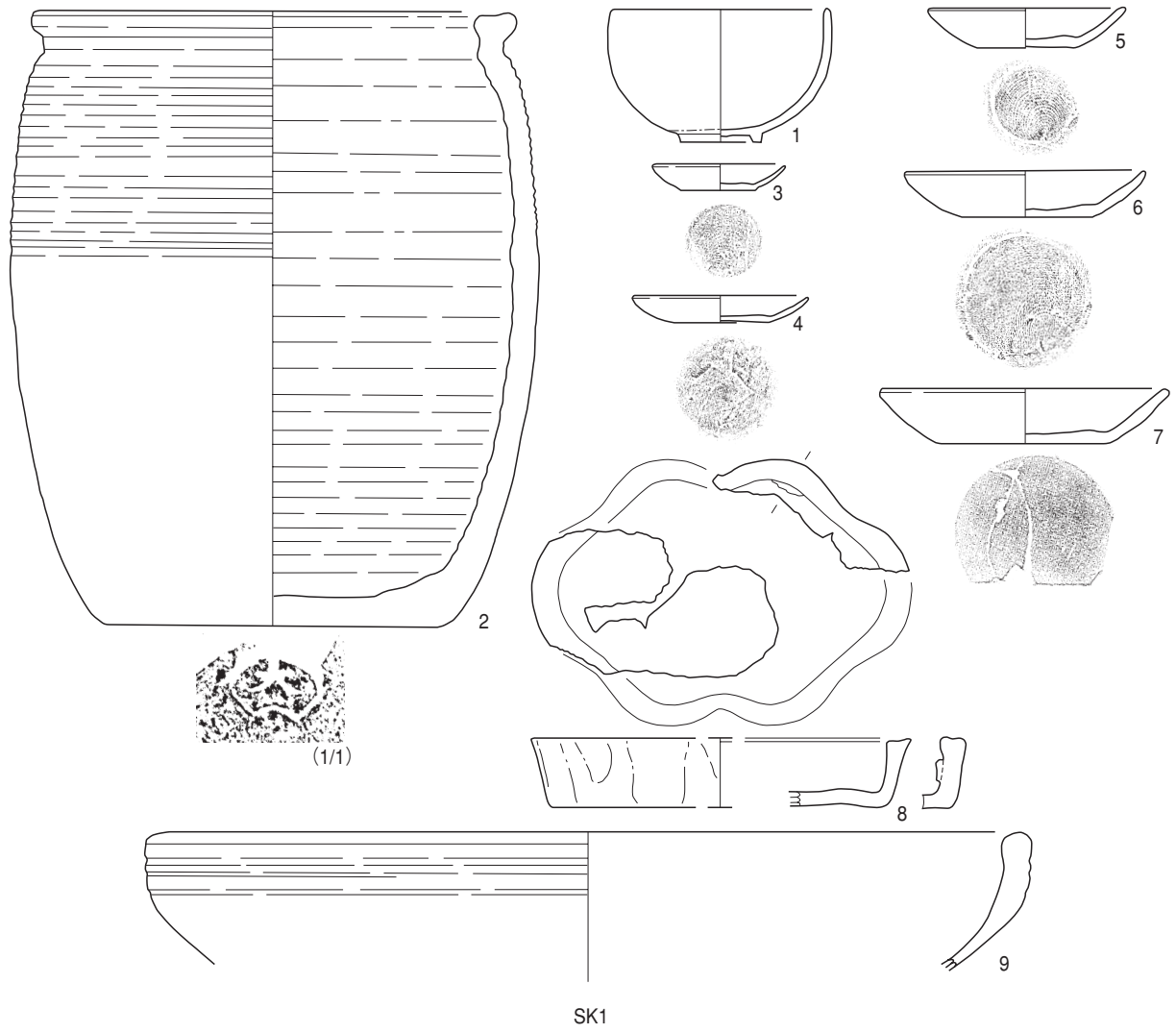
部に緑釉が施されている。文様は体部から頸部にかけては陽刻による三重丸文を地紋とし、体中位には雷文を施した帯文が、その上下にも詳細は不明であるが文様が陽刻されている。口唇部下面と口縁屈曲面取り部分には陰刻文様が施されている。口唇部上面には二条の隆帯が貼り付けられ、そのうち内側の隆帯には矢羽根状の陰刻文様が付されている。21、22 は肥前の陶器碗である。21 は青緑釉陶器碗で、TB-1-i である。体部約 2/3 を欠損している。高台断面は逆台形を呈し、高台内は左方向の回転ケズリによって整形されている。体部はやや内湾しながらハの字状に立ち上がり、口唇部は玉縁状の膨らみを有している。釉は高台脇から口唇部まで深緑色を呈する青緑釉が施され、内面は灰釉が施されている。22 は京焼風陶器碗で TB-1-b である。高台断面は長方形を呈し、高台内には直径 29mm を測る円形のケズリが認められる。体部は高台脇から丸味を帯びて立ち上がり、体上半部には残存部において 1ヶ所の凹みが付されている。釉は底部以外に施されているが、釉飛び、施釉ムラが認められる。高台内には刻印が押されているが内容は不詳である。23 は瀬戸・美濃の天目碗で TC-1-a である。胎土は白色粒子を含み、灰褐色を呈する。高台はやや外傾し、断面形は逆台形を呈する。体部は高台脇から屈曲しハの字状に立ち上がり、口縁部で S 字状に湾曲して口唇部に移行する。最大径は体上半部にあり、口唇部の屈曲も強い。釉は黒色に発色する鉄釉が底部以外に施されているが、被熱のためほとんど光沢を失い著しく変質している。24 は京・信楽の色絵陶器碗口縁部片で TD-1-b である。被熱のため変質している。文様は金、青、赤絵の具によって花文様が描かれている。25 は京・信楽の色絵香炉で TD-9 である。被熱のため著しく変質している。型打成形によって平面形は六角形に成形されている。高台は貼り付け高台で、断面長方形を呈する。体部には上絵付けによって草花文が描かれているが、被熱による顔料の変色のため本来の色調は不明である。26 は備前の瓶で TE-10-a である。被熱している。体上半部を欠損している。体部は膨らみを持って立ち上がり、対になる両側面を平面的に成形している。また器面上には火樫が認められる。底部には線刻によって「上」の刻印が施されている。27、28 は丹波の播鉢で TK-29 である。胎土は黄白色粒子、石英粒子を含み、色調は暗灰褐色を呈する。27 は約 3/4 が欠損している。体下半部には右上がりの指頭圧痕が認められる。口縁部は三角形を呈する縁帯を形成し、中央は浅く沈線状に凹んでいる。口縁部内側には二条の平行沈線が巡り、その下より 1 単位 7 条の播り目が左方向に付けられている。見込みの播り目は欠損のため詳細は不明であるが、「一に〇」と推定される。内底部脇には重ね焼きによる陶片熔着痕が底部脇には同様の剥離痕が認められる。28 は体部下半部約 2/3 に右上がりの指頭圧痕が認められる。口縁部は三角形を呈する縁帯を形成し、縁帯上には 2 条の沈線が巡っている。口唇部には指頭による整形で幅 25mm の注口が作出されている。内側面には 1 単位 7 条の播り目が左方向に付けられているが、見込みに関しては欠損のため詳細は不明である。内底部脇には重ね焼きによる陶片熔着痕が、底部脇には同様の剥離痕が認められる。29～50 はかわらけである。29 は右回転のロクロによって成形された DZ-2-a に分類され、糸切り痕が認められる。口唇部にはわずかに灯心痕がある。30 は DZ-2-a に分類される。口唇部にわずかに灯心痕が認められる。31 は DZ-2-a に分類される。32 は DZ-2-a に分類される。底部に離し糸切り痕を残す。口唇部にはやや密に灯心痕が認められる。33 は右回転のロクロによって成形されており、DZ-2-a に分類される。底部に離し糸切り痕を残す。34、35 は DZ-2-a に分類され、底部に離し糸切り痕が認められる。36 は DZ-2-a に分類される。底部に離し糸切り痕を残し、口唇部にはわずかに灯心痕が認められる。37、38 は DZ-2-a に分類される。底部には離し糸切り痕が認められる。39 は DZ-2-a に分類される。胎土は本遺構出土のかわらけの中では比較的淡く、灰白色に近い。底部に離し糸切り痕を残す。器体の立ち上がりは緩やかで、途中わずかに屈曲して段をつくっている。内面に炭化物の付着がわずかに認められ



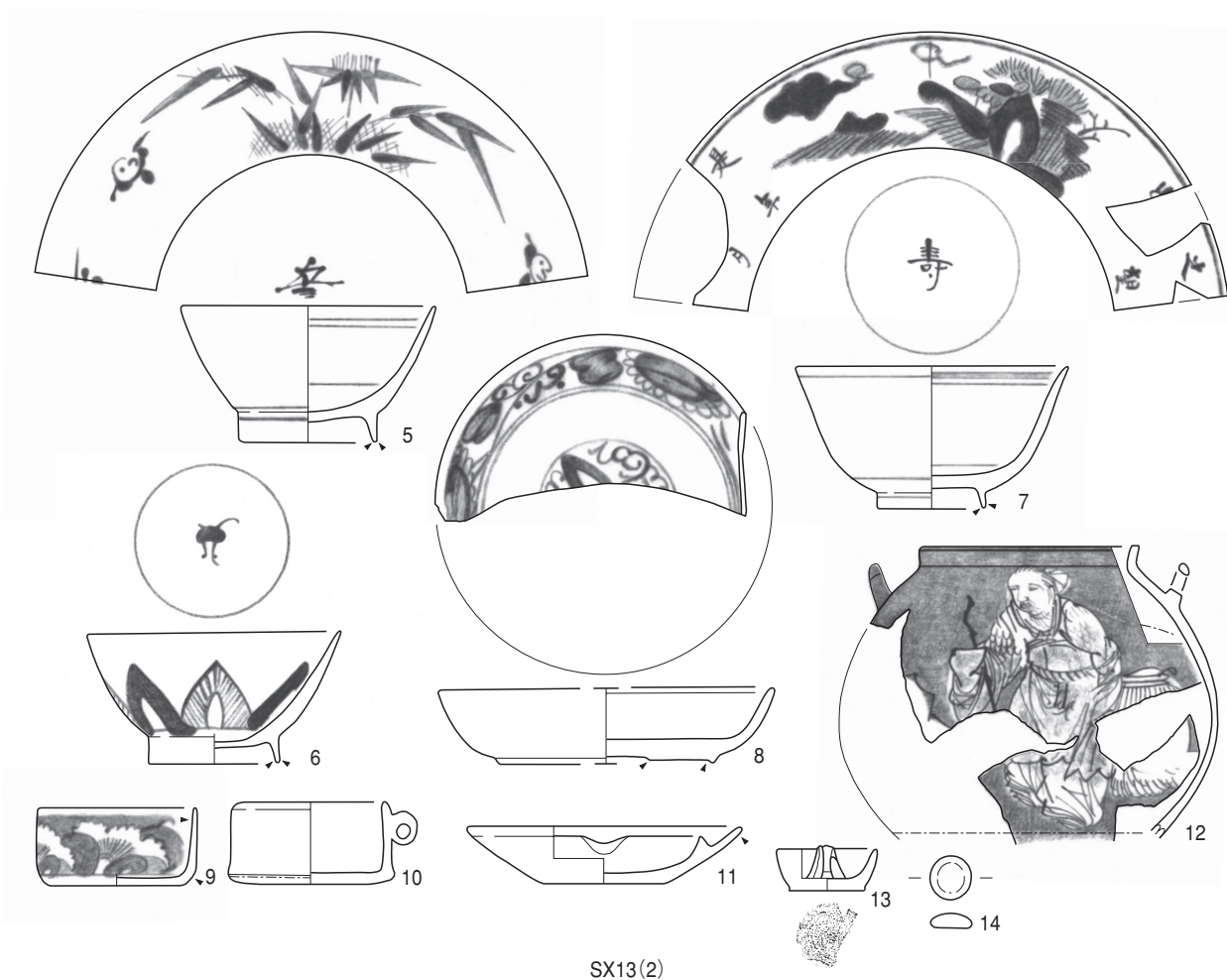
る。40はDZ-2-aに分類される。離し糸切り痕を残す。内外面にススが付着している。内面にはススと共にタール状の付着物も認められる。41はDZ-2-aに分類され、離し糸切り痕が認められる。口縁部の1ヶ所に指頭圧痕が認められる。42はDZ-2-aに分類され、離し糸切り痕が認められる。底部と見込みの中央には穿孔が施されているが、どちらも未貫通である。また底部全体に墨書が認められるが、内容は不詳である。残存する体部外面にも1ヶ所、「寛」の字が墨書されている。43はDZ-2-aに分類される。底部に離し糸切り痕を残す。内外面にスス状の付着物がわずかに認められる。44は左回転のロクロによって成形されたDZ-2-bに分類され、離し糸切り痕が認められる。見込みに「ナ」の字状の墨書があるが、詳細は不明である。45はDZ-2-bに分類される。46はDZ-2-bに分類される。底部に磨きによる一重の圏線が認められ、その内側に「費■(付)委」と墨書されている。47はDZ-2-bに分類される。48は底部の一部。ロクロによる成形だが回転方向は不明。内外面ともにスス状の付着物が認められる。底部に墨書がある(文字は不詳)。49は体部の一部。外面に墨書が認められる(文字は不詳)。50は底部の一部。ロクロによる成形だが回転方向は不明。見込みに「■」の墨書が認められる。51、52は輪積み成形の塩壺でDZ-51-cである。胎土は白色、黒色粒子を多量に含み、色調は燈褐色を呈する。内面には2ヶ所の輪積み痕が観察され、内底部から口縁部内側にかけて布目圧痕が認められる。刻印は二重角枠内に「天下一堺ミなど藤左衛門」銘である。52の刻印は51に対して二重角枠と「藤」の間に余白が認められる。余白を持つ点でSK45の12と類似する。53、54は輪積み成形の塩壺の蓋でDZ-00-aである。胎土は白色、黒色粒子を多量に含み、色調は燈褐色を呈する。53は二次焼成によって内外面とも一部桃白色に変色している。

#### SD67(Ⅲ-23 図)

1はかわらけでDZ-2-aである。右回転のロクロ成形によって成形されている。胎土は暗茶褐色微粒、雲母微細粒を含み、色調は燈褐色を呈している。体部は徐々に湾曲度を増しながら立ち上がっているため、底部脇では非常に緩やかな立ち上がりとなっている。



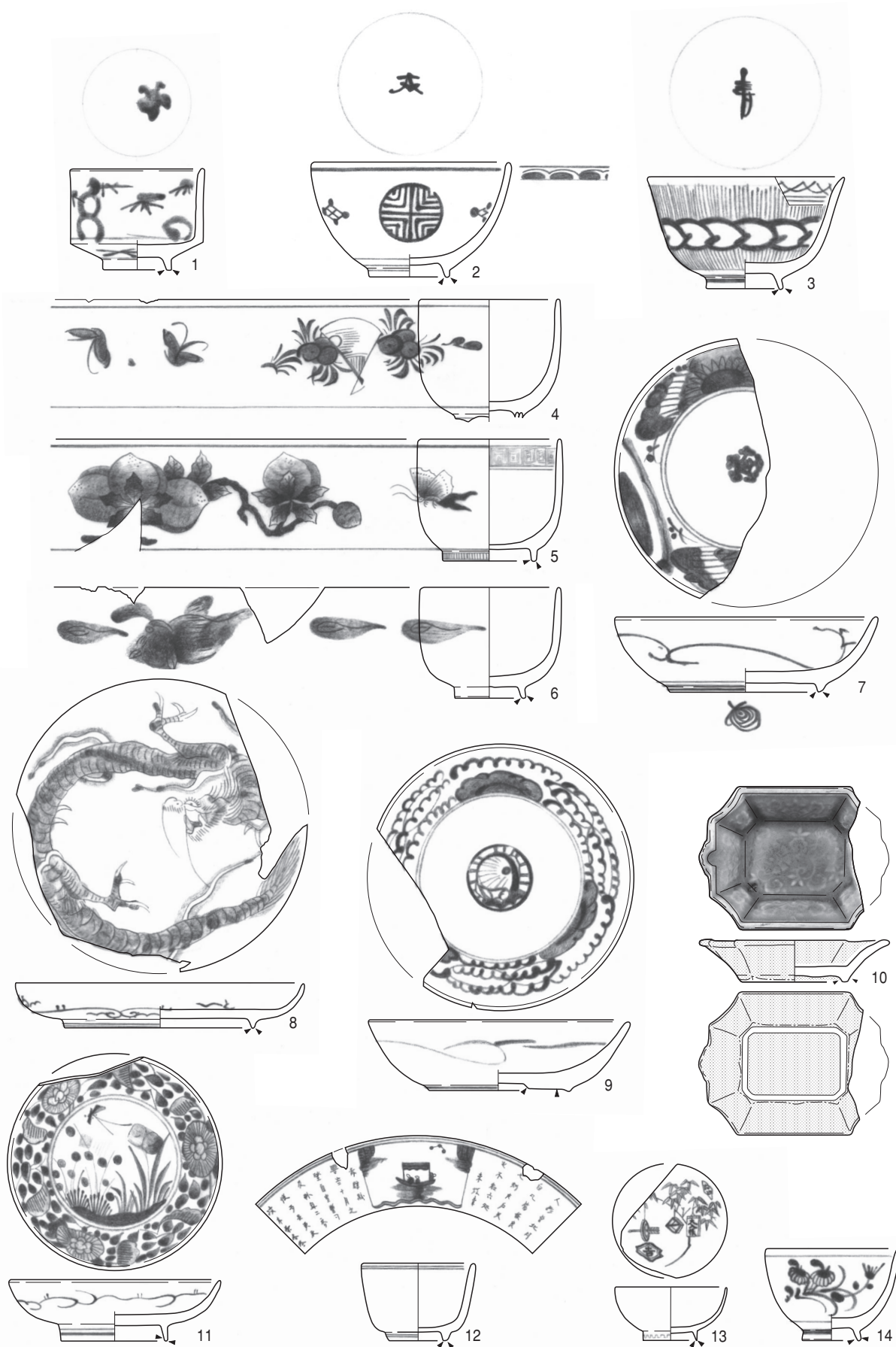
Ⅲ-7 図 SK1、SX13(1) 出土遺物



III-8 図 SX13(2)、SU14(1) 出土遺物



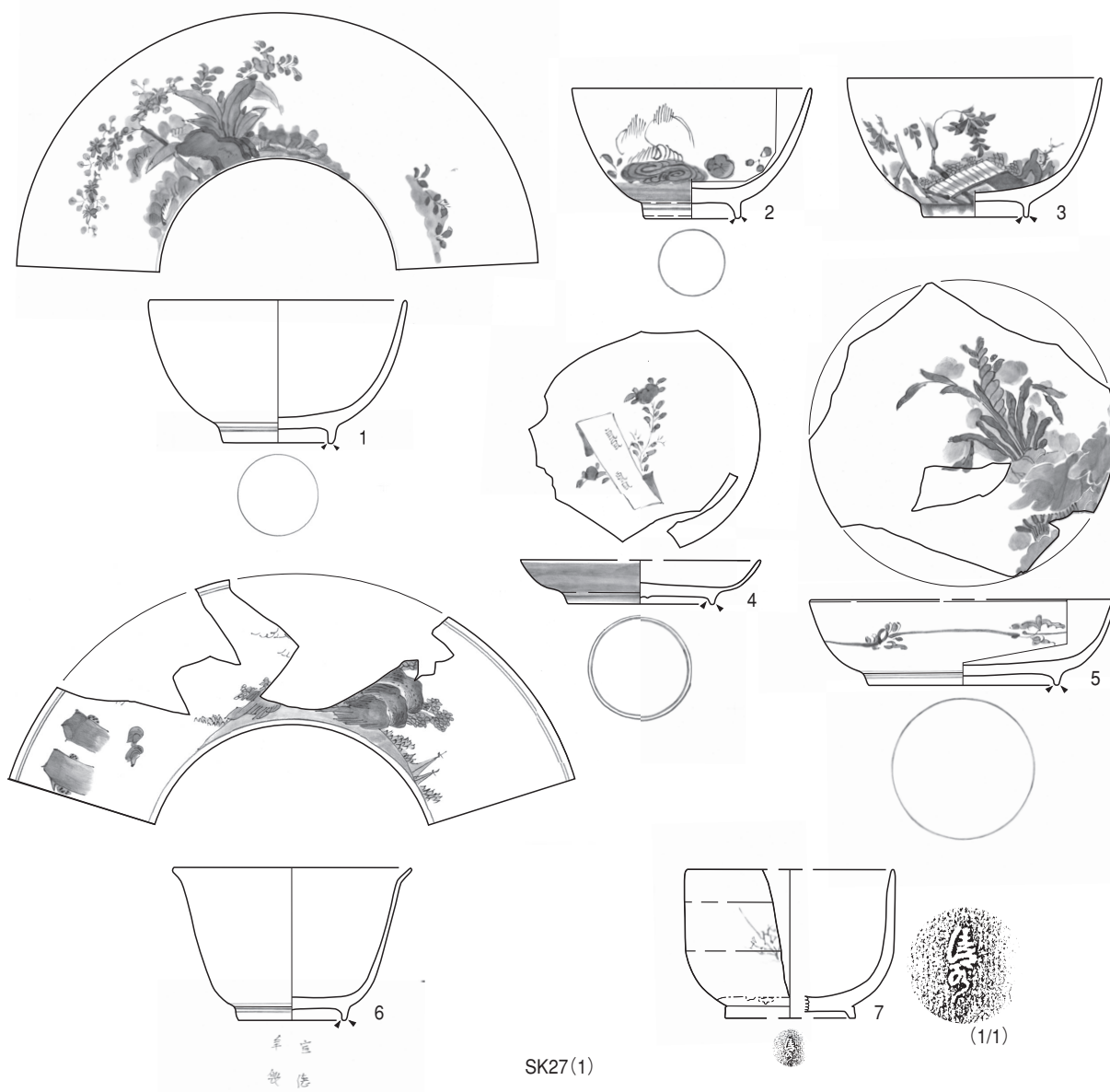
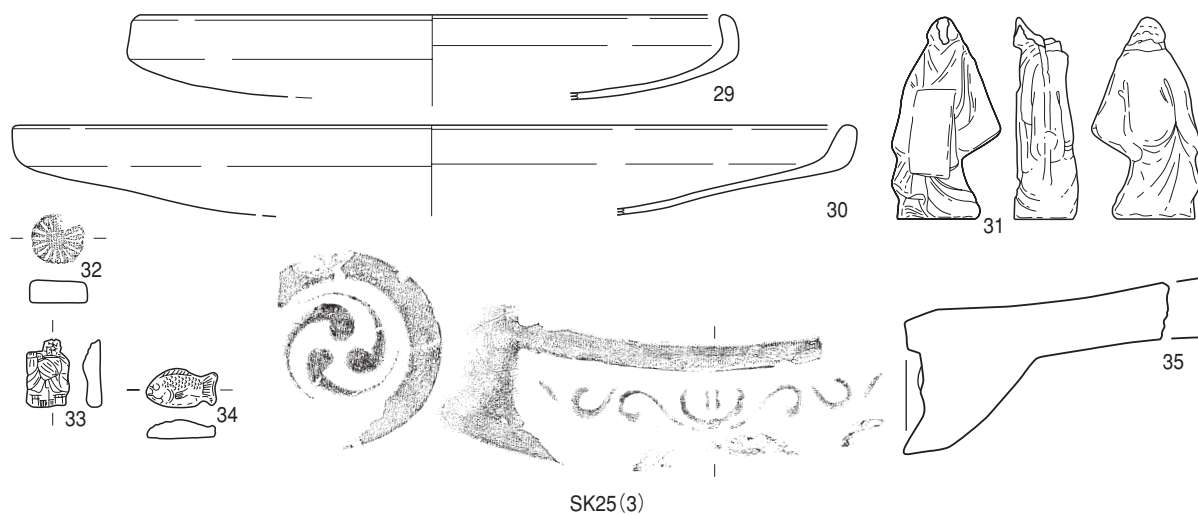
Ⅲ-9 図 SU14 (2) 出土遺物



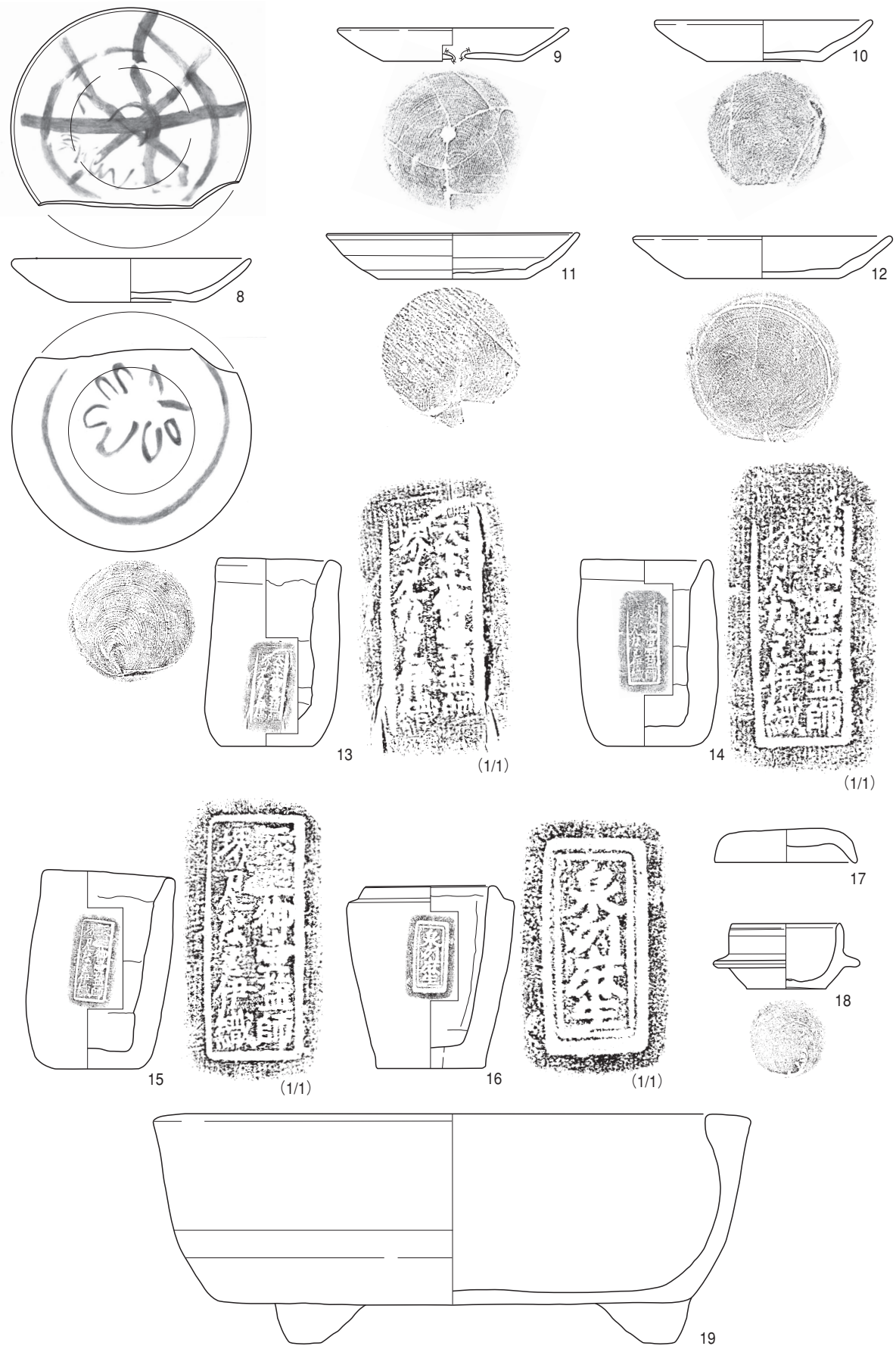
III-10 图 SK25(1) 出土遺物



III-11 図 SK25 (2) 出土遺物

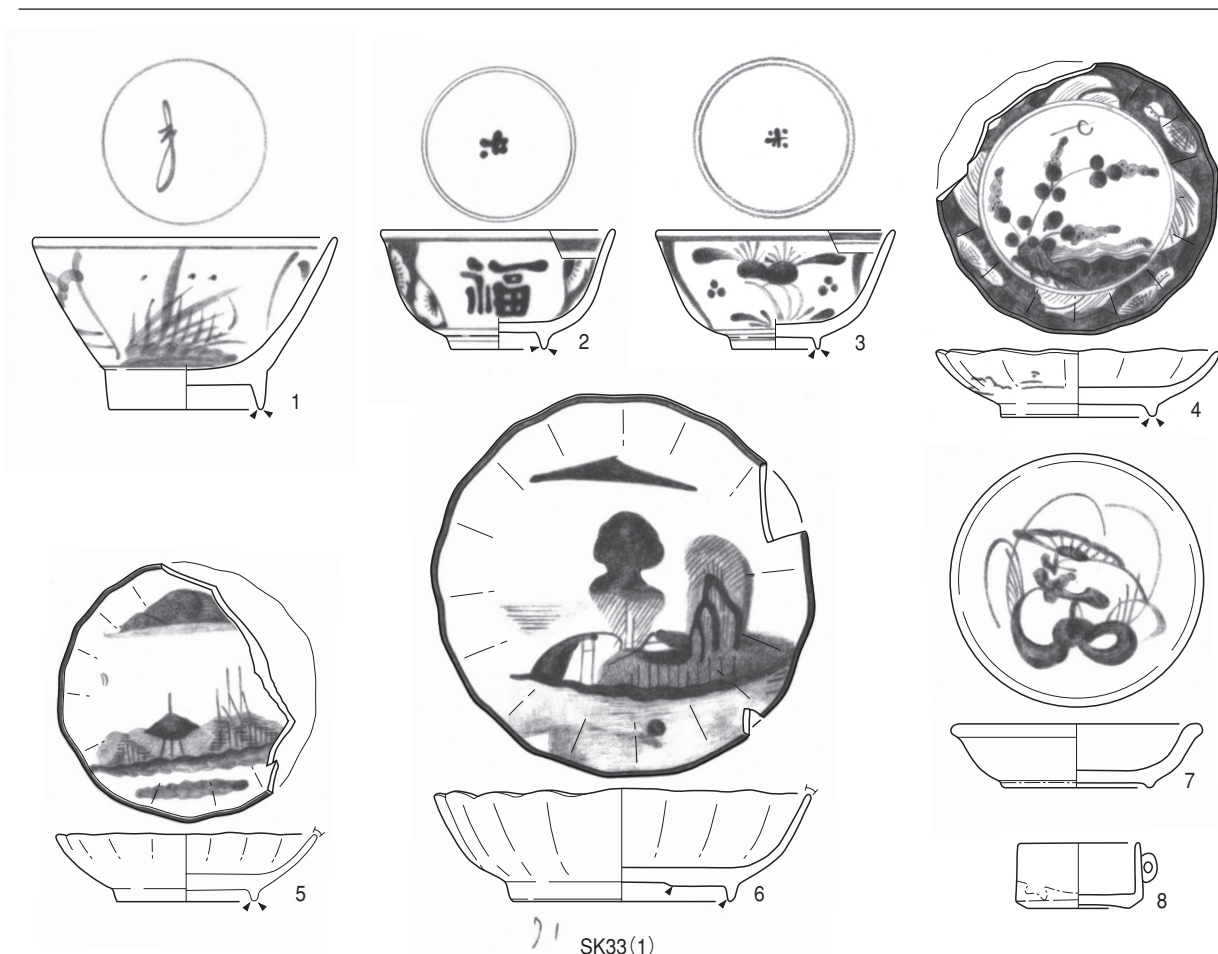
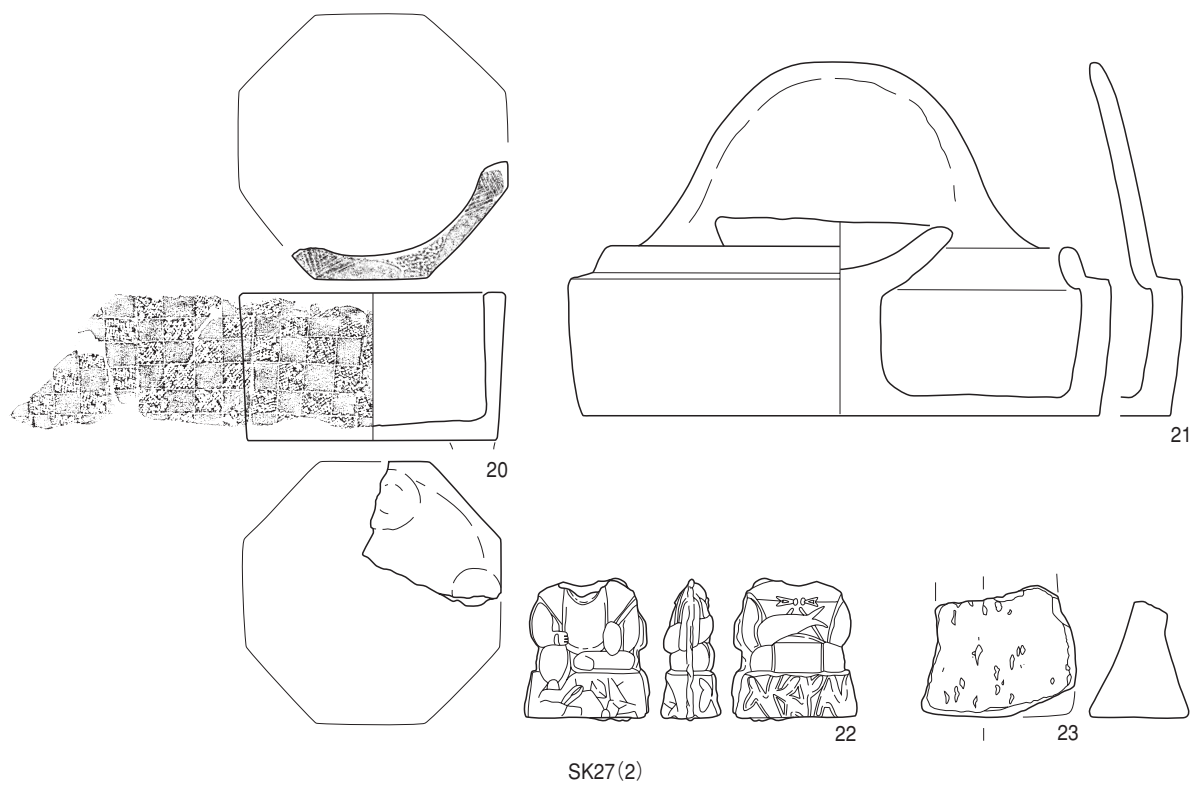


Ⅲ-12 図 SK25(3)、SK27(1) 出土遺物

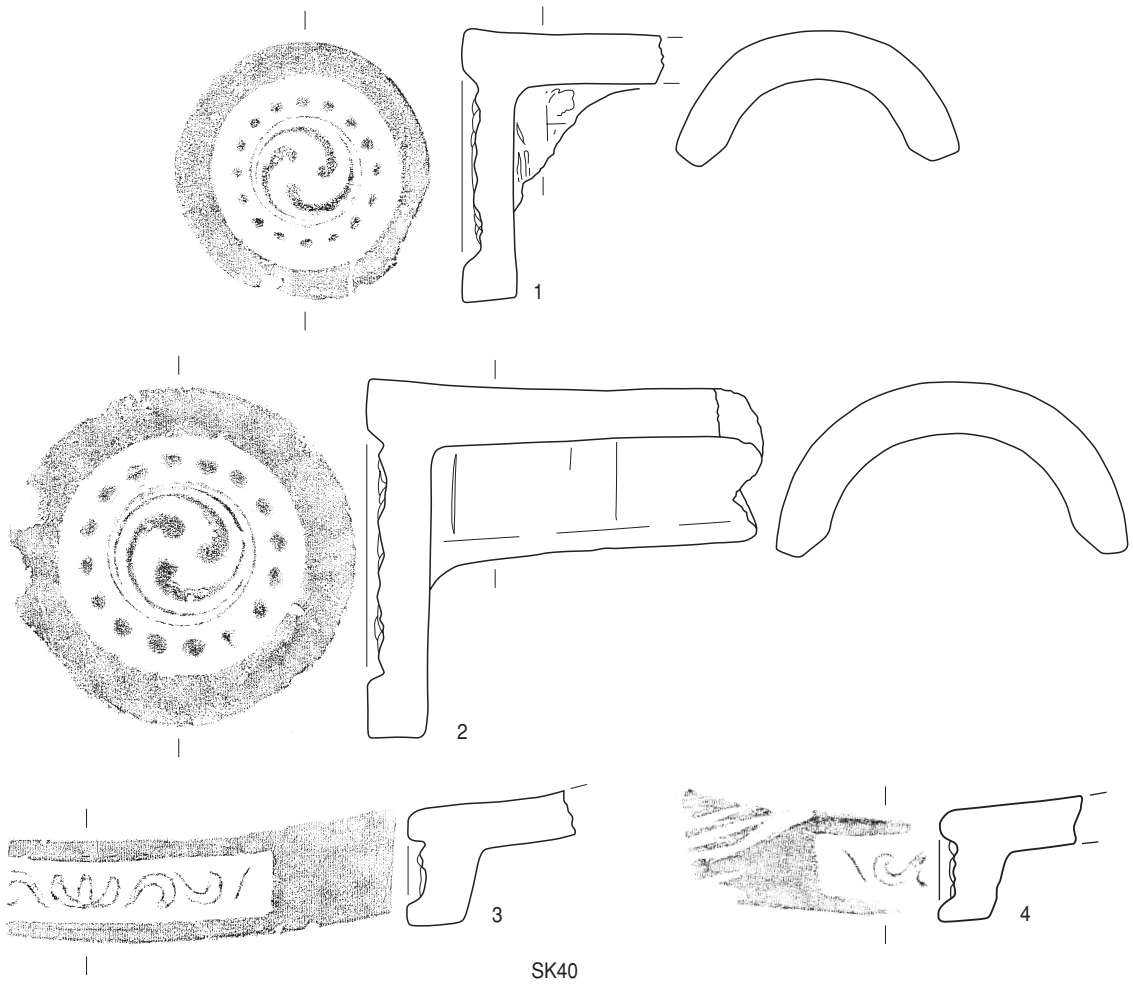
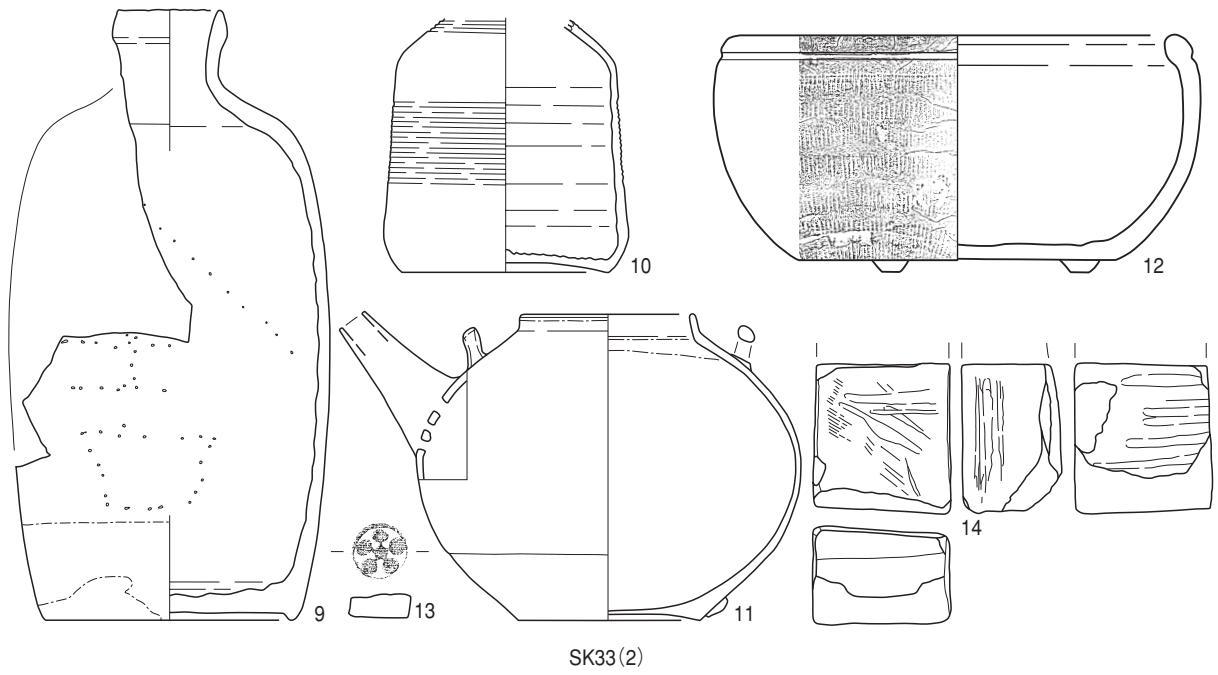


Ⅲ-13 図 SK27 (2) 出土遺物

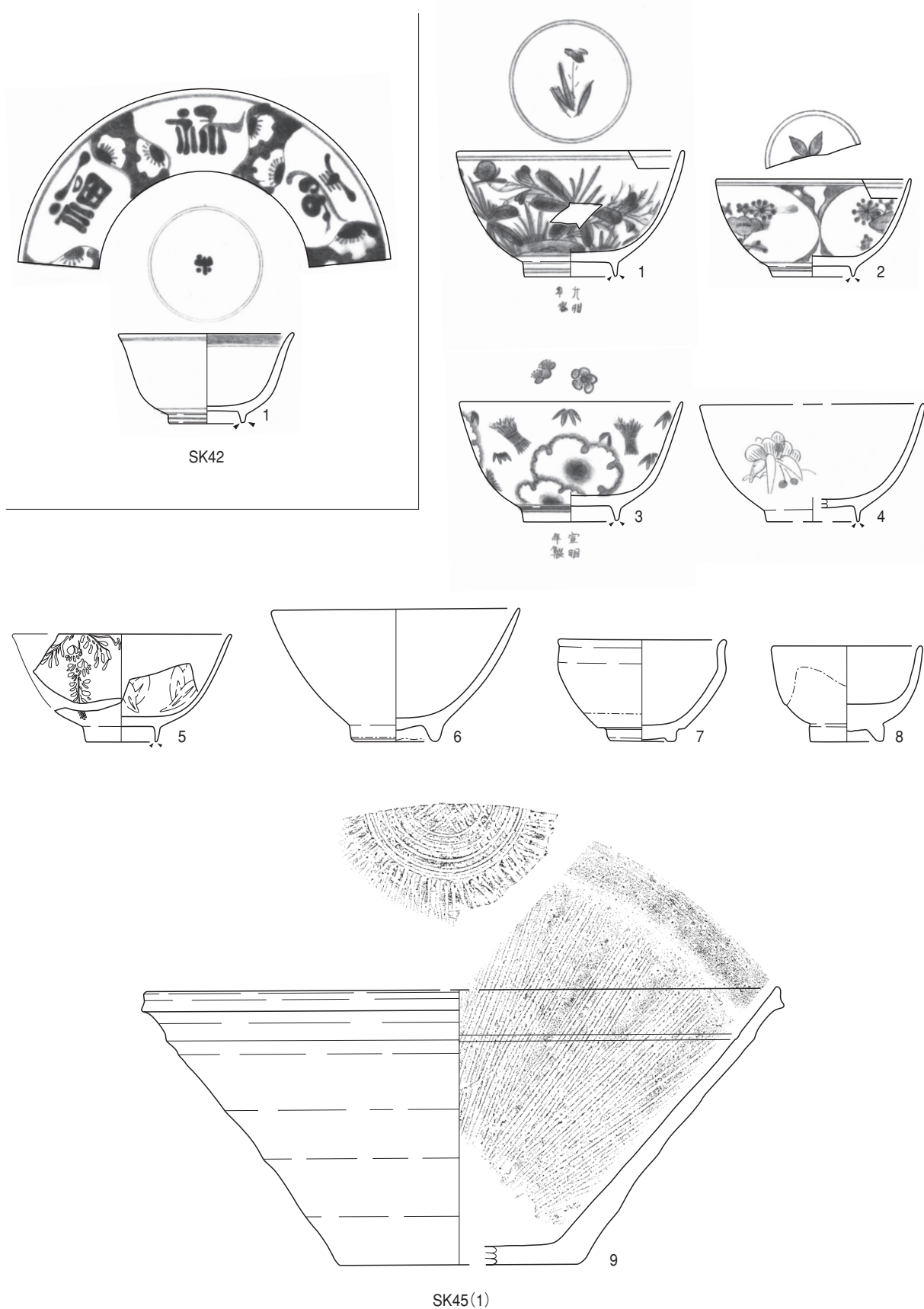




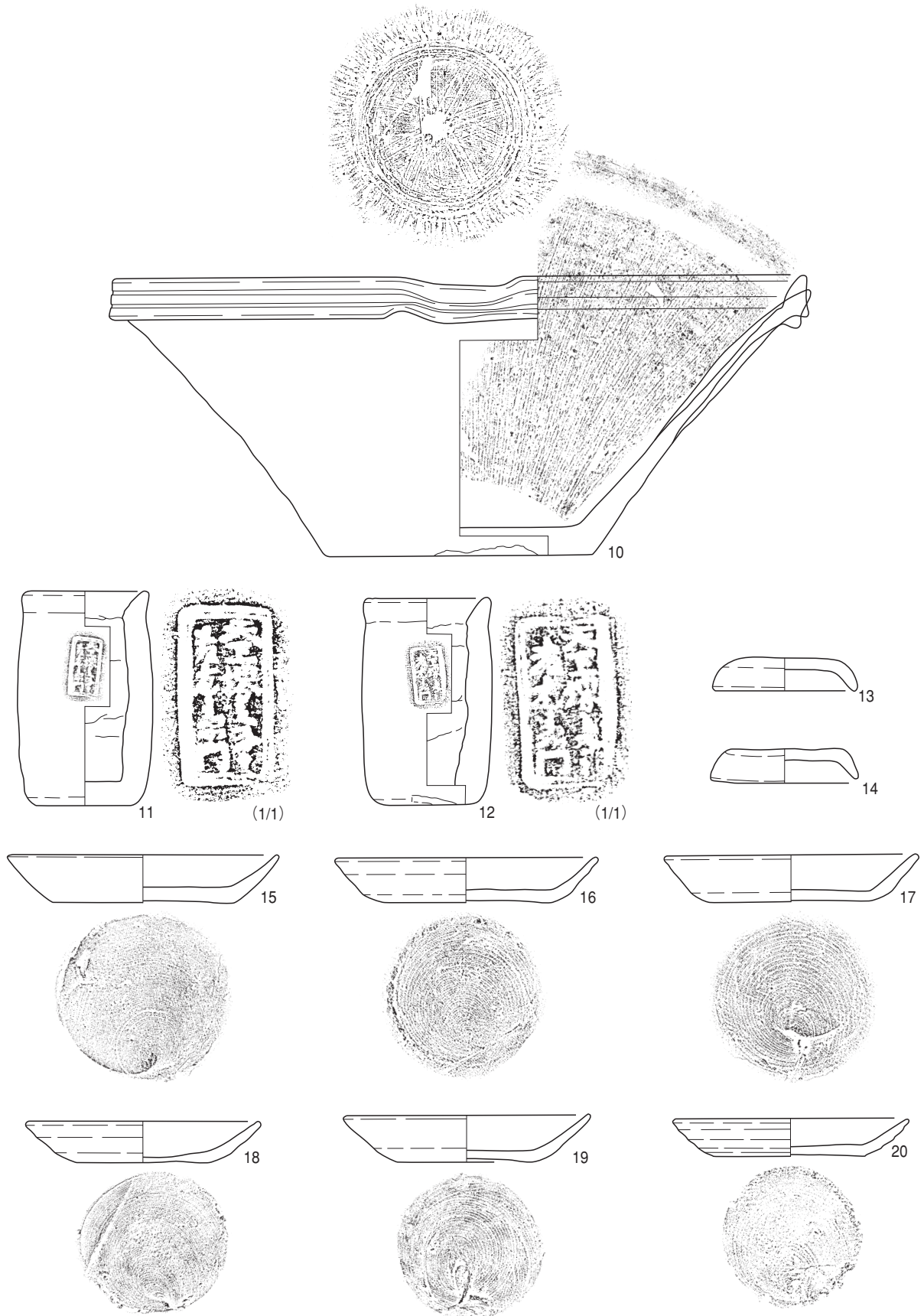
Ⅲ-14 図 SK27(2)、SK33(1) 出土遺物



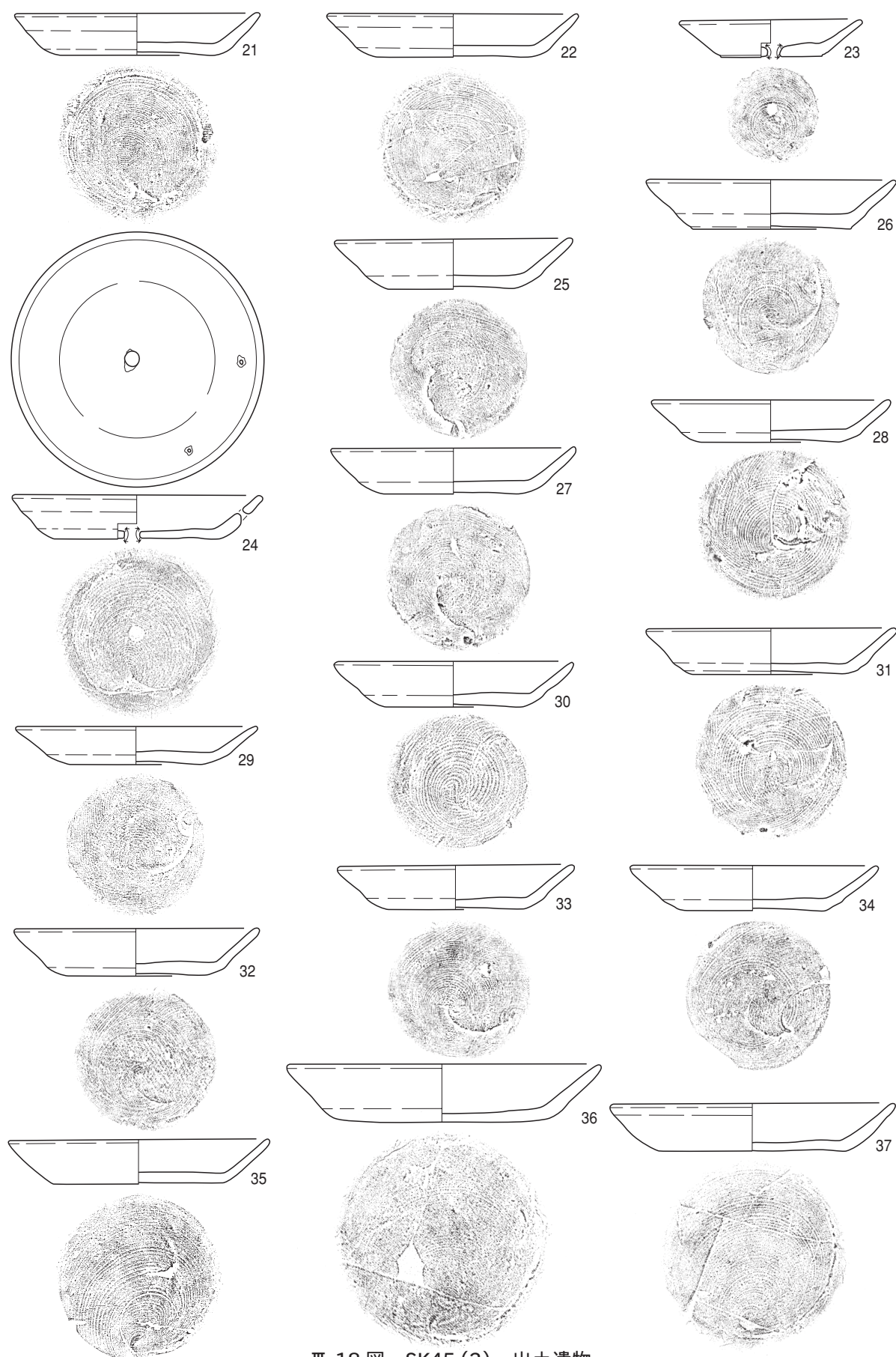
Ⅲ-15 図 SK33(2)、SK40 出土遺物



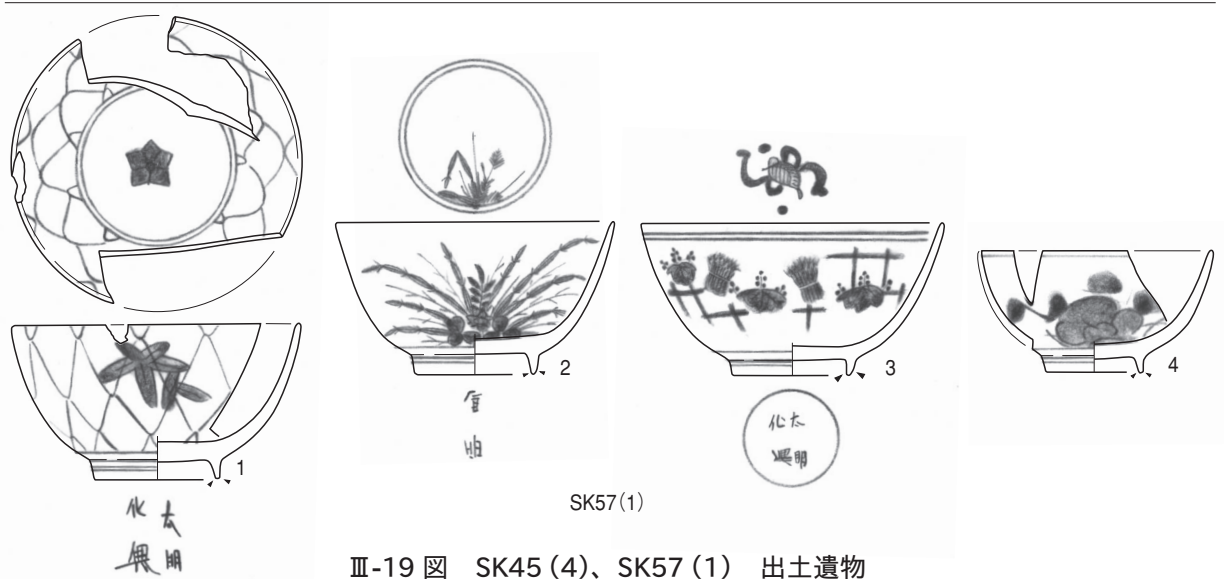
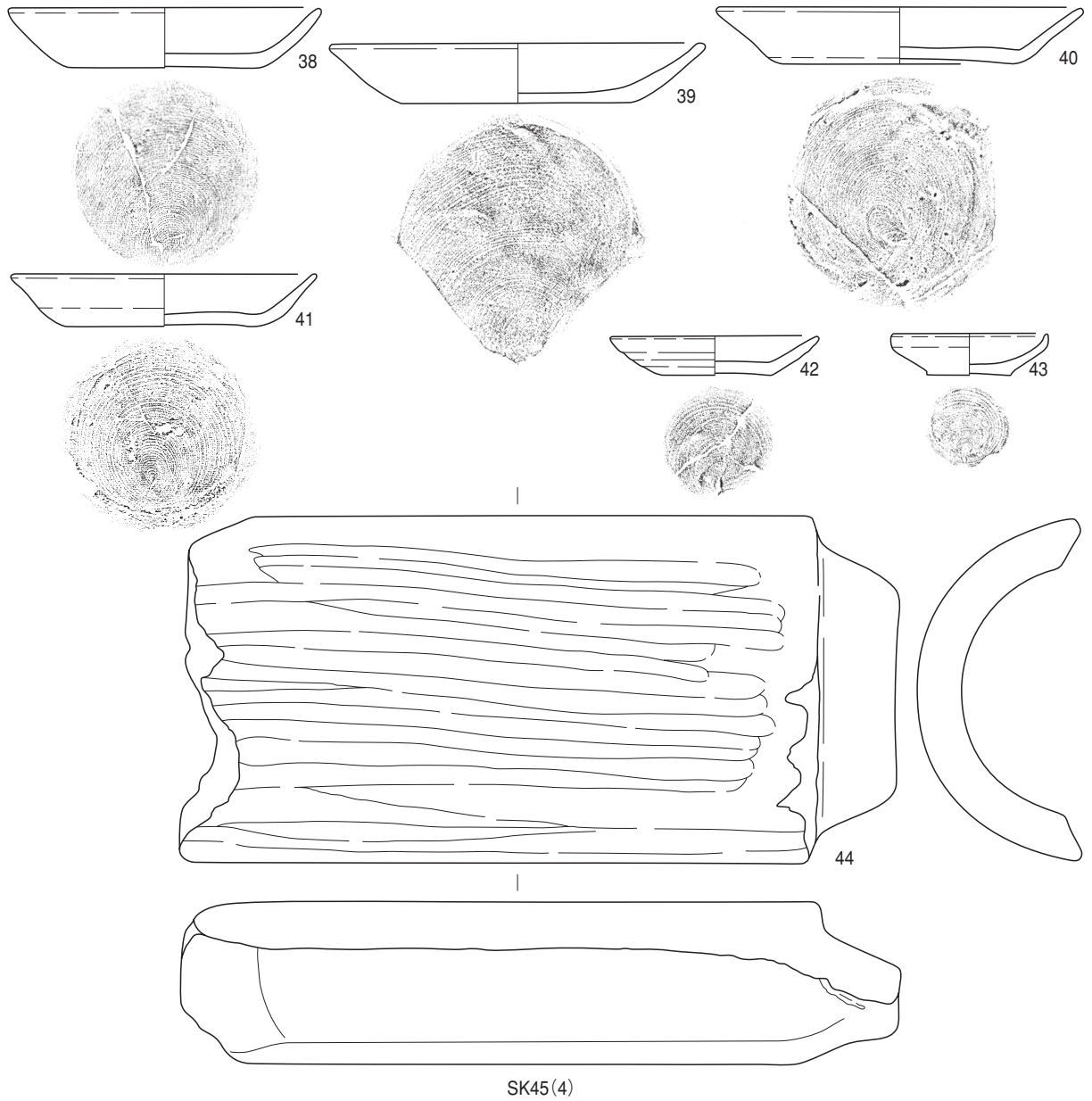
Ⅲ-16 図 SK42、SK45(1) 出土遺物



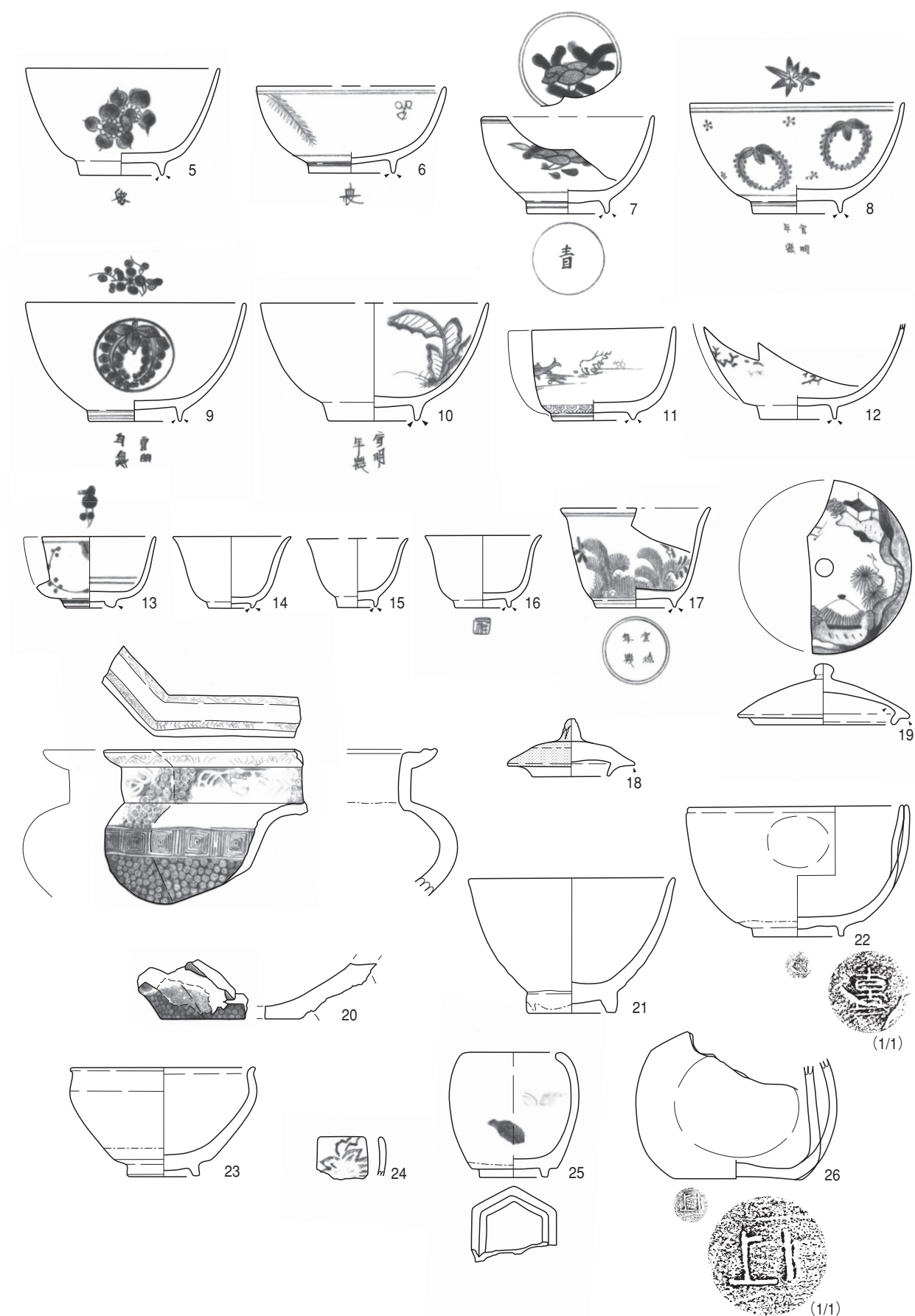
Ⅲ-17 図 SK45 (2) 出土遺物



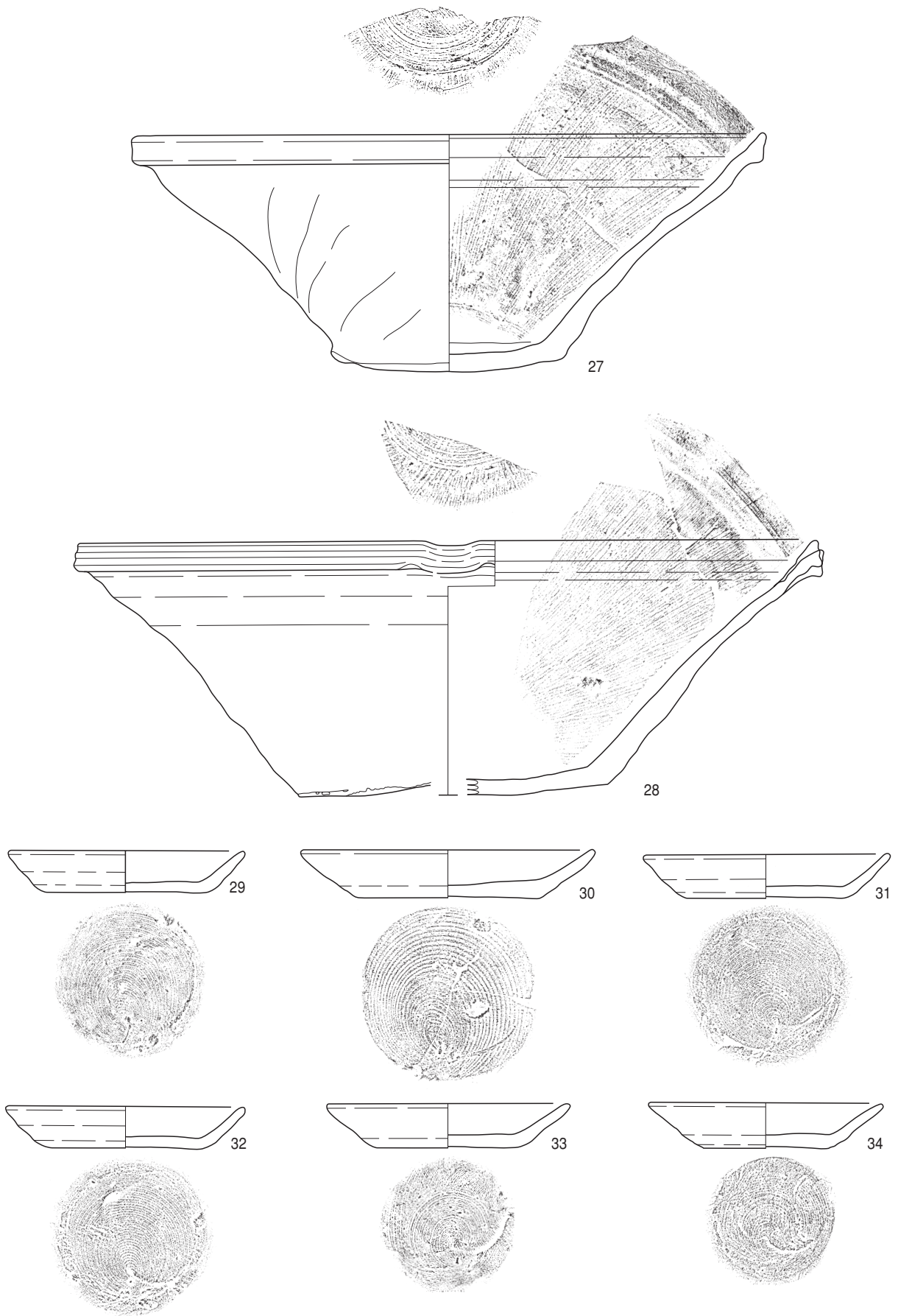
Ⅲ-18 図 SK45 (3) 出土遺物



III-19 図 SK45(4)、SK57(1) 出土遺物

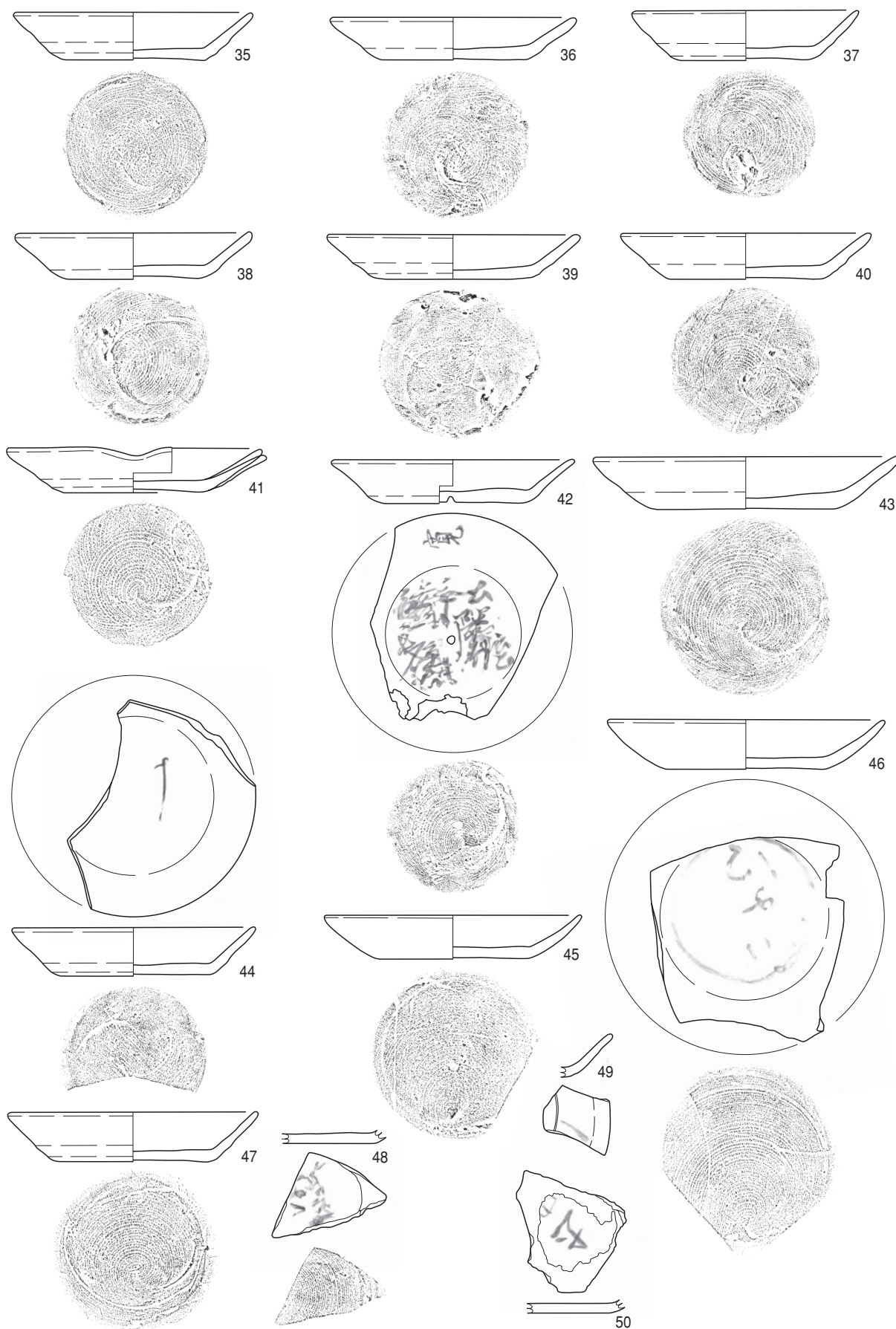


Ⅲ-20 図 SK57 (2) 出土遺物

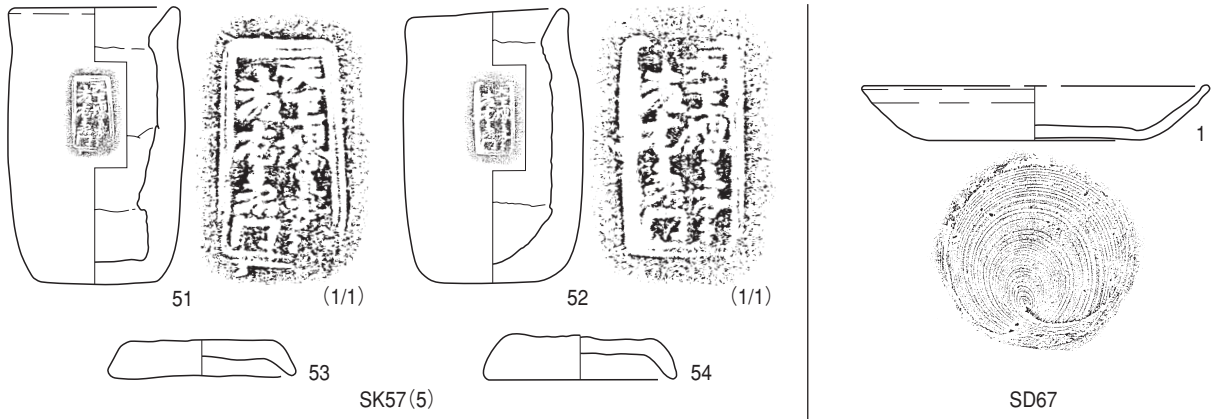


Ⅲ-21 図 SK57(3) 出土遺物





Ⅲ-22 図 SK57 (4) 出土遺物



Ⅲ-23 図 SK57(5)、SD67 出土遺物

## 第Ⅳ章

### 研究温室地点の成果と課題

第1節 考古資料からみた研究温室地点の土地利用状況

第2節 17世紀のかわらけ一括廃棄遺構の一様相

—理学系研究科附属植物園研究温室地点のかわらけ一括廃棄遺構の分析を中心に—

第3節 研究温室地点出土の動物遺体

第4節 「小石川植物園」の土地利用に関する歴史的変遷

## 第1節 考古資料からみた研究温室地点の土地利用状況

成瀬 晃司

### はじめに

本地点の位置する理学系研究科附属植物園は、通称「小石川植物園」の名称で一般的には親しまれている。正確には植物園の南西には、旧東京医学校本館（重要文化財）を活用した総合研究博物館小石川分館エリア、北西には、農学生命科学研究科小石川樹木園エリアがあり、全てを含む用地の総称として学内的には白山構内と称している（Ⅱ-5 図）。

現在の区画が成立したのは先述した通り（第Ⅱ章 第1節）、明治36年で、それ以前の調査地点は北側に隣接する原町と植物園にまたがって位置していた。その区画は江戸時代から踏襲されており、現在行政的には文京区 No.81「小石川御薬園跡」および同 No.21「小石川植物園内貝塚・原町遺跡」と重複して指定されているが、厳密には本地点南側が前者に、北側が後者に該当することになる。

以下に周辺域の変遷を踏まえながら、本地点の土地利用変遷について概観したい。

### （1）本地点における段階設定

調査地点は白山台地の尾根上に立地していることもあり、近世以前の重層的な遺構面は確認されず、単一面で（ソフトローム上面）全ての遺構の調査を実施した。そのため、考古学的視点からの土地利用の変遷は、遺構の切り合い関係、出土遺物の年代観からの断片的情報に限られ、自立した段階設定を構築することは不可能であった。そこで、白山構内およびその周辺域における文献・絵画資料から得られる画期を基軸として、復元を試みたい。なお文献資料の詳細な考察は渋谷論者を参照されたい。

植物園を中心とした区画の変遷は、文献・絵画資料をもとに以下のように大別される。

#### 1 期 白山社・小石川百姓地段階—元和2（1616）年～慶安4（1651）年

小石川に白山社が造立されたといわれる元和2年を上限に、松平徳松（のちの綱吉）の小石川下屋敷拝領（慶安5年）を下限とする。この間の様相は「正保年間江戸絵図」によれば調査地点は百姓地にあたると推定される。

#### 2-a 期 館林藩下屋敷段階—慶安5（1652）年～延宝8（1680）年

松平徳松の下屋敷地拝領（慶安5年）を上限とし、小石川下屋敷が幕府御殿へと転換された天和元年頃を下限とする。この間、寛文元（1661）年には母桂昌院が小石川下屋敷に居住。寛文2（1662）年、同9年と隣接する百姓地を添地として拝領し屋敷地は拡大した。下屋敷の表門は絵図の表記から屋敷東に隣接する坂道（通称、御殿坂）坂下付近に設置されたと考えられ、調査地点は屋敷地のほぼ中央部にあたと推定される。

#### 2-b 期 幕府小石川御殿段階—天和元（1681）年～正徳3（1713）年

幕府御殿に転換された天和元年頃を上限とし、小石川御殿が廃止された正徳3年を下限とする。綱吉の將軍職就任（延宝8年7月）に伴い、延宝8（1680）年11月に桂昌院は江戸城三ノ丸に移住する。小石川御殿は従来の下屋敷御殿空間を転用し、北側の詰人空間は、館林藩家臣団の小屋敷として切り離された。しかし天和3（1683）年、綱吉世子徳松の死去で館林藩は事実上廃藩となり、小屋敷に居

住していた藩士の多くは幕臣化したため、小屋敷は幕臣の屋敷地へと転換した。元禄 11 (1698) 年に周囲の大名屋敷、幕臣地、寺領などを上地し、御殿の拡大を図るとともに、堀、土居、塀、多門などの修築工事をおこなった。調査地点は近接する文京区 No.84 「白山御殿跡」、同 No.21 「小石川御薬園跡」の発掘調査において考古学的に御殿周囲の堀跡が検出されたことから、小石川御殿の中央部北寄りに位置することが明らかになった。

3 期 大名・旗本下屋敷および幕臣屋敷地・御薬園段階—正徳 4 (1714) 年～明治元 (1868) 年正徳 3 年の小石川御殿廃止を受けて、翌 4 年御殿跡地は 100 区画以上に分割され、大名、旗本下屋敷、幕臣屋敷として配分が行われる。小石川御殿内にあった薬園は規模を縮小し、薬園預かり芥川小野寺が管理することになった。その後、享保 6 (1721) 年には御殿跡地を下賜された屋敷地のほとんどが再び上地となり、小石川薬園の用地となる。薬園奉行には芥川小野寺に加え、小普請岡田利左衛門が任命され、薬園用地のほぼ中央を南北に延びる新道の東側を岡田利左衛門預地 (21,642 坪)、西側が芥川小野寺預地 (22,558 坪) となる。翌 7 年には岡田預地のうち北西角 1,092 坪が岡田利左衛門役屋敷、西部 (1,000 坪) が施薬院 (小石川養生所) となった。その後、延享 5 (1748) 年以降、両預地の一部が大名・旗本屋敷地に転換され薬園用地は縮小した。調査地点付近は正徳 4 年の屋敷地分割によって東西に延びる道を挟み、幕臣地となる。享保 7 年の岡田役屋敷拝領によって、道路南側は岡田の屋敷地に含まれ、北側の屋敷所持者に変化は認められるものの屋敷割りと用途は幕末までほぼ踏襲された。

## (2) 1 期の様相 (図 1)

1 期に帰属すると断定できる遺構は残念ながら認められなかった。しかし可能性としては以下に述べる SD67 がある。本遺構は、断面逆台形をした溝状遺構で、覆土の様相に流路としての痕跡が認められないことから、地境施設と推定される。出土遺物は 17 世紀中葉に想定され、本地点出土資料のなかで最も古く位置付けられる。また本遺構は本地点での遺構主軸が段階を越えてほぼ N-45° -E と北東方向に平行、直交しているのに対し、本遺構の主軸は遺構自体が湾曲しているので厳密な数値は提示できないものの、N-50° -55° -W と他の遺構と比較して 5~10° の隔たりが存在する。

館林藩が当該地を下屋敷として拝領したのは慶安 5 年 8 月ことで、その年の 10 月に惣構えの堀普請事業の鋤初めを行っている。しかし実際に活用されたのは 1650 年代後半、もしくは桂昌院が居住した寛文元年以降と推定されることから、SD67 は館林藩下屋敷以前の遺構の可能性を指摘したい。

## (3) 2 期の様相 (図 1)

2 期のうち、小石川下屋敷段階の 2-a 期に帰属する遺構は、出土遺物の年代観から SK45、SK57 があげられる。ともに不整長方形を呈し、坑底直上から覆土下層にかけて多量のかかわり、動物遺体が検出された。かわりけは完形、半完形品を主体としており、灯心痕、墨書が認められる製品は少量に過ぎない。その様相から、大名屋敷の調査事例に認められるかわりけを飲食器として利用した宴、すなわち式正の宴会後の一括廃棄資料と位置付けることができ、出土層位や遺構形態より本遺構は宴にて生じた不要物の廃棄を目的として構築されたと推定される。

かわりけ、動物遺体とともに陶磁器類も廃棄されていた。調査時に覆土一括資料として取り上げたため、かわりけ、動物遺体出土層位と同一層位への廃棄か確認するすべはないが、両遺構ともに確認面からの深さが約 60cm で、その半数近い容積が廃棄層位であることから、かわりけ、動物遺体廃棄層位より後の廃棄であったとしても大きな時間差は生じていないと考える。SK45、SK57 と

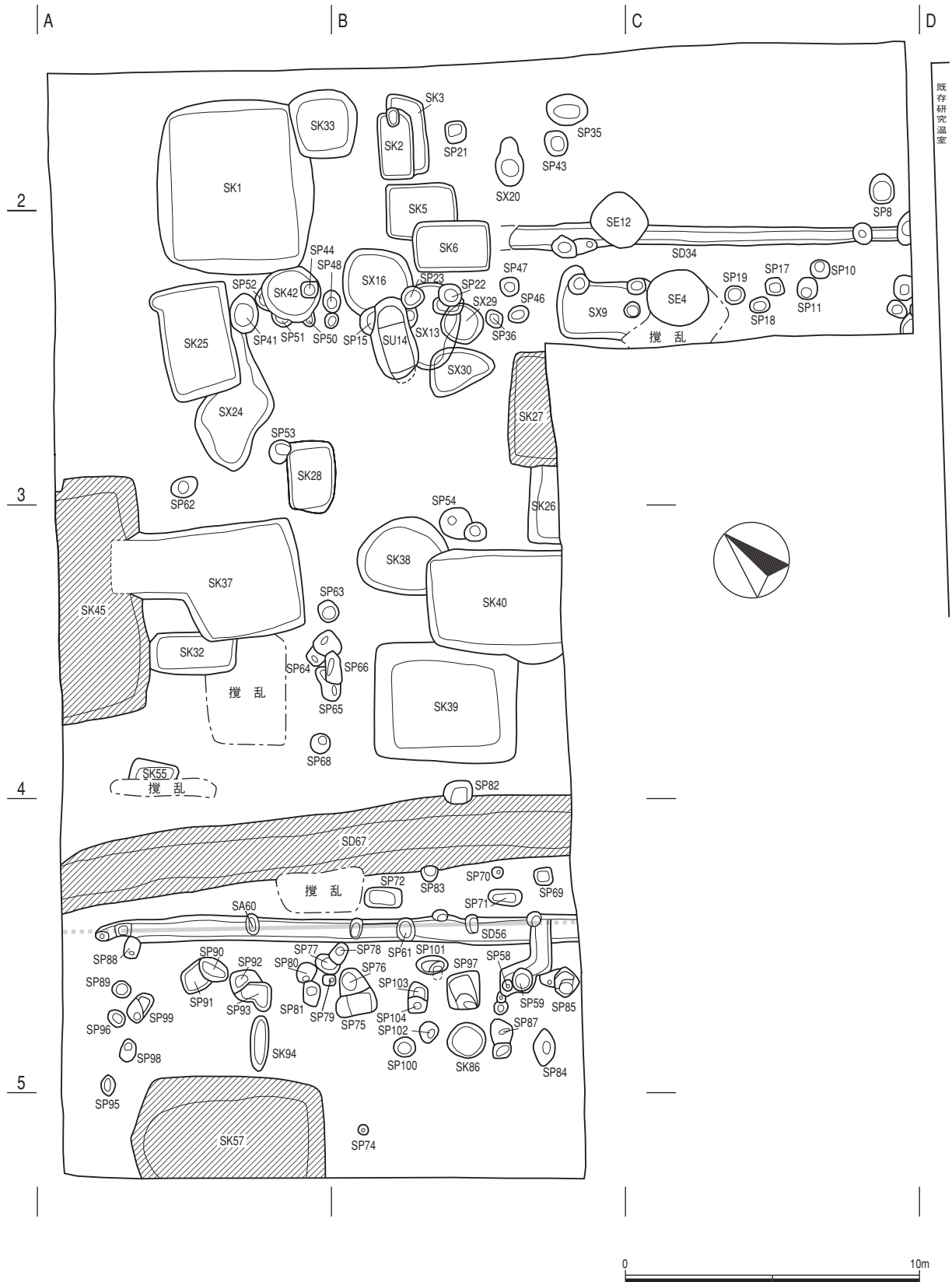


図1 館林藩下屋敷から小石川御殿期(1652~1713)の遺構

もに共伴する肥前磁器碗は、1650 後半～70 年代の生産年代が与えられる JB-1-c からなっている。SK45 の 3、SK57 の 2、8、9、10 にみられる「宣明年製」銘は天和 2 (1682) 年の火災による一括廃棄資料である東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院中央診療棟地点 L32-1 (東京大学遺跡調査室 1990) や、同病棟地点 C2 層出土遺物 (東京大学埋蔵文化財調査室 1999) に認められ、60～70 年代に盛行する銘の一つである。塩壺では SK45 の 11、12、SK57 の 51、52 といずれも輪積み成形で二重角枠内に「天下一堺ミなど藤左衛門」銘を有す製品で、DZ-51-c である。1660 年代頃の廃棄と位置付けられる本郷構内の遺跡・御殿下記念館地点 678 号、802 号遺構で主体的に認められる (東京大学埋蔵文化財調査室 1990)。また、SK45 の 7 や SK57 の 11～13、20、23～25 には火災によると考えられる 2 次的被熱が認められる。しかし、覆土に焼土が認められなかったこと、被熱の痕跡が認められる遺物は、出土資料全体ではわずかであり、また組成の主体を成すかわらけには認められないことから、宴会後の廃棄物を埋設する過程で生じた土砂の移動、周辺部の片付け行為などの二次的廃棄に要因を求めることができる<sup>(1)</sup>。

小石川下屋敷に関する火災記録は 1 件あり、万治元 (1658) 年元旦の出火で長屋 20 間を焼失したという。宴会によるかわらけ、動物遺体の廃棄は先述したように火災以降の行為として位置付けられる。肥前磁器と塩壺の年代観からみた両遺構の廃棄年代は 1660 年代で、火災記録との間に矛盾はなく、被熱遺物に関してはこの火災に原因を求めたい。

寛文元 (1661) 年、小石川下屋敷に生母桂昌院が移住する。桂昌院は綱吉が將軍職に就任し、江戸城三ノ丸に移住した延宝 8 (1680) 年までの 19 年間小石川下屋敷で生活を送った。綱吉の館林藩主時代の記録「神田記」によれば、綱吉は延宝 3 (1675) 年から延宝 8 年の間に合計 180 日下屋敷を訪問したと記録されている。また同資料によると茶の湯、射的見学、演能が行われ、桂昌院や伝 (側室)、また家臣に対して振る舞いが行われたとの記録もみられることから、下屋敷訪問に伴い盛大な宴が開催されたとみられる<sup>(2)</sup>。綱吉は寛文 4 (1664) 年に鷹司家の信子と婚礼を挙げたが、桂昌院のもとで奉公していた伝を寵愛し、寛文 10 (1670) 年に綱吉の小姓とした。伝は、延宝 5 (1677) 年には鶴姫を同 7 (1679) 年には徳松を出産しており、頻繁に行われた下屋敷訪問の目的は桂昌院への礼節のみではなく伝、鶴、徳松への思いも強かったと推定される。「神田記」には延宝 3 年以前の記載が残存していないが、そもそも伝との出会いも下屋敷訪問が切っ掛けになっていることから察すれば延宝 3 年以降の年平均 30 回には及ばないにしても母に対する訪問と宴は行われていた推定され、本資料は、寛文年間に開催された綱吉の御成に伴う一括廃棄資料として位置付けることができる。

かわらけの分析については追川論考、動物遺体の組成については新美論考を参照されたい。

続く 2-b 期とした小石川御殿段階に帰属する遺構には遺物の年代観から SK27 がある。本遺構は長方形もしくは方形を呈する遺構で壁面に設けられた昇降用足掛け穴の存在より、地下室としての機能が推定される。事実記載でも述べたように、本遺構最下層からは「天下一」銘が削り取られた塩壺 2 点、削り取られていない塩壺 1 点が共伴して出土していることから、「天下一」使用禁止令が周知されていたことが確認されたとともに、本遺構の廃絶年代が天和 2 (1682) 年を上限とする短期間内に収まることを傍証する資料でもある。

さて、館林藩小石川下屋敷が幕府小石川御殿に転換するにあたって、文献資料からおおむね以下のように整理される。

- ・延宝 8 年 11 月、綱吉の將軍職就任に伴い、桂昌院は小石川下屋敷から江戸城三ノ丸へ、世子徳松は神田上屋敷から江戸城西ノ丸へ移住する。
- ・天和元年、小石川下屋敷を上地。従来の御殿空間を御殿地に転用、詰人空間は居住していた館林

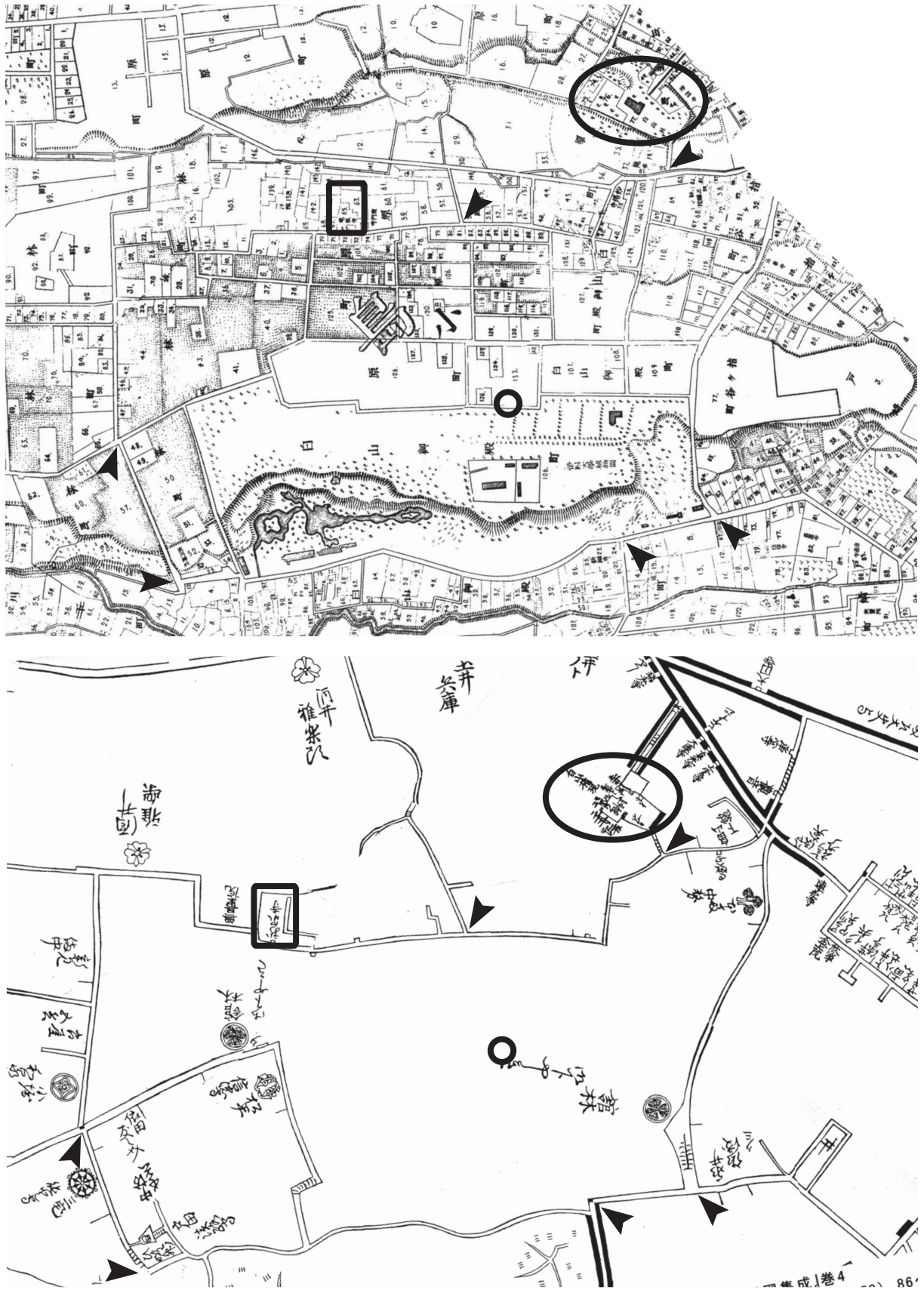
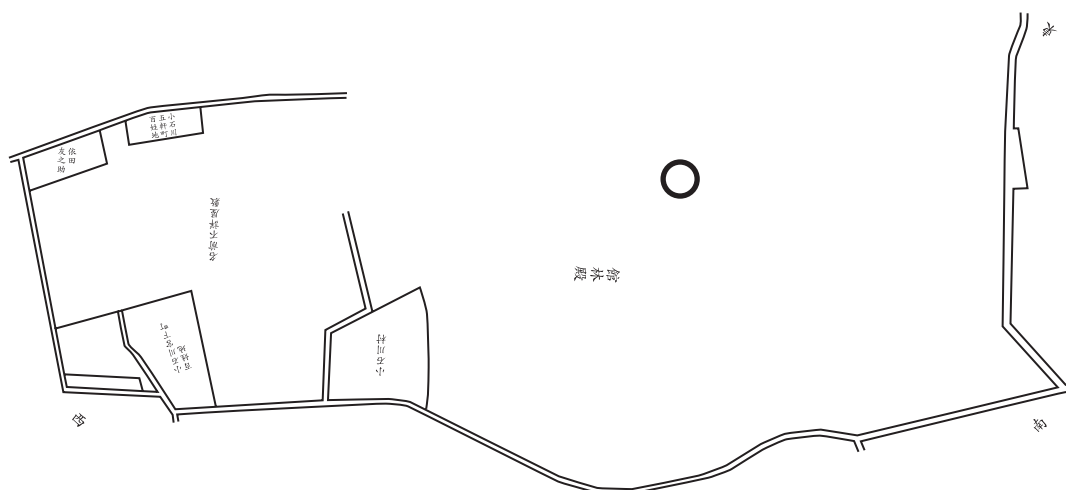
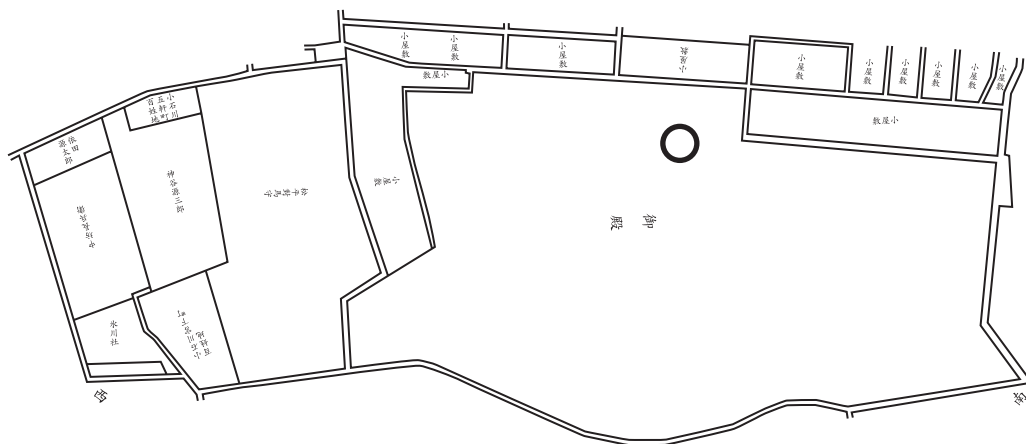


図2 明治28年地形図(上)と延宝7年江戸方角安見図(下)にみる館林藩下屋敷の比較  
 (○は調査地点比定地)

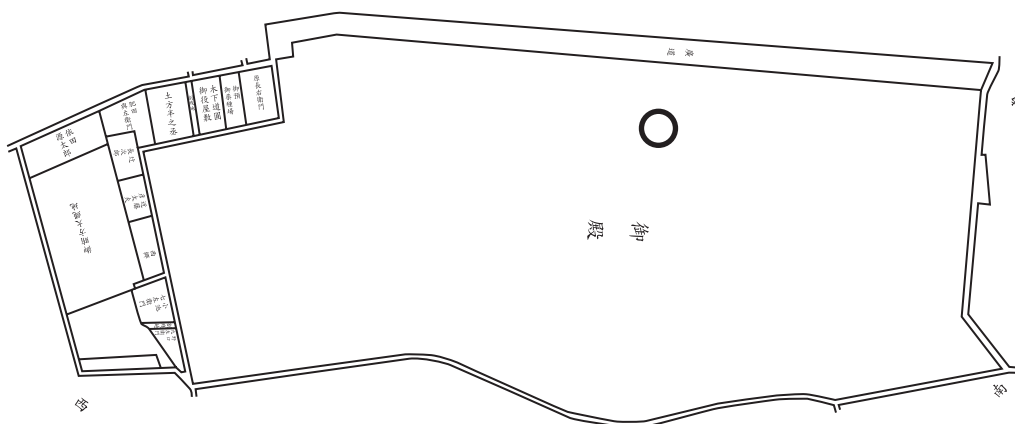




延宝年間



天和年間



元禄11年

図3 調査地点の位置(1) (○が調査地点)  
(御府内場末沿革図書より作成)

藩士に再下賜され、小屋敷として分離された。

- ・天和2年、綱吉は將軍職就任後初めて小石川御殿へ御成を行う。
- ・天和3年閏5月、徳松死去に伴い館林藩は廃藩。小屋敷に居住した藩士の多くが幕臣化したため、小屋敷は幕臣屋敷地へ転換した。

この動向を絵図面と重ね合わせて、調査地点の状況を考えてみたい。

図2は延宝7年の江戸方角安見図と明治28年の地形図に照らし合わせ、小石川下屋敷の位置を示したものである。路地角と寺社の位置関係より、北西角を除く下屋敷の位置をほぼ特定することができる。その結果、調査地点は屋敷地のほぼ中央付近に位置することが確認されるが、文字表記の方向から下屋敷の表門が屋敷東側の坂下付近と推定されることから、調査地点は御殿空間の奥、もしくは詰人空間に含まれていたと推定される。図3、4は御府内場末沿革図書にみられる小石川付近の土地利用変遷に調査地点を示した図である。対比においては区画がほぼ確定した享保7年段階の南東、南西角、北側地境のクランク、東地境隣接路地にみられる台形状の張り出し部分を基準にした。ここでも小石川下屋敷期にあたる延宝年間の絵図では藩邸のほぼ中央に位置している。そして小石川御殿となり、御殿地と小屋敷が分離した天和年間の絵図との対比で、調査地点は御殿地の北辺にあたることを確認された。この結果、小石川下屋敷段階においても調査地点は御殿空間の北辺に位置していたと考えることができる。

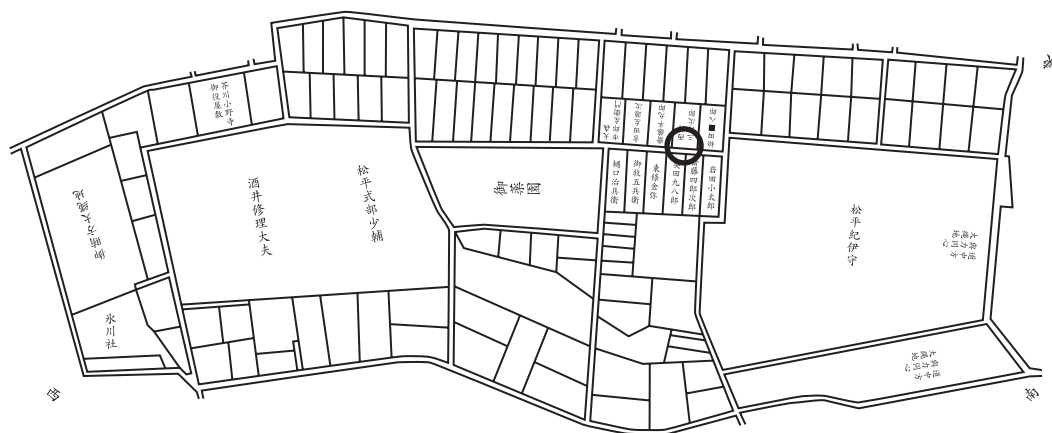
先述したように2-a期のSK45、SK57はともに廃棄を目的として構築された遺構であり、廃棄遺構が分布する調査地点周辺は、東に面する表門からの距離も合わせ、御殿空間のなかでもウラ部分にあたると思われる。2-b期においても空間域は下屋敷段階御殿空間を引き継いでおり、表門の方向にも変更は認められないことから、土地利用に大きな変化はなかったと推定される。

#### (4) 3期の様相 (図5)

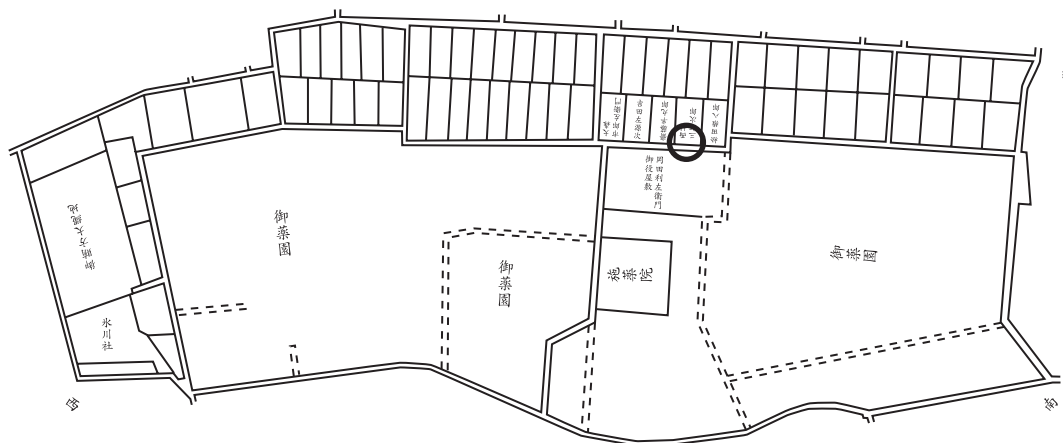
本期に帰属する遺構は、段階設定期間が長いこともあり、最も多い。遺構種別的には長方形土坑が最も多く、それに不整形遺構が続く。またいわゆる「地下坑」と称されたSU14や、井戸SE4も検出されている。これらの遺構は年代に関係なく調査地点北半域に分布している。土坑の主軸方位はほとんどの遺構でN-45°-Eを示し、屋敷割りに規制されていたことが読み取れる。

一方、南半域では東西に延びるSD56が存在するのみである。ただし、本遺構内には同一方向に延びるSA60があり、さらに南側には多数のピットが存在する。このピット群からは共伴するピット列を読み取ることはできなかったが、SD56と平行した分布と判断でき、東西方向に延びる堀跡もしくは柵列など区画に関連する遺構と推定される。従ってSD56と同一の区画に規制された結果と位置付けることができ、本期に帰属する可能性は高い(以下、ピット群1とする)。また2ライン南にはSD56と平行するSD34とピット群(以下、ピット群2とする)が存在する。溝とピットの規模・形態や、溝の南側にピットが分布する点で、SD56とピット群1と共通する。ただし、本期に帰属する19世紀代の遺構と複数のピットが重複することから、19世紀に位置付けられるSD56以前の区画施設の可能性を指摘したい。

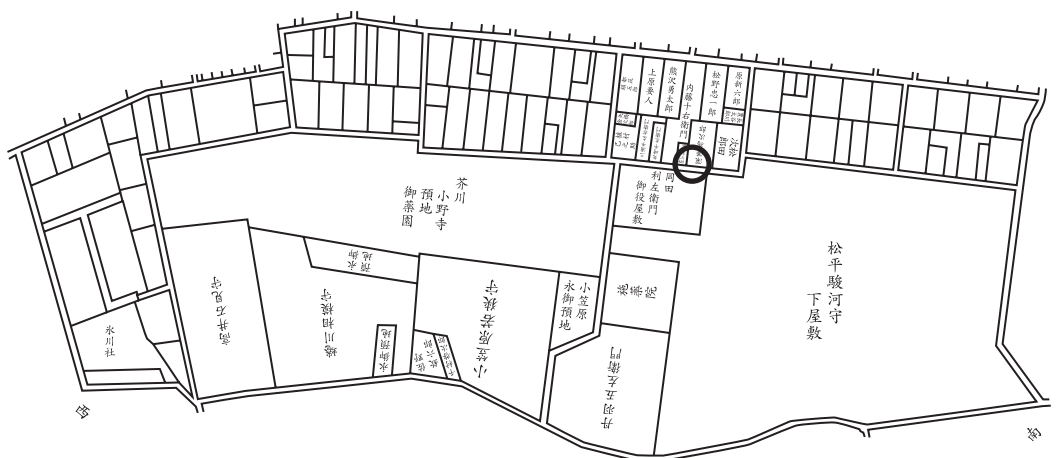
さて、2期と同様に御府内場末沿革図書と調査地点を対比してみたい(図4)。小石川御殿は正徳3(1713)年に廃止され、翌4(1714)年には大名屋敷、幕臣屋敷地と細かく区画された。調査地点付近には東西に延びる路地をはさみ、両側に幕臣屋敷地がおかれた。おおよその検討では路地北側が東側のクランクから2軒目にあたる西村三郎次郎、南側が奥田九八郎屋敷付近に比定される。享保6(1721)年小石川御薬園の設置に伴い、路地の南側は一斉に上地され薬園地となったが、調査地点付



正徳4~6年



享保7年



嘉永7年

図4 調査地点の位置 (2) (○が調査地点)  
(御府内場末沿革図書より作成)

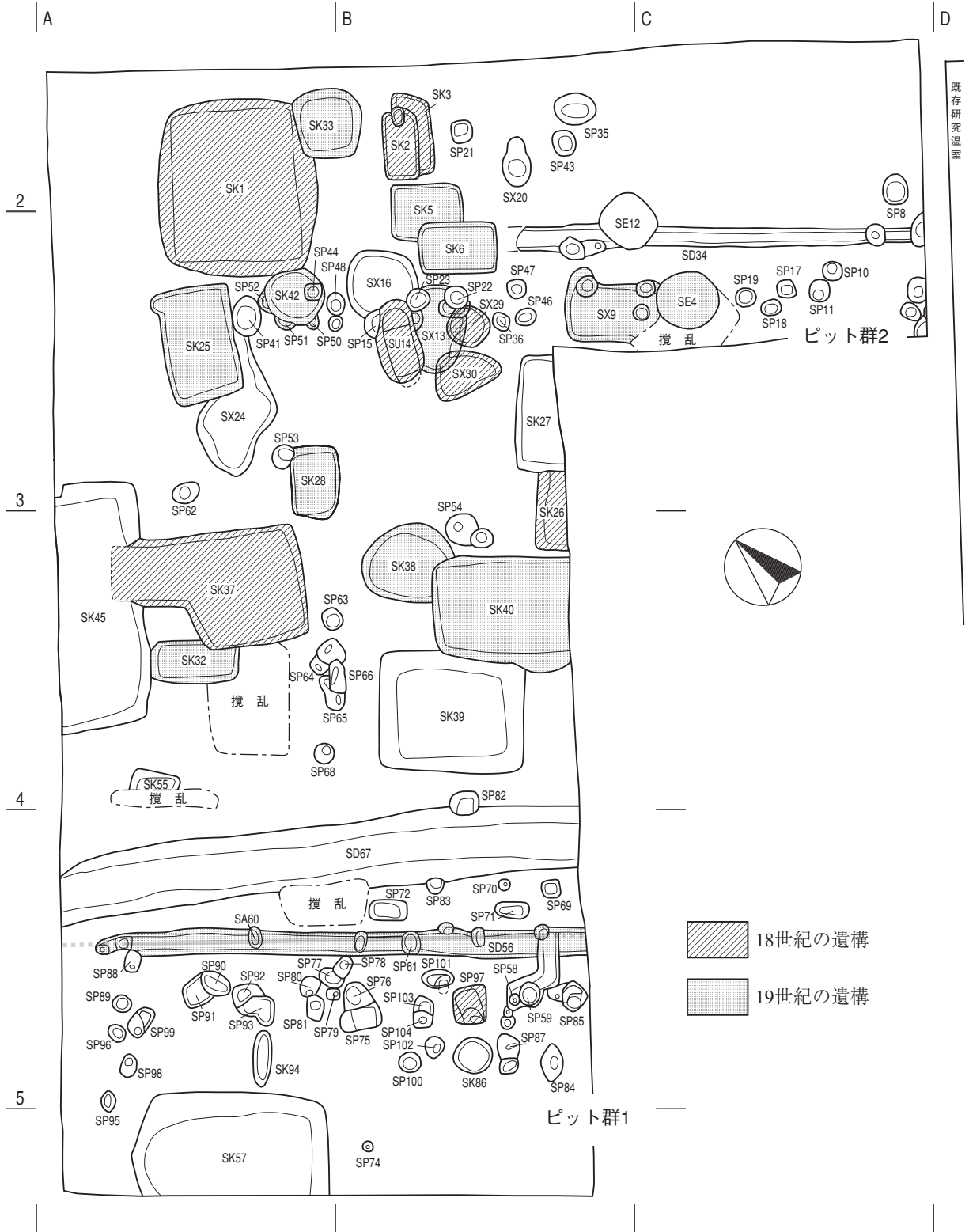


図5 幕臣屋敷地・小石川御薬園期(1714~1868)の遺構

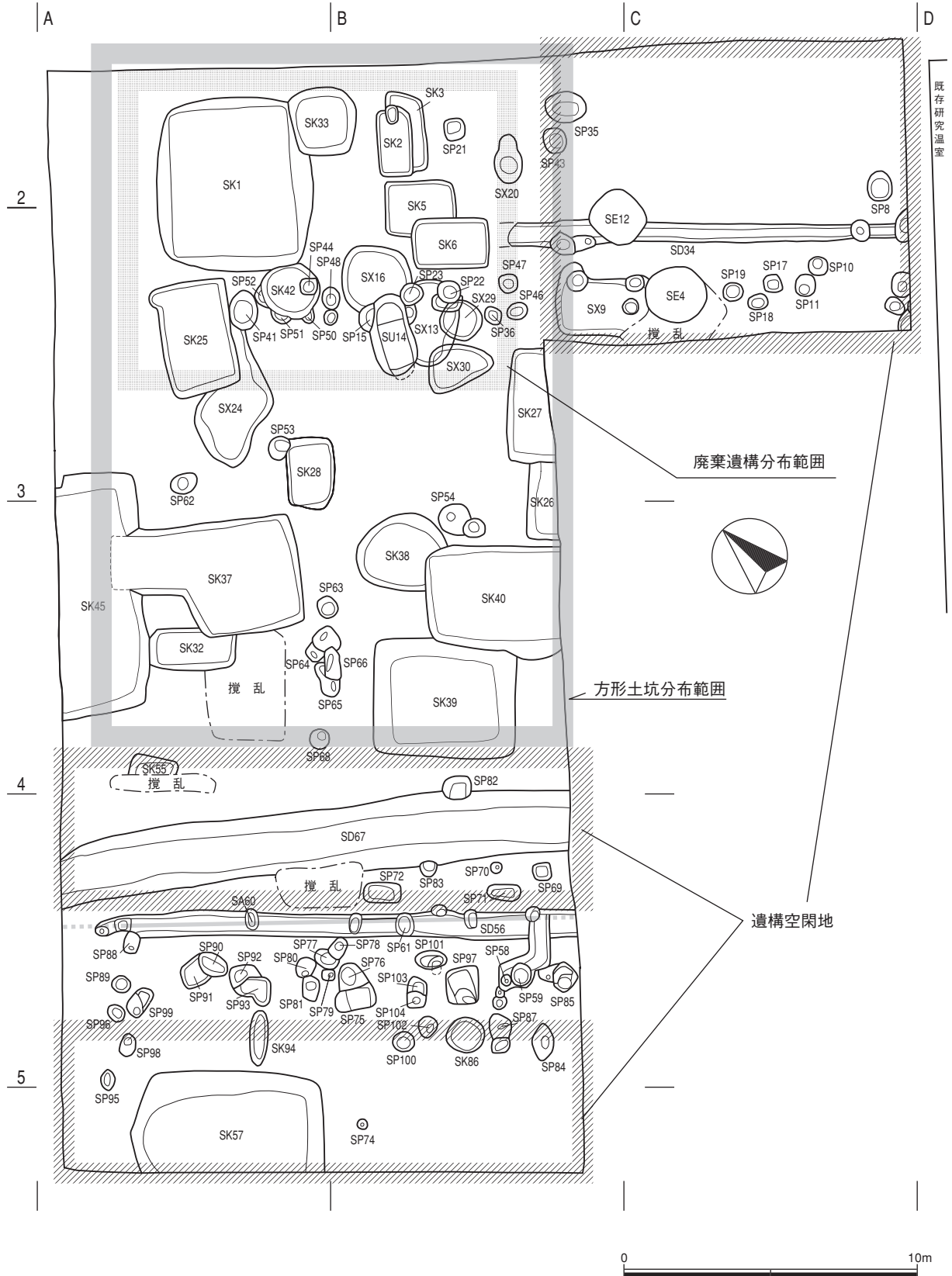


図6 3期の土地利用状況

近は薬園奉行となった岡田利左衛門の役屋敷となった。この時点では北側に変化はない。嘉永7年の絵図では北側の屋敷割に変化がみられる。東側クランクから2軒目の深澤為次郎屋敷までは変わらないが、その西隣に湯原滝之助上地と書かれた小さな区画が生まれた。その隣は北側の屋敷地とながり内藤十右衛門屋敷となった。調査地点は深澤屋敷から湯原上地付近に該当すると思われる。一方、南側は岡田の役屋敷と変化はない。

このように、絵図との比較から、調査地点付近は享保6年以降は路地を挟み、北側に幕臣屋敷地、南側に薬園奉行岡田の屋敷があり、各々が路地に面して門を構えているという景観が幕末まで続くことになる。さて、このような背景を踏まえて再び遺構配置に視点を戻してみたい。SD34とピット群2と、SD56とピット群1はともに区画関連施設であるが、溝の南側にピット列を有すことから、路地の両側で向かい合った状態は不自然で、しかも溝間に分布する多数の遺構の存在から、両遺構が路地を挟んだ屋敷地の区画とは考えにくく、区画の変動による建て替えを想定したい。その場合、先述したようにピット群2と重複する遺構の関係から、SD34関連施設からSD56関連施設への変遷が考えられる。ただし、両遺構の断面形態は皿状を呈し、雨落ち溝として報告されている溝形態に近く、単純に路地の側溝に結びつけることはできない。

以上を踏まえつつ調査地点内の景観をイメージしたい(図6)。調査面積の制限を考慮しなければならないが、ピット群1とSD56を境としてその南北両側には本期に属する遺構はなく、路地もしくは屋敷内のオープンエリアと考えられる。北側の遺構空地はSD56からSK39までの距離は約5mを測り、それより北側へ方形土坑を中心とした遺構が分布する。さらにSD56から約19m北側に(ピット群1の南端からは約23mを測る)、SX13、SK25、SK33など19世紀代の廃棄遺構が分布する。

岡田屋敷前の路地とその北側の路地までの距離、すなわち四方を路地で囲まれたこの一街区の南北距離は現在約90mを測る。絵図に描かれた屋敷地は南側と北側で区割りが異なり、南北奥行きに関して絵図上で換算すると南側の屋敷の奥行きは総距離のほぼ6/14となり、実数に置き換えると約40mとなる<sup>(3)</sup>。SD56関連施設を屋敷境と想定した場合、SD56北側の遺構空地と、その奥の土坑、廃棄遺構空間はすでに事例報告や研究がなされているように短冊形地割りの幕臣屋敷のあり方と共通し、ピット群1南側空地は路地に、北側空地は居住空間、3ライン以北は裏庭に比定できよう。ただし、本例においては地境施設のあり方、すなわちピット列と溝の関係が検討課題として残される。

## おわりに

以上、調査地点の土地利用状況について述べてきたが、最後に本地点でも検出されたいわゆる「地下坑」について若干触れたい。白山四丁目の調査に端を発した本遺構は、その後小石川、千石地域を中心に調査事例が増加し、最近では谷を挟んだ小日向、大塚地域でも検出例が報告されている(Ⅱ-1図)。

しかし、発掘調査における安全上の制限などから完掘事例はほとんどなく、調査終了後に重機による掘削事例がごく僅か行われているのが現状である。ただし、竪坑部の形態、規模、付随施設の特徴から未完掘事例においても本遺構として認識することができ、空間分布をおさえることは可能である。すでに指摘されているように本遺構検出遺跡の履歴は幕臣の屋敷地に限定されている。白山構内においても本地点をはじめ、「地下坑」が2基検出された根圏観察室地点(Ⅱ-5図、3)は元禄年間以降幕臣屋敷地として経営されている。また、植物園職員からの聞き取り情報による電柱埋設時の発見例も第1期研究温室北側付近とされ、やはり幕臣屋敷地に該当する。調査担当者のご厚意で見学させていただいた林町遺跡第1地点(Ⅱ-1図、26-1)は(現在、整理中)、Ⅳ-3、4図を参照にすると調査地点

北側と東側に幕臣屋敷地がL字状に位置し、南西側は御賄方大縄地に比定される。検出された「地下坑」の分布は調査地点の北側と東側に集中し、幕臣屋敷地内に該当するとされる。このように現状では幕臣屋敷に特化している様相が看取される。ただし、白山御殿跡（Ⅱ-1 図、84）では幕臣屋敷地であるが検出例が認められていないが、本地点の大半が小石川御殿期の堀を埋め戻して幕臣屋敷地に転換しているため、遺構構築にあたってローム層が利用できないことが地下坑が構築されなかった一要因と考えられる。このように「地下坑」は本地域周辺に偏在し、幕臣屋敷地と密接な関係を有していたことは明らかである。その性格については粘土採掘坑説（白山四丁目遺跡調査会 1981）、甘藷貯蔵庫説（加藤・遠藤 2004）が唱えられているが、いずれの論もすでに指摘されているよう疑問点を有し（加藤建設埋蔵文化財調査部 2005）、本遺構の性格を決定づけるまでには至っていない。しかし現状では、筆者自身も有効な論を持っているわけではなく、完掘を含む調査事例の増加に期待しつつ、幕臣屋敷地内の立地分布、使用年代の推定、居住者の性格など多角的知見から本遺構の性格を探求を課題とした。

#### 【註】

- (1) 食物残渣を含むような廃棄行為が行われた場合、その直上に土砂を盛り、廃棄層をパッキングする事例は各所で報告されており、有機物の腐敗臭を緩和させるための行為と考えられる。
- (2) 渋谷葉子氏の御教示による
- (3) 『東京市史稿』市街篇所収の「屋敷預渡絵図証文」の記述から、21 間 4 尺（約 39m）であることを渋谷氏より御教示いただいた。

#### 【引用・参考文献】

- 遠藤寛子・加藤元信 2004 「小石川のあなぐら—都市と農村をむすぶもの—」『東京考古』22
- 加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部 2005 『大塚窪町遺跡—文京区窪町小学校校舎改築に伴う発掘調査報告書—』
- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 「医学部附属病院病棟建設地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 「総合研究博物館小石川分館地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 「農学生命科学研究科樹木実験圃場根圏観察室地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 成瀬晃司・堀内秀樹・両角まり 1994 「東京大学理学部附属植物園内の遺跡 研究温室地点—SK27 出土の一括資料—」『東京考古』12
- 白山四丁目遺跡調査会 1981 『白山四丁目遺跡』
- 文京区遺跡調査会 1995 『原町遺跡—徳島県職員住宅建設に伴う発掘調査—』
- 文京区遺跡調査会 1996 『原町遺跡第Ⅱ地点—防火水槽建設に伴う発掘調査報告書—』
- 文京区遺跡調査会 2000a 『林町遺跡第Ⅱ地点—集合住宅建設に伴う発掘調査報告書—』
- 文京区遺跡調査会 2000b 『指ヶ谷町遺跡—文部省施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—』
- 文京区遺跡調査会 2003a 『白山御殿跡ほか—集合住宅建設に伴う発掘調査報告書—』
- 文京区遺跡調査会 2003b 『一行院跡ほか—集合住宅建設に伴う発掘調査報告書—』

## 第2節 17世紀のかわらけ一括廃棄遺構の一様相

—理学系研究科附属植物園研究温室地点のかわらけ一括廃棄遺構の分析を中心に—

追川 吉生

### はじめに

理学系研究科附属植物園研究温室地点は既に述べているように、承応元（1652）年に館林藩下屋敷として藩主・松平徳松が拝領し、彼が5代将軍綱吉として江戸城へ移った後、幕臣の屋敷となる<sup>(1)</sup>。館林藩下屋敷に比定される時期の遺構であるSK45・SK57から、極めて多量のかわらけが出土した。本稿ではこれら2遺構をかわらけ一括廃棄遺構と捉え、そのあり方する若干の考察を試みたい。

### (1) かわらけ一括廃棄遺構の形成要因

かわらけ一括廃棄遺構は「かわらけ溜り」とも呼ばれている。その形成要因としては、祝いの席などの儀礼に伴う会食との結びつきが指摘されている（山口1991）。本学本郷キャンパスでも、かわらけ一括廃棄遺構と儀礼の際の膳部との結びつきを示唆する検出事例がいくつか知られている。医学部附属病院中央診療棟地点から検出された池状遺構からは、かわらけをはじめ、白木の箸や折敷、蒲鉾板や焼塩壺などが出土した。そうした共伴資料の中には、「ます（鱒）十五入」や「雁九ツ」、「あゆ」等の食材や、「富山」、「高岡」といった地名が記された木簡も含まれていた。特に「寛永六年三月十九日」という日付のある木簡が認められたことから、寛永6（1629）年4月26日、29日の加賀藩本郷邸（当時は下屋敷）への御成に伴う資料であることが考えられる（堀内2000）。なお本郷邸には26日に将軍家光が、29日に大御所秀忠が訪れている。

御殿下記念館地点395号遺構はかわらけばかりでなく、食物残滓も特徴的な遺構だった。僅かにマダラの歯骨（これから予想される体長およそ60cm）とスズキの尾椎骨（長さ6.6mm）を除くほか、他はマダイの骨であった。骨は少なくとも6個体分はあり、その体長は40～50cmと推定され、大型のマダイであったことがうかがえる（金子1990）。江戸時代になると、タイが最も格式の高い魚とされた（原田1989）。395号遺構からは頭部の骨もほぼそのままの状態出土していることから、尾頭付きのタイがメインメニューの祝膳だったと思われる。以上のように、かわらけ一括廃棄遺構の形成要因には、儀礼の際の宴会が大きな意味を持っていたことがわかる<sup>(2)</sup>。

### (2) 理学系研究科附属植物園研究温室地点のかわらけ一括廃棄遺構

本地点ではSK45とSK57がかわらけ一括廃棄遺構に該当する。まずはそれぞれの遺構から出土するかわらけの点数についてみてみることにしよう。報告書ではSK45で29点、SK57で22点のかわらけを扱った。ここに掲載した資料は全体の一部に過ぎず、SK45はコンテナ6箱、SK57では同8箱分のかわらけが出土している。しかしその多くは1～3cm程度の破片であり、実際の個体数を把握することは困難である。そこで本稿の分析にあたっては、報告書に掲載した資料に加えて、底部から口縁部にかけての一部が残り、本来の大きさが推定し得る資料についても分析対象としてカウントした。その結果が表1である。



表 1-1 研究温室地点 SK45

	6cm	9cm	12cm	15cm	15cm 以上	計
普通	0	6	138	17	0	161
煤付着	0	2	70	10	0	82
穴あき	0	1	2	0	0	3
墨書	0	0	0	0	0	0
計	0	9	210	27	0	246

表 1-2 研究温室地点 SK57

	6cm	9cm	12cm	15cm	15cm 以上	計
普通	0	1	120	14	5	140
煤付着	0	0	35	7	1	43
穴あき	0	0	1	1	0	2
墨書	0	0	3	0	0	3
計	0	1	159	22	6	188

### SK45

前述した基準によってカウントし得たかわらけは 246 個体分となった。大きさは口径 9～15cm の範囲に収まることがわかる。口径を 3cm 毎にグループ分けすると、口径 12cm のグループに最も多い 210 点のかわらけが集中する（こうした口径 3cm 毎のサイズで分けたかわらけのグループを、口径 ○ cm グループと呼称する）。これは全体の 85%にあたる。

またかわらけに煤や炭化物、あるいはタール状の付着物が認められるもの（表中の「煤付着」がこれにあたる）や、穿孔が施されている（同じく「穴あき」、墨書が施されているもの（同「墨書」）についてはそれぞれ個別に集計した。それ以外のかわらけは表中「普通」として扱っている。その結果「普通」かわらけが 65%を占めていることがわかる。それに対して「煤付着」が 33.3%、「穴あき」が 1.2%であった。SK45 では墨書されたかわらけはみられない。

### SK57

一方、SK57 は 188 個体分の資料を認識した。大きさは、やはり口径 12cm グループに集中しており、159 点・84.5%である。また「普通」かわらけが 75%を占め、「煤付着」が 22.9%、「穴あき」1%、「墨書」1.6%といった割合を示している。

かわらけの主要な用途は食器である<sup>(3)</sup>が、「煤付着」や「穴あき」かわらけは廃棄された時点では食器以外に用いられたことだろう。前者は煤やタール状の付着物、口縁部に認められる灯心痕から照明具として用いられたことがわかる。後者については、穿孔された理由が不明なため用途を比定することはできないが、やはり食器でないことは明らかな。当初からそれぞれの用途に用いられたものか、食器からの転用であるかは検討を要する点であるが、ここではかわらけの用途を煤や穴の有無から、食器と非食器の 2 つに大きく捉えることにしたい。そして前者を食器系かわらけ、後者を非食器系かわらけと呼び分けてみよう（非食器系かわらけには「煤付着」や「穴あき」が含まれることになる）。すると、SK45 では食器系かわらけ 65%・非食器系かわらけ 35%、SK57 では食器系かわらけ 75%・非食器系かわらけ 25%という割合を示すことがわかる。どちらも食器系かわらけが圧倒的なのは、かわらけ本来の用途が食器であることに起因しよう。

次に SK45、57 の食器系かわらけの口径別の内訳をみてみることにしよう。SK45 では 161 個体の食器系かわらけのうち、口径 9cm グループが 6 点（3.7%）、同 12cm グループが 138 点（85.7%）、

15cmグループが17点(10.5%)である。SK57では食器系かわらけ140個体のうち、口径9cmグループが1点(0.7%)、同12cmグループが120点(85.7%)、15cmグループが14点(10%)、15cm以上の大きなかわらけが5点(3.5%)含まれていた。15cm以上の大振りなかわらけの有無を除けば、かわらけの出土傾向はほぼ共通しているといえる。

### (3) 江戸遺跡のかわらけ一括廃棄遺構

#### 東京大学医学部附属病院中央診療棟地点池状遺構

池状遺構は前述したように、加賀藩への御成の際に使用された食器類が廃棄されたものだ。ここからは634個体分のかわらけが出土している。大部分のかわらけが手づくねによって作られており、胎土は白色を呈している。本地点のかわらけと同じように、池状遺構から出土したかわらけの口径毎の出土点数を調べてみよう(表2)。

表2 東京大学医学部附属病院中央診療棟地点池状遺構

	6cm	9cm	12cm	15cm	15cm以上	計
食器系	0	0	437	123	0	560

口径が明らかなかわらけ560点のうち、口径12cmグループが437点と全体の78%を占める。一方、口径15cmグループのかわらけは123点で、これは22%にあたる。口径12cmグループのかわらけが多数を占める傾向は本地点と同じである。

#### 東京大学御殿下記念館地点395号遺構

395号遺構は東京大学御殿下記念館地点での第2焼土面と呼ばれる焼土にパックされて検出された。該期の遺構は「御上屋敷殿閣図」・「武州本郷邸図」といった絵図面に描かれた建物と配置がほぼ合致することから、元禄元(1688)年を上限とし、元禄16(1703)年の火災を下限とする時期であると考えられている。つまり395号遺構は17世紀のかわらけ一括廃棄遺構だ<sup>(4)</sup>。

この遺構は、長軸3.0×短軸1.0×深さ0.7mの平面が長方形を呈する土坑である。そこから多量のかわらけが魚骨・獣骨とともに出土した。また瀬戸もしくは美濃製、肥前製の皿や甕も数点出土している。

かわらけは885点の破片が出土した。製作技術を見ると、ロクロ成形のものが846点(破片数。以下同)で全体の95.6%を占めている。他に精製形38点(4.3%)、手づくね1点(0.1%)である。推定個体数については詳らかではないが、墨書を有したかわらけが102個体あり、報告書ではこれが全個体数の5割強と記載されていることから、かわらけは全体で200個体程度であったと想定できる。ここでは報告書に実測図が掲載されている資料102点を対象に、口径別の分布傾向をみてみよう。

102点のかわらけの内、「煤付着」が口径9cmグループに5点、12cmグループに3点ある。また「穴あき」は口径6cmグループに1点、9cmグループに2点ある。本地点のかわらけと同様に、こうした非食器系かわらけは分析対象から除外すると、91点のかわらけが対象となる(表3)。その結果、口径6cmと9cmのグループがそれぞれ11点(8.3%)ずつあり、残り69点(83.4%)のかわらけが、口径12cmグループに当てはまる。つまり本地点や中央診療棟池状遺構と同様に、ここでも口径12cmグループのかわらけが主体をなしている。またこのグループのかわらけには、墨書が施されているものも多く見られるのが特徴だ。69点のかわらけのうち、墨書が認められるのは実に56点にのぼる<sup>(5)</sup>。墨書の内容は報告されている資料に限れば、「御十五」、「御十二日」、「五日十八日 廿(カ)八日」、「九日 □(十カ)□□(日カ)廿三日」というように、数字が大部分を占め

ている。殊に日付との関わりが強いようにみられるが、その背景については詳らかではない。

表3 東京大学御殿下記念館地点 395 号遺構

	6cm	9cm	12cm	15cm	15cm 以上	計
食器系	11	11	69	0	0	91

#### 東京大学法学部 4 号館地点

東京大学法学部 4 号館地点からも、C7-2、C7-3、E7-5、F8-1、G8-1 といった遺構でかわらけの一括廃棄が認められる。何れも 18 世紀前半～中葉の時期で、かわらけが多量に出土するほかに、魚・鳥骨や貝殻が多いといった点も共通する。そのうち C7-2、C7-3、E7-5、F8-1 から出土するかわらけについて見ていくことにしよう(表4)。分析に当たっては煤の付着が認められないものを抽出した。

表4 東京大学法学部 4 号館地点

	6cm	9cm	12cm	15cm	15cm 以上	計
C7-2	4	31	8	2	0	45
C7-3	2	38	6	7	0	53
E7-5	7	45	4	0	0	56
F8-1	0	48	8	1	0	57

C7-2 は 45 点のかわらけが分析可能である。かわらけの大きさは口径 6cm グループが 4 点、同 9cm グループが 31 点、12cm グループが 8 点、15cm グループが 2 点である。

C7-3 は 53 点のかわらけのうち、口径 6cm グループが 2 点、同 9cm グループが 38 点、12cm グループが 6 点、15cm グループが 7 点である。口径 6cm グループのかわらけは 2 点とも耳皿と呼ばれる形態である。E7-5 は 56 点のかわらけのうち、口径 6cm グループが 7 点、同 9cm グループが 45 点、12cm グループが 4 点で、15cm グループのものは含まない。本地点のかわらけについても、分析対象としているものは食器系かわらけのみだが、E7-5 出土のかわらけは殊に煤の付着がみられない。6cm・9cm グループでは「煤付着」は 0 点、12cm グループでも煤が付着しているかわらけは 6 点中わずか 2 点に過ぎない。

F8-1 は 57 点のかわらけの内、口径 6cm グループが 0 点、同 9cm グループが 48 点、12cm グループが 8 点、15cm グループが 1 点である。

報告書では特に C7-2 出土のかわらけのサイズに関して、「大・中・小三通りの大きさの違いが認められた」と指摘している。しかし以上の分析のとおり、明らかに口径 9cm グループが突出している。これは法学部 4 号館地点の他のかわらけ一括廃棄遺構にも共通した傾向で、C7-2 での 68.8%をはじめ、口径 9cm グループの割合は C7-3 で 71.1%、E7-5 が 80.3%、F8-1 で 84.2%を示している。報告書が指摘しているように、大・中・小の 3 サイズが揃っていると捉えることの妥当性については後ほど考えることにしよう。

#### 市ヶ谷仲之町遺跡

次に 18 世紀後葉のかわらけ一括廃棄遺構の事例として、市ヶ谷仲之町遺跡(新宿区・3 次調査)の 17 号遺構、69 号遺構をとりあげる。この遺跡は根来組与力の組屋敷にあたる。これらの資料に関しては、井汲隆夫によって分析が試みられているので(井汲 1995)、その分析例をもとにかわらけのサ

イズを分類していこう（表5）。

表5 市ヶ谷仲之町遺跡

	3cm	6cm	9cm	12cm	15cm	計
17号遺構		15	6	1	0	22
69号遺構	3	19	6	1	0	29

17号遺構では出土した遺物91個体（推定個体数）のうち、かわらけは40個体を占める。井汲による分析に基づいて口径が推定されたかわらけのうち、煤が付着するなどの非食器系かわらけを除外すると、22点のかわらけが分析対象となる。かわらけのサイズは口径6cmグループが最も多く、15点を占める。次いで同9cmグループが6点、12cmグループが1点と続き、15cmグループはみられない。

69号遺構から出土した遺物102個体（推定個体数）のうち、かわらけは43個体を占めている。そのうち食器系かわらけ29点のサイズの内訳は、口径3cmグループが3点、同6cmグループが19点、9cmグループが6点、12cmグループが1点で、口径6cmグループが最も多い。以上のことから、市ヶ谷仲之町遺跡における18世紀後葉のかわらけ一括廃棄遺構は、口径6cmグループのかわらけが中心であることがわかる。

以上、本稿でとりあげたかわらけ一括廃棄遺構から出土するかわらけの、口径別の多寡を改めて確認しておこう。17世紀代の本遺跡や東大本郷構内の附属病院中央診療棟地点池状遺構、同御殿下記念館地点395号遺構では口径12cmグループが中心をなす。18世紀前葉～中葉に当たる東大法学部4号館地点では口径9cmグループが中心で、18世紀後葉の市ヶ谷仲之町遺跡では口径6cmグループが多数を占めている。井汲は「口径は時代が下るとともに小型化する傾向があるよう」と指摘しているが（井汲前掲）、これまでの検討の結果、かわらけ一括廃棄遺構に廃棄されるかわらけは17世紀から18世紀にかけて小型化することは明らかである。それに加えて、17世紀にはある一つの口径グループ<sup>(6)</sup>に集中しているかわらけが、2ないし3グループのサイズに分散（以下、分散化）する傾向も認められる。

#### (4) かわらけと供膳形態

かわらけ一括廃棄遺構が儀礼に伴う膳部に供されたかわらけの廃棄によって形成されたものであることは前述した。とするならば、かわらけ一括廃棄遺構から出土するかわらけの小型化と分散化の傾向は、膳部におけるかわらけ自体の変化ないしは用い方の変化を反映したものであると捉えることができる。そこで膳部におけるかわらけのあり方を示す史料を参照してみることにしよう。

『貞丈雑記』は武家礼法を司る伊勢家出身の伊勢貞丈が、有職故実の参考書として子孫に書き残したものだ（天保14（1843）年刊）。『貞丈雑記』では坏としてのかわらけを、大中小3つ並べることを三ツ星、5つ並べることを五ツ星と呼んでいる（酒盃の部）。かわらけ自体については膳部の部において、小重・大重、三度入、五度入、七度入～十五度入という記述がみられる。それによれば「酒盃」に用いる三度入よりも小なら小重、大なら大重と分けている。大重は五度入、七度入と三周りずつ大きくなっていく。また五度入以上は肴を盛るとのことだ。三度入や五度入は三杯入り、五杯入りといった容量を意味するものでなく、「段々に大きくなるゆえ、「三度入」と云うに本付きて名付けたる名なり」という。酒盃としてのかわらけのサイズは三度入であり、膳に供されるかわらけには三ツ星なら大中小の数サイズがあったということだ。この記述をどう解釈するのが適当であるかは、現段階では不明である。

また京都市のかわらけ生産に関する島田貞彦の報告（島田1931）では、小重・大重を共に口径二寸五

分のかわりけとする。両者の違いは内面に一条の溝が施されているか否かで、前者にはそれが無く、後者はそれを有する。そしてこの口径二寸五分のかわりけを一度として、以後五分刻みに二度、三度～十度までサイズが規格される。「度」がかわりけのサイズの規格である点が『貞丈雑記』と異なる点だ。

このように史料毎に、かわりけやその供膳形態に関する記述が異なっているため、江戸遺跡から検出されるかわりけ一括廃棄遺構のかわりけを、記述された供膳形態に直接当てはめることは難しいと言わざるを得ない。

ところで市ヶ谷仲之町遺跡のかわりけには、「大」・「中」・「小」と墨書されたものが報告されている。井汲はこれを前述の『貞丈雑記』の記述と関連づけて、「口径が明瞭に大中小に分かれるものにはこの墨書は書かれておらず、口径に差のないものに書かれている。これは「三ツ星」という酒宴の形式を簡略化し、大きさの違いを文字によって置き換えたものと」捉えている（井汲前掲<sup>(7)</sup>）。つまり本来3サイズを揃えるべきところであるが、諸般の事情で全てのサイズのかわりけを揃えることができず、それを補完するために墨書したと指摘している。所謂かわりけの「見立て」だ。

そこで井汲のこの指摘を検証するために、市ヶ谷仲之町遺跡17号遺構を例に「普通」かわりけと、「大」・「中」・「小」と墨書された「墨書」かわりけの点数を、口径別グループ毎に比較してみると表6になる。

表6 17号遺構「普通」・「墨書」かわりけのサイズ別内訳

	普通	「小」	「中」	「大」	計
6cm	7	3	3	2	15
9cm	4	1	1	0	6
12cm	1	0	0	0	1

6cmグループでは15点のかわりけのうち、墨書されているのが8点と半数をしめる。その内訳は「大」が2点、「中」が3点、「小」が2点である。9cmグループでは「大」が0点、「中」が1点、「小」が1点だ。12cmグループには「大」・「中」・「小」の墨書はみられない。今、本稿で試みた口径別グループである6cm・9cm・12cmの各グループを、「小」・「中」・「大」に対応させてみれば、17号遺構のかわりけのサイズは表7のような分布を示す。

表7 口径と墨書サイズを対応させたサイズ別内訳

	小=φ 6cm	中=φ 9cm	大=φ 12cm	計
普通	7	4	1	12
「小」	3	3	2	8
「中」	1	1	0	2
「大」	0	0	0	0
計	11	8	3	22

すなわち、「小」かわりけが11点、「中」かわりけが8点、「大」かわりけが3点である。「大」かわりけ、すなわち口径12cmのかわりけが少ないことには変わりないが、「小」と「中」では、口径別分布よりも若干とはいえ平均化されていることがわかる。径が不明なもの等は分析対象から除外しているので、少なくとも「小」と「中」とに関しては平均していたものと捉えてもよいだろう。

東京大学法学部4号館地点のかわりけが、「大・中・小三通りの大きさの違いが認められた」と報

告されていることは前述した。確かに全ての口径のグループが認められる。しかしそれぞれのグループが占める割合を検討すれば、口径 9cm グループが著しく集中していることはみてきたとおりだ。上田真によれば、法学部 4 号館地点のかわらけには、灯芯痕や油痕が認められる非食器系のかわらけも含めて 200 点以上のかわらけに、「大」・「中」・「小」の墨書が認められるという（上田 1990）。それが遺構毎あるいは口径毎にどのような出土傾向を示すかについては詳でないため、市ヶ谷仲之町遺跡で試みたような分析はできない。しかし上田も墨書かわらけの存在から、『貞丈雑記』にみられる三度入をはじめとした供膳形態のあり方を想定している。このことからすれば、市ヶ谷仲之町遺跡のかわらけで示したような、不足するサイズのかわらけを墨書によって補完することで、サイズの平均化、すなわち「三度入」などの供膳形態の構築が図られたものと思われる<sup>(8)</sup>。

また灯芯痕や油痕の認められる非食器系のかわらけにも「大」・「中」・「小」の墨書が施されていることは、儀礼の膳部に供されたかわらけが、使用された後に灯火皿として転用されたことをも表している。本稿では非食器系のかわらけを分析対象として除外したが、こうした転用例が明らかとなったことは、今後分析資料を抽出する上での課題となろう<sup>(9)</sup>。

さて、本地点出土のかわらけについてはどうだろうか。改めて表 1 をみてみよう。口径 12cm グループが SK45 では 85% を占め、SK57 では 84.5% を占める。一方、墨書されたかわらけは SK57 では 1.6%、SK45 にいたっては 0% である。SK57 に僅かながら墨書が認められるかわらけが存在するといっても、「大」・「中」・「小」というサイズを示す墨書はない。主たるサイズたる 12cm グループのかわらけで、他のサイズのかわらけを補完する必要が無かったということだ。

もっともこれを受けて、本地点のかわらけ一括廃棄遺構を生じさせた膳部が、『貞丈雑記』にみられる供膳形態を伴うものでなかったと判断するのは早急に過ぎよう。『貞丈雑記』にみられる供膳形態とかわらけのサイズとの関係には不明な点があって、考古資料との直接的な対比はひとまず措くというのが本稿の姿勢であることは前述した通りだ。

かわらけ一括廃棄遺構と史料との対比で確実なのは、東京大学医学部附属病院中央診療棟地点の池状遺構の、将軍家光・大御所秀忠の加賀藩邸への御成の例である。つまり池状遺構のかわらけや折敷・箸といった供膳具のあり方は、将軍の御成という江戸の武家社会では最高の格式を伴う儀礼の一端を考古学的に示している事例である。そこでこの池状遺構出土のかわらけから、儀礼を伴う膳部でのかわらけの供膳形態について考えてみたい。

前項で述べたように池状遺構のかわらけは、口径 12cm グループに属するものが全体の 78% を占めている。これは 18 世紀以降のかわらけ一括廃棄遺構にみられるような、サイズの分散化とは対照的なあり方である。18 世紀以降のかわらけについては、「大」「中」「小」の墨書は時代としては 18 世紀前葉～中葉頃に多い」という指摘もある（井汲前掲）。サイズの分散化と、不足するサイズの補完的な墨書の出現が共に 18 世紀以降にみられるということは、この時期の供膳形態が、幾つかのサイズのかわらけを要していたことを意味している。逆に、17 世紀の池状遺構のかわらけが口径 12cm グループを中心に構成されているのは、当該時期の供膳形態が単一サイズで構成されていることの反映と考えられる。本遺跡から検出された SK45・SK57 の 2 遺構や、本学御殿下記念館地点 395 号遺構（何れも 17 世紀代）の出土状況も、註 5 で述べた課題はあるとはいえ、単一サイズを中心に構成された点で池状遺構と共通する。

つまり 17 世紀における儀礼を伴う膳部では、ある一つのサイズのかわらけが集中的に用いられていたのに対して、18 世紀となると「大」・「中」・「小」と異なるサイズのかわらけを用いるような供膳形態へと変化していく。全てのサイズを揃えることができない場合でも、かわらけにサイズを示す

文字を墨書することで、見立て上のサイズを分散化したと捉えられるのだ。

本地点 SK45・SK57 の時期には、館林藩主・松平徳松（後の徳川綱吉）が暮らしていた。そうした歴史的背景を鑑みれば、そこで江戸の武家社会における最高の格式を以て宴会がなされたとしても不思議ではない。

### （5）儀礼におけるかわらけの意義

本稿では江戸遺跡にみられるかわらけ一括廃棄遺構のいくつかと比較しながら、本地点のかわらけ一括廃棄遺構の性格を考えてみた。しかし比較対象にあげた各遺構との間には、依然として大きな違いが存在する。それが廃棄のあり方だ。終わりにそれについて若干の言及をしたい。

SK45・SK57 ともに出土するかわらけの大多数は、接合が不可能なほどに細かく砕かれた破片（1～3cm）だった。その正確な破片数は不明だが、SK45 ではコンテナ 5 箱、SK57 ではコンテナ 7 箱分を占めている。これらの破片のあり方は、一見すると意図的に砕いたかのような印象を受ける。これが本稿でとりあげた他の遺構と大きく異なる点だ。

ところで儀礼に伴う膳部では、何故かわらけが用いられたのだろうか。『貞丈雑記』では、「規式の膳部には白木を用い、何をも土器に盛る事は、これ一度切に用いて、用い終りて後打こわし捨て、それを二度用ゆまじき故なり。これは神国の風俗にて、清浄を貴ぶ故なり……（略）……後世に至りて、白木・土器などを金銀のはく（箔）にてだみ、彩色などをするは、おごりにして、白木・土器を用ゆる本意を取うしないたる者なり」とある（膳部の部）。東大附属病院中央診療棟地点池状遺構から出土したかわらけや白木の折敷・箸がそれをよく表していよう<sup>(10)</sup>。つまり陶磁器や漆器と比べて、かわらけや白木の製品が使用の痕跡を留めやすいという性格が、「清浄を貴ぶ」精神と、その逆説としての「ケガレ」を忌み嫌うということに結びついたのである。

とするならば、ケガレたかわらけを再利用せずに廃棄するということが、儀礼の膳部で供されるかわらけにとって大きな意味合いを持っていたことは想像に難くない。それが『貞丈雑記』に記されている「用い終りて後打こわし捨て」などである。そしてその行為を究極にまで止揚したのが、本地点にみられるような、かわらけを修復できないほど粉々に砕くという行為だったと思われる<sup>(11)</sup>。

東大附属病院中央診療棟地点池状遺構では、かわらけや白木の折敷・箸とともに、少なくない下駄も出土している<sup>(12)</sup>。またかわらけ自体も、本地点のように細かく砕き割られていることもない。一方、本地点 SK45・SK57 のかわらけは、接合不可能なほどの破片にまで割られており、『貞丈雑記』で記されている「用い終りて後打こわし捨て」る廃棄行為の徹底化を図っている。この対照的なかわらけの出土状況が、武家礼法に準拠した度合の違いに結びついているのだろうか。この点に関しては現段階では不明である。何故ならば両遺跡のかわらけは、製作技術が大きく異なっているからである。本地点の 2 遺構から出土したかわらけは何れもロクロ成形による在地製品であると考えられるのに対して、池状遺構のかわらけは手づくね製品である。これら手づくねのかわらけは京都との結びつきが指摘されている（小林 1992、堀内前掲）。おそらく池状遺構出土のかわらけは、加賀藩が御成にあわせて京都から取り寄せたものだろう。一方、ロクロ成形による江戸在地製のかわらけは、京都のかわらけを意識しつつもそれを簡略化する方向で生産されたという井汲の指摘（井汲前掲）からすれば、池状遺構出土の手づくね製かわらけと本地点出土のロクロ製かわらけとでは、前者の方がより武家礼法に則っていると捉えることもできるのである。どちらがより格上の膳部のあり方を反映しているかを結論づけることは、分析事例の少ない現段階では留保したい。ここではいずれの遺構も、17 世紀代の極めて格式の高い膳部での供膳形態を示した事例であると指摘するにとどめておこう。

本稿では理学系研究科附属植物園研究温室地点で検出されたかわらけ一括廃棄遺構の分析を中心に、出土するかわらけが17世紀から18世紀にかけて小型化・分散化する傾向を、同一サイズのかわらけの使用から、「三度入」など異なるサイズのかわらけを用いるような膳部の変化を反映したものであると想定した。未だ十分な議論を尽くしたとはいえないが、武家地や町人地・寺社地といった遺跡の性格や、遺構の廃棄状況の検討などは今後の検討課題としたい。

【註】

- (1) その変遷の詳細は、第IV章 第4節、渋谷論文にある。
- (2) 宮間利之は「かわらけ溜り」の遺物組成と遺構の形態から、「かわらけ溜り」の分類を試みている（宮間2000）。その研究において宮間は、ゴミ穴の上部や植栽痕といった窪地に形成されるかわらけ溜りでは、食物残渣を伴わないことを指摘している。そしてこうしたかわらけ溜りは、土地改変に伴う儀礼によって形成されたものであると捉えている。遺物組成と遺構形態との関連づけなど、分析方法には評価すべき点が多い一方で、食物残渣が無いことと土地改変の儀礼とが結びつくなど解釈の点は筆者には不明である。しかし江戸遺跡のかわらけ一括廃棄遺構の形成要因が、宴会ばかりでないことを指摘した点は研究史上重要である。本稿では分析対象としてとりあげたかわらけ一括廃棄遺構を宴会によって形成されたものと捉えているが、宮間の指摘は今後改めて検討していかなくてはならない課題である。また本地点SK45・57の食物残渣に関しては、本章第3部の新美論文において分析がなされている。
- (3) かわらけはまた、地鎮や胞衣納めといった呪術的な儀礼でも用いられたことが知られている（追川2002）。
- (4) 『加賀藩史料』では元禄16（1703）年の火災について、次のような記述がある。「元禄一四年十二月廿二日徳川綱吉、綱紀の邸に臨むの意のあることを云ふ。因りて旧館を毀ち、十五年二月四日新始を行ひ、四月十一日に竣成せしを以て、綱吉はその月廿六日を以て駕を枉げたり。十六年十一月廿九日この邸亦類焼し、前年の御成御殿烏有に帰す」。まさに綱吉による元禄の御成が行われた時期はⅢ期に該当する。本稿（1）で触れたように395号遺構の魚骨はタイを主体とする。あるいはこの御成に関連したものだったのかもしれない。
- (5) 69点中56点ということはその割合は8割にもものぼる。しかしこれは掲載資料としてピックアップした際に、墨書かわらけという特徴的な資料を意図的に抽出したことが作用している点に注意しなくてはならない。実際の割合は報告書の指摘によれば5割程度である。とはいえ、墨書されたかわらけが口径12cmグループに多いという傾向を指摘することは可能だろう。
- (6) 当初から灯火皿として用いられたか、食器からの転用かを明確に判断することはできない。本文で指摘したように、膳具を想定し得る墨書があつて、なおかつ煤などが付着しているかわらけについてかろうじて判断できるという状況である。
- (7) 本論で分析対象とした17世紀のかわらけ一括廃棄遺構では、いずれも口径12cmグループが主体をなす傾向が認められたが、これが普遍的な傾向であるかについては現段階では不明である。今後該期の事例を更に分析対象に加えた上で、別稿において改めて検討したい。
- (8) その前提は文中の「段々に大なる」という変化である。しかし前に引用したように『貞丈雑記』の記述は簡便であり、井汲の指摘するような時間的変化であるか、一献、二献と献を重ねるにつれての変化であるかを判断するのは難しい。井汲も三ツ星、五ツ星の礼法に関しては、「何種あつたのか、時代とともに変わったのかはわからない」としている。
- (9) 当初から灯火皿として用いられたか、食器からの転用かを明確に判断することはできない。本文で指摘したように、「大」などの墨書があつて、なおかつ煤や油痕などが付着しているかわらけについてかろうじて判断できるという状況である。
- (10) 池状遺構の手づくねのかわらけには金箔が施された痕跡が認められる。
- (11) 飛鳥山（北区）では、崖下の音無川に据えだ的に狙ってかわらけ投げが行われていたようだ。こうしたか



わらけ投げは現在も各地にみられ、京都の神護寺や鷲峰山、琵琶湖の竹生島神社などでも、願掛けあるいは厄よけとしてかわらけ投げが行われている。

(12) III章で述べたように、本地点のSK45・SK57でも、かわらけと食物残滓と共に若干の陶磁器が出土している。

#### 【引用・参考文献】

- 井汲隆夫 1995「市ヶ谷仲之町遺跡第3次調査の「かわらけ溜」に関する考察」『市ヶ谷仲之町遺跡III』
- 伊勢貞丈（島田勇雄校注）1985『貞丈雑記』東洋文庫
- 上田 真 1990「かわらけの編年学および機能論的考察」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
- 追川吉生 2000「本郷邸の御殿空間－考古学からのアプローチ－」『加賀殿再訪』東京大学総合研究博物館
- 追川吉生 2002「江戸時代の袍衣埋納に関する一考察－江戸遺跡における検出事例の分析を中心に－」『東京考古』20
- 金子浩昌 1990「加賀藩江戸藩邸内出土の動物質食料残滓研究の一例」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
- 小林謙一 1991「江戸遺跡における廃棄の研究」『東京考古』9
- 小林謙一 1992「皿形土器類」『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ 発表要旨』
- 小林謙一 1998「17世紀前葉の土師質皿－丸の内三丁目遺跡52号土坑出土土師質皿の位置づけ－」『江戸在  
地系土器の研究』Ⅲ
- 佐々木彰 1990「江戸時代のカワラケの動態と推移－大聖寺藩上屋敷跡出土の資料を中心に－」『東京大学本  
郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 島田貞彦 1931「山城幡枝の土器」『考古学雑誌』21-3
- 鈴木祐子 1990「かわらけ」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
- 荻尾昌枝 1990「江戸時代の儀礼的な宴会の食器について」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 荻尾昌枝 1992「江戸時代初期の宴会の食器類－東京大学医学部附属病院中央診療棟建設予定地点「池」出土  
の木製品－」『江戸の食文化』吉川弘文館
- 原田信男 1989『江戸の料理史』中央公論社
- 原田信男 2003『江戸の食生活』岩波書店
- 堀内秀樹 2000「史料から見た御成と池遺構出土資料」『加賀殿再訪』東京大学総合研究博物館
- 宮間利之 1998「戦国期寺院のかわらけ（土器杯）の使用法－上野国長楽寺の場合－」『江戸在  
地系土器の研究』Ⅲ
- 宮間利之 2000「江戸遺跡の所謂「かわらけ溜り」について」『東京考古』18
- 山口剛志 1991「小田原城とその城下出土のかわらけについて」『小田原市郷土文化館研究報告』27
- 山口剛志 1994「小田原城出土のかわらけについて」『江戸在  
地系土器の研究』Ⅱ
- 山口剛志 2000「中・近世における遺構間接合の検討－小田原城下・欄干橋町遺跡第Ⅳ地点の事例から－」『竹  
石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』

### 第3節 研究温室地点出土の動物遺体

名古屋大学博物館 新美 倫子

研究温室地点ではコンテナ（内寸35cm×55cm×15cm）15箱分の動物遺体が出土した。それらのうち13箱は貝類で、2箱が魚類・鳥類・哺乳類であった。貝類の大部分とすべての魚類・鳥類・哺乳類はSK45とSK57から出土しており、これらの動物遺体の所属時期は2-a期（1652年～1680年）と考えられる。SK45とSK57以外ではSK1・SK33・SK37・SK42・SU14から貝類が少量ずつ出土し、これらは18～19世紀のものとのことである。

資料は大形のものについては発掘時に採集されたが、SK45とSK57では埋土中に小さな貝類・魚骨やカワラケ破片などが密集していたので、その部分を土ごと取り上げて2mm目の篩にかけ、動物遺体を抽出したとのことであった。その結果、貝類は大部分が発掘時に採集されたが、一部は篩にかけて採集されたものである。魚類はすべて篩にかけて採集された資料であり、鳥類・哺乳類は大部分が篩にかけて採集されたが、一部は発掘時に採集された。表1に出土した動物種名を示し、表2～6に出土内容を示した。

なお、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生には種同定に関して御教示をいただき、また東京大学埋蔵文化財調査室の成瀬晃司氏にはこの資料を分類する機会を与えていただいた。ここに感謝いたします。

#### (1) 貝類（表2）

貝類は2,847点が出土した。表2では二枚貝については殻頂部の残存する左殻・右殻の出土数を示し、巻貝は芯の残る個体の出土数を示した。大部分の資料はSK45・SK57から出土しており、合計の最小個体数で見るとヤマトシジミが534個体で最も多く見られた。他にアサリ299個体、ハマグリ295個体、サザエ198個体、ミルクイ54個体、アワビ類37個体、バイ33個体、アカガイ28個体、アカニシ10個体、ハイガイ10個体、イタヤガイ9個体、サルボウ6個体、マガキ5個体、シオフキ2個体、オオノガイ・オキシジミが1個体ずつと、ミヤコドリ類49個体、ウミノナ類4個体、オオヘビガイ2個体が出土している。

ヤマトシジミは左右の殻頂部をあわせて数え、出土数を2で除したものを最小個体数とした。殻長計測可能な資料で見ると、SK45・SK57共に全体の7割以上が殻長2～3cmであり、殻長1～2cmの資料が全体の1/4程度を占め、3～4cmの資料が少量見られた。殻長4cm以上の個体は出土しておらず、個体の大きさは全体に小さい。アサリは殻長3～4cmの資料が7割程度を占めている。ハマグリは殻長2cm程度の小さなものから8cm程度のものまでいろいろな大きさの個体が含まれているが、3～5cmの個体が多い。SK42では漆の容器として使用されたハマグリの左殻1点が出土している。

サザエは殻高4cm程度の個体から13cm程度のものまで見られ、4～6cmの資料が多い。SK57では殻高10～12cmのものも多く出土した。ミルクイは殻長9～15cmの個体が見られた。アワビ類37個体の内訳は、マダカアワビ6個体、クロアワビ4個体、メガイアワビ1個体、種不明アワビ類22個体、幼貝4個体であり、種不明アワビ類としたものは破損のために種を確定できなかった資料である。マダカアワビは殻長14～18cmの個体であり、クロアワビは殻長11～12cm、メガイ

アワビは殻長 18cm の個体であった。バイは殻高 5～6cm 程度の個体が多い。

アカガイはほとんどの資料が SK45 から出土した。殻長 8～12cm の個体が見られ、10～11cm のものが多かった。アカニシは小さな個体から殻高 10cm をこえるものまで見られた。イタヤガイはすべて貝杓子に加工された右殻であり、SK45 で 7 点、SK57 で 2 点が出土している。これらの殻長はすべて 8～10cm であった。ミヤコドリ類やウミノナ類・オオヘビガイは食料としてではなく、他の貝類等に付着して持ち込まれたのであろう。また、タイラギ? は殻頂部は出土していないが SK45 と SK57 で破片が見られた。

## (2) 魚類 (表 3・4)

魚骨はすべて SK45 と SK57 から出土した資料で、土ごと取り上げて 2mm 目の篩にかけて採集されたものである。資料が筆者のところへ送られてきた際には、すでに人工遺物や貝類など他の遺物が抜き出されて魚骨だけの状態となっており、その量は SK45 が 6700cc、SK57 が 5800cc であった。ここでは時間的な制約から、それぞれその 1/4 にあたる SK45 で 1675cc と SK57 で 1450cc の魚骨を分類・種同定した。その結果、分類した資料は計 2,216 点であり、このうち種を同定できた資料は 1,570 点となった。椎骨資料 1,939 点の内容を表 3 に、椎骨以外の資料 277 点の内容を表 4 に示した。

椎骨で見ると、種を同定できた 1,293 点のうちトビウオ類が 301 点と最も多く出土した。次いで多いアジ類が 251 点であり、他にはサヨリ類 125 点、カレイ類 94 点、ボラ類 80 点、サバ類 70 点、カマス類 43 点、カツオ類 43 点、タイ類 41 点、キス類 41 点、アユ 41 点、スズキ 30 点、マダラ 27 点、アイナメ類 23 点、コチ類 18 点、ブリ 16 点、グチ類 13 点、イワシ類 11 点、ウナギ 5 点、サワラ類 3 点、ヒラメ 3 点、フグ類 3 点、サケ類 3 点、アナゴ類 3 点、コイ 2 点、イサキ 2 点、ハゼ類 1 点が出土している。

トビウオ類は体長 34.5cm の現生ハマトビウオ標本と比較して、椎骨の長さが 2/3 程度の資料からやや大きな資料まで見られたが、2/3 程度の長さの資料が多い。アジ類にはマアジタイプとムロアジタイプの資料が含まれていたが、マアジタイプの方が多かった。椎骨・その他の部位共に体長 10～25cm 程度の資料が出土しているが、小さな個体が多い。サヨリ類は多くの椎骨が体長 30.5cm の現生標本と同程度の大きさであった。カレイ類では椎骨は体長 10～30cm 程度の個体のものと思われ、マガレイ・クロガレイに似たタイプが多い。頭部の部位では体長 20cm 程度の大きさの資料と 34cm 現生標本と同程度の大きさの資料が見られた。

ボラ類は体長 37.5cm の現生標本の 1/2 程度から同じ大きさの資料まで、さまざまな大きさの個体が見られた。サバ類は体長 32cm の現生標本よりひとまわり大きな資料が大半であった。カマス類の椎骨は体長 28cm の現生標本の 2/3 程度から同じ長さのものが見られ、頭部の部位は現生標本と同程度の大きさのものが多く、カツオ類とした資料はカツオが多いと思われるが、ソウダガツオ類も含んでいる。椎骨・その他の部位共に体長 41cm の現生標本よりもひとまわり大きな資料が多い。左関節骨 1 点は前方 1/4 ほどが切断されていた。

タイ類の中では頭部の部位でマダイが 67 点と多く出土していることから、タイ類とした椎骨はマダイのものが多いが、他のタイ類も含むと思われる。マダイの頭部の部位を見ると、体長 20cm 程度から 1m 近いものまでさまざまな大きさの個体が含まれている。前頭骨は長軸方向に切断されている資料が 2 点見られた。また、マダイ? としての歯骨は小さな資料で、チダイの可能性もある。キダイも上顎骨と歯骨が見られた。アユはいずれも体長 20cm をこえる成熟した個体の椎骨であった。

スズキは椎骨では体長 35cm の現生標本よりもひとまわり大きな資料が多い。頭部の部位ではこの現生標本よりひとまわり大きなものから体長 1m 近いと思われる大きな個体まで見られたが、かなり小さな関節骨も 1 点含まれていた。

マダラは体長 50cm 前後から 1m 近いと思われる大きな資料まで見られたが、大きな個体が多かった。アイナメ類は体長 20～25cm 程度の資料が多い。コチ類は体長 20cm 程度の資料も含まれているが、大きなものが多かった。ブリは体長 20.5cm の現生標本と同程度の若く小さな個体の資料が多いが、体長 30cm 台や 50cm 台と思われる資料も見られた。グチ類は体長 26.5cm のシログチ現生標本と比較すると、椎骨は 2/3～3/4 程度の大きさのものが見られ、頭部の部位では現生標本よりもひとまわり小さなものとかかなり小さなものが見られた。イワシ類の椎骨は小さな個体から体長 20cm 程度のものまで出土している。

サワラ類椎骨は 3 点とも大型の個体である。ヒラメは体長 30cm 程度の個体と 60cm 程度の個体が混在しており、右上顎骨は前端部を切断されていた。フグ類はすべて小型の個体である。サケ類はいずれも大型のシロザケタイプの椎骨であり、1 点は焼けていた。コイは咽頭歯も 1 点出土した。また、アラは椎骨は出土していないが、体長 56cm の現生標本とほぼ同じ大きさの歯骨と関節骨が 1 点ずつ見られた。

### (3) 鳥類 (表 5)

鳥類もすべて SK45 と SK57 から出土した資料である。SK45 から 91 点、SK57 から 113 点の計 204 点が出土し、その内訳はカモ類が 99 点、ガン類が 6 点、ハト類が 7 点、ニワトリが 1 点、種不明が 91 点であった。表 5 のカモ類・ガン類のグループ分けは西本他 (2006) に従い、カモ類 (大) はカルガモとマガモ、カモ類 (中) はそれよりも少し小さいカモ、カモ類 (中小) はミコアイサ程度の大きさのカモ、カモ類 (小) はコガモとした。また、ガン類はヒシクイをガン類 (大) とし、それ以下のガンはガン類 (小) とした。

カモ類は全出土資料数の半数近くを占めており、その中でもカモ類 (小) のコガモが 64 点と多く見られた。カモ類 (大) は 21 点、カモ類 (中) は 14 点出土したが、カモ類 (中小) は見られなかった。ガン類 (大) は 1 点、ガン類 (小) は 5 点出土した。ハト類は現生キジバト標本と一致する資料が多く、ニワトリ上腕骨近位部片は現生ウコッケイ標本よりもひとまわり大きな資料であった。種不明とした資料は大部分が小型の鳥である。

### (4) 哺乳類 (表 6)

哺乳類もすべて SK45 と SK57 から出土した。SK45 から 7 点、SK57 から 5 点の計 12 点と出土量は少ない。ネズミ類は下顎骨と椎骨が見られ、いずれも現生ドブネズミ標本と同じ大きさであった。イノシシ類は上顎第 3 後臼歯と後臼歯破片が出土し、第 3 後臼歯はほぼ萌出を完了しているが、磨滅は見られない。他には陸獣類破片が 3 点と人の歯の破片が 1 点見られた。

## まとめ

当遺跡では大型のアワビ類・アカガイやマダイなど宴席での利用が考えられる資料が出土する一方で、日常生活の食料と思われる小さなヤマトシジミやトビウオ類・アジ類・サヨリ類なども多量に出土していることから、ある期間内に消費されたさまざまな食料残滓が混在していると思われる。もっとも、この調査で大量に出土した小さな魚骨は2mm目の篩を用いて選別が行われたからこそ回収されたのであり、そうでなければまったく出土しなかったであろう。鳥類でカモ類(小)の出土量が多かったのも、同じ理由によるのかもしれない。

## 【引用文献】

西本豊弘・浪形早季子・小林園子 2006 「汐留遺跡出土の動物遺体」『汐留遺跡Ⅳ』東京都埋蔵文化財センター

I. 貝類	II. 魚類	24 カツオ類
1 クロアワビ	1 イワシ類	25 ハゼ類
2 マダカアワビ	2 ウナギ	26 アイナメ類
3 メガイアワビ	3 アナゴ類	27 コチ類
4 サザエ	5 サケ類	28 ヒラメ
5 ミヤコドリ類	6 コイ	29 カレイ類
6 オオヘビガイ	7 サヨリ類	30 フグ類
7 ウミニナ類	8 トビウオ類	
8 アカニシ	9 マダラ	III. 鳥類
9 バイ	10 ボラ類	1 ハト類
10 アカガイ	11 カマス類	2 カモ類
11 サルボウ	12 スズキ	3 ガン類
12 ハイガイ	13 アラ	4 ニワトリ
13 タイラギ?	14 キス類	
14 イタヤガイ	15 ブリ	IV. 哺乳類
15 マガキ	16 アジ類	1 ネズミ類
16 ヤマトシジミ	17 グチ類	2 イノシシ類
17 ハマグリ	18 イサキ	3 ヒト
18 オキシジミ	19 キダイ	
19 アサリ	20 マダイ	
20 シオフキ	21 タイ類	
21 ミルクイ	22 サバ類	
22 オオノガイ	23 サワラ類	

表1 出土動物種名

種	SK1	SK33	SK37	SK42	SK45	SK57	SU14	計
ヤマトシジミ					242	823	2	1,067
アサリ			1		91	205		297
					84	215		299
ハマグリ		1	1	1	218	61	14	295
	1	1	2	201	45	19	19	269
サザエ			2	98	94	4	4	198
サザエのフタ				37	42			79
ミルクイ			1	31	15			47
				34	20			54
アワビ類				マ5、ク4、メ1 不明15、幼2	マ1、不明7、幼2			37
ハイ			1	15	8	9	9	33
アカガイ				24				24
				26	2			28
アカニシ			2	5	3			10
ハイガイ				3	1			4
				6	4			10
イタヤガイ				7	2			9
サルボウ				4				4
			2	2	2			6
マガキ					3			5
ミヤコドリ類				38	11			49
その他				シオフキ左2 ウミニナ類2 オオヘビガイ1 種不明二枚貝左2	シオフキ右2 オオノガイ左1、右1 オキシジミ左1、右1 ウミニナ類2 オオヘビガイ1 種不明巻貝芯7			23
計	3	1	12	1	1,200	1,582	48	2,847

註 二枚貝は殻頂部の数を、巻貝は芯の数を数えた。左：左殻、右：右殻。ヤマトシジミは左右の殻頂部を分けていない。  
マガキは左殻のみを数えた。  
アワビ類のマ：マダカアワビ、ク：クロアワビ、メ：メガイアワビ、不明：種が確定できないアワビ類、幼：幼貝。

表2 貝類出土内容

	SK45	SK57	計
トビウオ類	242、焼4	55	301
アジ類	175	76	251
サヨリ類	84	41	125
カレイ類	54	39、焼1	94
ボラ類	54	26	80
サバ類	52、焼2	16	70
カマス類	32	11	43
カツオ類	34	9	43
タイ類	25	16	41
キス類	27	14	41
アユ	40	1	41
スズキ	19	11	30
マダラ	8、焼1	17、焼1	27
アイナメ類	12	11	23
コチ類	14	4	18
ブリ	11	5	16
グチ類	7	6	13
イワシ類	3	8	11
ウナギ	3	2	5
サワラ類	1	2	3
ヒラメ		3	3
フグ類	3		3
サケ類	1、焼1	1	3
アナゴ類	3		3
その他	イサキ2、ハゼ類1	コイ2	5
種不明	180	241	421
計	1095	619	1,714
同定不可	159	66	225

註 椎骨の1/2～2/3程度以上残存している資料を種同定し、それ以下の資料は同定不可破片とした。  
焼：焼けた資料。

表3 魚類出土内容(椎骨)

	SK45	SK57	計
アジ類	前上顎骨左 5、右 1、上顎骨左 4、右 3、歯骨左 5、右 5、 関節骨左 2、右 4、方骨左 3、右 4、鰓蓋骨左 4、右 6	前上顎骨左 4、右 4、上顎骨左 5、右 2、歯骨左 2、右 2、 関節骨左 5、右 2、方骨左 4、右 5、鰓蓋骨右 1、	82
マダイ	前上顎骨左 5、右 2、上顎骨左 3、右 3、歯骨左 3、右 1、 関節骨左 3、右 2、方骨左 5、右 2、鰓蓋骨左 3、 前頭骨 4、上後頭骨 3	前上顎骨左 4、右 2、上顎骨左 1、右 4、歯骨左 1、右 1、 関節骨左 2、右 2、方骨左 3、右 1、鰓蓋骨左 1、右 1、 前頭骨 3、上後頭骨 2	67
スズキ	前上顎骨左 2、右 2、上顎骨左 3、歯骨左 2、右 3、 関節骨右 1、方骨左 1、鰓蓋骨左 4、右 4	前上顎骨右 3、上顎骨左 1、右 1、歯骨左 1、右 3、 方骨右 2、鰓蓋骨左 1、右 1、鋤骨 1	36
コチ類	前上顎骨左 1、歯骨左 3、右 3、方骨左 1、鰓蓋骨左 1、 鋤骨 2	前上顎骨左 1、右 1、歯骨右 1、鰓蓋骨右 1	15
グチ類	前上顎骨左 1、右 1、上顎骨右 1、歯骨右 1、鰓蓋骨右 2	前上顎骨左 1、右 1、上顎骨左 3、右 1、歯骨右 1	13
カレイ類	前上顎骨左 1、上顎骨左 2、右 1、歯骨右 2、方骨左 1、 鋤骨 2	前上顎骨右 1、鋤骨 1、第一血管間棘 1	12
サバ類	上顎骨左 1、右 2、歯骨左 1、右 1 関節骨左 1、鰓蓋骨左 1、右 1	上顎骨右 1、歯骨左 1、関節骨左 1	11
カマス類	歯骨右 1	前上顎骨左 3、歯骨左 5、右 2	11
マダラ	上顎骨右 1、歯骨右 1	前上顎骨右 1、上顎骨右 1、歯骨左 1、右 3、鋤骨 1	9
カツオ類	上顎骨右 1、関節骨右 1、鰓蓋骨左 1	関節骨左 1	4
ヒラメ	方骨左 1	上顎骨右 1、関節骨右 1、方骨左 1	4
その他	ボラ類鰓蓋骨右 1、マダイ?歯骨右 3 キダイ上顎骨右 1、アラ歯骨右 1	ボラ類鰓蓋骨左 1、右 1、キダイ歯骨左 1 アラ関節骨右 1、フグ類歯板破片 1、関節骨右 1、 コイ咽頭歯右 1	13
計	154	123	277

表 4 魚類出土内容 (椎骨以外)

	SK45	SK57	計
カモ類 (大)	尺骨左上 1、中手骨左 1、鎖骨 1	肩甲骨左 1、上腕骨左下 2、右下 2、尺骨左下 1、右 1、 上 2、中手骨左 1、上 1、右上 1、下 1、脛骨左下 1、右 下 1、胸骨破片 2、連合寛骨破片 1	21
カモ類 (中)	鳥口骨右上 2、脛骨左下 2、上嘴破片 1	橈骨左下 1、右上 1、下 1、尺骨左 1、右 1、鳥口骨左 1、 下 1、中足骨右 1、頭蓋骨 1	14
カモ類 (小)	上腕骨左下 4、右下 6、尺骨左上 1、下 1、右 1、上 2、下 1、 橈骨左上 1、下 1、右上 1、下 1、中手骨右上 2、中足骨左 1、 下 1、右 1、上 1、下 1、脛骨左下 1、右下 3	上腕骨左下 1、右下 5、尺骨左 7、右 2、下 3、橈骨左 1、 下 1、右 1、中手骨左 2、下 1、右 2、上 1、中足骨左 3、 脛骨左下 3	64
ガン類 (大)	上腕骨左上 1		1
ガン類 (小)	上腕骨右上 1	上腕骨左中間部 1、右下 1、中手骨左上 1、右下 1	5
ハト類	中手骨左 2、下 1、右 2	上腕骨左 1、中足骨左 1	7
ニワトリ		上腕骨右上 1	1
種不明	上腕骨左下 2、尺骨左下 1、右 1、上 1、中手骨右 1、 脛骨左下 1、右下 1、中足骨左 1、右 1、上 2、 椎骨 4、指骨 5、四肢骨破片 21、破片 3	上腕骨左下 3、尺骨左 1、上 1、右 1、中手骨左下 1、 右 1、下 1、大腿骨左 1、脛骨左下 3、右下 1、 中足骨左 2、右 2、上 1、下 1、椎骨 6、指骨 4、 四肢骨破片 11、破片 5	91
計	91	113	204

註 カモ類・ガン類のグループ分けは、西本他 (2006) に従った。上: 近位部、下: 遠位部、上・中間部・下のないものは完存。

表 5 鳥類出土内容

	SK45	SK57
ネズミ類	下顎骨左 2、右 2	椎骨 2
イノシシ類	上第 3 後臼歯 1	後臼歯破片 1
陸獣	破片 2	破片 1
ヒト		歯破片 1
計	7	5

表 6 哺乳類出土内容



写真1 貝類 (約 2/3)

1. ヤマトシジミ 2. アサリ 3. ハマグリ 4. パイ 5. サザエ 6. ハマグリ (漆附着) 7. イタヤガイ (貝柄杓)  
8. ミルクイ 9. アカガイ 10. アカニシ 1・2・6は左殻、3・7～9は右殻



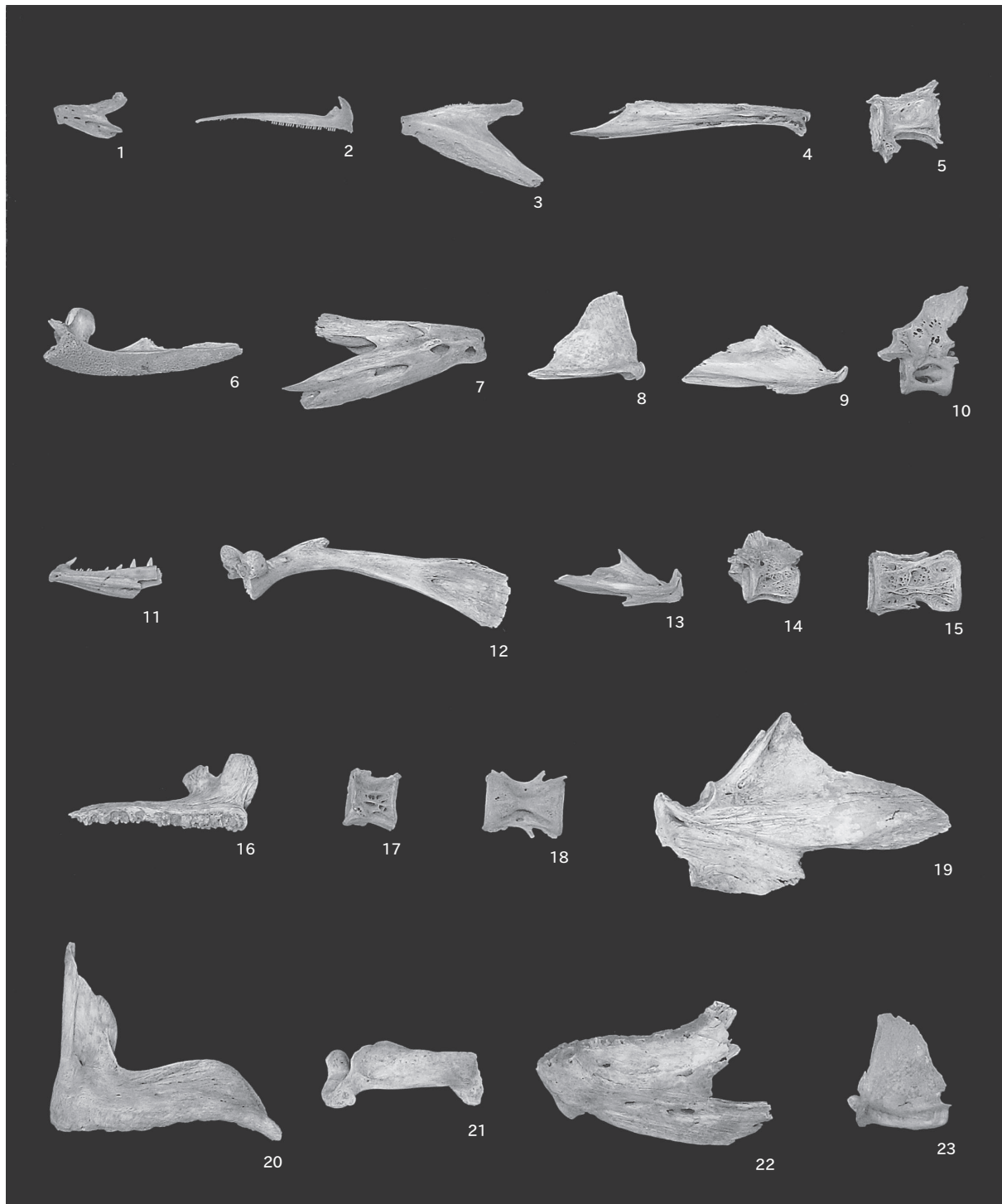


写真2 魚類(約3/4)

1. キダイ歯骨 2・3. サバ類(2. 前上顎骨, 3. 歯骨) 4・5. コチ類(4. 歯骨 5. 椎骨) 6～8. スズキ(6. 前上顎骨 7. 歯骨 8. 方骨)  
 9・10. カツオ類 (9. 関節骨 10. 椎骨) 11. カマス類歯骨 12・13. ヒラメ (12. 上顎骨 13. 関節骨) 14. ボラ類椎骨  
 5. プリ椎骨 16・17. マダラ (16. 前上顎骨 17. 椎骨) 18. サワラ類椎骨 19. アラ関節骨  
 20～23. マダイ (20. 前上顎骨 21. 上顎骨 22. 歯骨 23. 方骨) 1・3・9・11・13・20～23 は左側、  
 2・4・6～8・12・16・19 は右側。6・9・12 には切断根有り。

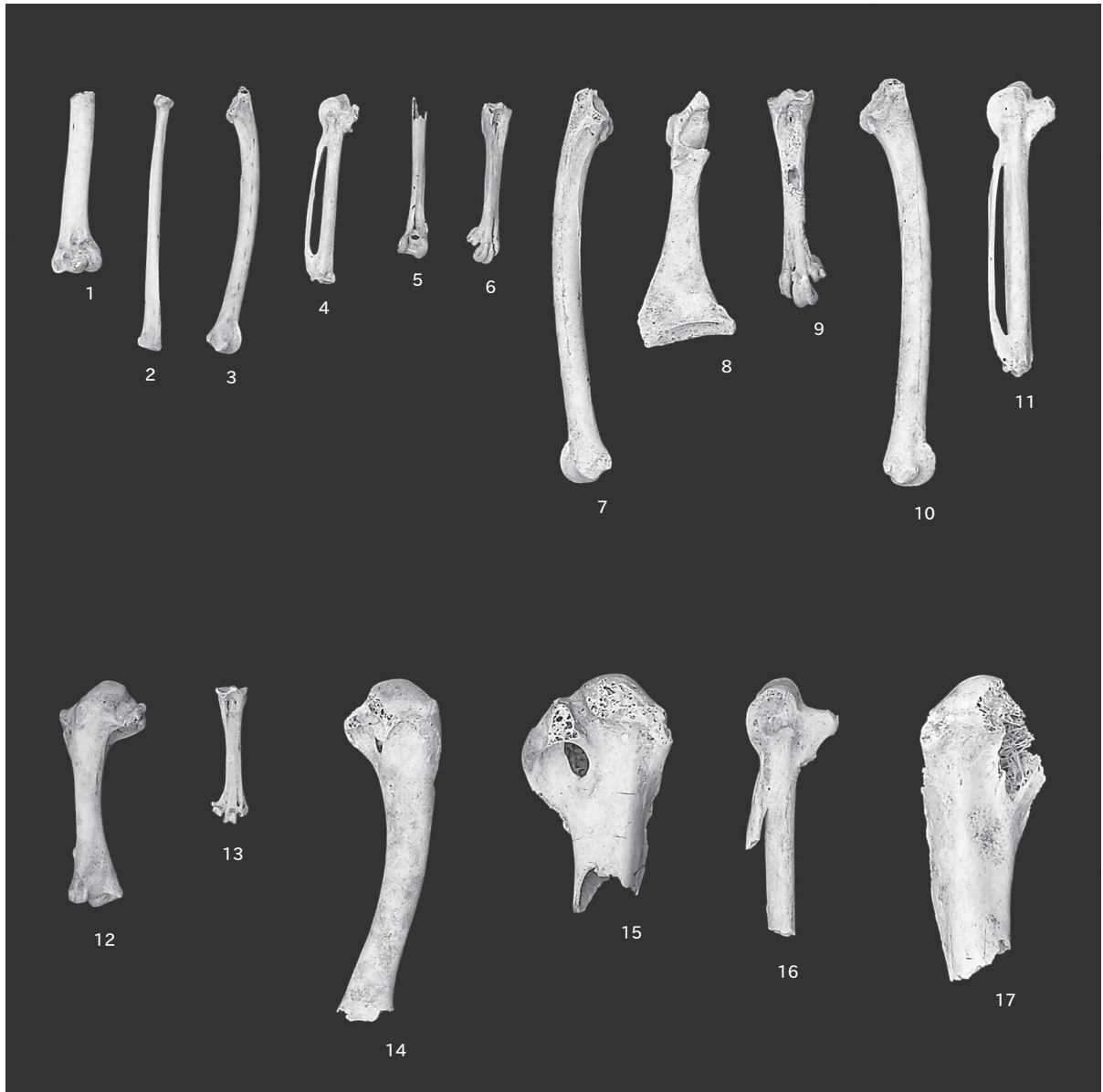


写真3 鳥類 (約3/4)

1～6. カモ類 (小) (1. 上腕骨 2. 橈骨 3. 尺骨 4. 中手骨 5. 脛骨 6. 中足骨) 7～9. カモ類 (中) (7. 尺骨 8. 烏口骨 9. 中足骨)  
10・11. カモ類 (大) (10. 尺骨 11. 中手骨) 12・13. ハト類 (12. 上腕骨 13. 中足骨) 14. ニワトリ上腕骨  
15・16. ガン類 (小) (15. 上腕骨 16. 中手骨) 17. ガン類 (大) 上腕骨 1・4～8・11～13・16・17 は左側、  
2・3・9・10・14・15 は右側

## 第4節 「小石川植物園」の土地利用に関する歴史の変遷

学習院大学 渋谷 葉子

### はじめに

本稿は、東京大学理学系研究科附属植物園（以下「小石川植物園」とする）用地の、江戸時代から明治時代にわたる土地利用の変遷を、文献と絵図史料に基いて整理・記述するものである。対象は、主として現在の植物園地だが、必要に応じて周辺の土地利用についても言及する。また特に発掘調査の行われた研究温室地点に関しては、利用の具体像が明らかになるよう、章を設けて検討を加えた。

### 1. 土地利用の変遷

#### (1) 白山社・小石川村百姓地期

##### 白山社の成立

江戸時代に編纂された地誌類によれば、当該地は白山社であったという。これらに記された同社の縁起には、慶長20（元和元・1615）年に加賀国から白山権現を勧請したとするものと、元和2（1616）年に江戸本郷元町から遷宮したとするものの2説がある<sup>(1)</sup>。いずれにしても元和期の初年より後には、この地に鎮座していたのだろう。その約30年後、正保元（1644）年作成の「正保年間江戸絵図」（図1）には、地形から当該地と比定される場所に、白山社とみられる鳥居と社殿が描かれて、その存在が確認される<sup>(2)</sup>。後述する幕府の小石川御殿が、巷間で「白山御殿」と通称されたのは、これに由来したということである<sup>(3)</sup>。

##### 現植物園地の比定

現在の植物園地は白山社だけでなく、もう少し広範囲にわたっていた。図1から看取される道や河川、傾斜など地形の状況は、植物園がおおよそ現敷地となつてのち、明治28（1895）年作成「東京実測全図」（図2）にみるそれとほぼ変りなく、これにしたがつて図1に植物園地をおおよそ比定することができる<sup>(4)</sup>。すなわち白山社と、その道を隔てた東側の「百姓地」の区画、および同じく西側、途中で切れた道を北へ延ばして限った区画を合わせた範囲である<sup>(5)</sup>。なお北側敷地境に関しては、江戸時代、数回の屋敷割改変に伴う道の付け替えがあつて確定は困難だが、図1の「松平右衛門大夫下屋敷」が図2の「指ヶ谷町」一帯の高台に相当すると推定され、双方の位置関係から、白山社とその東・西区画に沿った道よりも、多少南に下がると考えられる。

#### (2) 館林藩小石川下屋敷期

##### 小石川下屋敷の成立

慶安5（承応元・1652）年8月14日、白山社東側の小石川村百姓地が、松平徳松に下賜されることになる。徳松とは3代将軍徳川家光の男子、のちの5代将軍徳川綱吉である。この前年の慶安4（1651）年4月3日、数え年6歳の幼少で、駿河・甲斐・上野・信濃・近江・美濃6ヶ国のうちに賄領15万石を与えられて、家門大名となつていた。小石川村のこの土地は下屋敷として下賜された



図1 「正保年間江戸絵図」 (部分/正保元・1644年ころ)

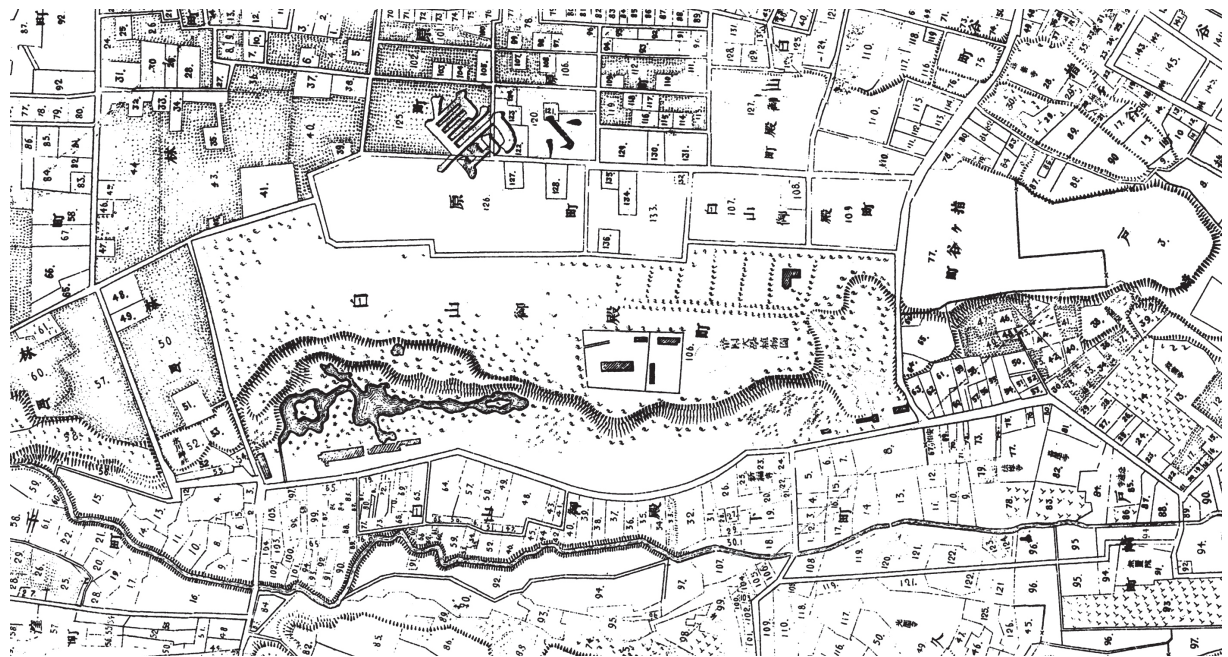


図2 「東京実測全図」 (部分/明治28・1895年作成)



図3 「江戸大絵図」 (部分/明暦3・1657年ころ)

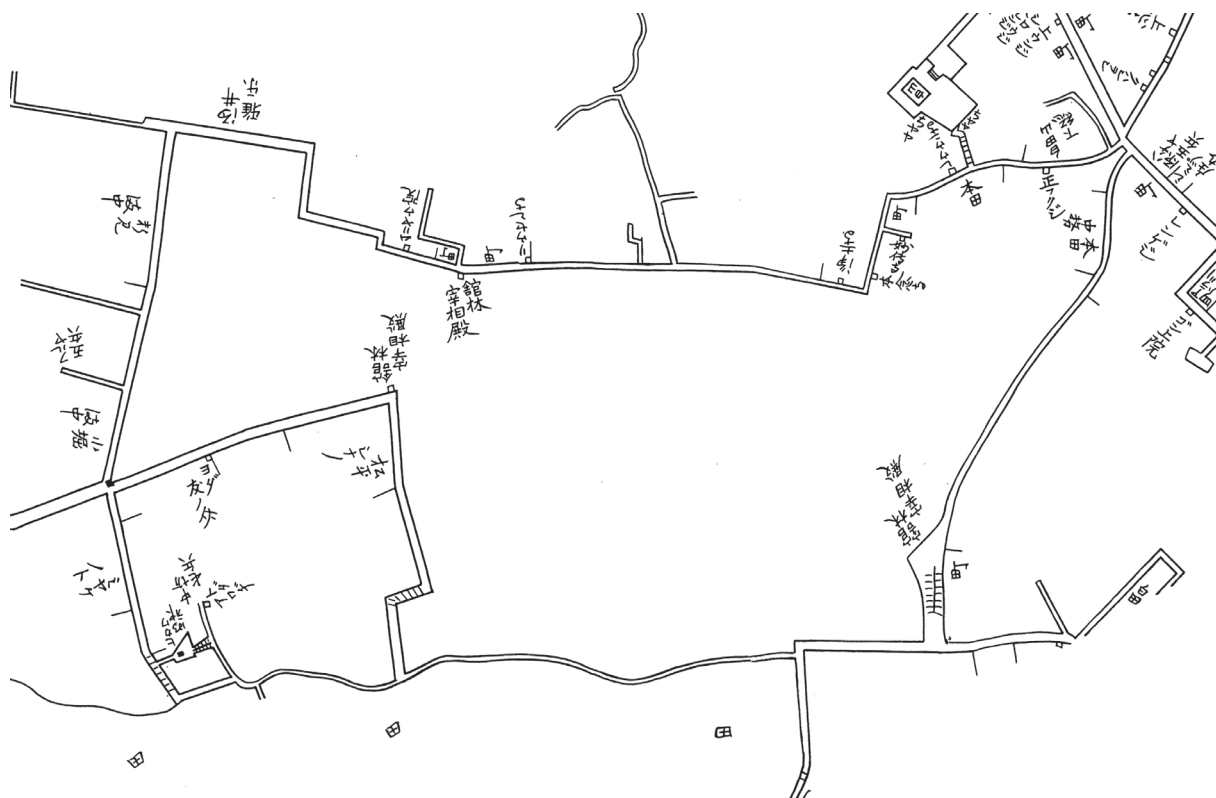


図4 「寛文江戸図」 (部分/寛文9・1669年ころ)

もので、場所は徳松側の希望に依ったといい、坪数は不明だが高74石1斗5升4合2勺の地であった<sup>(6)</sup>。この拝領後、10月26日には屋敷周りの惣堀普請に着工している<sup>(7)</sup>。さらに承応4(明暦・1655)年3月、白山社地も拝領することになり、屋敷地は西側に大きく拡張して、数万坪に及んだとみられる<sup>(8)</sup>。なおこの間、承応2(1653)年8月14日に、徳松は元服して右馬頭綱吉を称すようになる。

当時の小石川下屋敷について、屋敷絵図など直接的に様相を知りうる史料は皆無だが、判明する事柄から内部のあり方を推定してみよう。まず「江戸名所記」などの白山権現に関する記述に、社地には名水の瀧があり、綱吉の下屋敷になったとき、それを庭前の築山の泉水に落そうとすると俄かに水が絶えてしまったとある<sup>(9)</sup>。ここからは屋敷地のうち旧白山社部分に、殿舎や庭園など、いわゆる御殿空間が設定された様子が窺える。水涸れについて、当時の人々は白山権現の神威と噂したが、殿舎作事に伴う地形や庭園築造が水脈に影響したためとすれば、突然の枯渇も理解されよう。明暦3(1657)年の「江戸大絵図」(図3)によれば、「右馬頭様」と記す向きから東側が表門と判明し、敷地奥の方、西寄りを御殿空間が占めたと考えられる<sup>(10)</sup>。また明暦4(万治元・1658)年1月1日、失火により長屋20間が焼失した事実から家臣団住居があったことは確か<sup>(11)</sup>、その位置は御殿空間と表門の配置からすると、敷地北側から東寄りに想定されよう。

#### 小石川下屋敷の拡大

松平綱吉の小石川下屋敷は、寛文期、2度の添地拝領によって拡大する。まず寛文2(1662)年8月14日、近辺百姓地明地高34石8合6勺を、同9(1669)年8月10日に隣接百姓地高4石7斗9升8合3勺を、それぞれ獲得した<sup>(12)</sup>。「寛文江戸図」(図4)によれば、添地は屋敷地の北から北西にかけてであったことが看取される<sup>(13)</sup>。この背景には、寛文元(1661)年閏8月9日、綱吉が上野国館林藩25万石の領主となって家臣数が倍増したことがあり、その宅地確保が主たる目的だったと考えられる<sup>(14)</sup>。後年の史料からも、添地のほとんどが家臣団の住居地として利用されていたことが推定される<sup>(15)</sup>。

またこの時期、綱吉が小石川下屋敷を頻繁に訪れるようになったことが判明する。それを年月ごと

表1 松平綱吉小石川下屋敷訪問回数

	延宝3	延宝4	延宝5	延宝6	延宝7	延宝8
1月	1	3	0	3	2	3
2月	3	1	0	5	3	3
3月	2	1	0	4	3	3
4月	3	4	2	5	2	2
5月	3	4	4	5	2	1
6月	4	2	2	2	2	—
7月	2	4	1	0	2	—
8月	3	1	4	3	3	—
9月	4	1	1	1	4	—
10月	4	2	2	2	3	—
11月	5	4	5	3	2	—
12月	6	2	2	3	4	—
閏月	4	—	4	—	—	—
計(回)	44	29	27	36	32	12
月平均	3.4	2.4	2.1	3.0	2.7	2.4

・「神田記」より作成

・閏月は、延宝3年が4月、同5年が12月である

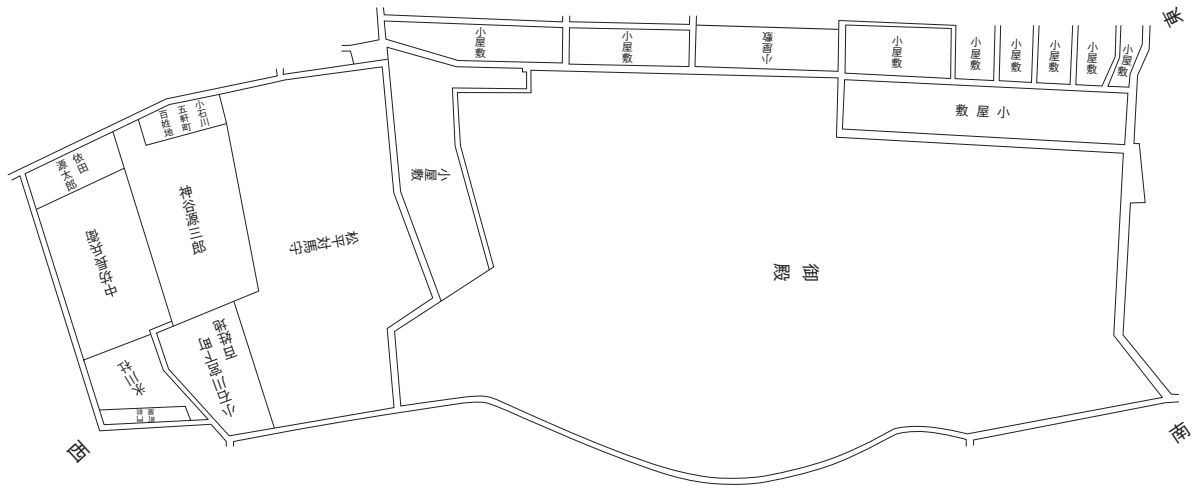


図5 「沿革図書」のうち「天和年中之形」

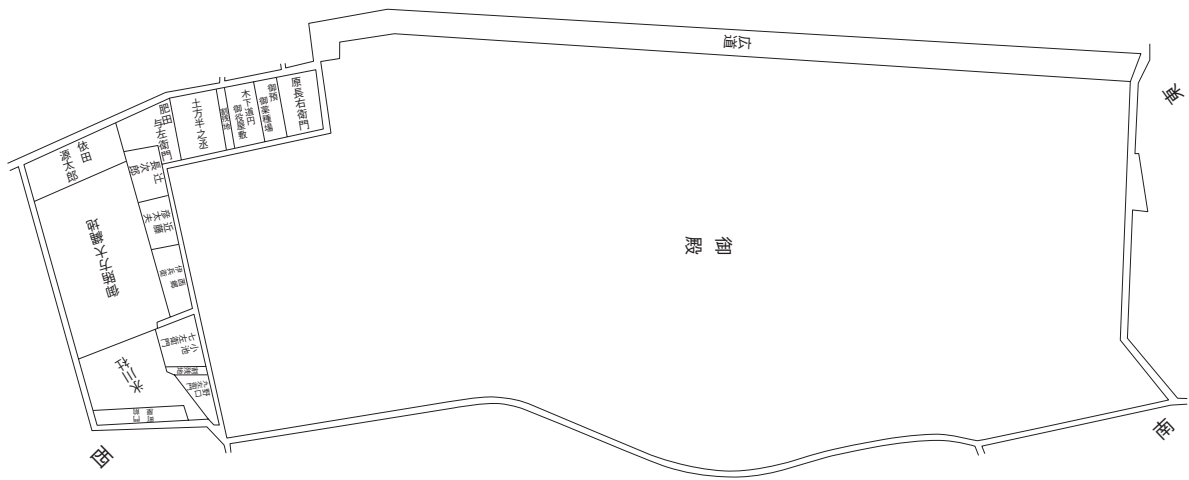


図6 「沿革図書」のうち「元禄十一寅年之形」

に集計したのが、表1「松平綱吉小石川下屋敷訪問回数」である。これによれば、最も多い時は1ヶ月に6回(延宝3・1675年12月)、まったく訪れないときもあるが、月に平均すると2~3回以上は渡りがある。綱吉がこのようにたびたび下屋敷を訪れた理由は、生母桂昌院が居住していたため、表1は史料の残存状況によりデータが延宝3年以降に限られているが、周知のとおり、綱吉の桂昌院に対する崇敬は非常なものであり、この状況は以前から、おそらくは寛文元年に桂昌院が小石川下屋敷へ移居して以来、継続していたものとみられる<sup>(16)</sup>。綱吉の訪問に際しては、振舞や演能、茶事などが催された。また大名を招いての饗応も行われている。寛文期以降、小石川下屋敷の御殿空間には、桂昌院の住居はもちろん、相応の質と規模を持った殿舎群が整備されたとみてよかろう。

#### 西側区画の変遷

白山社西側の区画については、しばらくの間、百姓地のままであった。図3の小石川下屋敷西側には「田」が広がっており、同図作成時まで変らなかったことが判明するが、この翌年から武家地への転換が始まった。まず万治元年閏12月19日、豊後府内藩主松平左近将監忠明に、下屋敷として百姓地高6石1斗6升7合3勺が、そして寛文2年2月21日には旗本戸田淡路守氏経に、同じく高3石2斗8升4合が、それぞれ下賜された<sup>(17)</sup>。いずれも坪数は不明だが、図4の「松平シナノ」・「トダアワヂ」が、それらに該当するものとみられる。

### (3) 幕府小石川御殿期

#### 小石川御殿の成立

天和年間(1681~83)の初め、館林藩小石川下屋敷は幕府の御殿、すなわち小石川御殿、通称白山御殿へと転換されることになる。まずはその背景を整理しよう。延宝8(1680)年5月6日、松平綱吉は、4代将軍徳川家綱の病状悪化を受けてその養子とされ、翌7日に江戸城二丸に入った。翌8日、家綱が急逝したため、綱吉は正室信子、女子鶴、側室伝を伴って江戸城本丸に移り、7月23日になって5代将軍を襲職した。館林藩は、綱吉の将軍家入りを機に、その子息徳松が継承して藩主となっていた。その後徳松は、将軍綱吉の世子と決定されて、11月27日に江戸城西丸へ入ることになったが、依然として館林藩主も兼ねていた。したがって、館林藩士は將軍世子付きの幕臣でもある、という二重性を帯び、実質的に西丸勤侍となり、館林藩の藩庁機能は神田上屋敷から江戸城西丸へ移行したということである<sup>(18)</sup>。

小石川下屋敷については、11月12日に桂昌院が江戸城三丸に移居した後、幕府御殿へと転換されるが、その経緯は詳らかにしえない。ただ転換の年月については、天和2(1682)年6月10日に將軍綱吉が「小石川御殿」への御成を挙行しており、また同月18日には小性組から「小石川御殿番」へ転役した者が確認され、御殿成立は少なくともこれ以前、つまり天和元~2年の前半までに限ることができる<sup>(19)</sup>。

#### 小石川御殿の範囲

新たに成立した小石川御殿は、館林藩下屋敷をそのまま受け継いだものではなかった。後年に幕府作事方が作成した「御府内往還場末其外沿革図書」(以後「沿革図書」と略す)によれば、「御殿地二相成候残地之内二前々より住居来候者、其假屋鋪拝領いたし(後略)」、つまり小石川下屋敷のうち、御殿地に転用された以外の土地は、そこに従来居住してきた者がそのまま屋敷として拝領した、というのである。さらに天和年中には道敷も整備されて、所持者は不明だが小屋敷となっていたと記し、「天和年中之形」(図5)として、旧小石川下屋敷地の南部一帯が「御殿」地、北部一帯は縦横の道敷が走る「小屋敷」地となった図を併載している<sup>(20)</sup>。



これらの記述および図の内容を、前節で述べた小石川下屋敷当時の敷地利用と対照してみると、御殿地となった旧下屋敷地の南側一帯は、殿舎や庭園など御殿空間から表門までの範囲に当てはまり、御殿地以外、つまり残地となった北側一帯は、寛文年間の添地に等しいことになる。ここで指摘したいのは、残地に相当する添地部分は旧来館林藩士の住宅地であり、したがって残地を拝領したのは館林藩士であったということである。徳松が將軍世子となったとき、館林藩士は半ば幕臣化したと既述したが、その住居についても、この実態に即して措置がなされて、幕臣の屋敷地として城下町江戸のなかに位置づけられたということになろう。なお天和3(1683)年閏5月28日、徳松の死去により館林藩が廃止となり、その藩士のほとんどが正式に幕府に編入されて幕臣となった<sup>(21)</sup>。

御殿敷地内部の土地利用について述べておく。まず貞享元(1684)年、やはり幕府御殿である白金御殿が拡張することになり、そのうちにあった麻布南薬園が小石川御殿に移された。位置は北の地詰で、広さは1万4,000坪余ということから、敷地奥の方、北西の相当部分を占めることになったとみられる<sup>(22)</sup>。また新たに鳥籠が設けられたことが判明する。これはいわゆる「生類憐みの令」から、幕府が鳥類を飼育するようになり、特に元禄6(1693)年は酉年で、鳥類保護策が強化された<sup>(23)</sup>。同10(1697)年閏2月12日には、鳥籠に鹿脱があったとして追放者がでており、小石川御殿の鳥籠設置はこれ以前だったことは確かである<sup>(24)</sup>。小石川御殿は、この政策を担う一機関として位置づけられつつあったことが窺われ、その関連施設が新設されたことにより、敷地の余地はほとんどなくなっていたとみられる。

小石川御殿の拡張

元禄11(1698)年、小石川御殿は西側および北側に拡張された。西側区画では寛文年間に戸田淡路守屋敷だったところが、図5では神谷源三郎屋敷と小石川五軒町・同宮下町百姓地となっており、天和年中までに所有者が変わっていたことが判明するが、これらと松平対馬守屋敷、さらに隣接した小屋敷地を上地して、その大部分を「沿革図書」の「元禄十一寅年之形」(図6)のように、御殿に囲い

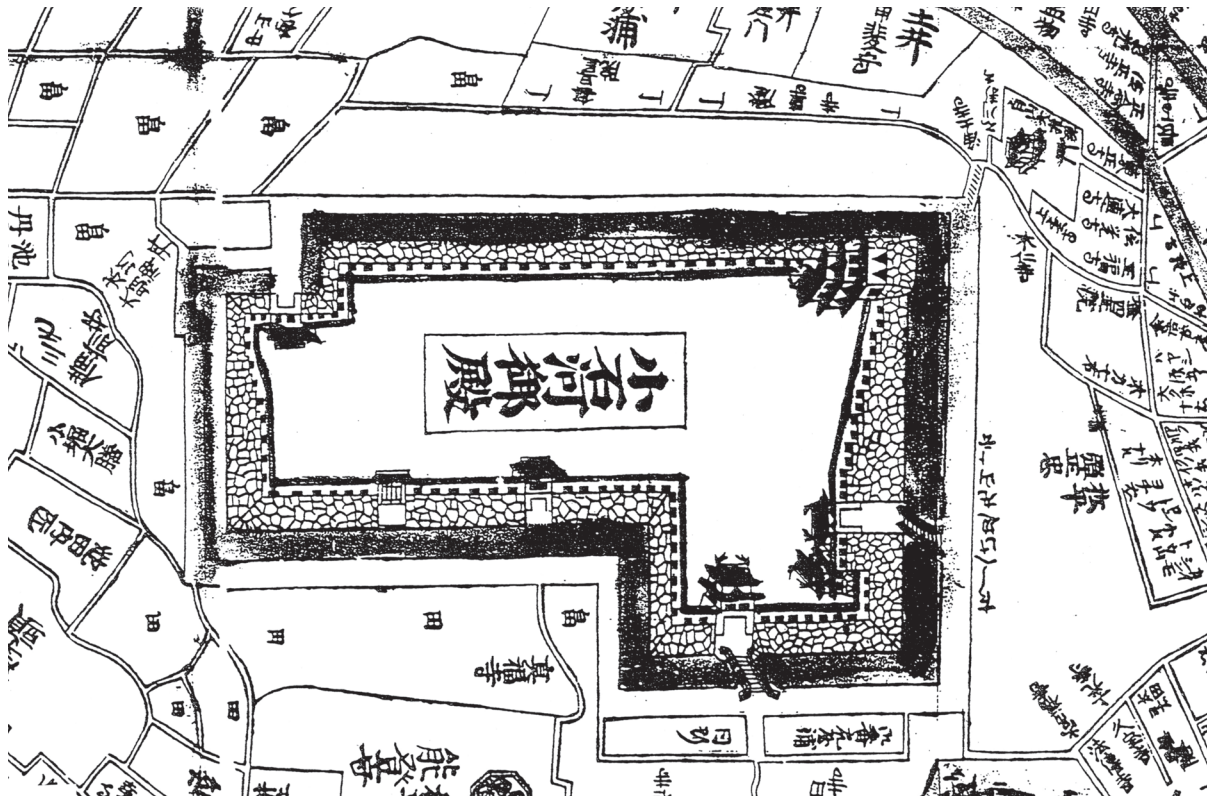


図7 「宝永江戸図鑑」(部分/宝永2年出版)

込んだのである<sup>(25)</sup>。

御殿の拡張事業は1月末から本格化した。まず27日に御殿周りの普請を担当する奉行ら3名が任命され、阿波徳島藩主蜂須賀綱矩に御手伝が命じられた<sup>(26)</sup>。翌28日には松平対馬守屋敷の召し上げが決定しており、その他上地の収納も並行したと考えられる<sup>(27)</sup>。2月19日から3月18日の間に、上地のうち、御殿に囲い込まなかった部分を屋敷地として再配分していることから、これより前には上地すべてが幕府に掌握されて、御殿の領域も確定したとみられる<sup>(28)</sup>。囲い込み地を含めた御殿の圍繞施設の建設が、前に選任された御普請奉行などによって進められた結果、5月11日に一連の作業が終了して、小石川御殿は完成をみた<sup>(29)</sup>。

#### 小石川御殿の様相

宝永2(1705)年出版「宝永江戸図鑑」(図7)は、拡張後の御殿の様相を描いたものである<sup>(30)</sup>。敷地には堀、そして石垣・多門が廻り、その北東角には三重の隅櫓がある。東側の門は枳形構えであろうか、橋を渡って高麗門を抜けた左側が櫓門のようである。また南側東寄りの門は二層で、下層の屋根には千鳥破風が据えてあるように見える。城郭を思わせるこのような堅固な構造は、ほかの絵図にも見られるもので、また史料には御普請奉行が堀・土居・隅櫓・多門等の建設に従事したことが記されており、図7の様相のおおよそは実像であろう<sup>(31)</sup>。さらに「御府内備考」によれば、堀は幅10間(約18メートル)ほどで、水を千川上水から引き、「坂の内五段の瀧ありて、石垣より落るありさまハ絶景也」、つまり堀で傾斜した部分は石垣で階段状に造られており、そこを落ちる水はあたかも瀧のようで絶景であるという<sup>(32)</sup>。

御殿の利用について、まず元禄11年4月、北側の薬園1万4,000坪余のうち6,000坪ほどが鳥籠用地に転換され、また堀には野鶴の畜養場も設けられた<sup>(33)</sup>。「生類憐みの令」の展開に伴って、畜養施設の新設や拡充が行われていったことが窺われ、敷地の拡張もこれに対応したものだった可能性が指摘される。しかし宝永6(1709)年1月10日に綱吉が没すると、その法令廃止とともに飼われていた生類は速やかに放たれ、小石川御殿の畜養施設としての役目は終わった<sup>(34)</sup>。かわって正徳元(1711)年9月23日、麻布御殿から花畑が移された。このとき、麻布花畑御用を勤めていた芥川小野寺元風も小石川に移り、花畑とともに薬園の御用も勤めるようになった<sup>(35)</sup>。前述のように小石川御殿には8,000坪もの薬園があり、芥川はこれも管理するよう命じられたのである。移設後の花畑について明らかにしえることはないが、麻布御殿での坪数は3,200余坪だったといい、小石川御殿でも同程度の規模が維持されたのではないかと想像される<sup>(36)</sup>。

#### 小石川御殿の廃絶

正徳3(1713)年4月19日、小石川御殿は廃止されることになり、これを担当する御用目付ら、役人3名が任命された<sup>(37)</sup>。実はこの直前まで、幕府は小石川御殿を存続させる方針だったようで、4月11日には、その修復を担当する役人を任命していた<sup>(38)</sup>。この8日後に一転、廃止が決定した理由は定かでない。ただ修復に着手したことで、却って存続が物理的に困難と判明して断念されたことはありえよう。それは、6代將軍徳川家宣の世子時代、宝永4(1707)年4月21日を最後に、小石川御殿への將軍らの訪問はなくなり、殿舎は長い間の不使用から老朽化が進行していたとみられるからである。ただ後述のように、跡地が速やかに武家地へと転換された事実を鑑みると、これのみが幕府を御殿廃止にまで踏み切らせた理由とは考えにくい。時期的に7代將軍徳川家継の就任直後であったことから、何らかの政治的判断も働いていたと考えるのが妥当であろう。

廃絶の経過は具体的にならないが、次で述べるとおり、正徳4(1714)年2月には、早くも跡地が屋敷地として大名・幕臣へ下賜されていることから、廃止が決定して間もなく、殿舎や多門など囲

繞施設の取り壊しと、堀の埋め戻しが始まったと考えられる。この作業に従事したのは、先に選任された御目付ほか、小石川御殿奉行や同御殿番らだったとみられるが、これら役職者たちへは、正徳3年9月18日には転役が命じられており、これまでには御殿廃止に伴う一連の作業が完了したと推定される<sup>(39)</sup>。

#### (4) 小石川御殿地跡期

##### 小石川御殿地跡拝領者の具体像—正徳4年

小石川御殿が廃止された跡地は、順次武家地として大名・幕臣に下賜されていった。拝領者の役職・所属と氏名、拝領坪数、拝領年月日、略歴などをまとめたのが、表2「正徳4～6年小石川御殿跡拝領者一覧」である。これを通覧すると、正徳4年2月19日から同6(享保元・1716)年3月9日までに、全域が大小113に分筆されて、所有者もすべて確定したことがわかる。以下、この表に基づき拝領者についてみていこう。

下賜の皮切りは、正徳4年2月19日、若狭小浜藩主酒井修理大夫忠音への下屋敷1万1,000坪である(表2-No.1、以下No.のみを記す)。これは小日向水端屋敷が上地された代地として与えられたものだったが、早くも同年9月25日には、牛込矢来町下屋敷拡張のため、5,664坪を切坪して松平(柳沢)式部少輔時睦に譲渡、酒井の下屋敷は5,336坪に縮小した<sup>(40)</sup>。

この後、同年中に屋敷地を拝領したNo.2～68はすべて幕臣であったが、うちNo.65・66の大縄地を除く65名はすべて小普請で、しかもその履歴には、以下の3つの共通点があった。第一は、ほぼ全員が綱吉將軍期に幕臣に召し出されたことである。このうち猿楽師およびその衣裳の者が39名にも上ることは、猿楽を異常に好んだ綱吉特有の人事と解される。また宝永元(1704)年12月5日、甲府城主から綱吉世子として將軍家に入った家宣に随従して幕臣となった者も9名含まれている<sup>(41)</sup>。第二は、彼らは出仕後、將軍または世子の側近くに仕える土圭間番・西丸土圭間番・御廊下番・桐間番・御近習番・御次番、いずれかを勤めるか、いくつかを歴任したことである。このうち御廊下番・桐間番・御近習番・御次番は綱吉が新設した奥向番衆であった<sup>(42)</sup>。そして第三は、小普請入りの契機が上記諸役の廃止あるいは減員だったことである。綱吉の死去に伴い、宝永6年2月、その新設した上記4役のうち桐間番以外は廃役となった。このとき、無役となった者と、土圭間番・西丸土圭間番に転じて將軍家宣および世子家継の側衆を引き続き勤めた者に分れたが、最終的には家継が7代將軍となって間もなく、正徳3年5月、桐間番も廃止、土圭間番と西丸土圭間番は大幅に減員された<sup>(43)</sup>。つまりこの65名はすべて、綱吉・家宣の側近だったが、廃役あるいは減員により無役となって、小普請入りした者たちであった。

##### 小石川御殿地跡拝領者の具体像—正徳5・6年

翌正徳5(1715)年1月29日、丹波篠山藩主松平紀伊守信庸が7,000坪を拝領、その地続きの崖なだれ地2,015坪を預地とすることになった(No.69・70)。この拝領までには以下のような経過があった。同年1月19日、信庸の屋敷不足が上聞に達し、家臣団住居のために下屋敷を下賜するので場所を見立てるよう側用人間部詮房から言われ、白山御殿地跡の拝領を願ったところ、25日には同所7,000坪を下される旨申し渡されたという<sup>(44)</sup>。つまり拝領の出願は幕府からの働きかけで、それから7日後には希望通りの屋敷地の下賜が決定したのである。これは信庸が前年の9月6日、老中に就任したことによる特別な措置だったと考えられる。老中は在職中帰国できず、必然的に江戸詰家臣が多くなったが、信庸が当時所持したのは、役屋敷として龍ノ口上屋敷4,495坪と芝田町下屋敷(坪数不明)のみであった<sup>(45)</sup>。幕府が指摘した信庸の屋敷不足は事実で、この地は家臣の住居用地

表2 正徳4～6年小石川御殿跡拝領者一覧

番号 No.	場所	役職・所属	名前(諱)	坪数 (坪・合)	隣接(東/西/南/北)	間数(東・西/南・北)	年・月・日	略歴(『寛政重修諸家譜』による)	備考
1	小石川御殿地跡	若狭国小浜藩主	酒井修理大夫(忠音)	11,000.0	新道/道/新道/道	83間3尺4寸・80間2尺/129間・130間2尺	正徳4.2.19	宝永3.10.29継	小日向屋敷代地,内2860坪崖なだれ,正徳4.9.松平(柳沢)式部少輔(時睦)と切坪相對替,5664坪減,享保6.上地
2	小石川御殿地之内	大久保淡路守組	船田兵吉(正光)	250.0	松野善太郎/熊沢善四郎/西村三郎二郎,斎藤半九郎/道	26間/9間3尺7寸余	正徳4.3.29	宝永3.3.4父金十郎召出,土圭間番→正徳2.12.21兵吉継,土圭間番→同3.5.18減員により小普請	
3	小石川御殿地之内	大島肥前守組	熊沢善四郎(好昌)	250.0	船田兵吉/上原勘之丞/吉田左源次/道	26間/9間3尺7寸	正徳4.3.29	猿楽師→宝永5.6.27綱吉召出,西丸土圭間番→本丸勤→正徳3.5.18減員により小普請	
4	小石川御殿地之内	大島肥前守組	上原勘之丞(友重)	250.0	熊沢善四郎/山本清右衛門/大森市郎右衛門,吉田左源次/道	26間/9間3尺7寸	正徳4.3.29	猿楽師→元禄14.12.21綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
5	小石川御殿地之内	大島肥前守組	山本清右衛門(重時)	250.0	上原勘之丞/新道/大森市郎右衛門/道	26間/9間6尺7寸余	正徳4.3.29	猿楽師→宝永3.6.25召出,西丸土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
6	小石川御殿地之内	大久保淡路守組	大森市郎右衛門	250.0	吉田左源次/新道/新道/山本清右衛門	21間4尺/11間3尺2寸余	正徳4.3.29	召出年月日不明,土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
7	小石川御殿地之内	大久保淡路守組	吉田左源次	250.0	斎藤半九郎/大森市郎右衛門/新道/上原勘之丞,熊沢善四郎	21間4尺/11間3尺2寸余	正徳4.3.29	宝永2.2.9父孫三郎召出,西丸土圭間番→正徳3.2.26左源次継,西丸土圭間番→同3.5.18減員により小普請	
8	小石川御殿地之内	大島肥前守組	斎藤半九郎(守喜)	250.0	西村三郎二郎/吉田左源次/新道/熊谷善四郎,船田兵吉	21間4尺/11間3尺2寸余	正徳4.3.29	宝永1.-.家宣に従い出仕,西丸土圭間番→本丸勤→正徳3.5.18減員により小普請	
9	小石川御殿地之内	大島肥前守組	西村三郎二郎(能重)	250.0	松田権八郎/斎藤半九郎/新道/船田兵吉,松野善太郎	21間4尺/11間3尺2寸余	正徳4.3.29	猿楽師→元禄15.7.5綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21西丸土圭間番→本丸勤→正徳3.5.18減員により小普請	
10	小石川御殿地之内	大島肥前守組	斎藤四郎二郎(高生)	250.0	岩田小太郎/奥田九八郎/御殿地跡/新道	27間5尺7寸/8間5尺6寸余	正徳4.3.29	宝永1.-.家宣に従い出仕,西丸土圭間番→本丸勤→正徳3.5.18減員により小普請	享保6.6.22上地
11	小石川御殿地之内	大島肥前守組	奥田九八郎(雅之)	250.0	斎藤四郎二郎/東条金弥/御殿地跡/新道	27間5尺7寸/8間5尺6寸余	正徳4.3.29	宝永1.-.家宣に従い出仕,(西丸)土圭間番→本丸勤→正徳3.5.18減員により小普請	享保6.6.22上地
12	小石川御殿地之内	大島肥前守組	東条金弥(道潔)	250.0	奥田九八郎/御牧五兵衛/御殿地跡/新道	27間5尺7寸/8間5尺6寸余	正徳4.3.29	猿楽師→宝永4.11.晦父平左衛門綱吉召出,御廊下番→同4.1.29御近習番→同6.2.21廃止により小普請→同6.8.27土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	享保6.6.22上地
13	小石川御殿地之内	大島肥前守組	御牧五兵衛(昌忠)	250.0	東条金弥/樋口治兵衛/御殿地跡/新道	27間5尺7寸/8間5尺6寸余	正徳4.3.29	松平綱豊家臣猿楽師→元禄9.10.1綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	享保6.6.22上地
14	小石川御殿地之内	大島肥前守組	樋口治兵衛(政常)	250.0	御牧五兵衛/新道/御殿地跡/新道	27間5尺7寸/8間5尺6寸余	正徳4.3.29	松平綱豊家臣猿楽師→元禄9.10.1綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	享保6.6.22上地
15	小石川御殿地之内	松平主計頭組	松本忠五郎(当友)	250.0	新道/和田三次郎/松岡藤七郎/道	25間2尺6寸/9間5尺	正徳4.3.29	松本大炊頭家臣→宝永3.9.12父忠兵衛召出,西丸土圭間番→同7.8.22忠五郎継,小普請	
16	小石川御殿地之内	松前伊豆守組	和田三次郎(政英)	250.0	松本忠五郎/杉本勘七郎/木谷又三郎,松岡藤七郎/道	25間2尺6寸/9間5尺	正徳4.3.29	宝永1.-.父助右衛門家宣に従い出仕,道具方→同7.11.22三次郎継,小普請	
17	小石川御殿地之内	大島肥前守組	杉本勘七郎(為利)	250.0	和田三次郎/長坂清左衛門/土田彦太郎,木谷又四郎/道	25間2尺6寸/9間5尺	正徳4.3.29	松平大膳大夫家臣猿楽師→宝永3.9.12召出,西丸土圭間番→本丸勤→正徳3.5.18減員により小普請	
18	小石川御殿地之内	松平主計頭組	長坂清左衛門(高敬)	250.0	杉本勘七郎/大林源四郎/津田平八郎,土田彦太郎/道	25間2尺6寸/9間5尺	正徳4.3.29	水戸家猿楽衣裳着→宝永5.2.27綱吉召出,御廊下番→同6.2.21土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
19	小石川御殿地之内	大島肥前守組	津田平八郎(信邦)	250.0	土田彦太郎/青木忠左衛門/新道/大林源四郎,長坂清左衛門	25間2尺・26間/9間5尺4寸・9間4尺5寸	正徳4.3.29	松平淡路守家臣猿楽師→元禄14.12.21綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
20	小石川御殿地之内	大久保淡路守組	土田彦太郎(房貴)	250.0	木谷又三郎/津田平八郎/新道/長坂清左衛門,杉本勘七郎	25間・25間2尺/10間1尺5寸・10間6寸余	正徳4.3.29	宝永3.9.12父彦九郎綱吉召出,西丸土圭間番→同4.8.21彦太郎継,土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
21	小石川御殿地之内	大久保淡路守組	木谷又三郎	250.0	松岡藤七郎/土田彦太郎/新道/和田三次郎,杉本勘七郎	24間3尺・25間/10間1尺5寸余・10間6寸余	正徳4.3.29	松平淡路守家臣猿楽師→宝永3.6.25召出,西丸土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
22	小石川御殿地之内	大久保淡路守組	松岡藤七郎(元知)	250.0	新道/木谷又三郎/新道/和田三次郎,松本忠五郎	24間1尺5寸・24間3尺/10間3尺・10間2尺	正徳4.3.29	猿楽師→宝永5.4.4召出,西丸土圭間番→本丸勤→正徳3.5.18減員により小普請	
23	小石川御殿地跡之内	松前伊豆守組	坪内小三郎	250.0	道/森崎新兵衛/山本新三郎/道	20間・18間5尺9寸/11間5尺1寸・17間3尺1寸	正徳4.3.29	猿楽師→元禄10.②.13父清助綱吉召出,御廊下番→宝永1.11.29御近習番→同6.2.21綱吉没により小普請→正徳3.11.29小三郎継,小普請	
24	小石川御殿地跡之内	松平主計頭組	森崎新兵衛(正之)	250.0	坪内小三郎/三橋彦治郎/岩田又十郎/道	18間5尺9寸/13間1尺余	正徳4.3.29	松平丹後守家臣猿楽師→宝永5.2.27召出,御廊下番→同6.2.21廃止により小普請→同7.9.6土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
25	小石川御殿地跡之内	松前伊豆守組	三橋彦治郎	250.0	森崎新兵衛/小宮山勘左衛門/丹羽市之丞/道	18間5尺9寸/13間1尺余	正徳4.3.29	猿楽師→元禄7.6.26綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請	
26	小石川御殿地跡之内	大島肥前守組	小宮山勘左衛門(信祥)	250.0	三橋彦治郎/新道/沢井十左衛門/道	18間5尺9寸/13間1尺余	正徳4.3.29	猿楽師→宝永5.4.4綱吉召出,西丸土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
27	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	沢井十左衛門(佳仲)	250.0	丹羽市之丞/新道/新道/小宮山勘左衛門	19間4尺9寸/12間3尺7寸余	正徳4.3.29	元禄1.7.18綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請	
28	小石川御殿地跡之内	松平主計頭組	丹羽市之丞(永郡)	250.0	岩田又十郎/沢井十左衛門/新道/三橋彦治郎	19間4尺9寸/12間3尺7寸余	正徳4.3.29	浅野綱長家臣→元禄7.11.4召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請	
29	小石川御殿地跡之内	松平主計頭組	岩田又十郎	250.0	山本新三郎/丹羽市之丞/新道/森崎新兵衛	19間4尺9寸/12間3尺7寸	正徳4.3.29	元禄14.11.28父又左衛門選俗,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請→同7.11.22又十郎継,小普請	
30	小石川御殿地跡之内	大島肥前守組	山本新三郎(正為)	250.0	道/岩田又十郎/新道/坪内小三郎	20間・19間4尺9寸/11間4尺2寸・13間3尺3寸	正徳4.3.29	内藤義孝家臣猿楽師→元禄15.7.5綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請	
31	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	畑伝八郎	250.0	新道/佐藤権之助/橋本善太夫/新道	19間2尺4寸/12間5尺3寸	正徳4.3.29	猿楽師→元禄14.9.19召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請	

番号 No.	場所	役職・所属	名前(諱)	坪数 (坪・合)	隣接(東/西/南/北)	間数(東・西/南・北)	年・月・日	略歴(『寛政重修諸家譜』による)	備考
32	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	佐藤権之助(豊恭)	250.0	畑伝八郎/中村七左衛門/服部伝七郎/道	19間2尺4寸/12間5尺3寸余	正徳4.3.29	猿楽師→元禄2.12.25綱吉召出,御廊下番→同5.10.7御近習番→同11.2.5御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請	
33	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	中村七左衛門(矩政)	250.0	佐藤権之助/篠沢善右衛門/松村平兵衛/道	19間2尺4寸/12間5尺3寸余	正徳4.3.29	猿楽師→元禄1.6.13綱吉召出,御廊下番→宝永1.2.21廃止により小普請	
34	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	篠沢善右衛門(忠知)	250.0	中村七左衛門/鈴木善兵衛/山岡伊八郎/道	19間2尺4寸/12間5尺3寸余	正徳4.3.29	猿楽師→元禄14.12.21召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請	
35	小石川御殿地跡之内	松前伊豆守組	鈴木善兵衛(善春)	250.0	篠沢善右衛門/新道/樋口半三郎/道	19間2尺4寸/12間5尺3寸余	正徳4.3.29	松平徳松家臣猿楽師→天和3.7-侍医→同3.8-御廊下番→元禄2.7.11桐間番→同4.8.22御次番→同4.⑧.2二丸張番→同7.6.26御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請	
36	小石川御殿地跡之内	大島肥前守組	樋口半三郎(政勝)	250.0	山岡伊八郎/新道/新道/鈴木善兵衛	19間2尺4寸/12間5尺3寸余	正徳4.3.29	戸沢上総介家臣→元禄5.12.15綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請	
37	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	山岡伊八郎(富当)	250.0	松村平兵衛/樋口半三郎/新道/篠沢善右衛門	19間2尺4寸/12間5尺3寸余	正徳4.3.29	松平淡路守家臣猿楽師→宝永5.4.4綱吉召出,土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
38	小石川御殿地跡之内	松平主計頭組	松村平兵衛(元好)	250.0	服部伝七郎/山岡伊八郎/新道/中村七左衛門	19間2尺4寸/12間5尺3寸余	正徳4.3.29	猿楽師→元禄14.9.19召出,御廊下番→宝永5.2.19御次番→同6.2.21廃止により小普請→同7.4.15土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
39	小石川御殿地跡之内	松前伊豆守組	服部伝七郎(一庸)	250.0	橋本善太夫/松村平兵衛/新道/佐藤権之助	19間2尺4寸/12間5尺3寸余	正徳4.3.29	元禄5.7.4綱吉召出,御廊下番→宝永5.2.19御次番→同6.2.21廃止により小普請	
40	小石川御殿地跡之内	松平主計頭組	橋本善太夫	250.0	新道/服部伝七郎/新道/畑伝八郎	19間2尺4寸/12間5尺3寸余	正徳4.3.29	松平綱豊猿楽師→元禄9.10.11綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請→同7.⑧.11土圭間番→辞,小普請	
41	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	西村庄二郎	250.0	新道/松野善太郎/松田権八郎/道	26間/9間3尺7寸余	正徳4.3.29	猿楽師→元禄14.9.19父庄右衛門召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請→同7.4.26庄二郎継,小普請	
42	小石川御殿地跡之内	松前伊豆守組	松野善太郎(正乗)	250.0	西村庄治郎/船田兵吉/松田権八郎,西村三郎四郎/道	26間/9間3尺7寸余	正徳4.3.29	天和3.-父善兵衛召出,二丸張番→善太郎継,二丸張番→元禄2.6.18御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請	
43	小石川御殿地跡之内	松平主計頭組	松田権八郎(忠久)	250.0	新道/西村三郎四郎/新道/西村庄治郎,松野善太郎	21間4尺/11間3尺2寸余	正徳4.3.29	毛利飛騨守元次家臣→元禄10.②.28召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請→同7.8.23土圭間番→正徳3.5.18廃止により小普請	
44	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	岩田小太郎(高明)	250.0	新道/斎藤四郎二郎/御殿地跡/新道	27間5尺7寸/8間5尺6寸余	正徳4.3.29	猿楽師→元禄1.1.25父弥右衛門綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請→正徳3.11.19小太郎継,小普請	享保6.6.22上地
45	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	大林源四郎	250.0	長坂清左衛門/明地/青木忠左衛門/道	25間2尺6寸/9間5尺	正徳4.3.晦	猿楽師→元禄12.12.21父与兵衛召出,御廊下番→宝永6.2.21土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
46	小石川御殿地跡之内	大島肥前守組	尾崎伝十郎(常光)	250.0	明地/佐々竹源之進/平野弥市郎/道	25間2尺6寸/9間5尺	正徳4.3.晦	宝永1.-家宣に従い出仕→同2.2.9土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
47	小石川御殿地跡之内	大島肥前守組	佐々竹源之進(昌久)	250.0	尾崎伝十郎/上村源蔵/尾崎勝次郎/道	25間2尺6寸/9間5尺	正徳4.3.晦	宝永1.-家宣に従い出仕→同2.-西丸土圭間番→本丸勤→正徳3.5.18減員により小普請	
48	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	上村源蔵	250.0	佐々竹源之進/新道/東儀喜三郎/道	25間2尺6寸・25間4尺5寸/7間5尺・11間5尺	正徳4.3.晦	元禄5.7.4綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により土圭間番→正徳3.5.18廃止により小普請	
49	小石川御殿地跡之内	松平主計頭組	東儀喜三郎(兼種)	250.0	尾崎勝次郎/新道/新道/上村源蔵	29間3尺・30間5尺/6間3尺・10間2尺3寸	正徳4.3.晦	紅葉山楽人→宝永1・2・10桐間番→同2.9.21御次番→同6.2.21廃止により小普請	
50	小石川御殿地跡之内	大島肥前守組	尾崎勝次郎(種武)	250.0	平野弥市郎/東儀喜三郎/新道/佐々竹源之進	28間4尺・29間3尺/8間4尺8寸・8間3尺6寸	正徳4.3.晦	宝永1.-家宣に従い出仕→同2.-土圭間番→正徳3.5.18廃止により小普請	
51	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	平野弥市郎(幸利)	250.0	榎田作十郎/尾崎勝次郎/新道/尾崎伝十郎	28間・28間4尺/9間2寸・8間5尺	正徳4.3.晦	前田綱紀家臣猿楽師→宝永3.4.23綱吉召出,御廊下番→同6.2.21土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
52	小石川御殿地跡之内	大島肥前守組	榎田作十郎(直宴)	250.0	青木忠左衛門/平野弥市郎/新道/明地	27間・28間/9間1尺7寸・9間6寸	正徳4.3.晦	松平陸奥守家臣→父忠助出仕,土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請→同3.11.29作十郎継,小普請	
53	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	青木忠左衛門(忠英)	250.0	津田平八郎/榎田作十郎/新道/大林源四郎	26間・27間/9間3尺7寸・9間2尺6寸	正徳4.3.晦	松平土佐守家臣猿楽師→元禄14.9.19綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
54	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	奥谷半二郎(直教)	250.0	新道/佐藤又八郎/小森加左衛門/道	(虫食み)	正徳4.3.晦	松平綱豊家臣猿楽師→元禄14.9.19父庄兵衛召出,御廊下番→宝永6.2.21土圭間番→正徳2.5.23半二郎継,土圭間番→同3.5.18減員により小普請	
55	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	佐藤又八郎(豊重)	250.0	奥谷半三郎/秋岡勘兵衛/古橋忠次郎/道	(虫食み)・26間3尺/9間3尺7寸・9間5尺2寸	正徳4.3.晦	猿楽師→宝永4.7.3綱吉召出,西丸土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
56	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	秋岡勘兵衛	250.0	佐藤又八郎/愛知五郎左衛門/中島七郎右衛門,古橋忠次郎/道	26間3尺・27間3尺/9間1尺8寸・9間3尺3寸	正徳4.3.晦	猿楽師→元禄10.②.13父喜助綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請→正徳3.5.18小普請	
57	小石川御殿地跡之内	松平主計頭組	愛知五郎左衛門(慶明)	250.0	秋岡勘兵衛/大前孫兵衛/吉田喜太夫,中島七郎右衛門/道	27間3尺・26間/9間1尺5寸・9間3尺	正徳4.3.晦	貞享2.9.-召出,御廊下番→宝永6.2.21廃止により小普請	
58	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	大前孫兵衛(重職)	250.0	愛知五郎左衛門/橋本喜平次/野本六十郎,吉田喜太夫/道	26間・23間1尺/10間1尺・10間2尺	正徳4.3.晦	猿楽之衣裳着→宝永5.2.23綱吉召出,御廊下番→同6.2.21土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
59	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	橋本喜平次(敬近)	250.0	大前孫兵衛/道/野本六十郎/道	23間1尺・21間4尺/10間2寸・12間4尺	正徳4.3.晦	松平伊予守家臣猿楽師→元禄11.8.2綱吉召出,御廊下番→宝永6.2.21土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
60	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	野本六十郎(久雅)	250.0	吉田喜太夫/道/新道/橋本喜平次,大前孫兵衛	21間5尺6寸・22間5寸/9間5尺4寸・12間5尺4寸	正徳4.3.晦	青木甲斐守重矩家臣→宝永4.9.18,西丸土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
61	小石川御殿地跡之内	大久保淡路守組	吉田喜太夫(信俊)	250.0	中島七郎右衛門/野本六十郎/新道/大前孫兵衛,愛知五郎左衛門	21間5尺6寸/11間2尺4寸	正徳4.3.晦	猿楽師→宝永7.2.18父喜太郎召出,土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請→同3.11.29喜太夫継,小普請	

番号 No.	場所	役職・所属	名前(諱)	坪数 (坪・合)	隣接(東/西/南/北)	間数(東・西/南・北)	年・月・日	略歴(『寛政重修諸家譜』による)	備考
62	小石川御殿地跡之内	大島肥前守組	中島七郎右衛門(常行)	250.0	古橋忠次郎/中島七郎右衛門/新道/愛知五郎左衛門,秋岡勘兵衛	21間5尺6寸/11間2尺4寸	正徳4.3.晦	仙石越前守家臣猿楽師→宝永3.6.25召出,西丸土圭間番→本丸勤→正徳3.5.18減員により小普請	
63	小石川御殿地跡之内	大島肥前守組	古橋忠次郎(忠友)	250.0	小森加左衛門/中島七郎右衛門/新道/秋岡勘兵衛,佐藤又八郎	21間5尺6寸/11間2尺4寸	正徳4.3.晦	宝永1.- 家宣に従い出仕→同2.- 西丸土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
64	小石川御殿地跡之内	大島肥前守組	小森加左衛門(政一)	250.0	新道/古橋忠次郎/新道/奥谷半二郎,佐藤又八郎	21間5尺6寸/11間2尺4寸	正徳4.3.晦	猿楽師→宝永2.2.9召出,土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請	
65	小石川御殿跡	大久保大隅守組道中方	与力二人・同心十人	1,600.0	道/小石川御殿地跡/道/道	25間・23間/74間3尺5寸余・64間3尺5寸余	正徳4.4.13	一	与力300坪・同心100坪宛,享保6.6.23上地
66	小石川御殿跡	松平石見守組道中方	与力二人・同心十人	1,600.0	道/小石川御殿地跡/新道/新道	71間2尺2寸・77間1尺2寸余/21間5尺8寸・21間4尺8寸	正徳4.4.13	一	与力300坪・同心100坪宛,享保6.6.23上地
67	小石川御殿地之内	(小普請)	福田辰之助(武成)	250.0	大林源四郎/尾崎伝十郎/榎田作十郎/道	25間2尺6寸/9間5尺	正徳4.6.9	猿楽師→宝永3.4.10父武右衛門召出,御廊下番→同6.2.21土圭間番→正徳3.5.18減員により小普請→同4.5.26辰之助継,小普請	役職・所属は『寛政譜』による
68	小石川御殿跡	大島肥前守組小普請	大河原兵左衛門	200.0	(大久保大隅守組道中方与力同心屋敷/梶山加左衛門/道/道)	(不明)	正徳4.9.5	宝永1.- 家宣に従い出仕,小普請→正徳3.2.5死去,息兵左衛門継,小普請	「屋敷書抜」による,享保6.6.23上地
69	小石川御殿地跡割残り之内	丹波国篠山藩主	松平紀伊守(信庸)	7,000.0	松平石見守組道中方与力同心組屋敷,松平紀伊守預り/御殿地跡割残り/なだれ,道/道	36間3尺,35間・39間3尺,45間3尺/52間,35間,14間・95間	正徳5.1.29	延宝5.2.6継→元禄7.1.18奥詰→同9.10.1近習→同10.4.19京都所司代→正徳4.9.6老中	享保6.上地
70	小石川御殿跡	丹波国篠山藩主	松平紀伊守(信庸)	2,015.0	屋敷統東南折廻し割残帷なだれ		正徳5.1.29		預地,享保6.上地
71	小石川御殿地跡	西丸御切手同心寛五右衛門組	林弥平太	100.0	松平和泉守/道/度会儀右衛門/奥田九八郎,東条金弥,御牧五兵衛,樋口次兵衛	14間4尺/6間4尺9寸余	正徳5.11.2	記載なし	享保6.6.23上地
72	小石川御殿地跡	西丸御切手同心寛五右衛門組	度会儀右衛門	100.0	松平和泉守/道/加藤浅右衛門/林弥平太	14間4尺/6間4尺9寸	正徳5.11.2	記載なし	享保6.6.23上地
73	小石川御殿地跡	西丸御切手同心奥山作左衛門組	加藤浅右衛門	100.0	松平和泉守/道/山田安右衛門/度会儀右衛門	14間4尺/6間4尺9寸余	正徳5.11.2	記載なし	享保6.6.23上地
74	小石川御殿地跡	西丸御切手同心奥山作左衛門組	山田安右衛門	100.0	松平和泉守/道/山内長四郎/加藤浅左衛門	14間4尺/6間9寸余	正徳5.11.2	記載なし	享保6.6.23上地
75	小石川御殿地跡	御広敷伊賀者	山内長四郎	100.0	松平和泉守/道/明地/山田安右衛門	14間4尺/6間4尺9寸余	正徳5.11.2	記載なし	享保6.6.23上地
76	小石川御殿地跡	御天守番	関平十郎	200.0	児島市左衛門,上野武左衛門/塩入又四郎/がけなだれ/道	17間4尺5寸・15間2尺5寸/12間1尺5寸・12間4寸	正徳5.11.2	記載なし	享保6.6.23上地
77	小石川御殿地跡	御天守番	塩入又四郎	200.0	関平十郎/湯浅孫四郎/がけなだれ/道	15間2尺5寸・12間5寸/14間4尺5寸・14間3尺3寸	正徳5.11.2	記載なし	享保6.6.23上地
78	小石川御殿地跡	御天守番	湯浅孫四郎	200.0	塩入又四郎/がけなだれ/がけなだれ/道	12間5寸・8間1尺/19間5尺・23間3尺6寸	正徳5.11.2	記載なし	享保6.6.23上地
79	小石川御殿地跡	欠所物奉行	水谷武助	200.0	新道/明地/道/割残り	13間2尺5寸・13間2尺/15間4尺・14間2尺	正徳5.11.2	記載なし	享保6.6.23上地
80	小石川御殿地跡	富士見御宝蔵番	江口文左衛門	200.0	梶山加左衛門/割残り/道/新道	14間4尺・17間3尺/9間5尺・16間	正徳5.11.2	宝永7.6.23継,御宝蔵番	享保4.11.28松平紀伊守預地,同5.3.20月光院侍高橋七右衛門拝領,同6.6.23上地
81	小石川御殿地跡	富士見御宝蔵番	梶山加左衛門	200.0	大河原兵左衛門/江口文左衛門/道/新道	17間5尺・14間4尺/12間4尺7寸・13間3尺5寸	正徳5.11.2	記載なし	享保6.6.23上地
82	小石川御殿地跡	表火之番	児島市左衛門	200.0	新道/明地/がけなだれ/上野武左衛門	16間5尺2寸・6間1尺2寸/20間3尺・17間2尺	正徳5.11.2	記載なし	享保6.6.23上地
83	小石川御殿地跡	表火之番	上野武左衛門	200.0	新道/明地/児島市左衛門/新道	11間3尺3寸/17間2尺	正徳5.11.2	記載なし	享保6.6.23上地
84	小石川御殿地跡	御代官	野田次郎左衛門(恒利)	450.0	新道/矢部安兵衛,小島九郎右衛門/なだれ/松平和泉守	24間1尺4寸・22間/22間2尺5寸・19間1尺3寸	正徳5.11.4	宝永1.- 家宣に従い出仕,御勘定奉行支配→同3.2.26御代官	享保6.6.22上地
85	小石川御殿地跡	小普請大久保淡路守組	疋田孫太夫(則重)	400.0	新道/平岡岡右衛門/竹村伊右衛門/松平式部少輔	17間4尺・14間4尺/24間4尺・24間5尺5寸	正徳5.11.4	宝永1.- 家宣に従い父七郎左衛門出仕→同1.12.12西丸焼火間番→同3.10.4息孫太夫継,小普請	享保6.6.22上地
86	小石川御殿地跡	御代官	森山又左衛門(宝道)	450.0	真野左門/新道/道/本間藤十郎	18間6寸・20間1尺5寸/21間1尺・28間3尺5寸	正徳5.11.4	宝永1.- 家宣に従い出仕,御勘定→正徳3.6.27御代官	享保6.6.23上地
87	小石川御殿地跡	御勘定	矢部安兵衛(玄忠)	300.0	野田次郎左衛門/新道/小島九郎右衛門/山内長四郎,松平和泉守	12間6寸余・12間6寸余/24間4尺7寸・24間4尺7寸	正徳5.11.4	宝永1.- 家宣に従い出仕,御勘定	享保6.6.22上地
88	小石川御殿地跡	御勘定	小島九郎右衛門(貞範)	300.0	野田次郎左衛門/新道/がけなだれ/矢部安兵衛	9間5尺4寸・8間4尺8寸/27間1尺5寸・24間4尺7寸	正徳5.11.4	宝永1.- 家宣に従い出仕,御勘定	享保6.6.22上地
89	小石川御殿地跡	表御右筆	竹村伊右衛門(嘉通)	400.0	新道/平岡岡右衛門/道/疋田孫太夫	18間1尺4寸・17間2尺/25間2尺・24間4尺	正徳5.11.4	宝永1.- 家宣に従い出仕→同1.12.18西丸表右筆	享保6.6.22上地
90	小石川御殿地跡	伊勢国亀山藩主	松平和泉守(乗邑)	1,000.0	新道/林弥平太,度会儀右衛門,加藤浅右衛門,山田安右衛門,山内長四郎/野田次郎左衛門,矢部安兵衛/岩田小太郎,斎藤四郎兵衛,奥田九八郎,東条金弥,御牧五兵衛	34間6寸・34間6寸/29間2尺	正徳5.11.4	元禄3.11.10継	本所中屋敷代地,享保6.上地
91	小石川御殿地跡	大御番戸田土佐守組	山本藤左衛門(親成)	400.0	杉浦数馬/新道/道/大津喜三郎	13間・12間5尺5寸/30間4尺5寸・27間4尺5寸	正徳5.11.5	宝永1.- 家宣に従い出仕→同2.12.12西丸焼火間番→同6.10.29廃止により大番	享保6.6.22上地

番号 No.	場所	役職・所属	名前(諱)	坪数 (坪・合)	隣接(東/西/南/北)	間数(東・西/南・北)	年・月・日	略歴(『寛政重修諸家譜』による)	備考
92	小石川御殿地跡	御書院番戸田備後守組	真野左門(正陳)	500.0	八重盛新次郎, 戸田徳左衛門 / 本間藤十郎, 森山又右衛門 / 道 / なだれ	33間4尺・33間5尺 / 14間4尺9寸	正徳5.11.5	宝永1.- 家宣に従い父五郎左衛門出仕, 小普請→同4.7.27左門継→同4.12.4西丸焼火間番→同6.10.29廃止により大番→正徳1.7.18桐間番→同3.5.18廃止により書院番	享保6.6.22 上地
93	小石川御殿地跡	大御番太田隠岐守組	戸田徳左衛門(直栄)	400.0	道 / 真野左門 / 八重盛新次郎 / なだれ	19間2尺・18間2尺 / 25間・18間4尺1寸	正徳5.11.5	宝永1.- 家宣に従い出仕→同1.12.12焼火間番→同6.10.29廃止により大番	享保6.6.22 上地
94	小石川御殿地跡がけなだれ	(小普請組)	本間藤十郎・真野左門・戸田徳右衛門・児島市左衛門・関平十郎・塩入又四郎・湯浅孫四郎	1,392.0	新道 / 新道 / 戸田徳左衛門, 真野左門, 本間藤十郎 / 児島市左衛門, 関平十郎, 塩入又四郎, 湯浅孫四郎	20間・24間3尺 / 68間3尺・67間2尺	正徳5.11.5	一	預地, 本間・真野・戸田分は他4人へ預け, 享保6. 上地
95	小石川御殿地跡	大御番岡野備中守組	大津喜三郎(政勝)	400.0	杉浦数馬 / 新道 / 山本藤左衛門 / がけなだれ	14間4尺・19間4尺5寸 / 27間4尺5寸・26間2尺5寸	正徳5.11.5	宝永1.12.12家宣に従い出仕, 西丸焼火間番→同6.10.29廃止により大番	享保6.6.22 上地
96	小石川御殿地跡がけなだれ	(小普請組)	小島九郎右衛門・野田治郎左衛門・大津喜三郎・杉浦数馬	588.4	がけなだれ, 稲荷地, がけなだれ / 道 / 大津喜三郎, 杉浦数馬	16間・15間2尺 / 40間2尺・37間5尺	正徳5.11.5	一	預地, 享保6. 上地
97	小石川御殿地跡	大御番本多因幡守組	八重盛新次郎(政春)	400.0	新道 / 真野左門 / 道 / 戸田徳左衛門	14間4尺・15間2尺 / 29間4尺1寸・25間	正徳5.11.5	宝永1.- 家宣に従い父六右衛門出仕, 小普請→同2.10.晦新次郎継, 小普請→同4.12.4西丸焼火間番→同6.10.29廃止により大番	享保6.6.22 上地
98	小石川御殿地跡	御書院番三浦肥前守組	平岡右衛門(道■=加の下に可)	500.0	竹村伊右衛門, 疋田孫太夫 / 割残り / 道 / 松平式部大輔	32間・34間3尺 / 15間5寸・15間1尺	正徳5.11.5	宝永1.12.12家宣に従い出仕, 西丸焼火間番→同6.10.29廃止により大番→正徳1.7.18桐間番→同3.5.18廃止により書院番	享保6.6.22 上地
99	小石川御殿地跡	御書院番戸田備後守組	杉浦数馬(勝誉)	500.0	水谷武助, 割残り / 大津喜三郎, 山本藤左衛門 / 道 / なだれ	27間2尺・27間4尺 / 20間1尺5寸・16間5寸	正徳5.11.5	宝永1.12.12家宣に従い出仕, 西丸焼火間番→同5.10.19西丸御小納戸番→正徳1.7.18桐間番→同3.5.18廃止により書院番	享保6.6.22 上地
100	小石川御殿地跡	御書院番稲葉若狭守組	本間藤十郎(時勝)	500.0	真野左門 / 新道 / 森山又左衛門 / がけなだれ	15間4尺4寸・17間4尺5寸 / 28間3尺5寸・35間	正徳5.11.5	宝永1.12.12家宣に従い出仕, 西丸焼火間番→同5.12.19西丸御小納戸番→本丸勤→正徳1.7.18桐間番→同3.5.18廃止により書院番	享保6.6.22 上地
101	小石川元御殿地之内稲荷地	小石川戸崎町名主・小石川伝通院領名主	弥次右衛門・小兵衛	90.0	新道 / なだれ / なだれ86坪8合 / なだれ11坪8合	7間2尺・7間 / 13間5尺4寸・11間5尺	正徳5.11.4・14	一	稲荷引き移しに伴い預地, 計188.6坪, 正徳6.3.9両者拝領, 享保6. 上地
102	小石川元御殿地之内なだれ			86.8	新道 / なだれ / 割残 / 稲荷地	5間・8間 / 15間1尺5寸・13間5尺4寸			
103	小石川元御殿地之内なだれ			11.8	新道 / なだれ / 稲荷地 / 野田次郎左衛門	1間1尺・1間 / 11間5尺			
104	小石川御殿地跡(割残り之内)	二丸張番	磯六左衛門	200.0	新道 / 山崎金左衛門 / 道 / 山川弥市郎	13間1尺・10間4尺3寸 / 18間1尺8寸・18間1尺4寸	正徳6.2.18	記載なし	享保6.6.22 上地
105	小石川御殿地跡(割残り之内)	御書院番三浦肥後守組	山川弥市郎(忠盈)	500.0	蔭山外記, 新道 / 山崎金左衛門, 山寺治兵衛, 新道 / 磯六左衛門 / 酒井修理大夫	27間, 3間4尺8寸・24間4尺8寸 / 18間1尺4寸, 2間1尺7寸・20間3尺1寸	正徳6.2.18	元禄3.3.29綱吉召出, 桐間番→同3.5.18御小性→同4.7.2辞, 小普請→同5.3.18書院番→同8.8.14辞→正徳3.3.19書院番	享保6.6.22 上地
106	小石川御殿地跡(割残り之内)	御書院番阿部遠江守組	日向織部(正平)	500.0	平岡甚右衛門 / 蔭山外記 / 道 / 松平式部大輔	34間3尺・36間1尺5寸 / 12間2尺2寸・16間8寸	正徳6.2.18	慶安3.9.3父伝三郎家綱召出, 西丸小性組→本丸勤→辞, 小普請→貞享3.12.10織部継→元禄14.4.23書院番	享保6.6.22 上地
107	小石川御殿地跡(割残り之内)	小十人長田新右衛門組	千村八郎左衛門(義道)	295.0	山崎金左衛門 / 道 / 道 / 秋山源右衛門	17間4尺8寸・18間1尺 / 15間1尺・19間1尺7寸	正徳6.2.18	父義年綱吉に出仕, 書院番→延宝8.- 松平徳松に従い西丸出仕→天和3.- 徳松没により小普請→貞享3.3.21桐間番→同3.6.11御小納戸→同3.6.23落度により預→元禄9.5.24赦免→同10.4.20召出, 小普請→宝永1.6.11小十人	享保6.6.22 上地
108	小石川御殿地跡(割残り之内)	小十人長田新右衛門組	山崎金左衛門(弘矩)	300.0	磯六左衛門 / 千村八郎左衛門 / 道 / 山寺治兵衛	17間4尺8寸・17間4尺8寸 / 17間6寸・17間6寸	正徳6.2.18	仙洞附与力→柳沢吉保領川越に住→二丸火番→宝永2.10.13小十人	享保6.6.22 上地
109	小石川御殿地跡(割残り之内)	小十人小笠原七右衛門組	秋山源右衛門(道政)	295.0	山寺治兵衛 / 道 / 千村八郎左衛門 / 新道	15間2尺3寸・21間1尺6寸 / 16間5尺4寸・21間1尺6寸	正徳6.2.18	正保2.6.28父十郎右衛門家綱附属御納戸番→同2.9.9本丸勤→慶安1.9.26綱吉附属, 三丸小納戸→慶安4.- 勘気を蒙り取公・蟄居→元禄13.5.20召出, 小普請→同16.12.18源右衛門継→宝永2.10.13小十人	享保6.6.22 上地
110	小石川御殿地跡(割残り之内)	小十人伊予田新左衛門組	山寺治兵衛(信映)	300.0	山川弥市郎 / 秋山源右衛門 / 千村八郎左衛門, 山崎金左衛門 / 新道	15間2尺3寸 / 19間3尺	正徳6.2.18	慶安3.9.29祖父光忠綱吉に附属, 神田館先手弓頭→延宝8.- 松平徳松に従い祖父・父信忠西丸へ出仕→天和3.- 徳松没により両者小普請→元禄7.⑤.9父信忠小十人→同13.12.9治兵衛継→同14.6.11小十人	享保6.6.22 上地
111	小石川御殿地跡(割残り之内)	大御番稲垣長門守組	蔭山外記(広丈)	400.0	日向織部 / 新道, 山川弥市郎 / 道 / 松平式部大輔, 酒井修理大夫	36間1尺5寸・36間 / 11間3寸・11間3寸	正徳6.2.18	宝永1.12.12家宣に従い出仕, 焼火間番→同6.10.29廃止により大番	享保6.6.22 上地
112	小石川御殿地跡(割残り)	大御番岡野備中守組	赤井万右衛門(恒道)	324.0	江口文左衛門 / 道 / 道 / 道	17間3尺・22間 / 17間・16間1尺	正徳6.3.9	父通忠綱吉に出仕, 御小性→延宝8.- 松平徳松に従い西丸出仕→天和3.- 徳松没により小普請→元禄12.7.6万右衛門継→宝永5.4.3大番	享保6.6.22 上地
113	小石川御殿地跡(割残り)	法心院殿御広敷添番	小泉文六郎	183.0	道 / 杉浦数馬 / 水谷武助 / がけなだれ	12間5尺5寸・14間 / 14間2尺・13間5寸	正徳6.4.7	記載なし	享保6.6.23 上地

※本表の記述は概ね『市史稿』市街18-238・285～88・90～94・96～99・337～38・387・428・510～11・595～610・632・681～87・739・749所収「屋敷渡預絵図証文」に基いている

※「略歴」は屋敷拝領までの経歴である

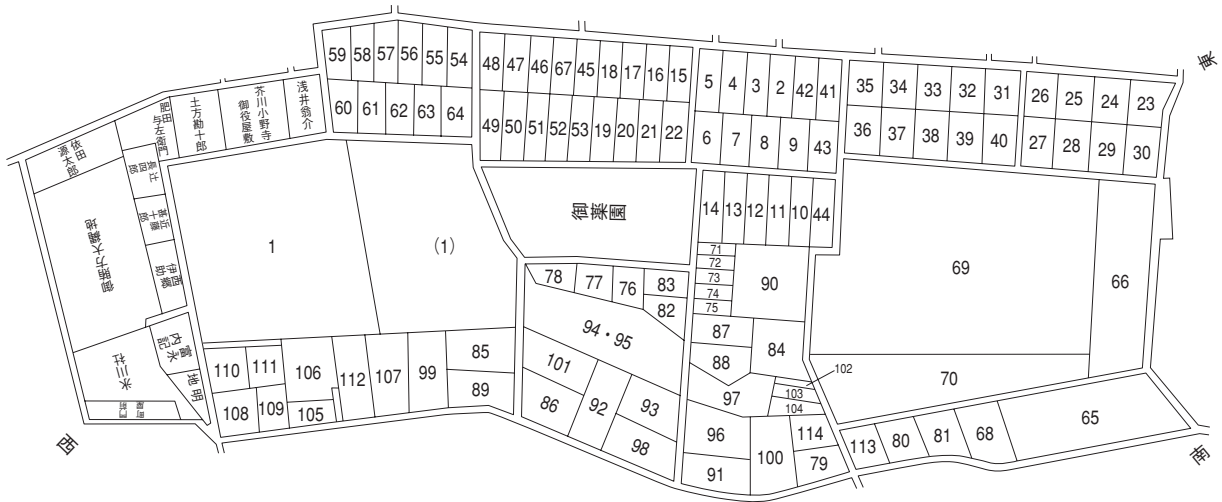


図8 「沿革図書」のうち「正徳四午年・同五未年・同六申年之形」  
(数字は表2のNo.に対応)

として与えられたものであろう。なお11月4日には伊勢亀山藩主松平和泉守乗邑(No.90)へも1,000坪下賜されたが、これは本所中屋敷を返上した代地であった。

同年にはまた、幕臣へ27件の下賜があったが、このうち11月4・5日の拝領者14名(No.84～89・91～93・95・97～100)は、家宣の甲府からの随従者という出自の共通性が見出される。前年の幕臣たちとは対象的に、ほとんどが何らかの役職に就いており、とりわけNo.84～89は、幕府中枢で実務を担い活躍する官僚たちであった。例えば竹村伊右衛門(No.89)は正徳元(1711)年の朝鮮通信使来日に関する記録作成を命じられた右筆5名のうち選ばれた者、また野田次郎左衛門・森山又左衛門・小島九郎右衛門(No.84・86・88)は、当時推進されていた年貢増徴策を担い、巡見使として諸幕領に派遣された能吏であった<sup>(46)</sup>。

翌正徳6年の10件はすべて幕臣へ下賜であった。前年までのように、何らかの傾向が顕著に見られるようなことはないが、出仕の契機が綱吉にまつわる者が多く(No.105・107・108・109・110・112)、その他は家宣に随従して幕臣化した者(No.111)だったという点は、前年までを継ぐものだったということではできよう。

#### 御殿地跡下賜の経過と土地配分

表2の番号を、「沿革図書」「正徳四午年・同五未年・同六申年之形」の対応する屋敷地に記入した(図8)<sup>(47)</sup>。これによれば、北側、短冊状の64筆の屋敷地はすべて正徳4年に小普請が拝領したところ、そして南側中央部周辺は正徳5年に、西南角部は同6年に、それぞれ幕臣に下賜された敷地であることがわかる。図8は一見して、北と南の地割に非常な相異が認められるが、これは既出図2と比較すれば、地形に由来することが一目瞭然である。すなわち、北側は高台の平坦地で規則的な地割が可能だが、一方南側は、崖なだれ(急傾斜地)とその上下の地所で、しかも西南角部は大きな池に占められたため、不規則・不定形な屋敷割にならざるを得なかったと理解される。

以上の地形を下賜の経過に照らすと、まず比較的條件のよい北側から、小普請たちへ配分されたことがわかる。また酒井修理大夫・松平紀伊守ら大名、および幕府の「御薬園」には、一部南側に傾斜地が懸るものの、大部分が崖上で平坦な地勢のよい場所が宛がわれたことも明らかになる。次いで、南側のうちで比較すれば条件の良い中央部の崖上、崖下と分配された。そして最後に西南角の地、表2の「場所」欄にいう「割残り」の地が振り分けられた。なおNo.112・113は、地形的条件は比較



的良いが坪数が半端であったため、役職に応じた「格坪」という拝領屋敷の坪数規定に合わず下賜しにくく、残されていたものと思われる<sup>(48)</sup>。No.112は大番の格坪400坪を大きく下回っており、No.113も広敷添番の規定200～250坪に満たない坪数であった。

## (5) 小石川薬園期

### 小石川薬園の拡張

享保6(1721)年6月22・23日に小石川御殿地跡の幕臣屋敷46筆、さらに同月のうちに酒井修理大夫・松平(柳沢)式部少輔・松平和泉守・松平紀伊守の各下屋敷、その他預地などが召し上げられた<sup>(49)</sup>。表3「享保6年6月小石川御殿地跡上地者一覧」に、上地対象となった屋敷地所有者の役職・所属、名前、坪数と、各々に対応した表2の番号をまとめた。この表によれば、上地となった屋敷地はNo.1・10～14・44・65・66・68～113で、これを図8で確認すると、御殿地跡のうち、北側短冊状の屋敷地5区画を除くほぼ全域にわたっていたことが判明する。これらの総坪数3万8,481坪に、屋敷地間の道敷を含めた約4万坪余が、いちどきに幕府に収公されたのである。

一帯が召し上げられたのは、薬園を拡張するためだったとみられる。前述のように、この地における薬園は、貞享元年、麻布南薬園が小石川御殿に移設されたことに始まり、それから一時縮小したが、正徳元年には白金御殿から移った花畑が併設されて再び拡張した。その後、小石川御殿の廃止に伴って2,800坪に減坪するものの、薬園は存続していた(図8参照)。そして享保2(1717)年4月12日には、松平(柳沢)式部少輔屋敷の東部2,000坪が添地されて、薬園地は4,800坪にまで広がっていたのである<sup>(50)</sup>。これはおそらく、8代将軍徳川吉宗が就任後、薬種の国産化を奨励するようになったため、特に享保6年は、幕命により対馬藩が初めて生品の朝鮮人参を朝鮮から移入、献上し、幕府はこれを小石川薬園に移植して、国産化のために栽培に乗り出した年であった<sup>(51)</sup>。小石川薬園はその拠点と位置づけられて、同年のうちに拡張が図られたものと考えられる。

小石川御殿地跡の武家地収公から約2ヶ月後、享保6年8月17日、幕府は小普請酒井大学支配岡田利左衛門安忠と小石川御薬園御花畑御用芥川小野寺元風に対して、この明地を薬園とするため、両者申し合せて惣囲いの藪植付けと地形を行うよう指示した<sup>(52)</sup>。そして同年12月27日、岡田が「小石川御薬園御用」(御薬園奉行)に任命されて、芥川が管理してきた既存の薬園4,800坪余と、新規に薬園地とされた約4万坪、都合約4万4,800坪余をほぼ半分ずつ、具体的には岡田へは2万1,642坪、芥川へは既存薬園を含む2万2,558坪が、それぞれ幕府より預けられることになった<sup>(53)</sup>。

この土地の正式な授受手続きは、翌享保7(1722)年10月16日になってから行われた。この間岡田預地では、5月19日に同人が役屋敷地1,092坪を拝領、8月17日には施薬院屋敷(小石川養生所)として1,000坪が町奉行に引き渡されていた<sup>(54)</sup>。したがって岡田に当初預けられることになっていた坪数から両度減坪された2,092坪を差し引いた1万9,550坪が、預地として幕府から渡された。一方芥川には、従来預ってきた薬園(内薬園)4,800坪余に加えて、新たに1万7,800坪が渡されて(外薬園)、預地は総計2万2,558坪となった<sup>(55)</sup>。

両者への敷地割は、「屋敷渡預絵図証文附図」(図10)にみるとおり、薬園地のほぼ中央を南北に走る道敷(「切通シ新道」)を隔てて二分され、その東側が岡田利左衛門へ、西側が芥川小野寺へ、それぞれ割り当てられた。なおこのとき「切通シ新道」が半ば少し南、施薬院下から西方に屈曲して造られたのは、ここが崖なだれ地に当ることからすると、施薬院へ往来する傷病人たちを配慮して急坂を緩くしたものであろう。この坂道は当初「鍋わり坂」と名付けられたが、養生所門前にあったことから「病人坂」と俗称されるようになったということである<sup>(56)</sup>。

表3 享保6年6月小石川御殿跡上地者一覧

日	役職・所属	名前(諱)	坪数 (坪・合)	表2No.	備考	
22日	小普請酒井大学支配	林忠五郎	300	87	もと矢部安兵衛屋敷	
	小普請松前伊豆守支配	千村八郎左衛門(義道)	295	107		
	小普請酒井大学支配	磯六左衛門	200	104		
	小普請大嶋肥前守支配	樋口次兵衛(政常)	250	14		
	小普請酒井大学支配	平岡岡右衛門(道■)	500	99	■=加の下に可	
	小普請石川兵庫支配	蔭山外記(広丈)	400	111		
	小普請青木右衛門支配	大津喜三郎(政勝)	400	95		
	小普請瀧川讃岐守支配	本間助九郎(政時)	500	100	前代は藤十郎時勝	
	小普請大嶋肥前守支配	斎藤四郎二郎	250	10		
	小普請酒井大学支配	岩田小太郎(明高)	250	44		
	小普請大嶋肥前守支配	御牧五兵衛(昌忠)	250	13		
	小普請大嶋肥前守支配	奥田九八郎(雅之)	250	11		
	小普請大嶋肥前守支配	東条金弥(道潔)	250	12		
	小普請瀧川讃岐守支配	日向織部(正平)	500	106		
	小普請金田周防守支配	山川弥市郎(忠盈)	500	105		
	小普請伊丹覚左衛門支配	疋田五郎太夫(正寿)	400	85	前代は孫太夫則重	
	小十人石丸五左衛門組	野田庄三郎(金成)	450	84	前代は次郎左衛門恒利	
	大御番水野壹岐守組	赤井万右衛門(恒道)	324	112		
	新御番武田与左衛門組	山寺治兵衛(信映)	300	110		
	小十人押田伝左衛門組	秋山源右衛門(道政)	295	109		
	大御番太田隠岐守組	戸田徳右衛門(直栄)	400	93		
	御書院番松平駿河守組	杉浦数馬(勝誉)	500	99		
	御書院番松平駿河守組	真野左門(正陳)	500	92		
	大御番本多因幡守組	八重盛新次郎(政春)	400	97		
	小十人山岡五郎作組	山崎金左衛門(弘矩)	300	108		
	御勘定方	小島九郎右衛門(貞範)	300	88		
	表御祐筆	竹村伊右衛門(嘉通)	400	89		
	大御番松平下野守組	山本藤左衛門	400	91		
23日	小普請大久保淡路守組	大河原兵左衛門	200	68		
	小普請大久保淡路守組	川西安右衛門	450	86	もと森山又右衛門屋敷	
	元御台所組頭五郎左衛門惣領	神谷伝左衛門	200	78	もと湯浅孫四郎屋敷	
	小普請大久保淡路守組	関平十郎	200	76		
	小普請大久保淡路守組	上野左太夫	200	83	前代は武左衛門	
	法心院殿御広敷添番	小泉文六郎	183	113		
	欠所物奉行	水谷武助	200	79		
	御徒目付	児島市左衛門	200	82		
	御天守番	塩入左市郎	200	77	前代は又四郎	
	富士見御宝蔵番	梶山加左衛門	200	81		
	月光院様御侍	高橋七右衛門	200	80	もと江口文左衛門屋敷	
	法心院殿御広敷伊賀	山内長四郎	100	75		
	西丸切手御門番頭奥山作左衛門組	山田安右衛門	100	74		
	西丸切手御門番頭奥山作左衛門組	加藤浅右衛門	100	73		
	西丸切手御門番頭疋田新九郎組	林弥平太	100	71		
	西丸切手御門番頭疋田新九郎組	度会儀右衛門	200	72		
	彦坂壹岐守組道中方	与力2人・同心10人	1,600	65	もと大久保大隅守組	
	寛播磨守組道中方	与力2人・同心10人	1,600	66	もと松平石見守組	
	不明	若狭小浜藩主	酒井修理大夫(忠音)	4,336	1	内2,860坪崖なだれ
		甲斐甲府新田藩主	松平(柳沢)式部少輔(時睦)	5,664		
山城淀藩主		松平和泉守(乗邑)	1,000	90	もと伊勢亀山藩	
丹波篠山藩主		松平紀伊守(信岑)	9,015	69・70	70は預地	
(小普請)		本間助九郎ら7名	1,392	95	預地	
(小普請)		小島九郎右衛門ら4名	588	97	預地	
小石川戸崎町名主・小石川伝通院領名主		弥次右衛門・小兵衛	90	101		
		87	102			
		12	103			
坪数合計			38,481			

※『東京市史稿』市街篇第20、138～48頁・表2「正徳4～6年小石川御殿跡拝領者一覧」より作成

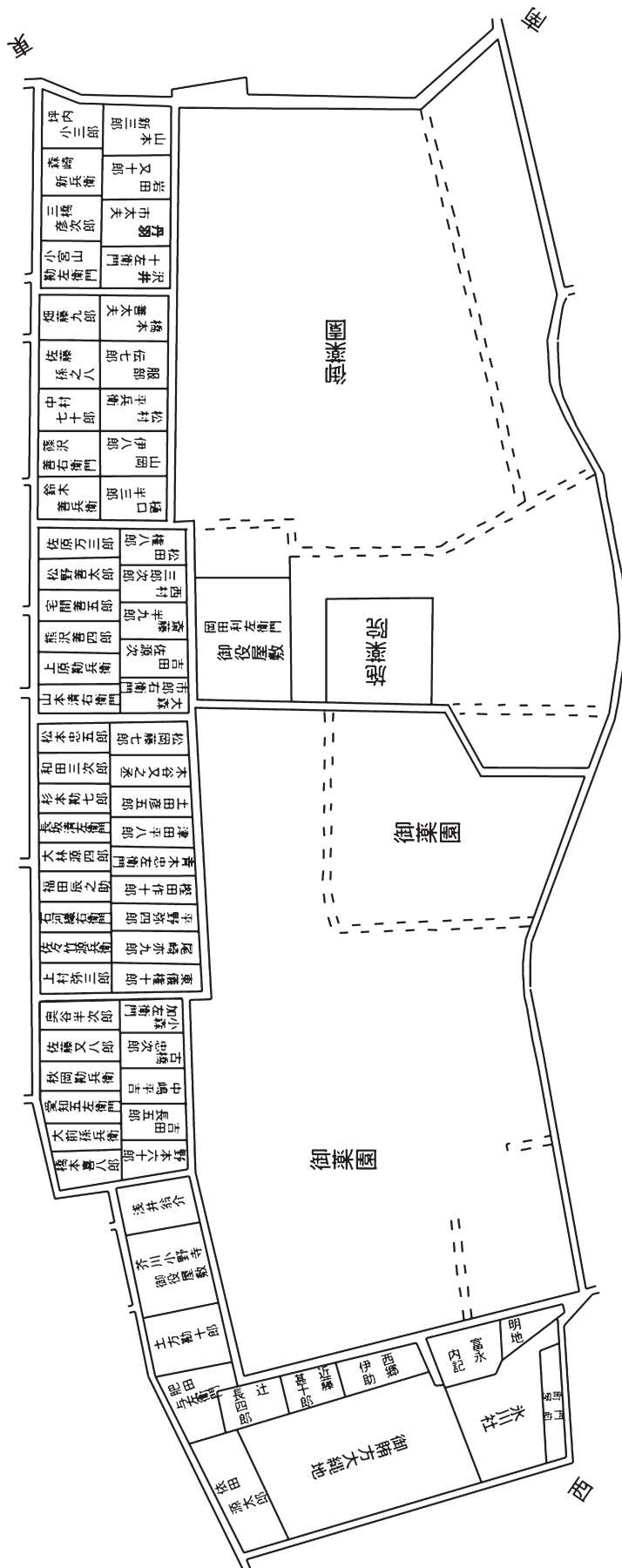


図9 「沿革図書」のうち「享保七寅年之形」



図10 「屋敷渡預絵図証文附図」(享保7年)



図11 「小石川御薬園絵図」(享保7年)

### 薬園の様相と土地利用

薬園の様相や土地利用のあり方について、いくつかの絵図から整理してみる。まず拡張から間もない享保7年作成の「小石川御薬園絵図」（図11）からみてみよう<sup>(57)</sup>。注目されるのは、薬園を圍繞する杉並木である。絵図左下の書き込みによれば、「外内御園杉並木数」は岡田・芥川両預地合せて5,458本とある。岡田預地の「御園杉並木惣数」は「四方合」せて2,571本で、北・東・南の敷地境に、順に545本と223本・402本・881本が植えられていたことがわかる。西側に本数の記入はないが、並木は四方を廻っていたことから、その総数から北・東・南三方の計2,051本を差し引いて、520本が植えられたとみられる。一方芥川預地には「新御園杉並木惣数」2,249本、北・東・南・西、四方の敷地境に各499本・440本・765本・506本とある。この合計2,210本は「新御園杉並木惣数」と多少齟齬するが、いずれにしても、これが芥川預地のうち新規預地、すなわち外薬園の囲いとして、新たに植樹された本数であろう。「有来御薬園」、つまり内薬園には本数の記入が一切ないが、「外内御園杉並木数」とは、内薬園の囲杉並木をも含む言いまわしと解され、旧来、杉並木が廻っていたと考えられる。岡田・芥川両預地の新規並木数4,820本を除いた638本が、内薬園周りの杉並木の数だったとみられる。

次に、文化3～天保4（1806～33）年の様相と推定される芥川預りの薬園絵図によれば、杉並木の内側に竹類の藪があることがわかる<sup>(58)</sup>。既述のように、享保6年8月、明地を薬園とするにあたり、幕府が岡田・芥川に最初に命じたのは惣囲いの藪を植え付けることであつたが、同図からこれが実際に行われたことが裏付けられる。藪は杉並木と薬草木の畑との間を埋めるようにあり、場所や用途によって何種類かの竹が植え分けられている。ただし藪を設けていないところもあつて、杉並木と異なり薬園全体を圍繞するものではなかったようである。もうひとつ同図からは、杉並木の外側、敷地の境界線上に、塀や垣根・矢来が設置されていたことも明らかになる。この当時の芥川預地では、境を接する南側武家地との間には矢来、東側の御成門脇は「朝鮮垣」と呼ばれる竹矢来、北側東寄りには黒板塀、同西寄りから西側へ折廻しは垣根と、場所によって形態や材質を使い分けている。杉並木は防風や保温のために植樹されたといわれているが、これに加えて竹藪を植えたり、矢来や塀の種類を場所に応じて選ぶことによって、薬園の内部環境を調節していたのであろう。

預地内部に目を向けると、概ねは地形に応じた土地利用がなされていたことが窺われる。芥川預地の場合、享保末年ころの作成とされる絵図によれば、北側の平坦地は、数100坪ずつ矩形に区画された畑が、比較的整然と占めているが、その南側、崖なだれ地は藪、あるいは竹や小笹が生茂る原地で、さらに南側の崖下は、畑と、薬木・御用木の植溜や藪が入り組んだ状態である。岡田預地もほぼ同様に、寛政期（1789～1801）ころの絵図によれば、北半は全体的に畑地で、崖なだれ地は大部分が藪や荒地であり、崖下は一部畑に利用されて、そのほかは薬木の植溜が占めるといった状態であつた<sup>(59)</sup>。芥川が記すところによれば、薬草木・御用木の植溜は、石・瓦・小砂が多くて深く掘ることのできない、畑にならないような場所を宛てているといい、地質によっても土地利用が制限される場合があつたことが判明する<sup>(60)</sup>。

## (6) 小石川薬園および武家屋敷地期

### 薬園の一部再武家地化

延享5（寛延元・1748）年5月28日、大岡出雲守忠光が、岡田利左衛門預薬園地のうち施薬院南側に下屋敷地2,200坪と崖なだれ地900坪の計3,100坪を、高井兵部少輔信房が、芥川小野寺預地のうち西南角部に下屋敷地2,200坪と崖なだれ地1,100坪の計3,300坪を、それぞれ拝領した。さ

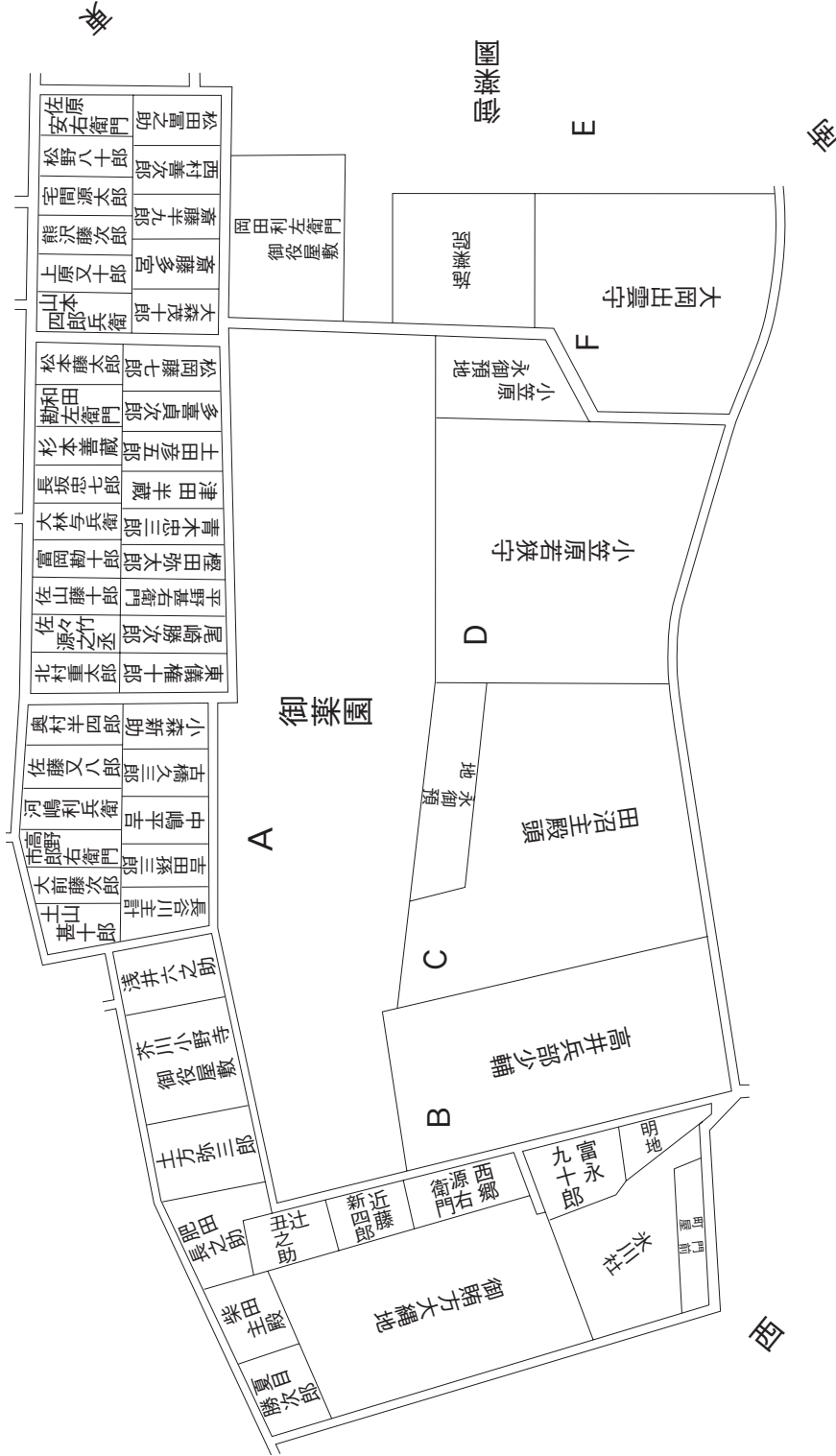


図 12 「沿革図書」のうち「宝曆二申年之形」  
(アールファアベットの表4・5に対応)

らにこの約4年後、宝暦2(1752)年4月9日には、小笠原若狭守信善が、大岡下屋敷の道敷を隔てた西側、芥川預地に下屋敷地2,000坪と崖なだれ地1,800坪の計3,800坪を拝領して、その東隣300坪余も永預地とし、同時に田沼主殿頭意次が、小笠原屋敷西隣の芥川預地に下屋敷地2,000坪と崖なだれ地1,800坪の計3,800坪を拝領して、北接の700坪余も永預地とした<sup>(61)</sup>。この結果、「沿革図書」「宝暦二申年之形」(図12)にみるとおり、薬園地南半部の西から中央部、計1万5,000坪余が再び武家地となったのである<sup>(62)</sup>。

拝領者のうち、大岡忠光は9代将軍徳川家重の側用人を勤め、その不明瞭だった言語を唯一解した人物として、また田沼意次は側用人・老中を歴任して、宝暦～天明期に「田沼時代」を現出したことで、両者とも後々著名になる人物だが、小石川の下屋敷地拝領までは、他の2名も含めて、みな幕臣で、しかもほぼ同様の経歴を有していた。すなわち9代将軍徳川家重に、その世子時代から御小性として勤仕して、延享2(1745)年9月1日の将軍襲職に伴い本丸勤めに転じて御小性組番頭格を経て、大岡と高井は延享3(1746)年10月25日に、小笠原と田沼は寛延4(宝暦元・1751)年7月18日に、いずれも家重の側衆に就任した。そして就任時には、大岡と小笠原は1,200石ずつ、高井と田沼は1,400石ずつと、大幅な加増を受けて全員が高2,000石になった<sup>(63)</sup>。また特に大岡・高井・田沼の3名は、側衆のうちでも将軍の特別な御用を扱う、いわゆる「御側御用取次」を勤めたのである<sup>(64)</sup>。

4名は、まず側衆に就任した直後に居屋敷が替地または添地されて2,500坪に拡大した。これはいわゆる「格坪」に応じたものと考えられる。大岡と高井は延享3年11月7日に、田沼と小笠原は寛延4年8月19日に、新たな屋敷地を受け取っている。大岡は四谷塩町613坪から田安門外2,500坪に替地となり、高井は表六番町に600坪、田沼は小川町に600坪、小笠原は表六番町に900坪と、それぞれ居屋敷に添地を拝領して都合2,500坪とされた<sup>(65)</sup>。4名とも、この時点では他に屋敷を所持しておらず、追って役職や石高の格式に見合うよう、下屋敷が下賜されることになったのであろう。そしてこのときにも、居屋敷同様、同時に同等の下屋敷が与えられたものと考えられる。

各屋敷地とも、内部の土地利用については明らかにならない。崖なだれ地や池が大きな部分を占めることから、これを活かした庭園を設けたり、あるいは幕閣となって増加したであろう家臣団を収容する長屋を設置するなどの利用がなされたことは想定されよう。

#### 薬園南側武家地の土地利用

再び武家地とされた1万5,000坪の、これ以後の土地利用についてみておこう。この範囲で行われた相対替の記録をまとめたのが、表4「薬園南側武家地相対替一覧」である。これによれば、屋敷割については、大岡・高井・田沼・小笠原へ下賜されたときから幕末まで踏襲されて、順に「小石川御薬園脇」(Fとする、以下同)・「小石川白山御殿跡」(B)・「小石川御薬園下」(C)・「小石川御薬園前」(D)、と呼び分けられるようになったことがわかる。さらにこの表4に基き、屋敷地ごとに所有者の移り変わりを整理して、表5「小石川薬園屋敷地所有者変遷」を作成した。屋敷地により変遷の様相は区々だが、B・Dは高井・小笠原が拝領して以来、それぞれが大部分を所持し続けており、Cは途中相対替による切坪や所有者の交代を経たが最終的には再び一屋敷地となり、またFについては分割されることはなかったが、所有者が10～20数年ほどで比較的頻繁に入れ替わったことがわかる。

#### 薬園の大幅縮小

薬園は、宝暦2年4月までに、一部が武家地に転換させられたことにより、岡田預地は1万6,450坪、芥川預地は1万658坪、総坪数では2万7,108坪となって、以前の6割にまで縮小した。

嘉永7(安政元・1854)年8月13日、伊予今治藩主松平駿河守勝道が、岡田利左衛門預りの薬園地1万6,000坪余を下屋敷として拝領することが決まった。これは下高輪下屋敷が上地された代地

表4 菜園南側武家地相対替一覧

場所	年(西暦).月.日 [市史稿巻数・頁]	対象屋敷地および坪数	相対替先
B	明和3(1766).8.14 [27-307]	高井兵部少輔小石川拝領下屋敷のうち600坪	吉里次郎吉(信孟)
		表六番町横町榑原五郎左衛門屋敷600坪	高井兵部少輔(錦房)
		表六番町吉里次郎吉拝領屋敷540坪	榑原五郎左衛門(忠庶)
	安永3(1774).7.3 [28-426]	吉里主水拝領屋敷小石川白山御殿跡600坪	御留守居高井土佐守(直熙)
		高井土佐守拝領下屋敷四谷代々木村2,000坪のうち300坪	小普請組有馬采女組吉里主水(信豊)
C	宝暦4(1754).閏2.16 [26-92~93]	元矢之倉大川端谷田又四郎拝領屋敷200坪	御側衆田沼主殿頭(意次)
		元矢之倉大川端木村孫八郎拝領屋敷300坪	
		小石川御菜園下田沼主殿頭拝領下屋敷のうち200坪	御勘定谷田又四郎
		小石川御菜園下田沼主殿頭拝領下屋敷のうち300坪	小普請組田中出羽守支配青柳大八
		小日向築地青柳大八拝領屋敷350坪	小普請組横山内記支配木村孫八郎
	宝暦12(1762).閏4.11 [26-797]	田沼主殿頭下屋敷小石川御菜園1,500坪余外1,800坪程泉水なだれ700坪程永預地	松平右京大夫(輝高)
		松平右京大夫下屋敷芝三田汐見坂1,700坪	阿部飛騨守(正充)
		阿部飛騨守中屋敷蛸殻町7,237坪余のうち3,999坪余	田沼主殿頭(意次)
	明和8(1771).8.17 [27-972]	小栗源五郎拝領屋敷本所林町三丁目300坪	元方御金奉行谷田又四郎(正則)
		谷田又四郎拝領屋敷小石川御菜園下200坪	小普請組青木主馬支配小栗源五郎
	安永5(1776).12.24 [28-821]	早川丹平拝領屋敷小石川諏訪町新道250坪余のうち150坪	青柳半右衛門
		青柳半右衛門拝領屋敷小石川御菜園下300坪	小普請組石川土佐守支配早川丹平(政茂)
	安永8(1777).2.12 [29-97]	稲垣摂津守拝領屋敷深川海手5,000坪外土手上平地なだれ共848坪預地	松平右京大夫(輝高)
		松平右京大夫拝領下屋敷小石川御菜園1,500坪外1,800坪程泉水なだれ900坪余永預地	稲垣摂津守(長以)
	享和2(1802).7.12 [33-166]	柳沢六郎左衛門拝領屋敷市谷七軒町980坪余	稲垣信濃守(長統)
		稲垣信濃守拝領下屋敷小石川御菜園下3,300坪のうち3,150坪外900坪余永預地	西丸御側衆蛭川相模守(親文)
		早川丹平拝領屋敷小石川御菜園下300坪	
		蛭川相模守拝領下屋敷四谷内藤新宿2,000坪のうち700坪	大御番松平丹後守組松村左兵衛(時展)
蛭川相模守拝領下屋敷四谷内藤新宿2,000坪のうち50坪		小普請組本多兵庫支配早川丹平(政茂)	
文化3(1806).8.2 [33-601]	松村左兵衛拝領屋敷四谷仲町300坪	小普請小笠原若狭守支配柳沢六郎左衛門(政位)	
	松前五郎次郎拝領屋敷四谷塩町284坪余	稲垣信濃守(長統)	
	稲垣信濃守拝領下屋敷小石川御菜園下150坪	西丸御側衆蛭川相模守(親文)	
	蛭川相模守拝領下屋敷四谷内藤新宿1,250坪のうち300坪	御書院番佐野肥前守組石原四郎右衛門	
	飯田幾三郎拝領屋敷市谷淨瑠璃坂上225坪余	小普請組岩本石見守支配松前五郎次郎(恭広)	
	石原四郎右衛門拝領屋敷市谷460坪のうち60坪	小普請組近藤登助支配飯田幾三郎(有詮)	
D	天保4(1833).8.26 [37-760]	小笠原若狭守小石川御菜園前3,800坪余のうち300坪	佐野鉄之進
		千村啓次郎拝領屋敷駒込新屋敷300坪	内藤豊後守(正繩)
	天保14(1843).4.11 [40-427]	松平喜内拝領屋敷本所猿江扇橋1,380坪余	大御番頭小笠原豊後守(信名)
		内藤豊後守拝領下屋敷湯島天神中坂下593坪	御小性組大久保彦八郎組松平喜内
	小笠原豊後守拝領下屋敷小石川御菜園前3,500坪余のうち150坪	小普請組戸川因幡守支配千村啓次郎	
F	宝暦3(1753).8.7 [26-8]	大岡出雲守小石川拝領下屋敷2,200坪	松平能登守(乗蔭)
		松平能登守拝領下屋敷のうち浜町大川端3,500坪余	大岡出雲守(忠光)
	明和8(1771).7.26 [27-956]	大久保基五左衛門拝領屋敷浜町500坪	松平能登守(乗蔭)
		松平能登守拝領屋敷小石川2,200坪	御書院番渋谷隠岐守組大久保基五左衛門(忠有)
	天明3(1783).11.3 [29-600]	大久保基五左衛門拝領屋敷小石川御菜園脇2,200坪余	西丸御小納戸石谷次郎左衛門(清定)
		石谷次郎左衛門拝領下屋敷四谷内藤宿番衆町927坪のうち527坪	御書院番酒井対馬守組大久保基五左衛門(忠有)
		堀江太郎三郎拝領屋敷下谷向柳原186坪	
	享和3(1803).11.18 [33-354]	石谷次郎左衛門拝領下屋敷四谷内藤宿番衆町927坪のうち400坪	小普請方菅沼主膳正支配堀江太郎三郎(芳速)
		小笠原海之助拝領屋敷本所十間川750坪	西丸御目付石谷周防守(清豊)
		石谷周防守拝領下屋敷小石川御菜園脇2,200坪	御使番水野小十郎(元休)
文化10(1813).閏11.16 [34-480]	水野小十郎拝領屋敷浅草元鳥越1,460坪	小普請組柴田七九郎支配小笠原海之助(長栄)	
	秋元隼人正拝領下屋敷下谷二丁目853坪余	御先手水野小十郎	
天保11(1840).12.27 [39-301]	水野小十郎拝領屋敷小石川御菜園脇2,200坪	寄合秋元隼人正	
	秋元右近拝領屋敷小石川御菜園脇2,200坪	丹羽近江守(長堅)	
	山下市郎右衛門拝領屋敷品川領戸越村700坪のうち500坪	寄合秋元右近	
	丹羽近江守配拝領屋敷神田佐久間町825坪のうち500坪	右大将様御小性組酒井肥前守組山下市郎右衛門	

※『東京市史稿』市街篇より作成



表 5 小石川薬園屋敷地所有者変遷

年(西暦)・月・日	A	B	C	D	E	F
享保 7 (1722) .10.16	芥川小野寺 22,558 坪	高井信房 2,200 + 1,100 坪	田沼意次 2,000 + 1,800 坪 永預 700 坪	小笠原信喜 2,000 + 1,800 坪 永預 300 坪	岡田利左衛門 19,550 坪	大岡忠光 2,200 + 900 坪
延享 5 (1748) .5.28	芥川小野寺 19,258 坪	高井純房 1,600 + 1,100 坪	田沼意次 1,500 + 1,800 坪 永預 700 坪	青柳大八 300 坪	岡田利左衛門 16,450 坪	松平乗蓮 2,200 坪
宝暦 2 (1752) .4.9	芥川小野寺 10,658 坪	吉里次郎吉 600 坪	大河内(松平)輝高 1,500 + 1,800 坪 永預 700 坪	谷田又四郎 200 坪		
宝暦 3 (1753) .8.13		高井直熙 2,200 + 1,100 坪	大河内(松平)輝高 1,500 + 1,800 坪 永預 900 坪	小栗源五郎 200 坪		
宝暦 4 (1754) 閏 2.16			稲垣長以 1,500 + 1,800 坪 永預 700 + 200 坪	早川丹平 300 坪		
宝暦 12 (1762) . 閏 4.11			稲垣長統 150 坪	藤川親文 3,450 坪 永預 700 + 200 坪		
明和 3 (1766) .8.14			藤川親文 3,600 坪 永預 300 坪	小笠原信名 3,500 坪 永預 300 坪		
明和 8 (1771) .7.26				佐野鉄之進 300 坪		
明和 8 (1771) .8.17				小笠原信名 3,350 坪 永預 300 坪		
安永 3 (1774) .7.3				千村啓次郎 150 坪		
安永 4 (1775) .11.28				松平勝道 16,000 坪		
安永 5 (1776) .12.24						
安永 8 (1779) .2.12						
天明 3 (1783) .11.3						
享和 2 (1802) .7.12						
享和 3 (1803) .11.18						
文化 3 (1806) .8.2						
文化 10 (1813) . 閏 11.16						
天保 4 (1833) .8.26						
天保 11 (1840) .12.27						
天保 14 (1843) .4.11						
安政 2 (1855) .4.16	芥川小野寺 5,858 坪	岡田利左衛門 4,800 坪				
安政 2 (1855) .5.16						

※『東京市史稿』市街篇より作成  
 ※A…芥川小野寺御薬園下、B…小石川白山御殿跡、C…小石川御薬園前、D…小石川御薬園下、E…岡田利左衛門御薬園、F…小石川御薬園跡



図 13 「治革図書」のうち「当時（安政2年ころ）之形」

として与えられたもので、当初は土井大炊頭利則の大塚下屋敷のうち1万8,000坪がこれに宛てられたが、土井家側が差し支えを申し立てたため、岡田預地に変更されたのであった<sup>(66)</sup>。

幕府は、岡田へ土地の返上を命じるとともに、御用の草木等は芥川預地へ移植すること、その他の竹木などはそのまま駿河守へ渡すので調査を行うこと、さらに職務や支配向きについては当分今まで通りと心得て役宅に留まることを指示し、同時に芥川へは、その預地に岡田預りの御用草木等に移すことを達した<sup>(67)</sup>。芥川はこの伝達を受けて早速諸事取り調べて、移植場所を掛け紙で示した絵図と、その内訳を記した伺書を8月22日に幕府へ提出したところ、12月5日になって漸くその通りに取り計らうよう命じられた<sup>(68)</sup>。

岡田預地は、翌安政2(1855)年4月16日、松平駿河守へ正式に引き渡された<sup>(69)</sup>。こうして小石川薬園は、さらなる武家地化によって縮小して芥川預地のみ1万658坪となり、「沿革図書」「当時(安政2年、引用者註)之形」(図13)にみるような様相を呈するに至ったのである<sup>(70)</sup>。

安政2年5月4日、芥川預地が二分されて、一方が岡田へ当分預けられることになり、その土地の授受が行われた。敷地のほぼ中央に南北の境界線を設定して、その東側4,800坪が岡田へ、西側4,800坪と外敷地900坪余の計5,700坪が芥川へ、それぞれ預けられることとなった<sup>(71)</sup>。実は芥川預地を半々に割り合うことは、前年の12月28日に幕府から両者に告げられていたのだが、この時点では詳細が未決であったらしく、芥川は敷地の分割方法や配置をめぐって、翌年2月になって幕府に伺書を提出している。このなかで芥川は、旧来の由緒がある内薬園を含む範囲を自家の預地に配分されることを強く望み、もともと外薬園に設定しておいたという岡田の薬草木移植場所を、そのまま岡田預地とすることの効率性を説いて、幕府を説得しようとした<sup>(72)</sup>。結果的には、内薬園の大部分は岡田預地とされて、この要望は容れられなかったようだが、芥川に外敷地として900坪ほどが余分に預けられたことが、その代償であった可能性は考えられる。

## (7) 小石川植物園期

### 薬園から植物園へ

明治元(1868)年6月11日、小石川薬園は明治政府によって接収された<sup>(73)</sup>。そして、同じく収公された松平・丹羽・小笠原・蛭川・高井らの武家屋敷地と、薬園の北西、芥川小野寺役屋敷などがあつた小屋敷地1区画6筆をも含めた一帯が、薬園地として利用されることになった。明治になって、江戸時代の享保6～延享5年の最大拡張期を凌ぐ規模で、小石川薬園は再開することになったのである(図2参照)。

薬園は当初、東京府所管の大病院附属御薬園として出発したが、維新期の行政的な混乱からか、しばらくは管轄機関が次々と交代して、呼称もこれに応じて変更された(附表「小石川植物園関係年表」参照)。ただしこの間、名称に関してひとつの大きな画期を迎えている。すなわち明治8(1857)年2月、文部省所管教育博物館の附属施設とされた際、初めて「植物園」という名付けが採用されたのである<sup>(74)</sup>。以後「薬園」の呼称は一切用いられることはなくなった。

所管機関に関しては、明治10(1859)年4月、東京大学の創立に伴い、その附属とされた。学内では、植物園の所属をめぐって、従来の薬園的性質を重視して医学部とするか、植物学研究を目的として理学部とするか、議論されたという<sup>(75)</sup>。結果的には理学部に属することとなり、「植物園」の名称に相応しい選択がなされたというべきであろう。

最後に、植物園の敷地に関して述べておく。明治36(1903)年3月22日に、園内北西部分、かつての芥川役屋敷を含む6筆の屋敷地で明治初年に囲い込んだ土地644坪と、小石川原町の民間地、

旧岡田利左衛門役屋敷北側 594 坪の交換が成立した<sup>(76)</sup>。これによって、北側敷地境に多少の変更はあったものの、以後大幅な改変は行われることなく、植物園地は現在にまで至っている。

## 2. 文献にみる研究温室地点の土地利用

### (1) 調査地点所在敷地の変遷

研究温室地点の所在する敷地はどのような変遷を遂げてきたのか、みることにしよう。第4章第1節、成瀬論稿のIV-2・3・4図に、調査地点と比定される位置がおおよそ示されている。これによれば、館林藩小石川下屋敷と、これに続く幕府小石川御殿の時期は、当地点が両敷地内にすべて含まれているが(IV-3図)、正徳4年以降は数筆の屋敷地にわたっている(IV-4図)。明治期には小石川原町のうちとなり(IV-2図(上))、実はこの後、明治36年3月の土地交換により植物園地に編入されたのである。以上のように調査地点は、ある時期以降から複数の敷地にまたがり、しかもその所有者の出入りも多いという、複雑な変遷をみたところであった。

表6「研究温室地点所在敷地の変遷」は、これを一覧にまとめたものである。このうち幕臣屋敷が正徳4年から幕末に至る154年間、慶安5年に当該地が武家地化して以降の7割以上を占めている。表6でこの間の所有者の推移が詳しいのは、史料から間口・奥行が判明し具体的な位置比定が可能な

表6 研究温室地点所在敷地の変遷

年(西暦)月	所在した敷地
慶安5(1652)年8月以前	小石川村百姓地
慶安5(1652)年8月	館林藩小石川下屋敷
元和元~2(1681~82)年	幕府小石川御殿
正徳4(1714)年3月	松田権八郎屋敷 西村三郎二郎屋敷 斎藤半九郎屋敷
宝暦4(1754)年7月	三浦藤次郎屋敷
天明5(1785)年5月	野間藤右衛門屋敷
文化元(1804)年12月	内藤金十郎屋敷(預地)
文化13(1816)年6月	出野金右衛門屋敷
文化14(1817)年3月	湯原瀧之助屋敷
天保8(1837)年12月	深沢為次郎屋敷
天保12(1841)年11月	深沢為次郎(預地)
天保13(1842)年5月	
天保14(1843)年5月	
明治2(1869)年	小石川原町
明治36(1903)年3月	東京帝国大学理科 大学附属植物園

※「御府内場末往還其外沿革図書」より作成

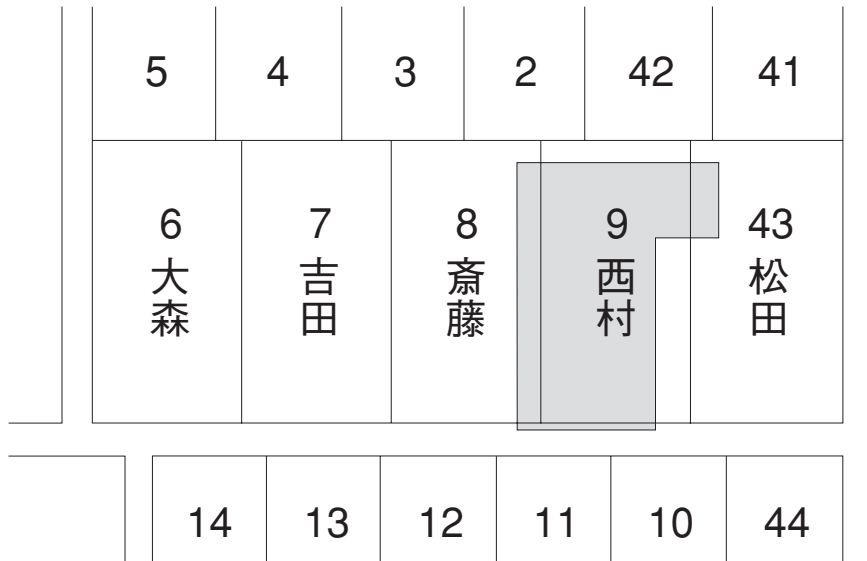


図 14 調査地点の位置比定

(数字は表 2 の No. に対応、塗りつぶし部分がおおよそ調査地点に比定される場所)

ためである。まず、研究温室地点の北部、現植物園地の敷地境は、図 8 の No.6～9・43、計 5 筆の屋敷地の西および北側屋敷境を踏襲したものである。調査地点は、北側敷地境より 3 メートル、西側境より 60 メートルの交点から、東へ約 28 メートル、南へ約 37 メートルの範囲にある。表 2 によれば、No.6～9・43 の屋敷地は、いずれも間口 11 間 3 尺 2 寸余 (約 20.9 メートル)・奥行 21 間 4 尺 (約 39.4 メートル) であり、これと先の距離にしたがって「調査地点の位置比定」(図 14) を作成した。この結果、西村三郎二郎の屋敷地 (表 2-No.9) を中心に、その西隣の斎藤半九郎 (同 No.8) と東隣の松田権八郎 (同 No.43) の屋敷、そして南側の道敷、それぞれに少しずつ及ぶ位置に比定されるのである。

これら 3 屋敷の所有者の推移については、表 7「研究温室地点相対替等土地移動一覧」に基いている。松田の屋敷のみ、敷地・所有者とも移動が一切なく幕末を迎えたが、その他は切坪による屋敷地の分割や所有者の交代が多い。中心に位置する西村の屋敷地は、宝暦 4 年 7 月 25 日に三浦藤次郎へ、天保 13 (1842) 年 5 月 7 日には深沢為次郎へ、いずれも相対替により譲渡されて幕末に至っている。西側の斎藤の屋敷地は、天明 5 (1785) 年 5 月 29 日、切坪相対替により 220 坪が野間藤右衛門へわたって、以後 2 筆に分割された。野間の屋敷は文化元 (1804) 年 12 月 28 日に日下新五郎へ相対替されて、同 13 (1816) 年 6 月 21 日には北隣の内藤金十郎が相対替で獲得して、既所有の敷地に囲い込んで幕末に至った。一方斎藤が所持してきた残地 30 坪は、文化 14 (1817) 年 3 月 24 日に上地となって内藤金十郎へ預けられ、天保 9 (1838) 年 2 月 16 日には出野金左衛門の拝領屋敷となり、同 12 (1841) 年 11 月 29 日、相対替により湯原瀧之助へ譲渡されたが、2 年後の同 14 (1843) 年 5 月 7 日、再び上地されて東隣の深沢為次郎へ預けられて幕末を迎えた。

調査地点の大半は 1 屋敷で占められるが、途中切坪された西側の屋敷地は、その両方が調査地点にかかっており、また特にこの両地に関しては、文化および天保年間に所有者の出入りが多いことが判明するのである。

## (2) 調査地点の土地利用

調査地点が、各時期の敷地のなかで、どのような性格の位置を占め、どう利用されていたのか、具体的に知りたいところだが、いずれの時期においても絵図などの史料に欠くため、それを直接的に知

表7 研究温室地点相対替等土地移動一覧

年(西暦).月.日 [市史稿巻数-頁]	対象屋敷地および坪数	移動先
宝暦4(1754).7.25 [26-103]	三浦藤次郎拝領屋敷市谷本村300坪	大御番山口修理亮組和田彦太夫(惟智)
	和田彦太夫染井松平甲斐守上地のうち300坪	小普請組横山内記支配西村善次郎(政春)
	西村善次郎拝領屋敷小石川御殿跡250坪	小普請組首根玄蕃頭支配三浦藤次郎(義方)
	竹村惣右衛門拝領屋敷湯島天神中坂下	西丸表御右筆和田忠次郎(教般)
	和田忠次郎拝領屋敷本所南割下水233坪	小普請組戸川五左衛門支配竹村惣右衛門(嘉長)
天明5(1785).5.29 [29-872]	野間藤右衛門拝領屋敷表猿楽町280坪	奥御右筆斎藤半九郎(守宜)
	斎藤半九郎拝領屋敷小石川白山御殿跡250坪の内220坪	小普請組永井監物支配野間藤右衛門(茂正)
文化元(1804).12.28 [33-466]	日下新五郎拝領屋敷本所伊予橋通550坪	小普請酒井但馬守支配野間藤右衛門(茂正)
	野間藤右衛門拝領屋敷小石川白山御殿跡220坪	小普請佐藤修理支配日下新五郎(房英)
文化13(1816).6.21 [34-750]	日下十郎兵衛拝領屋敷白山御殿跡220坪	大御番松平縫殿頭組内藤金十郎
	桜井弁之助拝領屋敷南本所三ツ目400坪	小普請組松平石見守支配日下十郎兵衛
	内藤金十郎拝領屋敷菓鴨大原町200坪余	御小性組久永相模守組桜井弁之助
文化14(1817).3.24 [34-854~55]	斎藤金一郎上地小石川白山御殿跡30坪	大御番水野遠江守組内藤金十郎御預地
天保9(1838).2.16 [38-732]	内藤十右衛門御預地小石川白山御殿跡30坪	二丸火之番出野金左衛門
天保12(1841).11.29 [39-592~93]	湯原瀧之助拝領屋敷大久保大草屋敷371坪の内170坪	寄合安藤内蔵助
	安藤内蔵助拝領屋敷浜町2021坪の内300坪	富士見御宝蔵番土屋佐左衛門組出野金左衛門
	出野金左衛門拝領屋敷小石川白山御殿跡30坪	小普請組河内采女正組湯原瀧之助
天保13(1842).5.7 [40-5]	深沢為次郎拝領屋敷小石川築地小十人町290坪余	西丸小十人岡部庄左衛門組与頭三浦八郎左衛門
	三浦八郎左衛門拝領屋敷小石川白山御殿跡250坪	清水殿近習番深沢為次郎
天保14(1843).5.27 [40-459]	湯原瀧之助上地小石川白山御殿跡30坪	清水殿近習番深沢為次郎御預地

※『東京市史稿』市街篇より作成

ることはできない。

館林藩小石川下屋敷と幕府小石川御殿の時期については、前項で多少触れた空間構成の想定から、まず小石川下屋敷は、おおむね北半が詰人空間、南半が御殿空間とみられ、当地点は御殿空間の北端あたりに相当すると考えられる。小石川御殿は、このうち御殿空間のみを敷地として引き継いでおり、したがってその北端にあたることになる。いずれにしても調査地点は、御殿空間の主要部分からは外れた、その周縁部に位置したと推定される。

最も長期にわたった幕臣屋敷は、前項で明らかにしたように、始まりは綱吉の側近から小普請となった者たちへ一括して与えられた屋敷地であった。彼らはみな家禄150俵ほどの蔵米取りであり、その格に応じた構えの、均質な屋敷が建ち並んだ景観が想定される。

小川頭道著『塵塚談』に、「白山御殿跡のこと」と題された文章がある。以下全文を引用しよう。「白山御殿坂上かどより元瘡守稻荷前まで、四町ほどの間を大通りという。御堀を埋めし跡、往来となり。故にむこう側を享保の末までは、皆ひと御堀端といいけるよし。御殿跡のかた、片側にならび朝士屋敷三十五、六間もあり、五、六十年以前までは、屋しきごとに土蔵一つ充はありけり、二蔵あるけれど一蔵これなき屋敷はなかりしが、今は四五町の間土蔵一ヶ所見えず。屋敷主はそのころの家も過半残れり。」<sup>(77)</sup>。

「大通り」とは、小石川御殿北側広道の北端に沿って敷設された、俗に「小石川白山御殿跡大通り」と呼ばれた道路である(図13参照)<sup>(78)</sup>。要点を述べれば、大通り南側には幕臣屋敷が35、6軒も並び、その各屋敷に5、60年以前までは土蔵が1棟はあり、2棟ある家もあったが、今はひとつも見られない、屋敷所有者は半数以上がそのころから続くイエである、という。

小川顕道は元文2(1737)年生まれ、祖父は施薬院創設を請願、実現して、その医師を勤めた小川笙船、父丹治も養生所の内科医であった。顕道はこの境遇のなか、白山御殿跡に生まれ育ち、祖父、父を継いで養生所の内科医となった。『塵塚談』は文化11(1814)年ころに執筆されたもので、5、60年以前とは単純計算して宝暦3～明和元(1754～64)年となり、おそくともこの頃までは各屋敷に土蔵があったことを、年齢から考えても、顕道自らが目にしていたと判断される。最後の一文は、土蔵が見られなくなった理由が、所有者の交代などによるものではないことを示唆したのではないかと、つまりその原因は、補修や新築が行われなかったためと考えられるのである。

また顕道は、幕臣屋敷の屋根についても、以下のように記している。「蛸殻屋根ならびに月役という材木のこと、われら二歳頃までは、江戸の端々は、武家・町家とも、多く蛸屋根にてありしなり。白山御殿近辺、御家人の家は、みなこけら草にて蛸屋根なり。月役というて長さ一間に幅一寸四五分のわり木をのちにし、それより板にて葺く、そのうえに蛸を敷きならべることなり。養生所惣屋根など十四、五年以前までは蛸屋根にてありしなり。(後略)」<sup>(79)</sup>。白山御殿跡あたりの幕臣屋敷は、みな「月代」という割木の下地に板を葺き、その上に蛸殻を敷き並べた柿葺きの蛸殻屋根で、養生所は14、5年前、つまり寛政末年(1799～1800)までこの屋根だったというのである。享保年間(1716～35)から瓦葺屋根が普及するというが、この辺りでは蛸殻屋根が主流だった様子が窺われる。特に養生所の屋根は顕道の職場のことであり、信用に足る内容と考えられる。

幕臣屋敷の建物配置など、具体的な土地利用の状況は明らかにならないが、顕道の言うように、蛸殻屋根の屋敷に土蔵がある光景が、宝暦～明和期ころまではみられたのであろう。それから徐々に様変わりして、『塵塚談』が執筆された文化年間(1804～17)ころまでには、各屋敷の建物の様相、さらには地域全体の景観が大きく変っていたものと考えられる。

さて明治期に入ると、一帯は民間地となったが、おそらく旧幕臣屋敷は取り払われて、土地は特に利用されなかったか、あるいは桑茶畑になったとみられる。

### (3) 幕臣屋敷土地利用の実態

ここでは幕臣屋敷に絞って、その所有や居住の実態を検討することにより土地利用を考えてみたい。表8「幕末の研究温室地点所在敷地とその周辺」は、安政3(1856)年ころに幕府作事方が作成した「諸向地面取調書」の記述をまとめたものである<sup>(80)</sup>。同史料には、調査地点の中心を占める深沢為次郎の記述がないため、調査地点を含む一区画をサンプルとした。図13によれば屋敷地は14筆、所有者は13名、うち同史料に記載のある8名について所有する全屋敷をリスト化した。

表8によれば、第一に小石川御殿跡が「居屋敷」、つまり実際に居住している者は、松野・内藤・熊沢・都筑の4名にとどまり、残り4名はすべて「地守附置」として他の場所に居住していること、第二に小石川御殿跡を居屋敷とする4名のうち、松野は同居人を置き、内藤は一部貸地していること、以上が判明する。全体として興味深いのは、拝領屋敷を1～2ヶ所所有していながら、長谷川・上原のように他家に同居する者や、矢橋・植村のように他者の拝領屋敷地内に借地して住宅する者がいたことである。すなわち、屋敷地所有者の変遷と居住の実情が、必ずしも一致していないことは明白である。居屋敷であっても、一部貸地したり同居人があることによって、それらがいない場合と較べれば、敷地内部の利用状況は変化しよう。「地守附置」、つまり管理者を立てて所有した屋敷地については実態がまったくわからないが、何の利用もなされなかったとは考えにくい<sup>(81)</sup>。

幕末、小石川御殿跡の幕臣屋敷は、概ね以上のような内情だったと推し量られ、調査地点に比定された屋敷地も例外ではなかったとみられる。第4章第1節の、成瀬氏による幕臣屋敷時における調

査地点の景観イメージ、すなわち、南側が路地で、地境施設を隔てた北側が居住空間、さらに奥が裏庭という想定は、図14で位置比定した結果と概ね合致し、南側の道敷と屋敷地の境界線には変更はなく、遺構の疎密や分布の年代的傾向から、幕臣屋敷化当初から幕末まで、屋敷内の敷地割はおおよそ変らなかったことが窺える。ただしこの間150年以上の歳月を経ており、小川頭道が書き残したことや周囲の屋敷地の状況を鑑みれば、遺構の変遷を捉える際は、敷地内部での土地利用の実態変化をも可能性として想定する必要があるだろう。屋敷地の所有と居住の実態の乖離は、再三再四指摘されてきたことである<sup>(82)</sup>。その現象は、各屋敷内の土地利用に当然、何らかの影響を及ぼしたとみられ、この実態を改めて認識して、屋敷地の推移のなかで捉えようと試みるのが重要と考える。

### おわりに

本稿では、まず小石川植物園用地の土地利用について、通史的に整理することを試みた。思いのほか変化に富んだ推移をたどってきたことが理解されたであろう。これまで、館林藩小石川下屋敷や幕府小石川御殿、小石川薬園、そして小石川植物園については、さまざまに語られてきたが、この間、大名や幕臣たちの屋敷地で埋め尽された時期があったことなどには、ほとんど注意が払われてこなかったのである。本稿では、この点をできるだけ詳細に記述してきたが、幕府御用地（小石川御殿・小石川御薬園）から武家地に転換された際の拝領者の履歴に、ある傾向が見出されるという、興味深い結果も得ることができた。

次に調査地点に関しては、幕臣屋敷として利用された時期の位置比定を試み、おおむね1屋敷に占められることが判明して、遺構の検出状況とも合致した。この屋敷地に関しては、実態を史料から明らかにすることはできなかったが、逆に発掘調査で検出された遺構の変遷から、何らかの現象が明らかになることも期待される。

そして最後に、地下坑について触れておきたい。本稿では扱うことができなかったが、これに関しては、現時点では発掘調査や土壌分析などの事例を増やしていくほうが、利用法などの解明へは近道と思われる。ただしここで必要なのは、既存事例も含めて、土地利用の実態、すなわち拝領者が居屋

表8 幕末の研究温室地点所在屋敷地とその周辺

図8 No.	所有者	「諸向地面取調書」記述				備考
		屋敷種別	場所	坪数	注記	
41	長谷川豊太郎	拝領屋敷	小石川御門内土手通	400坪	小普請医師長尾全庵え貸置、当分小川町雉子橋通渡辺図書助方同居	
		拝領屋敷	小石川白山御殿跡大通	75坪	地守附置	
42	松野忠一郎	居屋敷	小石川白山御殿跡	244坪余	内刑部卿殿勤林留吉同居差置	
2・8	内藤十右衛門	居屋敷	小石川白山御殿跡	470坪	内小十人沢井禎之助え貸置	沢井禎之助は実子
3	熊沢勇太郎	居屋敷	小石川白山御殿跡	250坪	—	
4	上原要人	拝領屋敷	小石川御殿跡	250坪	地守附置、当分麻布広尾小普請久松弥太郎方同居	久松の麻布広尾は300坪
5	都筑鑽五郎	居屋敷	小石川白山御殿跡	250坪	—	
		拝領屋敷	赤坂今井谷	200坪	地守附置	
6	矢橋金次郎	拝領屋敷	四谷内藤宿	150坪	地守附置、当分牛込末寺町御鷹匠中山善大夫地面借地住宅	
		拝領屋敷	小石川白山御殿跡	50坪	地守附置	
6	植村巳之助	拝領屋敷	小石川白山元御殿跡	200坪	地守附置、当分四谷仲町御腰物方柳沢孫左衛門地面借地住宅	柳沢孫左衛門は巳之助実兄
		拝領屋敷	四谷千駄谷	150坪	地守附置	

※三浦兵左衛門・矢崎平左衛門(7)、深沢為次郎(8・9)、原新六郎(41)、松田次郎(43)は「諸向地面取調書」に記載がなかった



敷としていたかどうかを検討することである(83)。まずこれを前提として、検出された地下坑のあり方を整理・峻別していくことが重要である。居屋敷か、「地守附置」の拝屋敷かによって、あり方に相異が見出されれば、その後の調査・研究の方向性も、ひとつ見えてくるのではなかろうか。

【註】

- (1) 前説は「江戸名所記」・「玉露叢」、後説は「続御府内備考」による(いずれも『東京市史稿』市街篇第3、750～55頁所収、以下『市史稿』市街3-750～55と略す)。
- (2) 『古板江戸図集成』巻2(中央公論美術出版、1958年)所収。
- (3) 「続御府内備考」(前掲註1)。
- (4) 『5千分の1江戸—東京市街地図集成』(柏書房、1988年)所収。
- (5) 方位に関して、本文で「東側」としているのは、厳密には東南、同じく「西側」は西北、「北」は北東である。本稿では、記述が煩雑になることを避けるために、北東(上)を北、南西(下)を南、東南(右)を東、西北(左)を西と定めて、以下記述していくこととするので、注意されたい。
- (6) 「正慶承明記」他(『市史稿』市街6-760～61・775～93所収)。
- (7) 「神田記」(「人見私記」のうち附録冊五、国立公文書館内閣文庫、以下「内閣文庫」と略す、所蔵)同年月日条。なおこの史料の所在については福田千鶴氏のご教示を得た。
- (8) 「続御府内備考」(前掲註1)。
- (9) 「江戸名所記」・「玉露叢」(前掲註1)。
- (10) 註4に同じ。
- (11) 「万治年録」(内閣文庫所蔵)同年月日条。
- (12) 「公儀日記」、「柳営日次記」(『市史稿』市街8-52～53・777～78所収)。
- (13) 註4に同じ。なお拡張した部分はすべて現植物園地の埒外である。
- (14) 深井雅海著『徳川将軍政治権力の研究』(吉川弘文館、1991年)155頁。
- (15) 註21(後出)参照。
- (16) 「神田記」(前掲註7)延宝3年正月25日条に「御母儀桂昌院殿住居へ度々御越アリ、御孝行故毎々シルス」とあり、訪問の目的が桂昌院への面会であったことは確かである。
- (17) 「小石川原町名主安右衛門旧記」(『市史稿』市街7-658・8-2～3)。
- (18) 註14、深井著書、166～67頁。
- (19) 「常憲院殿御実紀」同年月日条(『国史大系徳川実紀』第42巻451頁、以後『実紀』42-451と略す)。
- (20) 国立国会図書館所蔵(以下、国会図書館と略す)。なお、以下の「沿革図書」の図はすべて2～3分割の図を合成して筆者がトレースしたものである。
- (21) 註14、深井著書、167頁。なお前に、寛文年間の2度の添地が家臣団屋敷に利用されたと述べたのは、本段落の記述に基づいた見解である。
- (22) 「芥川文書」(『市史稿』市街5-497所収)、上田三平著『改訂増補日本葉園史の研究』(渡辺書店、1972年)、39頁。
- (23) 朝日重章著「鸚鵡籠中記」(『名古屋叢書続編』第9巻、名古屋市教育委員会、1965年)、塚本学著『徳川綱吉』(吉川弘文館、1998年)142～43頁。
- (24) 「常憲院殿御実紀」同年月日条(『実紀』43-286)。
- (25) 註20に同じ。
- (26) 「柳営日次記」、「憲廟実録」他(『市史稿』市街13-632～33、所収)。
- (27) 「柳営日次記」元禄11年1月28日条(内閣文庫所蔵、マイクロフィルム版による)。
- (28) 「屋敷渡預絵図証文」(『市史稿』市街13-468、所収)。
- (29) 「改正甘露叢」(『内閣文庫所蔵史籍叢刊』、以下『史籍叢刊』と略す、47、汲古書院、1985年、所収)元禄11年5月11日条。
- (30) 飯田龍一他編『江戸図の歴史』(築地書館、1988年)105頁。
- (31) 「改正甘露叢」(前掲註29)元禄11年5月16日条。ほかの絵図としては、例えば「元禄分間江戸絵図」

- (『小石川区史』、小石川市役所、1935年、所収)、「温清軒江戸大絵図」・「某所蔵御殿図(南西ノ半面)」・「白山前町名主六之丞書上図(部分)」(以上『市史稿』市街6-284~85所収)がある。
- (32) 『市史稿』市街6-775~77所収。
- (33) 註22、上田著書、39~40頁・「文昭院殿御実紀」(『実紀』44-9)宝永6(1709)年2月2日条。
- (34) 「文昭院殿御実紀附録上」(『同上』44-257)。
- (35) 註22、上田著書、40頁。
- (36) 同上、35頁。
- (37) 松崎純庸「小石川志料」(『市史稿』市街6-783~84所収)。
- (38) 「柳營日次記」・「有章院殿御実紀」(『同上』同17-981~83所収)。
- (39) 「同上」・「同上」他(『同上』同18-149~51所収)。
- (40) 「伯爵酒井家回答」(『同上』同18-143所収)・「牛込矢来屋敷年表」(新宿歴史博物館編『大名屋敷一儀式・文化・生活のすがた一』、新宿区教育委員会、1993年、47頁)。なお松平式部少輔とは、将軍徳川綱吉の側用人を勤めた柳沢吉保の五男、柳沢時睦のことで、元禄14年に松平の称号を与えられて同姓を名乗り、宝永6年、父の所領甲斐国内に1万石を分知された(『寛政重修諸家譜』)。
- (41) 註14、深井著書、190頁によれば、家宣の将軍家入りと同時に、その家臣団約1,300名が幕臣に編入されたということである。
- (42) 深井雅海著『図解江戸城をよむ』(原書房、1997年)155頁。これによれば、桐間番は天和元(1681)年7月、御廊下番は貞享元年1月、御次番が貞享2(1685)年5月、御近習番が元禄5(1692)年8月にそれぞれ設置されたという。
- (43) 註42、深井著書、159頁によると、土圭間番は「三代将軍家光時代に新設されて一旦廃止されたのち、家宣時代に再置された奥向番衆。宝永6(1709)年2月に再置され、七代将軍家継没後の享保元(1716)年5月に廃止された」とあり、綱吉将軍期には廃止されていたことになるが、表2の「略歴」によれば、その時期にも土圭間番・西丸土圭間番がいたことが確認される。
- (44) 「寛政呈譜」(『市史稿』市街18-506所収)。
- (45) 「江戸藩邸沿革」のうち「亀岡藩」(『同上』同48-491~95所収)。
- (46) 註14、深井著書、199~205頁。
- (47) 註20に同じ。
- (48) 宮崎勝美「江戸の武家屋敷地」(吉田伸之他編『日本都市史入門』I、東京大学出版会、1989年、所収)95頁。
- (49) 「屋敷渡預絵図証文」(『市史稿』市街20-133~48所収)・「沿革図書」(前掲註20)。
- (50) 註22、上田著書、40・42頁。
- (51) 大場秀章「日本の本草学の歩みと小石川薬園の歴史」(同編『日本植物研究の歴史—小石川植物園三〇〇年の歩み』、東京大学総合研究博物館、1996年)31頁。
- (52) 「柳營日次記」(『市史稿』市街20-236~37所収)。
- (53) 「同上」・「有徳院殿御実紀」・「御府内備考」(『同上』同20-237~39所収)。なお「柳營日次記」およびこれに基いた「有徳院殿御実紀」は薬園地の総坪数を4万9,600余坪とするが、正しくは4万4,800坪余である。おそらく4万4,800坪は既存薬園坪数を含んでいたにもかかわらず、同地の坪数を重複加算して4万9,600余坪としてしまったものとみられる。
- (54) 「屋敷渡預絵図証文」(『同上』同20-459・504~05所収)。
- (55) 「同上」(『同上』同20-231~41所収)。なお芥川家では、旧来の薬園を「内薬園」、新規預り分を「外薬園」と呼称していることから、以下これに従うことにする。
- (56) 小川顕道著『塵塚談』のうち「鍋わり坂のこと」(同・宮川政運著『塵塚談・俗事百工起源』現代思潮社、1981年、所収)。
- (57) 『文京区史』第2(文京区役所、1968年)第34図(508~09頁)。これは註22、上田著書、43頁掲載「小笠原石見守より借候本図之写」を書き起こしたものである。
- (58) 「小石川御薬園絵図(芥川預)」(註22、上田著書、図版第五、50~51頁間折込)。なお同図は「年月不詳」

- とされているが、周囲の屋敷拝領者および坪数から、おおよその年代を推定した。
- (59) 以上、「芥川御預御薬園絵図（享保末年頃）」・「岡田預御薬園絵図（寛政頃）」（註 22、上田著書、図版第三・四、44・45 頁）による。
- (60) 「（卯二月付芥川小野寺伺書）」（註 22、上田著書、58～61 頁）。なお史料名は筆者が便宜上付したものである。
- (61) 「屋敷書抜」・「芥川文書」（『市史稿』市街 25-292・848 所収）。
- (62) 註 20 に同じ。
- (63) 『寛政重修諸家譜』（続群書類聚完成会）第 16、319 頁、第 18、231～32・364～66 頁、第 19、65～66 頁。
- (64) 註 14、深井著書、「附表 4 御側御用取次一覧表」（376～78 頁）。
- (65) 「屋敷渡預絵図証文」（『市史稿』市街 24-1028～30、25-768～69 所収）。
- (66) 「藤岡屋日記」（『同上』同 43-741～42 所収）。
- (67) 「同上」（同上）。
- (68) 「（卯二月付芥川小野寺伺書）」（前掲註 60）。
- (69) 「屋敷渡預絵図証文」（『市史稿』市街 44-54～56 所収）。
- (70) 註 20 に同じ。
- (71) 「屋敷渡預絵図証文」（『市史稿』市街 44-164～67 所収）、「安政二年薬園文書（岡田）」・「安政二年薬園文書（芥川）」（註 22、上田著書、第 18・19 図、59・60 頁）。
- (72) 「（卯二月付芥川小野寺伺書）」（註 22、上田著書、58～61 頁）。
- (73) 「復古記」（『市史稿』遊園 4-32 所収）。
- (74) 「文部省沿革略記」（『同上』同 4-667 所収）。
- (75) 註 51、大場論文、41 頁。
- (76) 「東京大学所属国有財産不動産（土地）沿革誌」。同史料は成瀬晃司氏よりご提供を受けた。
- (77) 註 56、51～52 頁。なお句読点は引用者が調整した。また後述の小川頭道の履歴については、同書収載の神郡周氏執筆の解説に依った。
- (78) 「堀を埋めし跡、往来となれり。」とあるのは誤りで、堀は広道の内側にあり、その跡地は屋敷地となった。これは文京区遺跡調査会による原町遺跡・同第Ⅲ地点等の発掘調査で確認されている。
- (79) 「蛸殻屋根ならびに月役のこと」（前掲註 56、71 頁）。
- (80) 内閣文庫所蔵。
- (81) 小川恭一著『江戸の旗本事典』（講談社、2003 年）362 頁によれば、武家屋敷は「商売をする町人に貸すことは厳禁です。ただし、そこで商売をしない町人が住居用に借地することはできました。多くの方がこれを誤解しています。」といい、「地守附置」の屋敷地が町人へ貸与された可能性も否定はできないだろう。
- (82) 代表的なものに、大賀妙子「幕末、幕臣たちの”住宅事情”」（津田秀夫編『近世国家と明治維新』三省堂、1989 年、所収）、註 48、宮崎論文、などがある。
- (83) この点については、遠藤寛子・加藤元信「小石川のあなぐら一都市と農村をむすぶもの」（『東京考古』22、東京考古談話会、2004 年）、96～97 頁でも指摘されている。

【引用・参考文献】

- 朝倉治彦・柏川修一編 1992『守貞謄稿』第五卷、東京堂出版
- 江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 遠藤寛子・加藤元信 2004「小石川のあなぐらー都市と農村をむすぶものー」『東京考古』22
- 大場秀章編 1996『日本植物研究の歴史ー小石川植物園三〇〇年の歩み』東京大学総合研究博物館
- 加藤 晃 1988「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開」『國學院大學史学研究集録』14
- 加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部 2005『大塚窪町遺跡ー文京区窪町小学校校舎改築に伴う発掘調査報告書ー』
- 古泉 弘 1990『江戸の穴』柏書房
- 東京大学百年史編集委員会編 1987「理学部」『東京大學百年史 部局史二』
- 東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999「医学部附属病院病棟建設地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004「総合研究博物館小石川分館地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004「農学生命科学研究科樹木実験圃場根圏観察室地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 東京帝國大學理學部植物學教室 1940『東京帝國大學理學部植物學教室沿革：附理學部附属植物園沿革』
- 東京都教育委員会 1985『都心部の遺跡ー貝塚・古墳・江戸』
- 東京都教育庁生涯学習部文化課 1993『東京の遺跡散歩』
- 永峰光一・坂詰秀一編 1981『江戸以前』
- 成瀬晃司・堀内秀樹・両角まり 1994「東京大学理学部附属植物園内の遺跡 研究温室地点ーSK27 出土の一括資料ー」『東京考古』12
- 白山四丁目遺跡調査会 1981『白山四丁目遺跡』
- 文京区遺跡調査会 1995『原町遺跡ー徳島県職員住宅建設に伴う発掘調査ー』
- 文京区遺跡調査会 1996『原町遺跡第Ⅱ地点ー防火水槽建設に伴う発掘調査報告書ー』
- 文京区遺跡調査会 2000a『林町遺跡第Ⅱ地点ー集合住宅建設に伴う発掘調査報告書ー』
- 文京区遺跡調査会 2000b『指ヶ谷町遺跡ー文部省施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査ー』
- 文京区遺跡調査会 2003a『白山御殿跡ほかー集合住宅建設に伴う発掘調査報告書ー』
- 文京区遺跡調査会 2003b『一行院跡ほかー集合住宅建設に伴う発掘調査報告書ー』
- 文京区教育委員会 1990『文京のあゆみーその歴史と文化ー』
- 文京区役所 1967『文京区史』巻2

## 報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちようさけんきゅうねんぼう							
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報							
副書名								
巻次	5							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	成瀬晃司(編) 追川吉生 新美倫子 渋谷葉子							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成 18 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白山構内の遺跡 (小石川植物園内貝塚・ 原町遺跡、 小石川御薬園跡 理学系研究科 附属植物園 研究温室地点)	東京都 文京区 白山3丁目 7番1号	13105	21・81	35° 43' 01"	139° 44' 56" 139° 44' 57"	平成 5 年 5 月 25 日 6 月 6 日	200m <sup>2</sup>	理学系研究科附 属植物園研究温 室新営(第 2 期) に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
(白山構内の遺跡 小石川植物園内貝塚・ 原町遺跡、 小石川御薬園跡 理学系研究科附属植物園 研究温室地点)	貝塚、白山 御殿、大名 屋敷(館林 藩下屋敷)、 幕臣屋敷地・ 薬園跡	近世	地下坑、井戸、溝、 堀跡、かわらけ廃棄 遺構、土坑	陶器、磁器、土器・土 製品、瓦、金属製品、 石製品、銭貨、動物遺 体		白山御殿に関する式正の 宴に伴う廃棄資料出土。 「天下第一」銘を削り取った 焼塩壺出土。		

東京大学本郷構内の遺跡

理学系研究科・理学部1号館前地点  
発掘調査報告

2006

東京大学埋蔵文化財調査室

## 例 言

1. 本報告は、東京大学大学院理学系研究科・理学部 1 号館前の樹木の移植に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 本地点の略称は「SC1」とする。
3. 本地点は、東京都文京区 7-3-1 東京大学本郷構内に所在している。
4. 本地点は、東京都遺跡地図「文京区 47 本郷台遺跡群（本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、[平] 住居・[近] 礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣 [旧] [縄] [弥] [古] [平] [近]）」内に位置している。
5. 調査面積は、32m<sup>2</sup>である。
6. 調査期間は以下の通りである。

試掘調査	2004 年 11 月 16 日
事前調査	2004 年 11 月 29 日～12 月 3 日
整理作業	2005 年 4 月 1 日～2006 年 1 月 31 日
報告書編集	2006 年 1 月 10 日～2 月 28 日
7. 試掘調査・事前調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、試掘調査担当者は成瀬晃司、事前調査担当者は堀内秀樹である。
8. 本報告の編集は、堀内秀樹が行った。
9. 執筆分担は以下の通りである。

第 I 章	堀内秀樹
第 II 章	堀内秀樹、吉田千沙子
第 III 章	
第 1 節	堀内秀樹
第 2 節	吉田千沙子
第 IV 章	堀内秀樹
10. 発掘調査に伴う図面、写真、出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス内において、運用、保存、管理している。
11. 発掘調査および報告書の作成にあたり、下記の方々・機関からご教示・ご協力を得た。記して感謝を表したい。今村啓爾、小池聡、鈴木保彦、東京大学人文社会系研究科文学部考古学研究室、東京大学理学系研究科、東京大学施設部、加藤建設株式会社（敬称略）
12. 発掘調査・整理作業参加者  
青山正昭、香取祐一、北島くりか（東京大学埋蔵文化財調査室）、吉田千沙子（日本大学大学院）、加藤建設株式会社
13. 本地点で使用した座標は、世界測地系（JGD2000）に準拠している。

## 凡 例

1. 本文中に記載した遺構の略号は、以下の通りである。  
SD : 溝    SK : 土坑    SP : ピット    SF : 炉穴
2. 本報告の実測図の縮尺は、それぞれの図版に記した。遺物図版の縮尺は 1/3 である。
3. 遺構、遺物の写真は、添付した CD-ROM に JPEG 形式に圧縮して記録した。
4. 遺物番号は本文、挿図、観察表、CD-ROM の写真で共通の番号を使用した。
5. 遺物図版に使用している記号は、以下のことを表している。
  - ・ ▲ は、高台、見込みなどの軸際を表している。
  - ・ 遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
  - ・ — — は、断面を表している。
6. 本文中に記載した陶磁器・土器の分類は、『東京大学構内遺跡調査研究年報 2 別冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1)』に準拠している。



東京大学本郷構内の遺跡  
理学系研究科・理学部 1 号館前地点発掘調査報告

目 次

例 言  
凡 例  
目 次

第 I 章 調査の経過と概要	219
第 1 節 調査に至る経緯	219
第 2 節 調査の方法と経過	219
第 3 節 遺跡の位置と環境	220
第 4 節 調査の概要	222
第 II 章 縄文時代の遺構・遺物	224
第 III 章 江戸時代の遺構・遺物	226
第 1 節 遺構	226
第 2 節 遺物	228
第 IV 章 まとめ	230

参考文献  
報告書抄録

## 第 I 章 調査の経過と概要

### 第 1 節 調査に至る経緯

平成 16 (2004) 年度に東京大学施設部から同埋蔵文化財調査室に大学院理学系研究科校舎 (1 号館) 前樹木移植に伴う、埋蔵文化財の調査に関する照会があった。樹木移植予定地は東京都遺跡地図によると文京区 47 本郷台遺跡群 (本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、[平] 住居・[近] 礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣 [旧] [縄] [弥] [古] [平] [近]) 内に位置しており、周知の遺跡として認知されている。当該地区においても遺跡の遺存状態を事前に確認する必要があった。

確認調査は樹木移植予定地二箇所について、2004 年 11 月 16 日に試掘トレンチを合計 12m<sup>2</sup> 設定し、試掘調査を行った。その結果、江戸時代の加賀藩上屋敷に関連すると推定される遺構・遺物が状態はやや不良であるが、遺存していることが確認された。以上の経緯より、埋蔵文化財の発掘調査を行うことが確認された。

### 第 2 節 調査の方法と経過

#### (1) 調査の方法

二箇所の樹木移植予定地部分 32m<sup>2</sup> を、考古学的発掘調査の対象とした。

#### (2) 調査の経過

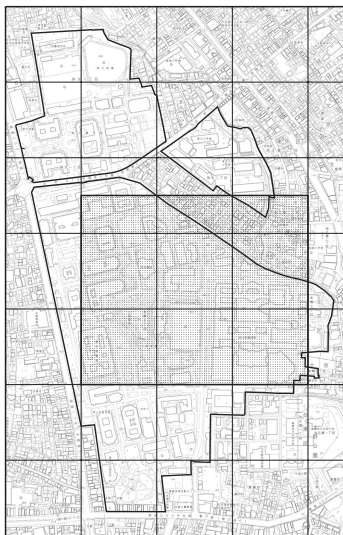
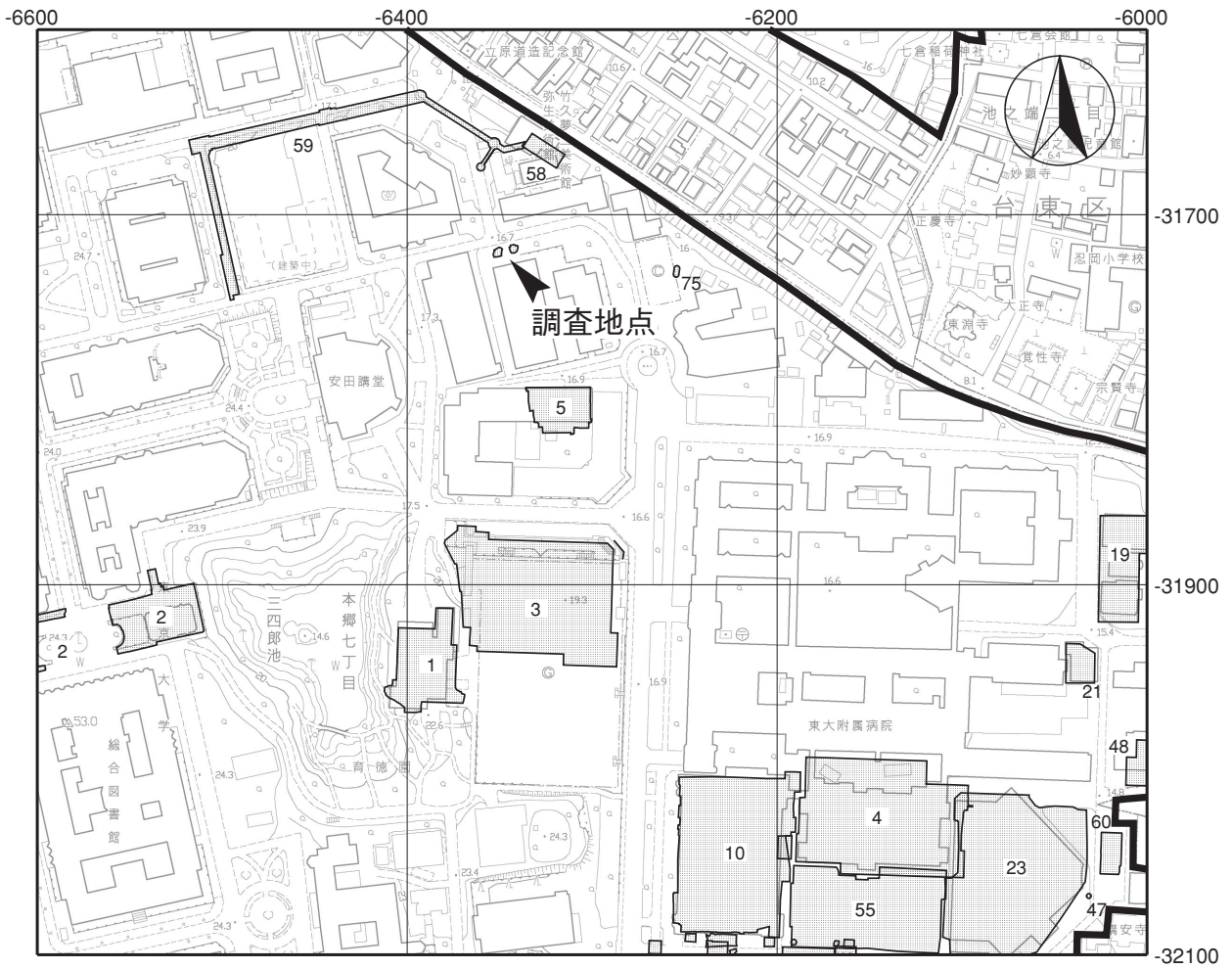
発掘調査は埋蔵文化財調査室の指導のもとで行われることで確認され、現地調査は堀内秀樹が担当した。2004 年 11 月 29 日から、二箇所ある移植予定地の西側部分 (A 区) より開始した。調査は、初めに重機によって江戸時代の遺構確認面である灰褐色硬化面 (A 区南壁土層図 4 層) 上面までの掘削を行った。A 区、B 区ともに遺存状態は不良で、A 区は南東隅、B 区は北側壁周囲を除く大部分が近代以降の削平を受けていた。表土は調査区全域でほぼ 30～50cm の厚さで堆積していた。

機械掘削と並行して遺構確認が行われ、機械掘削終了時に A 区、B 区ともに江戸時代の溝や小土坑が複数基遺存していることが確認された。硬化面が確認できた A 区では、そこから切り込まれていた SD01、SP02、SK03 の調査を終了後、12 月 1 日に人力によってローム上面まで落とし、遺構の再確認を行ったところ、新たに縄文時代の炉穴 1 基が確認された。B 区では硬化面が確認されず SK05、SP06、SP08 の調査を新旧関係を注意しつつ行った。現地調査は 12 月 3 日測量および全体写真の撮影を行い、終了した。

### 第3節 遺跡の位置と環境

本調査地点は東京大学本郷構内（東京都文京区7丁目3番1号）にあり、武蔵野台地の東端、本郷台地M2面上、標高17m付近に位置している（I-1図）。本郷構内は西から東に傾斜を有し、現在の本郷通りから三四郎池西付近までの20mから22mの標高を持つ上位面と竜岡門から北側に延びる病院前の通り以東の15mから17mの標高を持つ下位面が存在するが、本地点は下位面の西側に位置する。三四郎池は自然の湧水で、江戸時代の複数の絵図面で池から北方に向かう小沢が確認でき、藩邸外に流下していた様子が窺える。また、加賀藩邸北東部縁辺には土手状の斜面が描かれており、本地点はそれに挟まれるように存在することから、三四郎池を源流とする流路によって開析された小支谷に挟まれた小台地上に位置していると考えられる。このほか周囲の地理的環境の詳細は既刊の報告書（東京大学遺跡調査室1989、1990a、1990b、東京大学埋蔵文化財調査室1990、2005a、2005b）を参考にされたい。

本地点の歴史的環境の詳細も既刊の報告書を参考にされたいが、本地点で確認された遺構は、SF07を除くと江戸時代に比定され、文献史料、絵図面等によると該期には加賀藩邸の一部として機能していることが確認できる（IV-1図）。加賀藩本郷邸は、天和2（1682）年の大火を契機に下屋敷から上屋敷に性格を変えており、以降近代まで経営されている。

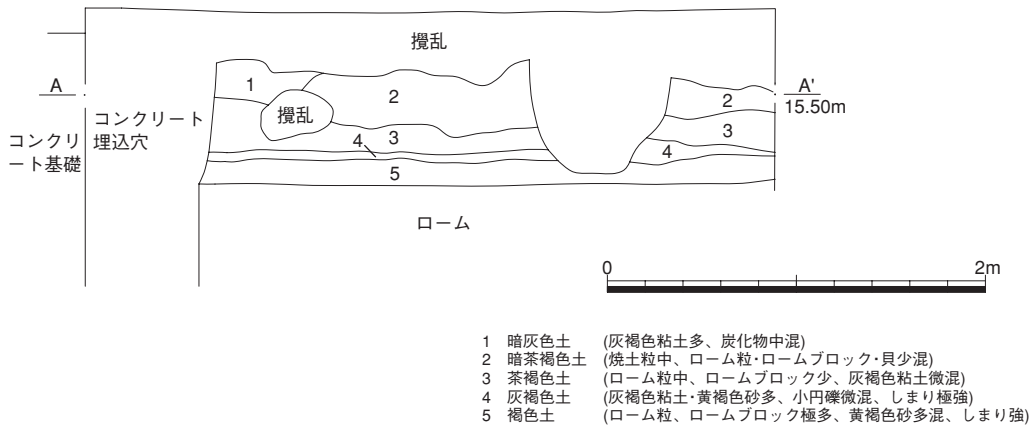


- 1 山上会館 (U)
- 2 法学部4号館・文学部3号館 (文) (法)
- 3 御殿下記念館 (G)
- 4 医学部附属病院 (病中) (エネセン) (給水) (共同溝)
- 10 医学部附属病院外来診療棟 (HG)
- 19 医学部附属病院看護婦宿舎 (HN)
- 21 医学部附属病院MRI-CT棟 (MRI)
- 23 医学部附属病院病棟 (HW)
- 47 医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK4)
- 48 医学部附属病院看護婦宿舎II期 (HNII)
- 55 医学部附属病院第2中央診療棟 (2中)
- 58 医学部附属病院受変電設備棟 (YM)
- 75 工学系総合研究棟立坑

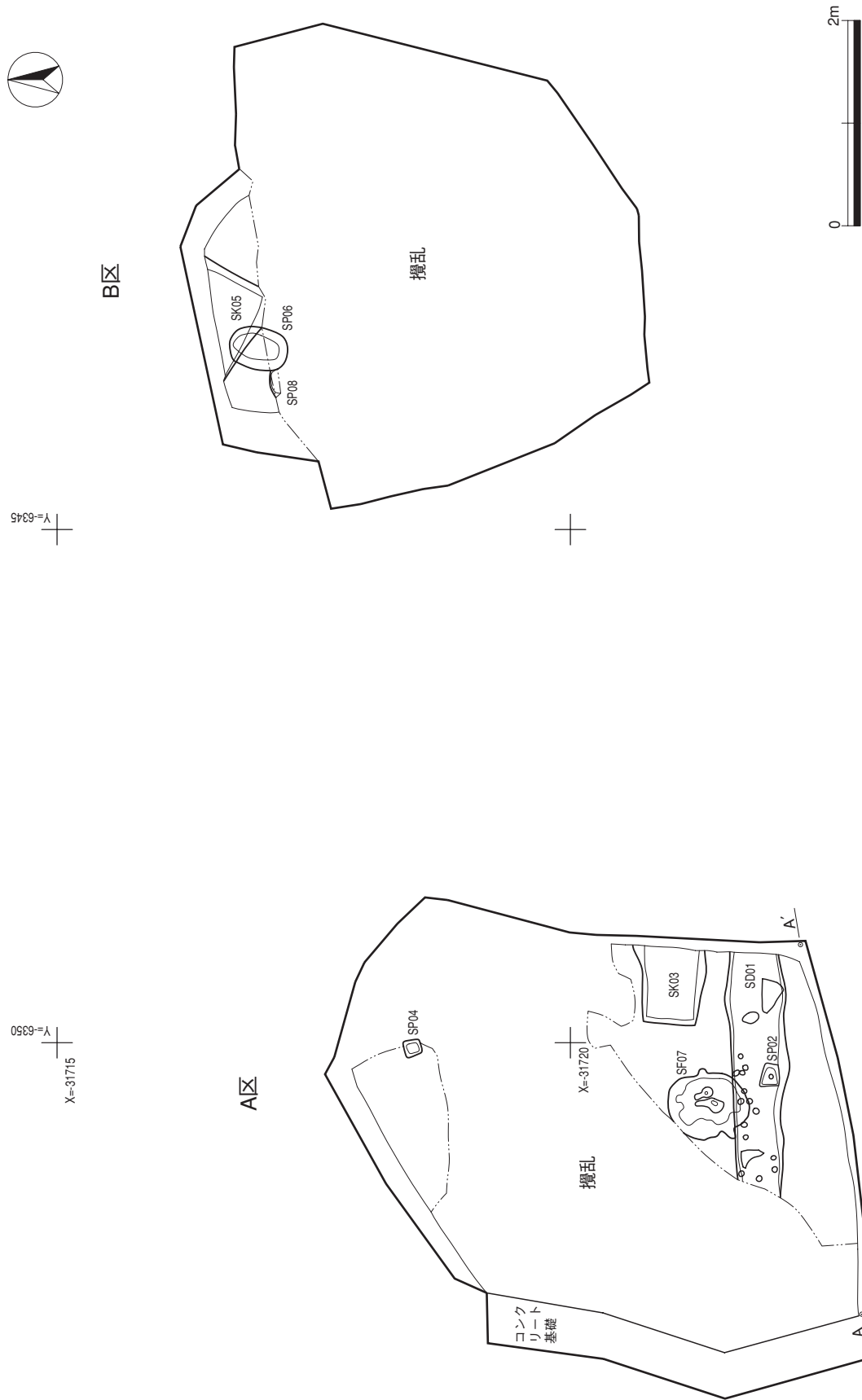
I-1 図 調査地点の位置

## 第4節 調査の概要

調査区は便宜的に西側の樹木移植予定地をA区、東側をB区と命名した（I-3図）。A区、B区とも調査区の大部を近代以降に攪乱されているが、遺存していたA区東南隅、B区北側においては、表土が30～50cmの厚さで堆積しており、以下江戸時代末～近代初頭の盛土が50～60cm程度確認された。A区では標高15m付近において灰褐色を呈する硬化面が確認され（I-2図）、その硬化面を切り込んでSD01、SK03などの遺構が確認された。これらはSD01と切り合いを有するSP02を含めて、主軸方位、検出遺物などから前田上屋敷後期に比定される遺構群である。硬化面下約20cmからローム面（Ⅲ層）検出され、縄文時代の炉穴（SF07）が確認された。B区ではA区で確認された硬化面は認められなかった。検出された3基の遺構SK05、SP06、SP08は主軸方位がA区の遺構とは異なっており、共伴遺物も切り合いの最も新しいSK05から17世紀後半の遺物が出土しており、前田下屋敷期に比定される遺構群であろうと推定できた。



I-2図 A区南壁土層図



I-3 図 理学部 1 号館前地点全体図

## 第Ⅱ章 縄文時代の遺構・遺物

検出された縄文時代の遺構は、炉穴 1 基 (SF07) である。

### SF07 (Ⅱ-1、2 図)

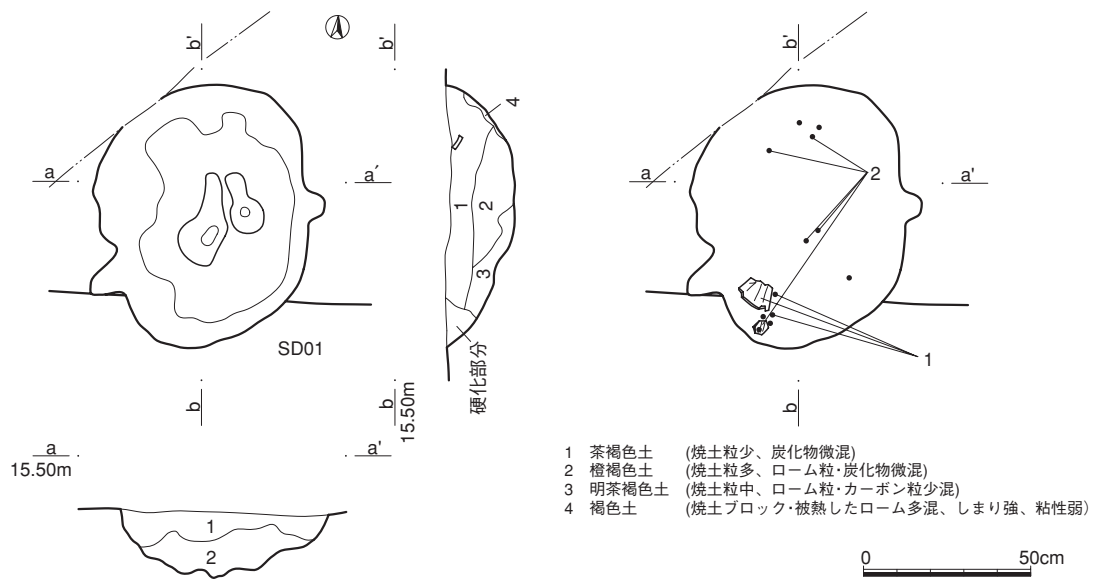
**遺構** SF07 は縄文時代早期後葉条痕文期に比定される単独の炉穴であり、ローム上面にて確認された。形状はやや凹凸を伴うが、南北に主軸を有する楕円形を呈し、確認面における規模は南北 78cm、東西 70cm、深さは最大 20cm を呈する。壁、坑底は凹凸を有しており、全体的に火を受けてはいるが、それほど顕著ではない。このうち北側の一部がやや火を強く受けた痕跡 (4 層) が確認でき、北側を燃焼部として利用していたと推定できる。また、炉穴特有の切り合い、作り替えなども観察されず、比較的短期間の使用と推定できる。

**遺物** 本遺構からは 24 点の土器片が出土している。胎土中には繊維、粒径 3～10mm の粗砂粒が含まれ、器面には条痕が見られるといった共通の特徴から同一個体であろうと推定できた。縄文時代早期後半の条痕文系土器に相当しよう。1、2 ともに表裏面に縦位と斜方向の条痕が見られる。1 は口縁部である。口唇、口唇直下には条痕は施されていない。口縁は指頭により調整が施されるが、一部歪んでいる。胎土は表面が茶褐色、裏面が明褐色を呈する。2 は胴部である。表面は茶褐色を呈する。裏面は表面より剥落が激しく、上半が燈褐色、下半が黒褐色を呈している。

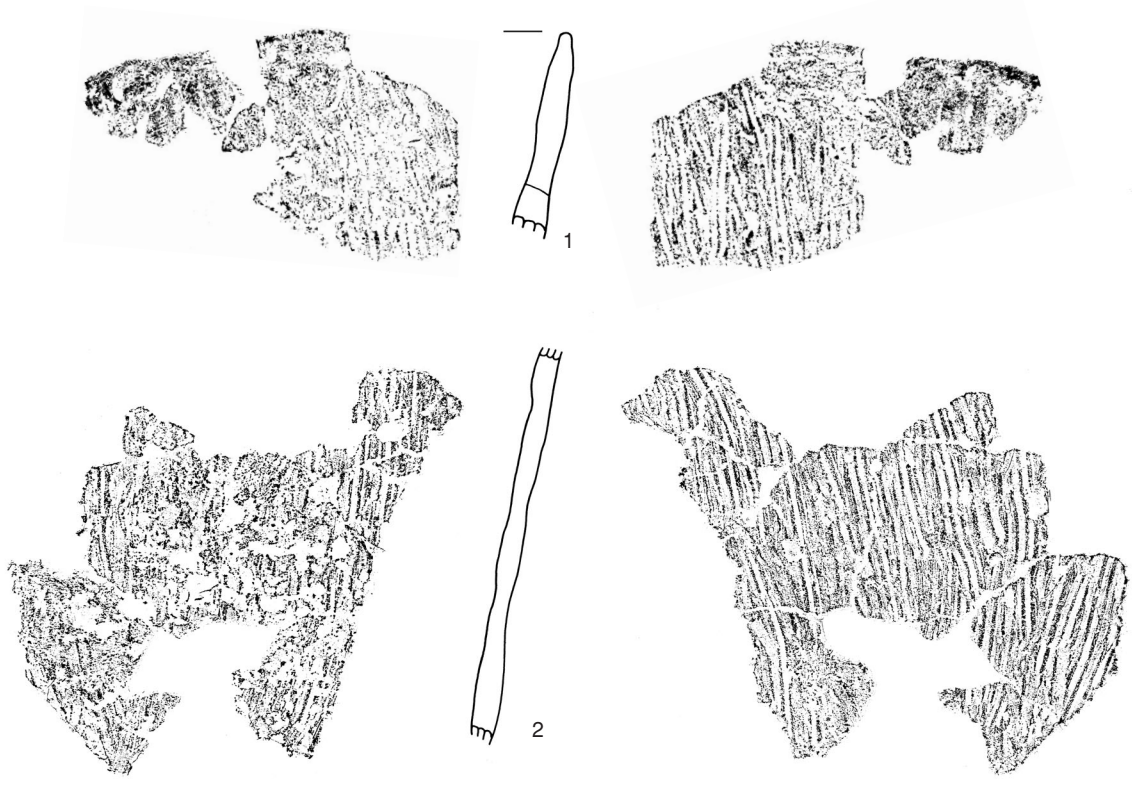
本郷キャンパスでは本地点以外に、山上会館地点、医学部附属病院中央診療棟地点、理学部 7 号館地点からも条痕文系土器が少量出土している。また、医学部附属病院看護婦宿舎地点では炉穴中から条痕文系土器が検出されている。

Ⅱ-1 表 SF07 出土土器観察表

出土遺構	図版 No.	器種	部位	胎土	文様
SF07	1	深鉢型土器	口縁	粗砂粒を含む	内外面条痕文
SF07	2	深鉢型土器	胴部	粗砂粒を含む	内外面条痕文



II-1図 SF07



II-2図 SF07出土遺物



## 第三章 江戸時代の遺構・遺物

### 第1節 遺構

確認された江戸時代の遺構は、溝1条、土坑2基、ピット4基の合計7基である。このうち、A区で確認されたSD01、SP02、SK03は灰褐色硬化面（I-2図4層）から切り込まれ、主軸方位、出土遺物の年代などから前田上屋敷後期（東大編年Vb～Ⅷd期：1730年または1738年から幕末）に比定される遺構群である。一方、B区で確認されたSK05、SP06、SP08はA区で確認された遺構と異なる主軸を有し、出土遺物も17世紀後半の製品が確認されているなど廃絶時期が異なることが確認された。B区の遺構群はいずれも切り合い関係を有し、最も新しいSK05の出土遺物の年代観から前田下屋敷期（東大編年Ib～Ⅲb期：1616年、1617年～1682年）に該当する遺構群であると推定された。

#### SD01（Ⅲ-1図）

ほぼ東西方向に主軸を有する浅い溝状遺構である。灰褐色硬化面から確認された。東側が調査区域外、西側を近代以降の攪乱によって削平され、全体の状況は不明である。確認面における規模は長さ245cm、幅は最大60cm、深さは最大10cmを計測する。溝底は径5～15cm程度の小ピットが不規則に数多く確認され、杭状の棒が打ち込まれた痕跡と推定された。土層は単層で、暗褐色土を呈する。本遺構は形状、当該時期の土地利用から詰人空間のオープンスペースにおける塀・垣跡と推定される。遺物は19世紀前半の陶磁器・土器類、瓦などが出土している。

#### SP02（Ⅲ-1図）

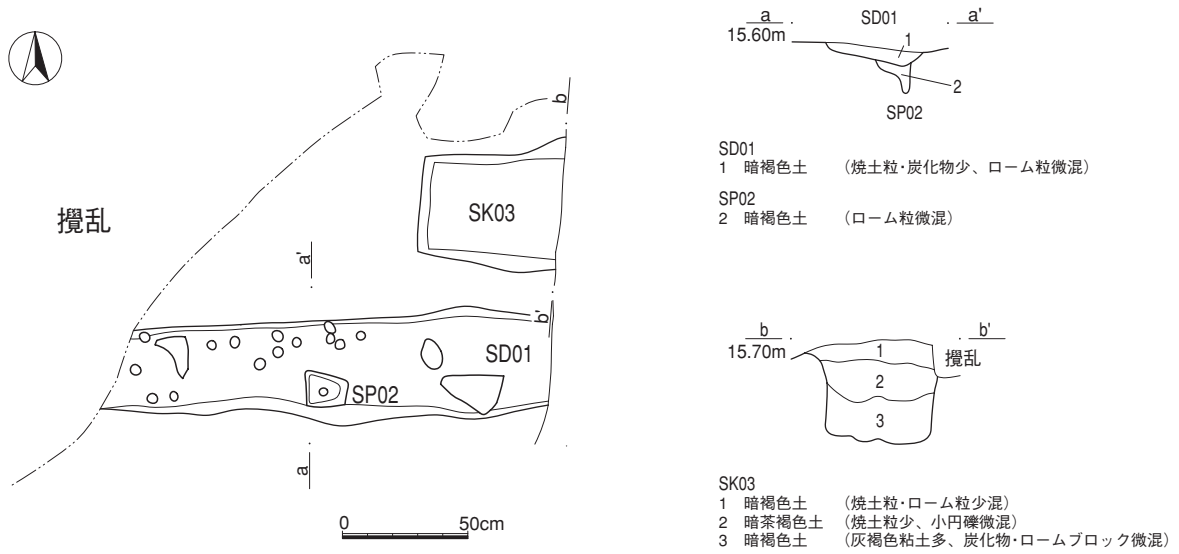
本遺構はSD01坑底付近から確認された不整形を呈するピットである。新旧関係はSD01より旧である。確認面からの規模は東西22cm、南北18cmを計測する。覆土は単層で、暗褐色土を呈する。SD01には坑底に密に小ピットが確認され、本遺構の規模はそれよりもやや大きいが、土層も類似しており、あるいは一連のものである可能性も考えられる。遺物は出土していない。

#### SK03（Ⅲ-1図）

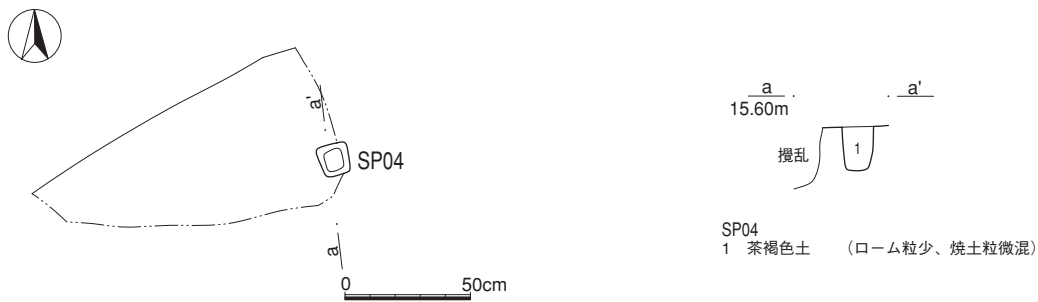
ほぼ東西方向に主軸を有する長方形を呈する土坑である。確認面はSD01同様灰褐色硬化面上面であり、同時存在していた可能性ある。遺構の東側は調査区域外まで延び、遺構の全体の様子は伺えなかった。確認面での規模は東西75cm、南北約60cm、深さは最大で55cmを計測する。坑底は概ねフラットで、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3層に分層される。遺物は19世紀前半の陶磁器・土器類、瓦、金属製品、自然遺物などが合計128点出土しており、本調査地点では最も多い。陶磁器・土器類はいずれも細片で接合率は悪く、また、自然遺物なども含まれていることから長屋脇の芥溜であった可能性も考えられる。

#### SP04（Ⅲ-2図）

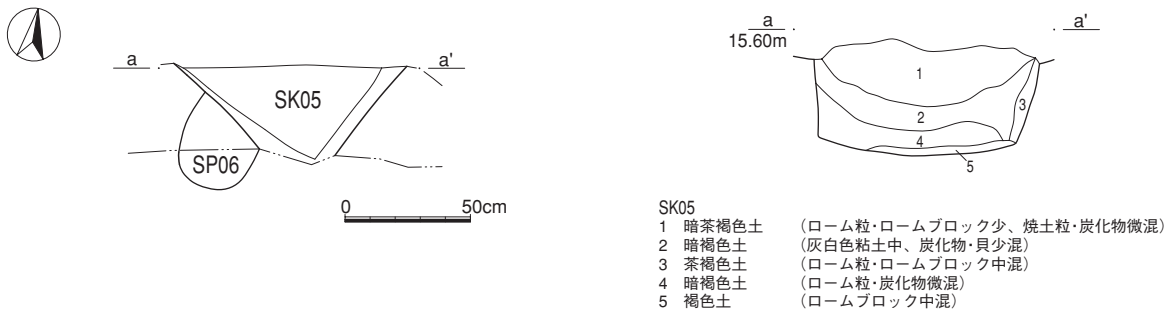
A区北側に位置する方形の小ピットである。確認面はローム上面で、規模は一辺10cm、深さ22cmを計測する。覆土はローム粒子を少量含む茶褐色土を呈する。遺物は瓦小片が数点確認されている。



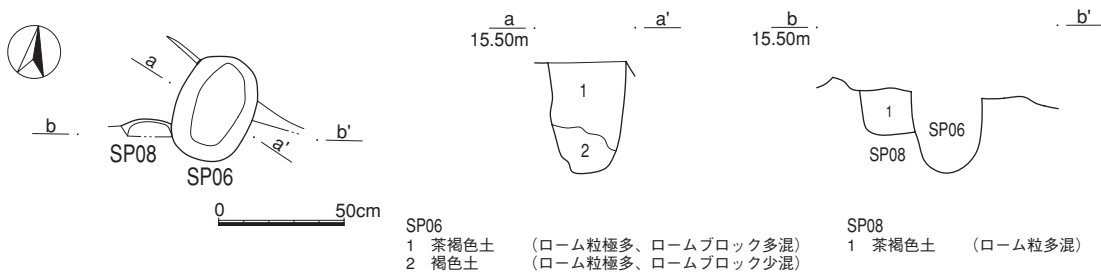
Ⅲ-1図 SD01、SK03



Ⅲ-2図 SP04



Ⅲ-3図 SK05



Ⅲ-4図 SP06、SP08

### SK05 (Ⅲ-3 図)

B区北側に位置する土坑である。SP06と切り合い関係にあり、本遺構が新である。遺構は一つのコーナーが認められた他は調査区域外にあり、全体の様相は伺うことができなかった。確認面はローム上面で、確認面における規模は一辺70cm、深さは最大50cmを計測する。坑底、壁は比較的平滑に成形され、フラットの坑底から壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は5層に分層される。遺物は17世紀後半の陶磁器・土器類を中心に少量出土している。

### SP06 (Ⅲ-4 図)

B区北側に位置する楕円形を呈するピットである。SK05、SP08と切り合い関係にあり、SK05より旧、SP08より新である。主軸はN-30°-Eである。確認面はローム上面で、確認面における規模は長径60cm、短径42cm、深さは最大60cmを計測する。坑底は北寄りに最深部があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は上下2層に分層される。遺物は出土していない。

### SP08 (Ⅲ-4 図)

B区北側に位置するピットである。SP06と切り合い関係にあり、SP06より旧である。遺構の南側は近代以降の攪乱によって壊されており全体の復元はできない。遺構はローム上面において確認され、確認面における規模は深さ18cmを計測する。覆土は単層で茶褐色土を呈する。遺物は出土していない。

## 第2節 遺物

本地点では遺構、盛土層などから破片数にして281点の陶磁器・土器などが出土しているが、小破片が多く、完形率は低い状態である。本地点で検出された遺構7基のうち、SD01、SK03、SK05において一定量の遺物が認められた。実測図に示した2遺構以外では、SK03から瀬戸・美濃系徳利や端反碗(JC-1-d)、筒形合子(TC-18)、産地不明の青土瓶(TZ-34-a)、志戸呂系の瓶(TF-10)など、19世紀前葉の製品を中心に確認されている。また、陶磁器・土器以外に、被熱した瓦の破片、鉄釘、サザエ、アワビ、ミルクイといった貝類遺体も検出されている。

### SD01 (Ⅲ-5 図)

1はロクロ成形の塩壺でDZ-51-wに分類される。胎土は橙褐色を呈し、底部は左回転の糸切り離しである。2は鉄釘である。全面が錆に覆われている。その他に、瀬戸・美濃系の徳利や磁器製品が見られ、本遺構は19世紀初頭頃の製品が主体である。

### SK05 (Ⅲ-5 図)

1は瀬戸・美濃系陶器碗でTC-1-aaに分類される。底部は無釉である。2は肥前系染付磁器で小振りの鉢である。JB-5-fに分類される。見込みには草花文、内外面には網目文、高台脇には櫛歯文、高台内には「太明」の文字が呉須で描かれている。17世紀後半の製品と思われる。3、4はかわらけである。胎土は褐色を呈し、底部は左回転の糸切り離しである。DZ-2-bに分類される。3は口縁の一部が欠けているものの、ほぼ完形であり、口唇部全周の2/3程度に灯心痕が認められる。底部の約半分にススが付着している。4は口縁部の3/4程度が欠損しており、その一部に灯心痕が認められる。5は軒平瓦である。中心飾り、唐草、子葉で構成される。中心飾りは8字状の中央と内湾する脇、中央下の点珠の4単位で構成される。その他に、17世紀後半の製品である瀬戸・美濃系の菊皿(TC-2-k)も含まれている。本遺構からは17世紀後半の製品が中心に出土している。

遺構外 (Ⅲ-5 図)

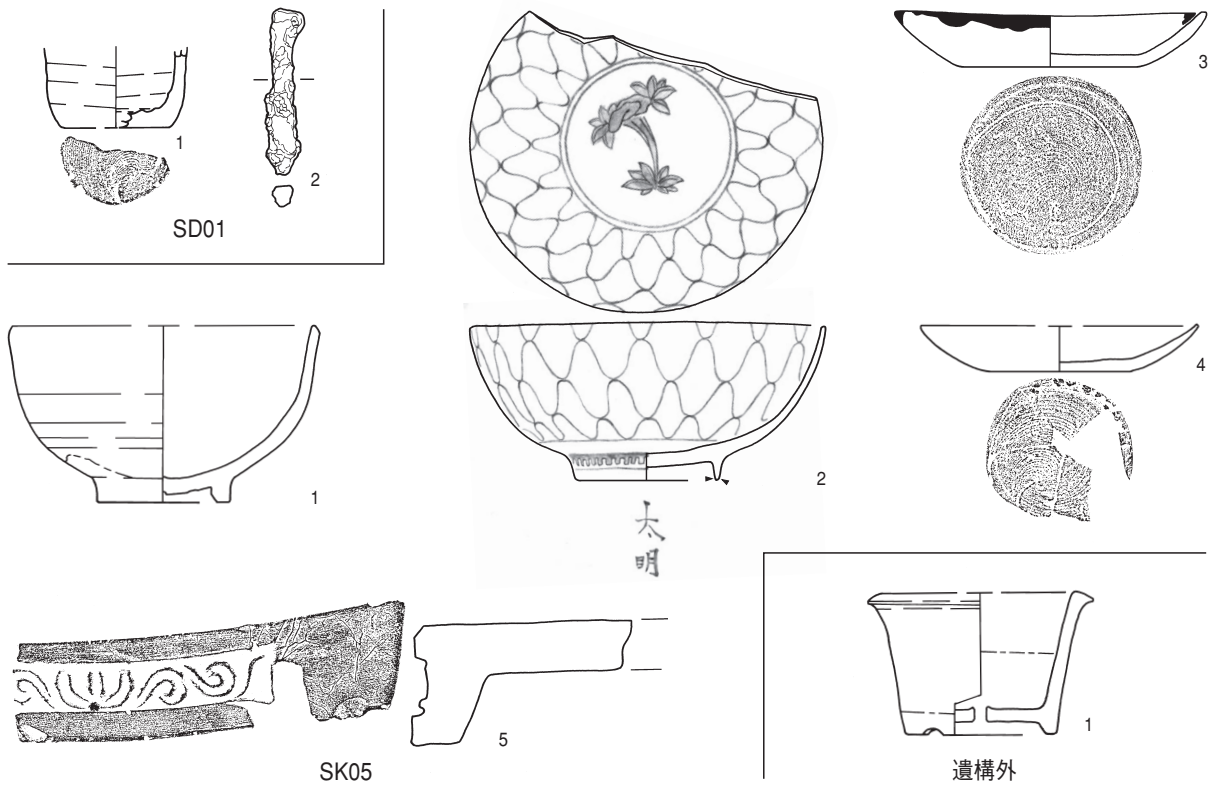
1 は盛土層中から出土した瀬戸・美濃系陶器植木鉢で、TC-21 に分類される。底部中央には穿孔があり、高台の一部が半円状に削られている。内面上半から外面下半まで鉄釉・灰釉流しである。盛土層中からは、その他に、瀬戸・美濃系の徳利 (TC-10-c,d)、香炉・火入れ (TC-9-a)、油受け皿 (TC-40-c)、壺・甕 (TC-15-a)、志戸呂系の瓶 (TF-10)、肥前系磁器片 (JB)、硬質瓦質筒形火鉢 (DZ-31-j) など認められている。

Ⅲ-1 表 出土遺物観察表 (陶磁器・土器類)

出土遺構	No.	分類			法量 (cm)			釉薬	灯心痕	備考
		胎土・産地	器種	小器種	口径	底径	器高			
SD01	1	DZ	51	w	—	(4.2)	—			左回転
SK05	1	TC	1	aa	(11.8)	5.2	7.0	灰釉		
SK05	2	JB	5	f	13.9	5.5	6.2	染付		
SK05	3	DZ	2	b	12.0	7.0	2.2		○	スス付着、左回転
SK05	4	DZ	2	b	(10.8)	5.6	1.9		○	左回転
遺構外	1	TC	21		(7.6)	5.9	5.6	鉄釉・灰釉		底部穿孔

Ⅲ-1 表 出土遺物観察表 (その他胎質)

出土遺構	No.	種別	法量 (cm)			備考
			長さ	幅	厚さ	
SD01	2	釘	6.5	1.3	—	
SK05	5	軒平瓦	—	—	2.0	唐草



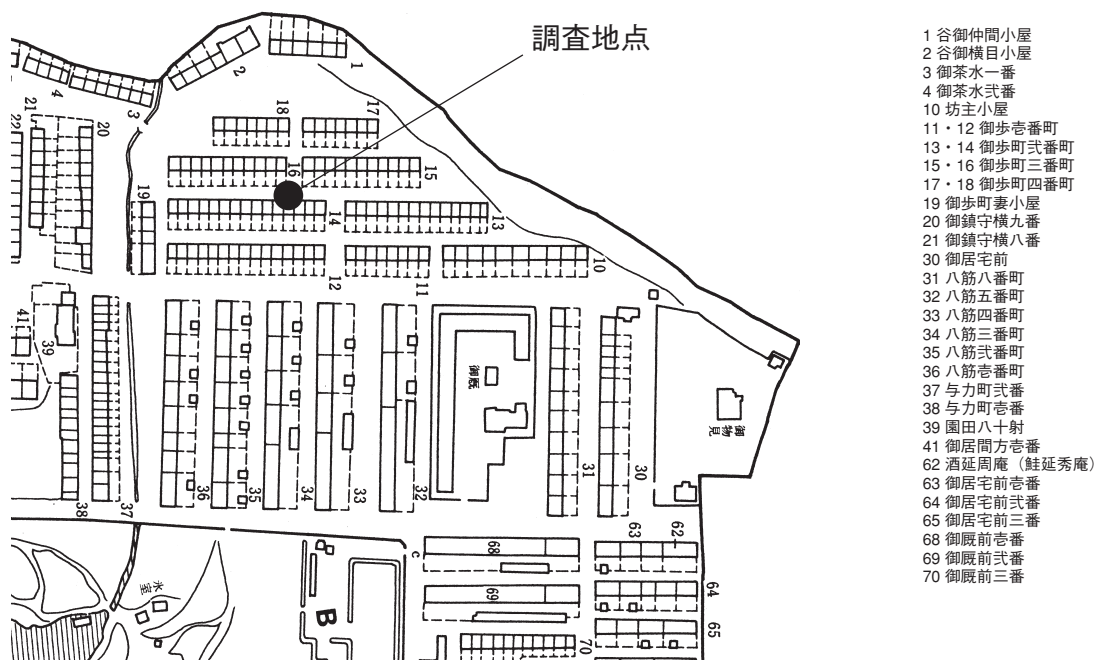
Ⅲ-5 図 SD01、SK05、遺構外出土遺物

## IV章 まとめ

本地点は、32m<sup>2</sup>と狭い面積の発掘調査となり、調査区全体の遺存状態も決して良好とはいえないものであった。

縄文時代では東京大学本郷構内の遺跡では台地東端部を中心に後期から晩期にかけて比較的多く土器が確認されているが（香取 2000）、活動の痕跡である遺構はそれほど濃密に分布している状況ではない。しかし、本調査によって確認された炉穴は、1基とはいえ本郷台地東側における三四郎池から流下する小河川によって形成された、現在の理学部1号館およびその東側を含めた小台地突端部に存在している。当該地域の地形を再確認させると共に縄文時代条痕文期における活動の痕跡が確認でき、この意義は決して小さいとはいえない。

江戸時代では絵図面が確認されていない前田下屋敷時代に屋敷の縁辺部にあたる本調査地B区から、遺構が切り合いを持つなど濃密な分布状況が伺え、調査区周辺が17世紀第三四半期には利用されていたことが確認できた。しかし一方では、これら遺構群の主軸方位が現在の春日通り方位、現在の本郷通り（旧中山道）方位とも異なった方位で構築されており、これらを含めて当該期の前田藩邸内土地利用が検討課題となつてこよう。また、A区で確認された前田上屋敷後期の遺構群は、建物周りの硬化面とその何かを区切る塀・垣跡と推定できたが、1840～45年に描かれたとされる「江戸御上屋敷絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）によると高級家臣が居住したとされる八筋長屋（細川 1989）の外側、「御歩町〇番」と記されている長屋部分に位置し、長屋内の間取りも細かく描かれており、下級家臣の居住空間であることが看取できる。検出された遺構は主軸方位もこれに合致していることから下級長屋空間の一部と思われるが、本調査では抽出できた情報が少なく、これを確定するには至らなかった。第三章で呈示した塀・垣や芥溜は可能性として今後の成果に生かしたい。



IV-1 図 幕末における調査地点の位置（原祐一、香取祐一作製）

## 参考文献

- 麻生優・白石浩之 2000『改訂新版 縄文土器の知識 I 草創・早・前期』東京美術
- 香取祐一 2000「東京大学医学部附属病院病棟地点の土器廃棄場について」『東京考古』18
- 金子直行 1999「関東地方 早期後葉」『縄文時代』10号 縄文時代研究会
- 東京大学遺跡調査室 1989『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』
- 東京大学遺跡調査室 1990a『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
- 東京大学遺跡調査室 1990b『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 東京大学本郷構内の遺跡山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』東京大学構内遺跡調査研究年報2別冊
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005a『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院外来診療棟地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005b『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6 東京大学本郷構内の遺跡工学部1号館地点』
- 成瀬晃司 1997「医学部附属病院看護婦宿舎地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報1』東京大学埋蔵文化財調査室
- 細川 義 1989「江戸時代における理学部7号館地点の変遷」『理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室
- 堀内秀樹 1996「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報1』東京大学埋蔵文化財調査室
- 野内秀明 2001「条痕文土器群後半期の初段階 一茅山下層式・茅山上層式土器とその周辺の土器群一」『考古論叢 神奈河』第9集 神奈川考古学会

## 報告書抄録

ふりがな	とうきようだいがくこうないいせきちょうさけんぎゆうねんぽう							
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報							
副書名								
巻次	5							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	堀内秀樹（編） 吉田千沙子							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒 153-8904 東京都目黒区駒場 4 丁目 6 番 1 号 駒場リサーチキャンパス内							
発行年月日	2006 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきようだいがくほんごうこうない いせき 東京大学本郷構内の遺跡 (本郷台遺跡群) りがくけいけんきゅうか 理学系研究科・ りがくぶ ごうかんまえ ちてん 理学部 1 号館前地点	とうきようと 東京都 ぶんきょうく 文京区 ほんごう 本郷 7-3-1	13105	47	35° 42' 51"	139° 45' 47"	2004 年 11 月 29 日 ∩ 2004 年 12 月 3 日	32	東京大学理学部 1 号館前樹木移 植に伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東京大学本郷構内の遺跡 (本郷台遺跡群) 理学系研究科・ 理学部 1 号館前地点	生活関連	縄文時代近 世	炉穴、土坑、ピット	陶磁器、土器、 金属製品、石製品				

## 第3部 東京大学埋蔵文化財調査室要項

1. 2003～2005 年度室員活動内容
2. 資料の活用
3. 東京大学本郷構内武田先端知ビル地点検出の方形周溝墓の保存
4. 医学部附属病院病棟地点出土木製品保存処理完了報告書



## 1. 2003～2005 年度室員活動内容

### 成瀬 晃司

#### 執 筆

- ・2003 年 10 月 30 日  
「書評『青森県史 資料編 考古 4 中世・近世』」『弘前大学 国史学研究』第 115 号 75-80 頁
- ・2004 年 5 月 15 日  
「2003 年の歴史学界 -回顧と展望- 考古」『史学雑誌』第 115 編 第 5 号 31-36 頁
- ・2004 年 9 月 1 日  
「江戸遺跡から出土した「志田焼」」『後期伊万里 志田焼 -大皿編-』73-95 頁

#### 講 演

- ・2003 年 6 月 11 日  
「発掘からみる前田家の食卓」(文京区民大学講座)
- ・2003 年 11 月 14 日  
「加賀藩本郷邸 -東大構内-」(朝日カルチャーセンター横浜『よみがえる江戸の実像』)
- ・2004 年 3 月 2 日  
「遺跡からみた加賀藩本郷邸」(佐賀県庁)
- ・2004 年 11 月 21 日  
「発掘された大名屋敷 -加賀藩本郷邸を中心に-」(流山市ふるさと入門講座考古学コース)
- ・2005 年 2 月 25 日  
「江戸っ子だってグリーンコンシューマー -江戸のリサイクルとゴミの処理-」(文京区消費者研修会)

#### 研究発表

- ・2004 年 12 月 2 日  
「本郷邸の調査 -近年の発掘事例より-」(平成 16 年度金沢城調査研究関係機関連絡会)
- ・2005 年 1 月 30 日  
「上絵小坏と商標 -江戸遺跡出土資料を中心に-」(第 18 回江戸遺跡研究会大会「江戸時代の名産品と商標」)

### 堀内 秀樹

#### 執 筆

- ・2003 年 9 月 1 日  
「江戸遺跡出土産地不明の貿易陶磁」  
『貿易陶磁研究』23 15-22

- ・ 2004年3月26日  
「まとめ ①5区出土の陶磁器・土器について」  
『四日市遺跡発掘調査報告書』東広島市教育文化振興事業団 171-178
- ・ 2004年5月25日  
「江戸考古学」、「産業考古学」、「歴史考古学」  
『現代考古学事典』同成社
- ・ 2005年3月1日  
「茶の湯考古学 江戸の大名屋敷 加賀藩上屋敷の茶道具」  
『淡交』723号 淡交社 83-87
- ・ 2005年3月18日  
「(3) まとめ ①9区出土の陶磁器・土器について」  
『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅱ』東広島市教育文化振興事業団 144-151
- ・ 2005年3月31日  
「外来診療棟地点出土陶磁器・土器類について」  
『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 医学部附属病院外来診療棟地点発掘調査報告書』
- ・ 2005年3月31日  
「外来診療棟地点 SK171 出土陶磁器の自然科学的調査」  
『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 医学部附属病院外来診療棟地点発掘調査報告書』  
降幡順子・村上隆 共著
- ・ 2005年3月31日  
「加賀藩・大聖寺藩江戸屋敷で使用された肥前磁器と「古九谷」」  
『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 医学部附属病院外来診療棟地点発掘調査報告書』
- ・ 2005年3月31日  
「加賀藩本郷邸における廃棄物処理に関する考察」  
『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6 工学部1号館地点発掘調査報告書』
- ・ 2005年3月  
「近世陶磁器の流通と消費 -四日市遺跡出土の陶磁器-」  
『近世宿場町の警官と流通 -西国街道の宿場町・四日市遺跡を掘る-』東広島市教育委員会
- ・ 2005年4月1日  
「茶の湯考古学 加賀藩上屋敷における家臣の喫茶」  
『淡交』724号 淡交社 87-91

#### 研究発表

- ・ 2003年5月25日  
「オランダ国内諸都市出土の日本製品 -特に肥前磁器を中心に-」  
日本考古学協会第69回総会  
於：日本大学文理学部
- ・ 2004年1月31日  
「廃棄する意識」  
『江戸遺跡研究会第17回大会 続 遺跡からみた江戸のゴミ』

- 於：江戸東京博物館
- ・2004年9月12日  
「江戸・東京出土の珉平焼」  
第6回四国城下町研究会『四国・淡路の陶磁器Ⅲ ー珉平焼の生産と流通ー』  
於：洲本市淡路文化史料館
  - ・2005年1月29日  
「江戸における情報と考古資料」  
『江戸遺跡研究会第18回大会 江戸時代の名産品と商標』  
於：台東区生涯学習センター
  - ・2005年11月12日  
「近世遺跡出土陶磁器の基礎的研究 ー段階設定と社会的背景ー」  
日本大学文理学部史学科学術研究発表会  
於：日本大学文理学部
  - ・2006年1月14日  
「江戸大名藩邸における京焼の消費 ー京焼と伊万里の出土様相の相違からー」  
関西陶磁史研究会第5回研究集会『京焼の成立と展開 ー押小路、栗田口、御室ー』  
於：大手前大学

## 講演

- ・2004年3月7日  
「都市江戸の発掘調査」  
『考古から近世・近代へのアプローチ』神奈川県考古学会
- ・2004年6月12日  
「消費遺跡出土陶磁器類の編年について」  
(平成16年度(財)瀬戸市埋蔵文化財センター企画展に伴う第1回検討会)大成可乃共同発表
- ・2005年3月3日  
「本郷の町と加賀藩邸」  
平成16年度文化財講座『江戸の町の発掘調査 ー日本橋から巣鴨までー』  
於：豊島区立生活産業プラザ
- ・2005年3月26日  
「茶器・食器のグランドデザインと海外交流」  
新宿歴史博物館考古学講座「江戸のデザイン ー考古資料が語る文様・モチーフの意味と魅力ー」  
於：新宿区新宿歴史博物館
- ・2005年12月1日  
「地中の江戸が伝える情報」  
平成17年度区民大学入門講座『考古学への招待』  
於：品川区立品川歴史館
- ・2005年12月15日  
「考古資料と飲食文化 ー痕跡と行為ー」  
生活文化論

於：女子栄養大学

・2006年1月26日

「江戸藩邸を掘る」

平成17年度城と庭の探求講座『金沢城大学』

於：石川県生涯学習センター

## 原 祐一

### 執 筆

原祐一、小泉好延、伊藤博之 2000 「近世の真鍮四文銭における亜鉛の研究 —製造および亜鉛輸入文献による考察—」『産業考古学会第24回（2000年度）総会研究発表講演論文集』PP.25-28

小泉好延、伊藤博之、原祐一、西脇康 2000 「近世貨幣の製造技術と金銀定量法に関する研究」『産業考古学会第24回（2000年度）総会研究発表講演論文集』PP.45-48

原 祐一 2001 「東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点の方形周溝墓」東京大学総合研究博物館、東京大学埋蔵文化財調査室『第3回考古科学シンポジウム』PP.61-66

小泉好延、小林紘一、原祐一、他 2001 「東京大学弥生構内武田先端知ビル出土のガラス玉材質分析 —典型的な弥生ガラス—」東京大学原子力研究総合センター、東京大学総合研究博物館、東京大学埋蔵文化財調査室『第3回考古科学シンポジウム』発表要旨PP.93-97

原 祐一 2001 「東京大学武田先端知ビル地点の射的場跡と出土弾丸」東京大学原子力研究総合センター、東京大学総合研究博物館、東京大学埋蔵文化財調査室『第3回考古科学シンポジウム』PP.137-141

原 祐一 2001 「考察2 武田先端知ビル地点の射的場跡と出土弾丸」東京大学埋蔵文化財調査室 2001『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点2次調査速報』（東京大学施設部提出文書）PP.18-20

原 祐一 2002 「工学部武田先端知ビル地点の発掘調査 —明治時代の射的場跡と弥生時代の方形周溝墓—」東京大学広報委員会 2002.2.27『学内広報 No.1231』PP.7-8

原 祐一 2002 「2. 東京大学医科学研究所（旧大村藩下屋敷）から出土した鉛塊について」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査研究年報3 1998・1999年度』PP.66-68

原 祐一 2002 「農学部総合研究棟（仮称）建設予定地の発掘調査」東京大学広報委員会 2002.4.24『学内広報 No.1237』PP.23-24

原祐一、森本幹彦 2002 「東京大学本郷構内の遺跡工学部武田先端知ビル地点で検出した方形周溝墓」『東京考古20』東京考古談話会 PP.59-70

原 祐一 2002 「資料紹介 東京大学医科学研究所（旧大村藩下屋敷）から出土した鉛塊」『東京考古20』P.188

石原道知、原祐一 2002 「東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点の方形周溝墓の保存と土器の修復」『文化財保存修復学会 第24回大会発表要旨集』PP.160-161

- 原祐一、小泉好延、中野忠一郎、松崎浩之、小林紘一 2002 「古代ガラスのPIXE分析－東大弥生遺跡出土ガラス玉－」PIXE研究協会、第19回PIXEシンポジウム実行委員会『第19回PIXEシンポジウム要旨集』PP.5-1
- 原祐一、小泉好延、伊藤博之、中野忠一郎、松崎浩之 2002 「中世から明治時代の遺跡から出土した鉛製品の材質分析」PIXE研究協会、第19回PIXEシンポジウム実行委員会『第19回PIXEシンポジウム要旨集』PP.5-2
- 小泉好延、原祐一、D.Tseveendorj、B.Tsogtbaatar、加藤晋平、白石典之、古谷尊彦、三宅俊彦、加納哲哉、飯田史恵、内田宏美「モンゴル国所在アウラガ遺跡(チンギス=カン宮殿址)のガラス分析」考古科学シンポジウム世話人会、國學院大學考古学研究室『第4回考古科学シンポジウム』PP.57-60
- 原祐一 2003 「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部総合研究棟(2002年度)富士山宝永火山灰の出土状況」考古科学シンポジウム世話人会、國學院大學考古学研究室『第4回考古科学シンポジウム』PP.67-71
- 松崎浩之、原祐一 2003 「東大宝永火山灰層前後のC-14年代測定」考古科学シンポジウム世話人会、國學院大學考古学研究室『第4回考古科学シンポジウム』PP.73-75
- 原祐一 2003 「ポスターセッション追加資料 東京大学本郷構内出土富士山宝永火山灰の展示－調査成果公開、他領域との研究、保存－」『第4回考古科学シンポジウム』
- 原祐一、小泉好延、中野忠一郎、松崎浩之 2003 「東京大学本郷構内から出土した江戸時代のガラス分析」PIXE研究協会、第20回PIXEシンポジウム実行委員会『第20回PIXEシンポジウム発表要旨』PP.3-2
- 小泉好延、原祐一、中野忠一郎、松崎浩之 2003 「PIXE法による弥生時代から古墳時代のガラス材質研究」PIXE研究協会、第20回PIXEシンポジウム実行委員会『第20回PIXEシンポジウム発表要旨』PP.3-1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 「東京大学駒場Iキャンパスで発見された後期旧石器時代前半の遺跡－国際学術交流棟建設予定地の遺跡調査－」『学内広報NO.1279 2004.1.14』
- 原祐一、川口武彦、伊比博和、松崎浩之、春原陽子 2004 「東京大学駒場構内遺跡 学術交流棟地点」『石器文化研究会 第10回 石器文化研究交流会発表要旨』PP.1-6
- 原祐一・小泉好延・森本幹彦・堀江武史・石原道知 2004 「東京大学工学部武田先端地ビル地点検出の方形周溝墓－ガラス小玉の材質分析・土器・保存公開、弥生町遺跡と江戸から明治の開発－」『日本考古学協会第70回(2004年度)総会発表要旨』PP.85-88
- 原祐一、小泉好延、中野忠一郎、松崎浩之 2004 「東京大学構内出土遺物のPIXE分析3」第21回PIXEシンポジウム組織・実行委員会、PIXE研究会、東京工業大学大学院理工学研究科、東京工業大学原子炉工学研究所『第21回PIXEシンポジウム発表要旨』P.1
- 小泉好延、小林紘一、中野忠一郎、石原道知、松崎浩之、原祐一 2004 「弥生時代のガラス材質のPIXE分析」第21回PIXEシンポジウム組織・実行委員会、PIXE研究会、東京工業大学大学院理工学研究科、東京工業大学原子炉工学研究所『第21回PIXEシンポジウム発表要旨』P.2
- 伊藤博之、小泉好延、原祐一 2005 「真鍮、黄銅の歴史」『産業考古学会2005年新年例会(2005年1月15日産業考古学会要旨)』

渡辺マリカ、武田昭子、増田勝彦、原祐一 2005 「P36 近世出土塗装資料の製作技法の研究 -大聖寺藩上屋敷跡出土漆製品について-」文化財保存修復学会『文化財保存修復学会第27回大会発表要旨』PP.150-151

原 祐一 2005 「書評と紹介 斎正人編『現代考古学辞典』」日本歴史学会編集『日本歴史』平成17年12月号第691号 PP.125-127

#### 発 表

・2000年12月16日

産業考古学会鉾山属分科会例会 東京工業大学百周年記念館

「近世の遺跡から出土した棹秤について」

・2001年6月2日

産業考古学会鉾山金属分科会例会 2001年度第1回例会 東京工業大学百周年記念館

「近世初頭の遺跡から出土した銅製品について」

・2003年6月28日

産業考古学会鉾山金属分科会例会 2003年度第1回例会 文京区不忍ふれあい館

「東京大学本郷構内から出土した大砲の弾と弾丸について」

#### 講 演

・2004年3月26日

考古科学講座 杉並区科学館

「東京大学本郷構内遺跡 考古科学の実践」

・2005年3月5日

文京むかしむかし展 文京ふるさと歴史館

「東京大学構内における弥生遺跡の調査」

#### 大成 可乃

#### 執 筆

・2005年5月20日

「2004年の歴史学界-回顧と展望」『史学雑誌』第114編第5号 35頁-39頁

・2006年3月31日

『東京大学本郷構内の遺跡 東京大学医学部附属病院外来診療棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5

#### 講 演

・2004年6月12日

「消費遺跡出土陶磁器類の編年について」(平成16年度(財)瀬戸市埋蔵文化財センター企画展に伴う第1回検討会)堀内秀樹共同発表

追川 吉生

執 筆

・2004年12月10日

『江戸のミクロコスモス ー加賀藩江戸屋敷ー』（新泉社）

発 表

・2005年 3月16日

「東京大学本郷構内の遺跡 地震研究所総合研究棟地点の発掘調査」（江戸遺跡研究会）

・2005年12月18日

「文京区 本郷構内の遺跡」（第31回東京都遺跡調査・研究発表会）

## 2. 資料の活用

年度	貸出先	貸出・掲載目的	貸出・掲載資料
2003	東京国立博物	常設展示	御殿下記念館地点出土の陶磁器ほか 37 点
	江戸東京博物館	常設展示	理学部 7 号館地点出土資料ほか 80 点
	飯能市郷土館	常設展示	医科学総合研究棟地点 SX207 ほか出土陶器 2 点
	芸能史研究所	加納克己『芸能史研究』No16 号	病棟地点 SK03 出土の木製人形のかしら写真撮影・掲載 7 点
	(株) 淡交社	岡 佳子「京都」『日本のやきもの』	病棟地点出土 SK03 出土陶器写真
	東京都教育委員会	『東京の遺跡散歩』	御殿下記念館地点他遺構写真 7 点・工学部武田先端地ビル地点出土ガラス玉管玉写真 1 点
	町田市立博物館	『町田市立博物館 30 周年記念展 Part II - 精選東南アジア陶磁』展	医学部附属病院看護婦舎出土陶磁器 1 点
	品川区立品川歴史館	『しながわの大名下屋敷』展	医学部附属病院中央診療棟地点池出土土器、墨書木札、箸、折敷・医科学総合研究棟地点出土金箔かわらけ片
	(株) 平凡社	『暮らしの化学』	経済学部総合研究棟溶姫御殿の石組み遺構写真 1 点
	日本専門図書出版(株)	『日本通貨図鑑』	病棟地点出土花振雛小判 1 点
	根津美術館	『仁清の茶碗と館蔵名碗撰』	医学部附属病院中央診療棟地点 E20-1 点ほか 5 点
	(株) 土木工学社	東京の地下構造物 『トンネルと地下』12 月号	経済学部総合研究棟溶姫御殿の石組み遺構写真 1 点
(株) 小学館	原田信男『江戸の料理と食生活』	御殿下記念館地点梅之御殿出土焼塩壺 1 点	
2004	東京国立博物	常設展示	御殿下記念館地点出土の陶磁器ほか 37 点
	江戸東京博物館	常設展示	理学部 7 号館地点出土資料ほか 80 点
	飯能市郷土館	常設展示	医科学総合研究棟地点 SX207 ほか出土陶器 2 点
	(有) スタッフソリトン	CS 放送 SkyPerfecTV Mondo 『ままごと考』	工学部 14 号館地点ほか出土ミニチュア写真 4 点
	日本人形玩具学会	加納克己「甲人形と操り人形-近世遺跡出土の人形かしらを中心に-」『人形玩具研究-かたち・あそび-』15 号	病棟地点出土 SK03 の木製人形のかしら写真 7 点
	金沢大学埋蔵文化財センター	佐々木花江「東大遺跡出土の色絵磁器片について」『金沢大学文化財学研究』6	医学部附属病院中央診療棟 F27-1 出土古九谷色絵皿
	朝鮮通信使文化事業推進委員会	21 世紀記念特別展『こころの交流 朝鮮通信使』図録韓国版	病棟地点講安寺 No.3310 人形 1 点
	共同通信社大阪支社 社会部	「弥生町でも新発見」 『弥生土器発見 120 年』	工学部武田先端地ビル地点写真 1 点
	(株) 角川学芸出版	荒川正明『やきもの見方』	御殿下記念館地点 678 号出土写真 1 点 医学部附属病院地点 L32-1 出土磁器写真 1 点
	(財) 出光美術館	『古九谷-その謎にせまる-』展	医学部附属病院中央診療棟 F27-1 出土磁器 1 点 .L32-1 出土 5 点ほか
	東京国立博物	『日本の考古学ガイドブック』	御殿下記念館地点・病棟地点 C2 層出土
	柏書房(株)	棚橋正博・村田裕司 『絵でよむ江戸のくらし風俗大事典』	工学部 1 号館地点 SK1 出土陶磁器写真 21 点
	朝日新聞社出版本部 週刊百科編集部	藤本強「本郷界限」『街道をゆく』第 12 号	医学部附属病院中央診療棟地点 F27-1 出土写真 1 点ほか 3 点
	港区教育委員会	『鍋島と伊万里の世界』展	医学部附属病院給水設備棟地点 AK37-1 出土磁器写真 1 点
	(株) 新潮社	荒川正明『芸術新潮』12 月号	医学部附属病院中央診療棟地点 L32-1 出土磁器ほか写真 2 点

資料活用状況 (1)



## 2. 資料の活用

年度	貸出先	貸出・掲載目的	貸出・掲載資料
2004	(株) 新泉社	追川吉生『江戸のミクロコスモス・加賀藩江戸屋敷』	経済学部総合研究棟溶姫御殿の石組み遺構ほか写真 90 点
	府中工房	「手軽に伝統の焼き物をたいけんしよう!」『今戸焼入門』	工学部 14 号館地点 SK337 出土面カタほか 17 点
2005	文京ふるさと歴史館	『弥生町遺跡発見 120 周年記念文京むかしむかし』	工学部武田先端地ビル地点出土ガラス製品 4 点ほか写真 3 点
	東京国立博物	常設展示	御殿下記念館地点出土陶磁器ほか 37 点
	江戸東京博物館	常設展示	理学部 7 号館地点出土資料ほか 80 点
	飯能市郷土館	常設展示	医科学総合研究棟地点 SX207 ほか出土陶器 2 点
	学校法人香川栄養学園	『播るーすり鉢』展	農学部家畜病院地点 SK09 出土播鉢ほか 5 点
	北國新聞社出版局	『金沢城史』	医学部教育研究棟地点 SK961 出土金箔瓦写真 1 点
	(財) 東京大学出版局	玉蟲敏子「<かざり>と<つくり>の領分」『講座 日本美術』第 5 巻	御殿下記念館地点 678 号出土染付大皿一括資料写真 1 点
	(財) 瀬戸市文化振興財団	『近世陶磁の消費遺跡－江戸・京・大坂』展	医学部附属病院地点 L32-1 出土陶磁器ほか 53 点・御殿下記念館地点遺構写真ほか 6 点
(株) 創樹社美術出版	小橋一郎「製作年代を考察出来る鍋島」『小さな蕾』2 月号	医学部教育研究棟点 SK769 ほか出土陶器ほか 2 点	

## 資料活用状況 (2)

### 3. 東京大学本郷構内武田先端知ビル地点検出の方形周溝墓の保存

石原道知（武蔵野文化財修復研究所）、向井雅信（元武蔵野文化財修復研究所）

#### はじめに

東京大学埋蔵文化財調査室の依頼により、東京大学本郷構内武田先端知ビル地点検出の方形周溝墓を保存することになった。保存方法は「シリコーンゴムとウレタンフォームを使用した遺構の剥ぎ取り」工法で復元・保存することにした。この工法はいわゆる型取りを行う複製制作とほぼ同じ工程である。遺構表面の土層を1cmから5cm程度シリコーンゴムに付着させ剥ぎ取り、そこに合成樹脂を含浸・裏打ち（FRP）して、合成樹脂の硬化後、シリコーンゴムを除去することにより、地表形状を出来る限り検出状況に近い状態で展示出来るようにする工法である。この工法で保存される方形周溝墓は、大きさが約6m×6m（36m<sup>2</sup>）、4本の単独の周溝と主体部の楕円形の土壇からなる遺構で、大きさと土質から施工する前に十分な計画と検討をし、作業に着手した。以下工程と作業内容を記す。

#### 1. シリコーンゴムによる剥ぎ取り作業

##### (1) 現地視察と土壌撒布用の薬品の選定

施工面積が広く（36m<sup>2</sup>）4つの周溝が思いのほか深く形状が抜け勾配になっていない箇所があったため、シリコーンゴムを撒布する前にシリコーン型の分割数を現地にて確認し、シリコーンゴム撒布の段取りを検討した。

土層の剥ぎ取りに使用するシリコーンゴムは、土層表面の状況（天候による土層表面の湿り具合）によって土層がシリコーンゴムに付着しないことが有り、シリコーン成分と相性の良いと思われる薬品（各種文化財の強化処理に使用する薬剤）を遺構周辺の土壌に撒布し、その上にシリコーンゴムを塗布して土層を付着させる実験をした。その結果、数種類の薬品を試したが期待していた結果（各種文化財強化用の薬剤を撒布した方がシリコーンとの接着効果が上がる）が得られなかったため、作業当日はシリコーンゴムのみを撒布することにした。

##### (2) シリコーンゴムの撒布とウレタンフォームによる裏打ち（バックアップ）作業

遺構表面に撒布するシリコーンゴムは、一般的に型取りに使用されているものに、土層表面に必要以上にシリコーンが浸透しないように粘度を高める薬剤を混入して使用する。また、シリコーンゴムの撒布には吹き付け用のリシガンを用い撒布した。シリコーンの強化のために補強材として、シリコーンゴムを強化することに特化した合成繊維の補強材を入れた。ウレタンフォームによる裏打ち作業は、まずシリコーンで覆われた遺構表面を木材の枠9分割し、剥ぎ取り後の作業を容易にするために一つ一つ枠を箱型にした。ウレタンフォームはシリコーン型のバックアップになるように分割した箱型一つ一つに注入し、硬化後シリコーン型とともに遺構から脱型した。

## 2. 合成樹脂による成形作業

### (1) 合成樹脂による裏打ちと補強

9分割された型を作業場に搬入後、シリコン型やウレタンフォームによるバックアップ型の修整を行う。修整後、合成樹脂をシリコン型に塗布するための養生をして、シリコン型に付着している余分な土を取り除いたり、逆にはげ落ちている箇所には事前に遺構周辺から採取して来た土を水でといたものを塗布した。今回使用する合成樹脂は、作業員の健康面を考え、低揮散性のポリエステル樹脂を使用することにした。合成樹脂による裏打ちの手順としては、まず剥ぎ取って来た土層表面にある程度樹脂を浸透させるために流動性のある樹脂を塗布する。その後はガラス繊維（ガラスマット）と樹脂で積層し5mmから7mmぐらいの厚さにする。

合成樹脂とガラス繊維の成型物（FRP）は一定の強度を確保しているのだが、FRPは通常ポリエステル樹脂の性質上、全体の数パーセント収縮してしまう。そのために内側に向かって反り返ってしまうので変形防止のためと、常設展示で無いため、移動や設置時などの衝撃の事を考えて硬質ウレタンと木材でFRPを補強した。

### (2) 遺構に傾斜をつける作業

本遺構は舌状台地の端に位地しているため、遺構が約10度で傾斜している。今回の保存では遺構表面の形状だけでなく遺構の傾斜もできるだけ再現する。成型物（FRP）を支えるための土台を木材で作る時に、遺構の傾斜の計測値に基づいて台に角度をつけて傾斜を出した。木材による台が完成後シリコン型とともに成型品を起こして逆転状態にし、成型品からシリコン型をはずす。

## 3. 仕上げ作業

完成した9つの成型品を、すべて組み合わせて一つの遺構に見せるために成型品同士が接する面を合成樹脂で修整して完全に密着するようにした。

仕上げに成型品から土が剥げ落ちている箇所には、現場から採取してきた土を使って修整を施した。修整をする際には、遺構の土層の色の変化を損なわないように注意した。さらに「遺構表面の土の感じを少し乾いた感じに」と要望があった。そのために成型品の表面の土層に通常使用されているアクリル系やイソシアネート系の樹脂は、ツヤが出たり、濡れ色になるために、使用できない。試行錯誤の結果、アクリル系ラテックス / モルタル接着増強剤を使って土を固定すると同時に少し乾いた感じを表現した。

	平成13年12月			平成14年1月			平成14年2月			平成14年3月		
現地視察												
遺構の型取り・搬出												
型の修正												
合成樹脂による成型（FRP）												
FRPのバックアップ・補強												
FRPに土台の取り付け												
成型物（FRP）の修整												
仕上げ												

第1表 移築工程表

## まとめ

今回の施工では上記「遺構表面の土の感じを少し乾いた感じに」という仕上がり具合には満足いく結果を残せたと言えるが、シリコーンゴムで遺構表面の土層を接着、剥ぎ取りすることに関しては、土層表面の湿りや濡れ具合によって土層の付着にかなりのむらが生じることが解った。その後の作業工程で2度にわたっての修整を必要とした。今後、水分を含んだ土層をシリコーンゴムでいかに効果的に剥ぎ取れるかが課題として残った。

## 謝 辞

今回の工法について、堀江武史氏から貴重な助言をいただいた。記して謝辞申し上げます。

## 参考文献

- 石原 道知 2001 「武田先端知ビル地点の弥生式土器修復と遺構の移築」東京大学原子力研究総合センター、東京大学総合研究博物館、東京大学埋蔵文化財調査室 『第3回考古科学シンポジウム発表要旨』 pp.125-128
- 堀江 武史 2001 「遺構保存の種類と工法」東京大学原子力研究総合センター、東京大学総合研究博物館、東京大学埋蔵文化財調査室 『第3回考古科学シンポジウム発表要旨』 pp.129-136
- 石原道知、原祐一 2002 「東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点の方形周溝墓の保存と土器の修復」文化財保存修復学会 『文化財保存修復学会 第24回大会発表要旨集』 pp.160-161
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2001 「弥生町遺跡群から検出された方形周溝墓の保存東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点の調査」(配布パンフレット)

3. 東京大学本郷構内武田先端知ビル地点検出の方形周溝墓の保存



写真1 シリコンゴムを土層付着実験



写真2 シリコンゴムの吹き付け



写真3 シリコンゴムの補強

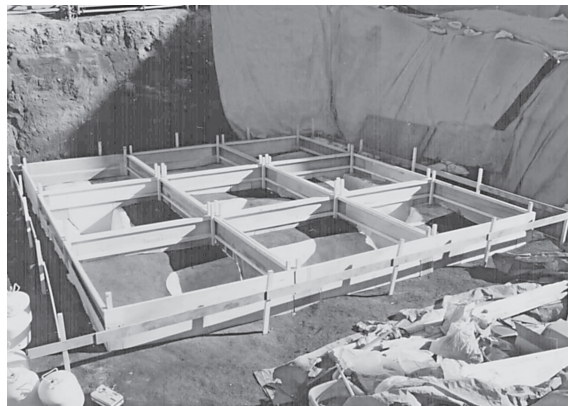


写真4 型枠の製作



写真5 ウレタンフォームの吹き付けによる裏打ち



写真6 型の修整

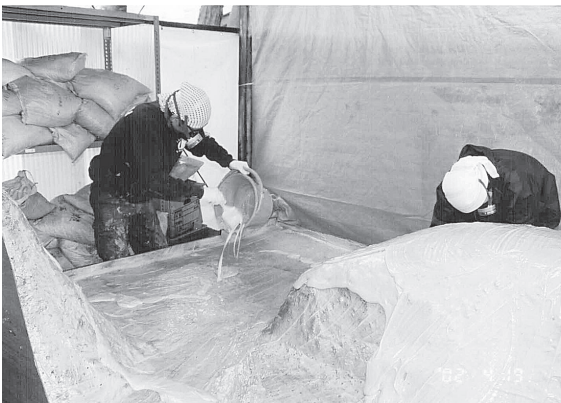


写真7 ポリエステル樹脂の塗布による裏打



写真8 ガラス繊維による補強



写真9 角材による補強

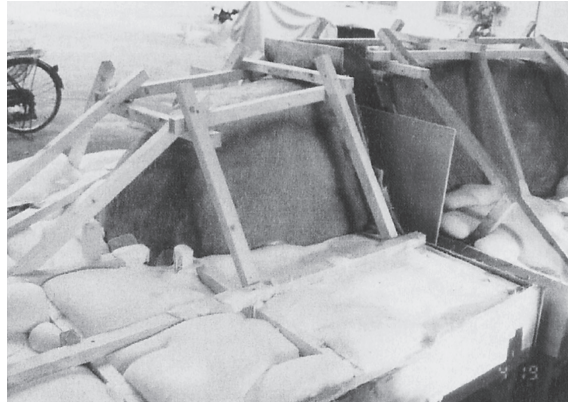


写真10 硬質ポリウレタンによる補強



写真11 脚の取り付け

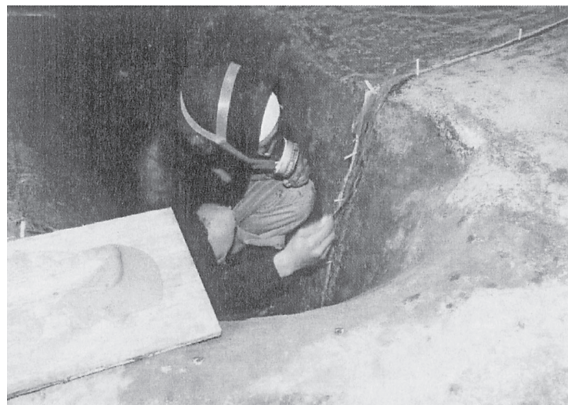


写真12 型の合わせ目の修整



写真13 表面の調整



写真14 土層に定着剤の吹き付け



写真15 仕上がり状況

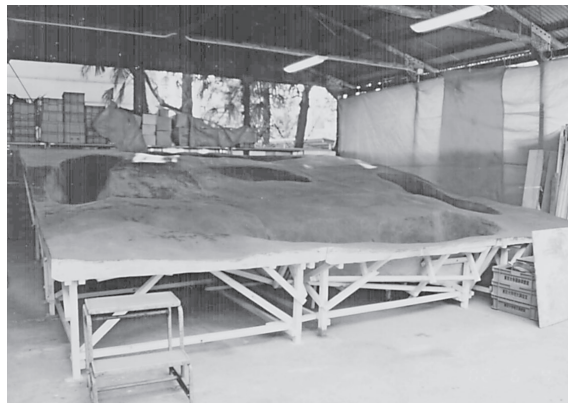


写真16 仕上がり状況



写真 17 剥ぎ取り遺構の完了写真

## 4. 医学部附属病院病棟地点出土木製品保存処理完了報告書

平成 17 (2005) 年 3 月 31 日

(財)京都市埋蔵文化財研究所

### 1) 経過

医学部附属病院病棟地点出土木製品(以下下駄とする)8点を東京大学より保存処理の依頼を受けた。

### 2) 処理概要

#### 2-1. 処理法

処理法は東京大学との協議のより、6点(1・11・68・181・259・266)はPEG(ポリエチレングリコール)を70%まで含浸させて、期間短縮のため真空凍結乾燥機を組み合わせた。他の2点(159・188)は下駄本体に鉄釘が付着しているため、PEG(ポリエチレングリコール)を50%まで含浸させて、その後真空凍結乾燥機で処理した。釘の部分については表面処理の後アクリル樹脂(パラロイドB72)を塗布し、防錆・保護を行うことを決定した。

作業は下記の表(2-3)のような内容で樹脂・薬品等を使用して行った。

その後は引き渡しまで経過観察をした。

遺物番号	分類	法量 (cm)	処理前状況	保存処理法
1	刳下駄角型	21.6 × 9.7 × 3.5	水漬	PEG 含浸 (70%) + 真空凍結乾燥
11	連歯下駄角型	22.3 × 9.6 × 7.5	水漬	PEG 含浸 (70%) + 真空凍結乾燥
68	連歯下駄角型	13.1 × 5.3 × 4	水漬	PEG 含浸 (70%) + 真空凍結乾燥
159	草履下駄	23 × 7.8 × 1.7	水漬	PEG 含浸 (50%) + 真空凍結乾燥
181	露卵下駄角型	22.3 × 8.3 × 9	水漬	PEG 含浸 (70%) + 真空凍結乾燥
188	陰卵下駄角型	22.8 × 8 × 2.7	水漬	PEG 含浸 (50%) + 真空凍結乾燥
259	露卵下駄丸型	20.8 × 7.1 × 2.1	水漬	PEG 含浸 (70%) + 真空凍結乾燥
266	露卵下駄丸型	22 × 7 × 8.4	水漬	PEG 含浸 (70%) + 真空凍結乾燥

#### 2-2. 保存処理遺物内容

処理工程	作業内容	使用樹脂・溶剤その他
表面脱色	鉄分の除去	EDTA3Na
樹脂含浸	本体保護・強化	ポリエチレングリコール
真空凍結乾燥	本体保護・期間短縮	
表面処理	表面の余分な PEG の除去	エチルアルコール
樹脂塗布	釘の防錆・強化	アクリル系樹脂 (パラロイド B72)、アセトン

#### 2-3. 処理工程作業内容

#### 2-4. 処理工程作業内容

保存処理は平成 16 年度 8 月 3 日から開始し、平成 17 年 3 月 31 日に終了した。



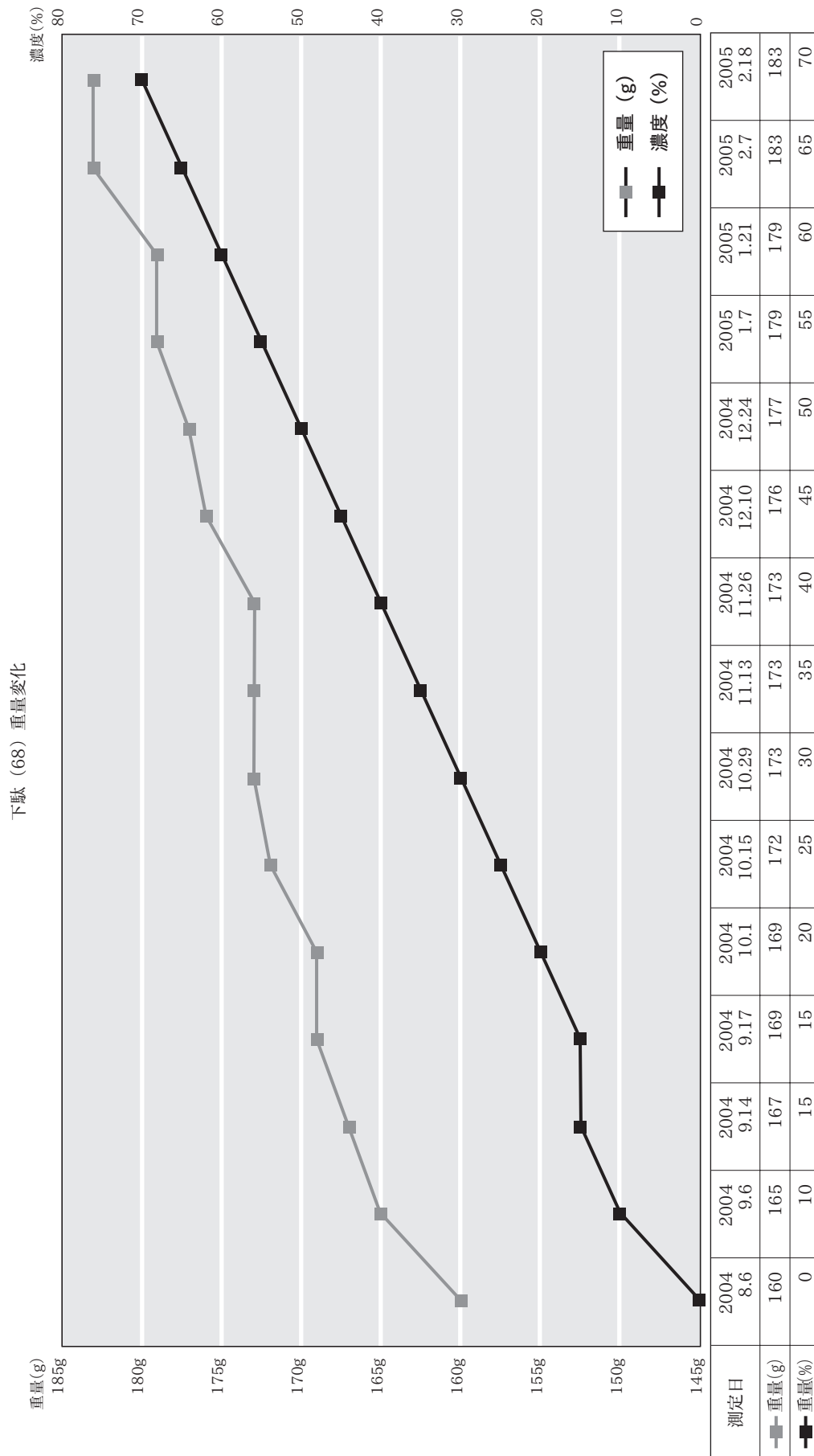


表 1 下駄 (遺物番号 68) 重量変化



1点ずつシルクスクリーンの袋に収納



網の袋に入れて含浸槽に収納



濃度を上げるために PEG を投入



重量測定



真空凍結乾燥前に表面の PEG を拭取る



真空凍結乾燥開始前

## 第4部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要

ごみの廃棄単位および過程復元への貝類遺体分析からの試み

加賀藩江戸上屋敷御殿空間の食生活

遺構一括出土遺体からみた江戸時代の鳥類の利用形態

# ごみの廃棄単位および過程復元への貝類遺体分析からの試み

阿部 常樹

## 1. はじめに —新宿区四谷二丁目遺跡 22号遺構の分析の成果と問題点—

江戸考古学において、従来 1 遺構内の堆積過程は、遺物全体の組成や人工遺物組成によって把握されてきた。そのなかにおいて、動物遺体は、“自然遺物”もしくは、“食物残滓”として一括で扱われることが多かった。一方、動物遺体は、廃棄した時期（季節）や廃棄主体者の経済的側面や嗜好などを直接的に捉えるのに適している。特に、貝類遺体は、他の動物遺体よりも部位が少なく、より実際の個体数に近い最小個体数を算出しやすいことから、より層位間の類似性や相違性を定量的に把握しやすい（阿部 2004a）。筆者は、以前、新宿区四谷二丁目遺跡 22 号遺構（19 世紀前半）について、貝類遺体の個体数組成とハマグリ、アサリ、ヤマトシジミの殻長サイズの分析から堆積過程の復元のための分析を試みた。その分析の結果、以下のことを指摘した（阿部 2004a）。

- ①廃棄の契機の異なる様々な種類のモノが、モノによっては層位間を跨いで、それぞれ複雑に堆積していることから、層位は、すべてのモノが同じ廃棄の契機もしくは時期を共有して、順序よく一定の時間で形成したような単純なものではなく、それぞれのモノの間の廃棄された時間の相対的な近さを反映している可能性が高い。特に分析において、貝種によって、サイズ組成における層位間の平均値の差の統計学的有意性の有無が異なることから示された。
- ②①に関連して、1 つの層位内の同じ種であっても、異なる料理や異なる時期に廃棄されたものを含む可能性が高い。例えば 1 つの層位内の貝類のサイズ組成において、値のばらつきが大きく、ヒストグラムにおいて双峰型もしくはそれ以上の多峰型を示すことがある。ハマグリは、もともとヒストグラムにおいて双峰型を示すことが多く、そのピークが殻長 50mm 未満と以上に分かれることから、「中小型」と「大型」で料理において利用方法の異なるものが含まれていることが指摘されてきた（桜井・山口 1986, <sup>(註1)</sup>）。しかし、そのような違いがあまり一般的に想起されないヤマトシジミやアサリにおいても 1 つの層位内でサイズのばらつきやヒストグラムにおいて多峰型を示すものがみられ、これらに関しては、購入時期の違うものが含まれる可能性や掘り返しによる攪乱の影響の可能性などを指摘した。

以上の分析の結果、より詳細な層位間の関係性や 1 つの層位が複合的な廃棄によって成り立っている可能性などを指摘することができ、層位の成り立ちの意味や 1 つの遺構における詳細な廃棄過程に関する仮説を提示することができた。しかし、四谷二丁目遺跡 22 号遺構の分析では、層位間の

---

(註 1) 桜井らは殻長 50mm を基準に「大型」と「中小型」で分類を行なっている。しかし、筆者がいくつかの遺跡で分析を行なったところ殻長 45mm で分かれるものも多くみられた。そこで、本論においては殻長 45mm 以上と未満で「大型」と「中小型」に分類する（阿部 2003）。なお、「大型」とされるものは、焼き物などの一個体もしくは少数個体で一品とする料理、「中小型」とされるものは汁物や佃煮など多数個体で一品とする料理に利用されていた可能性が指摘されている（桜井・山口 1986, 阿部 2002）

関係性は指摘できたものの、分析を行うことのできた資料が遺構内の覆土を半裁した際に残った部分、つまり、覆土の半分であったため、平面的なごみの偏りなどが把握できなかったことや、それにより、貝類遺体が廃棄されるまでの過程に関していくつかの疑問が残った。例えば、層位内において、量的に希少な種類が含まれた場合の解釈において、以下の3つの可能性が考えられる。

- i. その上下層に同じ貝種が多く含まれている場合、その上下層からの混ざり込みである可能性。
- ii. 生息域を同じくする種類が存在し、なおかつその種類がその層に多く含まれている場合、その種類を採集した際に、たまたまその場にあったために混獲され、そのまま選別されずに共に持ち込まれた可能性。
- iii. 他の場所に廃棄されていたものが土などと一緒に一部、その遺構内に移動した可能性。

しかし、以上の3つの可能性は、遺構内にその種類のもものが少ししか含まれていないという前提に立っている。しかし、廃棄した際に、その露出している面に均等にそれらを廃棄したとは考えづらく、その分析に用いた場所に廃棄の主体がなかった場合も考える必要がある。つまり、希少な量しか含まれなかった種類のもものが、分析に用いられなかった残りの半分の覆土のほうに、多く含まれていたことも考える必要がある。このように廃棄のあり方を正確に捉えるためには、覆土を全量層位別で取り上げることが理想であるといえる。

さて、本論において分析に用いる東京大学本郷構内の遺跡総合研究棟（文・経・社教）地点（仮称）検出のSK110の覆土は、セクションラインを基準に東西に分け、なおかつ、東西の覆土共に層位別に土ごとに取り上げている資料である。つまり、遺構内の内容物を全て取り上げているという前提に立って議論ができる上、さらにその内容物の位置関係を上下の層位だけでなく、平面的にも把握できることが期待できる。

そこで、四谷二丁目遺跡22号遺構の分析（阿部2004a）を踏襲しつつ、以上の提起した問題点を念頭に置いて、貝類遺体から1つのごみ穴の埋没過程のより具体的なあり方を解明する方法を模索する。

## 2. 遺跡と遺構

### 2-1. 東京大学本郷構内の遺跡および総合研究棟（文・経・社教）地点（仮称）

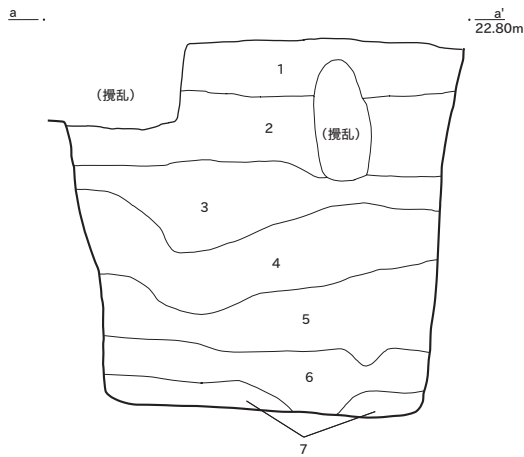
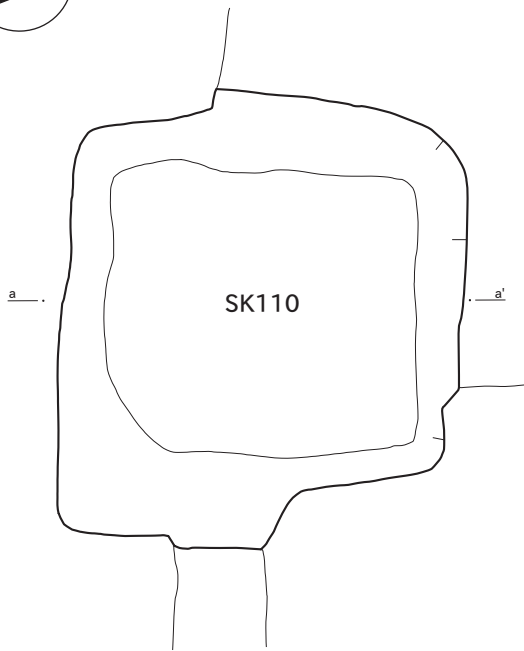
本遺跡は、東京都文京区本郷7丁目3番1号の東京大学本郷キャンパスに位置する。分析に用いるSK110を含む総合研究棟（文・経・社教）地点（仮称）は、遺跡内の南西の一角、現在、経済学研究科棟の建つ位置である。調査地点のすぐ南側には文政10年（1827）に11代将軍徳川家斉の娘・溶姫が13代加賀藩藩主前田斉泰に輿入れした際に建てられた赤門がある。なお、19世紀において本調査地点は、加賀藩上屋敷のなかでも御殿空間に利用されていた場所である。

### 2-2. SK110（図1）

SK110は食物残滓を主体とした廃棄物を含むごみ穴である。文政10年（1827）から明治元年（1868）の間のいずれかの時期に利用されたものとされている。場所は、御殿空間内の溶姫のご在所に付設された御膳所の南側脇に設けられていた。本遺構は、南北に主軸を成し、ほぼ正方形の平面形状を呈している。規模は南北142cm、東西160cm、底部が南北110cm、東西102cm、深さは検出面から124cmとなっている。覆土は、7つの層位より成り、これらの層はほぼ水平に堆積している。その内、



J-10



層位	色調	土質	混入物
1	淡茶褐色	しまり非常にあり。粘性ややあり。	径1~2mmの黄褐色ローム粒子、10~20mmの小礫をまばらに含む。
2	茶褐色	しまりあり(2層<1層)。	粘性ややあり。径1~2mmの黄褐色ローム粒子、炭化物粒子を少量含む。10~30mmの小礫をまばらに含む。部分的に炭化材の破片を含む。
3	暗茶褐色	しまりややあり。粘性ややあり。	径10mm程の炭化物(材)を少量含む。径1~3黄褐色粘土粒子をまばらに含む。遺物は多い。
4	暗茶褐色	しまりややあり。粘性あり(3層<4層)。	径10~30mmの小礫を非常に多く含む。遺物は多い。
5	暗茶褐色	しまりなし。粘性あり。(3・4層より黒っぽい)	陶磁器、貝、魚骨などの遺物を非常に多く含む。径5mmの黄褐色粒子、径5~10mmの炭化物(材)を多く含む。
6	暗灰褐色	しまりややあり。粘性非常にあり。	径20~30mmの角礫、円礫を多く含む。また、部分的に灰褐色のロームブロックを塊で含んでいる。遺物は少ない。
7	暗茶褐色	しまりややあり。粘性あり(7層<6層)。	径10~20mmの円礫を少量含む。遺物はほとんど含まない。

図1 SK110平面およびセクション図

貝類遺体は最下層の7層を除く1層から6層より出土している。特に1層から5層までは食物残滓が主体であり、SK110の埋没の過程は、主にそれらの廃棄に伴うものであることが指摘できる。また、遺構全体に広がりを見せず、調査時にセクション面にも現れなかった層が遺構内の東側の4層と5層の間に存在する。その層位を本論では“4-5層間”として表記している。

### 3. 資料の抽出方法

分析に用いる資料は、覆土ごと全量取り上げたとされている。覆土を取り上げる際には、セクションラインを基準に東西に分けて、それぞれ層位ごとに取り上げたとされている。その後、1mm・3mm・5mm目の3つの篩を用いた水洗選別法によって資料の抽出をおこなったとされている。

### 4. SK110 出土の貝類遺体の概要 (表1)

本遺構から18分類群の貝類遺体が出土している。その内、水産が14分類群、陸産が5分類群、さらに、水産で、食用とされる中・大形のものは10分類群、他の生物（特に貝類）に着生する小形および微小なものは4分類群となっている。

### 5. 水産貝類遺体 (中・大形) (図2)

食物残滓である中・大形水産貝類遺体（以下「水産貝類遺体」は「中・大形」のものを指す）について分析をおこなう。

#### 5-1. 分類群ごとの出土傾向とその背景 (個体数組成分析)

遺構内において最も多く出土しているのが、ハマグリで58.1%、次いでヤマトシジミで24.9%である。この2種で全体の約80%を占める。その他にアカガイ9.9%、アサリ3.3%、アワビ類2.2%で、これら以外に1%を超えるものはない。以上の主体をなす分類群は、大名上屋敷に限らず、比較的、江戸遺跡より一般的に出土するものである。

水産貝類遺体は、1層から5層にかけて多く出土し、それに対して、6層より下層は、貝類が廃棄された状況をほとんど見ることができない。

以下に分類群ごとに各層の出土傾向および層位間のその傾向の比較をおこなう。それによって、それぞれの分類群の採集から廃棄までの過程について考察する。

**アワビ類**：東側は、1層で1個体と破片多数、5層で4個体が出土している。その他に2層と4層と6層で破片が出土している。それに対して、西側は、1層と5層で破片、4層で2個体がそれぞれ出土している。東側において、2層のものは1層から、6層のものは5層から混ざりこんだことが推測される。東側4層の破片は、西側4層に廃棄したものとの関連性が窺われる。同様に、西側2層と5層の破片は、東側のそれぞれ同層位より出土しているものとの関連性が窺われる。

**アカガイ**：東側は、4層で13個体、3層で11個体が出土している。その他に2層と5層で各5個体、1層と6層で破片が出土している。3層と4層を中心に上下層それぞれに向かうにしたがっ





	1層	2層	3層	4層	4-5層間	5層	6層	全体
西側								
	5層敷部分除く							
東側								
	5層敷部分含む							

図2 SK110出土水産貝類遺体個体数組成グラフ(微小貝類は除く)

て徐々に量が少なくなっている。

一方、西側は、2層と4層で1個体、3層で2個体、5層で3個体が出土している。東側の各同層位よりアカガイが出土していることから、東側よりそれぞれ出土しているものとの関連性が窺われる。

ヤマトシジミ：東側は、5層から71個体と最も多く出土している。他に1層で9個体、2層で3個体、3層と4-5層間で各1個体、4層で7個体が出土している。1層は10個体に満たないものの、5層について多く出土している。それに対して2層から4層は、1層と5層よりもヤマトシジミの出土量が極めて少ないことを鑑みると、1層と5層のヤマトシジミは、廃棄された時期が全く異なるものであると考えられ、それに対して、2層のものは1層、4層と4-5層間のものは5層にそれぞれ廃棄されたものが混ざりこんだものと推測される。3層は、1層から2層と、5層から4層の2つの出土量の減少傾向のちょうど中間にあり、また、左殻1点しか出土していないことから、1層と5層、どちらの廃棄に関連する混ざり込みであるか、判断することは困難である。

一方、西側は4層と5層から、それぞれ3個体ずつしか出土していない。東側の各同層位より出土しているものとの関連性が窺われる。

ハマグリ：東側は、2層から154個体と最も多く出土している。他に1層から3個体、3層から35個体、4層から15個体、4-5層間から2個体、5層から5個体が出土している。2層から5層へ、下層に向かうにつれて徐々に数量が少なくなる傾向にある。

しかし、1層から4層までのものは、殻長45mm未満の「中小型」のみもしくは主体であるのに対して、4-5層間と5層のものは、45mm以上の「大型」で、さらに「中小型」のものとは比べて明らかにサイズの差は大きい。ハマグリは、成長と共に沖の方に移動する生態的な特徴があり（鈴木1971・大分県1979・浦安市教育委員会1995など）、一方で、近世においてその生息域（水深）に応じて異なる採集具を用いていること（東京府1890）から、サイズによって同じ種であるとしても採集された場や時期が異なる可能性が高い（阿部2003）。また、「中小型」は吸い物や佃煮など多数個体で一品の料理に使われるのに対し、「大型」は焼き物など一個体もしくは少数個体で一品の料理に使われるなど、サイズによって料理における使い分けがおこなわれていた可能性も指摘されている（桜井・山口1986）。つまり、4-5層間と5層のものは、それより上層のものと廃棄されるまでの一連の過程そのものが異なるものであることが考えられる。4層は、「中小型」が主体であるものの、「大型」のものも含んでいる。しかし、4-5層間や5層のもののように、「中小型」のものとのサイズの違いは大きくなく比較的45mmに近いサイズである。

さらに、西側は、4層からのみ25個体出土している。その内、24個体が「中小型」で、1個体（右殻1点のみ）が「大型」である。1層から3層まで、西側からハマグリが全く出土していないことや、4層において東側よりも西側のほうが多いことを鑑みると、おなじ「中小型」ハマグリを主体としているものの、少なくとも4層のものは、1層から3層のものと廃棄された時期（日時のレベルで）が異なるものであることが推測される。また、「大型」の右殻1点も、50mm程であることから、「中小型」ハマグリを採集した際に、イレギュラーに含まれていたものと推測される。

アサリ：本遺構からは20個体とあまり多く出土していない。まず、東側は、5層から9個体、4-5層間から3個体、4層から2個体、2層から1個体出土している。もっとも多く出土している5層において、ハマグリは「中小型」のものが出土しておらず「大型」のみで、かつ他層と比べて少

ない。ハマグリは、「内湾砂底域」生息種であるのに対して、アサリは「干潟生息種」であり（松島・前田1985）、より浜に近いところに生息している。また、ハマグリは、成長と共により沖のほうに移動する生態的特徴から、アサリと生息域がより重なるのは「中小型」のものであると考えられる。そのことから、「中小型」ハマグリを主体に出土している5層以外の層位よりも、「大型」ハマグリのみが出土している5層からアサリがより多く出土している傾向を鑑みると、9個体と少なめではあるが、これらのアサリが、ハマグリを採集した際に混獲されたものとは考えづらく、むしろ、「アサリ」として種を認識して料理され、食後にその場に廃棄されたものが含まれていることが推測される。4-5層間および4層のものは、5層よりも極めて少ないことから、5層のものと廃棄の単位を同じくするものが含まれていることが推測される。2層は、3層において1個体も出土していないことや右殻1点のみであることなどから、5層に廃棄されたアサリが混ざり込んだものとするよりは、生息域を同じくする同じ層位の「中小型」ハマグリを採集した際に混獲され、そのまま共に屋敷内に持ち込まれたものであると考えるほうが妥当であると思われる。

一方、西側は4層から1個体、5層から4個体出土するのみである。2つの層位共に、東側の同層位から出土していることから、東側のものとの関連性が窺われる。

**サザエ**：東側は、1層と2層から蓋の破片のみ出土している。また、西側は、4層から殻柱部分1点と5層から蓋1点出土している。ほとんど蓋のみが出土しており、唯一、殻が出土している西側4層のものも、殻柱のみで残存状況も悪く、ほとんど破片に近い状態であった。以上から、おそらく他の場所に廃棄されたものが何かしらの経緯で本遺構内にもたらされたものであると思われる。

**マガキ**：東側の1層と2層から破片のみ、西側の3層から右殻が1点出土しただけである。サザエと同様に他の場所に廃棄されたものが何かしらの経緯で本遺構内にもたらされたものであるか、もしくは、ハマグリを採集した際に、殻のみの状態でその砂中にあったなどの理由から混獲され、そのまま共に屋敷内に持ち込まれたものであると推測される。

**サルボウガイ**：東側の1層と2層から1個体ずつ出土している。本種は、近世において「アカガイの代用品」とされることがあったことが指摘されている（篠田1996）。しかし、本遺構出土のサルボウガイは、殻長50mm未満の小形のものであることからアカガイのように一個体もしくは少数個体で一品とするような料理に用いられたとは考えづらい<sup>（註2）</sup>。以上のことから、生息域をほぼ同じくするハマグリを採集した際に混獲され、そのまま共に屋敷内に持ち込まれたものであるか、もしくは、サザエの蓋やマガキと同様に他の場所に廃棄されたものが何かしらの経緯で本遺構内にもたらされたものであると推測される。

**ミルクイ**：5層西側から1個体出土しているのみである。しかし、本種は、一個体もしくは少数個体で一品とするような料理に用いられるものであることや、左右殻1点ずつ出土していることなどから、生息域を同じくするハマグリやアサリなどを採集した際に混ざり込んだものとは断定しづらい。

---

（註2） 殻長50mm以上の大形のサルボウガイがまとまって出土することがあり、筆者は、近世において「アカガイの代用品」として用いられたと指摘されているものは、そのような大形のサイズのものであり、50mm未満のものは佃煮など多数個体で一品とする料理にもちいられたものと考えている。

以上から、種類を認識して料理に用いた後、廃棄したと考えられるものは、13分類群の水産貝類遺体内、アワビ類、アカガイ、ヤマトシジミ、ハマグリ、アサリの5分類群、もしくはミルクイをくわえて6分類群であると推測される。

また、アサリは、5層のものは以上の分類に含まれるが、それ以外の層位のものにはハマグリを採集した際に混入したものであると推測される。

## 5-2. サイズ分析からみる同一種内の層位間の関係性

個体数組成について層位間の出土量の比較や貝種間の生態的な関係性などから検討し、それらが廃棄されるに至るまでの経緯について考察を試みた。その結果、アサリの例からも分かるように、食すのを目的に種類を認識して屋敷内に持ち込まれたもの、他のものを採集した際に混獲されてそのまま共に廃棄の段階までに至ったものなど、層位によって同じ分類群であっても廃棄されるまでの経緯が異なることがある。しかし、廃棄されるまでの経緯とともに、廃棄されるまでの一連の過程が同じ、もしくは時期的に近いものであるか否かを判断することは個体数組成分析だけでは難しい。また、1つの層位内の同じ分類群でもこの層位が複数の廃棄行為によって成り立っている可能性も考える必要がある。さて、以前、筆者は、1つの貝種において、同じ時期、同じ海域において採集されたものは、サイズの組成のバラつきが小さく、比較的サイズが揃うことを、東京湾三番瀬の実地調査の結果などを踏まえて指摘した(阿部 2004b)。つまり、層位間でサイズに差がなければそれらの層位が形成した時期が比較的近い可能性を指摘することができる。それに対して、1つの層位内において、サイズ組成にバラつきがある場合は、1つの層位が形成するなかで、同じ貝種であっても採集された時期などが異なるものも含んでいる可能性を指摘することもできる。

分析方法：分析をおこなう貝種は、本遺構内においてより出土率の高かったハマグリとアカガイの2種である。比較する部位は、ハマグリは殻長<sup>(註3)</sup>、アカガイは鉸歯長とする<sup>(註4)</sup>(図3)。

また、ハマグリは破損が激しく、殻長を計測することのできる個体が多くなかった。そこで、回帰・相関分析を用いて、外靱帯溝長<sup>(註5)</sup>から殻長の推定を試みた。具体的に、外靱帯溝長と殻長をもちい

---

(註3) ハマグリは殻長は、殻の横軸(前後の幅)で最も長いところ、所謂「最大長」(阿部 1999)である。(図3・計測法B)

(註4) 鉸歯長は、アカガイ類の場合、鋸歯状の蝶番部分(鉸歯)の長さ(横軸もしくは前後の幅)である(図3・計測法A)。なお、ヤマトシジミとアカガイも殻長を用いて同様の分析を試みた。その結果、分析をおこなった層位間において平均値に統計学的に有意な差が認められなかった。しかし、ヤマトシジミにおいて、主体となる東側の各サンプルは、5層が27点である他は、1層2点、4層3点、2層と3層に至っては1点と極めて分析可能なものが少なすぎることから、本論では議論からはずした。アカガイも、ヤマトシジミと同様に比較対象部位である殻長が残存する個体が少ない。一方、アカガイは鉸歯部分の残存状態の良好な資料が多かったことから、ハマグリと同様に鉸歯長からの殻長の推定を試みるため、最小二乗法のよる一次回帰分析をおこなった。しかし、決定係数が0.40で式の精度が低く、さらに、分散分析の結果も有意ではなかった。そのため、鉸歯長からの殻長のサイズの推定は行えなかった。なお、ヤマトシジミおよびアカガイの殻長は、前・後側歯の外側端部を結んだ線(もしくは鉸歯部分)を基準線として、その線に直交する2本の直線によって挟まれた殻の幅である(図3・計測法A)(阿部・野々村・藤田・江田 2005)

(註5) 外靱帯溝は、後背縁において殻頂部からその中ほどまでにある靱帯の付着している溝を指す。外靱帯溝長はその部分の長さである。(図3・計測法B)

て、最小二乗法による一次回帰分析をおこない、推定式を導出した。さらに、決定係数などの統計量によってそれらの精度を、また、分散分析でそれらの有意性を評価した(阿部・加藤 2003 a・b)

結果、ダービンワトソン比をみると、2.31であり、多関数よりも2に近いことから、一次直線回帰がサイズ推定に有効であると判断された。また、決定係数を0.80で式の精度が比較的高いことが確認された。さらに、分散分析の結果をみても共に、1%水準で有意であった。したがって、この式によって、外靱帯溝長から殻長のサイズを推定することは、有効であることが示された(図4)。以下にその式を示す。

$$y = 2.89x + 8.17 \quad (y : \text{殻長}, x : \text{外靱帯溝長})$$

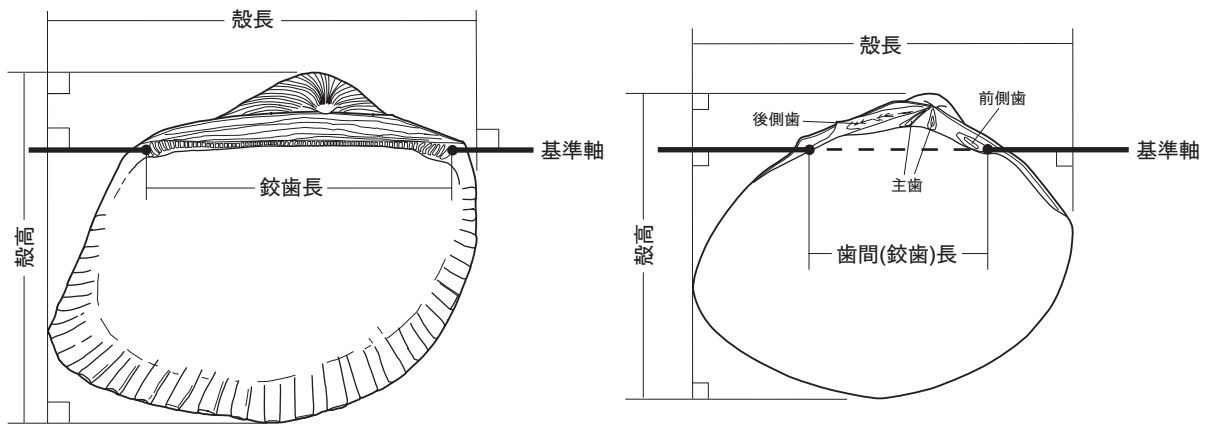
以上の式によって導出された推定殻長(以下、文中では“殻長”と記載)をもちいて、分析をおこなった。

具体的な分析方法として、比較対象部位の層位間における平均値の差の有意性について最小有意差法を用いて統計学的に検定をおこなった。

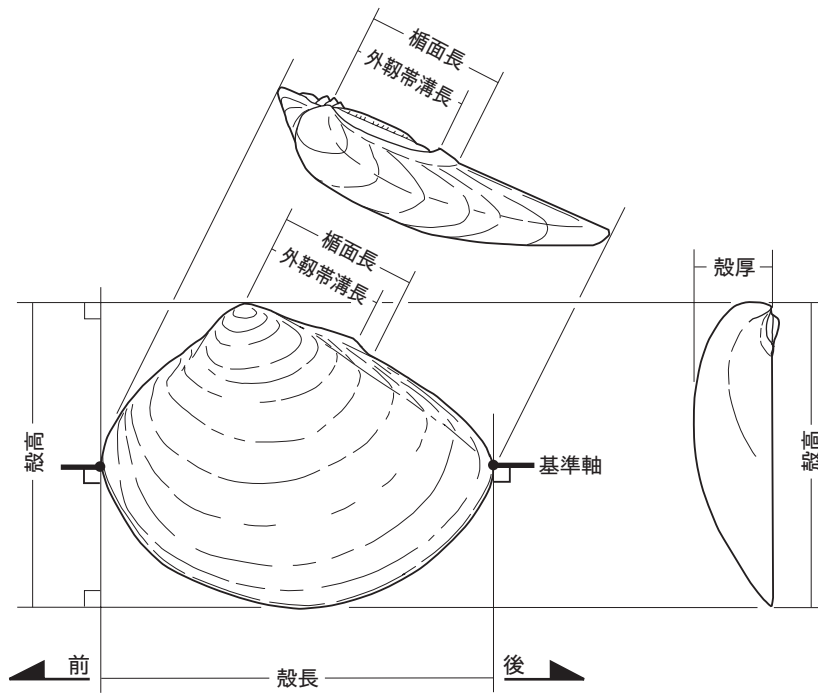
分析結果：アカガイの鉸歯長は、個体資料の出土している東側の2層から5層をサンプルとして分析に用いることができた(表2)。その結果、3層と、2層・4層・5層それぞれとの間に統計学的に差の有意性が認められた(5%有意)。つまり、3層のものは、2層・4層・5層のものに比べて平均値が統計学的に有意に大きいことが示された。実際に、3層のものは、全て鉸歯長が70mm台であるのに対して、他の層位のものは、70mm台のものも含まれるが少なく、ほとんどのものが60mm台である。

ハマグリは、1層を除いて、それぞれの層位の出土量に見合う程度のサンプルを用いて分析を行うことができた(表3)。その結果、5層東側のみ、分析に用いた各層位との間に統計学的に差の有意性が認められた。また、4-5層間は、サンプルが1点であったため分析に用いることができなかったが、殻長64.5mmと「大型」である。先にも触れたように、4層までは、殻長45mm未満の「中小型」が主体であるのに対し、5層と4-5層間において殻長45mm以上の「大型」のみの組成となっている。実際に分析を用いたデータをみても、殻長45mm以上の資料が、4層東側において1点、西側において2点含まれる他は、1層東側と3層東側はいずれも45mm未満のものしか含まれていないのに対して、4-5層間と5層東側は、分析に用いた資料が、いずれも殻長45mm以上である。また、4層東側と西側において殻長45mm以上であった資料も、いずれも55mm未満であるのに対して、4-5層間が64.5mm、5層東側が2点とも70mm台と、極めて大形である。つまり、4-5層間と5層東側のハマグリは明らかに、4層より上層のものとはサイズにおいて異なるものである。

一方、2層から4層までの平均値において統計学的に有意な差が認められなかったことから、ほぼ同じサイズのものが含まれていることが指摘される。それは、ヒストグラムを概観しても4つのサンプル共に、殻長30mm以上35mm未満のサイズのものが最も多い上、単峰型を示していることから指摘しうる。また、変動係数が10%から20%で、東京湾三番瀬の調査の際に同じ日、同じ場所で採集したアサリの殻長に関する変動係数が12%であること(阿部 2004b)からも極めて値が低いことが分かる。つまり、本遺構出土のハマグリは殻長のサイズ組成のバラエティーがあまりないことが指摘される。以上のことから、2層から4層に含まれているハマグリは、少なくとも採集時期や場所を同じくする、もしくは極めて近いものである可能性が高い。なお、4層東側と西側の45mm以上の資料も45.7mm(東側)、47.3mm、53.9mm(以上、西側)と、5層や4-5層間より



計測法A



計測法B

図3 二枚貝類計測凡例

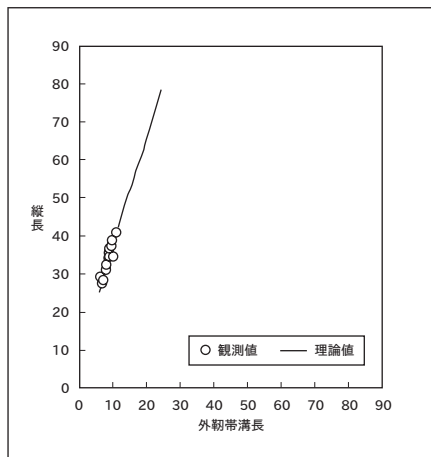


図4 ハマグリりのサイズに関する一次回帰分析の結果

第4部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要

層位 部位	2層		3層		4層		5層	
	殻長	鉸歯長	殻長	鉸歯長	鉸歯長	殻長	鉸歯長	
サンプル数	2	3	3	4	7	4	4	
平均値	105.65	67.34	103.77	73.57	67.75	104.02	68.01	
標準偏差		1.85	1.31	1.92	3.19	2.42	3.61	
分散		3.43	1.72	3.69	10.17	5.87	13.02	
範囲		3.99	2.98	4.69	8.48	6.84	8.26	
最小値	103.35	65.97	102.63	71.29	63.62	100.62	64.14	
中央値		66.10	103.08	73.51	69.35	104.01	67.75	
最大値	107.94	69.96	105.61	75.98	72.10	107.46	72.40	
尖度				-4.16	-2.02	1.38	-5.01	
歪度		1.73	1.58	0.08	-0.20	0.04	0.12	
標準誤差		1.31	0.93	1.11	1.30	1.40	2.08	
変動係数		0.03	0.02	0.03	0.05	0.03	0.06	

表 2-1 アカガイのサイズに関する記述統計量 (値の単位: mm)

	2層	3層	4層	5層
	67.34	73.57	67.75	68.01
2層	67.34	*	n.s.	n.s.
3層	73.57	*	*	*
4層	67.75	n.s.	*	n.s.
5層	68.01	n.s.	*	n.s.

表 2-2 アカガイの鉸歯長に関する平均値の差の検定 (最小有意差法)

	西側		東側	
	基本統計量	ヒストグラム	基本統計量	ヒストグラム
2層			サンプル数	66
			平均値	32.39
			標準偏差	4.01
			分散	16.01
			範囲	15.97
			最小値	25.07
			最大値	41.04
			中央値	32.26
			尖度	-0.43
			歪度	0.41
			標準誤差	0.50
		変動係数	0.12	
3層			サンプル数	19
			平均値	32.93
			標準偏差	3.25
			分散	10.54
			範囲	11.73
			最小値	27.06
			最大値	38.79
			中央値	32.75
			尖度	-0.72
			歪度	-0.16
			標準誤差	0.77
		変動係数	0.10	
4層	サンプル数	21	サンプル数	7
	平均値	34.35	平均値	32.62
	標準偏差	6.58	標準偏差	6.04
	分散	43.25	分散	36.49
	範囲	27.41	範囲	20.45
	最小値	26.48	最小値	25.01
	最大値	53.89	最大値	45.46
	中央値	33.04	中央値	31.33
	尖度	2.59	尖度	2.57
	歪度	1.59	歪度	1.34
	標準誤差	1.47	標準誤差	2.47
変動係数	0.20	変動係数	0.20	
4-5層間			サンプル数	1
			平均値	64.55
5層			サンプル数	2
			平均値	75.98
			最小値	73.71
			最大値	78.24

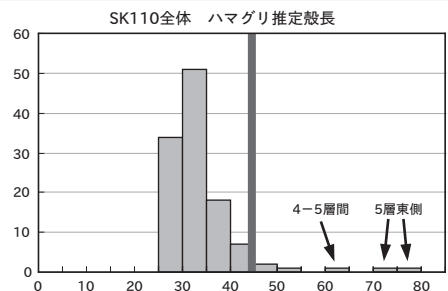


表 3 ハマグリにの殻長 (推定) に関する記述統計量およびヒストグラム 値単位: mm, ヒストグラム: 縦軸 / 個体数 横軸 / サイズ (mm 以上)

	1層	2層	3層	4層	5層東側非攪乱部分	5層東側攪乱部分
サンプル数	2	1	1	3		
平均値	25.87	20.51	20.53	20.88		
標準偏差				2.71		
分散				7.36		
範囲				6.62		
最小値	22.35			17.41		
最大値	29.38			24.03		
中央値		20.51	20.53	21.21		
尖度						
歪度				-0.44		
標準誤差				1.92		
変動係数				0.16		
	5層			全体		
	非攪乱	攪乱	全体			
サンプル数	27	38	65	72		
平均値	22.68	23.08	22.91	22.84		
標準偏差	2.90	2.56	2.71	2.80		
分散	8.40	6.55	7.36	7.86		
範囲	13.51	11.16	13.51	13.51		
最小値	16.10	17.41	16.10	16.10		
最大値	29.61	28.57	29.61	29.61		
中央値	22.53	23.34	22.85	22.53		
尖度	0.59	-0.28	0.09	0.09		
歪度	0.15	0.06	0.08	0.19		
標準誤差	0.57	0.42	0.34	0.33		
変動係数	0.13	0.11	0.12	0.12		

表4 ヤマトシジミの殻長に関する記述統計量およびヒストグラム 値単位: mm, ヒストグラム: 縦軸/ 個体数 横軸/ サイズ (mm 以上)

出土している資料のサイズよりも、より45mmに近い値であることから、5層や4-5層間のものとして採集の契機を同じと考えるよりも、2層を中心に出土している「中小型」ハマグリを採集した際に、イレギュラーに大きいものが含まれていたと考えるほうが妥当であると考えられる。

## 6. その他の貝類遺体の出土状況 (表1)

### 6-1. 海産微小貝類

海産微小貝類遺体は、4分類群が出土している(註6)。最も多いのはキクスズメで、22点出土している。その他の3分類群は、1点ずつしか出土していない。キクスズメは、1層、2層、5層より出土している。本種は、「潮間帯から潮下帯の腹足類の殻上に着生」する(奥谷編著2000)。3つの層において、共通して出土している「潮間帯から潮下帯の腹足類」はアワビ類であることから、アワビ類に伴って本遺構内にもたらされたものと考えられる。

ウメノハナガイ、ウネナシトマヤガイ、タマエガイ類の3分類群は、ともに1層から出土している。ウメノハナガイは、潮間帯から水深30mの砂泥底域に生息している(奥谷編著2000)。ウネナシトマヤガイは、カキ礁に着生している。タマエガイ類は、主に岩礁、礫底、泥底域に生息しているものが多い(奥谷編著2000)。共に、比較的、マガキの生息域に近い。1層と2層の東側から、マガキの破片、3層西側から右殻が1点出土している。マガキは、数量的に極めて少ないことからハマグリを採集した際に混獲されたものであると推測される。その上で、ハマグリの採集場の近辺にカキ礁が存在したと仮定すると、これらの微小貝類は、マガキと共に、潮流などによって、そこからもたらされたものであることも想起される。少なくともこれらの微小貝類は、1層の下層に当たる2層のハマグ

(註6) なお、1層より出土している「不明微小巻貝類」とされているものは、いずれも殻柱しか出土していないため、同定するに至らなかった。



りを採集した際に混獲されたものであると推測される。

## 6-2. 陸産貝類遺体

陸産貝類遺体は、1層より5点、2層より3点、3層より1点出土し、4層より下層からは1点も出土していない。また、出土量も全体で9点と極めて少ない。内訳は、キセルガイ類とオカチョウジガイが2点ずつ、ヒメベッコウ属類似種が3点、不明が2点である。なお、オカチョウジガイやヒメベッコウは「林縁生息種」である（黒住1994）。

これらの陸産貝類遺体は、1層形成後に本遺構内の堆積物上に生息し始めたと推測され、2層や3層のものは、1層から堆積物の隙間をぬって下層に混入したと考えられる。つまり、5層から1層が形成されるまでの間にあまり時間を置くことなく、食物残滓の廃棄がおこなわれていたか、もしくは、一般的に陸産貝類の冬眠する9月から再び活動を始める春まで（大垣内1997）の間に廃棄がおこなわれていたか、2つの可能性が考えられる。いずれにしろ、後者の場合も、陸産貝類の活動期である夏場を挟まないわけであるから、1年以内で埋没した可能性が示唆される。

また、1層形成後、上に土などを被せるまでにはある程度の時間がおかれていたと推測されるものの、陸産貝類遺体の出土量が極めて少ないことから、少なくとも1年以上、野晒しにされることはなかったものと推測される。

## 7. 廃棄過程の把握への試み（表5）

以上の分析結果を元に、水産貝類遺体の廃棄過程について考察をおこなう。まず、種類を認識して料理に使用したと推測され、さらに上下層からの混ざり込みである可能性の低いものに限定して各層位の貝種組成を概観すると以下ようになる。

1層：アワビ類、ヤマトシジミ

2層：「中小型」ハマグリ、アカガイ

3層：「中小型」ハマグリ、アカガイ

4層：「中小型」ハマグリ、アカガイ、アワビ類

5層：アカガイ、アワビ類、「大型」ハマグリ、ヤマトシジミ、アサリ、ミルクイ

以上の結果を見ると、2層から4層は特に組成の類似性が高いといえる。さらに、主要貝種のサイズや出土状況について、特にこの3つの層位間の類似性や相違性を検討した。

まず、アカガイは、鉸歯長において、3層のものが2層・4層・5層のものに比べて平均値が統計学的に有意に大きいことが示された。このことから、3層と、2層・4層・5層では購入した時期などが異なるものを含んでいることが推測された。

一方、ハマグリは、2層から4層共に「中小型」ハマグリが主体であり、殻長に関する平均値の差の検定においても有意な差が認められなかった。つまり、ハマグリにおいて、殻長のサイズからこの3つの層位間の相違を見出すことはできない。しかし、出土状況を見ると、ハマグリは、3層より上層は東側からのみ出土しているのに対して、4層は西側からも出土しており、さらに東側より西側からのほうが多く出土していることから、少なくとも4層と3層では廃棄された時期が異なることが指摘される。

次に、層位内における貝種間の廃棄の順序について検討をおこなう。

5層は、2つの出土パターンが抽出される。1つには、6層でも出土するが、4-5層間では出土

分類群	サイズ		カサエ	ミルカイ	キウスズメ	アワビ類	アカガイ	ヤマトシジミ	海産微小貝類		アサリ	ハマグリ		アサリ	ミガキ	サルボウ	陸産貝類	ネズミ類
	西	東							西	東		西	東					
1層		3			10	○	△	9	○	1	1	3	○	○	○	○	5	東
2層		154			3	○	5	3	△	1	1	154	△	△	△	3	3	東
3層		35					11	1	1	1	1	35	1	1	1	1	1	東
4層		24	15			○	13	7	○	2	2	24	○	○	○	1	1	東
4-5層間		2						1				2						東
5層		5				○	5	71	○	4	4	5	○	○	○	1	1	東
6層																		東

表5 SK110の各貝類の廃棄過程および関係性(数字:個体数、○:破片のみ、△:破片のみかつ少量、◎:破片のみかつ多量)

していないアワビ類とアカガイ、もう1つには、6層では出土しないが、4-5層間でも出土している「大型」ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミである。これらの貝種は出土量において、5層よりもその上下層のほうが少ないことから、5層に廃棄されたものが何かしらの原因で混ざり込んだものと解釈した。その解釈を前提に考えると、以下のような廃棄過程によって5層が形成されたことが推測される。まず、5層形成の際に、アワビ類とアカガイが廃棄され、その際に、6層へ一部混ざり込んだ。その後、「大型」ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミが廃棄され、その3種は4-5層間および4層にまで継続して廃棄された。

4層は、西側を中心に廃棄されたアワビ類と「中小型」ハマグリ、東側を中心に廃棄されたアカガイに分かれる。3層でアワビ類が全く出土していないのに対して、アカガイが多く出土していることや、3層より上層では、西側を中心とした廃棄がみられないことから、まず、西側を中心にアワビ類と「中小型」ハマグリの廃棄があり、その後、東側を中心にアカガイの廃棄が行われたと考えられる。また、「中小型」ハマグリは、西側に多く含まれているものの東側も15個体と比較的多く出土していること、また、サイズ分析において、3層のものと統計学的に有意な差が認められなかったことから、一部、アカガイと共に東側を中心に廃棄されたものも含まれることも想起される。

3層から2層は、共に「中小型」ハマグリとアカガイの廃棄が行われている。3層の「中小型」ハマグリは、2層と4層のものとサイズの平均値において統計学的に有意な差が認められなかったのに対して、アカガイは、3層のものが2層と4層のものよりもサイズが統計学的に有意に大きいことが示された。このことから、「中小型」

ハマグリは、採集された時期や場所が同じ、もしくはあまり離れていないものが食されたのに対して、アカガイは、採集された場所などの異なるものが食された可能性が考えられる。つまり、1つの解釈として、ハマグリは、大量に購入してそれを持続的に食していたのに対して、アカガイは、その都度、必要量を購入し使用していたことが想起される。さらに、想像の域を出ないが、ハマグリを大量に購入したことを前提にして、その量が2層において3・4層の約4倍と極端に多い理由を考えると、3・4層への廃棄時は汁物などあまり保存の利かない料理に利用していたのに対して、2層廃棄時は、最終的に食べきれずに廃棄したか、もしくは、同様の理由から佃煮など保存の効く料理に利用したことも想像される。

そして、最後に1層において、ヤマトシジミとアワビ類の廃棄が行なわれる。

これらの廃棄は、特に2層から4層間の組成や、遺構内全体のハマグリのサイズの分析結果から比較的短期的かつ継続的に行なわれたものと考えられる。それは、陸産貝類遺体の分析からも、指摘することができる。

以上の考察から導き出された廃棄過程は以下とおりである。

- ①アワビ類、アカガイが廃棄される（6層から5層下部）。
- ②「大型」ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミが廃棄される（5層上部から4層下部）。
- ③遺構の西側にアワビ類、「中小型」ハマグリが廃棄される（4層西側）。
- ④遺構の東側にアカガイが廃棄される。また、「中小型」ハマグリも③に引き続き、東側に廃棄されていた可能性もある（4層東側）。
- ⑤「中小型」ハマグリ、アカガイが廃棄される（3層から2層）。
- ⑥アワビ類、ヤマトシジミが廃棄される（1層）。

## 8. 展望と課題

各層位の形成に費やされる時間やそのためのごみの投棄回数（廃棄単位）も層位によって様々であることが本分析によっても指摘することができた。たとえば、特に、貝類遺体を多く含んでいた2層と5層を比較すると以下の違いが見られる。まず、5層は、種類にバラエティーがあり、1つの層位に少なくとも2回の異なる時期に出された廃棄物が含まれている可能性も指摘された。それに対して、2層は、種類にバラエティーがない上、3層と4層と貝種組成や「中小型」ハマグリのサイズにおいて違いがほとんど見られない。つまり、5層において“1回”とみなされる廃棄単位が3つの層位に跨ってみられる。さらに、その3つの層位のハマグリは、共に、サイズ組成にばらつきはなく、ヒストグラムにおいてきれいな単峰型を示す。その結果は、遺構全体でも同様であり、もし、層位別ではなく、遺構内の覆土を一括で取り上げられていた場合、“ハマグリが大量に一括廃棄されていた”と解釈される恐れすらある。翻って考えれば、少なくとも2層から4層に掛けての層位区分に貝類遺体の変化はあまり反映していないことを示すものでもある。

さて、SK110の覆土の取り上げにおいて、東西に分けて層位で全量取り上げた結果、序章で述べた問題について一定の答えを提示することができた。特に他層において東側に廃棄主体がみられたのに対して、4層においては、一部の貝種に関して東側よりも西側にみられた。もし、東側のみで分析を行った場合、特にハマグリとアワビ類に関する廃棄の過程に関して異なる見解が提示されたものと思われる。まず、東側においてハマグリは、2層154個体、3層35個体、4層15個体と下層に行くにつれて少なくなる傾向を示し、殻長のサイズ分析からも差を見出すことができなかつたことから、

2層の位置に大量に廃棄したものが、何かしらの影響でその下層にまで混入したという解釈がされたと考えられる。しかし、西側のサンプルを分析することで、4層の西側において24個体もハマグリが含まれていたことから、東側のものと併せるとほぼ3層と同数の39個体になった。そのことによって、4層形成時から2層形成時に掛けて、同じもしくは極めて近い時期・場所で採集されたハマグリが継続的に廃棄された結果であるという全く異なる解釈がなされた。また、アワビ類に関しても同様に、東側のみの分析では、4層は破片のみしか含まれないことから、5層に廃棄されたものが混入したという解釈がされたと考えられる。しかし、西側から2個体分出土していたことで、4層形成時には、西側にアワビ類を廃棄し、東側の破片はその西側に廃棄したものに由来するものであると異なる解釈がなされた。先述した四谷二丁目遺跡22号遺構においても、層位別に資料の取り上げをした部分だけではなく、一括で取り上げがなされた部分についても含めて分析を行っている。しかし、一括であるがために踏み込んだ議論が行えなかった。例えば、5層においてサザエに関して、蓋のみが出土していた。その他の層位からは、サザエは蓋も殻も共に出土していないため、土ごと他の廃棄場所から移動したなどの可能性が考えられたが、一括で取り上げを行なった部分から殻3個体が出土していた。しかし、出土層位が不明であるため、5層の蓋との関連性まで踏み込むことができなかった。

また、平面的な位置関係が把握することで、穴（遺構）のどの位置より廃棄を行なったかが復元することができる。つまり、廃棄者がどの位置に立って廃棄をおこなったかを知ることができ、より具体的な場の使われ方を復元することができることが期待される。例えば、廃棄者の立位置が分かることで、その周辺は人が少なくともひとり立つだけの空間的な余裕があったことが推測される。それによって、時期の特定がしづらい礎石などが、比較的近接していた場合、それによって建物のあった時期を推測する材料にもなりえる。

しかし、当然のことながら、本論のように貝類遺体の分析のみでは、廃棄過程を推測することは難しい。例えば、ごみ穴の覆土の攪乱の程度である。その点は、より個体識別のしやすい人工遺物の接合関係などから分析する必要がある。さて、四谷二丁目遺跡22号遺構は、貝類遺体の分析をおこなう前に、全ての内容物組成と断面図などの観察から総合的にその堆積過程の復元を行っている（阿部・石神・加藤2001a・b）。その結果を踏まえて、貝類遺体の詳細な分析をおこなったという背景を有している。特に2層と7層から出土した磁器製の中碗蓋が接合したことを根拠に、改めて断面図をみた結果、掘り返しによる攪乱があった可能性を指摘することができた。それによって、3層の内容物にその上下層のものが混ざっている可能性を指摘した。その上で、ヤマトシジミの殻長サイズの分析において、3層のみその上下層に対して統計学的に差の有意性が認められない背景を知ることができた。

つまり、情報を抽出する上で、遺物もそれぞれ器種・素材ごとに一長一短があり、ひとつのごみ穴の埋没過程やその廃棄物が出された背景（契機）を捉える上ではそれらを総合的に分析する必要があると考える。

## 補遺：5層の攪乱部分についての分析

### はじめに

5層（東側）において、一部木の根によって攪乱された部分が存在したことから、その部分の資料を「攪乱部分」として分けて取り上げがなされた。本論は、遺構内に含まれていた全ての貝類遺体を分析に用いていることが前提となっている。しかし、遺構内の内容物の堆積過程を議論する上で、攪乱部分

のものを分析に加えることは議論が煩雑になる恐れがあるため本編では除いて分析をおこなった。そこで、補遺として、攪乱部分の資料の提示をおこなうと共に、同じ5層内のサンプルと比較することで、その攪乱の程度についての分析をおこなう。

### 貝種組成 (図2)

ヤマトシジミが76個体と最も多く、この1種で90.5%をしめる。他に、ハマグリ6個体(7.1%)、アカガイ2個体(2.4%)が出土している。

それに対して、5層の東側は、攪乱部分と同様にヤマトシジミが71個体と最も多く、この1種で75.5%を占める。他にアサリが9個体(9.6%)、ハマグリとアカガイが共に5個体(各5.3%)、アワビ類が4個体(4.3%)出土している。

つまり、組成において、攪乱部分は、アサリとアワビ類が出土していない他は、東側の組成とほとんど違いはないといえる。

一方、5層の西側は、前者2サンプルと比べ13個体と少量であり、さらに、組成においてもアサリが4個体で最も多く、30.8%を占め、他にヤマトシジミとアカガイが共に3個体(各23.1%)、ミルカイとサザエの蓋が1個体(各7.7%)とやや異なる様相を示している。

### サイズ分析 (表4)

最も多く出土しているヤマトシジミの殻長について、東側と攪乱部分のサンプル間の平均値の差の有意性を、最小有意差法を用いて検定をおこなった。結果、2つのサンプルの間に統計学的に有意な差が認められなかった。変動係数も東側が0.13、攪乱部分が0.11でほとんど変わらない。ヒストグラムにおいても、共に殻長16mm以上28mm未満の間に分布し、22mm以上24mm未満をピークとしている単峰型を示し、分布の状態を比較すると、攪乱部分の方がきれいな分布を示しているともいえる。

ハマグリは、検定はおこなえなかったものの、全て殻長65mmを超える「大型」サイズであり、5層東側のハマグリ サイズに関する特徴とほとんど同じである。

### 結 論

以上の結果を踏まえると5層攪乱部分の貝類遺体は、組成および主要貝種のサイズ共に5層東側のものと極めて近似しており、また、ヤマトシジミの殻長に関するヒストグラムがきれいな単峰型を示すことからほとんど木の根による攪乱の影響はなかったことが推測される。

### 参考文献

- 阿部 常樹 1999 「貝類遺体」『向台貝塚資料図譜』市立市川考古博物館  
 2002 「江戸遺跡出土ハマグリサイズの解釈に関する試論」『國學院大學考古学資料館紀要』第18輯 國學院大學考古学資料館  
 2003 「近世遺跡出土の貝類遺体とその採集方法について - 東京都新宿区市谷砂土原町三丁目遺跡を例に -」『奈和』第41号 奈和同人会  
 2004a 「近世遺跡におけるごみの堆積過程と貝類遺体の様相 - 新宿区四谷二丁目遺跡22号遺構を例に -」『江戸遺跡研究会 第17回大会〔発表要旨〕続 遺跡からみた江戸のゴミ』江戸遺跡研究会

- 2004b 「東京湾三番瀬における大巻による貝類採集の実地調査 -近世遺跡出土の貝類遺体に関する《採集》から《廃棄》までの過程とその実態の解明のために-」『史紋』第3号 『史紋』刊行会
- 阿部常樹・石神裕之・加藤久雄 2001a 「22号の層位別による統計学的処理の試み」『四谷二丁目遺跡』財団法人新宿区生涯学習財団
- 2001b 「江戸遺跡における”ごみ穴”の成分組成から見たその形成過程」日本文化財科学会第18回大会(奈良大学):研究発表要旨(p.242-243)
- 阿部常樹・加藤久雄 2003a 「上本郷遺跡出土の動物遺存体について」『平成13年度松戸市内遺跡発掘調査報告書』(p.48-58)松戸市教育委員会
- 2003b 「近世江戸府内遺跡出土ハマグリサイズの推定法」『史紋』第1号(p.37-44)史紋編集委員会
- 阿部常樹・野々村海・藤田祐樹・江田真毅 2005 「動物遺体」『東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目遺跡』(p.257-266)中央区教育委員会
- 浦安市教育委員会 1995 『海とともに 浦安市漁撈習俗調査報告書』
- 大分県 1979 『大規模増殖場開発事業調査報告(宇佐地区・ハマグリ)』
- 大垣内 宏 1997 『カタツムリの生活』築地書館
- 奥谷喬司編著 2000 『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会
- 黒住 耐二 1994 「柱状サンプルから得られた微小貝類遺存体」鈴木公雄監修,佐藤孝雄・大内千年編『上高津貝塚A地点』慶應義塾大学文学部民族学・考古学研究室
- 桜井準也・山口徹 1986 「貝類・魚類の大きさとその分布について」『麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会
- 篠田 統 1996 「かいるい 貝類」日本風俗史学会編『図説江戸時代食生活事典』雄山閣
- 鈴木 順 1971 「東京都内湾漁業の実態」東京都内湾漁業興亡史編集委員会編『東京都内湾漁業興亡史』(p.173-268)東京都内湾漁業興亡史刊行会
- 東京府 1890 『東京府管内水産圖説』
- 松島義章・前田保夫 1985 『先史時代の自然環境 縄文時代の自然史』東京美術

## 加賀藩江戸上屋敷御殿空間の食生活

—東京大学本郷構内の遺跡・総合研究棟（文・経・社教）地点（仮称）110号遺構出土の魚類遺体から—

野々村 海

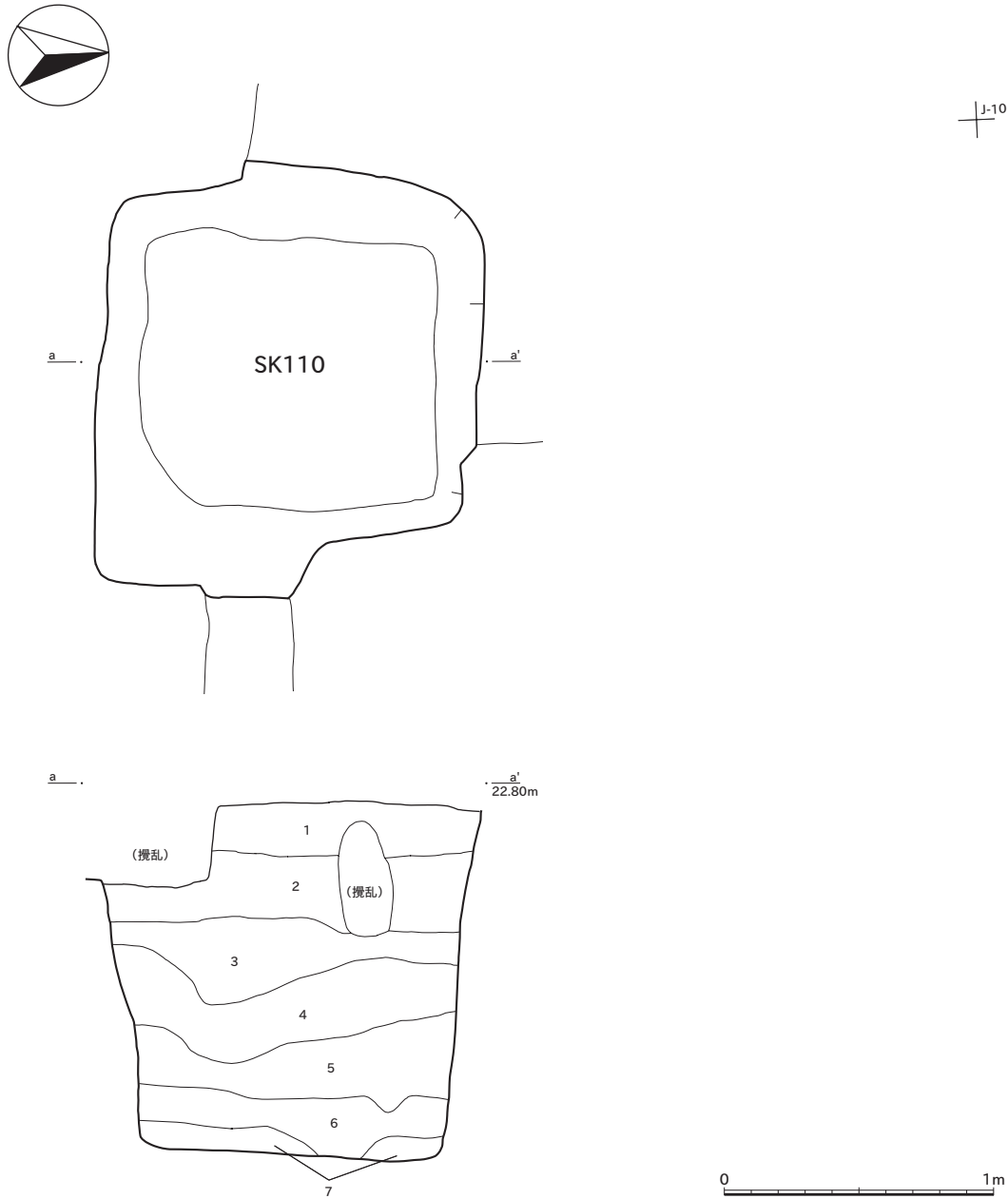
### 1. はじめに

本論において分析に用いた、東京大学本郷構内の遺跡・総合研究棟（文・経・社教）地点（仮称）110号遺構は、加賀藩江戸上屋敷の中でも藩主やその家族が住む「御殿空間」に位置する。具体的には、文政10年（1827）に将軍家から13代藩主前田斉泰のもとに輿入れした溶姫の為の御守殿（以下“溶姫御殿”）の「御膳所」の近くであり、さらに、本遺構から徳川家の紋である葵紋のついた軒丸瓦が出土していることから、その周辺にある能舞台や藩主齋泰の御殿との関係よりは、溶姫御殿との関係がより強いものであると考えられる。つまり、本遺構の資料を分析することによって、溶姫の食生活の一端にアプローチできることが期待される。しかし、110号遺構の位置は、本屋敷の絵図面によると、溶姫御殿の中の空間地にあたり、ゴミ穴であるため施設としての帰属関係が不明瞭である。以上のことから、本資料については、他の大名上屋敷内の御殿空間のものと比較することにより、改めて藩主やその家族さらには使用人も含めたどの階層によって廃棄されたゴミであるのかを評価するべきである。

具体的に、比較資料として尾張藩上屋敷跡遺跡（東京都埋蔵文化財センター2001・2002）の御殿空間内のものを用いることにする。尾張藩上屋敷跡遺跡は、110号遺構と同様に1mm目までの篩を用いた水洗選別法によって資料の抽出が行われている。また、本遺跡では、御殿空間の中でも藩主やその家族が生活する空間だけではなく、使用人の「詰所」など、様々な階層の人々が住んでいた空間に関して調査を行っている。よって、110号遺構が、尾張藩の御殿空間におけるどのような性格の遺構と最も類似しているのかを検討することは110号遺構のゴミの廃棄主体者の階層について推測するのに大変有効であるといえる。また、尾張藩上屋敷跡遺跡との類似性を抽出することで、110号遺構のゴミの廃棄主体者の階層における当時の一般的な食生活を、より具体的に浮き彫りに出来ることも期待できる。

さらに、同じ加賀藩邸内の「詰人空間」に位置する東京大学本郷構内の遺跡・理学部7号館地点63号遺構（東京大学遺跡調査室1989）の資料を併せて用いることとする。理学部7号館地点は、本屋敷の絵図面から加賀藩士のための「御貸小屋」であったとされており、身分のかけ離れた人々の居住区の資料と比較することで、110号遺構出土の魚類遺体に含まれる「御殿空間」から排出された食物残滓としての特徴をより明確にすることが期待される。なお、理学部7号館地点より出土した食物残滓は、秋元智也子の研究によって加賀藩士の日常的な食事によって出されたゴミであり、その魚種組成は日本海側で比較的多くとれるタラやサバが多いなど、国元での食生活を反映している可能性が指摘されている（秋元1992）。

さらに、江戸時代の一般的な魚の価値の面からも検討したい。江戸時代には、魚介類の“上・中・下”といった格付けがはっきりしていたことが、残された料理書などからわかっている（松下1983）。なお、その格付けは、実際の値段との相関性が強いことが想定される（桜井1992）。よって、その格付



層位	色調	土質	混入物
1	淡茶褐色	しまり非常にあり。粘性ややあり。	径1~2mmの黄褐色ローム粒子、10~20mmの小礫をまばらに含む。
2	茶褐色	しまりあり(2層<1層)。	粘性ややあり。径1~2mmの黄褐色ローム粒子、炭化物粒子を少量含む。10~30mmの小礫をまばらに含む。部分的に炭化材の破片を含む。
3	暗茶褐色	しまりややあり。粘性ややあり。	径10mm程の炭化物(材)を少量含む。径1~3黄褐色粘土粒子をまばらに含む。遺物は多い。
4	暗茶褐色	しまりややあり。粘性あり(3層<4層)。	径10~30mmの小礫を非常に多く含む。遺物は多い。
5	暗茶褐色	しまりなし。粘性あり。(3・4層より黒っぽい)	陶磁器、貝、魚骨などの遺物を非常に多く含む。径5mmの黄褐色粒子、径5~10mmの炭化物(材)を多く含む。
6	暗灰褐色	しまりややあり。粘性非常にあり。	径20~30mmの角礫、円礫を多く含む。また、部分的に灰褐色のロームブロックを塊で含んでいる。遺物は少ない。
7	暗茶褐色	しまりややあり。粘性あり(7層<6層)。	径10~20mmの円礫を少量含む。遺物はほとんど含まない。

図1 SK110平面およびセクション図



けをみることで、食した人の階層を推測するための手がかりの一つとなることが考えられる（桜井1992）。

これらのことから、本論では110号遺構と比較に用いる遺構の魚種組成について、統計学的な分析で遺構間の相関の程度を検討した上で、文献を基に当時の魚の格付けに当てはめることでそれぞれの遺構内に含まれる魚類遺体の価値を評価・比較する。

以上の分析により、110号遺構の魚類組成の特徴と、そこから導き出される廃棄主体者の階層や、その階層の当時の食生活の実態、さらに廃棄主体者の嗜好性にまでアプローチすることを目的とした。

## 2. 東京大学本郷構内の遺跡

### 総合研究棟（文・経・社教）地点（仮称）110号遺構の概要（図1）

本遺跡は、東京都文京区本郷7丁目3番1号の東京大学本郷キャンパス内に位置する。本遺跡は江戸時代、主として加賀藩江戸上屋敷がおかれていた。総合研究棟（文・経・社教）地点（仮称）は、遺跡の南西、現在の経済学研究科棟の建つ位置にある。110号遺構（以下「東大総合110号遺構」と略す）は、調査地点中央東寄りにあり、帰属年代が文政10年（1827）から明治元年（1868）とされている。当時東大総合110号遺構の北には、文政10年（1827）に徳川家から、13代藩主・前田斉泰のもとに入興した溶姫の御殿が建っていた。南には、斉泰の御殿と能舞台があった。遺構の大きさは南北1.4m・東西1.6m・深さ約1.2mの方形である。覆土は7層が確認され、特に2層と5層に食物残渣の集中がみられた。なお、地点全体では、御殿廊下の柱穴跡、便所跡、溶姫御殿の食料貯蔵庫とみられる地下室などが検出している。

## 3. 資料の概要

### 採取方法

東西に半裁した遺構の東側の覆土を、層ごとにすべて採取した。その採取した覆土を、5mm目、3mm目、1mm目の3段階の篩を用いての水洗選別法によって資料を抽出し、さらにその中から動物遺体の抽出を行った。

### 同定方法

魚類遺体は上記の資料の中から、同定に用いる部位を抜き出して分析を行った。同定には、科から目のレベルまで同定でき、頑丈で壊れにくい部位を用いた（樋泉1995）。具体的には、主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨・椎骨の8つの部位で、これらはすべて同定に用いた。また、分類群によって、前頭骨・上後頭骨・口蓋骨・舌顎骨・咽頭骨など適宜同定に用いた。なお、計数は、同定した破片数で行なう。

### 同定結果（表1・2・3）

同定された資料は遺構全体で4964点、49分類群である。なお、同定に際して、椎骨は、タイ科以外の魚種でも、タイ科と酷似するものがあるため、タイ科と酷似する椎骨を「タイ」型とする

加賀藩江戸上屋敷御殿空間の食生活

分類群	層位 部位	1層			2層			3層			4層			4・5層間			5層			6層			7層		
		粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細
ガンギエイ科	歯			1		2			5			28													
板鰓亜綱	椎骨		3	1		20	6		1			1		1				1							
ウナギ属	腹椎			1		2					1	6			1			5		5					
	尾椎			2		4					7	6							1						
カタクチイワシ	腹椎																		1						
	尾椎																	1	1						
	椎骨						1																		
ウルメイワシ	椎骨					1																			
ニシン科	第一椎骨					1																			
	腹椎			3		2	4				1						1	8			2				
	尾椎			2		4	2			2							7	18							
	椎骨										1														
コイ	咽頭骨				3	2		2	3								4	5	2					1	
コイ科	腹椎	2			3	1					1						6		1						
	尾椎	1															4								
ドジョウ科	方骨					1/																			
	腹椎					1			2		1								1						
	尾椎					1																			
アユ	腹椎				4	15		1	3		1						7/8	13							
	尾椎				13	10		1	2		1														
サケ科	腹椎				1																				
	尾椎																1								
	椎骨				1																				
タラ科	歯骨																/1								
	第一椎骨																						1		
	腹椎	3			2													11				4			
	尾椎	2	1		1	2					2			1			18	2		2	1				
アンコウ科	椎骨	2															3								
	前上顎骨																	1/1							
サヨリ科	歯骨																/1								
	前鰓蓋骨																		2/1						
	主鰓蓋骨																		/1						
	第一椎骨	2			3													4	3						
	腹椎	3	3		23	22		2	1		4	4		4	9	1	273	151				3			
	尾椎				13	13		1	2		10		2	2			65	55				3			
	椎骨				1													1							
フサカサゴ科	前上顎骨		1/														2/								
	方骨		1/																						
	主鰓蓋骨				1/					1/								1/							
	腹椎						1	2										1	8						
	尾椎				13	1		2								2		10	1		1				
	椎骨	1			1																				
ホウボウ科	主上顎骨																		/1	1/					
	前上顎骨				1/1													1/							
	歯骨																								
	角骨																								
	方骨																								
	主鰓蓋骨																								
	第一椎骨	1																							
	腹椎		3		1	1					1	1					4	1							
尾椎				1						1						6									
カナガシラ	第一椎骨																	1							
コチ科	頭骨																	1							
	主上顎骨						/1	1/																	
	前上顎骨						2/1																		
	歯骨						/1											1/1	/1						
	角骨						1/1											1/1							
	方骨						1/											/1							
	前鰓蓋骨				1/		2/2																		
	主鰓蓋骨						1/1											1/1							
	第一椎骨				2		1																		
	腹椎				26	1				1								1							
尾椎				18																					
アイナメ科	角骨																		/1						
	方骨																		1/						
	第一椎骨																		1						
アイナメ属	主上顎骨																	1/							

※左右のある部位は左 / 右で示した。○は破片のみ出土。

表1 総合研究棟(文・経・社教)地点110号遺構出土魚骨(1)

第4部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要

分類群	層位 部位	1層			2層			3層			4層			4・5層間			5層			6層			7層		
		粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細
アイナメ属	第一椎骨																								
	腹椎	1																							
	尾椎	4 2 50 1 7 1 1 2 46 2 1 1 1																							
	椎骨	5																							
スズキ	主上顎骨	1/1 /1 /1 1/																							
	前上顎骨	1/1 1/1 1/																							
	歯骨	/1 1/																							
	方骨	1/1																							
	前鰓蓋骨	1/1																							
	主鰓蓋骨	2/2 /2 1/																							
	腹椎	8 2 1																							
	尾椎	1 1 1 1 2																							
スズキ属	尾椎	1																							
ハタ科	前上顎骨	2/2 1/																							
	主上顎骨	/1																							
	歯骨	/1																							
キス属	主上顎骨	1/ /5 /1 1/ /2 1/1 1/																							
	前上顎骨	1/ /1 1/ /1 5/3																							
	歯骨	1/1 4/2 2/1 /1 4/4 1/1																							
	角骨	2/ /1 1/ 6/3 1/																							
	方骨	2/ 2/2																							
	前鰓蓋骨	/1 1/																							
	主鰓蓋骨	1/ /1 /1 2/2																							
	第一椎骨	1 19 11 5 4 1 1 13 5 3																							
	腹椎	5 2 2 199 57 2 67 17 20 8 11 21 8 131 53 2 7																							
	尾椎	8 9 1 116 117 1 50 30 14 4 3 30 1 152 62 2																							
アマダイ属	主上顎骨	/1																							
	角骨	/1																							
	方骨	1/ /1																							
	腹椎	2																							
	尾椎	3 1 4																							
アジ科 (マアジ型)	第一椎骨	1 1																							
	腹椎	2 6 1 3 2 1 2 2 2																							
	尾椎	1 1 7 5 4 6 2 5 6																							
アジ科	主上顎骨	/1																							
	前上顎骨	/1																							
	歯骨	1/1																							
ブリ属	前上顎骨	1/																							
	前上顎骨	1/																							
	歯骨	2/ /1 1/2																							
	方骨	1/																							
	前鰓蓋骨	1/1 1/ 1/1																							
	主鰓蓋骨	1/																							
	舌顎骨	1/1																							
	第一椎骨	1 1																							
	腹椎	5 2 4																							
	尾椎	5 1 3																							
椎骨	3																								
カンパチ	腹椎	1																							
イサキ	前上顎骨	/1																							
マダイ	前頭骨	/1 11/12 2/4 1/1 4/5 7/14 ○																							
	上後頭骨	1 10 4 1 1 11																							
チダイ	前頭骨	1/																							
	上後頭骨	3																							
クロダイ	主上顎骨	/1																							
	角骨	1/																							
	口蓋骨	/1																							
キダイ属	前上顎骨	/1																							
マダイ亜科	主上顎骨	1/2 5/4 2/ 1/1 12/9 /2 1/																							
	前上顎骨	/1 3/8 1/ 3/5 1/2 1/1 1/ 15/10 1/2 /2 1/																							
	歯骨	/1 3/8 7/2 1/3 /1 19/11																							
	角骨	3/5 4/2 1 /2 /1 18/11 1/1 1/																							
	方骨	1/ 8/2 1/3 5/2 2/1 /1 11/14 2/2 /1																							
	口蓋骨	4/1 6/2 1/1 7/7																							
タイ科	主上顎骨	/2 1/2 /1 /1 1/ 3/1																							
	前鰓蓋骨	1/1 5/5 /1 3/3 1/1 1/ 8/6																							
	主鰓蓋骨	/1 2/ /3 1/3 /1 /1 1/ 9/6 1/ /1																							
	舌顎骨	/1 3/2 3/4 2/ 9/6																							

※左右のある部位は左/右で示した。○は破片のみ出土。

表2 総合研究棟(文・経・社教)地点110号遺構出土魚骨(2)

加賀藩江戸上屋敷御殿空間の食生活

分類群	層位 部位	1層			2層			3層			4層			4・5層間			5層			6層			7層		
		粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細	粗	中	細
タイ	第一椎骨				12	12		3	2							15	3	1	2						
	腹椎	7	2		47	22		30	2		5	2		2		74	12	2	2	1				1	
	尾椎	12	6		137	28		63	31	1	18	6		3	2	247	13	1	6	3			1	1	
ニベ科	尾椎			1												1	1								
ボラ科	前鰓蓋骨									/1															
	主鰓蓋骨															/1									
	腹椎				2											1									
	尾椎	2			7	8			2							9	6								1
	椎骨				2	1																			
カマス属(?)	腹椎				1																				
タチウオ	尾椎		1																						
ハゼ科	腹椎				1																				
カツオ	主上顎骨							1/																	
	前上顎骨							1/																	
	角骨							1/																	
	方骨				1/1																				
	前鰓蓋骨				/2																				
	第一椎骨							1																	
	腹椎				3			4									2								
	尾椎	2			10			14	1																
サバ属	前上顎骨				/2																				
	主上顎骨																1/								
	角骨				/1																				
	腹椎				1	1										1	1								
	尾椎					2							1	2		2									
サワラ属	歯骨																								
	腹椎																								
	尾椎												3												
	椎骨													1											
ヒラメ	主上顎骨				/1					/1					1/1			1/							
	前上顎骨					3		2/1		1/					2/3										
	歯骨				2/2										1/2										
	角骨					/1		1/2							3/3	/1									
	方骨				1/1	1/1		1/		3/	/1		1/		5/2	2/1		3/1							
	前鰓蓋骨				1/1			/1							1/1										
	主鰓蓋骨					/1																			
	第一椎骨				4	1		1	1							3			1						
	腹椎	1			21	7		1	9		2	2		2		15	1								
	尾椎	4	4		90	27		22	28		17	1		2		95	11		6	1			1		
	椎骨					2								1											
カレイ科	主上顎骨		/1						1/																
	前上顎骨				/1	1/1									/2	1/									
	歯骨							/1																	
	前鰓蓋骨														1/1										
	主鰓蓋骨															/1									
	方骨															1/									
	第一椎骨					2										2			1						
	腹椎		2			3		2	3		2					8	4								
尾椎		2		8	50		3	22		1	2		1		25	59	5	1	11						
ウシノシタ科	尾椎											1											1		

※左右のある部位は左/右で示した。○は破片のみ出土。

表3 総合研究棟(文・経・社教)地点110号遺構出土魚骨(3)

(樋泉 1993)。分類群ごとにみていくと、最も多かったのはキス属で 1349 点、ついでタイ類（マダイ・チダイ・キダイ・クロダイ・マダイ亜科・タイ科・タイ型）が、1312 点とほぼ同量であり、この 2 つの分類群で 55.6% を占める。サヨリ科（686 点・13.8%）、ヒラメ（441 点・8.9%）も多く、以上の分類群以外に出土率が 5% を超えるものはない。層位別でみると 5 層が最も多く 2,222 点、次いで 2 層が 1,574 点で全体の 8 割近くがこの 2 つの層に集中している。7 層において同定されたものは 6 点とごくわずかである。

#### 4. 分析に用いる資料

東大総合 110 号遺構の他に、東大総合 110 号遺構と同じ大名上屋敷「御殿空間」の遺構である尾張藩上屋敷跡遺跡の 564 号・569 号・570 号・703 号・714 号・593 号・792 号の各遺構（東京都埋蔵文化財センター 2002）と、東大総合 110 号遺構と同じ加賀藩で、「詰人空間」の遺構である東京大学本郷構内の遺跡・理学部 7 号館地点 63 号遺構の資料（東京大学遺跡調査室 1990）を用いる。以下にこれらの資料の概要を記す。

##### ①尾張藩上屋敷跡遺跡

尾張藩上屋敷跡遺跡（以下「尾張藩」と略す）は、東京都新宿区市ヶ谷本村町 5 丁目 1 番地に位置し、現在防衛庁がおかれている。本遺跡は江戸時代、初期には板倉周防守下屋敷、後には主に尾張藩上屋敷であった（東京都埋蔵文化財センター 2001）。資料は、発掘時に目視で確認できたもののみを発掘現場にて直接採取したものと、土ごと取り上げ水洗選別法によって採取したものがある。水洗選別法による資料の抽出は、土層観察面から任意にブロックサンプリングし 1mm 目の篩を用いて行ったとされる。

本論では、帰属空間が、尾張藩上屋敷・御殿空間とされ、帰属年代が東大総合 110 号遺構と同時期である、19 世紀前期から中期（一部 19 世紀後期を含む）とされるものを抽出する。さらにその中で、水洗選別法による資料の抽出が行われた遺構のものを分析に用いる。以上の基準に当てはまる遺構は下記の 7 つの遺構である。以下に、遺構の概要と魚類以外の出土遺物を記す。遺物の表記は、人工遺物・鳥類・哺乳類は破片数、貝類は最小個体数で記す。なお、遺構の名称について本論では、便宜上、尾張藩の動物遺体報告における遺構番号を用いる（東京都埋蔵文化財センター 2002）。正式な遺構の名称については括弧内に記す（東京都埋蔵文化財センター 2001・2002）。

##### 第 13 地点（東京都埋蔵文化財センター 2002）

遺跡の西側、南北のほぼ中央に位置し、東西に長い長方形を呈する地点である。御殿空間で、政務の中心的役割を果たす右筆部屋と、それに関連する部屋のある空間である。東端には長屋（詰人空間）との境の壁がある。

**564 号遺構**（154-3M-1）：地点のほぼ中央に位置する土坑である。建物の空き地を利用してもうけられた地下式土坑である。遺構の規模は、深さ 322cm、南北約 318cm、東西は不明である。帰属年代は 19 世紀前期から後期とされる。人工遺物は破片数で磁器 194 点、陶器 800 点、土器 188 点、瓦 19 点が出土している。魚類以外の動物遺体は貝類がハマグリ 6820 個体を主体とし、アサリ 76 個体、シオフキガイ 16 個体、ヤマトシジミ 18 個体、サルボウ 1 個体が出土している。鳥類は 434

点が出土し、すべてニワトリである。

**569号遺構**（162-3L-1）：地点の東寄りに位置する土坑である。遺構の規模は東西103cm、南北290cmの長方形で、深さ76cmである。帰属年代は、19世紀前期から中期とされる。人工遺物は、磁器20点、陶器803点、土器222点、瓦21点が出土している。魚類以外の動物遺体は貝類がハマグリ2個体のみ出土している。他に、ネズミ類2点、モズ類3点が出土している。

**570号遺構**（162-3L-2）：地点の東寄りに位置し、569号と接している遺構である。遺構の規模は東西130cm、南北約102cmの方形で深さ53cmである。帰属年代は、19世紀前期から中期とされる。人工遺物は、磁器18点、陶器31点、土器11点、瓦3点が出土している。魚類以外の動物遺体はネズミ類8点、種不明の小型鳥類1点が出土している。なお、貝類は出土していない。

#### 第29地点（東京都埋蔵文化財センター2001）

遺跡の東側、北寄りに位置し、第13地点と平行に東西に延びる長方形を呈する地点である。絵図面では「御台所」に該当する。2遺構ともトイレと考えられる。

**703号遺構**（141-3X）：地点の西端に位置する桶枠の埋没された石組遺構である。遺構の規模は明らかでない。帰属年代は、19世紀前期から中期とされる。魚類以外の動物遺体はニワトリ4点、シャモ1点が出土している。人工遺物・貝類・哺乳類は出土していない。

**714号遺構**（145-4B-1）：地点西寄りに位置する、大甕の埋没された土坑である。遺構の規模は東西95cm、南北92cmの円形で、深さ71cmである。帰属年代は、19世紀前期から中期とされる。人工遺物は、磁器9点、陶器295点、土器33点、瓦62点が出土している。魚類以外の動物遺体は、貝類がヤマトシジミ33個体、「キサゴ類」と「マイマイ類」がそれぞれ1個体出土している。鳥類は、ニワトリ3点、ハトとモズが各2点、ワシ・タカ類が1点出土している。

#### 第30地点（東京都埋蔵文化財センター2002）

遺跡の東側、南寄りに位置する地点である。「中御門」「中御玄関」などの通用の玄関が配置されている空間である。

**593号遺構**（155-3A-1）：地点の北西端に位置する土坑である。本屋敷の絵図面では、本遺構から約50cm離れた西隣りにある遺構は「御使番詰所」に連なる三連の便所の一つに対応する。遺構の規模は、東西約72cm、南北73cmの円形で、深さ21cmである。帰属年代は、19世紀前期から中期とされる。人工遺物は、磁器73点、陶器53点、土器7点、瓦5点が出土している。魚類以外の動物遺体は出土していない。

#### 第32地点（東京都埋蔵文化財センター2001）

遺跡の北東端に位置する地点である。

**792号遺構**（166-5C-1）：地点の南西端に位置する遺構である。本屋敷の絵図面では、奥向用

の「御台所」の南側にみえる、部屋名の記載されていない建物付近に相当することが推察される。遺構の規模は東西 276cm、南北 160cm、深さ 24cm である。帰属年代は、19 世紀前期から中期とされる。人工遺物は、磁器 1464 点、陶器 510 点、土器 374 点、瓦 68 点が出土している。魚類以外の動物遺体では、貝類でサザエの蓋が 1 点出土している。鳥類はニワトリ、シャモが 29 点、哺乳類はイノシシが 1 点が出土している。

## ②東京大学本郷構内の遺跡 理学部 7 号館地点 63 号遺構 (東京大学遺跡調査室 1990)

理学部 7 号館地点 (以下「東大 7 号館」と略す) は、遺跡全体のほぼ中央に位置している。現存する絵図面から本地点は、元禄から幕末まで、藩士のための「御貸小屋」であったことがわかっている。本論では、帰属年代が東大総合 110 号遺構と同時期で、1mm 目までの篩を用いた水洗選別法による資料の抽出が行われている 63 号遺構を比較に用いた。63 号遺構は、東大 7 号館地点の中央東よりに位置している。遺構の規模は、東西 97cm、南北 83cm、深さ 95cm である。人工遺物については、報告書に定量データが掲載されていない為、詳細は不明であるが、掲載された実測図を概観すると、陶器が多い。なお、陶器 30 個体のうち、22 個体は徳利である。貝類は、ハマグリ 63 個体、アサリ 55 個体、サザエ 4 個体、クロアワビとシジミガイ属がそれぞれ 1 個体出土している。鳥類は、キジ属とカモ属が 2 点ずつ出土している。哺乳類・両生類は出土していない。魚類遺体は、発掘時に目視で確認できたものと、篩を用いた水洗選別法により抽出したのものがある。なお、水洗選別法による資料の抽出は、20cm×20cm×5cm のコラムで採取した覆土を、9.52mm・4mm・2mm・1mm の篩を用いて行ったとされる。

## 5. 各遺構の出土資料数 (表 3・4)

比較に用いた資料は、遺跡ごとで同定の度合いや、分類群の名称が異なるため、本論では表 3 のように名称を統一する。計数は、同定標本数で行なう。その際、東大総合 110 号遺構の分析に際して同定を行わなかった部位については、比較に用いる遺構のものでも計数から除外する。計数結果を表 4 に記す。

なお、分類群の詳細については表 3 を参照していただきたいが、特に分かりづらいと思われる板鰓亜綱について説明を加える。板鰓亜綱は、エイ類やサメ類などが含まれる。しかし本論で用いた資料に関しては、椎骨の大きさからエイ類の可能性が高い。

## 6. 分析

### 分析方法

本論では、統計学的分析を用いて魚種組成について各遺構間で比較した上で、さらに、文献を基に当時の魚の格付けに当てはめて比較を行う「格付け分析」によって組成の違いを評価する。

はじめに、各遺構の魚種組成を統計学的に比較、検討する。具体的にはまず、主成分分析により、遺構間の魚種組成における具体的な相違性・類似性を抽出する。その上で、クラスター分析により、各遺構間の相違性・類似性の程度について検討する。それにより、東大総合 110 号遺構の魚種組成が、尾張藩御殿空間におけるどの遺構に類似しているかを検討し、また、その遺構の具体的な類似性につ

いて概観する。同時に、同じ加賀藩内の詰人空間との魚種組成の相対的な相違性・類似性もみていく。

つぎに、「格付け分析」を行う。江戸時代には、魚介類の“上・中・下”といった格付けがはっきりしていたことが、残された料理書などからわかっている（松下1983）。そこで、各遺構の出土魚類を、文献を参考にした当時の格付けに照らし合わせて分類し、その比率の違いから各遺構の相対的な“格付け”を試みる。そして、その格付けが、屋敷の性格や食した人の階層によって異なるのか、異なるのであれば、東大総合110号遺構は尾張藩御殿空間のどの階層、若しくは性格の遺構と近い値を示すのかを検討する。そして最後に、統計学的な分析と格付け分析の結果を基に、東大総合110号遺構の魚種組成の特徴と、その特徴が表す階層などの社会的背景や個人の嗜好等について検討する。

### ①魚種組成からみた遺構間の類似性および相違性について

#### 分析方法

まず、魚種組成の統計学的分析による遺構間の比較を行う。

各分類群の同定資料数を遺構内での百分率に換算した数値をさらに arc-sin 変換し正規分布に近似させた（埴原1992）ものを主成分分析に用いる。また、主成分分析の結果抽出された主成分得点を用いて、群平均法クラスター分析を行なう。

#### 分析結果（表5・図2）

a. 主成分分析の結果：分析の結果、上位4つの主成分が抽出された。この4つの主成分で全体の情報量の73.9%（寄与率）が集約されている。以下、第4主成分までを用いて分析を行う。

第1主成分：スズキ属・サケ科・フサカサゴ科・フグ類・コチ科・カレイ類の因子負荷量が高い

統一名称	尾張藩上屋敷跡	理学部7号館	東大総合110号
板鰓亜綱	エイ類		ガンギエイ科
			板鰓亜綱
ウナギ属		ウナギ	ウナギ属
イワシ類	マイワシ	マイワシ	カタクチイワシ
	イワシ類		ウルメイワシ
			ニシン科
コイ	コイ		コイ
フナ	フナ		
ウグイ	ウグイ		
コイ科			コイ科
ドジョウ類		ドジョウ科	ドジョウ科
		ドジョウ型	
アユ			アユ
サケ科	サケ		サケ科
タラ類	マダラ	スケトウダラ	タラ科
	タラ類		
アンコウ科			アンコウ科
サヨリ科	サヨリ		サヨリ科
サンマ			サンマ
フサカサゴ科	フサカサゴ科		フサカサゴ科
	カサゴ類		
	カサゴ		
ホウボウ科	ホウボウ		ホウボウ科
			カナガシラ
コチ科	コチ		コチ科
アイナメ科	アイナメ		アイナメ科
			アイナメ属
スズキ属	スズキ		スズキ
			スズキ属
ハタ科			ハタ科
キス属	キス		キス属
アマダイ属			アマダイ属
アジ類	マアジ		アジ科（マアジ型）
	ムロアジ		アジ科
ブリ属	ブリ		ブリ属
カンパチ			カンパチ
イサキ			イサキ
タイ類	マダイ		マダイ
	チダイ		チダイ
	クロダイ	クロダイ属	クロダイ
	キダイ		キダイ属
			マダイ亜科
	タイ科		タイ科
	タイ類	タイ型	タイ型
ニベ科	イシモチ		ニベ科
ボラ科	ボラ		ボラ科
	メナダ		
カマス属	カマス		カマス属（?）
タチウオ			タチウオ
ハゼ科			ハゼ科
カツオ類	カツオ	カツオ	カツオ
	カツオ類		
	ソウダガツオ		
マグロ類	マグロ類		
	マグロ		
サバ属	サバ類	サバ属	サバ属
サワラ属			サワラ属
ヒラメ	ヒラメ		ヒラメ
カレイ類	カレイ類	カレイ型	カレイ科
ウシノシタ科			ウシノシタ科
フグ類	フグ類		
	フグ		

表3 本研究における魚種の統一名称



正の値を示す。一方、マグロ類・コイ科・板鯉亜綱の因子負荷量は、高い負の値を示す。高い正の主成分得点を示すものは、尾張藩703号遺構と東大7号館63号遺構、高い負の主成分得点を示すものは尾張藩563号・569号・570号の各遺構と加賀藩東大総合110号遺構である。

**第2主成分：**アイナメ科・ブリ属・キス属・タイ類・サヨリ科の因子負荷量が高い正の値を示す。一方、サバ属・ボラ科・サケ科の因子負荷量が高い負の因子負荷量を示す。高い正の主成分得点を示すものは、尾張藩564号・570号・593号遺構、高い負の主成分得点を示すものは東大総合110号遺構と尾張藩714号遺構である。

**第3主成分：**アジ類の因子負荷量が高い正の値を示す。一方、タラ類・ドジョウ類の因子負荷量が高い負の値を示す。東大7号館63号遺構の主成分得点が特に高く、尾張藩593号遺構も高い正の値を示す。尾張藩792号・703号遺構が高い負の主成分得点を示す。

**第4主成分：**フグ類・フサカサゴ科の因子負荷量が高い正の値を示す。一方、ボラ科の因子負荷量が高い負の値を示す。高い正の主成分得点を示すものは、尾張藩703号・570号・593号の各遺構、高い負の主成分得点を示すものは尾張藩564号・792号遺構である。

**b. クラスター分析の結果：**クラスター分析の結果、AからDまでの4つのクラスターに分類される。さらにクラスターBは2つのサブクラスターに分類される。なお、クラスター分析の結果を、主成分分析の結果と併せて解釈すると以下ようになる。

第1主成分は、クラスターC・DとサブクラスターBaの違いについて表していると考えられる。第2主成分は、クラスターAとサブクラスターBbの違いについて表していると考えられる。第3主成分は、クラスターA・CとクラスターDの違いについて表していると考えられる。第4主成分は、

遺跡・地点名	尾張藩上屋敷跡遺跡							理学部 7号館	総合研 究棟	
	遺構番号	564号	569号	570号	593号	703号	714号			792号
板鯉亜綱						2				70
ウナギ属									3	42
イワシ類	9	63	75			10	175	3	12	62
コイ			1							22
フナ						3				
ウグイ						3				
コイ科										16
ドジョウ類									71	7
アユ										79
サケ科	1	6	9	5						3
タラ類		4		4			8		21	51
アンコウ科										4
サヨリ科		10						1		686
サンマ										2
フサカサゴ科		3	17	4						50
ホウボウ科		1	1							26
コチ科	1	4	6	2				1		75
アイナメ科		2					2			144
スズキ属		20	4	2			9			54
ハタ科										7
キス属		10								1,349
アマダイ属										14
アジ類		61	34	1	6			12		64
ブリ属							11			42
カンパチ										1
イサキ										1
タイ類		49	20	16	7	126	3	3		1,312
ニベ科				2						3
ボラ科	26	13	19	4				2		41
タチウオ										1
ハゼ科										1
カマス属		5								
カツオ類	8	15	39				8		1	42
マグロ類			1		1					
サバ類	24	41	17	42	4			1	8	15
サワラ属										7
ヒラメ	5	16		2			35			441
カレイ類		7	32	13			89		1	228
ウシノシタ科										2
フグ類		2	6	2						
合計	74	332	281	99	36	463	23	120		4,965

表4 各遺構の出土量

サブクラスターBa・クラスターCとクラスターAの違いについて表していると考えられる。

c. まとめ：以上の2つの分析結果を整理すると以下のようになる。

クラスターA：尾張藩564号遺構と792号遺構が含まれる。

ボラ科が相対的に多く、フサカサゴ科・フグ類が相対的に少ない遺構である。実際の出土率は、ボラ科が尾張藩564号遺構で32.1%、792号遺構で8.7%である。なお、フサカサゴ科・フグ類は両遺構とも出土していない。

クラスターB：東大総合110号遺構と尾張藩の569号・570号・593号・714号の各遺構が含まれる。

スズキ属・サケ科・フサカサゴ科・カレイ科が相対的に多い遺構である。

クラスターBa：尾張藩569号遺構、570号遺構、593号遺構の3つが含まれる。

スズキ属・サケ科・フサカサゴ科・フグ類・コチ科・カレイ類が相対的に多く、マグロ類・コイ科・板鰓亜綱が相対的に少ない遺構である。実際の出土率をみていくと、フグ類はこの3つの遺構でのみ出土している。スズキ属・サケ科・フサカサゴ科・コチ科・カレイ類は3つの遺構すべてで出土しているが、その出土率は各種各遺構で様々である。マグロ類・コイ科は尾張藩570号遺構で各0.4%出土、他の2つの遺構では出土していない。板鰓亜綱は3つすべての遺構で出土していない。

クラスターBb：尾張藩714号遺構と東大総合110号遺構が含まれる。

アイナメ科・ブリ属・キス属・タイ類・サヨリ科が相対的に多く、サバ属・ボラ科・サケ科が相対的に少ない遺構である。出土率をみていくと、アイナメ科は、尾張藩714号遺構で0.4%、東大総合110号遺構で2.9%である。ブリ属は本クラスターでのみ出土している。キス属は、東大総合110号遺構で、27.2%、尾張藩714号遺構では出土していない。タイ類は両遺構とも26.0%以上出土している。サヨリ科は、東大総合110号遺構で13.8%、尾張藩714号遺構では出土していない。サバ属・ボラ科・サケ科は、両遺構とも1.0%以下である。

1. 因子負荷量

第1主成分		第2主成分		第3主成分		第4主成分	
マグロ類	-0.790	サバ属	-0.736	タラ類	-0.945	ボラ科	-0.547
コイ科	-0.648	ボラ科	-0.634	ドジョウ類	-0.823	ヒラメ	-0.354
板鰓亜綱	-0.555	サケ科	-0.575	その他	-0.494	サヨリ科	-0.306
イワシ類	-0.461	フグ類	-0.465	カレイ類	-0.289	コチ科	-0.218
ドジョウ類	-0.356	カツオ類	-0.374	マグロ類	-0.100	ドジョウ類	-0.195
アジ類	-0.171	コチ科	-0.319	ブリ	-0.072	カツオ類	-0.160
タラ類	-0.020	フサカサゴ科	-0.241	サバ属	-0.072	キス属	-0.148
タイ類	0.119	アジ類	-0.155	フグ類	-0.047	アイナメ科	-0.117
ブリ属	0.128	マグロ類	-0.105	サケ科	-0.015	ブリ	-0.039
サバ属	0.191	イワシ類	-0.016	スズキ属	-0.015	タラ類	-0.031
サヨリ科	0.307	ドジョウ類	-0.013	フサカサゴ科	0.011	サバ属	0.015
ボラ科	0.327	タラ類	0.144	ヒラメ	0.027	その他	0.084
カツオ類	0.351	コイ科	0.145	カツオ類	0.047	アジ類	0.121
キス属	0.380	カレイ類	0.230	アイナメ科	0.106	イワシ類	0.167
アイナメ科	0.399	スズキ属	0.237	キス属	0.156	サケ科	0.314
その他	0.481	その他	0.337	イワシ類	0.212	板鰓亜綱	0.358
ヒラメ	0.536	板鰓亜綱	0.384	タイ類	0.285	スズキ属	0.386
カレイ類	0.578	ヒラメ	0.480	板鰓亜綱	0.341	マグロ類	0.477
コチ科	0.580	サヨリ科	0.627	コイ科	0.348	カレイ類	0.490
フグ類	0.631	タイ類	0.727	ボラ科	0.364	コイ科	0.496
フサカサゴ科	0.703	キス属	0.734	サヨリ科	0.392	タイ類	0.506
サケ科	0.719	ブリ	0.774	コチ科	0.526	フサカサゴ科	0.570
スズキ属	0.735	アイナメ科	0.866	アジ類	0.698	フグ類	0.607
説明済	5.555	説明済	5.279	説明済	3.374	説明済	2.756
寄与率	24.2%	寄与率	23.0%	寄与率	14.7%	寄与率	12.0%

2. 主成分得点

第1主成分		第2主成分		第3主成分		第4主成分	
尾703	-1.944	尾564	-1.165	加7号館63	-2.200	尾564	-1.718
加7号館63	-0.978	尾570	-1.003	尾593	-0.650	尾792	-0.928
尾792	-0.451	尾593	-0.715	尾714	-0.412	加7号館63	-0.498
尾714	-0.070	尾792	-0.303	尾569	0.266	加SK110	-0.434
尾564	0.048	加7号館63	-0.116	尾564	0.289	尾569	0.112
尾570	0.609	尾703	0.119	尾570	0.326	尾714	0.145
加SK110	0.749	尾569	0.132	加SK110	0.336	尾593	0.953
尾569	0.865	尾714	1.115	尾703	0.798	尾570	1.137
尾593	1.171	加SK110	1.935	尾792	1.248	尾703	1.231

表5 主成分分析の結果

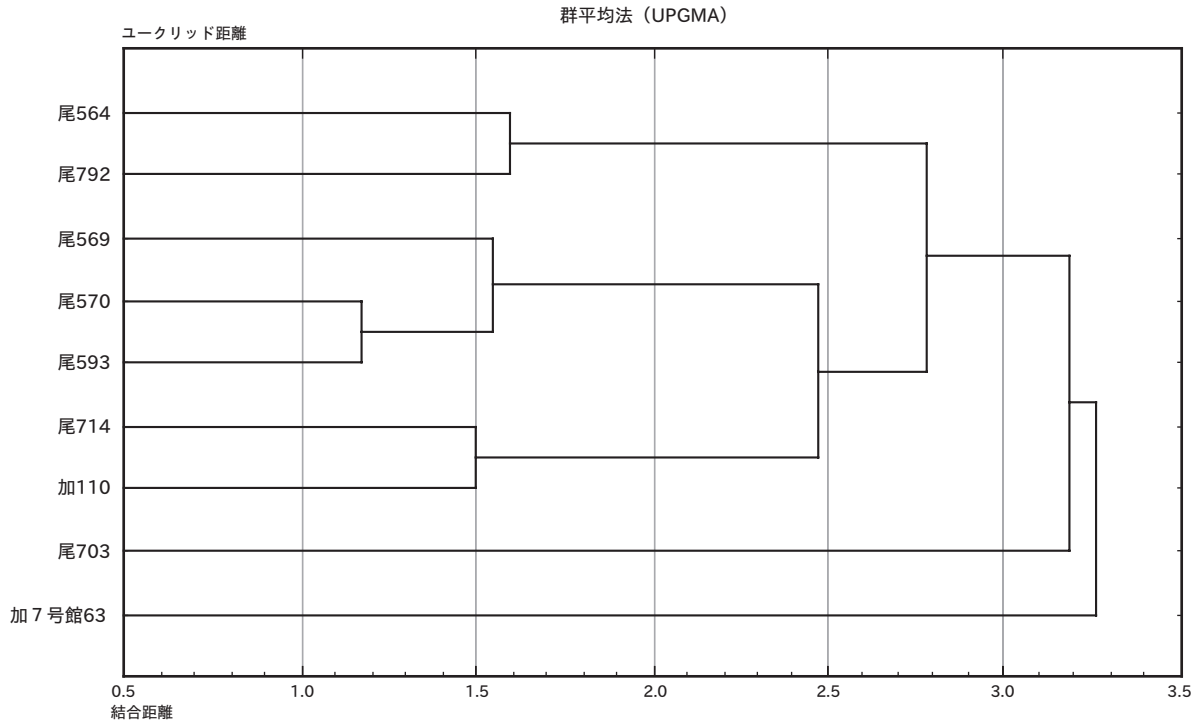


図2 クラスター分析の結果

クラスターC：尾張藩703号遺構のみ含まれる。

マグロ類(2.8%)・コイ科(16.7%)・板鰓亜綱(5.6%)が相対的に多くスズキ属・サケ科・フサカサゴ科・フグ類・コチ科・カレイ類の出土していない遺構である。

クラスターD：東大7号館63号遺構のみ含まれる。

タラ類(17.5%)・ドジョウ類(59.2%)が相対的に多く、アジ類・スズキ属・サケ科・フサカサゴ科・フグ類・コチ科が出土していない遺構である。

以上の分析から次の解釈がなされる。

東大総合110号遺構の魚種組成の特徴は、アイナメ科・ブリ属・キス属・タイ類が相対的に多く、サバ属・ボラ科・サケ科が少ないことである。また、クラスター分析の結果東大総合110号遺構は、比較を行った9つの遺構のうち尾張藩714号遺構と最も類似性が高く、東大7号館63号遺構と最も類似性が低い。なお、詳細は後述するが、尾張藩714号遺構は尾張藩御殿「御台所」のある空間の遺構であり、東大7号館63号遺構は加賀藩士が住む「御貸小屋」の遺構である。

## ②格付け分析

### 分析方法

統計学的分析で、東大総合110号遺構は尾張藩の714号遺構と最も類似性が高く、東大7号館63号遺構と最も類似性が低いことが示された。次に、その違いが抽出された要因について、当時の魚の価値観の面から検討する。魚介類の格付けを記した史料は、近世においていくつか存在するが、御府内(江戸)の食材や料理についての記載がなされていること、掲載している魚種の数が多いこと、翻刻が行われていることから、本論では『古今料理集』を用いる。

『古今料理集』の刊行年は寛文9年(1669)から延宝2年(1674)と考えられている(吉井1981<sup>(註1)</sup>)。全7巻8冊にわたり、御府内の食材や料理について記してある。著者は、その内容から、高度な専門知識を有する料理人と考えられている(原田1989)。本論で用いた第二章の「いろは哥」は、食品をイロハ順にあげて、料理法や説明を記したものである。魚類の説明には適する料理法の他に、「上魚也」「下魚也」といった上下の格付けや、「賞翫也」「賞翫に不宜なり」といった評価が記してあり、その魚が当時どのような価値とされ、どのように扱われていたかが分かる。

本論では、「上魚」「賞翫也」と記載がある魚をⅠグループ、「下魚」「賞翫に不宜」とあるものをⅢグループ、そして、「賞翫に用ゆべきか」という曖昧な基準については、その中間のⅡグループとする。そして、出土資料を各グループに分類し、出土率を算出する。

なお、フサカサゴ科は「賞翫也」(も魚)になるものと「賞翫に用ゆべきか」(かさご・めはる)になるものがあるため、「ⅠまたはⅡグループ」とする。コイ科は、「上魚」(こい)・「賞翫也」(ふな)と「下魚」(たなご)の可能性があるため、「分類不可」とする。

### 分析結果(表6・図3)

ほとんどの分類群が文献に記載されており、分類することができた。なお、文献に記載されていない分類群は、サンマ・カンパチ・タチウオの3つの分類群である。しかし、これらは東大総合110号遺構で0.08%しか出土しておらず、他の遺構からは全く出土していない。その為、これらが分類できなかったことは、分析そのものにあまり影響はないものと判断される。以下、クラスターごとに分析結果を記す。

**クラスターA:** 尾張藩の564号遺構と792号遺構が含まれる。Ⅰグループは564号で20.3%、792号で21.7%と近い値を示す。ⅡグループとⅢグループはそれぞれ、564号が35.1%・44.6%、792号が8.7%・69.6%と遺構間でそれぞれ差がみられる。

**クラスターB:** 東大総合110号遺構と尾張藩の569号・570号・593号・714号の各遺構が含まれる。Ⅰグループの割合が他のクラスターよりも高く、すべての遺構で39.9%以上である。

**サブクラスターBa:** 尾張藩569号遺構・570号遺構・593号遺構が含まれる。Ⅰグループが39.9~44.4%、Ⅱグループが4.0~6.8%、Ⅲグループが47.3~51.8%で比較的近い値を示している。

**サブクラスターBb:** 東大総合110号遺構と尾張藩714号遺構が含まれる。Ⅰグループは714号59.4%、東大総合110号88.6%と差があるが、両遺構とも高い値を示す。ⅡグループとⅢグループはそれぞれ、714号0.4%・40.2%、東大総合110号6.1%・4.0%と遺構間で差がある。

**クラスターC:** 本クラスターは尾張藩703号遺構のみである。Ⅰグループ36.1%、Ⅱグループ5.6%、Ⅲグループ58.3%である。

**クラスターD:** 本クラスターは東大7号館63号遺構のみである。Ⅰグループ21.7%、Ⅱグループ61.7%、Ⅲグループ16.7%である。

(註1 刊行年は吉井始子の研究による(吉井1981)。なお実際の刊行年は不明である。)

第4部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要

分類	文献に記載された格付け	分類群	文献に記載された魚種名	63号	703号	110号	714号	593号	570号	569号	792号	564号
I	上魚	タイ類	たい	2.50%	19.44%	26.42%	27.21%	16.16%	7.12%	14.76%	13.04%	
		カレイ類	いしかれい・かれい	0.83%		4.59%	19.22%	13.13%	11.39%	2.11%		
		コイ	こい			0.44%			0.36%			
		アユ	鮎			1.59%						
		ハタ科	はた白・あら			0.14%						
		アマダイ属	あまたい			0.28%						
	アンコウ科	あんかう			0.08%							
	賞瓶也	スズキ属	すゝき			1.09%	1.94%	2.02%	1.42%	6.02%		
		ヒラメ	ひらめ			8.88%	7.56%	2.02%		4.82%		6.76%
		カツオ類	かつを	0.83%		0.85%	1.73%		13.88%	4.52%		10.81%
		サケ科	ます・さけ			0.06%		5.05%	3.20%	1.81%		1.35%
		タラ類	たら・生鱈	17.50%		1.03%	1.73%	4.04%		1.20%		
		コチ科	こち			1.51%		2.02%	2.14%	1.20%	4.35%	1.35%
		ホウボウ科	かなかしら			0.52%			0.36%	0.30%		
		サヨリ科	さより・生干さより			13.82%				3.01%	4.35%	
キス属		生干きす・こきす			27.17%				3.01%			
サワラ属		さはら			0.14%							
フナ	ふな			8.33%								
ウグイ	うぐい			8.33%								
小計				21.67%	36.11%	88.62%	59.40%	44.44%	39.86%	42.77%	21.74%	20.27%
I or II	賞瓶也 or 賞瓶に用ゆべきか	フサカサゴ科	も魚(賞瓶也)かきご・めはる(賞瓶に用ゆべきか)			1.01%		4.04%	6.05%	0.90%		
II	賞瓶に用ゆべきか	ボラ科	ぼら・めなた			0.83%		4.04%	6.76%	3.92%	8.70%	35.14%
		アイナメ科	あいなめ			2.90%	0.43%		0.60%			
		板鰓亜綱	ゑい			5.56%	1.41%					
		ドジョウ類	どじやう	59.17%		0.14%						
		ウナギ属	うなぎ	2.50%		0.85%						
		ハゼ科	はぜ			0.02%						
小計				61.67%	5.56%	6.14%	0.43%	4.04%	6.76%	4.52%	8.70%	35.14%
III	賞瓶に不宣	アジ類	あじ			16.67%	1.29%		1.01%	12.10%	18.37%	52.17%
		カマス属	かます							1.51%		
	賞瓶に不宣 or 下魚也	ブリ属	ぶり(賞瓶に不宣)				0.85%	2.38%				
			わらさ・いなた(下魚也)									
	下魚也	イワシ類	いわし・かど・このしろ・こはた	10.00%	27.78%	1.25%	37.80%		26.69%	18.98%	13.04%	12.16%
		サバ属	さは	6.67%	11.11%	0.30%		42.42%	6.05%	12.35%	4.35%	32.43%
		フグ類	ふぐ					2.02%	2.14%	0.60%		
		マグロ類	まくろ			2.78%				0.36%		
		ニベ科	いし持				0.06%		2.02%			
		イサキ	こしため				0.02%					
ウシノシタ科	うしのした				0.04%							
小計				16.67%	58.33%	3.81%	40.17%	47.47%	47.33%	51.81%	69.57%	44.59%
分類不可	コイ科	こい(上魚)たなこ(下魚也)ふな(賞瓶也)				0.32%						
記載なし	サンマ					0.04%						
	カンパチ					0.02%						
	タチウオ					0.02%						
	小計				0.00%	0.00%	0.08%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%

表6 格付け分析の結果

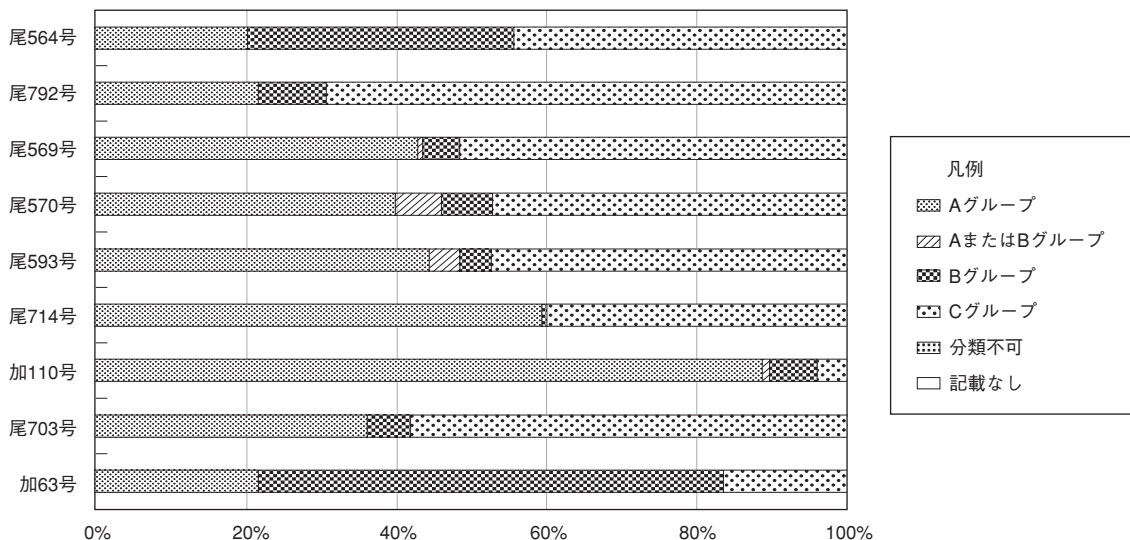


図3 格付け分析の結果

## 7. 考察

以上の分析結果をふまえて、クラスターごとの魚種組成の特徴と遺構間の組成の相違性および類似性を抽出する。その上で、それらの事象が抽出された背景や要因について検討し、さらに東大総合110号遺構の魚種組成における特徴と、その特徴が表す階層などの社会的背景や個人の嗜好を、本遺構と近接する溶姫御殿「御膳所」との関係も含めて検討する。

### クラスター A

本クラスターには、尾張藩の564号遺構と792号遺構が含まれる。

格付け分析の結果、Iグループは、20.3%（尾張藩564号遺構）と21.7%（尾張藩792号遺構）に近い値を示す。しかしIIグループは35.1%（尾張藩564号遺構）と8.7%（尾張藩792号遺構）、IIIグループは44.6%（尾張藩564号遺構）と69.6%（尾張藩792号遺構）で各遺構間で差がみられる。

主成分分析では第4主成分において、ボラ科（IIグループ）が相対的に多く、フサカサゴ科（I又はIIグループ）・フグ類（IIIグループ）が相対的に少ないといった共通性が抽出されている。しかし、両遺構とも魚の種類が7分類群と、比較を行った遺構の中では少ない上、尾張藩564号遺構はアジ科（IIIグループ）・尾張藩792号遺構はボラ科とサバ属（IIIグループ）とそれぞれ特定の分類群がかなりの割合を占めている。また、資料数自体も尾張藩564号遺構は74点、尾張藩792号遺構は23点と少ない。以上のことから、本資料は、少人数の1食分や1日分といった極めて小さい廃棄単位を表しているか、もしくは、サンプル採取の際に一部分のみが採取された結果、このような魚種組成になったことも想定される。なお、2つの遺構は帰属する空間での類似性はみられない。

### クラスター B

本クラスターには、東大総合110号遺構と尾張藩の4つの遺構が含まれる。

格付け分析の結果は、Iグループの割合が他のクラスターのものよりも高くすべての遺構で約40%を超える。なお、IIグループは0.4%～6.8%、IIIグループは3.8%～51.8%で、値にばらつきがみられる。

主成分分析では、魚種組成の特徴はスズキ属・サケ科・フサカサゴ科・カレイ科が相対的に多いことが第1主成分においてみられる。クラスターBはさらに2つのサブクラスターに分かれる。

#### サブクラスター Ba

本サブクラスターには、尾張藩の569号遺構・570号遺構・593号遺構が含まれる。

格付け分析の結果は、Iグループが39.9～44.4%、IIグループが4.0～6.8%、IIIグループが47.3～51.8%であり、それぞれ比較的近い値を示している。

尾張藩569号遺構と尾張藩570号遺構は、右筆部屋とそれに関連する部屋のある空間に位置する遺構、尾張藩593号遺構は「御使番詰所」のある空間に位置する遺構である。帰属する空間から、いずれも御殿内で働いていた人々の生活空間で食された物と考えられる。

この3つの遺構の資料は、クラスター分析において他の遺構間と比べて、結合距離が比較的短い。また、格付け分析でも各グループの遺構間での差が5%以内におさまり、かなり近い値を示す。なお、格付け分析の結果Iグループの割合が、詰人空間の資料である東大7号館63号遺構（クラスターD）

よりも多く、尾張藩「御台所」空間の資料である尾張藩 714 号遺構（サブクラスター Bb）よりも少ない。また、含まれる分類群の数も比較的多いことから、尾張藩の御殿で働く人たちが食した魚の傾向が伺える資料と考えられる。

### サブクラスター Bb

東大総合 110 号遺構と尾張藩 714 号遺構が含まれる。

格付け分析の結果は、I グループが 88.6%（東大総合 110 号遺構）と 59.4%（尾張藩 714 号遺構）で差があるが、どちらも他のクラスターに属する遺構よりも高い値である。II グループは 0.4%（東大総合 110 号遺構）と 6.1%（尾張藩 714 号遺構）、III グループは 4.0%（東大総合 110 号遺構）と 40.2%（尾張藩 714 号遺構）と遺構間で差がみられる。

尾張藩 714 号遺構は尾張藩御殿の表向と奥向の中間にある「御台所」のある空間のトイレ遺構である。まとまった量の魚類遺体と貝類・鳥類も出土しており、「御台所」から出た食物残滓の可能性がある。東大総合 110 号遺構は格付け分析で I グループが 88.9% と分析で用いた資料の中で最も高い値である。また、尾張藩 714 号遺構も東大総合 110 号遺構の次に I グループが多く、御殿で働く人たちが食した魚の傾向が現れていると考えられるクラスター Ba とは 15.0% 以上の差がある。

### クラスター C

本クラスターは尾張藩 703 号遺構のみである。

格付け分析の結果は、I グループが 36.1%、II グループが 5.6%、III グループが 58.3% である。

尾張藩御殿の「御台所」のある空間のトイレ遺構で尾張藩 714 号遺構と、帰属する空間と遺構の性格が同じである。なお、尾張藩 714 号遺構は東大総合 110 号遺構と同じクラスター Bb に属する。しかし、格付け分析では、714 号よりも I グループが少なく III グループが多い。主成分分析でも、第 1 主成分において、714 号で出土していないマグロ類・コイ科・板鰓亜綱（エイやサメ）が相対的に多いことが示された。マグロ類やエイ・サメは調理の段階で骨を落とし、食膳には骨が上らない魚種である事から、尾張藩 703 号遺構出土魚類遺体は、下処理段階のゴミを多く含む資料であると考えられる。

### クラスター D

本クラスターは東大 7 号館 63 号遺構のみである。

格付け分析の結果は、I グループが 21.7%、II グループが 61.7%、III グループが 16.7% である。

絵図面に照らし合わせると本遺構の位置は加賀藩士のための「御貸小屋」のトイレに当たることから「御貸小屋」に住んでいた加賀藩士の食物残滓であると想定される。

主成分分析の結果、ドジョウ類と加賀の代表的な魚であるタラ科（陶 2002）が他の遺構に比べて多いのが特徴であることが第 3 主成分において示された。クラスター分析では、東大総合 110 号遺構と同じ加賀藩の資料であるにもかかわらず、比較した遺構の中で東大総合 110 号遺構と最も結合距離が遠い。格付け分析でも、東大総合 110 号遺構と比較して、I グループの割合が少なく、さらに、尾張藩の御殿で働く人たちが食したと想定されるサブクラスター Ba よりも I グループの割合が少ない。

一方で、「古今料理集」に「賞翫に用ゆべきか」と記された II グループが 61.7% と非常に多い。しかし、「賞翫に用ゆべきか」という記載は、曖昧であるため、これらの分類群の価値がどのように位

置づけられていたのか、他の文献からも検証する。具体的に、本論で用いた『古今料理集』より70年ほど後の延享3年(1746)に刊行された『黒白精味集』を用いる。『黒白精味集』は、四季ごとに、“上中下”の魚を用いた献立例を記した料理書である(松下2002)。さて、本史料では、7号館63号出土の魚類遺体で、Ⅱグループになった分類群はそれぞれ、ドジョウが「下」、ウナギが「中」と位置づけられており、少なくとも本論でⅠグループとした分類群より、価値が低いとされていたといえる(註2)。

つまり、本資料は、東大総合110号遺構や、尾張藩の御殿空間の食生活を反映していると考えられるクラスターBの資料と比較して、当時比較的価値が高いとされた分類群の割合が少ないことを指摘することができる。

しかし、含まれる魚の種類が8分類群と少なく、ドジョウ類が59.2%をしめる特異な組成である事から、日常的な加賀藩士の食生活を反映した資料とは必ずしも言い難い。

以上、統計学的な分析では、御殿空間の遺構と詰人空間の遺構とで魚種組成は大きく異なり、また御殿空間の中でも御台所空間と使用人の生活空間とで魚種組成が異なることが分かった。また、格付け分析では、詰人空間、御殿内の使用人の生活空間、御殿御台所空間の順、つまり、より階層が高い人々が住んでいる空間に帰属しているもの程、Ⅰグループの割合が多くなる傾向がみられた。以上、一連の分析の結果、東大総合110号遺構の魚種組成は、尾張藩御台所空間と最も類似性があり、Ⅰグループの割合が比較した遺構の中で最も多いことが示された。そのことから、東大総合110号遺構出土の魚類遺体は溶姫御殿の長局や他の施設との関連性よりも藩主やその家族(溶姫も含む)の食事が作られた「御膳所」との関連性が窺える資料であるといえる。

さらに、東大総合110号遺構の魚種組成と東大7号館63号遺構の魚種組成を比較すると、東大7号館63号遺構で17.5%出土し「加賀での食生活を反映している」(秋元1992)とされたタラ科が東大総合110号遺構では1.0%と少ない。なお、タラ科はⅠグループに属する。東大総合110号遺構が溶姫御殿「御膳所」との関連性が強い遺構であるならば、そこに暮らしていた溶姫や女中などは加賀藩出身者ではないため、タラを特別多くは食さなかったと考えることも出来る。

## 8. 課題と展望

本論で試みた格付け分析では、出土魚類を文献に記された当時の格付けを基にして分類し、遺構間の比較を行った。その結果、尾張藩御殿空間の御台所、御殿空間の使用人が生活する空間、そして加賀藩の詰人空間とで各グループの出土率に差がみられた。特に、当時比較的価値が高いとされたⅠグループの割合が、より階層の高い人々が住んでいる空間に属している遺構ほど多くなる傾向がみられた。この結果は、魚類の上・下といった価値観が、実際の価格と相関している(桜井1992)可能性を示すものと予想され、それは、食した人の経済格差を反映しているものとも考えられる。

しかし、「御台所」や「御膳所」では、宴会や儀式に伴う食事を作っていたために、Ⅰグループの魚が多かった可能性も考えられる。つまり、ハレとケの違いが反映している可能性も考慮に入れる必

(註2) 「黒白精味集」に記載された魚の格付けは、松下幸子が日本経済新聞2002年12月14日夕刊「江戸時代の魚の格付け・嗜好の変化で“下克上”も」という記事の中で掲載した表を参考にした。



要があるだろう。また、本論においては、17世紀に書かれた「古今料理集」を基に格付け分析を行ったが、江戸時代における魚類の価値観は、その時期によって若干変化していることが指摘されており(桜井1992)、その点も慎重に考慮していく必要がある。

なお、クラスターBに含まれた尾張藩の4つの遺構の資料は、魚種組成に共通性がみられ、また、格付け分析の結果も比較的近い値を示した。しかし、尾張藩714号遺構は、御殿「御台所」空間の遺構、その他は、御殿で働く人たちが食したものであり、少なくとも2つの異なる階層の生活空間に関するものが含まれている。よって、これら4つの遺構の資料は、少なくとも19世紀代に尾張藩御殿空間で階層に関係なく一般的に食された魚の傾向を反映している資料であるとも考えられる。仮に、この4つの遺構の事例を尾張藩だけでなく19世紀代の大名江戸上屋敷・御殿空間で一般的に食された魚類の組成であると想定した場合、東大総合110号遺構と比較すると以下の共通性がみられる。まず、タイ類・カレイ科・スズキ属は東大総合110号遺構でも尾張藩の4つの遺構でも出土している。また、東大総合110号遺構で出土しているヒラメ・カツオ類・サケ科・タラ類・コチ科・フサカサゴ科・ボラ科・アジ類・イワシ類・サバ類は尾張藩の4つの遺構中3つの遺構から出土している。一方で、東大総合110号遺構で最も多く出土したキス属と、キス属・タイ類の次に多く出土したサヨリ科は、尾張藩569号遺構からそれぞれ3.0%が出土しているのみで他の遺構からは出土していない。よって、東大総合110号遺構の魚類組成の特徴は、このキス属・サヨリ科といった小型魚が多いことにあるともいえる。キス属・サヨリ科が近世江戸遺跡で、これほど大量に出土したのは現段階において珍しい事例であり、溶姫や溶姫に仕える女中たちの食の嗜好性を反映していることも想起させる。しかし、特定の人物と直接的に結びつけて議論することは食物残渣の分析のみでは難しい。よって今後、東大総合110号遺構において、使用した個人がある程度特定できる人工遺物が含まれているか調査すると共に、日記などの文献史料からの個々人の食の嗜好性についての検証も必要である。また、東大総合110号遺構と尾張藩の資料のみをもって19世紀代の大名江戸屋敷・御殿空間における一般的な魚種組成のとすることは出来ないため、他藩の大名江戸上屋敷・御殿空間の資料の蓄積を待つて検討する必要もあるだろう。

## 謝 辞

本論文を執筆するにあたり、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生には、貴重な資料を拝見させて頂いたと同時に、多くのご指導を賜りました。早稲田大学の樋泉岳二先生には、特に資料の同定にあたって多くのご指導、ご協力をいただきました。国立歴史民俗博物館の小林園子氏には、資料同定のための現生標本を拝見させていただきました。本調査室の堀内秀樹、追川吉生両氏には、本論文を執筆する機会を与えていただいたと同時に、多くのご指導をいただきました。本調査室の阿部常樹氏には、資料の同定と多変量解析にご協力いただいただけでなく、細部にわたりご指導いただきました。また、国立歴史民俗博物館の太田敦子氏、波方早季子氏、港区教育委員会の山根洋子氏にも、ご指導とご協力をいただきました。ありがとうございました。

参考文献

- 秋元智也子 1992 「加賀藩上屋敷「御貸小屋」における食生活の一端」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会
- 吉井 始子 1981 「古今料理集」『翻刻江戸時代料理本集成』第二巻 臨川書店
- 陶 智子 2002 『加賀百万石の味文化』集英社
- 樋泉 岳二 1993 「動物遺体」『東京都中央区明石町遺跡』明石町遺跡調査会
- 樋泉 岳二 1994 「遺跡産魚骨同定の手引（Ⅰ）」『動物考古学』第2号 動物考古学研究会
- 樋泉 岳二 1995 「遺跡産魚骨同定の手引（Ⅱ）」『動物考古学』第5号 動物考古学研究会
- 桜井 準也 1992 「遺跡出土の動物遺体からみた大名屋敷の食生活」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会
- 東京都埋蔵文化財センター 2001 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅶ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2001 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅷ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2002 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅹ』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
- 東京大学遺跡調査室 1989 『東京大学本郷構内の遺跡理学部7号館地点』
- 埴原和郎 1992 『歯と人類学の話』医歯薬出版
- 原田信男 1989 『江戸の料理史』中央公論社
- 松下幸子 1983 「料理書にみる江戸時代の魚鳥野菜」『歴史公論』89号 山青社
- 松下幸子 2002 「江戸時代の魚の格付け・嗜好の変化で“下克上”も」（日本経済新聞 2002.12.14 夕刊）
- 宮腰松子 1984 「加賀藩の食事規定」『飲食史林』第5号 飲食史林刊行会

## 遺構一括出土遺体からみた江戸時代の鳥類の利用形態

—東京大学本郷構内の遺跡を中心に—

江田 真毅

### 1. はじめに

公然と獣肉を食べられなかった江戸時代には、鳥は料理の材料として重要なものであった（松下1983）。『料理物語』や『当流節用料理大全』、『古今料理集』など当時の料理書には、ニワトリのほかさまざまな野鳥の調理法や匂、味の優劣などが記されている（吉井1978～1981）。これを反映して、大名や旗本、下級武士の屋敷跡、さらには商家や町屋の跡の遺跡などからも多様かつ多数の鳥類遺体が検出されてきている。主な江戸時代の鳥類遺体の報告を集成した山根（1998）は、ガン・カモ類とニワトリ類を中心にスズメやハト類、ウズラ、シギ類、ヒヨドリなどが人々に利用されていたこと、多数の鳥種が出現する遺跡と限られた種のみが出土する遺跡があるものの、その種類や出土量と遺跡の性格の相関関係はほとんど認められず、各遺跡がそれぞれに異なった様相を示すことを指摘した。

江戸時代の遺跡出土鳥類遺体の特徴の一つとして、遺跡や遺構を単位とした場合に出土する骨格部位にしばしば大きな偏りがあることが挙げられる。例えば金子（1990a）は、東京大学本郷構内の遺跡・法学部4号館・文学部3号館地点（以下「東大法文」と略す）C7-3号土坑から検出されたガン類やカモ類では胸骨、烏口骨、鎖骨、寛骨が出土せず、上腕骨、橈骨、尺骨と大腿骨、脛足根骨、足根中足骨が主で足指骨の基節骨から中節骨までが若干残ることを指摘している。対照的に山根（1998）は駒込追分町遺跡（以下「駒込」と略す）207号土坑から出土したニワトリ類の骨では烏口骨、肩甲骨、大腿骨が多く、足根中足骨、尺骨、橈骨、手根中手骨などの出土量が少ないことを指摘している。また、筆者は東京大学本郷構内の遺跡・医学部附属病院外来診療棟地点（以下「東大外診」と略す）137号土坑のカモ類（出土破片数132点）では約93%、ガン類（同14点）ではすべての骨が前肢の骨であること、さらに同様にカモ類の前肢の骨が多かった290号土坑と比較すると上腕骨の近位端の出土量に大きな差があることを報告した（野々村<sup>ほか</sup>2005）。

これらの骨格部位の偏りは、遺体群が調理中の廃棄物に由来するか、調理後の廃棄物に由来するか、あるいは両者を混在するものかといった性格の違いや、解体の場所を考えさせる根拠となり（金子1990a）、また各骨に付随する部分の肉の利用頻度を現すことも考えられる（山根1998）。このような議論のためには、まず、より広く事例を収集し、比較検討して、パターンを認識することが必要であろう。また、より短期間に形成された遺体群ほど複数のパターンを内包している可能性が少なく、基礎的なパターンを認識するうえで有効性が高いと考えられる。

本論では、東京大学本郷構内の遺跡を中心に江戸時代の遺跡から出土した鳥類遺体の報告を集成し、単一の遺構から検出された同一分類群の骨にどのような骨格部位の偏りが認められるかを主成分分析とクラスター分析を用いて記述した。また、各パターンが形成される過程についての考察を通して、東京大学本郷構内の遺跡内の各遺構に遺棄された鳥類遺体の形成過程について検討した。

## 2. 資料

東京大学本郷構内の遺跡を中心に江戸時代の遺跡の発掘報告を集成し、ある分類群について最少個体数（以下、MNI）が4個体以上検出された遺構を抽出した。サンプルの抽出にあたっては、報告によって同定の単位に差があるカモ類やガン類、ニワトリ類はそれぞれ一つにまとめた。また、覆土中の層に分けて記載されていたものについては、まとめて遺構全体として扱った。その結果、以下の6遺跡 22 遺構に由来する計 36 サンプルが検出された。

### ①東京大学本郷構内の遺跡（東京大学埋蔵文化財調査室 1990a、1990b、2006）

本遺跡は、東京都文京区本郷7丁目3番1号に位置する。江戸時代には、主に加賀藩上屋敷が置かれていた場所である。今回取り上げる資料は、総合研究棟（文・経・社教）地点（仮称）（以下「東大総研」と略す）・110号遺構と外来診療棟地点・290号遺構のものを除いて、発掘調査時に遺物として取り上げられた資料である。

(1) 総合研究棟（文・経・社教）地点（仮称）・110号遺構・チドリ類（MNI：12）

(2) 同・クイナ類（MNI：4）

(3) 同・カモ類（MNI：4）

本地点の報告は現在作成中であり、本稿はこの地点の鳥類遺体について記述する最初のものとなるため、他の遺構から出土した資料に比べ詳細を述べる。本遺構は、加賀藩上屋敷のなかでも御殿空間に利用されていた場所に位置する。食物残渣を主体とした廃棄物を含むごみ穴で、文政10年（1827）から明治元年（1868）の間のいずれかの時期に利用されたものとされている。平面形状はほぼ正方形で、南北1.4m、東西1.6m、底部が南北1.1m、東西1.0m、深さは検出面から1.2mとなっている。覆土はほぼ水平に遺構全体に堆積した1～7層、および遺構内東側の4層と5層の間にあり調査時にセクション面に現れなかった層（以下4～5間層とする）の8つから成る。阿部（2006）は陸産貝類の出土量が少なく、上層に集中していること、さらに層間でハマグリの大さに差異が認められないことなどから、これらの層の堆積は非常に短期間であったと推定している。

資料はこの遺構を東西に半裁した東側の覆土を採取し、5mm目、3mm目、1mm目の篩を用いた水洗選別によって得られた。資料の同定は、出土したすべての鳥類遺体（計522点）を対象に、現生骨格標本との肉眼比較でおこなった。現生標本としては、川上和人氏（森林総合研究所・多摩森林科学園）所蔵の標本（KP）と筆者所有の標本（EP）を利用した。骨の部位の名称は、Baumel et al（1993）および日本獣医解剖学会（1998）に、分類群名については基本的に日本鳥類目録編集委員会（2000）に従い、日本鳥類目録編集委員会（2000）が触れていないカモ科の亜科および族分類についてはA.O.U.（1983）に従った。同定は、上腕骨や尺骨、大腿骨や脛足根骨といったいわゆる主要な四肢骨のほか、方形骨や寛骨、下顎の関節骨など、解剖学的な位置が明らかにできて、分類群間での形態の差が明瞭に認められるものを対象とした。足指骨と椎骨については、同定の対象とした部位の骨でありながら現生標本の不足などから鳥綱以下の同定ができなかった資料とともに、種不明鳥類と

した。一方、資料の破損が著しいために同定できなかった資料は同定不能鳥類とした。資料の残存状態は、資料にほとんど損傷がないものは完存 (w)、近位端や遠位端の関節が半分以上残っているものはそれぞれ近位端 (p)、遠位端 (d) とした。また、いわゆる主要四肢骨のうち、骨幹のほぼ中央にある栄養孔が残存している骨については中間部 (m) として記載し、以上の条件に合わない資料は中間部破片 (fr) とした。

分析した 522 点中 222 点で目以下の同定ができた。確認された分類群はカモ類 (Anatinae gen. et sp. indet)、ウズラ (*Coturnix japonica*)、クイナ類 (Rallidae gen. et sp. indet)、チドリ類 (Charadriiformes fam. gen. et sp. indet)、スズメ類 (Passeriformes fam. gen. et sp. indet) であった (表 1)。各分類群の遺構内東側覆土の MNI (と出土破片数) は、カモ類が 4 (11 点)、ウズラが 1 (3 点)、クイナ類が 4 (44 点)、チドリ類が 12 (95 点)、スズメ類が 1 (4 点) であった。また、種不明鳥類としたものは計 200 点に上ったが、橈骨の近位端破片 1 点を除くと、186 点は足指骨、13 点は椎骨であった。本論でサンプルとして抽出したチドリ類はカモメ科 (Laridae) とウミスズメ科 (Alcidae) 以外の同目のものである。現生標本のタシギ (KP245-1) 程度の大きさの資料が約 90% で、それよりかなり大きい資料や、かなり小さくシロチドリ (KP233-2) 程度の大きさの資料も含まれた。クイナ類はすべてバン (EP-12) とほぼ同じ大きさの資料であった。また、カモ類には現生標本のコガモ (EP-7) 程度、オナガガモ (EP-4) 程度、カルガモ (EP-84) 程度の大きさの資料が認められた。

遺構内の他の動物遺体としては、遺構内全体で水産貝類が約 900 点出土し、ハマグリが約 58%、ヤマトシジミが約 25%、アカガイが約 10% を占める (阿部 2006)。魚類は遺構内東側覆土において約 5000 点が同定され、キス類が約 27%、タイ類が約 26%、サヨリ類が約 14%、ヒラメが約 9% を占める (野々村 2006)。哺乳類についてはネズミ類が若干含まれるのみである (阿部 2006)。

#### (4) 医学部附属病院外来診療棟地点・137号遺構・カモ類 (MNI: 19)

同地点は、絵図面によると 1760 年代から 19 世紀第 1 四半期まで「御作事所」として利用されていた地域である。同遺構は約 3.0m×5.2m、深さ最大約 1.0m で、陶磁器の年代から 18 世紀前半に廃絶されたと推定される。他の鳥類遺体としては、ガン類 (MNI: 3)、シギ類 (同: 1)、カラス類 (同: 1) が出土した。遺構内の他の動物遺体としては、貝類が 10 種、MNI で 52 個体、魚類が 18 分類群、破片数にして 160 点、哺乳類としてネコがほぼ 1 個体分とイヌが 1 点出土している。貝類ではヤマトシジミが約 31%、サザエが約 17%、ハマグリが約 13%、アカガイが約 12% であった。魚類では、タイ類が約 70% を占めた。

#### (5) 同・290号遺構・カモ類 (MNI: 4)

同遺構は約 7.4m×約 5.3m、確認面からの深さ約 1.7m で、もともとは採土坑であったと推定される。遺物には 18 世紀第 2 四半期に比定される陶磁器が大量に含まれた。資料は、目視によって自然遺物の集中が認められた部分について、3mm 目の篩を用いた水洗選別によって採集されている。カモ類以外の鳥類としては、ガン類 (MNI: 1) が出土した。遺構内の他の動物遺体としては、貝類が 9 分類群、MNI で 32 個体出土し、アカガイとサザエが約 25% ずつで優先した。魚類は 15 分類群、破片数にして 72 点出土し、タイ類が約 56% を占めた。哺乳類としては、イヌが MNI で 3 個体、ネコが 2 個体出土している。

遺構一括出土遺体からみた江戸時代の鳥類の利用形態

層位	節目	種名	部位	左右	残存部	数量		
1	5	チドリ目	尺骨	左	m	1		
		同定不能鳥類	脛足根骨	左	m	1		
	3	種不明鳥類	足指骨			1		
2	1	種不明鳥類	足指骨			3		
	ウズラ	クイナ類	脛足根骨	左	d	1		
			足根中足骨	右	d	1		
			肩甲骨	左		1		
			上腕骨	右	d	2		
			尺骨	右	w	1		
				p-m	2			
				p	1			
			手根中手骨	右	p-m	1		
				d	1			
			大指基節骨	左		1		
			大腿骨	右	d	1		
			脛足根骨	右	d	1		
	チドリ目	種不明鳥類	尺骨	右	p	1		
				d	1			
			手根中手骨	左	m-d	1		
				d	1			
			足根中足骨	左	p	1		
		d	1					
	同定不能鳥類	種不明鳥類	足指骨			4		
			椎骨			3		
			大腿骨	左	m	1		
			足根中足骨		mfr	1		
			四肢骨		mfr	8		
			ウズラ	クイナ類	足根中足骨	左	p	1
					手根中手骨	右	d	2
					腕骨	右	p	1
						d	1	
					小翼節骨	右		1
	足根中足骨	左			d	1		
	チドリ目	種不明鳥類			尺骨	右	d	3
						左	d	1
					上腕骨	左	d	1
					大指末節骨	右		1
					腕骨	左	d	1
	スズメ類	同定不能鳥類			脛足根骨	右	d	1
				左	d	2		
			上腕骨	左	p	1		
				d	1			
	ウズラ	クイナ類	尺骨	左	p-m	1		
			腕骨	右	p	1		
			椎骨			4		
			足指骨			16		
			上腕骨	右	pfr	1		
			脛足根骨	右	mfr	1		
			足根中足骨	右	dfr	1		
			四肢骨			28		
カモ類			種不明鳥類	小指節骨	右		1	
				足指骨			10	
	椎骨			mfr	2			
ウズラ	同定不能鳥類	四肢骨		mfr	70			
		小翼節骨	右	mfr	1			
			d	1				
		上腕骨	左	m-d	1			
		尺骨	左	d	1			
		腕骨	左	p-m	1			
		手根中手骨	右	p-m	1			
			左	p-m	1			
		脛足根骨	右	d	1			
			左	d	2			
ウズラ	同定不能鳥類	足根中足骨	右	w	1			
			左	w	2			
		椎骨			1			
		足指骨			2			
		四肢骨		mfr	1			
		ウズラ	同定不能鳥類	上腕骨	左	m	1	
				尺骨	左	p	1	
					m	1		
				腕骨	右	d	1	
				手根中手骨	左	d	1	
手根中手骨	右			p	1			
チドリ目	大指基節骨			右		1		
種不明鳥類	足指骨				10			
同定不能鳥類	四肢骨				mfr	4		
スズメ類	種不明鳥類			脛足根骨	右	mfr	1	
			左	mfr	1			
ウズラ	種不明鳥類	尺骨	右	d	1			
		足指骨			4			

層位	節目	種名	部位	左右	残存部	数量			
4	5	クイナ類	大指基節骨	右		1			
			足指骨			4			
			手根中手骨	右	mfr	1			
			足指骨			20			
			椎骨			2			
				fr	1				
			手根中手骨	右	mfr	1			
			足根中足骨	右	dfr	1			
			四肢骨		mfr	1			
			種不明鳥類	足指骨		6			
4~5	3	チドリ目	足指骨			1			
			脛足根骨	右	d	1			
			足根中足骨	右	w	1			
			四肢骨			2			
			同定不能鳥類	四肢骨		mfr	2		
			5	カモ類	種不明鳥類	上腕骨	右	m-d	1
						尺骨	右	d	1
							w	2	
							d	2	
						手根中手骨	左	d	1
大指基節骨	右					1			
尾端骨						1			
5	クイナ類	種不明鳥類				足根中足骨	左	p	1
							m-d	1	
						肩甲骨	右		1
			上腕骨	右	d	1			
			尺骨	右	p-m	1			
				w	3				
				m-d	2				
			手根中手骨	左	w	1			
				p	1				
				m-d	1				
	d	1							
5	チドリ目	種不明鳥類	大指基節骨	右		1			
				左		1			
			脛足根骨	右	d	3			
				左	d	4			
			足根中足骨		w	1			
					p	1			
					m-d	1			
					w	2			
					p	1			
				m	1				
	m-d	1							
5	カモ類	同定不能鳥類	足指骨			3			
			手根中手骨	左	mfr	1			
			四肢骨		mfr	2			
			卵殻			1			
			5	クイナ類	種不明鳥類	大指基節骨	右		1
						小翼節骨	右		1
						尺骨	左	d	4
						腕骨	右	d	1
							左	d	1
						手根中手骨	右	p	3
	d	5							
	m-d	1							
	d	3							
5	チドリ目	種不明鳥類				大指基節骨	右		7
			大指末節骨	左		8			
			足根中足骨		p	1			
					p-m	2			
					d	2			
					p	3			
					m-d	2			
				d	4				
			脛足根骨	右	d	6			
				左	d	6			
5	チドリ目	同定不能鳥類	足指骨			18			
			手根中手骨	右	pfr	1			
			四肢骨		m	2			
			腕骨	左	p	1			
			小翼節骨	右	d	1			
			大指末節骨	左		3			
			足指骨			78			
			同定不能鳥類	四肢骨		mfr	2		
			6	5	種不明鳥類	足指骨			1
						頭骨		mfr	1
6	1	種不明鳥類	足指骨			3			
			総計			522			

表1 東京大学本郷構内の遺跡総合研究等(文・経・社経)地点(仮称)出土の鳥類遺体

(6) 御殿下記念館地点・309号遺構・カモ類 (MNI: 8)

(7) 同・ヒヨドリ (MNI: 7)

(8) 同・スズメ (MNI: 4)

御殿下記念館地点(以下「東大御殿下」と略す)は、元禄期の絵図によると、「頭分」「役所」「外局」等と記載された区画割に位置し、何らかの公的な建物が存在したと考えられる。309号遺構は、南北約10m、深さ約1mの細長い大型土坑で17世紀第2四半期に比定される。他の鳥類としてはカイツブリ(MNI: 1)、ガン類(同: 1)、キジ(同: 2)、ヤマシギ(同: 3)が検出されている。貝類は14種468個体が検出され、ハマグリが約77%、ヤマトシジミが約13%を占めた。魚類は28分類群66個体が検出され、スズキとマダイが8個体(約12%)、キスとマアジが5個体(約8%)で多かった。哺乳類は検出されていない。

(9) 同・532号遺構・カモ類 (MNI: 5)

同遺構は、南北約20m以上、東西約8m、深さ5m以上の土坑で、17世紀第2四半期に比定される。他の鳥類としては、ガン類がMNIで2個体、サギ類、キジ、ヤマシギ、ヒヨドリが各1個体検出されている。貝類は7分類群が検出され、サルボウガイ、アカガイ(各5個体)、アワビ類、サザエ(各3個体)が多かった。魚類はイワシ類や、カマス、カツオ、ヒラメなど8分類群がごく少量ずつ検出された。哺乳類は検出されていない。

(10) 同・802号遺構・カモ類 (MNI: 6)

同遺構は、東西約12m、深さ約2mの大型方形土坑で17世紀第3四半期に比定される。調査区の境界にあたるため、南側約半分は未掘である。他の鳥類としては、サギ類(同: 2)とガン類(同: 1)が検出されている。貝類は9種187個体が検出され、ヤマトシジミが約70%、サザエが約12%、ハマグリが約11%であった。魚類は16分類群21個体が検出され、マアジが約24%で多く、他はMNIにして1あるいは2個体であった。哺乳類は検出されていない。

(11) 同・845号遺構・ヤマシギ (MNI: 6)

同遺構は、幅約4.2m、深さ約2.7mの溝状遺構で、17世紀中頃に比定される。他の鳥類としては、カモ類、コガモ、ヒヨドリが各1個体検出されている。貝類はサルボウガイがMNIで19個体、アカガイが3個体、ヤマトシジミとハマグリが各2個体出土した。魚類はコイ科、マダイ、チダイが各1個体であった。哺乳類は検出されていない。

(12) 法学部4号館・文学部3号館地点・C7-3号土坑・ウズラ類 (MNI: 10)

(13) 同・モズ (MNI: 7)

(14) 同・タシギ (MNI: 4)

(15) 同・カモ類 (MNI : 4)

本地点は、江戸時代には加賀藩江戸屋敷内の長屋地域に位置し、同土坑は芥溜として再利用されたと推定される。入り口部は不整楕円形（南北約 1.6m、東西約 0.8m）、坑底は隅丸方形、確認面からの深さ約 2.2m の地下式坑で、17 世紀後半～18 世紀前半に比定される。他の鳥類としては、ガン類(MNI: 1) とキジ (同 : 1) が検出されている。貝類は 9 種 137 個体が検出され、ハマグリが約 41%、アカガイが約 26%、サザエが約 22% であった。魚類は 23 分類群 50 個体が検出され、マダイが約 24% で多く、マダラとハタ類が約 12% であった。哺乳類は検出されていない。

②尾張藩上屋敷跡遺跡 (東京都埋蔵文化財センター 2001a、2001b、2001c、2002)

尾張藩上屋敷跡遺跡(以下「尾張藩」と略す)は、東京都新宿区市ヶ谷本村町 5 丁目 1 番地に位置する。江戸時代には、初期には板倉周防守下屋敷、後期には主に尾張藩上屋敷であった。資料には、発掘調査時に遺物として取り上げられたものと、土層観察面から任意にブロックサンプリングし、1mm 目の篩を用いて水洗選別によって採集されたものが含まれるが、鳥類遺体はほとんどが発掘調査時に取り上げられたものである<sup>(註1)</sup>。また、鳥類遺体の同定は主要部位を対象としており、小指翼骨や大指基節骨、大指末節骨、小指節骨などの上肢の指骨は同定対象とされていない<sup>(註1)</sup>。

(16) 第 13 地点・154-3M-1 号遺構・ニワトリ類 (MNI : 20)

同土坑は建物の間の空き地を利用して設けられた地下式土坑と推定され、19 世紀前半から後半に比定される。本地点は、当時、政務の中心的役割を果たす右筆部屋とそれに関連する部屋があったと推定される。土坑の規模は攪乱のため不明で、深さは確認面から約 3.2m であった。鳥類としては、ニワトリ類のほか、モズ類 (MNI : 1) が検出された。その他の動物遺体として、貝類は 10 種、個体数にして 7,000 個体あまりが出土し、約 98% はハマグリであった。魚類としてはマダイやヒラメなど 9 分類群が MNI にして各 1 個体、哺乳類としてはイヌとイノシシ、イノシシ類が各 1 個体検出された。

(17) 同・156-3M-1 号遺構・ニワトリ類 (MNI : 11)

154-3M-1 号土坑と同様第 13 地点に所在し、時期もほぼ同様に 19 世紀前半から中頃に比定される。建物の間の空き地を利用して設けられた地下式土坑と推定される。規模は約 5.2×2.0m、確認面からの深さは約 3.0m であった。検出された鳥類はすべてニワトリ類であった。その他の動物遺体として、貝類は 5 種、個体数にして約 3,000 個体が出土し、約 99% はハマグリであった。魚類としては MNI にしてマダイが 2 個体のほか 7 分類群が各 1 個体、哺乳類としてはイノシシ、イノシシ類、ウシが MNI にして各 1 個体検出された。

(18) 第 23B 地点・24-5S-1 号遺構・カモ類 (MNI : 4)

同遺構は不整形な平面形を呈する大型の土坑である。攪乱により寸断され規模は不明、確認面からの深さは約 2.0m である。絵図との照合と出土遺物の年代から第一次西御殿に帰属し、年代は 19 世

---

(註 1 山根洋子氏のご教示による



紀第2四半期と推定される。鳥類遺体としては、カモ類のほか、ガン類 (MNI:1)、カラス類 (同:1) が検出されている。貝類はサザエ、ヤマトシジミ、ハマグリ、アサリが多数出土したほか、キセルガイも94点検出されている。また、魚類ではマダイがMNIにして7個体、スズキが3個体、他に11分類群が各1個体、爬虫類ではスッポンの肩甲骨が1点、哺乳類ではネズミ類の推骨が9点検出されている。

(19) 第29地点・29-1号石組溝・ニワトリ類 (MNI:12)

本地点は、絵図中に示された「御台所」とされる。29-1号石組溝は幅約0.4m、深さ約0.4mで、25m以上の規模が確認されている。出土遺物は、19世紀前半から中頃に帰属する。検出された鳥類はすべてニワトリ類であった。他の動物遺体としては、貝類は4分類群、MNIにして19個体検出され、約79%はハマグリであった。魚類はマグロ類、マダイ、タイ類、カツオが各1個体検出された。哺乳類としてはイノシシ類とイヌが各1個体検出された。

(20) 第32地点・166-5C-1号遺構・ニワトリ類 (MNI:4)

本地点は、絵図中では東御殿奥向のほぼ北東端で、奥向用の「御台所」の南側に位置する。166-5C-1号遺構は石組遺構で、出土遺物から19世紀前半から中頃に比定される。規模は約2.8m×1.6m、深さは0.2mである。他の鳥類の分類群は検出されていない。他の動物遺体としては、貝類は5種、MNIにして40個体が出土し、80%をハマグリが占めた。魚類はマイワシやマアジ、マダイなど7分類群が各1個体検出された。また、哺乳類としてイノシシが1個体検出された。

(21) 第41地点・140-4R-2号遺構・ニワトリ類 (MNI:4)

本地点は尾張藩上屋敷の東御殿奥向の西端に位置している。同遺構は長方形(約1.2m×約0.9m、深さ約0.6m)の土坑で、出土遺物から19世紀前半から中頃に比定される。ニワトリ類以外の鳥類は検出されていない。他の動物遺体として、貝類は陸産のマイマイ類を含む5分類群、128個体が出土され、約97%はハマグリであった。魚類はカツオが1個体のみ検出された。

③駒込追分町遺跡(地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会1996、山根1998)

本遺跡は、東京都文京区弥生1丁目1番地と同向ヶ丘1・2丁目に位置する。同遺跡周辺は、江戸時代には御小人など下級武士の組屋敷、あるいは商家の敷地であったとされる。

(22) 207号遺構・ニワトリ類 (MNI:251)

(23) 同・ガン類 (MNI:26)

207号遺構は遺跡の南東部に位置し、商家の敷地内にあったと推定される。同遺構は約2.6m×約2.1m、深さ約1.7mの方形の地下室で、共伴遺物から18世紀後半から19世紀初頭に帰属すると推定されている。調査所見によれば、骨は覆土の上層で出土し、確認面では出土していない(山根1998)。遺物の集中区についてはブロックサンプルを水洗選別して資料を採集している。本論の執筆にあたって、本遺跡出土資料を実見し、未報告であった橈骨の近位部、鳥口骨、尺骨、手根中手骨の遠位部、および大指基節骨を同定した。ニワトリとガン類以外の鳥類としては、カモ類 (MNI:3)

とトビ(同:1)が出土している。他の動物遺体としては、魚類ではウナギが、哺乳類ではシカとアナグマがMNIで各1個体検出されている。出土したシカの骨や角のほとんどに鋸で切断された痕跡が認められた。

#### ④動坂遺跡(動坂貝塚調査会 1978)

本遺跡は、東京都文京区本駒込3丁目136番に所在する。同地域には江戸時代中期から幕末まで御鷹匠同心組屋敷が置かれていたことが知られている。資料の採集については、縄文時代の貝塚についてはブロックサンプリングし、水洗選別した旨が記述されているものの、江戸時代の各遺構の調査方法についての詳しい記載はなく、現場での目視確認によって採集されたものと考えられる。

##### (24) 第23号土坑・スズメ類(MNI:27)

##### (25) 同・ハト類(MNI:11)

第23号土坑は約1.4m×約1.1m、深さ約0.8mの長方形の土坑で、遺構の上層から江戸時代の陶磁器がまとめて検出されている。スズメ類とハト類以外の鳥類としては、サギ類(MNI:3)、ニワトリ(同:1)、カラス類(同:1)、ヒヨドリ程度のスズメ類(同:1)が認められた。また、貝類は8分類群からMNIにして計614個体が検出されており、そのうち約94%はハマグリが占める。魚類としてはイワシ、カタクチイワシ、マグロあるいはカジキ類、アジが破片数にしてごくわずかずつ認められた。哺乳類は確認されていない。

##### (26) 第36号土坑・ハト類(MNI:10)

第36号土坑は長さ約1.5m巾は不明、深さ約0.4mの方形の土坑である。他の鳥類としては、キジ類の骨が1点出土している。貝類はハマグリがMNIにして9個体、サザエとアワビが各1個体検出された。魚類と哺乳類は確認されていない。

##### (27) 第45号土坑・スズメ類(MNI:6)

第45号土坑は不整形の土坑である。スズメ類以外の鳥類としては、サギ類(MNI:1)、ハト類(同:2)、ヒヨドリ程度のスズメ類(同:2)が認められた。貝類は5分類群からMNIにして計41個体が検出されており、バイガイが約56%、ハマグリが約22%、アサリが約20%を占める。魚類としてはマアジが1片のみ確認され、哺乳類は確認されていない。

#### ⑤三栄町遺跡(新宿区教育委員会 1988、1991)

本遺跡は、東京都新宿区三栄町18~25・27に所在する。同地域は、17~19世紀にかけて、下級武士の宅地である大縄地にあてられたとされる。資料は、現場での目視確認によって採集されたものである。

##### (28) A区・第21号遺構・カモ類(MNI:14)

## (29) 同・カラス (MNI: 6)

## (30) 同・ガン類 (MNI: 5)

同区は「御持組」の拝領地で、第21号遺構は深さ約4.7mの芥溜として利用された土坑である。底面の一部のみが確認されており、平面的な広がり是不明である。共伴遺物から18世紀に帰属すると推定されている。上記以外の鳥類としては、シャモ型とチャボ型を含むニワトリ (MNI: 3)、コウノトリ (同: 2)、トビ (同: 2)、ワシ類 (同: 1)、ワシタカ (同: 1)、タシギ (同: 1) が確認されている。他の動物遺体としては、魚類では28分類群が出土した。マダイが大部分を占めカツオ、タラ、メバルなどがこれに続き、他はごくわずかずつ出土した。哺乳類ではシカとネコがMNIにして3個体、他にイヌ、イノシシ、ネズミが検出されている。貝類は数千点単位で出土しているため総点数は記載されていないが、遺構全体としてヤマトシジミ、ハマグリが主体でアサリがこれに続いた。また、スッポンがMNIにして2個体検出されている。

## ⑥ 汐留遺跡 (東京都埋蔵文化財センター 1997、2003)

本遺跡は、東京都港区東新橋1丁目に所在する。調査対象区域は、江戸時代において主に仙台藩、会津藩、龍野藩の江戸屋敷として利用されていたことが知られている。資料は、現場での目視確認によって採集されたものである。なお、落ち込みとは、人為的な掘り込みとは判断しがたい窪み (東京都埋蔵文化財センター 1997) であるが、ここでは一定の空間的な広がりを持つものとして、遺構と同様に扱った。

## (31) 4F-140号遺構・ガン類 (MNI: 4)

## (32) 同・キジ類 (MNI: 4)

本遺構は会津藩屋敷内に位置する大規模な埋土層である。伴出遺物から下限年代は1677年と推定される。コウノトリ (MNI: 1)、サギ類 (同: 1)、ハクチョウ (同: 2)、カモ類 (同: 2) が検出されている。他の動物遺体としては、魚類では8分類群13点が出土し、マダイが4点で最も多かった。哺乳類では8分類群30点が出土し、イヌが14点で最も多く、ネコ、シカ、ウマがこれに続いた。貝類はアカニシ、アカガイ、ハマグリがわずかずつ検出されている。また、スッポンがMNIにして3個体確認されている。

## (33) 6K- 落ち込み9・ニワトリ類 (MNI: 5)

6K- 落ち込み9は龍野藩の上屋敷造成に伴う整地層上に位置し、17世紀中頃に利用されたものと推定される。他の鳥類としては、ガン類 (MNI: 3)、カモ類 (同: 2)、キジ類 (同: 1)、サギ類 (同: 1)、タカ類 (同: 1) が検出されている。他の動物遺体としては、魚類ではヒラメとスズキが2点とマダイが1点、哺乳類ではネコの全身がほぼ1個体分と、シカが3点、ウマとノウサギが各1点出土している。貝類は検出されていない。

## (34) 7J- 落ち込み1・カモ類 (MNI: 9)

## (35) 同・ガン類 (MNI : 6)

## (36) 同・ニワトリ類 (MNI : 6)

7J- 落ち込み 1 は、龍野藩下屋敷の東側敷地外に位置する南北に細長い溝状の落ち込みで、17世紀中頃に利用されたものと推定される。上記以外の鳥類としては、ハクチョウ類 (MNI : 2)、コウノトリ類 (同 : 1)、サギ類 (同 : 2)、タカ類 (同 : 1)、ツル類 (同 : 1) が検出されている。他の動物遺体としては、貝類は 12 種 62 点が出土し、サルボウやアカニシが主体であった。魚類ではマダイとマグロが 4 点とスズキが 2 点、哺乳類ではイヌの全身がほぼ 3 個体分と、MNI にしてネコが 3、ウマが 5、シカが 3、ヒツジまたはヤギ、イノシシ類、キツネ、カワウソ、イルカが 1 個体出土している。また、カニの破片やクサガメの背甲骨や腹甲骨もみられた。

## 3. 方法

各サンプルの記載をもとに、以下の Brain (1969) の式に従って、各部位の残存率 (%survival) を求めた。

$$\%survival \text{ (残存率)} = \{MNE \text{ (各部位の最小数)} \times 100\} / \{MNI \times \text{number of times occurred in one skeleton (一つの骨格に出現する回数)}\}$$

頭骨の MNE としては後頭骨、歯骨、上顎骨など頭部を構成する骨のうちで、寛骨の MNE としては左右の寛骨臼や連合仙椎など寛骨を構成する骨のうちで、それぞれもっとも MNE が大きくなるものの値を用いた。また、胸骨と寛骨について破片数のみが示されていた尾張藩上屋敷跡遺跡の報告については、他のサンプルとの比較のため、胸骨の値は鎖骨が検出されている場合には鎖骨の点数を胸骨の MNE とした。鎖骨が検出されていない場合の胸骨の MNE と寛骨の MNE は、最少の点数として 1 とした。椎骨や下肢の指骨は筆者も含めて同定対象としない研究者も多いため、検討の対象としなかった。

サンプル間の類似性をより客観的に記述するために、得られた残存率を逆正弦変換したものをデータとして、相関行列に基づく主成分分析をおこなった。主成分分析の際には、尾張藩上屋敷跡で実数を反映していない可能性がある寛骨と、他の遺跡でも同定の対象となっていない可能性がある小指翼骨、大指基節骨、大指末節骨、小指節骨はデータから除いた。主成分の抽出は固有値が 1.00 を超えるものについておこなった。さらに、得られた各サンプルの主成分得点をデータとしてサンプル間のユークリッド距離による非類似度行列を求め、これをもとに平均距離法によりクラスターを作成した。

## 4. 結果

骨格中の各部位の残存率はすべてのサンプルで一定ではなく、いくつかのパターンが認められた (図 1)。たとえば、駒込 207 号のニワトリ類やガン類では鳥口骨と肩甲骨の残存率ももっとも高かったのに対して、三栄町 21 号や東大外診 137 号、東大法文 C7-3 号出土のカモ類ではそれぞれ MNI が 10 を超えるにもかかわらず、鳥口骨と肩甲骨は検出されていなかった。また、動坂 23 号や同 45 号出土のスズメ類のように頭骨の残存率が 100% であるものや、同 36 号出土のハト類のように胸骨の残存率が 100% であるサンプルがある一方で、多くのサンプルでは頭骨や胸骨の残存率は 0% であった。

各サンプルの残存率に基づく主成分分析の結果、5 つの主成分が抽出され、すべてを合わせると分散の約 78.1% が説明可能であった (表 2)。第 1 主成分に対して高い正の因子負荷量をもつ骨格部位

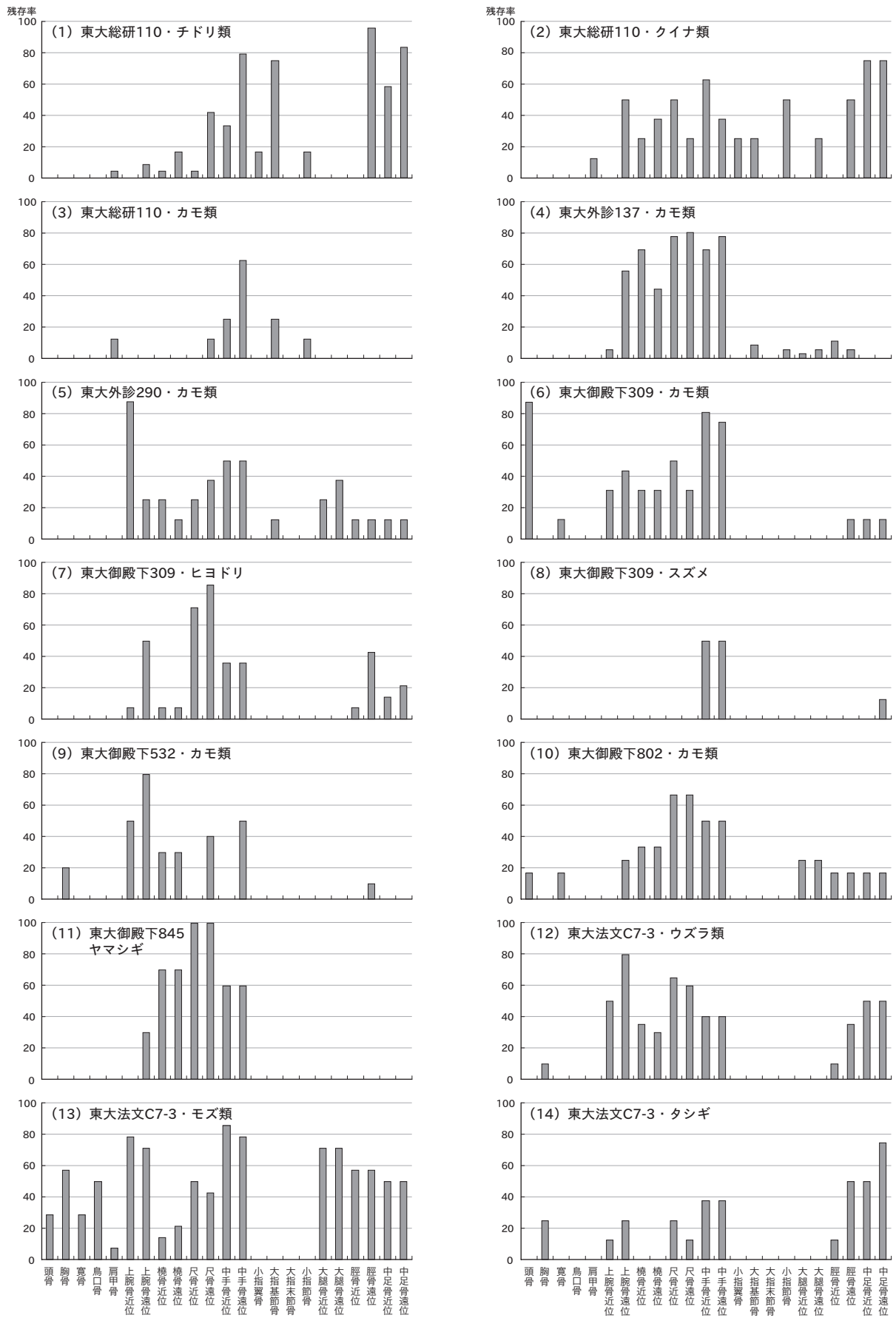


図 1-1 各サンプルの残存率 (%survival; Brain1969)。各サンプルの詳細は本文参照。\*中手骨:手根中手骨、脛骨:脛足根骨、中足骨:足根中足骨

遺構一括出土遺体からみた江戸時代の鳥類の利用形態

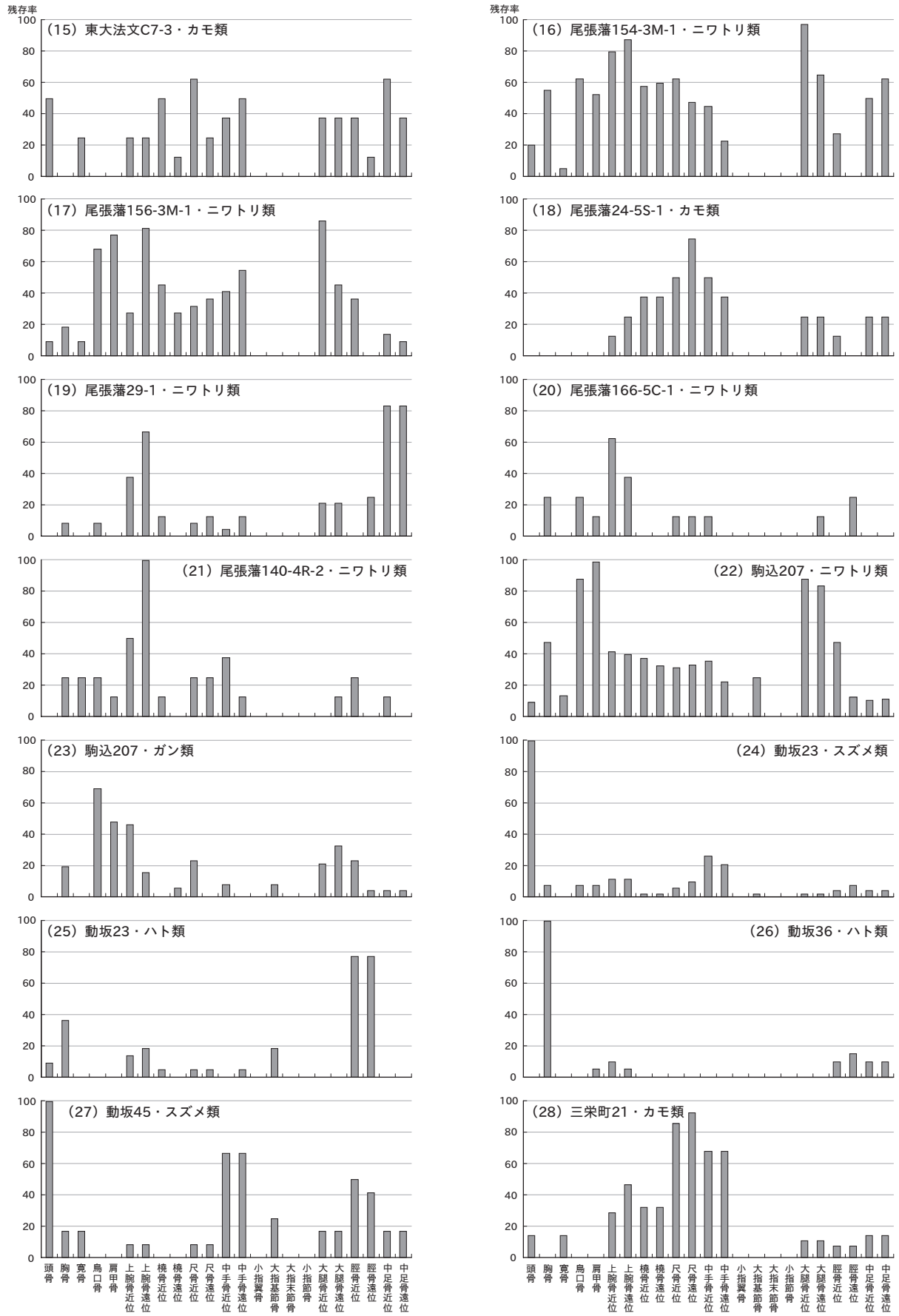


図 1-2 各サンプルの残存率 (%survival; Brain1969)。各サンプルの詳細は本文参照。\*中手骨:手根中手骨、脛骨:脛足根骨、中足骨:足根中足骨

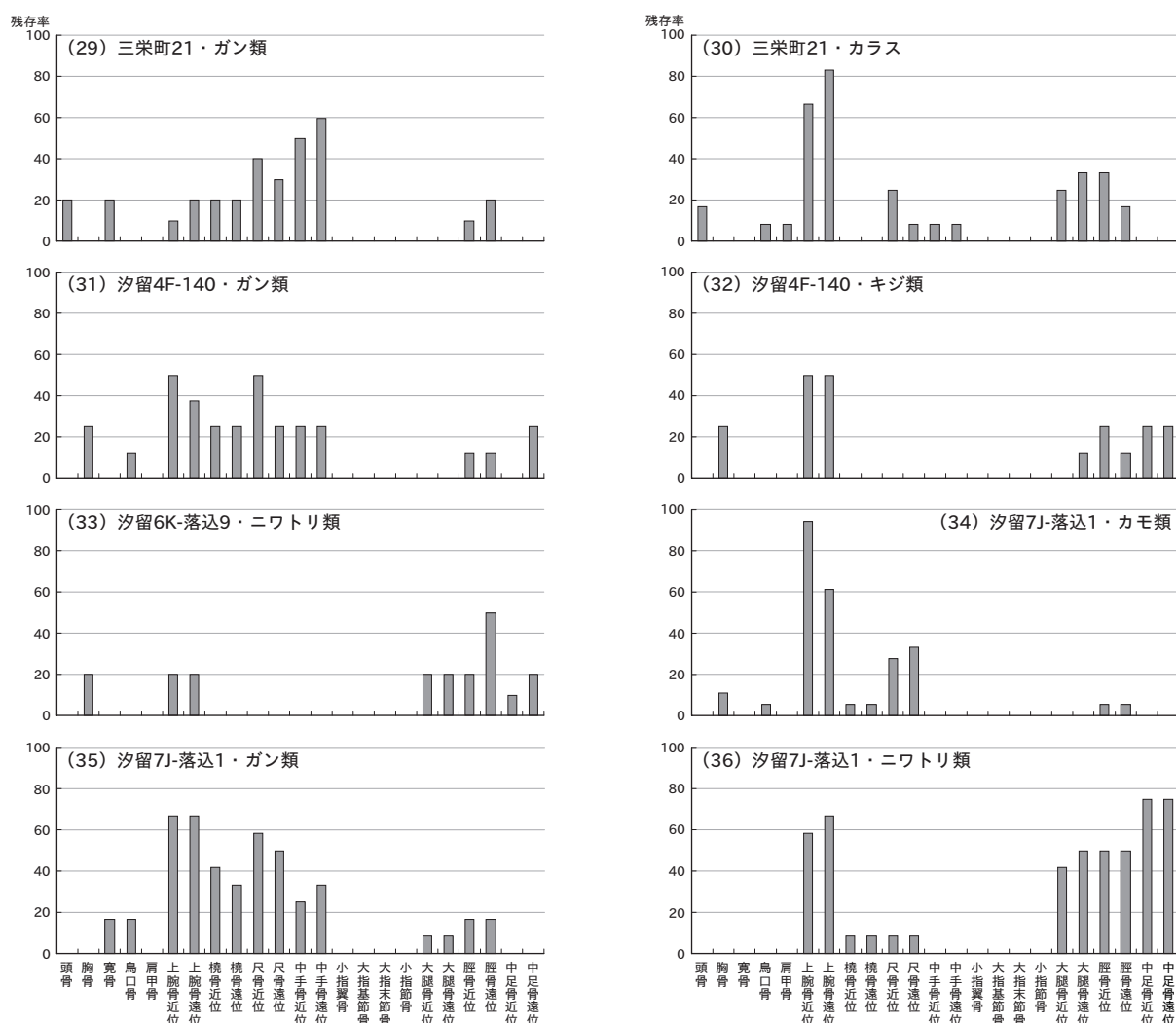


図 1-3 各サンプルの残存率 (%survival; Brain1969)。各サンプルの詳細は本文参照。\*中手骨：手根中手骨、脛骨：脛足根骨、中足骨：足根中足骨

は橈骨と尺骨の近位端と遠位端、手根中手骨の近位端、負の因子負荷量を持つ部位は脛足根骨の遠位端であった。第2主成分に対して高い正の因子負荷量をもつ部位は烏口骨、肩甲骨、大腿骨の近位端と遠位端、負の因子負荷量を持つ部位は頭骨と、橈骨、尺骨、手根中手骨の近位端と遠位端であった。第3主成分に対して高い正の因子負荷量をもつ部位は脛足根骨の遠位端と足根中足骨の近位端と遠位端、負の因子負荷量を持つ部位は胸骨、烏口骨、肩甲骨などであった。第4主成分に対して高い正の因子負荷量をもつ部位は頭骨と手根中手骨の近位端と遠位端、比較的高い負の因子負荷量を持つ部位は上腕骨の近位端と遠位端であった。第5主成分に対して比較

骨格部位	第1主成分	第2主成分	第3主成分	第4主成分	第5主成分
頭骨	-0.05	-0.10	0.03	0.68	0.49
胸骨	-0.15	0.47	-0.12	0.09	-0.37
烏口骨	0.39	0.79	-0.19	0.17	-0.14
肩甲骨	0.37	0.72	-0.19	0.24	-0.30
上腕骨近位端	0.06	0.51	-0.17	-0.47	0.51
上腕骨遠位端	0.33	0.35	-0.02	-0.56	0.44
橈骨近位端	0.88	-0.13	-0.07	-0.14	-0.07
橈骨遠位端	0.88	-0.15	0.01	-0.13	-0.17
尺骨近位端	0.82	-0.38	-0.02	-0.14	-0.02
尺骨遠位端	0.77	-0.47	-0.03	-0.16	-0.09
中手骨近位端	0.65	-0.35	0.23	0.41	0.21
中手骨遠位端	0.51	-0.51	0.27	0.41	0.10
大腿骨近位端	0.53	0.77	0.11	0.16	0.01
大腿骨遠位端	0.43	0.80	0.18	0.14	0.07
脛骨近位端	0.00	0.59	0.14	0.32	0.23
脛骨遠位端	-0.30	0.00	0.73	0.12	-0.09
中足骨近位端	0.05	0.20	0.88	-0.24	0.00
中足骨遠位端	-0.01	0.15	0.92	-0.23	-0.12
固有値	4.49	4.19	2.48	1.79	1.12
寄与率 (%)	25.0	23.3	13.7	9.9	6.2

※中手骨：手根中手骨、脛骨：脛足根骨、中足骨：足根中足骨

表2 各骨格部位の各主成分に対する因子負荷量と各主成分の固有値および寄与率(%)

サンプル名	第1主成分	第2主成分	第3主成分	第4主成分	第5主成分	クラスター
(22) 駒込 207・ニワトリ	1.43	2.85	-0.78	1.52	-1.68	A
(17) 尾張藩 156-3M-1・ニワトリ類	1.36	1.61	-0.64	0.73	-0.36	A
(16) 尾張藩 154-3M-1・ニワトリ類	2.05	2.10	0.48	-0.74	-0.02	A
(11) 東大御殿下 845・ヤマシギ	2.30	-1.88	-0.74	-0.55	-1.26	B
(26) 動坂 36・ハト類	-1.50	0.40	-0.87	0.19	-2.57	C
(1) 東大総研 110・チドリ類	-0.64	-0.75	2.72	0.34	-1.38	D-1
(14) 東大法文 C7-3・タシギ	-0.88	-0.27	1.43	-0.12	-0.80	D-1
(2) 東大総研 110・クイナ類	0.29	-0.41	1.96	-0.52	-0.79	D-1
(19) 尾張藩 29-1・ニワトリ類	-0.72	0.46	1.65	-1.53	-0.18	D-2
(36) 汐留 7J-落込 1・ニワトリ類	-0.65	1.17	1.81	-1.12	0.78	D-2
(23) 駒込 207・ガン類	-0.49	1.19	-1.15	0.34	-0.91	E-1
(20) 尾張藩 166-5C-1・ニワトリ類	-0.95	0.30	-0.96	-0.54	-0.15	E-2
(32) 汐留 4F-140・キジ類	-1.19	0.37	-0.32	-0.77	0.18	E-2
(33) 汐留 6K-落込 9・ニワトリ	-1.26	0.26	-0.03	-0.02	-0.68	E-2
(25) 動坂 23・ハト類	-1.43	0.40	0.08	0.85	-0.31	E-2
(3) 東大総研 110・カモ類	-0.84	-0.69	-0.72	0.74	-0.76	E-3
(8) 東大御殿下 309・スズメ	-0.86	-0.72	-0.50	0.76	-0.52	E-3
(29) 三栄町 21・ガン類	-0.09	-0.91	-0.42	0.67	-0.13	E-3
(31) 汐留 4F-140・ガン類	-0.16	-0.27	-0.61	-0.60	-0.29	F
(9) 東大御殿下 532・カモ類	-0.19	-0.33	-0.92	-1.09	0.23	F
(35) 汐留 7J-落込 1・ガン類	0.47	-0.25	-0.84	-1.00	0.61	F
(5) 東大外診 290・カモ類	0.10	0.02	-0.31	-0.32	1.14	F
(30) 三栄町 21・カラス類	-0.62	0.69	-0.77	-0.65	1.58	F
(21) 尾張藩 140-4R-2・ニワトリ類	-0.24	0.49	-0.89	-1.15	1.40	F
(34) 汐留 7J-落込 1・カモ類	-0.73	0.15	-1.26	-1.64	1.16	F
(12) 東大法文 C7-3・ウズラ類	0.45	-0.48	0.74	-1.40	0.34	G-1
(15) 東大法文 C7-3・カモ類	0.44	0.00	0.87	0.45	0.62	G-2
(18) 尾張藩 24-5S-1・カモ類	0.72	-0.61	-0.05	-0.18	-0.58	G-2
(10) 東大御殿下 802・カモ類	0.69	-0.72	0.01	0.35	-0.44	G-2
(7) 東大御殿下 309・ヒヨドリ	0.32	-1.15	0.32	0.11	-0.11	G-2
(28) 三栄町 21・カモ類	1.20	-1.18	-0.17	-0.09	0.20	G-2
(4) 東大外診 137・カモ類	1.57	-1.37	-0.49	0.00	-0.20	G-2
(13) 東大法文 C7-3・モズ	1.11	1.38	1.57	1.01	1.54	H
(6) 東大御殿下 309・カモ類	0.54	-1.13	-0.06	1.27	1.49	I
(24) 動坂 23・スズメ類	-0.98	-0.43	-0.70	1.73	1.03	I
(27) 動坂 45・スズメ類	-0.61	-0.29	0.56	2.99	1.82	I

表3 各サンプルの主成分得点とクラスター分類。サンプル名の略称は本文を、クラスター間の関係は図2を参照。

的高い正の因子負荷量をもつ部位は頭骨と上腕骨の近位端と遠位端、負の因子負荷量を持つ部位は胸骨と肩甲骨、橈骨遠位端などであった。各主成分に対する骨格部位の因子負荷量は橈骨、尺骨、手根中手骨、大腿骨、足根中足骨では近位端と遠位端でほとんどの場合符号が同一で、その絶対値もほとんど同じであった。また、鳥口骨と肩甲骨ではすべての主成分に対する因子負荷量の符号が同一で絶対値もほとんど同じであった。一方で、脛足根骨では近位端と遠位端で因子負荷量の符号と絶対値が異なる傾向があった。

各サンプルの主成分得点をみると、第1主成分では、尾張藩 154-3M-1 号のニワトリ類、東大御殿下 845 号のヤマシギ、東大外診 137 号のカモ類、駒込 207 号のニワトリ類で高い正の値が、動坂 36 号と同 23 号のハト類、汐留 4F-140 号のキジ類、同 6K-落込 9 のニワトリ類で高い負の値が認められた(表3)。第2主成分では、尾張藩 154-3M-1 号と同 156-3M-1 号のニワトリ類、駒込 207 号のニワトリ類で高い正の値が、東大御殿下 845 号のヤマシギと東大外診 137 号のカモ類で高い負の値が認められた。第3主成分では、東大総研 110 号のチドリ類とクイナ類、尾張藩 29-1 号と汐留 7J-落込 1 のニワトリ類、東大法文 C7-3 号のタシギとモズ類で高い正の値が、汐留 7J-落込 1 のカモ類と駒込 207 号のガン類で高い負の値が認められた。第4主成分では、動坂 23 号と同 45 号のスズメ類、駒込 207 号のニワトリ類で高い正の値が、汐留 7J-落込 1 のカモ類と東大法文 C7-3 号のウズラ類で高い負の値が認められた。第5主成分では、動坂 45 号のスズメ類、三栄



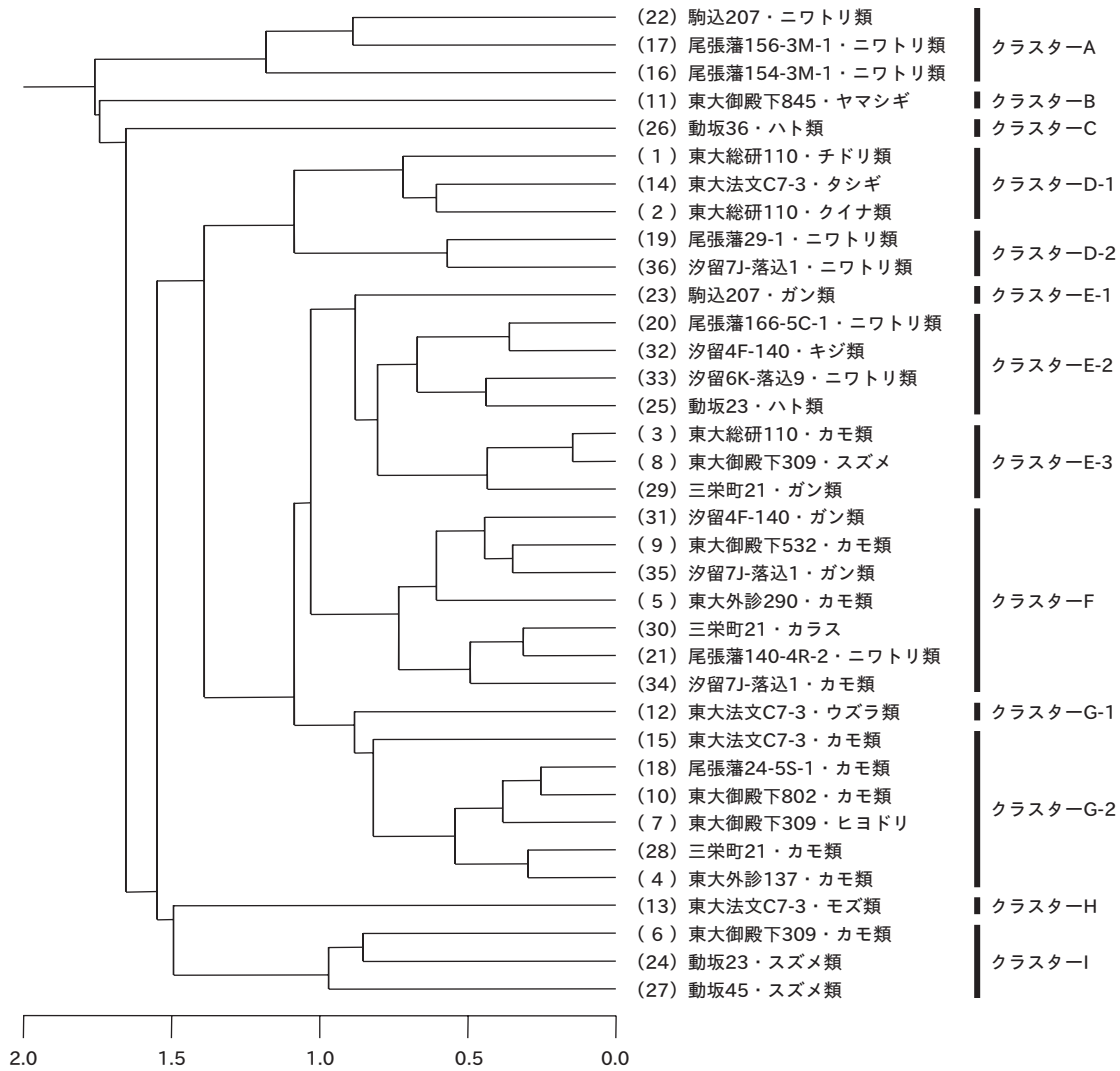


図2 主成分得点に基づくサンプルのクラスター図。サンプル名の略称は本文を参照。

町 21 号のカラス、東大法文 C7-3 号のモズ類で高い正の値が、駒込 207 号のニワトリ類、動坂 36 号のハト類、東大総研 110 号のチドリ類で高い負の値が認められた。

各サンプルの主成分得点によるクラスター分析の結果、A から I の 9 つのクラスターが形成された(図2)。このうち、D と G にはそれぞれ 2 つ、E には 3 つのサブクラスターが認識された。クラスター A には駒込 207 号、尾張藩 156-3M-1 号、同 154-3M-1 号のニワトリ類が含まれた。これらのサンプルはともに第 1、第 2 主成分が高い正の値をとった。クラスター B と C にはそれぞれ東大御殿下 845 号のヤマシギと動坂 36 号のハト類のみが含まれた。クラスター D は第 3 主成分が高い正の値をとり、かつ第 1、第 4 主成分が負または低い正の値をとるグループで、第 2 主成分の正負の違いなどから 2 つのサブクラスターに分かれた。第 2 主成分で負の値をとるクラスター D-1 には東大総研 110 号のチドリ類とクイナ類、東大法文 C7-3 のタンギが、正の値をとる D-2 には尾張藩 29-1 号と汐留 7J- 落込 1 のニワトリ類が含まれた。クラスター E は第 1 主成分が負の値、第 5 主成分が負もしくは低い正の値をとるグループで、主に第 2 主成分の正負とその絶対値の大きさから 3 つのサブクラスターに分かれた。第 2 主成分で高い正の値をとるクラスター E-1 には駒込 207 号のガン類が、低い正の値をとる E-2 には尾張藩 166-5C-1 号と汐留 6K- 落込 9 のニワトリ類、同 4F

-140号のキジ類、動坂23号のハト類が、負の値をとるE-3には東大総研110号のカモ類、東大御殿下309号のスズメ、三栄町21号のガン類が含まれた。クラスターFは第3、第4主成分がともに負となるグループで、汐留4F-140号のガン類と同7J-落込1のガン類とカモ類、東大御殿下532号のカモ類、東大外診290号のカモ類、三栄町21号のカラス、尾張藩140-4R-2号のニワトリ類が含まれた。クラスターGは第1主成分が正の値、第2主成分が負もしくは0のグループで、主に第4主成分の値から2つのサブクラスターに分かれた。第4主成分で高い負の値をとるクラスターG-1には東大法文C7-3号のウズラ類が、負または低い正の値をとるG-2には東大法文C7-3号、尾張藩24-5S-1号、東大御殿下802号、三栄町21号、東大外診137号のカモ類、東大御殿下309号のヒヨドリが含まれた。クラスターHには東大法文C7-3号のモズのみが含まれた。このサンプルはすべての主成分で高い正の値をとった。クラスターIは第2主成分が負、第4、第5主成分が高い正の値をとるグループで、東大御殿下309号のカモ類、動坂23号と同45号のスズメ類が含まれた。

## 5. 考察

骨格部位による残存率の違いはおおまかに3つの過程から生じることが考えられる。遺棄時からの時間経過を追って考えると、第1に、遺跡形成者の遺棄パターンの違い、第2に遺棄後発掘されるまでのプロセスにおける選択性の違い、第3に発掘時の回収率の違いの3つである(松井1991など)。また、研究者による同定上の取り扱いの違いも第4の過程として残存率の違いに影響することが考えられる。より最近の過程から検討すると、第4の過程としては、鳥類の上肢や下肢の指骨や椎骨の同定の有無や、胸骨や寛骨の数量化の方法などが考えられる。そのため、今回の分析では上肢の指骨や椎骨、寛骨は主成分分析に加えなかった。胸骨については動坂36号のハト類のように同骨が特異的に出土したパターンが認められたため分析に加えたが、各主成分に対する因子負荷量は比較的小さく、解釈上大きな問題となることはなかった。第3の過程は小さな骨ほど回収されにくいことが(例えば小宮1991など)、第2の過程は骨密度が低い骨ほど残存しにくいことが(たとえばDirrgil2001など)が示唆されている。今回サンプルとして抽出したうち、水洗選別による採集がなされ、遺体群をほぼ完全に網羅していると考えられる6サンプル(東大総研110号のチドリ類、クイナ類、カモ類と東大御殿下290号のカモ類、駒込207号のニワトリ類とガン類)は他のサンプルとクラスターをなし、AからIのいずれかのクラスターにのみ含まれることはなかった。また、尾張藩29-1号のニワトリ類では足根中足骨の残存率が最も高く、肩甲骨と烏口骨の残存率は非常に低かったのに対して、同156-3M-1号のニワトリ類では足根中足骨の残存率が低く、肩甲骨と烏口骨が高い残存率を示した。さらに、両サンプルは別のクラスターに属し、それぞれに類似した残存率のパターンを示すサンプルが認められた。これらの傾向は第2、第3の過程が働いていることを否定するものではないものの、サンプル間で何らかの遺棄上のパターンの違いが存在することを示唆するであろう。

クラスター分析の結果、江戸時代の遺跡からの出土数が多いカモ類・ガン類とニワトリ類(山根1998)は、基本的に別のクラスターに含まれた。このことは、両者の遺棄パターンに相違があることを示唆するであろう。また、カモ類とガン類、ニワトリ類はそれぞれ主に3つのクラスター(それぞれクラスターE-3、F、G-3と、クラスターA、D-2、E-2)に含まれ、それぞれの分類群内においてもいくつかの利用形態があることが示唆された。サンプルが大名屋敷内の遺構に偏るものの、これまでのところ、この分類群内における残存率のパターンの違いには、大名屋敷の御殿空間や詰め人空間、

下級武士の屋敷地や商家など遺構の空間配置との密接な関係は認められない。一方で、チドリ目（チドリ類、ヤマシギ、タシギ）、クイナ類、ウズラ類、ハト類、スズメ目（スズメ、カラス、ヒヨドリ、モズ類）などカモ類やニワトリ類に比べ体サイズが比較的小さい分類群は、基本的にカモ類とガン類、ニワトリ類を中心とするクラスターに含まれるか、あるいは一つのサンプルのみが含まれるクラスター（クラスターB、C、H）を形成した。これは、前述の発掘時の骨格部位による回収率の違いや、それぞれの分類群の抽出サンプル数が少ないことに由来する可能性がある。例外的に、体サイズが比較的小さい分類群のうち、水洗選別のおこなわれた東大総研110号のチドリ類とクイナ類が法文C7-3号のタシギとクラスターD-1を、御鷹匠同心組屋敷内に位置した動坂23号と45号のスズメ類が東大御殿下309号のカモ類とともにクラスターIを形成し、これらの分類群の廃棄パターンが基本的なカモ類やニワトリ類の廃棄パターンとは一線を画す可能性が示唆された。

東京大学本郷構内の各サンプルは、クラスターB、D-1、E-3、F-1、G-1、G-2、G-3、H、Iの9つのクラスターに含まれた。以下、これらのサンプルのうち水洗選別によって採集されたため、発掘時の回収率の違いによる骨格部位の偏りを考慮する必要がない東大総研110号のチドリ類、クイナ類、カモ類と東大外診290号のカモ類を含むクラスターを中心に、各主成分の固有値と主成分得点、さらに食用となる部分や江戸時代の料理上の知見に基づいて、各サンプルで主体的に行われた廃棄パターンを推定する。東大総研110号のチドリ類とクイナ類、法文C7-3号のタシギを含むクラスターD-1は、体幹部の骨が少なく（第2主成分が負）、後肢の肉のない部分が多い（第3主成分が正）特徴がある。これは、食肉利用の観点からみると不要な腿肉のつかない脚（鱗状を呈する）の部分が多く、肉の付随する部分がないことを意味し、1次的解体を想起させる。しかし、東大法文110号が御殿空間の御台所に由来する廃棄物を含むことを考慮すると、『古今料理集』などにみられる「記」を廃棄したものかもしれない。「記」は料理に利用された肉がまさにその鳥から得られたことを示すために料理に添えるもので、実際、『古今料理集』によればクイナ科の鳥種を指すと考えられる鶺鴒では「あしのふしを中にこめて長さ1寸計りに切りて」利用するとされる（吉井1978）。一方でチドリ類についてはこのような「記」に関する記載は見当たらない。

東大総研110号のカモ類と東大御殿下309号のスズメ類、三栄町21号のガン類を含むクラスターE-3は、全体的に残存率が低くかつ上肢の骨が体幹部の骨に優先し（第1、第2主成分が負）、後肢の肉のない部分がほとんど残存せず（第3主成分が負）、手根中手骨の残存率が多い（第4主成分が正）特徴を有する。つまり、食肉利用の観点からみると腿肉のつかない脚の部分は含まない一方で、同様にほとんど肉の付随しない手根中手骨は多いことになる。『古今料理集』は鳥類の切り方についても言及しており、鳥類の肉の一つの単位として「羽ふし」（羽のつけねのふし）を挙げている（吉井1981）。「羽ふし」にどのような骨格部位が含まれるかについての明確な記載はないものの、「古今料理集・切方5」の本文と挿絵第三図（吉井1981、p157）を見る限り、上腕骨の遠位端、尺骨、橈骨、手根中手骨、上肢の指骨は含まれると考えられる。クラスターE-3のパターンは、このような「羽ふし」が主に持ち込まれ、調理された後遺棄されるという過程に由来すると解釈できる。手根中手骨に比べ尺骨や橈骨の残存率が低いのは持ち込んだ「羽ふし」を調理の過程で、「たたきなどのごとくにこまかにたたきまぜる」（吉井1981、p130）「たたきて」がおこなわれた結果であるかもしれない。また、このような持ち込み方をする場合には、必ずしも一羽の鳥の両側の「羽ふし」を持ち込まないことが想定される。左右の持ち込まれ方の不均衡は、左右の骨の残存率の違いを生むと考えられる。これは全体的な残存率の低さに通じ、このクラスターの特徴とよく一致する。同様の議論はクラスターFについてもあてはまるかもしれない。クラスターFは東大外診290号のカモ類のほか、東大御殿下532

号のカモ類、汐留 4F-140 号のガン類、同 7J- 落込 1 のガン類とカモ類、三栄町 21 号のカラス、尾張藩 140-4R-2 号のニワトリ類を含んだ。このクラスターの特徴は、後肢の肉のない部分がほとんど残存せず（第 3 主成分が負）、さらに頭骨や手根中手骨の残存量も少ない（第 4 主成分が負）ことである。このクラスターには体幹部の残存率がやや高いものと低いもの（それぞれ第 2 主成分が負と正）が含まれるが、いずれにしても、遺跡にまるまる 1 羽の鳥が持ち込まれて 1 次的解体がおこなわれるより、「羽ふし」あるいは「別足」（腿部の肉）として持ち込まれるほうが多かったと推定される。

## 6. まとめと今後の展望

本論では、東京大学本郷構内の遺跡を中心に江戸時代の遺跡から出土した鳥類遺体の報告を集成し、単一の遺構から検出された同一分類群の骨にどのような骨格部位の偏りが認められるかを主成分分析とクラスター分析を用いて記述した。分析の結果、江戸時代の遺跡からの出土数が多いカモ類・ガン類とニワトリ類は、基本的に別のクラスターに含まれ、両者の遺棄パターンに相違があることが示唆された。また、カモ類とガン類、ニワトリ類はそれぞれの分類群内においても 3 つのクラスターに含まれ、遺構によって利用の形態が異なることが推定された。今回の考察は主に東大総研 110 号のチドリ類、クイナ類、カモ類と東大外診 290 号のカモ類を含むクラスターを中心としたが、他の遺構から出土したサンプルについても同様の議論は可能である。今後、分析の結果を踏まえ、鳥類の食用部や江戸時代の料理上の知見に基づいて、各サンプルで主体的に行われたと推定される廃棄パターンを検討したい。

### 謝 辞

本論の執筆にあたって、文京区教育委員会と山根洋子氏（港区郷土資料館）には、駒込追分町遺跡の資料の実見に便宜を図っていただいた。川上和人氏（森林総合研究所）には、現生標本を閲覧させていただいた。また、阿部常樹氏（東京大学埋蔵文化財調査室）には、資料の分析から原稿の執筆まで様々な場面で多大なるご協力をいただいた。追川吉生氏（東京大学埋蔵文化財調査室）には遅筆につき、編集上多大なるご迷惑をおかけした。末筆ながら以上の方々に厚く御礼申し上げる次第である。

### 引用文献

- 阿部 常樹 2006 「ごみの廃棄単位および過程復元への貝類遺体分析からの試み」本紀要  
 金子 浩昌 1978 「動坂遺跡出土の動物遺体」『文京区動坂遺跡』動坂貝塚調査会  
 金子 浩昌 1990a 「動物遺存体」『東京大学本郷構内の遺跡法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』東京大学埋蔵文化財調査室  
 金子 浩昌 1990b 「動物遺存体」『東京大学本郷構内の遺跡山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室  
 金子 浩昌 1991 「動物遺存体」『三栄町遺跡－骨格貝製品・動物遺存体編－』東京都新宿区教育委員会  
 小宮 孟 1991 「魚類遺存体の組成復原にかかわる資料採集法について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 29 集 (p.45-60)

地下鉄 7 号線溜池・駒込間遺跡調査会 1996 『地下鉄 7 号線溜池・駒込間遺跡発掘調査報告書 6－春日町遺跡・菊坂下遺跡・駒込追分町遺跡・駒込朝嘉町遺跡・駒込富士前町遺跡』

- 東京都新宿区教育委員会 1988 『三栄町遺跡』
- 東京都新宿区教育委員会 1991 『三栄町遺跡－骨格貝製品・動物遺存体編－』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990a 『東京大学本郷構内の遺跡法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990b 『東京大学本郷構内の遺跡山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005 『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院外来診療棟地点』
- 東京都埋蔵文化財センター 1997 『汐留遺跡Ⅰ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2001a 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅵ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2001b 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅶ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2001c 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅷ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2002 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅹ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2003 『汐留遺跡Ⅲ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』
- 動坂貝塚調査会 1978 『文京区動坂遺跡』
- 日本獣医解剖学会 1998 『家禽解剖学用語』日本中央競馬会
- 日本鳥類目録編集委員会 2000 『日本鳥類目録 改訂第6版』日本鳥学会
- 野々村海・江田真毅・阿部常樹 2005 「医学部附属病院外来診療棟地点の動物遺体」『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院外来診療棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 野々村海 2006 「加賀藩江戸上屋敷御殿空間の食生活－東京大学本郷構内の遺跡・総合研究棟（文・経・社教）地点（仮称）110号遺構出土の魚類遺体から－」本紀要
- 松井 章 1991 「考古学における動物遺存体研究のあゆみ－西ヨーロッパ、北アメリカを中心として－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第29集（p.13-45）
- 松下 幸子 1983 「料理書にみる江戸時代の魚鳥野菜」『歴史公論』89号（p.52-58）
- 山根 洋子 1998 「近世江戸出土の鳥類遺体－文京区駒込追分町遺跡の資料を中心に」『動物考古学』11号（p.55-68）
- 吉井 始子 1978～81 『翻刻江戸時代料理本集成』全11巻 臨川書店

A.O.U. 1983 The A.O.U. Check List of North American Birds.

Baumel, J.J., King, A.S., Breazile, J.E., Evans, H.E., & Berge, J.C.V. 1993 Handbook of Avian Anatomy: Nomina Anatomica Avium. Nuttall Ornithological Club.

Brain, C.K. 1969 The contribution of Namib desert Hottentots to an understanding of Australopithecine bone accumulations. Scientific Papers of the Namib Desert Research Station 39:13-22.

Dirrigl, F.J.Jr 2001 Bone mineral density of wild turkey (*Meleagris gallopavo*) skeletal elements and its effect on differential survivorship. Journal of Archaeological Science 28:817-832.

**東京大学構内遺跡調査研究年報 5**  
**2003・2004・2005 年度**

2006 年 3 月 31 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室  
東京都目黒区駒場 4-6-1

<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>

印 刷 株式会社セビラス  
福島県いわき市平字作町 1-3-11